
蛙とアルミニウム

竜騎士そらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛙とアルミニウム

【Nコード】

N3464D

【作者名】

竜騎士そらら

【あらすじ】

浅倉慎也は小学六年生。彼の住んでいる浅葱市は、犯罪が多くて危険な場所。好奇心旺盛な彼は、そこでいろんな事件に巻き込まれたり、起こしたりする。そんな小学生の危険に満ちた日常のお話。

序章 わが友

夕日、放課後、血のにおい。

人目につかない場所を選び、逃げるように走った。

二人で手を繋ぎ、離さぬように。

「……ここまでくれば、もう安全……かな」

「本当か……」

相棒はまだ不安そうだった。握った手がかすかに震えている。気持ちはわかる。

「たぶん、な」

「……………」

正直だが曖昧な回答に、不安そうな表情が深くなった。あわててフォローした。

「大丈夫だって。俺に任せてくれ。……………きっと、うまくいく。いつている……………」

「……………そうやな。全部、うまくいく」

「その通り」

相棒の顔に笑みが浮かんだ。つられてこっちも笑顔になる。

ふと、繋いでいない方の手のひらに、血がべったりとついているのに気付いた。夕焼けでオレンジ色に染まった世界の中でも、全く色あせない赤色。

とまどいは無かった。その血をなめた。

口の中に鉄の味と香りが広がる。その様子を見ていた相棒が目丸くした。

異常な行動だと思う。だが、それを言えば自分の命そのものが異常だ。

「なめる？ 俺達の……………友情の証、みたいなものとして」

彼は一瞬ためらい、強く頷いた。彼の口元に人差し指をもつていくと、すぐにくわえてくれた。

指先に感じる心地よい温かさ。それが全てだった。その他のことなんてどうでもいい……………。

それが、始まり。生まれて初めて殺人を犯した、その記憶。

第1話 陰謀はじめ!

浅倉慎也、市立北浅葱小学校の生徒。この春から六年生。ツリ目でツンツンの髪型。若干の幼さは残されているが、かわいいというよりはかっこいい顔つき。

美形のために周囲からの人気は高いが、人付き合いはあまりよくない。

あだ名は、アルミ。

春。桜吹雪の舞う、始まりの季節。校舎に併設された体育館に、彼はいた。

新一年生の入学式。六年生は、それに出席しなければならない。大したことではないがやらねばならない仕事がある。一年生が式場の体育館に入場するとき、手をつないで先導する、ただそれだけのために。

「くだらない……」

並べられたパイプ椅子に座りながら、アルミが不平を言った。すでに役目は終え、あと彼がすべきことは壇上の大人達の話の黙って聞くだけ。

「もう俺の仕事終わったのに、なんで帰っちゃいけない？」

「まあまあ、アルミ……こういうもんやで？」

横から小声で、アルミをなだめる声。石動業火という名前の、同級生。

関西弁をしゃべる、自他共に認めるアルミの親友。好きな動物は蛙。アルミほどではないが、クラスでは少し浮いた存在だ。

「でもさ……これから校長の話聞くとしたら、それだけで気が萎えるだろう？」

「ん……、確かに……」

校長先生のお話は長くて退屈。それが業火にとっても異論はない。

「と、いうわけで、寝ていいか？」

「……ばれないなら。てか、寝てへんのか？」

なかなかとんでもない提案だが、そう珍しいことでもない。

「うん……肩貸せ」

「わかった。……寝てないって、徹夜でネットゲ？」

「………うん」

「おい……」

「それだけじゃない。………ルカがなかなか寝てくれなくて。つきあっていた」

「………そうか。お前も大変やな……。………小学生で子育てなんて……」

アルミは、現在、幼い弟、ルカを姉と二人で育てている。

決して親がいけないのではない。父親は、海外に単身赴任しているから、それを責めることはできない。母親は、軽い引きこもりで、ルカの育児を放棄している。やはり責めることはできないと、アルミはそう言っている。

「いや……責めるべきやろうけどな……」

「………すう」

友の声が聞こえたかどうかはわからない。アルミはそのまま寝息をたてて、式が終わるまで目を覚まさなかった。

「アルミ、終わったで」

「ん……。うん。わかった……。これからどうすればいい？」

「このまま、帰ってええらしい」

「わかった。帰るぞ。業火」

「はいはい」

その帰路のこと。

「なあ、業火」

「なんや？」

「今年も、同じクラスになれたらいいな」

「ん……ああ、なるで。朝、職員室の名簿を見てきた」

親友すばらしい行動力に、アルミは大いに満足したようだ。ほめてつかわす、なんて言葉がお似合いか。

「いつの間に。で、何組？」

「四組。今年もよろしくな」

「うん……担任は？」

「ん……中村」

「えー、最悪じゃないか」

露骨に嫌な顔をするアルミ。気持ちはわかる。

「まあ、そうやけどな……。しかたないやん」

中村は、生徒の間ではあまり評判の良くない先生だ。

「はあ……やだ。あんなやつ、いなくなればいい……」

「な……」

「……………業火」

「なんや？」

「あの教師、なんとかしていなくすることできないかな？」

「……はあ!？」

不穏な空気が流れた。こいつは何を言っている？ いや、いまさ

らそんなことどうでもいい。

アルミは、こういう人間なのだ。

それは、業火もよくわかってしていること。

「あ……アルミ、排除って……？」

「そのままの意味。あの教師を、この学校から、追い出す」

典型的な、悪だくみをする子供の表情。今まで何度も見てきた。

問題は、そのイタズラがいつもイタズラの域を超えていることか。

「そんなこと、できるんか？」

「さあ？ まあ、とりあえず俺の担任じゃなくしてしまえばいいだけだから……」

「いやそれ以上何を……」

「業火、教師が、クビになるほどの問題って、何をやらかしたとき？」

「話し聞け……。クビ？」

「うん。懲戒免職と言ってもいい」

「おんなじや。……そうやな……。生徒となんか問題起こしたときとか？」

「それだ」

「……はあ？」

「あの教師を調べて、そういうことをしたっていう証拠を見つけるんだ。それを教育委員会にばらせばいい。うん。簡単な話だ」

「いや待て、調べるって、誰が？」

「それは……」

アルミは、かなりいい笑顔で言った。

「業火、お前以外にいるか？」

「……そうやな……」

「結局引き受けた……」

とりあえず業火は、言われた通り中村先生を尾行している。

「なんでストーカーなんてせなあかんねんやろ？ しかも男。何か起こる可能性のほうが高いのに……」

それでも業火は、律儀にも尾行をするのだった。

手順としては、まず家に帰ってランドセルを置きまた学校にとって返し、中村先生存在を確認、先生が帰宅する時間まで待ってその後尾行開始という、まことに手間のかかることを、しかも誰にも

見つかることなしにやらなければならない。普通ならやらなことだが、それでも業火はやるのだった。

そうするだけの絆が、あるいは業火にとっては恩義さえあるのだ。

業火にはアルミに対して、恩があるのだった。

そのころ、アルミは、弟を預けている保育所に向かっていた。

もちろん弟、ルカを迎えに行くためで、そのほかのなにのためでもなく、例えばきれいなお姉さんが保育さんをやっているとかそういう理由もない。絶対に無い。なにしろアルミはシスコンであり、たぶん姉以外の女性に興味無いから。

逆に色気を含んだ視線を受けるのはアルミのほうだったりする。

ランドセル背負ったまま弟を迎えに行く男の子は、かわいいだけだ。しかも親がいない（という噂）なんて不幸設定付きだ。

そうでなくてもアルミはすごく顔がいいのだから、女性からの受けはすこぶる良い。

少なくとも保育さんズとママさんズからは、日々熱烈な視線（主に好奇と憐れみともとれる同情の視線）にさらされている。

これは、アルミにとってはかなりいい迷惑だったりする。当然か。まあ、気にするアルミではないけど。でも気にしなくても気に入らない。もともと一匹狼を崇高とし、あるいはクールに生きたい性格で、また年頃でもあるから、こういう見方をされるのは、アルミにとっては屈辱ですらあるのかもしれない。

そうでなくても奥様方のおしゃべりのネタにされるのは誰にとっても気持ちのいい事ではない。

だから、保育園での奥様方のおしゃべりにわざわざ耳を傾けるつもりは無かったし、それはいつものことだった。

だがその日、ルカを引き取ってきて帰ろうかと思った時、おしゃべりが耳に入った。

「ねえ、聞いた？　最近この辺りを不良グループが荒らしてるんですって」

「やだわー危ないのねー」

浅葱市は、そんなに治安の良い市ではないから、そういう不良グループは、意外にはびこっている。だからそれは珍しいことではない。

しかし、その時のアルミの心に獰猛な感情が生まれた。

気付かれないようにその会話に耳をすまし、得られるだけの情報を得て、その場をあとにした。

第2話 不良とナイフ

中村先生はさっさと家に帰ってしまった。

「やっぱなんもないやん……帰ろ」

と、言って業火はさっさと家に帰ろうとした。が。

「……………」

中村先生がまた外に出てきた。しかも、挙動不審だ。オドオドして、いかにも何かに怯えているような雰囲気。

「……なんや？」

とりあえずまた、あとをつけることにした。

アルミは、不良グループの情報を聞くと、ルカを連れて家に帰った。

姉が家にいたので、遊びに行くと言って、再び家を出た。

そう。アルミは不良グループを退治しに行ったのだ。

別に、地域の治安維持のための正義の行使ではない。アルミは、正義という言葉が嫌いだから、それは絶対じゃない。

かといって、喧嘩が好きなのでもない。

ただ、イライラしていただけだった。その理由は、もちろん新学
期の担任のことだ。だから、ちよつと暴れてみようかなと思った。
アルミは、喧嘩は強かった。小学生なわけだが、普通の人なら大
人にだって負けはしない自信がある。

聞いてきた情報を整理すると、グループの名前はシャークス団。
ある程度の大きさを持っていて、どこかに活動拠点があるらしい。
もちろんその場所をアルミは知らないから、探すことから始めな
ければいけない。

そして相手の戦力。間違いなく向こうの方が数が多い。ありきたりなケンカだけでは勝てない。

「……火薬、買うかな」

少し考えてから、アルミは近所のスーパーへと足を運んだ。

業火の尾行は続く。

中村先生は、町外れの、廃工場までやってきた。普段から人通りのほとんどない場所。こんな所になんの用だろうか。

アルミは、市内の不良が出そうなところをうろついている。「シヤークス団」が出そうなところを割り出し、さがすのだった。

「……いた」

不良と思われる高校生ぐらいの男が、いかにも獲物探し中みたいな目をして、ぶらついていた。

「一人、か。今度こそ当たってくれよ……」

これにあたるまで三人ほど別の不良を相手にしたのだが、すべて違うグループだったり、ただの柄の悪い高校生だったり。有効な手掛かりにはまだ至ってない。

「……………」

アルミはその不良の背後に忍び寄り、予告も予備動作もなしに足を払い、倒れてきた体を受け止め、腹に一撃をいれ、倒れた不良の両腕を片手でねじ上げ組み伏せた。

かなりの手際の良さだ。

「お前、シヤークス団の人間か？」

アルミは、不良にそう尋ねた。

「だったらなんだ？ お前はなんだ？」

「答えろ」

相手はなぜか冷静で、答えてくれない。それどころか質問で返してきた。

「お前はシャークス団の人間か？」

同じ質問。そして締め上げる強さを強める。だがそれでも答えない。

「……仕方ない」

アルミはポケットから百円ライターを取り出し不良に見せた。

「これ、何かわかるよね？」

「ライターだろ？」

「そう。正解」

アルミはそれを不良の目の前に突き出し、着火した。

「これ、目に当てたら失明するよね？ さあ、言ってくれる？」

拷問じみているが、これで言ってくれるだろうとは思う。

「……わかった。俺はシャークス団なんかじゃない」

「なんだ。また外れか」

アルミは不良を離してさっさと次に当たろうとした。が、その時。

「おい、ちょっと待てよ」

不良に呼び止められた。

「何だ？ お前の相手をする暇は無い」

「お前、シャークス団に何か用があるのか？」

「お前には関係無い」

「いや、関係するな。俺はシャークス団ではないがそのボスを知っている」

「………続きを話せ」

「俺はあいつ……ボスの事だが、あいつと同じクラスなんだ。あいつは自分が一番強いと思っているから、誰彼無しに喧嘩を売る。みんな困っているんだ」

「へえ……」

「お前はもしかして、あいつを倒しに行くつもりなのか？」

「そうだ」

「おもしろい奴だな。お前、まだ小学生だろ？」

「ケンカなら負けない」

「へえ。それができるなら、こっちとしても都合がいい。本当にあのボスを倒すのか？」

「ああ、下手したら二度と立ち上がれないぐらいに」

「そうか、おもしろい。あいつのアジトを教えてやるよ。……………」

あと、これもやる」

「……ナイフ？ どうしてこんなものを？」

「気にするな……有効に使ってくれ。で、アジトだが……」

その頃業火は、中村先生を監視していた。

中村先生は、廃工場で、何かを待っているみたいだ。

態度からして、あまり好ましいものではないようだ。

しばらくすると、廃工場のなかから、何人かの不良が出てきた。

そして……。

「……。こんなことが、あるなんて、な……」

業火は、自分の目を疑うのだった。

第3話 潜入、ダンボールと

町外れの廃工場で中村先生が不良達にお金を渡している。万単位で。

「あれは……何をしてるんや……?」

業火は唾然とした。教師が不良に金品を渡すというのは絶対にあってはならないことだ。

「なんで……いや、今は一旦退却して……」

アルミに報告して今後の方針を検討するために後ずさりを始めたが。

「そこ、誰だ!？」

不良の一人に見つかった。

「やべっ、どうする?」

咄嗟に思いついたのは、カエルの鳴き真似をすること。

「よし、けろけろ、けろけろ」

「……なんだカエルか」

「なんでうまくいくんやろ……」

不良が馬鹿で良かった。

「いや、待てカエルはあんな鳴き方をしない」

中村先生に指摘された。

「そうか、なら誰だ!？」

「(中村のアホー!)」

業火は悪態をつくがもう遅い。

「……出ていくしかないか」

業火は、中村先生と不良達の前にでた。

「ここ……か」

アルミもまた、町外れの廃工場に来ていた。

もちろん、さきほどの不良にここだと言われたからだ。

しかし、業火がこの場にいることには気づいていない。なぜなら、業火がいるのは工場の表口、アルミは裏口にいるのだから。アルミはここから中に侵入して、けっこうとんでもないことをやらかそうとしていた。

「裏口の見張りは二人……しかもおしゃべりに夢中だ。ちよいいな。さてと……ミッション開始」

アルミは、そう言うと、ダンボール箱を被った。

その、動くダンボールは、裏口を「見張っている」不良二人に気づかれること無く接近し、そして一瞬でダンボールから出て、一人の腹を殴り、そいつがひるんだ隙に、もう一人の顔面を殴り、地面にぶつけてダウンさせ、先に殴ったほうも、同様に倒した。

あの蛇もびっくりの手際のよさだ。

アルミは、そのまま裏口から入って、進んでいった。目指すは、ボスのいる場所。

「……あ」

巡回中の敵発見。アルミは、こちらに背を向けている敵に忍び寄り……

「動くな」

ナイフを突きつけた。立ったままホルドアップさせられれば理想だが、

「何だお前は!？」

「うわっ!」

うまくいかなかった。

「くそ!」

アルミはその不良の足を引っ掛け、押し倒して床にぶつかる前に抱えて、さっきもらったナイフを突きつけた。

「このボスはどこにいる?」

不良は、今度こそ「ひっ!」となった。

「悲鳴はいい! ボスはどこだ!? 言え!」

不良は、かなり震えて、それでもある方向を指差した。

「こ……この廊下をままままっすすぐ……」

「いいから落ち着いて話せ」

それは無理な相談だったりする。

「そ……そそそこに……番長と幹部達たちが……ががが……いる！」

「わかった。そこに、番長がいるんだな」

「そうだ！ そうだから殺さないで……」

小学生相手に懇願するとかいいたいけど、それほど、アルミは殺気を帯びていたのだった。

「……………」

でも、アルミは微笑んだ。その、爽やかな微笑みに、敵の不良も表情を緩め……

グサ

不良の胸にナイフが刺さった。

「……え……」

「……………」

アルミは笑顔のまま不良にナイフを刺したのだった。

何のためらいも無く、まるで相手が野菜か何かだともいうように。

「お前……ぐっ！」

助けを呼ばれないよう、口を押さえつけた。

「……俺さ、人を殺すのって、初めてじゃないんだ」

「!？」

不良の感嘆符、疑問符を無視して、

「じゃ、さよなら。ボスの場所、教えてくれてありがとう」

再びためらい無く首をかき切り、噴き出す血をまったく気にせず
に指し示された方向へと進んだ。

その頃外では。

「……………」

業火は、不良三人に苦戦していた。

もともと業火も、不良の集団ごときに遅れをとる人ではないが、何せこっちはランドセルを背負ったままで、相手はナイフ、メリケンサックなどで武装済みだ。

「やっぱあの時逃げとけばよかったかな……………」

しかし、中村先生をあのままにしておくのも気が引けたのは、事実だ。

「とにかく……………なんとかしないと……………。アルミ……………」

アルミが助けになど、来るはずがない。

「そや。俺がなんとかしないと……………な」

本気でがんばるつもりになった。

「いくで不良ども！」

業火は、勢いよく不良に殴りかかっていった。

第4話 爆発

「……ここだな」

アルミは、道中さらに多くの不良を倒しながら、不良のボスとその取り巻き達がいる部屋の前までたどり着いた。

扉の向こうから、複数の声が聞こえる。

アルミの鼻を、アルコールと煙草のにおいが刺激した。

「酒にタバコかよ……宴会やってるのか……？」

本当にそのようだった。

「……なんか話してるな。何だろ？」

詳しい話はわからないが、外で、今まさに強請りが行われているとか言う内容だった。

「……ま、いいか。さてと……」

アルミは、ポケットから粉砂糖の袋を取り出した。

「脱出経路は……来た道に戻るより、残党を片付けるほうがいいか……。えっと、こっちだな。ま、みんなあわててこっちに駆け寄ってくるだろうけど……まず気をつけるべきは爆風に飲み込まれないこと……」

アルミはそう言いつつ、粉砂糖の袋を開けた。

これこそが、先ほどスーパーで買った「火薬」なのだった。

「アルコールがあるってのは好都合だが……うまくいってくれよ……！」

扉を開けて、粉砂糖の袋を投げこむ、すると部屋に粉砂糖が舞うことになる。

中のボスやその他は、突然で、さらによくわからない事態のに一瞬動きが止まった。

アルミはさらに、部屋に百円ライターをなげこみ、後は全力で走った。

背後で大爆発が起こった。

驚いて立ち上がった不良達の体は、木っ端微塵になり、血がそこからじゅうに散らばり、辛うじて死ななかった者もいたが、すぐに酒がかかった服に引火、そのまま焼死した

体積の割りに表面積が大きい粉塵を空気中に大量に浮遊させ、火をつけると次々に引火、その結果爆発が起こる。粉塵爆発と呼ばれる現象だ。砂糖は、安価に手に入り、かつ炭素を含むために火薬としては十分なものだ。

今回は揮発性があり、さらによく燃えるアルコールもそばにあったため、その威力は計り知れないものだった。

「うわっ！」

アルミも、爆風に煽られ、一瞬よろけたが、

「なんともない……さあ！ 残党はどこだ！？」

表口へと走り始めた。

そのころ、業火は不良三人を圧倒していた。だが、決定打は打てないでいる。

と、その時。

爆発音がした。

「……なんや？ ……いや今は！」

不良達も驚いて、顔を見合わせている。そこに……。

「隙あり！」

業火はその隙をつき、全員殴り倒した。

「さて……これからどうする……？」

と、その時……。

アルミは、表口へ走りながらやってきた不良を、手当たりしだいに殴り倒していった。

しばらくして、表口に出て……。

「！（何で業火が……？）」

予期せぬ場所で見つけた友に一瞬驚き、

「（とりあえず……）」

アルミは、業火と、何とか気づいた中村先生の手を引いて、その場から離れた。

第5話 陰謀成功？

「……ここまでくれば……」

アルミ達は、廃工場から離れた場所までやってきた。

「で……えっと……何でお前がいる？ えっと……ドストエフスキー？」

「……………俺？」

業火はわけがわからないみたいな顔をしている。
当然。ドストエフスキーなんて単語は、初耳だ。

「アルミ……何？ なんとかかすきーって。俺は……」

「ドストエフスキー！」

アルミは叫んだ。

「ドストエフスキー、ドストエフスキー、キミも今日からドストエフスキー！」

「……わかった。俺はドストエフスキーや」

ここはアルミに話をあわせておこう。

「それでいい」

「（何がやろうか……………？）」

業火は疑問に思うが何も言わないことにした。

辺りは、もうすっかり暗くなっていた。

「で、ドストエフスキー、なぜこんな所に？」

「それは……アルミに尾行しろって……」

バシ！

アルミは業火を叩き、黙らせた。

「そうだな、ドストエフスキー、お前は夜の散歩に行ったら、偶然に他の小学校の先生に出会ったと」

「（他校の……………？ ま、ええか。そういうことにしよう）」

「それで……………」

アルミは中村先生の方を向いた。

この先生、目立ってなかったけどちゃんといたのだ。

業火の戦闘中も、アルミに引っ張られてからドストエフスキーが
どうか言ってる間も、ずっと突っ立っていたのだ。

「なんで、先生がここに？」

中村先生の方を向いたと言っても、もうすっかり夜なので、互い
の顔もよく見えない。

「不良にお金を渡すなんて、ダメですよね？」

「う……………まあ……………そうだ……………」

中村先生は、答えに詰まった。

「なぜですか、先生、なぜ不良なんか！？？」

「それは……………」

「先生！　なぜですか！？」

相手に言い返す暇を与えない。

「で、なんで？」

「実は……………」

先生は長々と話したが、要約すると、

「つまり、先生はあの不良グループのボスの彼女に一目惚れして、
あろうことか手を出しかけて、それを不良達に見つかったから、そ
れをネタに強請られていたと？」

「そうだ……………」

「……………はあ、先生」

アルミは、盛大にため息をつき、そして、

「先生、だからあなたは生徒に人気がないのだ」

まったく関係ないことを言うのだった。

「先生、あなたが生徒達からどれほど嫌われているか、わかってま
すか？　噂は、他校の生徒である俺達の耳にも届いています」

かなり今の状況に関係ないセリフだが、一連の状況を鑑みても、
中村先生の心にこの言葉はグサグサと刺さった。

「……………それで、先生」

アルミは、とどめを刺そうとした。

「先生は、もっと生徒の気持ちわかる、ちょっとばかり甘くても、やさしくて宿題をあまり出さない先生になるべきだと思います!」
当初の目的をちゃっかと思たそうとしている。業火はそのことに少し驚いた。

一方、中村先生は、

「そうか……そうだな。そうしたほうがいいのかもしれない」
あろうことか前向きに考えるようだ。

「きつと、いや絶対、そうしたほうがいいですよ……。ご……ソストエフスキー。帰るぞ」

「あ……ああ」

そう言って、アルミと業火は、その場から、立ち去って……。

「うまくいったな。」

「……説明してくれ」

二人はそこから離れたところで、一旦足をとめた。

「説明? 俺がなぜあそこにいたか?」

「そうや」

「うむ……。」

アルミは、ことの仔細を細かに話した。

「……と、いうわけだ」

「そうか……俺は……」

「いや、いい。ずっと尾行しててんだろ?」

「そうや」

「とにかく、うまくいった。結果オーライだけど。」

「あれで、中村がいい先生になると?」

「それは……そうだ」

アルミはにっこりと微笑んだ。

さて、数日後アルミと業火の新学期の初日。

六年四組の教室で、出席番号一番のアルミは、端っこの席、二番の業火はそのすぐ後ろで、担任が来るのを待っていた。

そして、来たのは、見たことのない先生。

「……え？」

驚く業火と、

「……………よし」

笑みを浮かべるアルミ。

「……なあ、あれは……………」

「これから一年、このクラスの担任をする先生だ」

「ちょ……………ちょっと待て！」

業火は、その、担任を見ながら言った。

「あれが……………担任……………」

その教師は若い男で、黒板には「後藤」と書かれていた。

「(いや…………)」

正確には「ロック後藤」と書かれていた。

「(ロック!?)」

よく見ると、後藤先生が首からさげている物は…………。

「(ギター!?! 何で!?!)」

「なかなか面白そうな先生だな」

「そういう問題!?!」

「新任の先生らしい」

「だから!」

「何だ？」

「中村は!?!」

「クビ」

「はあ!?!」

「そんなに驚くな。最初からそのつもりだったんだから」

「そうやけどな…………。でもどうやったんや?」

「この前の事、匿名で教育委員会に訴えた」

「なっ！　訴えた！？」

「ああ。今頃呼び出されて取り調べを受けてるだろう。でも、内容は中村のやった事だけだ。俺達に追及が及ぶはずがない」

「でも、中村が俺達の事を証言したら……」

「中村が遭遇したのは、『他校の』しかも愛称しか知らない生徒だ。つまり『アルミ』と『ドストエフスキー』」

「だから俺をドストエフスキーと？」

「そうだ。俺達は絶対安全だ」

「……そうやな。なら、これでええんやろう……」

「だな。この一年も、おもしろくなりそうだ」

「そうやな……」

アルミは、自分の都合で一人の教師をクビにするという、とんでもない悪事をしたのだ。それでも業火は、アルミの本当に嬉しそうな笑顔を見ると、何も言えなくなるのだった。

第5話 陰謀成功？（後書き）

どうも。竜騎士です。今回で、「新学期開始編」終了となります。
物語自体はまだまだ続きますが……。

次回は、町内会長の陰謀とたたかいます。

第6話 ツチノコは、漢字で書くと槌の子

新学期が始まって数日後のこと。

新学期が始まってあまり環境の変化は無く、ああでも後藤先生はなかなかいい先生だな、にしても退屈だ暇だ、とアルミは思っていた。要するに暇を持て余していたある日の事。

「なあ業火」

ある休み時間、アルミが後ろの席の業火に話しかけた。

「何や？」

「学校の裏山にツチノコが出るらしいんだ」

「！ つ……ツチノコ！？ 何やそれは？」

業火の顔が若干引きつっているが、アルミは続ける。

「ほら、蛇に似た胴の太いあれだよ」

「あ……ああ。あれか、うん、あれが出るって？」

「そういう噂だ」

「ただの噂やろ？」

「そうなんだが……目撃者がいるということだ」

「見間違っちゃうんか？ よくあることやで？」

「そうかも知れない。でも、証言がかなり生々しく、リアルなものらしい」

「らしい、か。アルミ、お前はそういう噂って信じへんのやなかったんか？ 信憑性が無い言うて」

「ああ。その通りだ」

「なのに、何で？」

「好奇心……じゃだめかな？」

「好奇心？ 要するに、暇ってことやな？」

「その通り。よくわかってるじゃん」

「……つまりアルミはツチノコを探しに行きたいと？」

「そう」

「暇やから？」

「そう」

「俺が蛇嫌いってわかって言ってるんか？」

「もちろん」

「……わかった。付き合う」

「そう言ってくれると思ったよ」

「そうやな。まず何をするべきやろか？」

「情報収集。目撃者の話を聞こう」

「誰なんや？」

「この学校の生徒。四年二組」

「わかった。昼休みに聞きに行こう」

新たな騒動の予感だ。

第7話 業火は本当にいい奴。

その日の昼休み。

二人はとりあえず四年二組まで来た。

「さて、目撃者は……」

「あれやな」

「うん」

教室の真ん中にちょっとした人だかりができている。

その中心で生徒が一人、得意げに話している。

「……じゃ、業火、後よろしく。俺、教室に戻るから」

「何で!? 何で俺だけ!？」

「俺はああいうガキは嫌いだ」

「はいはい……」

そう言って、アルミは戻っていった。

「ま、いつもの事やけどな……」

業火はそう言っただけで人だかりに加わった。

人だかりを構成しているのは主に低中学年の生徒だ。さすがにツチノコみたいな物は非現実的な物だと思っているのだろう。高学年はほとんどいなかった。六年生に至っては……。

「俺だけやん……。ああ、なんか周りの視線が痛い……」

実際にはみんなツチノコの話に夢中で、この最上級生には見向きもしないが、気になってしまうのはしかたない。

「とにかく、話をきかんと……」

その「目撃者」は人だかりの真ん中で得意げに大声で話している。まるでツチノコを見つけた事が英雄的行為であり、今、自分は何よりも偉く、崇高で、尊敬と注目の視線を誰よりも多く浴びるべきである、とでも思っているのだった。

そんな、ちょっと大人の感覚を持っているなら見ていられない、

「痛い」と思ってしまう、好意的な見方をしても「子供ってかわい
いもんだな」と思わせるような子供（アルミ曰くガキ）の姿が、す
なわちツチノコが目撃者なのだった。

それはまた、アルミが大いに嫌うものだった。

「（まあ、それは置いといて、内容は……）」

目撃者の情報を聞いてみて、

「（大したこと無いやん……）」

業火はそれでも耳を傾ける。

しばらく聞いているとわかったが、この目撃談にはさっき思った
通りほとんど内容が無く、短い話を飽きもせず聴衆にせがまれるま
まにしゃべっているだけなのだった。曰く

「ホントだって、ホントにいたんだツチノコが。あのな、おととい
オレが裏山をぶらついていると、茂みがガサガサとしたんだ。それ
で何だろうと思って近付いたら、ぱくつとツチノコが飛び出して、
すぐに逃げていったんだ」

これだけである。情報量が少ない上にえらく抽象的で、客観性も
無くまた目撃者は彼一人だけである。

「（信憑性無しやん……。てか、これやったら普通の蛇でも起こる
事やで……）」

それから業火は、その同じ話を三回聞いて、もうたいした情報は
聞けないと確信した。

「……戻ろ」

業火は教室まで戻っていった。

第8話 アルミは本当に嫌なやつ

アルミは教室で机の上に大量の資料を広げ、猛烈な勢いで読んでいた。

「……次に山の神を生む。名はオオヤマヅミの神。次に野の神を生む。名はカヤノヒメの神。またの名をノヅチという……」

なんと古事記の原文だ。古事記の原文を訳して読んでいるのだ。

「……書いてあるのはこれだけ……か。ノヅチ？ 野槌？」

その姿はかなり様になっていて、傍から見ると真面目に勉強しているように見える。実際、大真面目ではあるのだが。

そして、周りの女子から多くの好意の眼差しで見られている。

アルミは、格好いい人間であった。かなりの美丈夫である。のみならず、頭が良くて成績は学年でダントツでトップ。運動神経もずば抜けて良いので、周りからかなりの人気を集めている。面倒をはよく起こすから、教師からの人望は厚くはないが、なにもしていないければ良い生徒である。

だがしかし、その人気にアルミが応えることは決して無い。

アルミは、社交性を欠片も持っていない、超インドア派なのだった。

そもそも、これだけの人気者が、今までただ一人だけしか友人を持っていなかったというのは、あまり考えられないことだった。しかし事実そうなのである。

社交性の無さがいかほどかと言うと、何より学校内において、唯一無二友の業火以外に、自ら話しかけることが全く無い。

もちろん、他人から話しかけられることはあるし、むしろ人気があるが故にその機会は多かった。特に女子から話しかけられることも幾度もあった。

そんな時アルミは、とてもにこやかな、友好的な態度で接した。返事をした。しかしその返事の言葉には、あるいはその後が続くほ

んのわずかの会話には、決してあからさまではない、しかし気付くには十分な、嫌悪の色があった。相手を引かせるほどの、排他的な色が、含まれていた。言葉の端々に「近寄るな。失せろ」という気持ちが含まれていた。

だから、アルミに好んで話しかける人間は、業火以外にほとんどいない。

あるいは、インドア派という形容について言及すると、アルミはやはり自分から外に出ようとはしない。休み時間はもとより、体育の時間でも隙あらば体操服を故意にでも忘れてやろうか、要するに体操服を持ってこなかったら授業休めるのに、といつも思っているのだ。いざ体育の授業に出ると、大いに活躍するにもかかわらず、出ないことを考えている。

そういう人間であってもなお周りから好かれるのは、そういった負の感情を巧みに隠すことができる、ただそれだけの事がもたらした結果に過ぎなかった。

アルミは、そういう人なのだ。そしてそれゆえに、心を許せる友を一人しか持てないのである。

「古典に書いてあるのはこれぐらいか……」

「アルミ」

その、ただ一人の友が帰ってきた。

「話、聞いてきたで」

「そうか……その様子じゃ、あまり大したことは聞けなかったみたいだな」

「やっぱりお見通しなんや……」

「予想はしてたけどな。まあいいや。聞こうか」

「ああ……」

業火は話し始めた。

第9話 アルミのネッシー講座

「……と、いうことや」

業火は、語るといにはあまりにお粗末な話を聞かせた。

「なるほど。確かに大したことじゃないな」

反応はあまりに薄かった。

「というかあまりにも予想通りだ」

「聞いた意味無かったな……」

「ほかには？ その、『ツチノコ』の特徴とか、聞かなかった？」

「ああ、聞いてみたけどな……。えっと……」

「ああ待て、どんなこと言われたか予想してやる。まずお前はこう聞いた。『なあ、そのツチノコって、どんな形やったん？』と」

「まあ、そんな感じやな」

「相手の反応はこうだ。お前を一瞥し、こんなことを考えているだろうな顔をする。『ああ 遂に最高学年までオレの話を聞きにきたオレも偉くなったな。六年といえどもオレの前に跪く。オレはこの場で何より偉いんだ。はっはっはっ、世界はオレを中心に回っているじゃないか』と」

「そんな感じやった」

「そしてこう言った。『だから、なんかこう蛇みたいで、真ん中が太くて……ああもうとにかくツチノコだったんだよ!!』と」

「そうや……一字一句同じや……何で？」

「気にするな。だが……これじゃ本当に聞いた意味ないみたいだな」
「その通りやな……。ところで、お前は何をしている？」

アルミの机の上は、たくさんの資料で埋もれていた。

「何の資料や？」

「もちろん、ツチノコ。各種文献をあたった」

「なるほどな」

「体長三十〜八十センチ、胴の直径七〜十五センチ、扁平の太い胴、

三角形の頭。色は黒、茶色あるいは斑点があるのも。鱗もある。これがツチノコを目撃例を総合した、特徴だ」

「そうか……。それで？」

「ツチノコは、実在するか？」

「……さあ？」

「お前はと思う？」

「おらんと思う」

「その証明は、できる？」

「無理やろ」

「そう、できない。なぜか？ あるものの存在を『無い』と証明するには、世界のあらゆる事象を確かめなければならない。悪魔の証明、と呼ばれるものだな」

「……？ さっぱりわからない……」

「そうか。まあいい。でも、証明できることもある。ネッシーが存在しないこと、とか」

「なんで？」

「ネッシーの正体として有力なのは、恐竜、特に大型水棲爬虫類である首長竜の生き残りと言われている。だが首長竜は六五〇〇万年前に絶滅している」

「それは……ネス湖の中で繁殖していったんやろ？」

「爬虫類がネス湖という閉鎖空間のなかで存在を維持するのに必要な個体は三十から四十体。それだけの数の恐竜が見つからないのは、おかしい」

「……………」

「さらに、ネス湖の地域は一万一千年前まで氷河に覆われていて、ネス湖ができたのはその氷河が溶けてから。恐竜がいるなんて、考えられない」

「つまり、ネッシーはいない？」

「いないことが証明できる、ということだ」

「じゃ、ツチノコは？」

「いないとを証明できない、な。少なくとも俺の知識内では。ツチノコは、小さく、また住んでいる地域は限定されていないからな。いてもおかしくない」

「……なるほどな」

「だから、探しにいこう」

「本気で行くつもりなんやな……」

「当然だな。今度の日曜日、必要な装備を持って学校に集合」

「わかった。……行こう。行くからには、見つけよう」

「そうだな」

こうして、ツチノコを探しに行くこととなった。

第10話 妹

「……それにしても……」

その日の夜、業火は自宅で、ぼやいていた。

「必要な装備……って？」

もちろん、業火はツチノコの搜索などしたこと無いために、必要な装備が何なのかを知らなかった。

「わからんな……明日アルミに聞いてみたら……無駄か」

そんな事俺に聞くな自分でなんとか考えろ。という返答が返ってくるのは目に見えていた。

そしてアルミ自身は、何か持ってくるつもりは毛頭無いだろう。全部業火に任せるつもりだ。なぜなら、これまでいつもそうだったから、である。

「まったく……」

それでもまあいいやと思わせるなにかを、業火はアルミに感じているのだった。

「でも……なんなんやろ？ とりあえず思いつくものは……虫取り網、虫かご……？ セミを捕まえるみたいやな……どこにあったっけ……？」

とりあえず、押入れを探すことにした。しかし……

「でも、虫取り網なんて、あるはずないやん……」

そもそも、生まれてこの方蟬を捕ろうと思ったことも無かったし、そんな事をする暇も無かった。

「あるはずが……ない……。当たり前か」

「……お兄ちゃん、何してるの？」

「ん……聖火、実は……」

石動聖火。業火の妹である。歳は、業火よりひとつ下なので、小学五年生だ。ちなみに聖火は標準語で話す。

「ツチノコ？ それって、あの蛇みたいなの？」

「そうや。今度の日曜日、アルミと探しに行くんや」

「また、あのオタクと？」

「オタク言うな……」

「だってあいつどう見てもオタクじゃない」

「ま、そうやけどな……」

そう、見ての通りアルミは、マンガやアニメやライトノベルやゲームが好きな、真正のオタクなのだった。

聖火はそのことにあまり良い印象を持ってはおらず、アルミに対する態度はあまり好意的ではない。アルミもまた、聖火を怒らせたリからかったりするのが好きなのだから、二人の関係はあまり良くない。

「でも、アルミもそんな変な奴やないねんで？」

「変人よ。あんな奴。ねえお兄ちゃん、なんであんな奴と付き合ってるの？」

「あいつは、ええ奴や」

「でも、裏山って、蛇がいっぱい出るんでしょ？ お兄ちゃんが蛇嫌いって、知ってるはずだよね？」

「……まあ、そうやけど……、まあ、ええやん」

「よくないよ」

「そうか？」

「そうよ。絶対、蛇出てくるよ。お兄ちゃん、蛇見たくないでしよ？」

「それは……そうやけど……、アルミやったら、蛇と鉢合わせしてもなんとかしてくれそうや」

「なんでそこまで信用するかな……」

「そういう奴やから」

「うー、……そうだ」

「……なんや？」

「私も一緒に行く！」

「……なんで？」

「だって！ ふたりきりだと！ なんかおかしいことやっちゃうかもしれないし！」

「……男同士やねんけど……」

「いいの！ こっちの話だから！ ね？ いいよね？」

「……、まあ、ええけど……」

と、いうわけで、ツチノコ探しに聖火も参加することとなった。

「ところで、ツチノコ探しに必要な道具って、なんやとおもう？」

「用意なんてなくていい。向こうが言い出した事なんだから。全部向こうに準備義務がある」

「……そうか……」

第11話 全てアニメを見ながら言ってます

その夜、浅倉家では

「……」

アルミは、家のテレビで真剣に、というか全力でアニメを見ていた。

ツチノコのことなど、今は完全に頭に無い。ツチノコよりアニメのほうが優先なのだ。

「そんなのに全力つくしてどうするのよ？」

「お姉ちゃん……」

浅倉唯。浅倉家兄弟の長女で、中学三年生にして家の中では事実上の最高権力者。シスコンのアルミをコントロールできる唯一の存在。

「ねえアルミ、ひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「なんででしょうか、ユイ姉様」

「やめてよ……その言い方」

「うん。で、何？」

ちなみに、アルミは姉のことをお姉ちゃんと普通に呼んでいるが、ユイは弟をあらうことかあだ名で呼んでいる。

「黄金比って、何？」

「最も美しいとされる比、具体的には

1…1. 618033988…の比率のことだな」

唯は気が遠くなった。この弟はこの数値を本当に暗記しているのだろうか？

「え……えっと？ 今日学校で先生が余談で話してくれたんだけど……」

「よくわからないのか……。この比率を簡単にすると、 $1 \div (1 + \sqrt{5}) / 2$ 。これは二次方程式 $x^2 \parallel x + 1$ の正の解。

あるいは、文字で表すと線分を a 、 b の長さで 2 つに分割

するとき、 $a \cdots b \parallel b \cdots (a + b)$ が成り立つように分割したときの比 $a \cdots b$ のこと」

「……ごめん。よくわからない」

「そうだな。お姉ちゃん、フィボナッチ数列って知ってる？」

「……知らない」

「そう……。フィボナッチ数列ってのは、第0項を1、第1項を1として、前の2つの項を足していったでできる数列の事。つまり第1項からの数値は

1	1	2	3	5	8	13	21	34	55

」

「で、それが黄金比となんの関係が？」

「第n項と第n+1項の比が黄金比、つまり $1 \cdots 1, 618 \cdots$ に収束していくんだ」

「へえ……」

「と、いうのもフィボナッチ数列の一般項は……」

「待った……それくらいでいい。ねえ、……今夜の晩ご飯、肉じゃががいい？」

「うん」

「……ねえ、アルミ」

「何？」

「あなたを見ていると、自分はバカなんじゃないかと時々思うんだけど」

「そんな事ないよ」

「……そう」

「……ところでお姉ちゃん、今度の日曜日、遊びに行ってもいいかな？」

「いいわ。……どこに行くの？ やっぱり、アニメイト？」

「いや、裏山」

「……そう、珍しいわね……」

第12話 ツチノコ探しミッション開始？

さてツチノコ探し当日。

業火と聖火は集合場所である学校の正門へと向かっていた。

山登りなので二人とも長袖長ズボン。アルミの言う必要な装備とは、どうやらこのことらしかった。

「しかし、本当について来るとはな。そんなに俺が心配か？」

「んーやっぱお兄ちゃんっていざ蛇に遭遇すると、動けなくなるから」

「それはそうやけど……」

「お兄ちゃん、なんで、あんな奴に付いていくの？　もしかして、気があるとか？」

「なっ！　そっ、そんなことは、ないで！」

「やっぱそうか……」

「……まあ、少し、惹かれることはあるけど……」

「え……」

「いや……そういう意味やないから……」

「そう……、そうだよね……」

「そうや」

「……」

「……」

「………、ねえ」

「何や？」

「あのオタクは、なんで急にツチノコを探そうとか思ったのかな？　あいつって、インドア派なんでしょう？」

「んっ………、あいつならどう答えるかな？　聖火、人間の行

動は、全て欲求に基づいている」

「そうなの？」

「そうや。あれがしたい、というのが欲求や。逆に、したくないっ

ても欲求や。例えば、人間が生きているのも、死にたくないって
いう欲求が根底にあるから。わかるか？」

「うーん、まあ、わかる」

「それで……、えっと、アルミの行動を支配する欲求のなかで、強
く、かなりの特異性を持つものがある。なんやと思う？」

「わかんないよ」

「知りたい、って欲求や」

「知りたい？」

「そう。知ること。あいつは、新たな知識を得ることに多大な努力
をしている。ツチノコがいるかどうか知りたい、いると聞けば、実
際に確かめたい。あいつは、こんなことを、常にやっている。知ろ
うとしている」

「だから、あそこまでどうでもいいこと知ってるの？」

「そうや」

「なるほど……」

校門前に、すでにアルミはいた。集合時間は十時の予定で、現時
刻は九時半。

「早いな……それは俺らも同じやけど。にしても……」

門に背を預け、文庫本を読んでいるその姿は、小学生といえども
なかなか絵になる、もとい、かっこよかった。

ただし、文庫本がライトノベルで、美少女キャラが表紙を飾って
いなければ、の話だが。

「なんか、なにもかも台無しだね……」

「そうやな」

「オタクじゃなくて、理屈っぽくもなかったら、かっこいいのに……」

「あれで十分かっこいいで」

「お、業火、来たか」

「ああ、三十分早く、な」

「そうか……、うん。その服装なら、問題ない」

アルミは、業火の服装をみて、そう評価した。

「さて、行こうか」

「そうやな」

アルミと業火は、そろって歩き出した。

第13話 アルミは間違いないS

二人は、とても仲良さげに、並んで歩いている。下手すると手までつなぎそうで、あるいは恋人同士が語らっているようにも見える。「って、ちょっとまでー！ー！！！」

「業火、ツチノコについてだが、俺はいろいろと自分で調べてみた」「無視するなオタク！　こら！」

「いいか、業火。ツチノコは古称をノヅチと言って……」

「だから！　オタク！　お兄ちゃんばっかと話するな！」

「だが、ノヅチと言う名称ができる前から存在したと思われる事例も……」

「オタク！　おい浅倉慎也！　返事しろ！」

「ところでツチノコを漢字で書くと槌之子で……」

「アルミ、無視したるなや」

「……むう、なんだ、聖火。いたのか。気づかなかった」

「嘘だっ！！」

「黙れレナ」

「レナって誰よ！？」

「お前の知らない誰かだ。ま、どうでもいいことだがな。で業火、ツチノコは……」

「だから！　無視するな！」

「よお、聖火、おはよ。今日もいい天気だな。これでいいか？　それで業火……」

「何よそのてきとーな返事は！？」

「……はあ、聖火、あのな」

「な……何よ」

アルミが急に真剣な眼差しで見つめてきたために聖火は少したじろいだ。

「聖火、お前は俺にどんな返答を期待した？」

「え……えっと………」

「まさか、俺がお前に対して友好的なことを言うなどと思ったんじゃないかな？　俺が言うことは、少なくともお前にとって絶対に嬉しくないことだ。それはわかってただろ？」

「う……それは……そうだけど………」

「なのに、なぜ会話を求めた？　確実に己に害なす会話を？　……」

……そうか、お前意外にMか」

「なっ！　何でそうなるのよ！？」

「だってお前、言い負かされることをわかって俺にしつこく話しかけてきただろ？　なら、そうなることを期待してたど普通は思われるぞ？」

「そ……そうなの？」

「そうだ」

「う………」

たとえ絶対にそうでなくても、そうでないことがわかりきっていても、アルミが断言するとそう思ってしまう。アルミはそういう奴なのだ。

「だからM女、あとでいくらでもいたぶってやるから、今は静かにしてろ。で、業火……」

「だから話を！　でも私はMじゃないけど……あー何であんたはいつもこういうのよー！？」

そんな感じで、三人は裏山までたどり着いた。

「で、これからどうするの？」

「ん？　もちろん、登って、一日中探し回る」

「えー」

「いやならついてくるな。ま、そうなれば俺は業火と二人きりになるわけだが。楽しみだな」

「なっ！　もちろんついて行くわよ！　お兄ちゃんになんかしたら許さないからね！」

「はいはい。行くぞ、業火」

「そやな」

三人で山を登り始めた。

第14話 レッツゴー山登り（上級編）

山登りの最中、聖火はついてきたことを少し後悔していた。

「うう……なんで……。ぜいぜい……」

「? どうした? 聖火」

「なんで……ずっと登ってばっか……ぜいぜい……なのよ? もう

……一時間は……はあはあ……登ってるわ……」

「……………? まあ、確かにそうだが……? 業火、そんなに疲れるか?」

「いや……別に」

「……ぶはあ!」

聖火は変な声をあげてその場に座り込んだ。

「うー」

「なんだその恨めしそうな目つきは?」

「だって……」

聖火も、運動が特別好きというわけではない。他の人と比べて、ずば抜けて体力があるわけでもない。一時間も山登りを続けることができるかは、怪しい。

そうでなくてもこの山、裏山などと呼ばれているが、それは単に学校の裏手にあるからであって、ちゃんと正式な山の名前がある。

しかもそれなりに険しい山である。登山のやり方によってはかなり本格的な山登りができるという。

いずれにしても小学生が急に思い立って登る山ではない。

「それなのに……」

「なんだ?」

それなのに、何で目の前にいる男二人は息一つ切れてないのか。しかも聖火は手ぶらだが、二人はちゃんと荷物を持っている。アルミの荷物の中身は知らないが、結構な重さはあるそうだ。業火の荷物には、二人分の昼ご飯やその他必要そうな物たくさんが入って

いて、やはり重いはずである。

「なのになんで疲れてないのよ……?」

「知るか。お前に体力がないからだろ」

「むー。でも、登りすぎじゃないの?　こんな山の頂上に本当にツチノコなんているの?」

「知るか。あとついでに言うがここは山頂でも山頂付近でもない」

「そんなことどうでもいい!　私が言いたいのは、ツチノコは本当にこんな疲れる場所で目撃されたの?」

「文法間違ってる。『言いたいこと』で始めたら『〜ということ』で終わらせないと」

「だから!」

「なんなんだ!?」

「落ち着け、二人とも」

「……わかった。で、ツチノコがこんなところで見つかるとは思えない、だったか?」

「うん」

「そんなこと、ツチノコの生態すら知らない俺にわかるわけないだろ?」

「んつと……そうじゃなくて……」

「つまり、アルミ、聖火がいたいなのは、あの目撃者のガキが本当にこんな登ったところまで来てツチノコを見たのか、ってことや」

「なるほど……。たぶん違うだろうな。目撃したのは、ほぼ間違いなく山のふもとだろう」

「「なっ!」」

二人は大いに驚いた。

「なんで?　お前達もこのことはうすうす感づいていたから、聞いたんだろ?」

「それは……そうやけど……。でも、そうなんやったらなんでここまで登ったんや?」

「それは、ほら、うん」

「なによ？」

「つまりな……うん。まあ、あれだ………気分？」

「なによそれ！？ ……まさか、理由も無く登って見たかった、とかじゃないでしょうね？」

「ちゃんと理由はあるさ。俺だって無駄に体力使うのは好きじゃないし。……ま、Mのお前をいじめるために疲れる事をする、ってのはいいが」

「だからMじゃない！」

「はいはい。それで、本当の理由だが………俺が、ガキが嫌いだからだ」

「………どういうこと？」

「………」

アルミはすぐくつまらなさそうだった。

第15話 青空の下のお弁当はおいしい、多分

「つまり、だな。山の麓が、ガキ共でいっぱいだっただろ？」

「たしかに……」

たしかに、麓には小学生がたくさんいた。それも七割が低学年、つまり一、二年生。もちろん残りの三割は三、四年生だ。

全員が噂を聞きつけ、やあやあ我こそはみたいな感じでツチノコ探しにきたガキ共である。

「まあ、たしかにアルミは嫌いやろうな。ガキがうじゃうじゃ」

「それだけじゃないけどな」

「？」

「俺はもっと別のことを考えて、登ることにした」

「何よ？」

「搜索の効率化、あと遭遇率の向上」

「えっと……？」

「麓のほうにガキがたくさんいる。あれだけいけば、しらみつぶしに調べられるだろう。……あいつらがとんでもないバカじゃなければ、だが。まあいい。そこに俺達加わるよりは、もっと別の所を探したほうがいいだろ？　これが搜索の効率化」

「なるほど。それで、遭遇率の向上は？」

「俺が思うに、ツチノコは人間との接触を避けているんだ」

「何で？」

「ツチノコの目撃例は数多い」

「そうやな」

「だが、そのすべてが曖昧なものだ。なぜか？　多くの目撃例において、ツチノコは見られるとすぐに隠れるなり逃げるなりしているからだ」

「なるほどな」

「つまり、ツチノコって、けっこう臆病な生物で、人目があるとする

ぐにげるんじゃないかな？」

「そうやな。それで、人がいないところでさがそうと？」

「うん。よくできました。だから、これだけ離れたところまで登ったんだ。わかったかM？」

「それって、ここにいる確証もないわよね？」

「……そうだな」

「だったら！」

「ここかもしれない。そうじゃないかもしれない。だったら、実際に探すしかないだろ？」

「そうだけど……」

「ま、ここで見つけられる確率より、ここじゃないどこかで見つかる可能性のほうが当然、高いんだけどね。しかたないことだけど」

「……………。見つかるの？」

「さあな。さて、探そう」

「うー」

「なんだ？ まだ言いたいことが？」

「……いた」

「？」

ぐー

「お腹すいた！」

「……………」

「アルミ、お昼にしよ。もうそんな時間や」

「……わかった」

「……、アルミ、あげないけど、ほしい？」

「いらない」

業火はリュックサックの中からお弁当箱を取り出した。

中身は特に説明する必要も無さそうな、普通のピクニックとかに持っていきそうなお弁当である。

それを業火と聖火は向かい合って食べている。

一方、アルミはというと……。

「俺も自分で昼ご飯持ってきたから……」

「へえ、何？ あのカードがついてくるチョコレート？ 森羅万象だっけ？」

「チョコウエハースだ。それに、森羅万象じゃなくて神羅万象。まあ、それは全部集めたから違うが」

と言いつつアルミが取り出したのは、黒い棒のような物であった。

「……なにそれ？」

「ん、羊羹」

「……………ようかん？」

「？ 知らないのか？」

「知ってるわよ！ バカにするな！」

「知ってるなら聞くなよ……あむ」

と、アルミはようかんをおいしそうにほおぼる。

「……んむ」

普段は大人びているアルミも、こうすればまるで子供だ。いや実際子供だけど。

「……はむ」

「で、私が聞きたいのは、どうして昼ご飯がようかんなの？」

「む、ふむふおふはひふあつへふ……」

「食べながらしゃべるな！」

「……………ごくん。文法間違ってる……………って、さっきも同じ事注意したような……」

「そんなことどうでもいい！ それよりなんでようかんなのよ!？」

「怒るな落ち着け……。なぜって、俺が甘党なのは知ってるだろ？」

「知ってる」

「なら、甘党だったら甘いものを好んで食べるってことくらい、わかるよな？」

「それは……………そうだけど……………」

でも、ピクニクのお弁当がようかんであることには、まったく

納得できなかった。

「……じゃあさ、ほかの物は持ってきてないの？」

「……、あるけど……。食うのか？」

「なにそれ？ 食べられないもの？」

「ん……」

アルミは荷物の中から何かを取り出した。それはプラスチック容器、一般にタッパーと呼ばれるものだった。

「容器のことはどうでもいい。中身が……」

「？」

中に入っているのは……。

「……粘土？ ねえお兄ちゃん、これどう見ても粘土だよね？」

「……そうやな。アルミ？」

中に入っているのは、一見すると茶色い色をした粘土だった。

「ちゃんと食べられるぞ。食感も粘土だが」

「ホントに粘土なの！？」

「違う。これは携帯食料。文献を参考にして、俺が自作した。うま
くいった証拠に、おいしくない」

「……………」

「さて、じゃ、ここで探そうか、ツチノコを」

アルミは立ち上がり、すぐく変なものを見るように『携帯食料』
を眺める二人に言った。

第16話 蛇

「探す？ まあ、そのためにきたんやけど、な……」

業火も立ち上がった。

「でも、どうやって？」

「うん。そうだな……」

アルミはあたりをざっと見渡した。

「ただ漫然と探すだけじゃ見つかるものも見つからない。だから、見つけろそうな所を探す」

「どこ？」

「……………」

アルミは黙って横を向いた。そこには、アルミの腰の高さぐらいはある、背の高いくさむらがあった。

「ここ」

「……ま、まあ、出てきそうな雰囲気やけど……………」

「じゃあ、探そうか」

アルミがそう言って、くさむらに一步踏み出すと、突然がさつと大きな音がして何かが飛び出てきた。

「え……………っと！」

こちらに向かって飛びかかってきたそれを、アルミは手で払いのけると、湿った鱗の感触がした。そしてその物体はどさりと音をたて、業火の目の前に落下した。

ママシだった。

業火の天敵、蛇だった。

「あ……………えっと、業火？」

「……………い……………」

「い？」

「いやああああ！」

業火は女の子みたいな叫び声をあげてしりもちをついた。そして

頭を抱えてガクガクブルブルと震える。

「まったく……しかたないな……」

アルミはマムシをつかみ上げ、

「えい！」

と言って遠くに投げ捨てた。

「業火ーもう蛇さんいないぞー。あ、聞いてない……」

業火は頭をかかえて地面にしゃがみ込み、ガクガクブルブルと震えていた。

「どうしたものかな……」

「ねえお兄ちゃん、もう蛇いないからさ、元に戻ってよ……」

「がくがくぶるぶる……」

聖火の呼びかけにもまったく反応しない。

それほどまでに嫌いなものなのだ。

「ま、嫌いなのは仕方ないか……。落ち着くまでそっとしておくかな？」

と、アルミは再びくさむらに目を転じ、

くさむらががさがさと音をたてているのを見た。

「！中に何かいる？ ツチノコ？ いやまさか……。大きすぎる……」

くさむらは音と共に揺れている。中に大人一人が入ってもぞもぞと動いているといった感じだ。

「何だろ？ 不審者？ いやこんなところに普通いないか。とにかく……」

アルミは地面から適当な大きさの石を拾い上げ、

「えい！」

と、音をたてているくさむらに投げ込んだ。

「……」

すると、ごん、と、鈍い音が聞こえてきてくさむらから何かがとびだしてきた。そしてそれは……。

「いっ！ 痛いじゃないか何するんだ!？」

「……」

それは人だった。おそらくは大人で、そして

「あんた……何者だ？」

「む、見ての通り、正義のヒーロー、ゲッコー仮面だ!!」

その何者かはビシッとポーズを決めた。

服装は全身白で統一されていて、顔はやはり白い覆面。そして額に三日月のマーク。

「……………」

アルミの不審者という推測はあながちはずれていないようだった。

第17話 憎むな、殺すな、赦しましょう

「で、不審者のおっさん？」

「私は不審者ではない！ 正義のヒーローゲッコー仮面だ！」

「月光仮面？ ああ、憎むな、殺すな、赦しましょう、の？」

「あんな白ずくめの変人と一緒にするな！！」

「いやコスチュームそのままだし！ てか嫌いならそんな格好しないよな普通！？」

「もちろんだ！ 月光仮面は大いに尊敬している！」

「だったら、なぜ変態呼ばわり？」

「私は、月光仮面ではなく正義のヒーローゲッコー仮面！ すなわちヤモリ仮面！」

「話が繋がってない！ まったくどうなってる……。あんな結局何者だ？」

「だから正義のヒーローゲッコー仮面だと言っている！」

「……はあ、ヤモリ（gecko）か……？」

「そう！ ようやくわかってくれたか！」

「で、ヤモリ仮面？」

「違う！ 私は正義のヒーローゲッコー仮面だ！」

「まったく、ゲッコー仮面？」

「『正義のヒーロー』が抜けている！！」

「正義のヒーローゲッコー仮面！」

「うむ、やはりネーミングはヒーローにとって最も大切な物の一つだ」

「ああ！ そうだな！！」

「ちよつとアルミ落ち着いて……」

なおも震えている業火を一旦放置し、聖火も駆け寄ってきた。

「……で、こいつ結局何なの？」

「俺が知りたいよ……。えっと……。それで、正義のヒーローゲッ

「コー仮面？」

「何だ？」

「あんた、こんなところで何をしているんだ？」

「うむ。この山に、ツチノコと言う蛇に似た悪の魔獣が出没すると聞いたのでな。正義のヒーローとして退治しにきたのだ」

「……………」

呆れて声も出なかった。世の中にはこんなバカがいるものか、と。

「(…………？　ん？　待てよ…………？　俺は何をもってしてバカだと思ったんだ？　あんな格好してること？　いや…………前の言葉についてだ…………)」

「？　どうしたの？　急に黙り込んで」

「…………俺は今、こいつを馬鹿だと思った」

「そうじゃないの？」

「あのださい格好のことじゃなくて、ツチノコを探しに、こんな大人がこんなところまで来たって事」

「ああ…………それも、バカね」

「だが、それは俺も同じなんじゃないかな？」

「あ…………うーん、そうかもね」

「ま、どうでもいいことだけど。で、ツチノコって？」

「うむ。ツチノコとは、蛇に似ているが体の一部が扁平の魔獣のことだ」

「うん。それで？」

「その魔獣はまた、小さな体に似合わないほど高く、実に一メートルほどジャンプし、またある話では火を吹くという。しかもたびたび目撃されているのに、いまだ正体不明。これはかなり隠密性が高いということだ。そんなものが人に襲いかかったら、危険だ。野放しにはできない」

「あ……………」

アルミは再び絶句した。ただし今度は呆れたのではない。

素直に驚いた。

というのも、それはツチノコに関するの数ある目撃情報を、ある程度正確にカバーしていたからだ。

つまり逆を言えば、ツチノコは火を吹くなんて情報も平然と語られている、よく考えればすぐおかしい生き物なのである。

「ま、それはいいとして、どこからツチノコが出るなんて聞いたんだ？」

「近所の子供達が騒いでいたからな」

「ああ……そうだな。ガキ共か」

「そんな言い方しなくてもいいだろう？」

「まあそうだが……」

アルミは何か言いかけて、やめて一人かぶりを振った。

ガキ共が何を噂しようと、それを大の大人が本気にしようと、どうでもいいことだった。

大切なことは、その結果がどうであるか。こちら側にとって望ましいものかどうか。それだけだった。

「それで、ツチノコは見つかりそうなのか？」

「いかんせん手がかりがないからな。人の少ないところを探していて、こんな所まで来たのだが……」

「う……」

アルミは、こんな変人と同じ思考をした自分を恥じるべきか、それともこんな変人がいるからツチノコも出てこられないのだと考えるべきかで迷った。

しかしその迷いは長く続かなかった。

近くでまた、くさむらからガサガサと音がした。

「……まったく。今度はなんだよ？」

もうマムシも変態仮面もうんざりだった。

ツチノコが出るかもなんて、もはやまったく思っていなかった。

「で、何が出てくる……？」

ガサ

と、もう一度音がして、くさむらから何かが出てきた。

それは、一見して蛇のようで、しかし扁平で、真ん中が太いために寸胴という印象をうける、そんな「何か」だった。

「……え」

ツチノコが飛び出してきた。

第18話 ゲッコー仮面VS謎のアルミニウム怪人

ガサ

そのツチノコは着地し、こちらを見つめている。

「……」

ジー

ツチノコの鳴き声だろうか。ツチノコはそう言って、再び飛び上がった。

「！」

アルミの反応は速かった。

他の誰もが、この唐突でしかも冗談のような出来事に全く対処できなかったが、アルミだけは動いた。

実際に、アルミを含めて全員が、本当にツチノコが出てくるなどとは思っていなかった。

しかしアルミはとっさに動いた。

ツチノコを捕まえようとした。

「このっ!!」

捕まえようと手を伸ばしたが、少し届きそうにない。

「はあっ！」

それでも、もう少し頑張ってみると、なんとか触れることができた。

ただし、触れただけだったが。

その結果、ツチノコの跳躍の軌道が若干ずれ、少し面倒な所に着地した。

すなわち、業火の目の前に。

「あ……………まずい」

業火はまだ、頭を抱えしゃがみ込んでいる。しかし、だとしたら当然、ツチノコは視界に入っているはずである。

「お…………お兄ちゃん？ 落ち着いて、ね？ 恐くないから……」

「あ……いい……」

「業火……?」

「い……いやぁー!!」

業火は女の子みtainな声を出し、全力で後ずさった。

「ちょ……業火……」

「案ずるな! 少年!」

ゲッコー仮面のほうが先に動いた。そして、その手には武器があった。

ナックルダスターだった。あるいはヒマンテス、セスタスなどとも呼ばれるかもしれない。

ふつうは、メリケンサックというのだが。

「……」

なかなか現実的な武器にアルミは何を思ったか、それは……。

「まずいな……。止めなきゃ」

そう言い、ゲッコー仮面を止めに走った。

アルミが思ったのはゲッコー仮面の拳（メリケンサック装備）がツチノコに振り下ろされる絵。

そして、それによりツチノコの体が殴打され、その中身が飛び散るという絵。

それは見たくなかった。というか業火に見せたくなかった。

だからアルミは止めに走った。

だが、アルミにもメリケンサックの一撃を受け止める自信はなかった。

そして……。

ガキンと金属がぶつかる音がした。

ぶつかったのはメリケンサックと大型のナイフ。

「なに!?!」

ゲッコー仮面は驚いたようだ。

「貴様! そのようなものをどこで手に入れた!?!」

「えっと……もらった?」

アルミはそう答えながら破裂を免れたツチノコに手を伸ばしたが、
ジー

ツチノコは再び飛び上がった。

「ち……」

「誰からもらったのだ!？」

アルミの舌打ちとゲッコー仮面の質問は同時だった。

「誰からって……よくわからないけど、不良? 名前は知らない……」

…

アルミはそう答えた。

ツチノコは見失ってしまったようだ。

「ち……。ん？」

なんだか、すごい殺気を感じた。

「何……だ？」

業火はあいかわらず震えたままだし、聖火は業火を必死になだめている。

だとすると当然……。

「ゲッコーパンチ!」

「わっ!」

メリケンサックの攻撃をかうじてよけた。しかし連続してパンチを繰り返してくる。

「この!」

ガキン

ナイフで弾き返し、距離をとる。しかしゲッコー仮面の攻撃は止まらない。

「貴様のような子供がそんなものを持つとはけしからん! 成敗する!」

「なんだよそれ!? にしてもなんで強いんだ……。見た目ふざけてるのに……」

見た目は関係ないし、どっちかという銃刀法違反のアルミのほうが悪いのだが、そんな事を気にするアルミではない。

「ゲッコーキック！」

「うわっ！」

かなり危なっかたが、よけた。

「やばいな……ここは……刺し殺すしかないのか……すごく気が進まないけど」

アルミはナイフを構えた。

人を殺すのは初めてではない。次のパンチをよけて次いで肉薄して刺そう。そう思い身構え……。ばきつと音がしてゲッコー仮面の体が吹っ飛び、倒れた。

「……え？」

ゲッコー仮面の顔面に横からストレートがはいったようだ。

「はあ……はあ……」

「業火……」

業火が仁王立ちしていた。

「お前、震えてたんじゃ……」

「アルミがピンチっぽかったし。気がついたらもう、蛇もおらんし……で、このおっさん、なんなんや？」

「それは……、いやどうでもいい。ほっところ。それより業火、ツチノコだ」

「そうやな」

「ちよっと待ってよ、お兄ちゃんあれ見て叫んでたじゃない。なのに、まだ探すって言うの？」

「それは……。大丈夫や。うん」

業火は引きつった笑顔でそう言った。

そしてアルミは……

「業火安心しろ。いい知らせがある」

「なんや？」

「あれは蛇なんかじゃない。いや、むしろ『ツチノコ』ですらない」「……え？」

業火も聖火も、その発言の意味が、よくわからなかった。

第19話 ロボット

「アルミ……大丈夫？ あれがツチノコじゃないって？」

「そうだ」

「そんなはずない」

「なぜ？」

「だって……あなたも見たでしょう？」

「そうだな。あれは、たしかにツチノコに見える。というかそのものだった」

「そうやったら、何が引かかるんや？」

「鳴き声」

「鳴き声？」

「そう。鳴き声。いや、つまりあれは鳴き声ではない」

「じゃあ、何よ？」

「……、機械の鳴き声だ」

「………機械が鳴くって？」

「メタルギアがあげる鳴き声は、実際には関節部分の金属がこすれたり、軋んだりする音なんだ」

「ふうん、じゃ、あのツチノコは？」

「モーターの駆動音」

「モーター？」

「そう。あの音にすごく似ていた」

「何で？」

「理由はひとつしか思い浮かばない……あれは、機械仕掛けのロボットだ」

「「……………」」

あまりにも突拍子のない話だ。

「……それ、本気で言ってるの？」

「もちろんだ」

「でも、あんなリアルなロボットって作れるん？」

「ある程度模してあるなら問題ない。あの状況でそれらしいものが飛び出してきたら、誰だってそう思い込む。事実、俺も騙されて、モーター音も鳴き声と思い込んでしまった」

「そう……だね」

アルミは間違いを認めない人ではない。というか、アルミ自ら誤りを認めたら、相手もそれにならざるをえない。この状況に即して言えば、嫌われている聖火にさえ自分の考えを認めさせられる。

アルミがそのことをわかっていることは間違いない。

「……それでアルミ、なんでツチノコのロボットがこんな所にいるんや？」

「さあな。そこまではわからない。でも、それならば調べればいい」「どうやって？」

「あのロボットが自立したプログラムで動いていたとは思えない。となればリモコンで遠隔操作だ。しかもあの正確な動きは近くで様子が見える状況でしかできない」

「……つまり？」

「この近くに、操作してる奴がいるってことだ」

「まさかそいつがどこにいるかわかってるの？」

「もちろん。それは……」

アルミは大きく息を吸い込んだ。

「そこだ！」

くさむらの一カ所がさがりと鳴った。

アルミはそこに、ナイフを構え飛び込んだ。

聖火と業火は……

「す………すごいよお兄ちゃんあんなところにゃにがいるなんて全然わかんなかたし全然なのにアルミが!!」

あわてていてうまく話せない。

「落ち着け、別にアルミもわかってなかったやろうし」

「え……？」

「つまり、アルミは誰かがいるってことだけわかって、どこにいるなんてわかんなかったんや」

「え……じゃあどうして？」

「どこにいるかまでわかっているかのように振る舞って、その上でそこだって叫んだら、向こうから動くやろ？」

「え……そうなんだ……？」

聖火はさっきあれだけあわてたのが急に恥ずかしくなった。

「……アルミのバカ。変態」

とりあえずアルミへの文句をつぶやいて気持ちを落ち着かせた。

「……で、そのアルミは？」

アルミは何者かを地面に抑えつけていた。相手をうつぶせにして、首にナイフを当てている。

「……さてと、事情聴取だ」

アルミはそうつぶやいた。

第20話 例えばそんな願い

「……、いや、まてよ……、このひとどこかで……え
？ 会長？」

「どうしたの？ 知り合い？」

「ああ、まあ、知り合いといえば知り合いだ」

「誰や……って、お前、誰かは知らんが知り合いにそれはまず
いと思うで……？」

アルミは今、中年か初老といった年頃の男性に鮮やかなCQCを
かけて組み伏せている。

「……まあええか。で、その人は何者や？」

「町内会長」

アルミはただそれだけ答え、男性に確認した。

「ですよね？」

「そうだ」

「えっと……アルミ？」

業火と聖火はいまいち状況が読めない。

「どういうことや？」

「それは……だな。まあ、そこに座って」

アルミは町内会長を解放し、地面に座らせ、自分も腰を下ろした。
ナイフは持ったまま。相手が逃げようとしたらすぐに飛びつける
体勢で。

「それで……この人は俺の家が属する町内会の一番偉い人。つまり
町内会長なんだ。だから顔ぐらいは知ってる」

「そうか……それで、なんでその町内会長がこんな所に？」

「そうだな。会長、あのツチノロボットはあなたの操縦ですね？」

「そうだ。あれは……」

「まあ待て。質問にこたえるだけにしてください。……あのロボッ
トはどこで手に入れた？」

「近所にそういうのを作るのがうまい知り合いがいるんだ」

「なるほど……」

「アルミ、ちょっと待て。あんな本物みたいなロボットって作れるんか？」

「十分時間をかければある程度のものは作れる。それがこの状況で出てくれば、さっきも言ったように本物に見えるさ。……で、会長、本題ですが、なんでこんな事を？ しかも、あの目撃ガキもロボットを見たのだとしたら、数日に渡ってロボットの操作なんて妙なこととしている訳ですが、それはなんのために？」

「話題を作るためだ」

「……話題？」

「そうだ。話題だ。町おこしだ。この……」

「この治安の悪い町というイメージを払拭するために、ツチノコで話題作りか」

言ってからアルミはしまったと思った。相手の話の腰を折ってしまった。

向こうが話しているのに口を挟むのは礼儀に反する。

「でも、そういうことだろ？ ……そのやり方はどうかと思うが。ツチノコでこの地域のイメージを払拭できるだけの話題は作れないと思う。せいぜい、子供を少しの間夢中にさせるぐらいだ」

しかし、言ってしまったことは仕方がない。アルミはそう続けた、が、

「そうじゃない」

町内会長はきっぱりと言った。

「確かに、この地域は治安が悪い。そのせいで他の地域からの評判も良くない。だが、それを何とかするためにこんなことしたのではない」

「なら、何のために？」

「子供達に、笑って欲しかった」

「……」

「子供達に面白そうな話題を提供して、つかの間でも楽しんで欲しかった。この治安の悪い町で、楽しいことが少ないと思っている子供達に楽しんで欲しかった。一瞬の事だとはわかっている。子供騙しなんて事はわかってる。それでも……」

「わかった。もういい。あなたの考えはわかりました」

アルミは町内会長の話を遮った。

礼儀に反することはわかっている。

「でも会長、そのために何日も山に行って隠れるんですか？ あんたも若くないでしょうに」

「それは……」

「俺に任せてください」

「……え？」

「俺に任せてください。なにか話題、作ってみます」

この言葉はアルミ以外全員を驚かせた。

「……アルミ？ 作るってどうやって？」

「まあ、見ていて欲しい。じゃ、会長、そういうことで。二人とも、帰るぞ」

アルミはそう言って立ち上がり、すたすたと下山を始めた。

「あ……待って」

「そうよ、何するつもりか教えなさい！」

二人がアルミを追いかけて、あとには呆然とした町内会長だけが残った。

第21話 謎円模様

その日の夜、アルミは机に向かって熱心に関心を見つめていた。それは、パソコンでプリントアウトしたと思しき紙。そこには、なにやら図形のようなものが描いてある。

「だいたい……こんなものか」

「アルミ、何それ？」

唯が覗き込んできた。

「ん……内緒」

数日後の、やはり夜。ただし深夜。草木も眠る丑三つ時。アルミの家からそこそ離れた所にある、とある荒地。背の高い丈夫な雑草で覆われた、そんな荒地。

業火はアルミから呼び出され、そこにやってきた。

「まったく……なんで付いてくるんや？」

「だって……」

聖火も付いてきた。

「だってさ、こんな夜遅くに、しかも二人きりなんて……襲われたりしたら危ないよ……」

「……………」

誰が誰を襲って、どう危険なのかは聞かなかった。

あいにく、アルミにも二人きりになるつもりは無かったようだ。目的地でアルミと町内会長が話し合っている。

「お……来たな」

アルミが業火に気がついたようだ。

「すまないな。こんな時間に呼び出して」

「それはいいけど……何するつもりなん？」

「すぐにわかる。ほら」

業火に図形が描かれた紙を渡した。

「実物と比べてズレがないか、聖火と一緒にチェックしてくれ。じゃ、会長、始めようか？」

アルミはそう言って、地面にしゃがみ、何かを拾い上げた。

一メートルほどの細長い板。両端にロープが結わえてある。

おそろく、アルミが用意した物。

「じゃ、業火、頼んだぞ？」

「ああ……」

アルミはロープを肩に引っ掛け、板を踏み、草を踏み倒していった。

町内会長も同じようなことをする。

「……なるほどな……」

業火は一人つぶやいた。

一九八〇年八月、イギリスのウィルトシャー州の畑に直径十八メートルもの巨大な円が三つ、現れた。

いわゆるミステリーサークルという現象を世界中に知らしめた出来事だ。

これ以来世界各地で現れ、また時がたつにつれ模様が複雑になっていくこの現象の原因について、様々な説が唱えられた。

つむじ風によるもの、あるいはプラズマが原因だ、とも。

果ては宇宙船の着陸跡などという輩まで現れたが、真相は一九九一年、二人の老人が芸術活動の一環として作ったと告白するまでわからなかった。

その制作方法は、細長い板を足で踏みつけ、畑の作物を倒していくという、単純なものだった。

その方法に気づいた世界中の物好き達が同じようにサークルを作っていたということだ。

翌日、学校で、アルミは机に突っ伏して寝息をたてていた。
休み時間だから問題ない。周りはガヤガヤとうるさいが。

ツチノコでは騒がなかった六年もミステリーサークルには反応するらしい。

誰かが宇宙人の仕業だと主張し、誰かがそれを支持した。しばらくすると夜中に怪しい光を見たなんて事を言い出すのも出てきた。他のクラスも似たような感じだろう。考え方は人それぞれなどと言いが、実際はそれほど差は無い。

とにかく話題は作れた。それが肝心な事だ。

数時間後、唯が帰宅すると、アルミにお帰りを言われた。
手にコントローラーを持ち、ツチノコを操作している。

ジー

「アルミ、知ってる？ ミステリーサークルが出たんだって」

「らしいな」

ジー

「興味無いの？」

「無いな」

ジ……

「電池切れ。意外に高性能なのにバッテリーは安物だな……」

「……アルミ、何なのそれは？」

「ツチノコロボット。人助けしたらもらった」

「誰から？」

「内緒。ところでお姉ちゃん、世界初のミステリーサークルが現れたのっていつか知ってる？」

アルミはとても楽しそうに言った。

「えっと……知らない」

「一六七八年。やっぱりイギリス。当時は悪魔の仕業だと考えられた。でもまあ、これを作ったのが人間であろうが悪魔であろうが、楽しければそれでいいし」

「アルミは、こういうの楽しいと思う？」

「んー、場合によるかな？」

「そう」

「でも、なんとなく、もっと楽しいことがもうすぐあるような気がする」

「どんな？」

「さあ……さっぱりわからないよ」

アルミはそう言って苦笑した。

そのころ、どこかで誰かがアルミを何かの企みに巻き込もうとしていたが、アルミはもちろんそれを知らない。

それはまた、次のお話。

第21話 謎円模様（後書き）

こんにちは。そちらです。ツチノコ編ようやく終わりました。長かった……。

次回からはもうちょっと短くできるといいな。できないだろうけど。

次はもっとスプラッタで殺伐とした話になる予定です。

第22話 不良再び

突然攻撃を受け、気づいた時には倒されていた。そのまま上に乗られて目にライターを突きつけられ、そして聞かれた。

お前はシャークス団か、と。

その相手の顔はよく覚えている。

つんつんとあちこちに尖った髪の毛、つり上がった両目。かっこいい、かなりの美形だった。

明らかに年上で体格も勝っている相手に立ち向かうだけの度胸も実力もある。

そして事実、シャークス団を壊滅させた。

死者多数というのはいただけでないが、それはなんとかできるだろう。

彼こそ、正義の味方にふさわしい。

「……誰かに見られてる気がする……」

「は？」

下校途中、アルミはそんなことを言い出した。

「視線を感じる」

「誰の？」

「さあ……まったくわからない。ストーカー？」

アルミはとりあえずナイフを取り出した。

「……なあアルミ、前から気になってたんやけど……そのナイフって、そもそも何なん？」

「えっ？ ……ああ、言って無かったっけ？」

「詳しくは、な」

「そうか……。このナイフは純粹に戦闘用に作られた、いわゆるコンバットナイフ。片刃。刃が薄いというわけではないが殺傷力に問題はない。刃は鋼鉄製。柄は……」

「待てアルミ。聞きたいのはそういうことやなくて……」
「？」

「そんなもんを、どこで手に入れたか、や」

「あ……うん。不良にもらった」

「不良？」

「そう。この前中村を尾行しろって言ったことがあったよな？ あの時俺はなんとなくシャークス団という不良グループを殴りに行きたくなって、そいつらのアジトを知るために見かけた不良っぽい奴から手当たり次第にCQCをかけて脅したら……親切な不良もいるんだな。快く教えてくれて、こんな武器までくれたんだ」

「確かに……親切やな……なんか違う気もするけど。どんな奴なん？ そのお人好しの不良って」

「んーどんな奴……顔は……あ、あんなの」

「ん？」

「あ……」

「なんや？」

アルミが指差した方向に、まさにその不良がいた。

「……………さ、業火、行くぞ。世の中にはよく似た人もいるもんだな」

「「いや、待て待て」」

業火と不良、2人同時に止められた。

「……………何だ？」

「いや……この状況で普通はなんかするやろ……」

「俺はしない主義だがな。まあいい。おい不良、話してやるから感謝しろ」

「あのな……」

「ところで不良、さっきまで俺を尾行してたのはお前だな？」

「そうだ」

「やっぱり。どういいうつもりだ？ 言っておくが、俺にそんな趣味ないぞ？」

「わかってる……実は、頼みがあつて……」

「そんなことより不良、頼みがある。」

「……なんだ？」

アルミは人の話の途中で口を挟むことはほとんど無い。あるとしたらそれは相手がよほど嫌いなやつか、相手をよほどなめているか、急いでいるときだった。

「（たぶん、二つ目やな）」

業火の思考は置いておいて、

「不良このナイフだが、気に入った。俺に出来ないか？」

「……いいぜ」

アルミの問いに対する不良の答えはあまりにもあっさりしていた。

「ん……なんか条件とか提示するとか思ったが……」

「ああ、条件はある」

「なっ！」

アルミは露骨に驚いた。むしろ芝居じみている。

「さっ最初に言っておく！俺はそんな趣味は無い！」

「わかってるって！」

「じゃあ、何が望みなんだ？」

「……、たいしたことじゃない。お前なら簡単だ」

「……？」

「お前……正義の味方にならないか？」

第23話 正義とは理解されにくい

「正義の味方……」

ベルトでバツタに変身。あるいは5色の戦士が力を合わせて悪と戦う。巨大怪獣に光の巨人が立ち向かうのもある。

そのどれもが、正義の味方になる前はどこにてもいそうな一般人で、何か特別な事情で戦う事になる。

だが、それが不良のスカウトによるものであるという例は知らなかった。

「って、そんなわけないか……」

「ん？ 何がだ？」

「何でもない。こっちの話。それで、正義の味方になれて？」

「別に変身するわけじゃない。ただ悪い奴を退治する、純粋な意味の正義の味方だ」

「純粋な意味の正義、か……で、具体的には何をしろと？」

「この地域一帯にはびこる悪……つまり不良連中とか、できれば暴力団とかに制裁を加えて欲しい」

「制裁……つまり、こらしめろと？ 二度と悪さをできないようにしろと？」

「そういうことだ」

「お前も不良なのに？」

「俺は不良じゃない」

「ナイフ携帯してたのに？」

「色々訳があって」

「……まあいい。でもこれ、小学生に頼むことじゃないだろ？」

「お前むちゃくちゃ強いだろ？ 俺をねじ伏せたじゃないか」

「不意打ちだったから……」

「それでも体格差ありすぎだろ」

「お前が極端に弱いだけかもしれない」

「俺はそれなりに強いつもりだ。それに、お前シャークス団を全滅させたじゃないか。……殺したってのは問題だが。すごい騒ぎになったんだぞ?」

「ああして殺すのが一番楽だった。騒ぎについては俺の知ったことではない。あと、あいつらも弱かった」

「あいつらは強かった。みんな迷惑してたんだから。弱いと思うのはお前がむちゃくちゃ強いからだ」

「己の力を過信するのはだめだから……」

「……お前、なんだかんだ言って、結局やりたくないだけなんじゃないか?」

「当たり前だ」

「……なんで? そのナイフ、欲しくないのか?」

「ん……これが条件だっけ……。ま、これはいつでも持ち逃げできるからな。わざわざ労力を使う必要が無い」

「おい……」

「本当の理由は違うけどな。理解できないからだ」

「何がだ?」

「なぜあんたがそんな事したがるのか。わからない。あんただって、本気でヒーローになりたいってわけじゃ無いだろ?」

「ぐ……」

不良はおもしろいぐらいにわかりやすい反応をした。

「さて、じゃあ理由を聞こうか。一介の不良がなぜそんな事を言い出すのか。返答によっては協力してもいいぜ?」

アルミはそう言って不良の目をじっと見た。アルミにとっては相手の目を見て嘘を見透かし真実を探ることなど造作の無いことだ。

そしてアルミはニコリと微笑んだ。相手に有無を言わせない、恐ろしい笑いだった。

第24話 兄と妹のこと

どうやら、話すしかなさそうだ。それも、偽りのない真実を。少しでも嘘を言えばこの小学生はたちどころにそれを見抜くだろう。そのくらいのことは、この不良にもなんとなくわかった。

「いいだろう。理由を話してやるよ。だがな、今から言う話は絶対におもしろい話じゃないぞ」

「だろうな。でもいい。話せ……おっと、その前に、お前の名前、聞いてなかったな。なんだ？」

「……冬木 氷河だ……」

氷河の話はこうだった。

氷河の一家の構成は五人。両親と、氷河の兄と妹。妹の名前は雪野という。

一年前のこと、氷河の一つ上の兄は札付きの不良だった。似たような奴らとつるみ、暴行や万引きといった、思いつく手軽な犯罪に手を染め、深夜まで仲間とバカ騒ぎを繰り返していた。

両親はともに、この兄の行動をもちろん快くは思っておらず、兄と何度も口論を繰り返していた。その日も、両親はじっくり話し合おうと、帰りの遅い兄をずっと待つようだった。

氷河も雪野も、兄の不良ぶりには辟易していたが、かといって話し合いなどには興味もわかず、自分達がなにか役に立つとも思えなかったから、参加せずに早々に寝ることにした。

夜。なにか胸騒ぎのようなものを感じてなかなか寝付けなかった

氷河の耳に、原付バイクの駆動音が聞こえてきた。兄の帰宅だ。

そして耳に入ってきたのは、扉の開く音、両親がなにか言っている声、足音、そして……耳をつんざくような、悲鳴だった。

第25話 両親のこと

悲鳴が聞こえた。氷河には、それがどういうことかはとっさにはわからなかった。ただ下に行かなければいけないとは思った。その選択が正しかったかどうかはいまだによくわからない。しかしその時氷河は何も考えず階下に向かった。

そして、父親が死んでいるのを見た。

脳天に鉋が刺さり、頭が真っ二つに割れ、脳がむき出しになって血をどくどくと流しているのを見た。

あまりの異様な光景に、一瞬思考が停止したが、すぐに別の考えが思い浮かんだ。

母親と兄貴はどこにいる？

ふと、さっきから誰かが叫んでいるのに気づいた。

誰かが必死に、逃げて逃げてと叫んでいた。

それが何なのか、少し考えたらわかりそうなものだったが、何も考えず、声のした方向を見た。

長男が母親を磔にしていた。

両手を広げた状態で、手のひらに釘を打ちつけ、実の母親を磔にしていた。

その母親が己のことをかえりみず、氷河に逃げろと言っていた。

その時、雪野が階段を降りてこちらにやってきた。寝ぼけなまこで状況が全くわかっていないようだった。

この状況で自分にできることは雪野の手を引いて一目散に逃げることのみ。そのことは理解できた。しかし納得はできない。そうしたら、母親を見殺しにすることになる。それはできない。なんとかしなければ、と長男をみると、長男もこちらを見ていた。

何も言わずにこちらを見つめていた。だが、何が言いたいかわかった。

次はお前達もこうしてやる。

目がそう言っていた。

そしてその迫力に氷河は勝てず、雪野の手を引いて一目散に逃げ出した。

それだけしか、できることは無かった。

氷河はそこから後のことを、無我夢中であつたためにあまりよく覚えてない。

記憶をたどれば、なんとか交番まで駆け入って、事情を説明したことはうっすら記憶に残っている。

その後、途中で事件のことを理解して泣き出した雪野をなだめたり、警察から事情聴取されたりしたと思う。

その日は警察に泊まり、長男はその日の内に逮捕された。

第26話 それでも、アルミは……

「……と、話は以上だ」

と言い、氷河は話を終えた。

「……そうか。そんなことが……業火」

「なんや？」

「……いや、なんか……この話どう思うかな、と」

「……まあ、ええ話ではないな」

「うん……それで不良。まだ重要なことを言っていないぞ？」

「なんだ？」

「その事件とどういう関わりがあって、お前は不良共の駆逐を望むんだ？」

「それは……わからないのか？」

「ああ。全く」

「……普通は許せないだろ？ 兄貴にあんな事させて……親を殺させた不良グループが」

「……つまり、お前は、お前の兄貴がそういうことをしたのは不良グループのせいだと言いたいんだな？」

「……そうだ」

「その不良グループはなんていう名前だ？」

「わからん。兄貴は全くしゃべらなかった」

「だから、手当たり次第か……」

「そのほうがむしろいいと思うぞ？」

「……正義の観点から？」

「そうだ」

「…………」

「……なあ、一つ、聞いてええか？」

「ん？ なんだ？ えっと……」

「そういえばこっちは名乗ってないな。俺は浅倉慎也。アルミって

呼んでくれ。それでこっちが石動業火」

「そうか。で、なんだ、業火？」

「今はお前の家はどうやって暮らしてるんかなって」

「どうということだ？」

「つまり、親がおらんのやったら、誰が稼いでるんかなって……」

「業火。それはあんまり関係ない話だから……」

「生活保護が出てるんだ」

氷河はアルミの言葉を遮り、そう言った。

そして業火の様子が変わったのに気づかなかった。

「……そうか……まあ、そうやな……」

「それより、氷河。お前の話はわかった」

業火の口調が悲しげなもの、アルミの言葉はそれを取り繕うように発せられたことにも、氷河は気づかない

「そうか。……それで？」

「そうだな……俺の力が必要なら協力してやる」

「本当か!？」

アルミは頷いた。

「本当だ。……それで、何をすればいい？」

「どうということだ？」

「協力してやるけど、俺は何をしていいかわからない。指示を出せ」

「指示って……そりゃ、不良共を倒していくんだ」

「……まさかお前、無計画に手当たり次第にやれと？」

「喧嘩に計画がいるか? ……じゃあ、今年中にここら一帯の不良

を全員倒す」

「それは計画じゃない。目標だ」

「……じゃあ、何が計画なんだ？」

「…………お前は愚か者だ」

「何？」

氷河の言葉には怒気が含まれていたが、アルミは全く気にしない。怒ってどうにかする奴ではあるまい。

「考え無しに動いたら時間も手間もかかる。もっと体系的に進めないと」

「……どんなふうなんだ？」

「例えば、不良グループの勢力地図をじっと見つめて、立地的に他のグループに囲まれているものを見つけてそれを叩く。すると周りのグループが集まって勝手にやり合ってくれる。こちらは、ほとんど労力を使わずに、な」

「……なるほど」

「……………」

御しやすい奴だとアルミは思ったが、それは口に出さない。

「まあ深く考える必要もあるまい。相手も素人だからなんとかなるものだ。ただ、動くときは全員でするのが原則だ。……そういうことを踏まえてどう動くか考えろ。今日一晩かけて、な。明日もここに来られるか？」

「ああ。できる」

「じゃ、そういうことで。行くぞ、業火」

アルミはそう言って業火の手を引き、行ってしまった。

「……アルミ、か……どうやら、とんでもないやつらしいな……」
取り残された氷河はそうつぶやき、やはり帰路についた。

第27話 考え事

妙な話だと思う。

不良グループに参加してただけで残虐行為に走るというのは有り得ない。

不良というのは、社会や現実に適応も反抗もできない弱い者が集まり、無意味な弱いものいじめをする存在に過ぎない。

その弱いものに親が含まれているかどうかは判断しがたいが、どちらにせよ意図的に殺すというのはない気がする。氷河の兄の殺人の動機は、もっと別にあるだろう。

だが一方で、不良共ののさばり様も目に余る。

確かにこの地域一帯に不良は多く、それに乗じて各種の犯罪も多い。あるいは犯罪が多いから不良ものさばれるのかもしれないが、要するに治安が悪いのだ。

だから子供達に楽しい話題をと、町内会長はツチノコ騒ぎを起こした。

この地域で、子供達は笑えない。安全は無い。

別に他人の子供達にくれてやる配慮など無いし、そのために骨を折るのは馬鹿げている。

しかし世の中にいるのは他人だけではない。その人達のためなら命だって捧げよう。

そして、氷河に協力する理由はもう一つ。

決して長くはない自分の人生で、少しぐらい大それた事もしてみたい。もちろん、これがいかほどの事かはよくわからないが。

アルミはそう思い、決意を新たにした。

そしてその頃業火は……

「……ただいま」

「あ、お兄ちゃんお帰り」

帰宅すると聖火が出迎えてくれた。他に人の気配は無い。

「……圭介は？」

「ん……お父さんは今日も仕事で遅いつて」

「そうか……」

「晩ご飯、すぐに作れるけど、どうする？ お腹すいてる？」

「別に……好きにして」

「うん。……ねえお兄ちゃん」

「なんや？」

「なんか思いつめてない？」

「……なあ」

「何？」

「お母さんは……元気やろか？」

「……んつと……お兄ちゃん」

「？」

「今は、おかあさんのことあんまり考えたくないな」

「……そっか……ごめん」

夕食の時間まで、業火は自分の部屋に籠もることにした。

しばらくひとりでいたい気分だ。

それにしてもアルミはどうしてあんな不良に協力するなんて言ったのだろうか？

まったくわからないわけでもなかった。アルミは大変な仲間想いだ。他の人達には冷たく振る舞っているが、自分の身内……大好きな姉や幼い弟、そして何より唯一の友である自分、そう言った限られた人達に、アルミは尋常でなく優しい。そういう人をこの治安の悪い町から守るためだったら、それくらのことはするだろう。

それとも、まさか俺のため？ つまらない話を思い出し、勝手に傷ついていた俺をあの場合から離れさせるための、その場しのぎの方便だった？

いや、方便では無いだろう。アルミがそういう手を使うとは思えない。アルミが不良退治をするのは間違いないだろう。……もしかしたら、自分のせいで。

だとしたら、自分は何をすればいい？

「……って、俺は何を悩んでるんやろな。 つまらない、答えのわからなかった事で、な」

そう。自分ができることは限られているじゃないか。

アルミに協力し、必死で守る事。それしか出来ないし、それ以外の事をするつもりもない。

業火はそう決意した。

第28話 子守とか

翌日の放課後、学校の門の脇に氷河が立っていた。

「何をするのか、決めたのか？」

アルミの問いに氷河は頷く。

「ここの近くでたむろしているグループだ」

「ふうん……まあ、身近な所から攻めるのはいいと思うぞ」

「そうか……じゃあ行こう」

「ちよつと待て……やらないといけない事があるから、一旦解散して、また集まらないか？」

「ん？ 別に構わないが……何があるんだ？」

「弟の迎え」

「……………ふうん」

二歳の弟、ルカを幼稚園から連れて帰るのはアルミの仕事であり、日課だ。それはもちろん、これから荒事をしようという日も変わらない。

そんなわけでアルミはルカの手を引き、家路についた。

唯はまだ帰っていなかった。つまり、いまアルミが外に出たら、ルカ一人を家に残す事になる。これはちよつと危険だ。思慮分別の無い子供に一人でお留守番だと？有り得ない。万が一の事があったらどうするんだ？

なら、唯が帰ってくるまで待つか？ いつ帰ってくるかもわからないのに？

「なら……………」

アルミは二階に続く階段を見つめた。

二階のある一室。そこにはアルミの実の母親が引きこもっている。母親はこの部屋から出ることはほとんど無い。食事も、中で食べ

る。部屋の中でじっと座って、音量をゼロにしたテレビを一日中眺めるのが日課だ。

その母親にルカを預けるのは……だめだ。そもそも育児放棄を宣言して自分達にルカの子育てを押し付けたのはこの母親じゃないか。「……仕方ないな……」

アルミはルカを食卓の椅子の上に置き、台所に向かった。

「料理なんてしてる暇無いか……んっと、ようかんは……喉に詰まる。じゃあ……なかなか無いな……あ、あった」

アルミはラムネ菓子を見つけ、食器棚から適当な皿を取り出し、そこにラムネ菓子を盛り付けた。

「ほら」

皿をルカの前に置く。

「ルカ、俺はこれから出かけないといけないから留守番をしろ。いや、むしろ何もするな。俺かお姉ちゃんが帰ってくるまでこの椅子から降りるな。……もちろんテーブルに登るな。腹がへったらこのラムネは食べていいから。わかったな？」

ルカはこくこくと頷いた。

「うん。いい子だ……行ってくる」

アルミはルカの頭を撫で、すぐに外に出た。

「さて、暴れてくるかな？」

業火達と合流すべく、学校へと戻った。

「遅いぞ」

業火と氷河はすでに来ていた。帰って荷物を置いて戻ってくるだけだから、そんなに時間のかかる理屈は無い。

「まあええやんか」

「……それもそうだが……」

アルミはふと思った。この二人が二人きりだった時間はどれくらいだったのだろうか？どれくらい親交を深めたのだろうか？

「(って、何考えてるんだ、馬鹿馬鹿しい)」

たとえ業火と、今まで友達がお互いしかなかったからといって、別の友達を作ってはいけないわけではない。

だから、嫉妬するなんて馬鹿げている。

アルミはかぶりを振り、二人を見据えた。

「さて、じゃあ案内してくれ。不良の所へ」

第29話 地理の勉強（浅葱市編）

浅葱市は巨大な貿易港を中心に発展した町だ。

国内最大規模の港に世界中の物が集まっていて、それに伴い世界中の国の人間が集まっている。

市の地理について少し説明しよう。大きく、二つの地区に分けることができる。

南側は、港とその近隣に貿易商社のものをはじめとしたオフィスビル群がある都市部。いわゆるビジネス街がある。

北側には住宅街と人が住むことができるために必要な諸々の都市機能が揃っている。アルミが暮らしているのも、ここだ。

役所などの行政機関は都市部と居住区のちょうど境目あたりに集中していて、双方に行き届いた行政をしている。

港とビジネス街による利益で市の財政は潤っていて、住民の生活水準もおおむね高いほうだ。

総じて住みやすい、悪い要因など皆無の地域に思える。

ただ一つ、それを抑えて余りある、治安の悪さを除けば。

港には世界中のものが集まる。もちろんそのほとんどは正規の輸入品だ。

しかしその陰に隠れて違法な物も多く集まる。

例えば麻薬、希少動物の毛皮、中には銃器などの武器弾薬まで、この港にはある。

そしてそれらを売り買いする者、各種の犯罪組織がこの付近には無数に存在する。

ごく一部、それでも数多くあるが暴力団事務所などを除いて、それら犯罪組織は一般からは見えない所にある。

だから俗っぽい言い方をすると悪の組織。それがこの地には多くある。

もちろん闇の組織であるがゆえにその実態はほとんどわかっていない。そのために行政側としても手が出せないでいる。港に張り込み、巧妙に隠された違法品のごく一部を摘発するのがやつの状態だ。

ただし、やはり絶対数は多い。ごくたまに、悪事が表面化する事もある。ただしそれは好ましいことではない。

組織の構成員による犯罪だ。

それには組織としての活動に起因するものと個人的なものの両方があり、その種類も多岐にわたるが、それが一般の目に触れてしまうこともある。

そして組織は隠蔽工作を全力でするために、犯人が捕まることはめったに無い。

それゆえに、浅葱市の警察は、事情を知らない市民から無能扱いされている。

すると今度は、一般の犯罪が増えていく。その犯罪者達も、警察が無能だと思うと犯罪がしやすいらしい。

そういうわけでこの地域は犯罪が多く、治安が悪い。

「……と、いうわけだ。ま、俺にも詳しいことはわかんないんだけど」

「……………へえ……………」

不良達の所へ行きがてら、氷河が会話の途中で、ふとどうしてここはこうも治安が悪いかなと疑問を口にすると、アルミから前述のような回答が得られた。

氷河としては先の自分の言葉などただのぼやきのようなもので、返事など期待していなかったのでなおさら驚いた。

いや、それ以上に小学生がこんな事をすらすらと言ったことに驚いた。

一体、この小学生は何者だ？

「…………いや、そのことは後だ……………」

「？ 何が？」

「それは……」

氷河は立ち止まった。

「着いた。不良の所に」

第30話 引きつけ役

場所は小規模の住宅街。あまり所得の高くない人が住む地帯だ。人通りは少ない。

その一角、塀が袋小路を作っているその場所で、見るからに風体の悪そうな高校生が集まっていた。この場所は、かなり人目につきにくい。不良の溜まり場としては最適なのだろう。

アルミ達は少し離れた、互いに死角となる位置に陣取り、顔だけ出して不良達を観察する。もちろん相手には気付かれていない。

「何をしているんだろ？」

「え？」

「いや……だって……」

不良達を見る。輪になって立っている。真ん中に空間があるみたいだ。

「な？」

「確かに……何かしてるみたいやな」

「でも、何を？」

「さあ……ん？」

よく耳をそばだてると、不良の声に混じって子供のすすり泣く声が聞こえた。

「あ……うわ……」

よく見ると不良達の輪の中心に小さな子供がいて、どうやらすすり泣きはその子のものらしい。

男の子で、小学二年生ぐらいだろうか？ かわいそうに、這いつくばらされ、不良達に囲まれて足で小突かれている。

「あ……なるほど。いじめの最中か……」

「ひどいな……」

「……………」

ひどい、と言えばひどいだろう。確かに、あれが自分の身内の誰

かだったら、ものすごく嫌だ。

そういうことが無いように、やはり不良共は排除しなければ。

「さて、じゃあ、やろうか……」

「ああ。行こう」

「いや……あまりはやるなよ……落ち着け」

「む……何だよ？　ここまで来てまだ何かあるのか？」

「うん。少しでも有利に戦えるように……これを」

「？」

アルミが取り出した物は、氷河にはよくわからない物だった。ヘビのような形をした、しかし胴が扁平の……

「……この前のツチノコロボット？」

業火が代わりにその名称を口にする。

「町内会長のやつ、か？」

「そう。使ってみると、結構役に立つみたいなんだ」

「なんで？」

と、氷河が尋ねる。

「ん……凶」

「???」

業火と氷河は共に疑問符を浮かべた。

「……要するに、陽動に使うんだよ。敵の数は……6人。少しでも分散させたほうがいい」

と言いつつ、アルミはツチノコロボットを不良達の所に投げた。

第31話 死者に幸あれ

コッ

ツチノコロボットは落ちて、無機的な音を立てた。不良達がそれに気づき、一様に変な顔をする。不良達にとっても、ツチノコはやはり妙な物だ。

ジー

アルミはツチノコロボットを操作し、自分の所、不良達の死角に戻らせた。

「何だ……？」

不良達が不思議がっている声が聞こえる。そして一人分の足音。不良達のうち一人がアルミ達のほうに向かっているようだ。

「……………」

「おい。こっち来てるぞ」

「静かに……息を潜めてろ」

足音が近づいている。

「……………」

アルミはナイフを左手に持ち、右手は開いて手のひらを頭の位置まで上げた。

足音が近づいている。もうすぐアルミのところまで到達する。

「……………」

足音が止まった。不良が到達した。手を伸ばせば届く距離。一瞬後にはこちらを確認して何らかのアクションを起こすだろうその瞬間に、

「……死ね」

アルミは予備動作無しで右手を伸ばし不良の襟元を掴み、自分の所まで引きずり込み、地面に叩きつける動作の途中で、ナイフでその首を切った。

他の不良達には見えない位置での行為だ。

生暖かい血が吹き出る。しかし不良達には見えていないだろう。

そのかわり、アルミ達に盛大に降りかかった。

「うわっ！」

「ん……」

氷河は慌て、業火は冷静に血を避けた。

立ち位置の問題で血を浴びる心配のないアルミは2人を一瞥しつつ考えを巡らせた。

敵の数は残り五人。これ以上各個撃破するのは手間だしうまい方法も無い。

今度こそ、打って出るか……。

残りの不良達は未だに状況を理解していない。今が好機だろう。

「お前達はとりあえず見ている。俺が危ないようなら加勢してくれ」
業火と氷河にそう言ってアルミは死角から出た。不良達がそれに気付く。

「何だお前は？」

「……」

アルミは聞かれたことには答えず、不良達に向かって歩を進めていく。そして……

「……さて……お命頂戴つかまつる……」

ナイフで不良達に切りつけた。

アルミはまず一番近くにいた不良の首をナイフで一閃し、次にその動きを止めることなくもう一人の腹を捌いた。さらに二、三步進んで一人の足を払い転かしながら後頭部にナイフを刺す。すかさず抜いて別の不良の喉に突き立てた。

残り一人。今度はナイフを抜かず素手で立ち向かう。一瞬で相手の懐に迫り、首を掴んだ。

首の折れる音がして、不良は動かなくなった。

「……………」

氷河はその恐ろしい光景を直視し、そして激しく後悔した。

時間にして、合計で一分にも満たない出来事だった。不良達が抵抗する暇さえ無かった。

一分に満たない。その短い時間に六人も人間が目の前で死んだ。この少年は奴らを殺すつもりだった。そんなことはわかっていた。しかし、いざ目の当たりにすると、やはり後悔する。見なければ、目を背けていればよかった。

軟弱者。

アルミは氷河の表情を見て即座にそう思った。業火はあまり動じていないのに……。

アルミは今、血の海に立っていた。不良達の死体から血がどくどくと流れている。

死体の一つからナイフを引き抜く。血でべつとりと汚れていた。

今度はアルミもまともに血を浴びた。仕方あるまい。あの早技の最中に血飛沫の軌道を制御するなんて、簡単な事ではない。

ただ、幸いにも少年、不良達にいじめられていた少年には血をかくずに済んだ。そうでなきゃ、いろいろ面倒な事になる。

その少年は今、立ち上がって呆然とこちらを見つめている。目の前で起こった出来事が信じられないのだろう。

アルミは微笑を浮かべ、中腰になって少年と目線を合わせた。少し、言葉を交わす。少年はアルミの言葉に頷き、血だまりを避けて歩き、帰っていった。

「うん……次は……」

呆然としているのが、もう一人。

「氷河、ショックだったか？」

「……………」

氷河は答えない。

「ショックだろうな……だが、これが俺のやり方だ。これが最善の方法だ。お前も、同じ事をするのが、な。お前は正義という言葉を

使ったが、この行為に正義など無い。戦いに正義など存在しない。
……お前がしたいと望んでいた事はこうすることでしか実現しない。
さあどうする？それでも、己の意志を通すか？人を殺すか？……一
晩考えろ。じゃ、業火、帰るぞ」

アルミが行ってしまう。それに業火はついていく。
氷河は追いかける事ができなかった。

第32話 苛み

後悔は決して先に立たない。そんな事はわかっている。それに、何をしたら後悔することになるかも。当然だろう。あんな事して楽しいわけがあるまい。人を殺して楽しいわけがあるまい。

アルミは一人、足取り重く家路についていた。日はとつくに沈んでいるが、そう暗いわけではない。アルミの服にべったりと付いた血を隠せるほど、暗くはない。まだ季節は春だ。これからどんどん夜が短くなる。闇が遠くなる。

この血を、人を殺した証を隠してくれる闇が。

人を殺したのは、初めてではない。この前も、何人か爆死させたじゃないか。

殺すのは、簡単なことだ。殺している最中は、何も感じない。むしろ、僅かな快感さえ覚える。

しかし、その後は……

その頃、唯は少し怒っていた。弟、アルミに、だ。

アルミがルカを一人、家に置いてけぼりにしたこと、だ。

もちろん、アルミにも事情はあったのだろう。でも、二歳の子供に一人で留守番させていい理由にはならない。

帰ってきたら、どうしようか？ 事情を聞いて、納得できるものならよし。

そこまで考えていたところで、鍵を開ける音を聞いた。弟のお帰りだ。

アルミの姿を見る。

血まみれ。アルミの血ではないようだが、大した事情があったのは確からしい。

唯は優しい笑みを浮かべ、言った。

「シャワー浴びてきなさい。服は、洗濯機じゃなくて、洗面台に入
れてね」

アルミは無言で頷いた。

「……」

業火は自室のベッドに横になり、思案にふけていた。

自分はそんなに気にしているのだろうか？ 目の前で、人が死んだ事を。

自分では、気にしていないつもりでいた。しかし、そうではないらしい。

さっき聖火に指摘された。様子がおかしいと。

何ともないと言っておいたが、聖火は兄の気持ちなどお見通しのようだった。

——そんなに、アルミの事が大事？

聖火が重ねるように問うた言葉が耳に残る。

「そうや……大事……や……」

それでも、業火は断言できる。

聖火には悪いが、何があっても、自分はアルミについていく。

シャワーから出る湯が体にかかった血を洗い流していく。同時に、湯気と共に血の、鉄の匂いがふわりと立ちこめる。

アルミの体の表面から流れ出る血は、始めは乾いた黒っぽい色から、熱と水分を得て鮮やかな赤に変わり、次いで水で薄まり綺麗な

桃色へと色彩を変化させつつ排水口へと流れて行った。

そしてついに血はすべて流れた。しかしかすかな鉄の匂いは消えない。

血の匂い。それは、アルミにとって常に、どうしようもないほどの後悔を引き起こす。

殺しなんて、しなければよかった。

殺す必要なんて、無かったかもしれない。

……どうして、殺したんだろう？

後悔は、いつしか疑問に変わり、そして恐怖になる。

……俺も、いつかあんな風に死ぬのかな……

「ぐっ……………」

アルミは浴室の壁に力無くもたれかかった。

「なんで……………なんで……………」

実際には、アルミの後悔も恐怖も、根拠の無い、勝手な妄想と言ってもいい物だった。

それでも、アルミを責め苛むには十分だった。

アルミはそのままずるずると、壁づたいに姿勢を低くし、座り込んでそのまま動かなくなった。

第33話 悩み、苦しみ

氷河は惑っていた。

俺は本当に、アルミについていいのだろうか？

あの、本物の人殺しに。

確かに、アルミは不良達を排除してくれた。それは氷河の望んだことだ。

しかし本当に殺すとは。

確かにアルミは殺すというような事を言っていた。自分が甘かった。そう言われればそれまでだろう。でも……。

これでは、俺の兄と、不良どもと、やっている事は何も変わらないじゃないか。

それとも。それともアルミはこう言いたいのか？ 氷河のしょうとしていた事も同じだと。

暴力を使うならば、何も変わらないと。

本当に俺は甘いのだろうか。今まで、自分のしょうとしていた事は正しいと、正義があると思っていた。

しかし、アルミはそれをも真っ向から否定した。

「俺は……どうすればいい？」

答えは出ない。

「……………」

いつの間にか寝てしまったらしい。湯気にのぼせてしまったのだろうか？

アルミは周りを見渡した。見慣れた、我が家の浴室。シャワーのノズルから水が出しっぱなしだった。水を止める。

「……………」
ふと、もしかして俺は泣いていたかも、という考えが頭をよぎった。

よぎっただけですぐに否定した。

ばかな。俺が泣いた？ 何に対して？ 死んでいった奴等にか？

あり得ない。

俺が涙を流すなど。

「……………」

泣けなくなったのは、涙を流せなくなったのはいつからだろうか？

「……………」

アルミはかぶりを振った。

別に泣きたいわけじゃない。泣くのは、泣いている自分に陶醉するということだ。そんなのはまっぴらだ。

「……………」

なら、泣けない、無感動な血も涙も無い人間でいるか？

それはもつと嫌だった。

「……………」

外に、人の気配がした。

血染めの服は無造作に洗面台に入れてある。さすがに、これをこのまま洗濯機に入れるのははばかれる。

唯は洗面台に栓をして、水を出す。服から水に血が染み出る。手で揉むと水はすぐに桃色になった。水を入れ替えて同じ事を数回繰り返す。

血の量は目に見えて減っていた。

実は、こういう事するのは初めてではない。もっとも、初めての時も何があったというものでもないが。

アルミが、殺人をして帰ってきたのは初めてなんかじゃない。

「ん……これぐらいでいいかな、うん」

唯はひとりごちて洗濯機にアルミの服を入れる。次にアルミのいる浴室に目を向け、そして気付いた。

この空間と浴室を仕切る戸の脇に棚がある。使っていないバスタオルなどを置いておくための物だが、今その上にナイフが置いてあった。

血がべったりと付いている。

「まったく……」

唯は浴室の中の弟に声を掛ける。

「アルミ、ナイフは自分で洗うのよ………それと、着替え置いておくから」

声に非難の色は無い。思いやりに満ちた、優しい声。

伝えるべき事を伝え、唯は踵を返そうとした。

返そうとして、できなかった。浴室の中から呼び止められた。

「お姉ちゃん……もう少しそこにいて……」

「……うん。いいよ」

断る理由は無かった。むしろ、嬉しかった。

第34話 姉弟だから

「ねえ……お姉ちゃん」

アルミの声が浴室から聞こえる。

「俺って……人殺しなのかな？」

「えっと……」

この質問に対する答えは「イエス」しかない。それは明らかな事だ。

アルミが、こういう中身の無い、無意味な質問をするのはめったに無い。相当まいつているのだろう。どう答えようか？ 何があったか、詮索するのだけはやめておかないと。

「アルミ……ねえ、あなたは、誰か……今日殺した人達は、殺しても良かったと思ってるの？」

「うん」

即答。はっきりとした口調。

「それなら、別にいいじゃない。あなたが正しいと思うことなら、人殺しでも。……それに、今に始まった事でも無いしね」

「……そうだね……誰かを殺したのは何回かあったけど……そのたびにお姉ちゃんに迷惑かけて……」

「かけてないよ。かけてたとしても、もう慣れたし」

「うん……ありがと……でもね」

ガラ

アルミが浴室と脱衣場を隔てる戸を開け、唯と向き合った。

唯はアルミの裸体に少し見とれる。三歳分の年齢差はさすがに埋められず、アルミの背は唯よりいくらか小さいが、それでも完璧に近いプロポーションだ。

まあ、スタイルが良いのは唯自身にも言えた事だが。

(て……そうじゃなかった)

唯は慌てて我に返った。アルミが怪訝な顔をしているが、弟の裸に見とれていたとは言えない。

「それで、言いたい事は？」

「うん……それが………」

「ん……」

アルミが唯に抱きついた。唯の胸に顔をうずめる。

（本当に……甘えん坊なんだから……）

アルミの体は濡れていて、すぐに湯冷めしてしまいそうだ。唯は手を伸ばして棚からタオルを取って、抱きつかれた体勢そのままに、アルミの体を拭いた。

「……お姉ちゃん……俺……」

アルミがか細い、泣きそうな声で言った。

「俺……これから……明日、もっとひどい事をしようとしてる……最悪な、ひどい……もっとひどい事を……」

「……でも、あなたはそれを正しいと思ってるのでしょうか？ 必要だと思っているのでしょうか？」

唯はそう言って、アルミを体から放した。アルミはうつむいているが、しっかりと頷いた。

「だったら、あなたのしたいようにしなさい。あなたは、何でも思いのままにするべき。そういう人なんだから」

「……………」

アルミは上を向き、唯をしっかりと見た。

その双眸には、深い決意の色。もはや弱さは消えている。

「良かった。いつものアルミに戻って」

唯は心からそう言った。

「うん。ごめん、心配かけうわっ！」

唯が突然タオルでアルミの頭を拭きだしたため、アルミは変な風に叫んでしまった。

「こらアルミ、あなたは謝らなくていいの。私を誰だと思ってるの。浅倉慎也の姉よ？」

「うう……そうだね……」

「わかればよろしい。……アルミ」

「何？」

「……ううん。何でもない」

唯は何か言いかけて、やめた。

「いいの。大したことじゃないし。それよりアルミ、晩御飯もう出来てるから、早く服着て食べるのよ。じゃ」

唯は今度こそ、居間に戻っていった。

「……………」

アルミは血まみれのナイフを手を取った。

「そうだな……やるしかない、か……」

そのつぶやきは、どこか楽しげですらあった。

第35話..妹その二

翌日。高校生五人が何者かに殺害されたという事件は大きな騒ぎになり、新聞やテレビでも報道された。

目撃者はいない。警察は、死体の傷があまりにも鮮やかな切り傷であったために、犯人は相当の手練れと見ているようだ。

誰も、小学生のやったこととは思えない。

「……………」

氷河は朝食の席でテレビの報道を食い入るように見ていた。自分で作ったあまりうまくもない飯を食べるよりかは、自分に関わりのある凶悪犯罪のニュースを見ているほうがずっと楽しかった。

「……随分と、ひどい事件のようですね」

「む……おはよう」

「おはようございます、お兄様」

妹、雪野が起きてきて、食卓に付いた。

「……………」

氷河は雪野の顔をなんとなく眺めた。主観的な意見だが、氷河は自分の妹はかなりの美人だと思っている。実際、どこか粗野な印象を与える容姿の氷河とは対照的に、雪野はどこまでもかわいらしい。

「？　　どうかありませんでしたか、お兄様？」

兄に見つめられている事に気付いた雪野がこちらを見返してきた。透き通るような青い瞳と目が合う。

そう。瞳だ。雪野の瞳は青い。冬木の家系のどこに碧眼の遺伝子が入ったのかは不明だが、事実として雪野は美しい青い瞳を持っている、それが雪野の愛らしさに拍車を……

「あの……お兄様？　　何か……」

「うわあっ！！」

突然雪野につつかれて、氷河は声をあげてしまった。そういえば

雪野を見つめたまま凝固していた。

「なっ……なんでもないよ。ちよつと考え事だ」

「はい」

「……ひどい事件だな」

氷河は話題をそらせた。

「そのようですね……どのような方なのでしょう、このような事をなさるのは」

「さあな……」

さすがに知っているとは言えない。

「……もし、〈竜〉がおられましたら、このような事件は起きなかったでしょうに……」

「……〈竜〉か……」

こういうのもなんだが、雪野の言動には随分とおかしなところがあると思う。口調が馬鹿丁寧なのもそうだが、何より時たま言うへ〈竜〉についての言葉は氷河には全く不可解だ。

どうやら、全知全能、完璧な人物のようなものらしいが。

おかしくなったのは、やはりあの頃。兄が両親を惨殺してからだ。あの直後から、雪野はおかしなことを言い始めた。兄と、その不良グループのせい……。

そして氷河の思考は自然とアルミの事へと向かう。氷河はまだまだ、あの少年についていくべきか悩んでいる。

「……なあ、雪野」

「はい？」

「この死んだ奴らが……兄ちゃんと同じような奴らだとしても、ひどいと思うか？」

「私は……救える命なら、救うべきだと思います」

「……つまり？」

「死ぬべきではなかったのなら死ぬべきではないでしょう？」

雪野の言いたい事はだいたいわかった。

「そうだな……やっぱ、その通りだ……」

氷河は決心した。

第36話：甘やかす事の有用性

その一日はあっという間に過ぎてしまった。

氷河が再び現れた場合、アルミが何かをするのは確実だ。それも、残酷な事を。

そのことが、業火にとっては気が気ではなかった。

業火の出席番号は二番。アルミは一番だし、まだ年度が始まってから日は浅く、席替えは行われていないため、業火の席はアルミの真後ろにある。そのため後ろ姿とはいえ常時アルミを観察出来る位置にいる。

今日一日中、ずっとアルミを見ていた。普段と全く変わらない。

授業はほとんど聞かず、夜通しネットゲームしていたために寝不足で居眠りしているか、家から持ってきた難しそうな本を読んでいるかだ。窓際の一番前の席で、堂々と。たまに担任の後藤先生から注意を受けるが聞く耳無し。最近は注意自体が減ってきた。

そんな、いつもと変わらないアルミだ。

「……………」

しかしアルミも心の中は、これから氷河にするであろう「何か」に対して平穏ではないのかもしれない。

否。業火はその考えを即座に打ち消した。残酷な人間は、何をするのにも平気だから残酷なのだ。少なくとも、アルミに関してはそう
だ。

アルミは、他人の抱いている信念、希望、願い、そういったものを表情一つ変えることなく壊す。そういう意味で残酷な人間だった。
「……………」

今日の最後の授業の終わりを告げるチャイムが聞こえた。学級委員長「起立」という号令に合わせて教室の生徒全員が立ち上がる。業火の目の前で、アルミも読みかけの本を閉じ、それに倣った。「礼」の号令で先生に頭を下げ、各々着席した。アルミもすぐに読者

に戻る。

先生が職員室に帰っていく。終礼をしに戻ってくるまでもう少しかかりそうだ。

「……、そんなに、氷河の事が心配か？」

「……………」

アルミが本を閉じ、こちらを見つめた。

「業火、お前は……氷河のを、どう思っている？」

「どうって……」

「つまりお前は、氷河の境遇に親近感を持つか、それとも憎むか？」

「それは……」

業火は答えに詰まった。氷河と自分の境遇を鑑みて、親近感と憎しみ、どちらも抱くことのできる要素があった。

「ま、それは今はどうでもいい」

アルミはあっさりと質問を撤回した。

「お前が奴に肩入れしたくなる気持ちはわかるよ。心配なんだろう？」
業火は頷いた。

「だな……ところで業火。俺は、ふとこう思った。優しさと、甘さは別物だと」

「それは……そうやな」

「そして、こうも思った。優しさという建前の下で厳しくするよりは、甘やかした方がうまくいくっていうことはいくらでもあるんだ」
「……」

「それをどうするか、人と接する難しさだ」

「アルミは……どうするんや？」

「俺は……接するべき人を選ぶ」

「どんな人？」

「理想は、どちらでも上手くいく人。お前や、俺のように」

「……………氷河は？」

「さあな。どれなんだろうな……少なくとも、何もかもから逃げ出しはしなかったようだが」

アルミが窓の外を見た。業火もそれに倣う。
校門に、夕日に照らされた氷河が立っていた。

第37話 覚悟試し

「さあ。お前の話を聞こう」

その日も無事に終礼が終わり、アルミと業火はランドセルを背に校門で氷河に話しかけた。

「氷河、お前の考えを聞かせろ」

「ああ……………お前のやっていることは正しい……………というか仕方ないとは思う。でも……………」

「待った」

「……………何だ」

「あまり長い話を聞く気分じゃない。端的に、お前は、人を殺す覚悟があるか？」

「……………」

氷河はゆっくりと頷いた。

「そうか。ならいい。他の事は後で聞く。……………ついてこい」
アルミはそう言って歩きだした。

三人が行き着いた場所は学校から少し離れた公園。普段は放課後を楽しむ児童でいっぱい場所だが、今日に限っては誰もいない。
「昨日あんな事件があったわけだからな。各家庭の保護者としてはしばらく子供を外で遊ばせることはないだろう。そのうち、通学路に保護者会の人警備で立つことになるだろうな。ま、ここは通学路からある程度離れた場所だから、今日は人通りはまったく期待できないうだろう」

「……………それで？」

「この公園に、それでも来ている奴がいる」

「誰……………や？」

「それは……………おい、出てこい」

アルミが誰かに呼びかけると、物陰から人が出てきた。

小学校二年生ぐらい。アルミが昨日助けた男の子だ。

「昨日、ここに来るようにと言っておいたんだ」

アルミは笑みを浮かべながら説明した。

その男の子はアルミに笑顔で寄り添ってきた。アルミも姿勢を低くして、男の子の頭を撫でる。

「良いもの……かもな。誰かに感謝されるのも。たまにはな……」

アルミは男の子といくつか言葉を交わし、何かカードのような物を渡して氷河達に目を向けた。

「さて、氷河。お前の覚悟を試したい」

「どうするんだ？」

「この子を殺すんだ」

アルミは笑顔のままさりとら言った。

氷河には、一瞬時間が止まったように感じた。アルミの言った言葉を、頭が理解するのを拒んだ。理解しなくなかった。聞き間違い……そうだ。聞き間違いに違いない。

「なあ……今、なんて言ったんだ？」

「ん？ お前にこの町の平和を守る覚悟があるなら、この場でこの子供を殺せ、と」

アルミは笑顔を崩さず言った。

ああ……この小学生は本気なんだ。本気で俺に人を殺せと。なんの罪も無い、いたいけな子供を殺せと言っているんだ。笑顔で、笑いながら言ってるんだ。

氷河は当惑した。どうすればいいか、次にどう動けばいいかがまったくわからなかった。

「なんで……そんな事を……」

そう言うので精一杯だった。

「なぜってそれは、お前の覚悟を試すためだ。……これだけひどい

事が出来るなら、いざというとき何でも出来るだろう？」

「そんな……事で……」

氷河の戸惑いはすぐに怒りへと変わった。

「お前は……お前はっ！」

氷河はアルミに掴みかかろうとして、次の瞬間に自分が地面に仰向けに横たわっているのに気付いた。直後、後頭部に激しい痛みを感じた。

「力任せに戦おうとするな。考えなしに動くから、すぐに体勢を崩される」

アルミが傍らで氷河を見下ろしている。

「てめえ……」

氷河は起きあがろうとして、見た。

男の子がアルミと氷河の間に立ち、氷河を睨みつけている。まるで、アルミをかばうかのように。

なぜ？ 少し考えればわかる事だ。この男の子は状況をあまり理解していない。アルミの今言っている事がわかっていない。アルミをただ、昨日助けてくれた英雄、あるいは正義の味方とも思っているのだろう。そして自分は？ 英雄に掴みかかろうとした悪だ。風体も、昨日の不良達と大して変わらない。

氷河は戦慄を覚えた。アルミは明らかに、この事を見越している。わかってやっているのだ。

アルミがまた、男の子に何か話した。そして……あろうことか、男の子にナイフを手渡した。男の子は氷河を睨んだままナイフを構えた。

「……この子に、もっと強くなれて言ったんだ」

アルミは、今度は氷河に言う。

「氷河、お前をナイフで殺すよう指示した。……子供だからな。手加減なんてできないだろう。なんとかしないと、お前は確実に死ぬぞ？」

「な……」

男の子の耳にはアルミの声が入っていないようだ。今から自分のすることに注意が集中しているのだろう。

「さあ、どうする不良さん？」

「く……………」

氷河はとりあえず起きあがろうとした。

「お前は……最低な奴だ……」

「知ってる。わかっているさ……さあ、やれ！ 殺せ！」

アルミのその言葉が、氷河と男の子、どちらに向けたものなのかはわからない。しかし男の子はその言葉に反応し、ナイフを前に構えて氷河へ突進してきた。

刹那、氷河の脳裏に雪野の顔が浮かんた。愛しき妹。唯一の肉親。ここで自分が死ねば、雪野を一人ぼっちにしてしまう。さりとて、雪野は自分が人殺しになる事を歓迎しないだろう。だが……。今は考えている場合ではない。

氷河が反射的に繰り出したキックが、男の子の頭に直撃した。

「……………」

アルミは無言で、男の子の手から弾け飛んだナイフとカードを拾った。蒼空のドラゴンナイツチョコ。アニメのイラストが描かれたカードがついてくる食玩だ。描いてあるのは主人公、ラギ・キリシア。子供に渡せば大方、夢中になってくれる。この男の子が夢中になっていたあいだなら、氷河も苦勞なしに殺せただろうに。まあ、仕方がないが。

氷河は声にならない叫びをあげつつ、暴行を続けている。そういえば殴り、蹴り殺せとは一言も言っていない。聞かれもしなかった。他に殺す手段もないから当然と言えばそうなのだが。

「無意識に動いてるのかな……だとしたら、筋がいいのかも……」
アルミはそう言いつつ、今まで事の成り行きをじっと見つめていた業火の隣に並んだ。

一瞬、男の子が助けを求めてこちらを見てきたが、無視した。

「目を逸らすなよ……」

傍らの業火に言う。

「俺達もしてきた事なんだから……」

業火は黙って頷いた。

「歓迎しよう。新しき我が友、冬木氷河」

アルミは、泣きながら暴行を続ける氷河にそう囁いた。

第37話 覚悟試し（後書き）

えっと……アルミ残酷だ、ひどいと思った方。すいません。

どうも、そららです。アルミにちよつとひどいことさせました。今回アルミは、自分のした殺人で勝手に落ち込んだり、でもそれを平気で人にやらせたりと、なかなか自己矛盾に満ちた行動をとっています。しかしこの矛盾も、アルミの中では説明のつくことでもあります。

問題となるのはアルミの内面。それがなんであるのかは、いつか明らかにするつもりです。

さて、これで「氷河編」は終わりです。次は、アルミが学校につき物の行事に参加します。

幕間・イベントの前日に

砂漠地帯を二匹の竜が駆け抜ける。

一匹は頭に一本の角を生やした真紅の竜。もう一匹はそれより一回り小さい緑色。

緑色の竜の背に座っている人間、すなわち竜騎士が口を開く。若い男の声だ。

『ミッション開始から五分経過……このミッション、待ってるのは暇だな、あるみんな隊長？』

その言葉はすぐに真紅の竜の竜騎士、あるみんなと呼ばれた者に伝わる。

「竜牙……そういうことは言わないものだぞ」

声自体は幼さを残しているが、口調は感情を排した、淡々としている。浅倉慎也、通称アルミその人の声だった。

『だな……』

緑色の竜の竜騎士、竜牙がそう答えた直後

『p a c k e rから第二部隊へ。増援部隊が接近中です』

二人とは違う、別の声が聞こえてきた。アルミと同世代ぐらいの子供の声で、女の子のものだった。

「了解。敵の規模は？」

アルミの声に、p a c k e rと呼ばれた声が応答する。『リザード・モアが四体、コーンエンジェルが九体、クリムゾンスカイゴートが一体です』

「厄介なのは赤山羊だけだな……」

『すぐにこちらの射程に入ります』

「わかった。いつも通り、俺が前で竜牙が後ろ。p a c k e rも地上部隊の狙撃」

『了解』

『了解です』

「攻撃開始！」

アルミはそう宣言し、前方を注視した。

遠くに、竜の群れがかすかに見える。向こうはこちらに気付いていない。

「くらえ！」

アルミの乗る真紅の竜、クリムゾン・クーリエという種の竜が口から火の玉を吐き出した。同時にアルミは、竜の背の上で銃を構えた。

アサルトライフル。フルオートで銃弾を射出できる、いわゆる突撃銃だ。アルミはそれを構え、撃たなかった。

敵との距離はまだある。無制限に撃てる火の玉とは違い、弾数に制限のある銃を当てにくい距離で撃つのは得策ではない。

敵方はこちらの存在に気付いていなかった。この攻撃で確実に気付かれるが、このまま接近を続けても意味はない。これが最善の策だった。

火の玉は制御が難しい。狙って撃っても敵に当たるのは稀だ。主に牽制目的に使う。

「接近中……間もなく、ライフルでの有効射程に入る……発射！」

敵との距離が十分縮まり、アルミはライフルを撃ち始めた。オートで三発だけ射出される、三点バーストで敵の竜——純白の体に、頭の一本の長い角と鳥のような羽を持った、天使のような風貌の竜、コーンエンジェル種——が次々と撃ち落とされていく。敵も同じくライフルで銃撃しているが、アルミは慣れた様子でそれを全てよけた。

「五、六、七……八……」

撃ち落とした数を数えて、そして

「九！」

最後の一体が騎上槍を構えアルミに肉迫してきた。ライフルで応戦出来ないほどの至近距離。アルミは装備を一瞬で同じ騎上槍に持ち替え、相手に突き刺す。刹那、槍が交錯し、互いの刃先の軌道が

逸れる。二体の竜はすれ違ったが、アルミは振り返ろうとはしなかった。すぐに次の敵を探す。

『撃破』

後ろに付いていた竜牙からの連絡。先程刃を交えた敵を落としたということだ。

下に目を向けると、地を走る竜、リザード・モアの最後の一体が狙撃され、地に伏したところだった。

「残り一体……」

『来たぞ！ 上！』

竜牙の声を聞き、アルミがクリムゾン・クーリエを急加速させたのと、上にいた竜がライフルを撃つのは同時だった。

「出たなボス！」

銃弾をなんとかよけたアルミは敵の竜——アルミの竜と同じく真紅の体で、ヤギの顔を持つ、クリムゾンスカイゴート種と向き合った。

『第一部隊より各位……敵の本隊を全滅させた』

『隊長おー、応援いる？』

竜牙でも packer でもない声が二人分聞こえてきた。一人は中年男性、もう一人は若い女性だ。第一部隊、敵の本体を攻撃させていた部隊だ。

「いや……知らない。もう終わる」

アルミは返事をして、ただ一体残った敵にライフルを向けた。その敵は今、竜牙と格闘戦をしていて、動きが鈍くなっている。

アルミはためらいなく引き金を引いた。

mission clear

パソコンの画面にそんな文字が表示される。続いて諸々の評価。ミッションにかかった時間、倒した敵の数、自軍被害、エトセトラ、エトセトラ……。いずれもかなりの高評価だ。

『総合評価は文句なしのA。相変わらずすばらしいな』

耳に付けたイヤホンから竜牙の声が聞こえてくる。ボイスチャット機能による直接会話。この機能のおかげで意思伝達がスムーズに進む。

「いや……まだまだ改善の余地はあると思うぞ？」

『……そういう所も相変わらずだな、隊長』

アルミの返答に、竜牙は苦笑混じりに言った。

蒼空のドラゴンナイトオンライン。ライトノベル原作のアニメ、蒼空のドラゴンナイトの世界観を再現したオンラインゲーム。プレイヤーはオンライン上での自分の分身にあたるPCプレイヤーキャラクターを作成し、いずれかのクランに属し、竜騎士として様々な戦いに参加する。プレイヤーの数は百万人を越えるという。

アルミもその一人で、あるみんなというハンドルネームで『テルミット隊』というクランのリーダーをしている。七人で構成されたこのクランは、少数精鋭をモットーとしていて、その実力は数あるクランのなかでもトップクラスとされる。竜牙やpackerも、テルミット隊の一員で、つまりはアルミのネット仲間だ。

「さて、次は何しようかな……」

『隊長……もう三時ですけど……いいんですか？』

これはpackerの声。

「ん……」

時計を見ると、確かに夜中の三時を回っている。いつもなら寝ている時間だ。『まあ、隊長が徹夜するのもそんなに珍しくもないですが……』

それもまた真実だ。

『そういうpackerも、いつも徹夜じゃないか』

『それはほら、わたし、引きこもりですから』

本名も顔も知らない戦友の会話を聞きながら、アルミは今日の学

校の事を考えた。

「うん。今日は徹夜するよ」

『そうか。……学校はいいのか?』

「寝不足で授業中に寝るのはいつもの事さ。それに、明日はちよつと事情が違うし」

『? 何かあるのか?』

「大した事じゃないよ」

『そうだな。次のミッションは何にする?』

「そうだな……」

こうして、夜はふけてゆく。

第38話 ZOO

遠足、あるいは校外学習。生徒が校舎から離れ、遠出して普段とは違った内容の学習をする。名目上はそんな行事。実際には、ただの遊びと化しているが、いまさらそれを疑問に思う人は少ない。

そして今、アルミの小学校生活最後の遠足が始まろうとしていた。北浅葱中央小学校の場合、各学年に春と秋の二回の遠足があるが、五年生は春に林間学校、六年生は秋に修学旅行があるために遠足はそれぞれ一回づつである。

つまり、六年生であるアルミにとってこの遠足は最後である。当然気合いの入りが違う。

「……………」

六月の、まだおとなしい太陽の陽気に誘われて、アルミは業火の肩にもたれかかり、寝息をたてていた。すれ違う人をことごとく振り返らせるような美少年の寝顔は、やはりこの上なく美しいが、業火にとってはそんなに嬉しいものでもない。

別に、アルミの枕になることは珍しい事でもない。男にもたれかかられるのも、そこまで嫌な事とも思っていない。問題なのは、今の状況だ。

「なあ……アルミ」

「んー何だ？」

「……………小学校最後の遠足の場所。それが目の前。……寝てる場合やないと思うけど……………」

「ん……そうかな……」

アルミは目を閉じたまま答えた。

「いや……そうやろ」

「……………なら、どうすればいいと」

「それは……」

それは業火にも答えようがない。

「まあ、業火、お前の気持ちも分からないことはない。今日は遠足だ。いつもとは違う、特別な日だ。もちろん、あの嫌な授業も無い。ならば、多かれ少なかれ気分は高揚してもいいはずだ、と」

「……そうやけど」

「うん。実は俺も、昨日ははりきっていた」

「？　そうは見えないけど？」

「だろうな……、昨日、とういか昨夜、俺ははりきって徹夜でネットをしてた」

「……………は？」

「？　ネットゲームだ。ほら……オンラインゲームって言ったほうがわかる？」

「いや。そんなことはどうでもいい。……なんで、ここでネットが出てくるんや？」

「……………はりきって……」

「だから……………遠足とネットは関係ないやろ？」

「要は徹夜で遊ぶことがポイントなんだ」

「何で？」

「徹夜したら当然、次の日眠いだろう？　たとえばそれが、遠足の日でも」

「当たり前や……………遠足で寝たらあかんやろ……」

「いや。逆だ。遠足の日に眠たくなるはずがない」

「……………」

「だから俺は、いつもみたいに授業中に寝ることは無いと安心して、ネットに専念できた……………はりきって、な」

「……………」

もはや何も言うまい。業火はそう思った。アルミはそもそも、授業中に寝ることに心配などしてないとも思ったが、黙っておくことにした。

「…………でも、結局は眠いんだよな。くそ。先生の話なんて聞きたくない。眠い……………」

と、言いつつアルミは目を開け、辺りを見回した。業火もそれに合わせ状況確認。

本日の遠足決行の地。その入り口前にアルミ達六年生が三角座りで列を作り、引率に來た教頭先生の話を聞いている。アルミはこの時間について考えていなかった。三角座りして教師の話を聞くなんて、退屈以外の何物でもない。案の定アルミは寝てしまったのだ。状況確認に戻る。列は四クラスがそれぞれ三列に並んでいるために計十二列ある。ただし、今この場にある列はそれよりも多い……。そこまで思いをめぐらせた後、業火はアルミが再び眠りに戻っているのに気付いた。

「アルミ……………」

「むー。だってー」

今度は駄々っ子みたいなことを言った。

「だってー、一度行った所に、しかも遠足でもう一度行くなんて……この上なくつまらないだろう？」

「それは……………」

それには業火も同意するしかなかった。

確かにアルミはこの場所に來たことがある。アルミだけではない。業火も、いや六年生のほぼ全員がこの場所に來たことがあった。

第39話 少し珍しいシステム

浅葱市立動物園。国内有数の規模を持つ動物園である。毎年、北浅葱中央小学校の六年生の遠足の場所はここである。そして一年生も。この春入学したばかりのちびっ子達も同じ日、同じ場所に遠足に来ている。

やはり毎年、一年生の春の遠足も、この動物園と決まっていて、一年生と六年生は一人ずつペアになって行動し、一緒に園内を見学する。

なぜこんな妙な方法で遠足を行うのか。その理由は複数ある。

まず表向きの理由として異なる学年間の交流。入学したばかりでこの学校のことをあまり知らない一年生諸君が学校の事を知り尽くした六年生諸君が交流することにより、学校に対する理解と愛校心を深めよう。というもの。

これはこれで良いことではある。アルミの感覚では、確かにこの学校においては学年間の交流などほとんど無いに等しい。

もつとも、人と関わる事を好まないアルミにとっては、自分のクラス内でもコミュニケーションがうまくいっていないのも、また事実だが。

とはいえ、新一年生に学校や上級生に慣れてもらうのは良いことに違いない。その取っ掛かりが上級生であることも良い。これが生徒対教師であったならば、お互いに話し合えることのできる事は、生徒対生徒の場合に比べて遥かに少ない。教師に話せない事など、いくらでもあるのだ。それが社会通念上好ましいか否かに関わらず。だから、アルミはこのシステムはよくできていると思っている。もちろん、裏の事情を知っての上だが。

裏の理由は表のものより、もう少しわかりやすい。単純に、先生の引率の問題だ。この広大な敷地を持つ動物園で、一学年分の生徒がほぼ自由に見学をする。教員の見回りの際、一学年分の教員の数

ではカバー出来ないほどの広さだ。

だが二学年分の教員だと出来ない事ではない。

一年生は常に六年生と行動しているわけだから、動いている生徒の数はまとまりでみると一学年で遠足をするのと変わらない。

このシステムで教員の引率はかなり楽になるのだ。

「なんにしても、俺たちは一年生の頃に一度この動物園に来ているんだ。そこにもう一度行くことに何の意味がある？」

「んーでもさ、同じところでもなんか違ってたり、さ……………」

「……………」

「…………まあ、つまらないかな…………」

業火はアルミの無言の圧力に耐えられず、同意した。

アルミは寄りかかっていた業火から体を離れた。ここにきてようやく覚醒したようだ。

前で話をしていた教頭先生はいつの間にか後藤先生にバトンタッチしていた。後藤先生はいつものように首からエレキギターをさげ、園内の注意事項を生徒達に話している。つまり、中で走らないとか、一般の客の迷惑になるな、とか。

「なあ、アルミ」

業火がヒソヒソ声でアルミに話しかける。

「先生はやっぱり遠足でもギター弾くのかな？」

「……………どうかな…………動物園でギター弾いたら迷惑だろうな。人にとっても、動物にとっても」

「そうか」

動物園でギターなどで大音響を発すると間違いなく怒られる。

いつの間にか後藤先生の話は終わっていた。そして今、別の教員が生徒ひとりひとりの名前を呼んでいた。一年生と六年生を一人ずつセットで。つまり、今日一緒に行動する一年生の発表だ。

四組の出席番号一番。浅倉慎也の名前が呼ばれたのを聞いて、ア

ルミは立ち上がった。
いよいよ、遠足の始まりだ。

第40話 変態再び

自分とペアになる一年生がいかなる者か。アルミ達は全く知らない。それは一年生にとっても同じだ。誰と組むことになるのかは当日発表で、それ以前に知ることはできない。知る必要もあまり無い。アルミはどう思っているのだろうか？ 業火は少し考え、すぐに答えを出した。当然、興味なし。今日、丸一日共に過ごす一年生が何者であろうとアルミは気にしないだろう。

今のアルミの関心はおそらく……

「おーい。業火、いくぞ？」

「ん？」

アルミが一年生と思われる子供二人を連れて、思考途中の業火に声をかけた。

「あ……うん。そうやな」

アルミと業火、そして一年生二人は揃って動物園に入ろうとした。

「……………ん？」

唐突に、アルミは後ろを振り返った。

「うんどうした、アルミ？」

「いや……なんか、誰かに見つめられてる気がして……」

「誰かって？」

「わからない……気のせいかな？ 疲れてるのかも。寝不足とか」

「実際、徹夜してたからな……」

「そうだな。なんでもないよ。行こう」

結論から言うと、アルミは正しかった。

アルミの後方十メートルほどで、その様子をじっと見つめる人物がいた。

「嘘……尾行に気付かれた……まさか、あんな子供に……」

高い、明らかに女性とわかる、しかしどこか幼さも残る声が発せられた。

「なるほど。子供ですが侮れません。しかし……浅倉慎也。今日一日監視して、はっきりと見極めさせてもらいますよ……あなたが、人殺しなのかどうかを……」

そう言って、声の主はその場を離れた。

そしてもう一人、不審な人物がいた。

こちらもちやまりアルミ達から少し離れた物陰から、アルミをピンポイントで、というよりは小学生の団体を見つめているようであった。

それは、明らかな不審者だった。一目で不審者とわかるような出で立ちだった。

全身を白で統一した服装、背中に大きな、やはり白のマント。さらに頭には顔全体を覆う純白のマスク。目と口の部分に穴があいている。そして額には黄金の三日月のマーク。

自称正義のヒーロー、ゲッコー仮面だ。

そのあまりにも目立っている服装にも関わらずゲッコー仮面の周りに人影は無い。というか誰もが関わり合いにならないように近付くのをためらっていた。平日の朝から変なコスプレしている人間に、誰も近付きたいとは思わない。例えば小さい子供達がいればテレビヒーローか何かと思って群がってくることもあろうが、やはり今日は平日。子供がいるとすれば学校や幼稚園をずる休みしたか遠足で訪れたかのいずれかの可能性が高い。ずる休みをしてまで動物園に行くような妙な子供は今日はいないようだし、遠足で来た子供達は目の前の動物園に気をとられていてこのヒーローにまったく気付いていない。

「ふはははは！ 今日はこの動物園の平和を守とするか！！」

当のゲッコー仮面はそれを全く意に介せず、一人ビシッとポーズ

を決め、園内に潜んでいるであろう悪を倒すため、揚々と入園チケット売り場へと向かった。

「大人一人でいくらだ」

「八百円になります」

「そうか」

ゲッコー仮面は財布から一万円札を取り出し、渡した。

「釣りはいらん」

そう言ってチケットを受け取り、動物園へ入っていった。

第41話 アルミは役目を果たしています

アルミ達と同行することになった一年生二人は、一方が男子でも一方が女子だった。この二人に特別な関係があるわけでもなく、アルミ達の担当になったのは、単に出席番号の都合のようだ。つまり一年生のどちらかが四組一番でもう一方が二番。それだけ。

だから、一年生二人にも思うところがあって、例えば自分達の友達と動物園を回ったとか考えているのかもしれないが、そんな事を聞き入れるアルミではない。むしろ、二人とも業火に押し付け、一人でふらふらとどこかに行かなかったただけでも僥倖だ。

「……………本当にやりかねんからな……………」

業火はそうなった際の対処法を本気で考えていたから、少し安堵している。

むしろ、アルミはよくやっていた。嫌いなはずの幼い子供達の引率をそつなくこなしていた。

一年生二人は今、ライオンの檻の前でアルミの話を熱心に聞いている。

そういえば、と業火は思い出した。昨日後藤先生が、できるだけ動物の解説を一年生にしてあげるようにと言っていた。そうすれば一年生は喜ぶと。いきなり解説なんて無理だと業火は思ったが、アルミはどうだったのだろうか？ 少し考え、やめた。アルミが先生の話など聞くはずではないか。

「……………ん？　だとするとアルミが今やってるのは……………ただ自分で思いついたってことか？」

これも考える意味はなさそうだ。結論は永遠に出ないだろう。しかし、アルミの解説はおもしろいのだろう。一年生はライオンを無視してアルミのほうを凝視している。これじゃあ動物園にいる意味がない。アルミは一年生に何か言った。姿勢を低くして、小さな子供に話しかける。業火はこの構図に見覚えがあった。今にして思う

と、その構図はあまり心地よいものではない。

それは、以前アルミが複数の不良から助けた少年と話をする情景と重なった。見かけの上ではそれら二つは何も変わらない。あの時、アルミの心中はどんなものだったのだろうか。

「……まあ……少しは楽しい、……かな……」

「ん？」

アルミはいつの間にか、業火に話し相手を変更していた。なぜか頬を少し赤くして、若干ツリ目で目線をそらしている。

「ま、まあ、そこまで楽しめたわけでもないけどね……業火がそれでいいなら……」

「……………」

これはわざとやってるのだろうか？今のアルミはまるでツン……

「ツン……ツンデレ？」

その言葉を口にするのに若干の間があったが、アルミはにかりと笑った。

「そうだね。ちょっとツンデレってみた」

『ツンデレる』という動詞の業火は初めて耳にしたが、深くは考えないことにした。

「そっか。楽しいか。よかったやん」

「うん。五年ぶりなんだからな。記憶と違ってる事が多くて、ちょっと驚いてる」

「実際変わってるのも大いだろうからな」

「だな。……動物園といえはさ……」

「なんや？」

「何年生だったかな……国語の教科書に、ライオンの話があったの、覚えてる？」

「……………あったような気はする……どんな話やった？」

「そうだな……」

アルミはその話を語り始めた。

第42話 黒豹の話

「……、ライオンと黒豹の檻が並んでいる動物園があったんだ。このライオンはサービス精神に満ちあふれていて、檻の前に子供が来るたびに格好良く吠えて喜ばせてきた。当然、ライオンは動物園の人気者だ。一方黒豹はマイペースで他に関心を持たない。子供が来ても全く興味を持たず、寝ているだけ。だから、誰も黒豹に注目することは無い。ライオンはこういうスタンスをあまり理解できなかった」

「それはつまり……」

業火もだんだん話を思い出してきた。

「ライオンの立場としては、せっかく来てくれた子供達になにもしてやらない黒豹はなんとも味気ない奴で、逆に黒豹からすると、非生産的なパフォーマンスをするライオンはよくわからない奴だった、てことか」

「そういうことだね」

「それで……えっと……」

「ライオンがある日、喉を痛めるんだ」

「そうやった。それで、吠えられなくなった。今日も子供達は吠えてくれるのを期待してくれてるのに、それができない」

「ライオンは困惑しただろうがどうしようもない。ついに子供達が檻の前までやってきたがライオンは沈黙するしかない。悔しい思いを噛みしめっていると……」

「黒豹が吠えた」

「そう。黒豹がライオンの代わりに吠えてくれた。子供というのは単純なもので、吠えてくれるのならライオンでも黒豹でも、どちらでもいいらしい。子供達は満足して帰っていった。業火、これがどういうことかわかるか？」

「？ ……黒豹は良い奴やった……ってことか？」

たしか授業ではそう教わったはずだ。

「いや……少し違うんだ、業火……いいか、この黒豹は………ツンデレだったんだ」

「……は？」

「黒豹はこの後こんな趣旨の発言をしている『かつ、勘違いするんじゃないぞ、別にやりたくてやったわけじゃないんだからな！お前が困ってるみたいだから仕方なくしたんだらな！ほっ、本当だぞ！明日からはまたお前がするんだからな！』と」

「……………」

あっているのは全体の趣旨だけだった。まさかアルミは、これを言いたかっただけなのではないだろうか。いやそうに違うない。

「つまりだ、学校の教科書にツンデレの見本が載っていたんだ。すごいことだとは思わないか！？」

「……………」

さすがに親友の事とて、どう返答すればよいのか迷った。業火はアルミとは違い二次元に特別を特別好きというわけではなく、したがってツンデレの話題を振られても答えようなどなかった。

「えっと……あ、子供達がライオンに飽きて戻ってきた」

「ん？」

気がつくともライオンに魅入っていた一年生がアルミのそばに戻っていた。

「……次は何を見ようかな……」

アルミのその言葉は、自分自身に向けたものようだったが、二人の一年生はそれぞれに自分の主張をした。

「そっか。じゃあ、行こうか」

アルミは一年生の希望を聞き入れ、歩き出した。

なんとなく。なんとなくだ。確信があるわけではない。業火には、目の前のアルミが、普段のアルミとは別人のように感じられた。かすかな違和感があった。

いや、違う。アルミはアルミだ。少なくとも、アルミ以外に教科書の話にツンデレを見いだすような人は業火の知る限り、いない。ならばこの違和感はなんだ？ 疑問はすぐに解決した。アルミの、見慣れない姿を目にしたからだ。あのアルミが幼い子供と親しそうにするなど、滅多にない。

「アルミも……少しだけ、変わったんやな………」

アルミ達の少し後方で業火はつぶやいた。おそらく誰にも聞かれないだろう。

アルミは変わった。微々たるものでも、確かな変化。目の前のアルミの様子がそれを物語っている。

では、なぜ変わった？

その理由ははっきりしていた。

業火は自然とあの日の記憶を思い返していた。

第43話 あの日後のいつ

あの日、生まれて初めての殺人を犯した氷河はその不幸な少年が死んでもなお、大声で泣きながら暴力を続けていた。アルミが止めなければ永遠に続いただろう。

アルミは氷河を少年から引き離し、少年の死亡を確認した。

「ほら……いつまでも泣くな。みつともない。……誰かに見つかる
とまずい。逃げるぞ」

後半は業火に向けた言葉だった。アルミはその場を動こうとしない氷河を肩で担ぎ、できる限り全速力で走った。

高校生を担いで走る小学生というのも奇異なものだが、アルミにそういう正常さを求めるのは間違いだ。

死体は放置した。じきに誰かが見つけ、騒ぎになるだろうが、わざわざ隠す手間をかけるメリットも少ない。そう判断したのだろう。

アルミ達は小学校まで戻った。その途中で、いつの間にか氷河は泣き止み、自分の足で走っていた。それでも、人目につかない体育館裏に着くと、へなへなと力無く座りこんだ。茫然自失。その表現がぴったりだった。

しばらくは全員無言だった。氷河は無気力状態で、アルミも黙って目を閉じて壁にもたれかかっていた。

どれほどの時間そうしていただろうか。アルミが不意にその静寂を破った。

「人を殺すのは、辛いか………?」

「……………」

氷河は答えなかったが、アルミは察していたようだ。

「辛いだろうな。……むしろそれで正常だ」

「………そうか」

「辛さに慣れろとは言わない。そんなこと不可能だし、そうする必要もない……ただ、耐えなければいけない」

「わかった………だが、なぜ？」

「………」

「俺はまだ、誰も死なせる必要なんて無かったと、そう思っている」
「………」

「殴り倒して、言うこと聞かせば、それでいいじゃないか。なぜ命を奪う？ ……その方が、お前には楽なんだろうな。だが、こんなこといつまでも続けるわけにはいかないだろう？ ……いつか大騒ぎになる。もうなっているかもしれない。……人殺しつてのはそういうことなんだ」

「……なら、どうしろと……？」

「殺す必要なんてない。殴り倒して、二度と悪いことなんてするなと言って聞かせればいい。最初はそれで十分だ。………それで上手くいかなかったら、別の手を考える。そんなのでいいじゃないか」
「………」

ここに至ってまだアルミは目を閉じていた。氷河の言葉について考えているのだろう。ややあつて、アルミは目を開けた。

「氷河……お前は正しい………」

「え………」

驚きの声をあげたのは業火。アルミの返答は予想もしていないものだった。まさか、アルミが氷河に同意するとは思ってもいなかった。氷河も同じ思いのようで、驚愕に目を見開いている。

「どうした？ 俺の言うことがそんなに意外か？」

アルミのその口調は楽しんでいるように聞こえた。

「意外かもな……でも、そういうことだ。いいだろう。氷河、しばらくはお前の言う通りにしよう。……氷河、よく言ってくれた………
………ありがとう」

アルミは微笑んだが、氷河はあまりに驚いて声も出せないようだ。アルミはお構いなしに続ける。

「さて氷河、これからお前のやりたがっている『活動』だが、お前の指示で動くことにする。今までのように校門で待っていてくれ」
アルミはそれだけ言って、話は終わりだとも言うように氷河と業火に背を向けた。その日はそのまま解散となった。

あれから今日までの間、三人は三、四回ほど、付近の不良どもを『退治』した。戦力面では何の問題も無い。アルミは反則的に強いし、業火と氷河も平均的な戦闘力は持っていた。不良どもを圧倒するには十分だった。向こうにとってはいい迷惑だろうが、同情する必要もあまりない。その後不良どもがどうしているかはわからないが、それもそのうちにわかるだろう。

「業火？ 聞こえてるか？」

「ん……」

アルミの声で業火の意識は回想から戻された。どうやらアルミからなにか言われたようだがまったく聞いていなかった。

「すまんアルミ……なんて？」

「もし不安だったら、目を瞑って、俺の手を握ってろ」

「……………」

アルミは不安げだが、その理由はさっぱりわからない。

「なんで……………あ……………」

業火は自分達が、『爬虫類両生類館』の前にいることに気付いた。

第44話 蛇と蛙

「あ……あわわ………」

足がすくみ、一步も動けそうにない。歯は噛み合わず、ガチガチと鳴っている。指先まで硬直して、脳の指令を受け付けない。

すぐにこの場から逃げなければ。そうでなければ、目の前の怪物に頭からかぶりつかれるだろう。その怪物は貪欲にも、己の顎の関節を外し、自分の胴よりも太いものさえ丸呑みにするという。なんて非常識な！手足が一本も存在しないという姿も見ることからに禍々しい。

その怪物に見つめられている。逃げないと！逃げないと逃げないと逃げないと………」

「おーい、業火ー返事しろー」

アルミはガラス越しに蛇と睨み合い、一人でガタガタと震えている業火に声をかけた。一年生達が不思議そうに見つめているがそれどころではない。

業火から反応は全く無い。

「まるで蛇に睨まれたカエルだな……いや、そのものずばりなのか……」

だから言ったのだ。業火は蛇をとんでもなく苦手としているのに、不用意に爬虫類両生類館なんかに入ればどうなるか、結果は明らかではないか。

不安なら目を瞑って手を握っててもいい……アルミはそうやって蛇の見えない場所まで業火を誘導しようと提案したが、業火はその申し出を断った。気持ちはわからなくもない。恥ずかしいのだろう。だがその結果がこれだ。

アルミはため息をつき、業火の背後にまわった。本当はこんなことしたくはないのだが、他にうまい方法もない。業火の肩に手をか

け足払いをした。硬直していた業火は前によろめき、倒れかけたがすぐにアルミに抱きとめられた。同時に、肩に置かれていた手で目隠しをする。

倒れかけたせいで体の位置が変化して、今や目と鼻の先に蛇がいるなど、業火に知らせてはいけない。ともあれ、少し乱暴だがこれで正気を取り戻しただろう。ショック状態なら無理やり体を動かしてやればいい。すぐに意識が戻る、こともある。

「ほーら、業火、もう蛇さんはいないよー」

まるで赤ん坊をあやすような言葉だが、業火が安心しているのは感じられた。

「……よかった。業火、今度は言うとおりにしろよ？」

業火は言われたとおり、目を瞑ってアルミの手を握っていた。アルミに手を引かれるままに歩いている。こうすればあの忌々しい化け物を目にしなくてすむ。

どれぐらいの間そうしていただろうか。先ほどまで一年生達と会話していたアルミが、突然業火に話しかけた。

「もう開けていいぞ」

蛇の脅威は去ったということだろうか？ 業火は言葉に従い恐る恐る目を開け、見た。可愛い緑色の生物がこちらを見つめているのを。その瞬間脳内にパアアアと神々しい光が満ち溢れた気がした。バイプオルガンの音色の中天使が舞い降りてきた。そんな気がした。

「……………」

アルミはカエルを夢中で見つめる業火に少し呆れていた。こころなしが頬に朱がさしている。息遣いも荒い。つまりなにか、この親友はカエルに性的興奮を覚えているのか。萌えているのか。

「どうするかな……………」

アルミはしばし途方に暮れた。

友達想いの優しい少年。

今日のここまでの観察で、その人影は浅倉慎也についてそう評価した。無害、そう表現してもいいだろう。なんにしても殺人を犯す輩には見えない。

だが一つだけ気になることが。さっき彼は友人に足払いをした。大したことではない。だが引つかかるものを感じた。上手すぎないだろうか？ 足払いは、ああも華麗に決まるものだろうか？

恐らくは考えすぎだろう、だが結論を出すにはまだ早い。幸い向こうはこちらの尾行に気付いていない。もう少し監視を続けよう………。

誰かに監視されている。アルミはさっきからずっと感じていた。恐らくは気のせいだろうが、用心はしたほうがいい。無害な人間を装うのも、監視に気付いていないふりをするのも、難しいことではない。不審なことなど、なにも見せていないはずだ………。

第45話 アルミの異常な食生活

カエルの前から、まるで根を張ったかのように動こうとしない業火をなんとか引っぱり、ようやく爬虫類両生類館の外までたどり着く頃にはすでに昼時になっていた。

「ったく……仕方ないな………さてと」

一行は昼食の時間にすることにした。

今更ながら、アルミの食生活は異常だとつくづく思う。

遠足であるため、昼食は各自が家から用意する。ほとんど全員が弁当という形で持ってくるが、この少年。アルミはそうではない。それはすでに証明済みだ。過去数年の付き合いから、そして例のツチノコ騒ぎから。

象の檻の近く。適当なベンチに腰掛けたアルミはリュックの中から「昼食」を取り出した。ようかん、甘納豆、ゼリービーンズ、エトセトラエトセトラ……。水筒の中にあるどろりとした液体はおそらく砂糖水。またはかき氷のシロップ。

甘いもののオンパレード。見ただけで虫歯ができそうだが、アルミは平気な顔で食べている。一年生の二人も目を丸くしている。彼らにとっても未知との遭遇だろう。こんな非常識な人間、今までの彼らの乏しい人生経験の中で他にいたらそれはそれで驚きだ。

もちろん遠足に持っていけるお菓子の上限は決まっている。「おやつは三百円まで」の類で、アルミの持ち込んだ量はそれをはるかにオーバーしているが、仕方なからう？アルミにとってはこれが主食なのだから。弁当の金額の上限など、定められていないのだ。

「なあ……」

それでも、思わず声をかけてしまう。

「なあアルミ、それ、やっぱり先生に見つかったら面倒やで？」

「そうか？ ……いや、そうなんだろうな……………」

アルミは檻の中のつそりと歩く象を見つめながら何事か考えているようだ。

「たしかに、この食事は非常識だな。…………だがこうせざるを得ないのも確かだ」

「……………」

アルミの家は両親が不在に等しい。父親は海外に単身赴任。母親は引きこもり。父親がかなりの高給取りらしく生活費に困ることはありえないが、人手が無い。アルミと中学三年生の姉とで、家事一切と幼い弟の世話をするのはかなりの重労働だろう。弁当を作る暇など無く、昼食は買うしかないと言われればそれは一見納得できる話だ。

あくまで「一見」だが。

「親がいないのは俺も同じやけど？」

「ん……………」

業火の家も両親がいないに等しい。もちろん業火は弁当持参だ。

「……………うん、聖火は良い奴だ」

アルミの言う通り、この弁当は聖火が作ってくれた。料理は聖火の担当だから、当然といえば当然のことだ。

だがそんなことはどうだっていい。問題はアルミもちゃんとした弁当を持ってくるべきではないかということだ。家の雑務に追われているのは各人同じなのだ。

「……………」

アルミは無言だが、少なからず狼狽しているようでもある。

パオーンと象が雄叫びをあげた。

「……………たしかに、俺の昼食がこれなのは問題かもな……………」

アルミが負けを認めた。

「…………だが…………好きなものは好きだからしょうがないだろ？」

「そうやけどな……………」

業火としても別にアルミを責めているわけではない。ただ

「やっぱ誰かに見つかったらやばいなと思ったんや」

「……そのときにはなんとかしてはぐらかすさ……また、先生に怒られるかもしれないけど、まあ仕方ないさ」

「……そっか」

アルミは一応は常識人である。もし常識から逸脱した行為をしていたらそれはわざととしているのだ。業火はそのことをよくわかっている。そして当然、その行為が他人と軋轢を産むためのものでないことも。アルミは常に自分の正しいと思うことをして、それが他人に理解されないだけ。それだけだが、そんなことがあるたびに、業火はなにか違和感を覚える。

「……なあアルミ、もしかして……わざと誰かに喧嘩売ることしてる？」

ピクリと、一瞬アルミの動きが止まった気がした。一瞬。あくまで一瞬。

「なんだか………今日は業火に責められる日なのかな？」

アルミは笑顔で言った。いつもと変わらない、違和感など微塵も無い。いけない。なぜかさつきから詰問口調だ。

「いや……なんでもない。ごめん。変なこと聞いた」

「……そう……よくわからないが納得したならそれでいいけど………おい一年生。そろそろ食べ終わる頃か？」

実際にはもう食べ終わっているようだ。どうやらずいぶん話し込んでいたらしい。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

「やな。次はなんや？」

「とりあえず象を……」

その時、近くで爆音が轟いた。
「……？」

その方向に目を向ける。そこに一瞬火柱が上がり、次いで煙がも

くもくとたちこめた。

煙の中にかすかな人影を見た気がした。

第46話 ヒーロー再び

「……………」

業火は目の前の事態にどう対処すべきかを考えた。すなわち関わるか無視するかだ。しかしどうも判断がつかないためアルミの方を見た。我ながら情けないが、自分の考えがアルミの意思よりも優勢するとも思えない。

そのアルミはというと、黙って煙を見つめている。その向こうにあるなにかを見透かそうとするかのように。

煙がはれてきた。中に人影が見えたのは見間違えではなかったようだ。そして……

「わーはっはっは！ 正義のヒーローゲッコー仮面、ただいまー参上！」

全身を白で統一した服装と、顔全体を覆うやはり白のマスク。騒ぎを聞きつけた大勢の人が凝視する目の前でシュビッ！ シュビッ！ バシッ！ とノリノリでポーズを決めたその人影は、アルミと業火にとってひどく見覚えがあるものだった。

「……………」

業火は呆れて物も言えない。それは恐らくはその場にいる全員が同じなのだろう。ちなみに一年生は何かのヒーローとも思っているのか、目を輝かせて見つめている。まあ自称とはいえヒーローなのは間違いないのだが。

「はっはっはっ！ そうか。皆、私の格好良さに感動して声も出ないか！ わかるぞ！ わかるぞその気持ち！ そうそれはファーストコンタクト！ まさに未知との遭遇！ イエーイ！ ザ・ディイー・プインパクトオオオオオオッ！」

わけのわからないことをひたすらシャウトしている。周りの雰囲気を見無視して、彼のテンションはただ上がりのようだ。

「イエーイ！ ノってきたぜっ！ ノリノリだっぜ！ じゃあ今日は新し

いヒーローを紹介しちゃうもんね！」

あまりのハイテンションで言うことに脈絡が無くなってきた……
……ってちょっと待て。

「今なんて言った……」

新しいヒーロー？

「紹介しよう！ この町を守る新たなニューヒーロー！ マラカス仮面！」

新たなニューヒーローというのは日本語としておかしいのではと突っ込む場面なのだろうがあいにく誰もそこではない。

皆が皆啞然としていたなか、どこからかワンダバワンダバとBGMが流れてきた。出撃のイメージらしい。

そして突如、「とおっ！」と、ありがちなかけ声がどこから聞こえてきた。

気がつくとゲッコー仮面の隣に、同じように全身白づくめの人物が立っていた。大きな荷物をいくつか抱えているのは、何か主張があるのか単に荷物持ちなだけかは不明だが、彼の名前がマラカス仮面というのは簡単に察しがついた。

「あ……馬鹿が増えた」

隣でアルミが至極もつともな感想を言った。馬鹿が増えた。

一方の仮面ブラザースは 周りの感想など全く意に介さない。マラカス仮面と紹介された人物がしゃべる。

「やあみんな。僕が正義のヒーロー、マラカス仮面だ。これから町みんなの平和を守り、悪を討ち滅ぼすから、期待していてくれ」
マラカス仮面のマスクは口元が隠されておらず、そこから覗く爽やかなまでに白い歯がキラリと輝いている。

「その意気だマラカス仮面。共に平和を守ろうではないか！ ……
……さらにっ！ 今日是我々のテーマソングを公開する！」

「テーマソング？」

アルミは首をかしげた。

マラカス仮面が周囲の疑問に答えるべく、大きな荷物から何か出した。アンプとギターだ。二つをコードで接続して、試しに少し弾いた。

「準備完了だ」

「ふむ」

マラカス仮面の報告にゲッコー仮面は頷き、声を張り上げた。

「さあっ！本日この時をもって初公開！その歌声に全米が泣いた！その曲調まさに神曲！歌います！『ゲッコー仮面は今まさにここにあり！』」

初公開なのに全米が泣いたとはこれいかに……という突っ込みは全力で押さえつけ、業火はアルミに指示を仰いだ。

「なあアルミ、あれやめ……」

やめさせた方がいい。その言葉は最後まで言えなかった。

刹那、耳をつんざくような爆音が轟いた。

第47話 騒音注意!

ずっぎやあああああああああああ

マラカス仮面の弾くエレキギターの音が世界を覆う。他の音の存在を許さない圧倒的な音量が満ち溢れ、その場にいる誰もが耳を塞いだ。

「—————!」

業火は自分が何か叫んだのは自覚した。が、その声は非常識な音にかき消されて聞こえない。

「—————!」

「—————!?!」

「———!」

周りで叫んでいる人達も同じ。騒ぎを聞きつけ駆けつけてきた、先生や動物園の職員達。必死に声を張り上げても努力は報われない。その状況で、ゲッコー仮面はマイクを片手に絶叫している。さっきの言葉から推測するに、歌っているのだろうが、全く何も聞こえない。それほどにギターの音が大きすぎる。

「まずいね……動物達が驚いて……暴れてる」
「?」

アルミの声が聞こえた。なぜか、問題無く聞こえる。少しいつもと音程が違う気もするが……。そういえば、音程を調節すれば騒音の中でも声を聞こえさせることができるのか、いつかアルミに教えてもらった気もする。

二人の背後で、怒り狂った象が暴れ、檻にぶつかっている。

「まあ暴れたところで、檻を破って出てくることはないだろうけど……とりあえず、この騒音は止めないとね。かといって、アンプに近付いてこれ以上の音量を味わうのも避けたい……」

アルミはそう言ってアンプの方向にタッチノコロボットを放る。

「……なんでそれを遠足に持って行く……」

業火のつぶやきはアルミに届いておらず、業火はきつと気に入ってるんだろうなと一人で納得することにした。

そしてアルミは巧みなコントローラーさばきでツチノコを操り、見事アンプのスイッチを切った。

ぶつんと少し大きな音がして、ギター演奏は強制的に終了させられた。それに入れ替わって、必死に何か叫んでいた人の声と、驚きと恐怖と怒りであげられる動物達の咆哮が聞こえてきた。動物の飼育員が各々、動物をなだめようとしている。

「……………おや？」

ちょうど一曲歌い終わった直後らしく、ポーズを決めていたゲッコー仮面は突然の演奏終了にマラカス仮面と顔を見合わせ、首をかしげてから次いでアンプに目を向け、見た。

ジー

鳴き声、というかモーターの駆動音をたてながら、ツチノコが主人の下へ戻っていくのを。

仮面のせいで、こちらからゲッコー仮面の表情を知ることとはできないが、なんとなく驚いているのはわかった。そして案の定、

「ああーっ！ お前はいつぞやの不良少年！！」

声高に叫んだ。人々の視線が一斉にアルミに向かった。

「……………」

アルミはあまり気にせず、ツチノコをリュックに入れた。

「無視か！ 無視なのか！？ おい不良少年！」

「……………なんだ。不良とは人聞きの悪い。俺のどこが不良だ？」
面倒そうにゲッコー仮面に目を向けた。

「どこからどう見ても不良じゃないか！ ……この前もナイフ持ってたし！」

「……………」

アルミの表情は変わらない。しかし、ナイフを入れているポケットに、さりげなく右手をあてたのが業火にはわかった。

アルミはナイフを持っている。もちろんそれだけで不良と判断するのは即断かもしれないが、一般的な判断をすれば決して間違いない。しかも今は教師を含めた多くの人間の前だ。この状況でナイフ所持を認めるわけにはいかない。

こんなヒーロー気取りの変態のせいで、というのは情けないが、アルミは今、窮地に立っている。

第48話 あーるぴーじー！

アルミはナイフを入れているポケットから手を離し、笑みを作った。

「おじさんは、なにを言っているのかな？ ただの小学生がナイフなんて持っているはずないじゃないですか」

とりあえずとぼけることにしたようだ。周囲の人間に、自分とゲッコー仮面のどちらが正しいかの判断をを遠回しに仰いでいる。たぶん最善の策。こんな変態の言うことが正しいとは誰も思わないだろう。だから、最善の策のはずだ。

しかし相手が悪かった。

「そう言うのはわかっていたぞ不良少年！！」

周りを気にせず、独断と偏見で突っ走る男。それが正義のヒーローゲッコー仮面だった。

「だがしかし、貴様の悪事は露見しているのだよ不良少年！ だから私は正義の鉄槌を下す！ 覚悟しろよ！ マラカス仮面！ R P G 用意！！」

「了解！！」

「な……………」

マラカス仮面は力強く応じ、アルミは驚いた。周りの人々の反応はといえば、業火をはじめR P Gの意味がわかる人は同様に驚き、わからない人は首をかしげた。

いずれにせよ誰一人即座の対応ができなかったが、その間にもマラカス仮面はいくつかあった大きな荷物のうち一つから、「R P G」を取り出した。

それは、のどこであるはずの動物園にはあまりにも不自然なもの。R P G―7。ソ連製の対戦車ロケット弾。世界中の戦場で見ることのできる兵器。

皆が呆然としている中、ゲッコー仮面はR P G―7にロケットを

装填して、

「吹っ飛ば不良少年!!」

アルミに向けてためらいなく撃った。

「伏せろっ!」

撃たれる一瞬前、アルミはそう叫んで自分は横に飛び退いた。目の前をロケット弾が横切ったがアルミへの被害は無し。その代わりにアルミの背後にあった象の檻を直撃した。爆発音がして檻の一部がひしゃげる。直後、危機に対してようやく動けるようになった人々が、悲鳴をあげつつ散り散りに逃げていく。

「あ……まずい……」

象が、騒音騒ぎが終わってなんとか怒りを静めたらしい象が、今度こそキレた。

雄叫びをあげつつ象が怒りに任せて檻に突進する。何度も何度もそのたびに、長年風雨にさらされていたであろう檻は少しずつ変形していった。

「貴様RPGをよけるとは不良少年にしてはなかなかやるな! ならばもう一発!」

ゲッコー仮面が再びロケット弾を装填した。もちろん、それを撃たせるわけにはいかない。

アルミは背負っていたリュックを業火に押しつけ、ゲッコー仮面に向かって駆け出した。

「おいアルミ! これどうしろと!?!」

「業火お前はそれ持って逃げろ!」

そして返事を待たずにゲッコー仮面に襲いかかった。

身長差があるため殴り合いでは不利。いつも通り足払いをかけ武器を手放させる。その作戦は途中までうまくいったがゲッコー仮面の引き金を引くのが若干早かった。

二発目のロケット弾は狙いが狂ったまま飛び、象の檻の別の箇所にあたった。

アルミはそれには注意を払わず、地に伏し武器を手放したゲッコー仮面の後頭部を踏みつけようとして、背後から殺気を感じた。マラカス仮面が背後から殴りかかる。アルミはその拳をよけ、掌底を相手の顔面に叩きつけた。手応えが無い。マラカス仮面の身長が高く、少し飛び退かれるとギリギリで届かない。もう一方の手でマラカス仮面の腹を殴る。今度は当たった。そのまま横ざまに蹴ると相手は三メートルほど吹っ飛んだ。

「こっちだっ！」

「！」

突然の声に振り向けばゲッコー仮面が膝蹴りをくりだしてきた。とっさによけるがうまくいかず、腹に蹴りを受ける。直後鈍い痛みを感じるがそれを堪えて飛び退く。そしてすぐに反撃。攻撃を出した直後の隙につき、相手との距離を一瞬で詰めて心臓のあるあたりを殴る。一発、二発。次を打とうとする拳をゲッコー仮面は受け止め、お返しとばかりに強烈な頭突きをくらわせた。アルミの気が遠くなり、体が後ろ向きに倒れていく。しかしなんとか意識をたぐりよせ、朦朧とした意識のなか、倒れながら足を動かしゲッコー仮面を蹴った。当たった。どこに、かはわからないが。ゲッコー仮面はうめきながらよろめき、アルミはそのまま地面に尻餅をついていた。そして……………

バキリ

背後からなにか大きな音がした。アルミが首だけで振り返ると、象が檻を破りまっすぐこちらに突進してきていた。

象がこちらに敵意を持っているのか、単に暴れているのか判断はつきにくい、一つだけ確実なことがあった。

アルミは痛みと体勢とで、すぐに逃げられる状況ではない。

象の巨大が目前まで迫っていた。

第49話 ……誰？

「あ……やばい……」

目の前に危機が迫っているのはわかる。でも動けない。頭突きのダメージでくらくらしした頭が警鐘を鳴らしているが、だからといってなにができるというわけではなく……。

その時、体がふわりと浮き上がった、気がした。

それは錯覚で、実際には誰かに抱え上げられただけ。少し横、一瞬前まで自分のいた場所を象が通り過ぎたが、アルミにはなんの被害も無い。

「……怪我はありませんか、慎也様？」

誰かがアルミに話しかけた。若い女性の声。アルミには全く聞き覚えが無かった。

「……………え？」

朦朧としていた意識がようやくはっきりしてきた。同時に状況を確認する。

どうやら、自分は迫り来る象の危機から救われたようだ。誰だかわからないが、踏みつぶされる直前に抱きかかえ、象の突進コースから外してくれたらしい。そして今、抱きかかえられたままの体勢。それは横抱きという抱き方で、俗称をお姫様抱っこという。少し恥ずかしい格好だがアルミにとってはどうでもいいことだ。

「あの……もしかしてどこか怪我を？ 返事をしてください慎也様」

「え？ ……ああ……大丈夫……です」

「そうですか。よかった……」

「そうですね……それで……そろそろ、下ろしてください」

「あ、はい。失礼しました」

いつになく敬語で言ったアルミのお願いを、その命の恩人はあっさり聞き入れた。

地に足をつけたアルミは辺りをきょろきょろと見まわした。二人

以外に人影は全くない。

「えっと……、象とかゲッコー仮面は？」

「象なら暴れたまま、走ってどこかに行ってしまった。仮面の方は、お連れの方と共に、ここの平和を守ると言いながら象を追いかけていきました」

「他の客は……とつくに逃げたか。園の職員は？ 俺達のこと、放っておくとは思えないが？ 外に誘導したり」

「私が、この場の対処を任せてくださいとお願いしました」

「そんなことが認められたの？」

普通は認められない。アルミは今一度相手の姿を観察する。

声のイメージ通り若い女性で、見たところ年齢は二十歳より二、三若いぐらいか。端整な顔だちで、服装は淡黄色のサファリースーツに紺色のサイハイソックス。ショートカットの髪型は快活そうな印象を与えるが、おそらくはその通りなのだろう。そしてアルミにとって最も関心のあることに、

「なんで俺の名前を知ってる？ ていうか……誰？」

その頃動物園の外では、緊急事態ということで北浅葱中央小学校の一、六年生と引率の教師が緊急事態ということで避難、人数確認の点呼をしていた。もちろん一人いない。

「先生、浅倉君がいません」

六年四組の学級委員長が担任に報告する。

「浅倉君が？ 仕方ないな。まったく、何をしているのか……」
学級担任でこの春からの新米教師である後藤は軽いため息をついた。

彼にとって浅倉慎也という生徒は授業なんて全く聞かないくせに成績は冗談みたいに良い、扱いに困る問題児。あるいは勉強ができることを鼻にかけ好き勝手している嫌な悪ガキ。そんな評価。明らかに良い評価ではない。今回の一件でそれは盤石なものになるだろ

う。別にそんなことを気にするアルミではないだろうが、かといつてなにもしないといいわけにもいかないだろう。

「あの、先生」

業火はとりあえずアルミの弁護をするべく、後藤に話しかけた。あと、アルミを助けにいく必要もあるかもしれない。彼のことだ。象を退治しようとして苦戦しているかもしれない。

「先生、アル……浅倉は、たしかにまだ園内にいますけど、好きでそうしてるのではないと思います」

「じゃあ、なぜ？」

「えっと……」

あの変態仮面に飛びかかったのはアルミの方だ。つまりアルミが一方的に悪いわけで、理由なんて聞かないでほしい。フォローしようがない。

「例えば、あのゲッコー仮面とかにからまれて、面倒なことになってるとか」

とりあえず嘘言ってみた。目的はアルミをフォローすることだから、ばれない程度の嘘は気にしない。まるつきり嘘でもないし。

「だから先生、浅倉は悪くありません」

「そうは言ってもな……」

「そんなことより先生、浅倉を連れてこないといけないと思いませんか？」

話題を変えることにした。

「まあ……それは……そうだけど……」

「ですよ」

「じゃあ、ちょっと行ってくるよ」

「ああ、待ってください。俺も行きます」

「だめだ。危険だ」

「でも、浅倉は俺の言うことしか聞きませんよ？ 先生が行ったって意味ありません」

「……………じゃあ、僕から絶対に離れないこと。約束できる？」

「はい」

業火は笑顔で答えた。さて、どうやってこの教師の監視から逃れようか……………。

第50話 愛してる……………

「私が誰か、ですか……………。どうしても、知りたいのですか？」

「そういうわけじゃないけど…………まあ、気になるかな？」

「そうですか。なら言いましょう。いえ、むしろこの想いを余すところ無く伝えます！」

そしてその女性はパシッとアルミの両手を握った。

「慎也様！ 私はあなたの、ファンです！！」

「……………はい？」

「あなたを一目見た時から胸の鼓動が止まりません！ 好きです！

この想いを受け取ってください！」

「え…………えっと、落ち着いてください」

「落ち着いてなんていられません！ この体からあふれる愛をとめることなどっ！」

「そんなこと言われてもっ！」

アルミは握られている手を離そうとするが、相手の力が強くてびくともしない。

「慎也様！ 無理は承知ですが、私のこの愛を受け取ってください！ 私とお付き合いしてください！」

「だから！ 突然そんな事言われてもどうにもできません！」

「では！ どうしたら承諾していただけますかっ!？」

「知りませんっ！ というか、それ初対面の人に話すことじゃないですよね!？」

「人の出会いは突然です！ あと私は慎也様の事を知ってますから初対面でもないですよ！」

「俺にとっては初対面だ！ ……そもそも自分のこと知らない相手に付き合えってのは乱暴だろ？」

「あ…………それは…………失礼しました」

一瞬、相手の手の力が弱まり、アルミはその隙を逃さず拘束から

のがれた。

「あ……」

「とりあえず、手を握るのは、ね……それで、そもそもあなたは誰なんですか？」

「ずざざざと少し後ずさりながらアルミは尋ねた。この女性は名乗りもせずにあんなこと言ってきたのだ。」

「私は……名前は佐藤鉄といひまして……どうか気軽に、テツって呼んでください」

「てつ？ ……女の名前としては……珍しいな」

「まあ！ そんなことまで気を遣うなんて、本当にお優しいのですね」

「そういうわけじゃ……まあいいや。それで、佐藤さん……」

「テツと……」

「テツ」

「はい」

「俺のファンって……どういふこと、ですか？」

「文字通りの意味ですっ！」

「ずざざざ」

「テツが今度は抱きつかんばかりの勢いで前に踏み出したため、アルミは再び後ずさった。」

「意地悪しないでくださいよ」

「意地悪って……後ずさっただけ………で、つまりテツは……」

「慎也様の事を、心からお慕ひしています」

「………なんで？」

「なぜ、ですか………そうですね。あなたを初めて目にしたのは、あれは去年の秋でしたか。父からの用事であなた学校近くに来ました」

「それで………俺の姿を見た、と？ 一目惚れ？」

「はい。校舎から出てくる、ご学友と談笑するあなたの姿を見た瞬間、頭を強打されたかのような衝撃を受けました！ ああ、世の中にはこんなに美しい方がいるのかと……」

「そんなに……心打たれたの？」

「はいっ！ その瞬間から、目を閉じればあなたの姿を浮かべられます！ そのツンツンとはねた髪も！ つり上がった鋭い目もっ！」

「ですから、どうして逃げるのですか？」

「知らない人に抱きつかれたりされたくないからです！」

「いいではないですか。ほら。恥ずかしがらずに」

「恥ずかしさの問題じゃないです！」

「大丈夫です！ 私達の愛の前ではどんな問題も意味をなしません！」

「なんでそうなる！？ ていうか勝手に“達”ってつけるな！」

「さあっ！ もはや何を迷うというのです！？」

「全て！ というか迷うことなく拒絶しま……」

「あ………」

気がつけば、背後はコンクリート壁。

「追いつめたようですね。もう、逃がしませんよ」

テツはアルミの両脇の壁に手を立てかけた。左右の退路を断たれた。

「……………」

どうする？ どうやってこの状況を切り抜ける？

幸運にも、答えはすぐに見つかった。

「……………ねえ、テツ」

「なんでしょうか？」

アルミは一度深呼吸して、微笑みながら言った。

「テツが俺のことを好きなのはよくわかった」

「そうですか。それで……」

「でも、もう一つだけわからないことが」

「……はい？」

「テツが、今朝からずっと俺を尾行してたのも、俺が好きだから？」
テツは一瞬答えに迷ったようだ。だがすぐにばつの悪そうな笑みを浮かべて、

「ばれてましたか。さすがですね。……はい。ずっと、あなたを後ろから監視していました」

「俺のことが好きだから、ストーカーまがいのことをしていたと？」

「はい。それほどまでに、あなたが好きなんです」

「そっか……」

アルミはテツの目を見据えて、自信たっぷりに言い切った。

「でも、それは嘘だよね？」

第51話 尾行の理由

「……………」

テツは先ほどよりもさらに深く答えに迷っている。アルミはその間、無言で相手の返答を待った。

「……………」、そうですね慎也様。でも、認めたくないのはわかりますが、照れることはないですよ?」

そう言いながら、アルミの頭を愛おしいそうに撫でる。これはアルミの予想通り。抵抗せずに、テツがさらになにか言うのを待つ。

「あなたの気持ちはわかりますよ……誰かに正面から好きだと言われたことなんて無かったのでしょうか? 好かれたことがないのでしよう? でも、心配いりません。私がついていきます。私が一緒です

から、なにも恐れることはありません。私があなを好きなことは、紛れもない真実ですから……」

「うん。それは嘘じゃない……」

アルミはじつとテツの顔を見つめながら言う。

「テツはよほど俺のことが好きなんだね。でもさ……だから俺をストーカーしたってのは嘘だね?」

今度こそ、完全にテツの思考を停止させた。予想以上にうまくいった。テツ、相手が子供だと思って油断したな。

「……………」なぜ、そう思ったのですか?」

「さあ……俺にもよくわからないんだ。なんか……目とか表情をよく見れば、その人の考えてることっておぼろげながらわかるんだよね……少なくとも、嘘ついてるかどうかがうしろは」

「読心術、ですか?」

「どうかな? 感覚的なものだから、術というには理論体系が確立していない。当然、そのために全否定することもできないけどね。要するに、確かなことはなにも言えない。自分のことなのにこんな

のって、情けない話かな?」

「……………」

「驚いた？」

「はい……。少し、あなたのことを見くびっていたようですね……」
「まあそうみたいだ……」

「素敵ですっ！」

「むぎゅう！」

テツが唐突にアルミに抱きついた。

「素敵です慎也様！ そんなことまでできるのですね！ 最高です！
結婚してください！」

「むー！ むむー！」

テツがアルミの頭を胸に押しつけているため、アルミはしゃべれない、というか息ができない。

「むー！！」

ばたばた

「ぷはあっ！」

なんとか力づくで脱出した。

「はあ……はあ……。あのなテツ、俺を殺すところだったぞ」

「いいじゃないですか。結婚は人生の墓場といいますよ？ 死んで
二人の愛は永遠となるのです」

「いつのまにか『付き合え』が『結婚しろ』になってるね……だから
らって無理心中に付き合うわけにはいかない……それでね、テツ、
はつきりさせたいことがある」

「私が、なぜストーカーなんてしていたか、ですか？」

「うん」

「それは……………」

テツはそれはもう友好的この上ないような笑顔で言った。

「慎也様が、人殺しなんてしないよう見張るためです」

「え……………」

テツは再びアルミの頭を撫でる。

「私はあなたに一目惚れして以来、考えつくあらゆる手段であなた

の素性を調べました」

「それこそ……完全にストーカーですね」

「はい」

「嬉しそうに言うな……」

「それで、あなたについてあらゆることを知ることができました。身長、体重、視力、その他の健康状態……もちろん、住所や電話番号。あと、図書館の利用履歴。見て驚きました。借りているジャンルがあまりにも多岐にわたっているのですもの。大人でも理解に苦しむような難解な専門書から、幼稚園児の読むような絵本まで」

「う……………」

そういえば、以前図書館で「全訳 究竟一乗宝性論」と「かんきようせんたいエコレンジャー かんぜんひみつデータブック」（特撮ヒーロー番組の子供向け絵本）を同時に借りて、受付のお姉さんにそれはそれは怪訝な表情をされたこともあった。

「しかし、そういう面も知れば知るほどますますあなたのことが好きになっていきました……でも、一つだけ、気になることがあります」

「なんだ？」

「……最近、この地域で、子供が犠牲になる痛ましい事件が二つ、連続で起きました。一つは高校生五人が刃物で切られて。もう一つは小学二年生が暴行を受けて、死んでいます」

「……………」

「犯行時刻が、ちょうどあなたの下校時刻のあたりと重なっていて、あなたがこれらの事件を起こしたと考えれば、全てが矛盾無く説明がつくのですが……」

テツはアルミの頭を撫でる手を止めた。

「まさか、あなたの犯行ではないですよ、慎也様？」

第52話 この大人の正体は？

「……………テツは、心配性だね」

アルミは胸中の動揺をなんとか抑えた。

「あのさ、俺がやったとすると矛盾がない、っていうだけで俺の作業と考えるのはちょっと飛躍してないかな？」

「それは……そうですね……」

「俺の下校の時間帯が事件のあった時刻と一致するのだったら、当然俺の小学校の児童全員が容疑者だね？ それに、ここ一帯の小学校の時間割ってあまり変わりばえないから……」

「ええ。その通りです……それに、小学生に限らなくても犯行ができる人はいくらでもありますね。でも……」

「むぎゅ……」

テツが再び抱きついてきた。

「私が心配していたのはあなただけですから。あなたが潔白ならばそれでよいのです……さっきも、あのヒーローの方と戦った時、勢いで殺してしまわないか心配で心配で……」

じたばた

「ぷはっ！ 殺さないから……そのために……俺が殺人犯だなんて、ものすごく小さな確率をわざわざ確認するために、俺をストーカーしたと？」

「はい」

「放っていても問題ないようなことなの？」

「はい。それが愛です」

「……………」

アルミはいまさらながら、すごく面倒なことに巻き込まれたなど実感した。

業火は早々に、この教師の監視から逃れることを諦めていた。教頭とかいろいろ偉い人から許可をもらって動物園に再び入ってから今まで、二人は始終無言だが、後藤は業火から目を離すことはなかった。

仕方ない。できないことはできない。この教師、隙が無い。これが中村とかだったら、なにかの拍子に意図的にはぐれることだってできたかもしれないが。

中村か。この春アルミの身勝手な陰謀のせいで職を失った不幸なハゲオヤジ。彼は今どうしているのだろうか？　なんとかまっとうに生きていていればいいのだが……。

そしてもっと気になるのが後藤だ。中村の代わりとして来た新任教師。なら、中村が失職しなければ？　今度は後藤が失業者？

アルミは中村より後藤の方がいいと言っていたが、業火にはなにか引つかかるものがあつた。なにか、この教師にただならぬものを感じていた。

「……とりあえず、テツのことはわかった……それで、これからどうしようか？」

「慎也様の好きにしていいますよ？」

「……………」

“好きにする”に特別、他意は無いはずだとアルミはそう思うことにした。好きにする。むう……………。

「じゃあ、とりあえず園の外に出よう」

アルミとしても、象が闊歩するような場所にいるのはごめんだ。

「そうですか。では…………えっと…………」

テツは辺りをきよろきよろと見渡し、エディターズバッグが落ちていたのを見つけた。まあ、テツの荷物なんだろう。さっきアルミを助けた時に放り投げたのだろう。

「ああ、そうだテツ」

「なんでしょう？」

「俺のことだけどさ……。できれば、アルミって呼んでほしいな」

「アルミ……ですか？」

「うん。あだ名だけど、気に入っている……。……というか、普段そう呼ばれてるから、本名だと、なんか変な感じがする」

「そうですか。わかりました、アルミ様」

「……………」

相変わらずの様付けについては考えないことにした。そんなことよりも……

「ではアルミ様、行きましようか」

「うん……」

そんなことよりも、そもそもテツとは何者なのか。いまだにそんなこともわかっていない……………。

第53話 引き続き先生と

人のいない動物園なんてめったにあるものではない。

同行の教師とあまりにも会話が無いため、業火はひとり、そんなことを考えていた。

人のいない動物園。あまりにも静かだ。同じ敷地のどこかにキレた象がいるとは思えない。ここでは、客の視線から解放された動物達がい思いにすごしていたり、あるいはまだ人間がいるぞとばかりに業火をみつめていたり。

動物達はみんな音をたてない。だから、静寂を乱すのは業火と後藤の足音のみ……………

——おい、見つけたか

——いいや……………そっちは？

——だめだ。どこに行きやがった……………

どこからか声が聞こえてきて、業火と後藤は顔を見合わせた。

「ここの職員かな？ それとも、逃げ遅れた人？」

「さあ……………でも、単純に逃げ遅れるって、あまり無いと思いますよ」
業火は自分の親友のことは棚に上げて、それでも、もっともな意見を言った。象が逃げ出したとはいえ、それ以外にはなにもないのだから逃げるなんて簡単にできる。

「……………ということは、職員か」

「誰かがわざと残った……………ということはないでしょうね」

「そうだろうね……………どうする？ 一応声を掛けとく？ それとも、邪魔したら悪いかな？」

「さあ……………先生が決めてください。ていうか、俺に聞かないでください」

「……………そうか。じゃあ、残っている人がいることぐらいは伝えておこう」

「そうですか。……………で、声の主はどこに？」

「たぶん近いところだろうけど……」

後藤は見当をつけて歩き出し、業火はそれについていく。

「すぐ近く……何かの陰に……あ……いた………?」

後藤は声の主をみつけたようだが、直後に絶句した。

「……………? 先生どうしました?」

業火は後藤の視線の先を見つめ、違和感に気付いた。

会話をしていたのは二十代の若者三人で、全員が動物園の職員が着ているべき服装ではなかった。どちらかというお客として来た、今どきの若者ファッション。

「……客、ですか……?」

「みたいだね……どうしようか」

「ほっといてもいいとは思いますが……」

——お客様。ここは危険ですので外に……

別の声が聞こえた。こっちはほぼ確実に職員のものだ。ならばこの場はこの職員に任せるべきか。

業火がそう考え、後藤に意見を言おうとしたその時、

「邪魔だ失せろ」

若者の一人がそう言って、ズボンのポケットからなにか黒光りするものを取り出した。

直後、銃声。

そしてなにが起こったか確認する間もなく、業火はいきなり口を塞がれ押し倒された。

「むー!」

「落ち着いて。静かに……」

耳元で後藤の声。業火はとりあえず教師の言うことを聞き、口を閉ざし耳をすました。

「おい。なんてことを……」

「いいじゃないか。あのヒーロー共がしたことにすれば。どうせみんなそう思うさ」

「とにかく、銃声を聞いた誰かが来る。この場を離れよう」

「そうだな。行こう」

足音。業火からは見えないが、若者達が歩いている。その殺人者の足音が――遠ざかっていった。

後藤は安堵の息を吐き、業火を解放した。

「よかった……もう大丈夫だろう」

「大丈夫、ですか……」

業火は今起きたばかりの殺人の現場、できたての死体を見つめた。拳銃で胸を一発。おそらく即死。

「……………」

後藤は死体に駆け寄り、脈を調べ、

「既に死んでいる。今からできることはないよ――。どうする？ 警察とか呼んだ方がいいかな？」

「だから俺に聞かないでください。……………でも、俺は浅倉を探すべきだと。あの人達は誰かを探しているようでした。それが浅倉だとは思えませんが、だとすると彼らは浅倉を見つけると同じように撃ち殺す」

「そうか。――とりあえず外には携帯で連絡して……浅倉を探そう。奴らより先に」

「はい」

「アルミ様、聞こえましたか？」

「うん……銃声だな。どこから？」

「近くではないです……あ、麻酔銃では？」

「逃げた象を捕らえるための？ そうかもな……」

「象とは限りませんよ？」

「……………なんで？」

「象が暴走して、他の動物の檻にもぶつかって、それで壊れた檻から逃げ出した動物もいるかもしれません」

「檻ってそう簡単に壊れ……実際壊れたのか……………。でもやっぱ

りそんなことはあまりないと思う」

「でも、私の主張が正しければ……………あそこに虎がいることは矛盾無く説明できます」

「……………」

テツの指差す先で、見るからに飢えている虎が獲物を探して闊歩していた。

第54話 虎、殺人者

「アルミ様……どうしましょう？」

「どうするって……逃げるしかない」

「そうですか……でも、戦って倒すというのがありますよ」

「戦って……勝てる？」

「………なんとかありませんか？ 逃げるにしても………どうやら、虎はこちらを狩る気らしいですよ？」

「………」

虎が、こちらをじっと見つめている。相当腹を空かしているようだ。きつと昼食の時間の直前にあの騒動が起こったのだろう。

「虎って人食べるのかな？」

「試してみます？」

「やめておく」

「そうですね」

そんな会話をしている間にも虎はゆっくりとこちらに近付いている。

「うまく逃げられる方法がありますか？」

「………ダンボールをかぶってやり過ぎす。それか、ツチノコをけしかけてそれに気を取られている隙に逃げる………どっちもできないな。ダンボールもツチノコも入れてあるリュックを業火に預けたままだ」

「………」

「それで……普通に逃げることはできるかな？ できるかもしれないよ」

「アルミ様。やはり戦って、あの虎を倒すべきです！ 逃げるなんて女々しいこと言ってる場合ではありません！」

「女々しいって……まあ確かに、もう逃げられそうにないけど」

虎はすでにアルミ達のすぐ目の前まで来ていて、飛びかかれた

ら逃れようのない。そういう状況だった。

「さあアルミ様。あの無礼な虎に、アルミ様に逆らったことを後悔させてやりましょう！」

「……どうやって」

「私としては、アルミ様が素手で虎を撃退するのを期待します」

「無理だ」

「えー。できますよきっと。さっきもヒーローの方々に勝ったじゃないですか」

「勝ったわけじゃない。それに、人が相手ならなんとかなくても、虎が相手じゃ勝手が違いすぎる」

「そうですか……だったら、何か武器とか持っていないませんか？」

「……………」

持っている。だが、さっきまで自分を殺人犯だと疑っていた人間の前でナイフを取り出すわけにもいかない。さっきのゲッコー仮面のこともあるし、事情を知らない人の前でナイフは使うまい。そう心に決めた。

「持っていないな」

「そうですか……では」

テツはとても優しげに言った。

「私が戦いましょう」

「ああーゲッコー仮面はあー闇夜を引き裂く純白のおーひーとーすーじーのおー希望さー」

ゲッコー仮面とマラカス仮面はRPG7やアンプの入った大きな荷物を担いで動物園を歩き回っていた。もちろん、どこかに潜んでいるかもしれない悪を倒すためである。

「誰かーがー泣いてるならーすぐーにかけつけるうーーん？」

マラカス仮面のギター演奏に合わせて歌っていると、不意に何者かが二人の前に立ちはだかった。

「む……………」

二十代の若者が二人。振り返ると、背後にもう一人。挟まれた。

「何かな？ ああ、さては君達私のファンだな！ なるほど嬉しいものだ。どれ、サインがほしいのかな？」

「うるせー。オレらがオメーのファン？ ふざけるな」

若者の、相手を馬鹿にしたぞんざいな言い方にもゲッコー仮面は全くひるまない。

「ほお…………ならば君達は何者だ？」

「誰だっていい。そんなことより」

若者の一人が拳銃の銃口をゲッコー仮面に向けた。ついさっき、罪も無い人の命を奪った銃。

「命が惜しければ、RPGをオレらに渡せ」

第55話 ヒーロー

「おやおや。物騒だな」

ゲッコー仮面はやはりひるまず、かわりに大げさに肩をすくめた。
「君達はどこかのヤクザかマフィアの構成員かい？ まあ、どこに
したってそんなチンピラにも銃を持たせるなんて程度が知れてるな」

「なんだと？」

「わからないか？ お前達が雑魚だと言ってるんだ」

ゲッコー仮面はそう言って一歩踏み出した。

「貴様……それ以上動くな！ 撃つぞ！」

「断る。どうせ動かなくとも、いずれは撃つつもりなのだろう？
ならば、撃てばいい」

さらに一歩。

「撃たれても、よけるのは造作もないことだからな
一歩。」

「銃をよけるだと？ そんなことできるわけが……」

「さっきの不良少年のしたことがそれではないかな？ もっとも、
あれはRPGだったが、まあ似たようなものだ」

一歩。もう少しで、銃を持った若者に手が届く所まで、ゲッコー
仮面は接近した。

「さて……ここで選択させてやろう。すなわち、おとなしく武器を
捨ててここから立ち去るか、私に殴り倒されるかだ」

「殴り倒す？ あんたが、オレを？ 無理だろ。あんた、さっきガ
キ一人に負けてたじゃんか」

「あの不良少年か？ ふむ……少なくとも、君達三人がまとめてか
かってきたとしても、あの少年には勝てないさ。それに………手
加減するのは子供相手のときだけと決めているのでね！」

そう言うが早いか、ゲッコー仮面は若者との距離を一瞬で詰め、
強烈なアッパーを食らわせた。その拍子に銃が若者の手から落ちた。

「がっ……」

若者の体が一瞬宙に浮く。ゲッコー仮面はその体をひつつかみ、別の若者に向かって投げつけた。その結果を確かめず後ろに振り返ると、マラカス仮面が背後にいたもう一人を地面に這いつくばらせているところだった。

「……………」

ゲッコー仮面は先ほど投げた若者の方に近付いた。投げた方は気絶していて、その下敷きになった若者が這い出ようとじたばたしている。

「しばらく、眠っていいようか？」

ゲッコー仮面はそう言って、もがく若者の顔面を容赦なく踏みつけた。若者はやはり気絶した。

「……………」

すぐに二人のボディチェックをする。他に銃は持っていないようだが、予備の弾倉は全て回収しておく。

「マラカス仮面、そっちはどうだ？」

「銃は無い。バタフライナイフがあった」

「もらっておけ」

マラカス仮面が無言で頷くの見、ゲッコー仮面は再び二人の若者に目を遣った。

ちよつと動物園まで遊びに来た。そんな感じだ。おそらくは本当にそうなのだろう。だが、彼らは同時に、なにかしらの武装組織の構成員だった。RPG7を欲しがっていたのは、単に強い武器を手に入れたかったのか、それとも組織に献上して己の株を上げたかったのか。

だがそんなことは大した問題ではない。より重大なのは、こんな若者が銃を持っていること。そして、それをさせた存在だ。そんなものが、ここ浅葱市にはいくらでもある。

「世界中の悪意が集まる場所、か……………ひどいものだな」
マラカス仮面の近付いてくる気配を感じた。

「どうだった？」

「他に武器は無かった」

「そうか。ならばすぐに撤退しよう」

「こいつらはどうする？」

「放っておく。いずれ目を覚ますか、誰かに見つかるだろう。どちらにせよ我々が困ったことになることはない」

「そうか」

「……………ところでマラカス仮面」

「なんだ？」

「我々は今、大きな悪意の一端を垣間見た。そうだ——これはほんの一端に過ぎない。だがそれでも大きな悲劇だ——こういった若者の、存在自体が悲劇だ。マラカス仮面。この世界は悪意に満ちている。そんな中で正義を声高に叫ぶのは野暮かもしれない。しかし、いやだからこそ我々は戦い続ける！——そのことを再確認したよ」

マラカス仮面が大きく頷いた。

「さあ、マラカス仮面！　そして歌おうではないか！　正義の歌を高らかに！」

そしてゲッコー仮面は、マラカス仮面のギター伴奏に合わせて歌いながら、どことも知れず去っていった。

ただ正義を守るためだけに、ゲッコー仮面はいつまでも戦う。

第56話 残った謎

「え……、テツが戦う………って?」

「はい。私に任せてください」

「………できるの?」

「大丈夫ですよ……あ、それとも……」

テツがいたずらっぽく笑いかけた。

「強い女の子はお嫌いですか?」

「別に……」

「ではアルミ様は、お姫様に守られる王子様の役をしてくださいね」

「もう勝手にしろ……」

「はい」

テツはエディターズバッグからなにか細長い物を二本、取り出した。

長さ五十センチほどの片手剣。柄頭と鍔が湾曲しているのが特徴か。

「ではアルミ様、下がっててください」

エディターズバッグをアルミに預け、テツは虎と向かい合った。

辺りを静寂が支配した。それは一瞬のことだった。

そして両者は同時に動いた。

虎が飛びかかってきた。テツはそれを横に受け流し、虎の胴を剣で一閃した。虎は頭から地に倒れ込む。

「……………死んだ?」

「いいえ……急所ははずしています」

二人のしている前で、虎がよろよろと立とうとしていた。

「どうしますか? とどめをさしましょうか?」

「いや。テツ、逃げよう」

アルミはテツの手を掴みながら言った。アルミはそのまま走り出し、テツは手を引かれるままついていった。

「……ねえ、アルミ様」

途中、テツが話しかけてきた。

「虎を殺そうとしなかったのは、あなたの優しさですか？」

「……………」

アルミは答えなかった。

「……そうですか——アルミ様、もうここまで来れば大丈夫なのは？」

「……そうか」

テツにそう言われ、アルミは足を止めた。肩にかけていたエディターズバッグを返し、テツと向かい合う。何か言うべきか。そう思った。

「……テツ……お前、何者なんだ？」

その問いに、テツは優しく微笑んだまま答えず、かわりに、

「アルミ様、お迎えが来たようですよ？」

「え？」

アルミの背後を指差しながら言ったテツの言葉に振り向くと、業火と担任の教師がなにやら話し合いながら歩いているのが見えた。まだこちらには気付いていない。

「本当だ。ねえテツ……」

再び顔を戻すと、テツの姿は消えていた。

「……………」

どこかに行ってしまったのか、隠れているのか。あたりを見渡しても見つからない。

「……あ、おい、アルミー！ 無事かー？」

向こうがこちらに気付いたようだが、呼びかけてきた友の声にも、すぐに反応できなかった。

結局、テツとは何者だったのか？

「え……………銃で武装した若者？」

翌朝、いつもと変わらない教室で、業火はアルミに、昨日あったことを話した。

あの後、教師達からお叱りを受け、動物園の職員達から謝罪を受けたりしても大した反応を見せなかったアルミは、業火の報告には素直に驚いたようだ。

「そういえば、銃声を聞いた……………それだったんだろうな。……………ん？ でもおかしくないか？」

「何が？」

「今朝、新聞を読んだ。社会面に昨日のことが書いてあった。……………檻が壊れて動物が逃げ出したとか、長年使っていて老朽化した檻をそのままにしていたて起きたこの悲劇の責任が云々……………まあ、ありきたりでつまらない内容だったが、少なくとも嘘は書いていないだろう。だが、記事にはこうも書いてあった。『幸いにして死者は出なかった』」

「え……………」

「職員が殺されたんだろ？　なのにそう書かれていた。もちろん、第三者の犯行なんだからこの事件とは直接は関係していないのかもしれないが、だが人が死んだんだぞ？　だったら死者が出なかったなんて書けないし、むしろそのことを大々的に報道するのがマスコミじゃないか？　でも、新聞には職員が殺されたなんて書いてなかった……………むう」

アルミはじつと業火を見つめた。

「なぜこんなことになっている？　まず思いつくのは、マスコミが報道を控えたか、警察が発表しなかった。……………でも、それは無いと思う」

「なぜ？」

「マスコミは、こういうことこそ、報道するのが仕事だ。警察は……なんらかの理由で死体について発表しない決定をしたとしても、隠しきれないだろう。最初、警察は動物が逃げた件で来た。マスコミも集まる。そこで銃殺死体が見つかったら、大騒ぎになるだろうし、マスコミも気付く」

「いや、実は、先生は警察に通報してたんや」

「……そうなのか」

「そうや。携帯電話で。その後……あ……」

「うん？ どうした？」

「その後、先生からこのこと——職員が死んだことは誰にも教えるなって言われて……お前に教えたのは、まあアルミならいいかなと思っただけやけど……その、このことは……」

「わかってる。誰にも言わない」

深刻そうだったアルミの表情がふわりとやわらいだ……そしてすぐ真顔に戻る。

「業火……誰にも教えるなって、先生がそう言ったのか？」

「そうやけど？」

「警察に通報した後と言われたんだな？」

「うん」

「なんのために？」

「え？」

「いずれは報道され、明らかなるはずの出来事をなぜ隠す必要がある？」

「それは……」

「その場でそれ以上の混乱が起こるのを防ぐためか？ それもある………あるいは………事件そのものを無かったことに………でもなんで……」

アルミが何を考えているのか、業火にはわからなかった。聞こうとして口を開いたと同時に、始業の時間を告げるチャイムが鳴った。

第56話 残った謎（後書き）

こんにちは。そららです。遠足編でした。

遠足といえば、小学生にとってはそれなりに大切なイベントですね。僕自身にとってはあまりいい思い出はないですが。いえ、遠足ではなく、小学校自体に。

それはおいといて、これで遠足編は終わり。次回から、浅葱市のちよつとした悪と、かなりの悪と戦います。

第57話 行政の勉強（浅葱市編）

浅葱市の行政の中心部は、地理的に見ても市のちょうど中央付近にあった。

浅葱市役所。国内随一の貿易港と犯罪件数を抱える市の行政機関の中枢。そして市の首長の仕事場である。

現在市長の座には、二十五歳の若い男が就いている。

地元企業との癒着や、主に福祉方面の政策の悪さからリコールされた前職に代わって、数ヶ月前に選挙で選ばれた史上最年少の市長。法の定める被選挙権を有する年齢をギリギリで上回っているだけの若い市長に、就任直後は揶揄の声もあったが、その親しみやすさと堅実な仕事ぶりからそのような評価は無くなりつつある。

そんな市長の仕事場、執務室の様子は、一言で言えば“ロック”だった。

前職の市長は徹底した機能主義、効率主義で、執務室内に無駄なものは一切無く、機能美という言葉が似合っていた。

翻って現職。市長としての業務に明らかに必要なさそうなものが大量にあった。

机にはギターやベースがいくつか立てかけてある。その机の上には、写真立て。市長と有名なロックミュージシャンのツーショット。壁の高いところには歴代の市長の写真がずらりと並んでいるが、その端、いずれは今の市長の写真が飾られるスペースには、机の写真立てのミュージシャンのサイン入り色紙が飾られていた。

本棚には、辞書や浅葱市に関する各種資料的な本など“いかにも”な書物にまじって、やはりロック関係の本が大量に置かれていた。そして今、部屋の隅にどんと鎮座している巨大なコンポから大音量で流れているロックな音楽の中で、市長はノリノリで仕事をしている。

とても市民には見せられない姿だった。

そんな折、コンコンとノックの音が聞こえてきた。

「どうぞー」

「失礼します」

執務室に入ってきたのは、スーツ姿の、まだ二十歳に達していないと思われる若い女性で、

「へい、テツ。どうした？」

つい昨日、動物園で小学生の少年に交際を求めた、テツと名乗った人物だった。

テツはいくつかのファイルを抱えながら机の前まで歩いた。

「報告します。昨日の、動物園職員の死体の件ですが、早急に始末の手配をしてください」

「ああ……そうだったね。オーケー、すぐに手配しよう……今、死体はどこに？」

「あの後、動物園から回収してから……私の……アパートの部屋に………。嚴重に封をしてはいますが……あまり気持ちのいいものではないので……」

「本当に、昨日はご苦労だったね」

「いえ。仕事ですから。それともう一つ、昨日のことで。例の少年のことですが」

「君が目を付けている、殺人ボーイかい？……そういえば彼のこと、詳しく聞いていないけど？」

「説明しましょう」

テツはファイルの一つからいくつかの書類と大量の写真を取り出し、机の上に並べた。

「浅倉慎也。現在、北浅葱中央小学校六年四組、出席番号一番。つい先日、十二歳の誕生日を迎えました。生まれてからずっと浅葱市

に在住。学校での成績は群を抜いて優秀で、神童との評価もあります。素行に少し問題あり。家庭環境にも問題があって、父親が海外に単身赴任、母親は引きこもりで部屋から一步も出ない状態らしいです。生活に困っているわけではありませんが、家事は、すべて三つ上の姉と分担してやっているそうです。そして……………」

「そして、君が主張するに、この前起こった二件の殺人事件の容疑者、と？」

「はい」

「……………君のことだ。それなりの根拠があって言っているのだろう。それで、昨日は彼を監視、そして接触したんだろう？どうだった？」

「……………率直に申しますと、彼が人殺しである可能性は濃厚かと。本人は隠しているようですが——あと、ナイフを持っているとの情報も」

「人としては？」

「え？」

「この少年を、殺人の容疑者としてでなく、ひとりの人間として、どう思う？」

「それは…………まあ、魅力的な方だとは思いますが」

「だろうね。そう言うと思ったよ」

「…………なぜ、そのように？」

「この少年の父親は、名前を浅倉諒也というんじゃないかい？海外の赴任先は、アメリカのコンピューター会社」

「そうですが…………なぜそのことを…………」

「実は知り合いなんだよね、諒也と。彼も、非常に魅力的な人物だ」「そうだったのですか」

「神童か。諒也の息子なら納得だ」

「諒也さんも優秀な人なんですネ」

「ああ、優秀だとも。…………世界で最も大きなコンピューターのソフトウェア会社の、全ての技術者を統べる立場だから——そう

いえば、諒也は息子についてこう言っていた。『俺はたしかに有能な人間かもしれないが、俺の息子は、不幸なことに俺の何倍も有能だ』と」

「不幸……ですか？なにが？」

「さあな……諒也が何を言わんとしたのか、俺にはわからない。ただ……そうだな仮に諒也の息子、この少年が殺人犯だとして、諒也の言う通り彼が諒也以上に頭の良い人ならば……そうだな。なにか考えがあってやっているのかもしれない。だが、人を殺すことだけに知能を傾けるような輩なら……あまりにも危険だ。そうでないことを願うが……いずれにせよ、もうすこし観察が必要だね」

「では、しばらく様子見、と？」

「そうだ……ところで」

市長はニヤリと笑った。

「テツは、この少年のことが好きなのかい？」

「え………」

テツのファイルの中から出てきた写真には全て、ツンツン頭でつり目の少年が写っていた。いくつかは学校に保管されていたデータを拝借したもの、つまり折々の行事の集合写真など。他は、明らかに盗撮とわかるものだった。

「盗撮写真が多すぎるね」

「えっと……それは……はい。彼のこと、好きです」

「そうか。なら、彼が愚劣な殺人犯ではないことを祈ろう。……報告はこれで終わるかいい？」

「浅倉慎也については以上です。……それともう一つ、別の事件のことですが————」

第58話 竜

この世界はなんて退屈なのだろう。いつも、そんなことを考えてきた。

自分の周りを見渡す。見慣れた教室と、そこで共に過ごす級友達の姿。愚かしい、思慮の無い馬鹿の集まり。休み時間ともなると友情などという脆弱で軽薄な絆で結ばれた他人とたわけた会話で盛り上がる。

退屈だ。実に退屈だ。

奴らだけではない。身の回りの人間ほぼ全てが、己の家族や外ですれ違う人でさえもが、つまらない、煩わしい。

みんなみんな死ねばいいのに。それで、僕の言うことに素直に従う人だけ残れば、どんなに幸せなんだろう。

そんなことを考えていると、不意に教室の扉が開き、“なにか”が中に入ってきた。

全身を覆う漆黒のローブと奇怪な仮面。その見るからに怪しい“なにか”は突然、腰に差していた刀を抜き――――扉の近くにいた生徒を斬った。首を薙ぎ、頭がころんと落ちた。切り口から血飛沫が吹き出る。“なにか”は今しがた斬った獲物の行く末に見向きもせず、次の獲物に襲いかかった。

にわかに騒然となる教室。必死に逃げようとする者、パニックになりその場にうずくまる者それぞれいるが、いずれにしても“なにか”は動き回り刀を振るい、死体の数はみるみるうちに増えていき、教室の壁といい床といい血糊がべつとりと付いて、辺りに鉄の匂いが立ちこめていた。

いいぞ。もつとやれ。みんなみんな殺してしまえ。

“ なにか ” がすぐ近くまで来た。そして刀を一振り。女子生徒が一人、腹から内臓をぶちまけながら倒れてきた。血と臓物がこちらにも降りかかるが全く気にならない。

遂に “ なにか ” が目の前まで来た。 “ なにか ” はゆつくりとこちらを見据え、そして————刀ではなく、手を差しのべてきた。

ああ——僕は知っている。彼がなんなのか。僕にはわかる。彼の名は———

その差し出された手を握り返した瞬間、世界は一瞬で崩れ去り、眠りから覚醒した。

「……………夢か」

柳瀬ルツカはゆつくりと顔を上げ、辺りを見回した。さっきまで夢に見ていたのと同じ光景。ただし、 “ なにか ” が現れる前の。

どこにでもありそうな中学校の、ありふれた光景。

退屈な日常の光景。

ルツカはため息をついた。わかっている。あんなに都合のよい殺戮者なんて現れるはずがない。

たしかにここは浅葱市だ。日本一治安の悪い場所。けれどもこんなことが起こることはない。

漆黒のローブと仮面。彼の名はドラゴン仮面。昔に読んだ安っぽい絵本のキャラクター。あまりに人気が無く、すぐに絶版となったが、それでもルツカにとってはまごうことなきヒーローだった。

物語の中で、彼は悪魔の城に捕らわれたお姫様を救い出した。いつか、自分の前にドラゴン仮面が現れないか。ルツカはずっとそんなことを願っていた。

お姫様とはルツカ自身。悪魔の城とはこの退屈な環境。いつか、ドラゴン仮面が全てを壊してくれる。そんなことを願っていた。

わかっている。そんなことはありえない……………

「……………なせ。おい柳瀬」

「うん？」

不意に名前を呼ばれて返事をする。

退屈な日常の再開だ。

第59話 竜とその人柄

声をかけてきたのは、さつき夢の中で真っ先にドラゴン仮面に斬られた男子。残念ながら、今はしつかり首はついている。

「柳瀬、なんか、一年の女子がお前を呼んでたぞ。屋上に来てくださいって」

「おいおいまたかよ……」

と、いち早く反応したのはルツカではなく別の生徒。さつき夢の中で心臓を貫かれてた。

「またも外見に惑わされる犠牲者が現れたか……」

「犠牲者なんて……人聞きの悪い……」

「事実だろうが」

「………そうだけど」

ルツカの控えめな抗議はあっさり切り捨てられた。再びため息をつく。

「それだっ！ それなんだよこの色男めっ！」

心臓を刺された方がさらに突っかかってきた。

「その思い悩むような表情！ その美少年フェイスに何人の女達が騙されたことか！」

「騙したつもりはない」

「うっさい」

「はいはい……」

残念なことに、この級友の言っていることはいちいち正しい。

ルツカは自分が女子に人気があるなどと主張するつもりはさらさら無いにしても、否定することは絶対にできない。だって仕方がない。

ルツカの外見は無害な優男だが、すごい美少年であることは間違

いなく、そこに惹かれる人は多い。さらに頭脳明晰で運動神経抜群ともなれば、人気が出ない方がおかしい。そしてルツカは実際にそうであった。

「それなのにつ！」

級友の演説は続く。

「柳瀬お前は今までいくつもの女からの告白を断ってきた！　なぜだっ！？　なぜなんだっ！？」

「それは……好きなタイプがいなかったから」
「ぐわーっ！」

なんか変な声をあげた。

「柳瀬！　なんてことを言うのだねっ！？　ありとあらゆる人が告ってきたじゃないか！　先輩後輩同学年！　超絶美少女から秀才の委員長までお前に夢中になった！　内気な文学少女が勇気を出して告った時はそのいじらしさに感動して泣いた！　主にオレがっ！　なのにお前は全て無下に断ってきた！　一度なんて教育実習生のお姉さんから声をかけられたそうじゃないか！」

「ああ……そんなこともあったね。あれはうざかった」

「うざかっただど！？」

「うん。いきなり話しかけられて、個人的に話したいことがあるから放課後に理科準備室に来なさいと……その場で丁重にお断りしたけど」

「なぜだああああああっ！」

それはもう盛大に叫んだ。

「なぜだっ！？　なぜなんだっ！？　男ならお受けするものだろうっ！　まさかなにがあるかわからなかったわけではあるまいなっ！　？　ああ……二人きりの部屋でお姉さんとの背徳的な個人指導。男子生徒との禁断の恋。それなのにつ！　それなのに貴様はそれを断つつああ！　どぐあっ！　どぶあどうぐあ！」

「いや、もはやなに言ってるかわからない……」

しかし級友はどうばどうばと叫びながらルツカの言葉も聞こえない様子で床を転げ回った。周りがなにごとかと視線を向けてくるがルツカは無視することにした。

「……だがな柳瀬、やはりお前のしたいことがわからない」

と、最初に声をかけてきた方が話を引き継いだ。

「告白はすべて断った。今みたいに呼び出されたら、その場所に行くことすらない。なぜなんだ？ ……好きなタイプがいなかった、だっけ？ じゃあ柳瀬の好きなタイプって？」

「そうだね……僕に絶対服従してくれる人」

級友がどん引きしたが、ルツカはかまわず話す。

「無条件で僕に尽くしてくれる人。サディストの僕の言いなりになってくれる人。ルツカ様に奉仕することが無上の喜び、そんな人………だというのに、向こうが僕を呼びつけてくるなんてありえないだろう？」

「どぐあ……っああ！ このサディストがつっ！」

どうやら好きなだけ転げ回ったようだ。

「そうだね。知っての通り、僕は清く正しいサディストだ」

「ああっ！ なんでこんな最低な男がこんなに美形なんだ！？ 不公平だっ！ 理不尽だっ！」

「まったくだ」

ルツカがしみじみと同意するものだからこの級友の憤りはエスカレートする。

「もう我慢できない！ オレがかわりにもらってやる！」

「……………なにが？」

「その女の子だよ！ その子、今この瞬間も柳瀬が来てくれるのをけなげにも待っているんだろっ！？」

「まあ……そうだけど」

最初に声をかけてきた方が、その気迫に気圧されながらも肯定した。

「なのに柳瀬は行くつもりがない！ 全くない！ だからオレの出

番だ！」

「ああ……つまり、好きな人が来てくれないと落ち込むその子に君が颯爽と登場するわけだ『お嬢さん、失恋のそのつらさはよくわかる。だが失望することはなにもないんだ。大丈夫オレがついてる。なにかあればオレに相談しなさい云々……』と、そうやってかわいい女の子とお近づきになるつもりか」

「なにいつ！？ 柳瀬なぜそれがわかった！？ いやそんなことはどうでもいいっ！ おい！ その子はかわいかったか！？」

「あ……ああ、普通よりずっと、かわいかった」

「決めた！ 行ってくる！ ……………いや、ちょっと待とう。あせってはいけない。慎重にいこう。おい、その子のこともっとわからないか？ 名前とか」

「名前？ そういえば珍しい名前だった。たしか、魚田曾良……」

ガタン———

級友二人の会話、というか押し問答を眺めていたルツカはその名前に突然反応し、立ち上がった。

「お……柳瀬なんだ急に……」

「ねえ、その子、本当に一年の女の子だった？」

「え……まあ、正確にはわからないけど、背の高さとかからそう思った。でも初めて見る顔だったから、同学年でも二年生でもないと思う」

「学年なんかどうでもいい。その子は、本当に女の子だった？」

「はあ？ なに言ってるんだ……その子、すごくかわいかったぞ？」

女の子に決まってるじゃないか。なにより、女子の制服着てたし」

「……わかった。屋上だよね？ 行ってくる」

「え？」

「その“女の子”に会ってくる」

ルツカはそう言うのとすたすたと教室を出ていった。背後で驚きを表現する絶叫が聞こえたが、そんなことはどうだっていい。

自分は今、最高にサディスティックな笑みを浮かべているのだろ
うな。

屋上へ至る階段を上っている途中で授業の開始を告げるチャイム
が聞こえてきた。まあいいや。サボろう。

退屈な日常、退屈な人、退屈な授業。この世界は退屈に満ちてい
る。

だが、最近はそんなことばかりではないのだけれど。

第60話 竜と軍師

校舎の屋上。普段からあまり人のいない場所。しかも今は授業中だ。

一人だけ、この学校の制服を着た“少女”がこちらに背を向け、手摺りをつかみながら校庭の方を眺めていた。

なるほど。“女の子”だ。

「やあ、ソーラ。待った？」

ルツカが声をかけると、その子はこちらを振り返った。

待ち人の来た嬉しさと、それでいて少し待ちくたびたような、そんな表情が、なんともかわいらしい。

そして、制服がよく似合っている。どこにでもありそうなセーラー服だが、それが着ている人の魅力を引き立てる。そうとも。素がきれいなんだから、服飾に凝る必要などない。こういう簡素な服だから、よりよく映えるんだ。

ルツカの観察は続く。

丈の短いスカートを気にしているようだ。それも悪くない。胸の部分の凹凸があまりにも乏しく、というか完全に平らなのはしかたがない。

そう。しかたがない。

こればかりはどうしようもない。

ルツカは相手がなにか返答する前に再び口を開いた。
「うれしいな。ソーラ、君が女装に目覚めたなんて」

「違います!」

魚田曾良という名の少年はルツカの言葉を全力で否定した。

魚田曾良は浅葱市の、ルツカの中学校とは少し離れた場所にある小学校の六年生で、ルツカとは友人以上主従未満といった関係である。決して恋人などではない。

彼は、生物学的にも社会学的にも、れっきとした男だ。

ただし容姿は、というか顔はそうではない。

中性的と表現するのも不適切な、完全な女の子顔。初対面の人の人の一割に驚かれ、残りの九割には普通に女の子と間違われる。本物の女の子よりも女らしい。ザ・女の子。

それが魚田曾良という少年だった。本人にとってははまこと不本意なことであるが。

「じゃあ、どうしてソーラはそんな服着てるのかな? それ、この前あげたやつだよな?」

「あげた、というより着せられた、ですけど」

「でも、今は自発的に着てくれたようだね……ねえ、スカートめくっていい?」

「だめですよ……」

「むう………まあいいや。それで、なんで女装なんてしてるのかな?」

「至急、ルツカに伝えたいことがあって。誰かに怪しまれずにここに入るにはこれしか方法がなくて……」

「そうだな。でも素晴らしいアイディアだ。いろんな意味で。……ねえ、ちょっと脱いでみてよ」

「お願いですからまともに話聞いてください……」

「いいよ。伝えたいことって？ メールとかじゃ話せないこと？」

「はい。ルツカの加担している犯罪のことについてです」

「……正確には、加担させられている。だけど。君の指示でね」

「そうですね。それで、今日は実行日ですよね？」

「そうだ。まさか、なにか問題が？」

「はい……いいえ、まだ確信はできません。実は、ここ数日犯行現場となる場所を視察していたのですが一つ、気になることがあります」

「なにかな？」

「若い女の人に声をかけられました『あの、こういう人通りの少ない道を女の子が一人で歩くと危険ですよ』と」

「ああ……そうだね。例のごとく女の子扱いされたのが気に入らないと」

「いいえ、そうではなくて……まあそれもありますが、それとは別に一つおかしいことが」

「……………なにが？」

「いいですか？ ぼくが言われたとおり、あそこは人通りが少ないです。なのに、人と会いました。妙です」

「……………」

ルツカには、全く妙には思えなかった。

「……ソーラ、人通りの少ないというのは、無人って意味じゃないんだよ？」

「知ってます。でも、やはりあの時間あの場所で誰かに出会う可能性はすごく低いです」

「君の計算では、だけどね。なにしろその場所は、君が、熟考の末に指定した所だからね」

ルツカはソーラの表情を見て、続ける。

「君を疑うつもりはない。気持ちもわかる。でもね、それは慢心というものだよ」

「でも……………」

「なにか特別なことではない。日常的な出来事だよね？」

「……………はい」

ソーラはしぶしぶといった様子で頷いた。まあ、こんな格好までしてルツカに会いに来て、結果がこうなのだから気持ちはわかる。

ここは慰めてやるのが年長者の務めだろう。

ルツカはソーラの頭を優しく撫でた。

「あ……………」

不意の出来事に驚き吐息をもらしたソーラに、ルツカはなおも優しく語りかける。

「わかってる……君は、自分のすべきことをしたまでだ。ありがとう」

「いえ……………これがぼくの役目ですから……軍師としての」

ルツカはクスリと笑った。

そうだ。ソーラは自称とはいえ軍師だ。ならば、兵士たる自分はそれに従う。

まあ、この場合軍師が兵士に仕えているのだけだ。

「わかった。一応、用心はしておくよ」

「……………はい」

なんとか、軍師様の機嫌を損ねずにすんだようだ。ルツカはそのことに満足感を覚えた。さあ、ここからは兵士の仕事だ。

その日の夕刻の少し前。その日の授業が終わった。

「今日はやめてほしかった……………疲れてるのに」

アルミが、教室の窓から外を見ながらつぶやいた。

その視線の先には、ひとりの高校生がいた。

第61話 連続誘拐事件

「お兄ちゃんっ！」

「おっと……………」

さあ帰ろうかと、アルミと連れ立って教室を出た業火は、終業時間の重なったらしい聖火に突然飛びつかれた。

かわいい妹に好かれるのは構わない。だが、人目のある場所でこういうことをするのはどうにかならないものか。

ちらりとアルミを見ると、呆れたような、微笑ましいような、そんな表情をしていたが、聖火と目が合ってたちまち睨みあいになった。視線がぶつかり火花がとんでいる。そんなかんじ。

この二人の仲の悪さもどうにかならないものか。業火は人知れず嘆息した。

聖火としては兄との帰り道を満喫したかったのだろうが、残念ながら邪魔が入った。校門前に氷河が立っていた。

「今日は不良退治じゃない」

「？」

氷河ができるかぎりおもむろに言った言葉に、アルミと業火は様に首を傾げた。ちなみに聖火はどいでもいいといった様子だった。

「最近、誘拐事件が何度も起こってるの、知ってるか？」

「そうらしいな」

返事したのはアルミだが、その話なら業火も知っていた。小学生の女子ばかりねらう悪質な事件。

事件が最初に起こったのは一ヶ月ほど前。それから現在まで、だいたい五日ずつぐらいの間隔を開けて、何度か続いている。

その内容はすべて同じ。下校途中の女の子が突然ワゴン車で数人の男に拉致され、どこか別の場所（それがどこかはわかっていないが、普通の一戸建て住宅のようだったとの証言は一致している）に連れて行かされる。

「そしてなんとも恐ろしい目にあわされる……」

氷河がおどろおどろしく言った。

「……まあ、された方は相当ショックだろうな」
アルミも素直に同意した。

その犯罪者達のアジトに連れて行かれた女の子は数人がかりで着ている服を剥かれ、そして……そして……

「それはもう様々なコスプレをさせられるんだ……」

氷河の言った結論部分にアルミも業火もこくこくと頷いた。

そのアジトにはメイドさんやら巫女さんやらバニーさんの衣装の、しっかり小学生女子のサイズに合わせたものが置いてあり、犠牲者の女の子は強制的に着替えさせられたうえで唐突に写真撮影会に入させられる。衣装を取っ替え引っ替えして、何枚も何枚もパシャパシャと。

そして、その犯罪者達の気が済んだら、再びワゴン車に乗せられて先ほどの誘拐現場まで連れて行かれてそこで解放される。

「誘拐といっても身の代金目的ではないし………こう言うのもないんだが、着替えさせられて写真撮られるだけだから強姦事件でもない。もちろん、それでもかなり大きな罪を犯していることになるんだろうが……それで？ 氷河、この話がどうしたんだ？」

「俺達で解決したいと思わないか？」

「まったく思わない」

見事な即答の全否定だった。こういうとき、アルミは本当に容赦ない。

「いいか氷河冷静になれ。俺達は警察でも正義のヒーローでもない。日常的に喧嘩しているような悪ガキの集まりだ。そういう本物の犯罪者と関わるなんて、危険だ」

「それは……そうだが……いや。そこまで危険でもないだろ？ 別に相手は凶悪な殺人鬼とかじゃない。ただの変態オヤジじゃないか」
「その油断が命取りなんだ………それで、捕まえるってどうやるつもりなんだ？」

「………なんだかんだでおまえも乗り気なんじゃないか？」

「う……うるさいな。聞かれたことに答えろ」

アルミは目をそらして言った。こういう仕草だけはかわいらしい。業火はそう思ったが口には出さなかった。言ったら怒るから。聖火が。

それはともかく氷河の説明は、

「これまでの誘拐は全て別々の場所で起こっている。だから次に起こる場所を予測して、罠を使えば奴らは姿を現す」

「……………」

簡素にしてなんのひねりも無い作戦。アルミは……あ、呆れてる。「やはりバカはバカなのか……まあいいか。乗ってやれないこともない。よし」

アルミはなにか決めたようだ、というか、やっぱり乗り気じゃな

いか。

「氷河。おまえの言いたいことはわかった。やるとすればそれしか方法がない気もしないではない。だが……囷って、誰だ？」

「誰って……それは……それを相談したいんだ。誰かいなか？」

「うん。おまえはそういう奴だ。……なあ業火。俺達の知り合いに、誘拐の囷になってくれそうな寛大な小学生女子っているか？」

「いないな」

「だってさ。だいたい、女子の知り合いすらないのだから」

「……………そうか？」

氷河がなにか言いたげな表情を作った。そしてその言いたいことを正確に汲み取ったのは、

「その役割、わたしがやる」

今まで成り行きをじっと見ていた聖火だった。

その言葉に反応し、他の三人は一斉にその小学生女子を見つめた。

第62話 決意と後悔と

アルミは一瞬、聖火を凝視して、そして、

「……よし、わかった。俺が女装しよう」

なんかとんでもないこと言った。とはいえ、業火としても実はそこまで反対ではなかった。

「いけるかもしれないな……」

「ちよつと待て。無視しないで！」

聖火が若干傷ついた様子で言った。アルミはともかく業火にまで無視されたのがこたえたのだろうか。

だが、それは間違いだ。アルミは決して無視などしていない。

「……………どうする？」

アルミが尋ねたのは業火の方だった。業火は言うべきことが思いつかず、黙って小さく頷いた。

次に氷河を見る。こいつについては、はじめからこうするつもりだっただろうから、言うべきことは無い。

最後に、聖火。

「……………絶対に、後悔しないか？」

「……………うん」

予想外に真剣なアルミの眼差しに気圧されながらも、聖火は頷いた。

「……………そうか。ならいい。一旦解散して後でまたここに集合しよう。細かい打ち合わせはその時に」

皆が同意して、それぞれが一度帰路についた。

気まずい。なんか気まずい。

その道すがら、これまで業火と聖火は一言も言葉を交わしていない。聖火にはなぜか兄が怒っているような気がして、話しかけづらい。

怒っている？ 何に？ やっぱ、凹なんて危険な役割を引き受けたからだろうか？

聖火は早速後悔しつつあった。こんなこと、アルミの耳に入ったら絶対笑われるだろうから口にはしなかったが。

アルミが弟を連れて家に帰ると、姉はすでに帰っていた。

「えっと……ちよっと出かけてくる」

「ん……帰るの遅くなりそう？」

「わからない」

それだけ言っただけで、必要になりそうな用意をととのえて家を出ようとしたアルミは、ふと浮かんだ疑問を聞いてみることにした。

「ねえお姉ちゃん……一般の話だけど、兄とか姉っていうのは、下のきょうだいが危険な目に遭いそうだったらやっぱり止めたいものなのかな？」

「ん？ どうしたの？ なにかあった？」

「いや……俺の問題ではないんだけど……それで、どうなのかな？ ……じゃあ、俺の話だったら？ もし俺が危険な目に遭

いそうだったり……実際に遭ったりすると、やっぱり辛い？ 俺がある日突然とてつもない不幸に襲われたら、やっぱりお姉ちゃんは悲しんだりするのかな？」

「え……えっと……それはどうい……」

「あ……いや、わからないならいいんだけど」

唯の戸惑う様子を見て、アルミは自分が妙なことをしているのでとは思いつた。

かなり抽象的なことを真剣に聞いている。それに、そんなことを知ってなんの意味があるのだろうか？

業火の心情をわかりたいばかりに、端から見ればなんとも唐突で奇妙な質問をしてしまった。

普段ならこんなことしないのに。業火のことになると調子が狂う。嫌だとは思わないけれど。

「ごめん。変なこと聞いた……忘れてくれたらうれしい」

アルミはそう言って、今度こそ家を出た。

ドアの閉まる音が聞こえた。が、動悸はまだ続いていた。

アルミがいなくなったのはわかるが、それでもまだなにか超人的な方法でこちらを見つめているような気がした。

ありえないありえない。そんなただの妄想だ。

——俺がある日突然とてつもない不幸に襲われたら、やっぱりお姉ちゃんに悲しんだりするのかな？

「っ……………！」

唯は思わず頭を抱えた。

その質問を受けた瞬間、冷水を浴びたような、体中の血が一斉に引いていくような、そんな感覚に襲われた。まだ少し残っている。嫌だ。

どうしてアルミはあんな質問したのだろうか。

「もしかして……秘密がばれた……まさか……ううん、でも……………」

唯の気持ちは沈んでいく深く、深く。

秘密。アルミには絶対知られるわけにはいかないこと。もし知られてしまえば、アルミから軽蔑を受けるのは必至だ。そんなのは、嫌だ。

でも、ばれるはずがない。だってこのことを知っているのは唯とあと一人……

「と……とにかく、確かめないと……」

唯はふらふらと電話機の方へ向かった。ルカが不思議そうにこち

らを見つめているのにも気づかなかった。

そんな姉の動揺に気づくこともなくアルミが学校の前に戻つてくると、他のメンバーはすでに全員揃っていた。

「……じゃあ、行くぞ」

アルミのその言葉は、気楽なようで少し緊張の色が入っていた。

第63話 犯行現場へ

案の定というか、氷河は作戦の細かなことは何一つ考えていなかったようだ。

「まあわかりきったことだけど」

アルミは背負っていたリュックから浅葱市のほぼ全域をカバーしている地図を取り出した。

「次の犯行現場はだいたい予想がついてる。行こう」

「ああ……………なあアルミ、そんな荷物必要なんか？」

「うん？」

業火に指摘されて、アルミは他の三人を見つめた。

業火も聖火も氷河も手ぶらだが、アルミだけ荷物を持っている。

「……………まあ、たぶん必要だ。それで、これまで誘拐が行われた場所だが…………」

アルミは歩きながら、地図にボールペンで丸をつけていった。

「これまでの誘拐場所はどの二つも一致していない。だから、今度もまた新しい場所で行われると思う。この考えの妥当性は完全ではない」

全ての丸をつけ終わった。全部で六つ。

「犯行現場の条件としては、人目の少ない、というか無い場所。これまででもそうだったから、これには確証が持てる」

地図を睨む。誘拐を行うにはどこが最適な場所か。

「セオリー通りなら……………でも候補地は多いな……………あ」

地図上の一点に、今度は星をつけた。

「そうか。だいたいわかった」

「ここか…………」

アルミについていった一行が到着したのは確かに人通りの少ない場

所で、

「通学路から外れた、近道だ」

「え？」

「誘拐場所の条件は、人通りの少なさだけじゃない。“獲物”が通らなければ意味がない。だから、こういう場所。浅葱市の小学校にはすべてに、登下校に使われるべき通学路が設定されている。登校は集団登校だからほとんどの生徒は正規の通学路を使う。でも一部の、寝坊したりして遅刻しかけの生徒は、なんとか学校に間に合うと努力する。全力で走るだけでは間に合わない。だから近道の模索が行われるんだ」

「そうなのか？」

「……………たぶん。確証は無い」

「……………」

「でも、ここはそんな近道の一つだ。…………下校の時は、帰り道はまあ、自由だ。だから、早く帰りたい奴はこういう道を使うんだな。それで誘拐される、と」

「ふうん。じゃあ、わたしはここにいればいいのね？」

「そうだ。俺達は離れた場所から見ている。なにかあったらすぐに助けるから」

「……………本当に？」

「本当だ。ここで嘘ついてどうする」

「そうだね……………ねえ、誘拐って、どんなふうにされるのかな？」

「うん？ 連れ去られる方法か？ たぶん、普通に車の中に押し込まれるだけだろう」

「そうなの？ なんか、気絶させられるような……………クロロなんとか、だっけ？ ああゆうのって使わないのかな？」

「クロロホルムか？ 使わないだろうさ。あれ、そんなにうまく気絶させられるようなものじゃないから。……………そうだ、これ持つてろ。できるだけなくさないように」

アルミはリュックから手提げ鞆を取り出して聖火に渡した。

その手提げ鞆は、妙にかわいい猫の柄の布でできた、一応は使えそうなものだが、製品と言うにはどこかあるそんな手提げ鞆だった。「……………なにこれ？」

「去年家庭科の時間に作った」

「んー、そういえばお兄ちゃんもこういうの持って帰ってたね。こんなかわいい柄じゃなかったけど」

「そうやな。これ、いくつかの柄から選べるんや」

「ということは、アルミわざわざこんなかわいい柄選んだのか？」

「う……………うるさいな。別にいいじゃないか……………かわいかったんだから。……………そんなことはどうでもいい。聖火。とにかく持っている」

「わかった」

「じゃあ、始めるぞ。ここでじっとしていればいい。……………気を付けて」

「うん」

アルミは、業火、氷河を引き連れて離れていった。

第64話 誘拐

聖火を見守る場所は、あまり近すぎると“奴ら”に気付かれるかもしれない。

今回事件が起けると推論されたその場所は、割と大きめの竹林に面した車道で、歩道は併設されていない。それが通学路から外された理由でもあるのだが。

「俺達は隠れないといけないわけだ」

「どこに？」

「もちろん、この竹林だよ」

「……そうか」

三人はがさがたと音をたてながら竹林の中に入ってしまった。

外からこちらを見られないようにするには、それなりに奥まで入っていかなければならない。かといっていざという時駆けつけられないような距離では意味がない。

「まあ、竹に紛れられるからそこまで気にする必要もないけど」

とか言いながら、アルミの歩みは止まらない。石橋を叩いて壊すタイプか。

「なあ、ところでさ、奴らは誘拐にワゴン車を使うんだったな」

アルミが立ち止まるのを見計らって氷河が話しかける。

「うん？ そうだが？」

「もしかして、車の音が聞こえたら動くとか、そういうつもりなのか？」

「……………まあ、そうだ」

氷河は何を聞いているのだろうか？

「だったらさ……………さっきから聞こえているこの音はなんだろうか？」

「え？」

そういえば、車の走行音が聞こえる気がする。それはだんだん大きくなってゆき、そして――止まった。

「っ！ まさか！」

アルミ達が振り返ると、竹の幹の隙間から一台のワゴン車が走り去るのが見えた。

聖火の姿は消えていた。

予想外の不意打ち。いや。こういう事態も予想はできたはずだ。

油断していた。頭のどこかで、実際に誘拐など起こらないと、気付かぬうちに思っていた。

「追いかけるぞ！」

アルミは二人の返事を待たずに走り出した。

突然のことに声をあげることすらできなかった。突然ワゴン車が目の前に止まって、なにか反応する暇もなく、中から出てきた男に手で口を塞がれもう片方の腕で軽々と持ち上げられて車の中に押し込まれた。

クロロホルムって本当に使わないんだな―とか、どうでもいいことが思い浮かんだ。

そして今、かなりのピンチだ。

乗せられた車は現在進行形で走行を続けている。車の後部に座らされて、中年の男ばかり三人に、にやけた顔で見つめられている。運転席にいるのも合わせれば、男の数は四人。見つめられているだけでなにかされているわけではないが、怖いものは怖い。先のわからない恐怖、とでもいうのだろうか？ これからどうなるんだろう。

聖火はアルミから渡された手提げをギュッと抱きしめた。あまり中身の入ってなさそうな、頼りなさそうな感触。でも、これを手放してしまえば他に頼るものはない。そう思った。

「——おい竜崎。どうした？ なにかあったか？」

「え……？ あ——いえ、なんでもないです」

「……？」

中年男のひとりが誰かに尋ねて、誰かが返事した。

中年ではない。もっと若い声。聖火はもうひとり、男がいることに気付いた。

中学生くらいだろうか？ 他の大人の陰に隠れて気付かなかった。

竜崎と呼ばれたその中学生はまん丸のメガネをかけた、美形だが冴えないひ弱な文学少年、そんな印象を聖火に与えた。はつきり言っ
ってこの場の雰囲気にもったくそぐわない。

今、竜崎は聖火にまったく目を向けず、何かを気にするようにしきりに後ろを振り返っていた。

……と、今の聖火にはそんなことはどうでもよかった。

問題はこの状況。敵は明らかに自分より年上の男が五人。

これはもう独力で解決できることではない。

「アルミの嘘つき……すぐに助けるって言ったじゃないの……助けにきてよ……」

誰にも聞こえないぐらい小さな声でつぶやいた。

男達はまだなにもしてこない。

そんなこと、なんの安全の保証にもならないのだが。

第65話 追跡

たとえ全速力で走ろうとも、車に勝てるわけもない。そんなことはわかってる。それでも、アルミは追いかける。

「……っ、はあ……はあ……」

ここまで全力で走ったのはいつ以来だろうか？　すでに車は見失った。業火、氷河ともはぐれた。今は合流を待つ時間も惜しい。

「はあ……はあ……どうしよう……」

一度立ち止まる。疲れがどっと押し寄せてきた。心臓の鼓動は早鐘のよう。膝が笑って、少し気を抜けばその場に崩れ落ちてしまいそうだ。

冷静になれ。考えろ考えろ。あの車はどこに向かう？

頭の中に地図を描いた。車の進行方向とこれまでの誘拐現場。敵のアジトはどこだ？　今までの被害者は、連れて行かれたのはごく普通の住宅だと言っていた。ならば、どこだ？

「……………よし」

アルミはだいたいの検討をつけ、再び走り始めた。

「あ……あいつ……走るの……速すぎ………だ………ろ」

「ああ……そうや……な」

業火と氷河も車を追いかけていたのだが、当然勝てるはずもなく、ついでにアルミとも引き離されて進むべき道を見失った。すでにスタミナも尽きかけていて、なんとなく打つ手無しな雰囲気漂っていた。

疲労から、もはや走っているとは言えない、歩いているような速度になっていた。体力の温存やペース配分など一切考えずの全力疾走はさすがに辛かったが、それでも、どちらも立ち止まろうとか少

し休憩しようとか言い出すことはなかった。
そんなこと言えた状況ではない。

「……………なあ、業火」

氷河が不意に話しかけてきた。

「なんや？」

「俺のこと、恨んでいるか？」

「……………なぜ？」

なぜ氷河を恨むことがあるのか、本当にわからなかった。

「え……………なぜって……………それは……………おまえの妹が誘拐されたのって、俺のせいだから……………」

ああ、そういうことか。

「そうやな……………確かに、おまえのせいかもしれんな……………でも、おまえのせい、だけではない」

「なんだよそれ……………俺の責任じゃない、だから気にするな——そうとでも言いたいのか？」

「そうや……………アルミやったらそう言うやろう」

「おいおい……………あいつがそんな優しいこと言うはずないだろ」

「言うで……………あいつはわりと優しい、というか甘いところがあるから……………友達のためならそういう、罪、とか、間違い、とか、全部自分で引き受けてしまふんや。なんでも自分のせいにする。俺や、おまえを守るために。しかも、そういうことをわざとではなく無意識でしてしまふ。そう思ってしまう」

「……………」

「今のも、誘拐犯を捕まえようとか言い出したのは氷河や。でも、やるって決めたのはアルミで、だから責任は全部自分にある。そう本気で思ってしまう。だから、氷河が悪いとは全く思っでなんていない」

「そうなのか？ いや、確かにおまえにとってはそのかもしれないが……………なら俺は？ 俺は、年上だっでのに馬鹿にされてるようなやつだ

ぞ？」

確かにそうだろう。だが、

「あいつは素直じゃないからな……でもな、そうは見えてなくてもな、アルミはおまえのこと、わりと大事に思っとおで？」

「そうなのか………？」

「そうや、アルミはそういう奴や」

業火が自信たっぷりにならずくと、氷河はなぜか考え込む仕草をした。ややあって口を開く。

「それでおまえは、アルミのその性格が気に入くない、と？」

「え……」

業火は思わず歩みを止めた。

氷河が何を言っているのか、全く理解できなかった。

「ここ、か」

アルミがたどり着いたのは、市内にある住宅街のひとつ。車の走っていた方向とこれまでの誘拐場所から犯人の本拠地を特定した。それでもいくつか挙がった候補の中から、ワゴン車を買う余裕などなさそうなほどに所得水準の低い場所を除外。あとはほとんど勘でここと推測した。

つまり、ここに聖火が連れてこられた可能性は高いが、そうでない可能性の方が高い。違ったら、大幅な時間の浪費だ。

「でも、やるしかない、な………」

きっと大丈夫。さっきだって、幸か不幸か誘拐場所の予測を当ててしまったじゃないか。これも、きっと当たっている。

「……って、根拠が無いにもほどがあるな。まあいいや。……聖火、すぐに助けるから………」

アルミはリュックからラジコンのコントローラーを取り出した。いくつかスイッチとボタンを操作して、コントローラーについているスピーカーに耳をすます。

無音。反応なし。

聖火に持たせた手提げにはツチノコロボットが入っていて、それに搭載された発信機から信号を受信するとコントローラーから音がでる……という仕組みなのだが。いかんせん距離が遠すぎるのだろう。本来は草むらの中とかでこのロボットをなくしてしまった際に使うような機能だと、前の持ち主たる町内会長は言っていたのだからあまり広範囲に効果のあるものとも思えない。あくまで補助的なものだ。

とりあえずは聖火を連れ去った車を探すしかない。車の外見もナンバーも覚えている。アルミはあたりを見渡し、目的の車を探し始めた。

第66話 友情とか信頼とか支え合う仲とか

「あ、いや。悪く思わないでくれ。別におまえとアルミの関係がどうとか……その、問題があるとか言いたいわけじゃないんだ」

氷河も立ち止まり、なにか弁解でもしているように喋った。

「おまえ達の関係はすばらしいよ。友情、というか信頼関係とか。すごく仲がいいってのがひしひしと伝わってきて……そういうの、俺には真似できない。俺にはそんな友達いないし、友達のひとりをそこまで信頼したりできない。仲良くなることなんてできそうもない。……なんていうか、さ、お前ら、単に友達っていうよりはむしろ、どっちかというところ……」

「夫婦、か？」

「……………ああ」

氷河の言いたいことはなんとなくわかる。

自分とアルミの関係が、傍から見れば友情というには深すぎるようだ。そんなことは承知しているし、周りから指摘されたことも一度や二度ではない。アルミが異性に全く興味を示さないのもあって、お前らつき合ってるんだろうとか、まるで夫婦みたいだなとか、何度もそう言われたことがある。わりと大きな噂になったこともあった。全て、その発信源はモテるアルミに嫉妬した男子生徒かそういう話の好きな女子生徒。

業火にはBLという概念は理解できないが、どうやらアルミにとってはこの評価はまんざらでもないようだ。

なら、自分はどう思っているのだろうか？

「夫婦か。別にええけどな。でも、俺に、俺達としてはこれで普通なんや。どれだけ仲が良くて、夫婦みたいに見えても、これでいい。なんの問題もない」

「そうか……………たぶん、アルミは友達ってのをなにより大切にし

たいんだろうな」

「そこに、氷河、お前も入ってる」

「そうなのか………って、おいおい。俺は、夫婦になんてなりたくなんかないぞ？」

「わかってるって。そんなこと、アルミもわかってる。だから、あんな態度になるんやろうな」

「そういうことか。だから、俺のこともかばってくれる、と——」

「それで、アルミのその性格、お前はどう思っている？」

「……なにが？」

「つまりだ、その、全部自分のせいにしてしまう性格、気に入らないとか好きになれないとか、そこまではなくても、頑張りすぎなんじゃないかって、そう思ってるだろう？」

「え………」

「その様子じゃ、凶星のようだな」

「あ……ああ」

いつも思っていることをずばり言い当てられて少し驚いた。でもまあ、当然のことか。

「俺はお前ほどアルミとつき合い長いわけじゃないが、それでもわかるぞ。アルミは、少なくともお前については、友としてちよつと異常なまでによくしてくれている。まあ、なんだ。俺には、命懸けてるような感じすらあるんだが？」

「なっ……」

今度こそ本気で驚いた。命懸け、と。なんで氷河がそんなこと知っているんだ？ いや。違う。知っているはずがない。

「い……命懸け、か？　なんか、俺のために一生尽くす、みたいな？」

「まあそんな気はするがな。なんか、俺達のこと大事にしすぎじゃないか、と。もっと自分をいたわれと……ああ、これだ。もっと俺達を頼れって言いたいことがあるな。あいつ、要するになんでも自分で解決しよう——うん？　どうした業火？　様子が変だぞ？」

「あ……なんでもない。そうか。命懸け、か」

「いや。そこまでは言い過ぎかって気もするが」

「いや。言い過ぎじゃない」

「うん？」

「あのな、氷河。アルミは実は………あ………」

「どうした？」

「……なんでもない。忘れてくれ」

「？ ……わかった」

危ない危ない。あやうく、秘密を漏らしてしまうところだった。

秘密。アルミとその家族以外では、業火だけが知っている秘密。そう簡単に誰かに知らせてはいけない。知らせるかどうかは、全てアルミが決めることになっている。氷河にとはいえ、その決まりを破ることを、アルミは決して快く思わないだろう。

「それで、なんの話やったかな。俺がアルミのその性格をどう思っているか、やったか——そうやな、俺もアルミにかなり頼られているところはあると思うんや。あいつ、けっこうわがままやからな。だから全然気にならない。慣れたってこともあるけどな」

「………本当にそうなのか？」

業火の言葉に、氷河は腑に落ちない様子だ。

「だったらさ、業火、お前はさっきから何に苛立ってるんだ？」

「え？」

「なんかさ、苛立ってるというか怒ってるというか、そう見えるぞ？ その原因が俺じゃなくて、アルミでもないなら、いったいなんなんだ？」

まったく。どうして今日の氷河はこうも勘がいいんだろうか？

「そうやな………確かに苛立ってた。原因は聖火———と、それ以上俺自身」

「お前の妹か。やっぱり、皿をやりたいたんて言ったから？」

「そう……でも、そうなったのは俺のせいなんや」

「……………」

「聖火は俺のことが好きや。……だから、アルミのことをどうしても好きになれない。俺を取られたように思えるんや。あの二人は仲が悪い。そのことはよくわかつている。その原因は俺や。……そんななかで、俺がアルミと、もう一人高校生とつるんでなにかやっているとしたら、気になるのは当然や。それで、兄が何をしているのか知ろうと思った」

「だから、囧になるなんて言ったのか」

「そうや……………俺は、あの二人が仲の悪いままだと、いつかこういうことになるってわかつていたんや。でも、なにもしてこなかった……できなかった。聖火を止めることができなかった」

「……つまり怒りの原因はお前自身ということか。なんだ。アルミと同じじゃないか」

「……………え？」

「自分のせいにするって。だから仲がいいのか。似ているんだな」

「……………そうかもな」

「そうか……………うん。だいたいこの事情はわかった。あの二人の関係は気がかりだが、そう心配することでもないか。よし。疑問が解決したところで、今やるべきことをしようか……………みんなで」

「みんなで……………」

「そうだ。いいか、本当に悪いのは俺達じゃない。あの誘拐犯だ。だから、あまり悩むな。一緒に、あの妹を助けようぜ？」

氷河が笑顔で言った。

自分を責める気持ちが少しやわらいだ気がした。

「そうやな。行こう——一緒に」

「ああ。一緒に」

二人はまた走り始めた。

行き先はわからない。でも、歩みを止めなければなにかあるはずだ。

第67話 紳士の針仕事

男達は誘拐の成功に歓喜しているが、こちらとしては生きた心地がまるでしなかった。

聖火は今、手足を縛られ猿ぐつわをかまされてベッドの上に転がっている。ごく普通の住宅の寝室。そんな雰囲気の部屋だ。おそらくは本当にそうなのだろう。男のひとりに担がれて、階段をのぼったような気がしたから、たぶんここは二階だ。

手提げ鞆はベッド脇の小さな机の上に置かれた。手をのばせばとどきそうな距離だが、縛られているためそれはできない。

男達はすぐにでも写真撮影会を始めそうな様子で、もはや万事休すといった状況だった。だったのだが、

「あの……撮影に入るの、もう少し待ってくださいませんか？」

不意に、男のひとりがそんなことを言った。まん丸メガネの美少年。竜崎という名前の中学生だ。

「うん？ どうした？ なにかあったか？」

「たいしたことではないですけど、今作っている服ができるまで待つてもいいのでは、と」

「そうか……で、なんの服なんだ……お、スク水か」

竜崎の見せたものに、他の男四人は歓声をあげた。

作りかけの服とは、学校の水泳の授業で使われる紺色の水着。その古いタイプ。いわゆる『旧スクール水着』と呼ばれるものであった。

「それはいい。それはいい考えだ竜崎」

「GJだ竜崎」

「でででできるだけ、は、はやく仕上げてくれ」

「いやむしろ完璧に仕上げてくれ」

男四人が口々に竜崎を褒め称えるが、当の竜崎は予想以上の食いつきに苦笑し、黙っていた。

「だったら、ちょっと時間空くな」

「いいじゃないか。楽しみは後の方がいい」

「と、とと、とにかくおとなしく待っていよう」

と、こうなるのはいつものことなのか、男四人は連れ立って部屋を出ていった。あとには聖火と、黙々と裁縫針を動かす竜崎だけが残される。

かくして撮影会の開始は先延ばしになったが、状況に大した変化は無く、竜崎が服を完成させるのは時間の問題で、しかもスクール水着ということはつまりこれから全裸に剥かれるわけで、なんかいろいろ絶望的だった。

そのまま二、三分、聖火にとっては永遠にも感じられるような時間が流た。時々、竜崎が針仕事の手を止めずにチラチラとこちらを見つめる以外に何の動きもない沈黙の時間。不意に、竜崎が口を開いた。

「……独身の中年男が四人。僕を入れて五人。この家、誰のかわかるかい？」

「？ ……むー？」

その誘拐犯と呼ぶのにまったく似つかわしくない穏やかな口調に、一応は返事しようとしたが、口を塞がれているためにできなかった。

「あ、ごめん。喋れないよね」

竜崎はベッドに歩み寄り、聖火の猿ぐつわと拘束をといた。その顔には笑みが浮かんでいたが、そこから邪な意志は、まったく感じ取ることではできなかった。

体の自由を取り戻した聖火はベッドの上に座りなおし、竜崎はまた裁縫仕事に戻った。

「ここはさ、あの大人四人のうちの一人の家なんだ。といっても、彼は今独り身だけだね。奥さんと子供に逃げられたんだって」

まるで話すことを心から楽しんでいるような、本当にきれいな笑顔で竜崎は語りかけてくる。聖火が返答に困って黙っていると、竜

竜崎はまた話を続けた。

「その逃げられた理由がちょっと変わっててね、もともとこの男は重度のロリコンでさ、いつか産まれてくる自分の娘にいろんな格好をさせて写真を撮ることを夢見て、そのために生きてきたんだって……そんな理由で結婚して、見事に女の子が産まれた。奥さんには自分の野望を隠したまま、ね。でも、人生あんまりうまくいかないものなんだね。その女の子の顔がさ、なんというか、男の期待したレベルにまったくどいてなくて」

竜崎の言いたいことはわかった。聖火がそれは残念でしたねと小さく言うと、初めて返事をしてくれたのがうれしかったのか、竜崎はありがとうとはっきり礼を言った。話は続く。

「たしかに、男にとっては残念なことだった。その失望は大きさはよほどのものだっただろうね。でもさ、信じられる？ 彼、ある日頭にきて実の娘にお前はブスだって言ったんだよ。五歳ぐらいの女の子に、面と向かって。そんなことがあって、奥さんにも趣味と目的がばれてね。すぐに離婚。奥さんは子供を連れて実家に帰ってしまった。結婚のためにこんな家まで建てたというのに、救いがないにもほどがあるよね」

「そうですね……なんというか、ひどい話ですね」

同情されるべきはその母子だが。

「それでこの人は、満たされない欲求を満足させるため、こんなことを始めた。同じ趣味の仲間を集めて、自分の娘にしようとしていたことを、赤の他人の女の子にすることにした」

「！！」

竜崎の穏やかな態度に、つかの間今の状況を忘れていたが、この言葉で一瞬で現実に取り戻された。

「……できた」

針仕事を終えたらしい。竜崎はできたばかりの紺色の水着を満足げにながめた。

第68話 救援者

「あ……えっと、竜崎さん、と呼んでもいいでしょうかっ!？」

「ん？ いいよ。どうしたの？」

急に声の大きくなった聖火に、竜崎は驚いた様子もなく応じた。

「あの、お願いがありますっ!」

そうなのだ。服が完成したのだったらすぐに撮影会が始まってしまふ。

そうなれば裸に剥かれてしまふわけ。

そうなってしまうのは是非とも遠慮したいわけで。

「ええっと、その、無理なお願いかもですが、ここから解放してもらえないでしょうかっ!？」 竜崎さんと、その男の方達がやりたいことはわかりましたが、わたしとしてはそういうのはやめていたいただきたいので、えっと……あの……助けてくだむぐっ!」

最後まで言いきる前に、竜崎が手で聖火の口を塞いだ。

「困ったな……ちよっと予想できなかったお願いだ」

竜崎は笑顔のまま、しかし声に困惑の色を含ませつぶやいた。

わかっている。こんなことをしてなんとかなる状況ではない。でも、この男ならば、万に一つでも願いを聞き入れてくれるかもしれない。そう思った。誘拐犯の中で唯一、まともに話が通じそうだった。

「さて、どうしたものか……」

片手で聖火の口を塞ぎ、もう片方の手で裁縫針をもてあそぶ。

「僕、撮影を結構楽しんでたからな……それに、逃がしてやることもできないはないけど、あの人達怒るだろうからな。僕はね、他の四人とは少し関係が違うんだ。彼らはごく普通のロリコン仲間の友達だけど、僕はちよっと違う。途中参加なんだ。こういうことが行

われてるって噂を聞いて、興味を持った——本当は、興味を持ったのは僕じゃないのだけど、その説明は面倒だから省くね——それで、僕も参加させてくださいと志願したんだ。向こうにしてみれば、裁縫が得意で好きな服を作ってくれる人材は、歓迎すべきものだったのだろうね。……そういう理由で、僕はあの四人と少し立場が違ふ……彼らなら、君を解放することなんて絶対にならないだろうけど、僕なら……、さて、どうしようか」

聖火は気が気でなかった。自分の運命がこの男の意志にかかっている。それもかなり気まぐれな意志だ。

思案に気を取られ手元が狂ったのか、竜崎の片手から裁縫針が落ちた。それを床につく前に拾った竜崎は、聖火から手を離して、言った。

「わかった。君を逃がしてあげる」

一瞬、耳を疑った。希望していたこととはいえ、本当に聞き入れてくれるとはやはり思えなかったから。

「それは……その、ありがとうございます」

「うん。でもね、いくつか質問したいことがあってね、それに答えてくれたら、だから」

「えっと……はい。わかることなら」

「じゃあ聞くね——君、最初から誘拐されるつもりだったんだよね？」

「え……」

いきなりとんでもないことを聞かれた。そんなこと答えられるものではない。

「あ、変なこと聞いちゃったかな？　だとしたら、ごめんね。でもさ、僕はこう考えてる。君を連れ去ったあの道は、正規の通学路からはずれた近道だ。基本的に、登下校以外に使う生徒はいない。そういう道を選んだ……らしい。僕が選んだわけじゃないから。まあ、彼の言うことはかなり信用できるから、本当なんだろうけど」

彼、とは誰のことなのだろうか？　多分あの四人のうちの一人な

んだろうなと、漠然と思った。

「でも、君はランドセルではなく手提げ鞆を持っていた。もちろん、それだけで異常だと断言することなんてできないけれど、どこか違和感を感じた。あの四人には大したことじゃなかったようだけどね。いつも通り誘拐した……連れ去るやり方がちよつと強引なのは許してほしい。テレビみたいにく、クロロホルムを吸わせて気絶、とかさせられるのなら理想だけど、あいにく、あの物質で気絶させるのってまず不可能なんだよね」

なんだかアルミと同じことを言う。

「もちろん、これがただの杞憂だって可能性の方が高い……でも、気になることがあった。君を抱え上げ車に押し込んだとき、隣の竹林になにか動きがあるような気がした。誰かが追いかけてくる気配も感じたけど、はつきりわからなかった。それとも一つ。悪いとは思ったけど、君の荷物、中見せてもらったよ。なかなか変わったものが入ってたね」

残念ながら、聖火はその中身を知らない。

「そんなに変なものがありましたか？」

「えっと、その反応はどういう意味かな……あの蛇の置物みたいなものって、なんなのかな？」

「……蛇の置物？」

「……蛇にしては、短くてちよつと平たかったような気もしたけど……」

「あ……」

聖火はようやく、竜崎がなにを言っているのか気がついた。本当は置物ではなくラジコンなのだが。そして、そんなものをなぜ渡されたかについてはまったく検討もつかないが。

「それ、蛇じゃなくてツチノコです」

「ツチノコ？ ……どうしてそんなものを持ち歩いてるの？」

「それは……その……わたしにもわからないです」

なんとか理由をでっち上げようとしたが、無理だった。

「わからない？」

「はい……それは、持っておけと渡されたものなので」

「そっか……うん。僕もそう考えたんだ。それで、誰に持たされたのかな？あと、なんのため？」

「どうやら、観念して洗いざらい白状するしかないようだ。」

「それを持たせたのはお兄ちゃんの友達です。理由は……たぶん、竜崎さんの思っている通りです。噂の誘拐犯を捕まえたいって話になって、それでわたしが囹になって……連れ去られる時に捕まえるつもりだったけど失敗した……ということだと思います。それ以上のことはわかりません」

「うん。だいたい僕の予想した通りだね」

竜崎の声や表情にはまったく変化が見られなかった。普通なら、もつと驚いたり怒ったりしてもいいのではないだろうか。下手をすると自分達の安全に関わる問題となるのに。

「最後にもう一つだけ。そのお兄さんの友達というのは、二十歳に少しとどいていないぐらいのお姉さんかな？」

それは違う。というか、竜崎の意図していることがわからない。

「いいえ、違います……そういう知り合いもいません」

「そうなの？ 本当に？」

竜崎は不思議そうに念を押したが答えは変わらない。

「そうか………わかった。ありがとう。約束通り、君を解放するよ———これから言うことを守っていれば君は安全だ。まず、僕はこの部屋を出て、あの四人を足止めする。君は僕が出たあと五分ぐらい待って、それから後ろの窓を開ける———それだけ」

「………え？ それだけ、ですか？」

窓を開けるだけで逃げられるのだろうか？　ここは二階だというのに。

「うん。あとはなんとかなる。だから信じて、ね？」

「……はい」

どちらにしろ、竜崎に従う他はない。それに、この青年が悪人に

はどうしても見えなかった。

「じゃあね。話ができて、楽しかったよ」

竜崎は微笑んで、部屋を出ていった。一度立ち止まり、四人がいるのは書斎かな、とだけつぶやいた。

そして部屋には聖火だけが残り、時計がないかとあたりをみまわすと、

――コンコン

背後からガラスを叩くような音が聞こえた。竜崎のいたところから聖火を挟んで反対側。そこに大きな窓があった。

振り返ると窓ガラス越しに、二十歳に少しとどいていないぐらいのお姉さんが、こちらに笑いかけてなにか言っているのが見えた。

開けてください、そう言っているようだった。

「……見つけた」

アルミはようやく、目的の車を探し出した。少し近付くと、手にしているコントローラーからかすかに音がした。

その車はごくありふれた民家に駐車されていた。おそらくビンゴだろう。

「さてどうするか……どうにかして侵入して……その前に業火達に連絡しようか……どうやって？」

氷河が携帯電話を持っているが、アルミは持っていない。今まで必要だと感じたことがなかったため、姉ともども来年度までは持たないということにしていた。次の春にはアルミは中学生で唯は高校生。きりはいい。

周囲に公衆電話も見あたらない。

「……………困った。ま、なんとかするか」

ここまでできたのだから、立ちふさがる障害は少ないはずだ。

残念ながら、屋根の上に昨日出会った女性がいるのには気付かなかった。

第69話 侵入

まだ五分経っていないが、無視を決め込めるほど聖火の神経は太くはなかった。窓を開けると、そのお姉さんはするりと中に入ってきた。

スーツ姿で童顔で、髪の短いそのお姉さんは、驚き戸惑う聖火に折り目正しく礼を言った。

「ありがとうございます。はじめまして」

「あ……えっと……」

「誘拐されて、こんな所にいるのですよね？ 恐かったですよね？ もう安心ですよ」

「そうですか……ええっと……あなたは誰、ですか？」

いろいろわからないことだらけだが、まず聞くべきはそれだ。

「はい。私は……まあ、通りすがりの正義の味方、とでも言いましょうか。名前は、テツっています」

「テツ……さん……」

女性の名前にしては変わっているな。そう思った。

突然氷河の携帯電話が鳴ったと思えば、知らない番号からだった。どうやら携帯電話の番号のようだが、

「んあ？ アルミか？ ……ああ……ああ………ああ、そうか……

………わかった」

「アルミから？」

「そうだ。聖火の居場所を見つけたらしい。行こう」

「ああ………なあ、一つ聞いてくれ」

「なんだ？」

「アルミどうやって連絡してるんや？ あいつ携帯なんて持ってな

いで？」

「おいアルミ、業火の話聞こえたか？ ……うん？ ……そう
だ……………おいおいそれは……………待て。ちょっとそ
れはまずいぞ……………いやそうだけどさ」

「……………だいたい想像できるけど、なんて？」

「近くに公園があって、そこで多くの小学生が遊んでいて、その中
には自転車であっている子供でなおかつ親に携帯電話持たされている
のもいて、自転車の前かごに携帯置きっぱなしで遊びに夢中なバカ
がいたからちようどよかったと無断で借りたらしい」

「……………。まあ、その子供も不注意やけどな。でもアルミやっ
たら、子供と仲良くなるのって難しくないと思うな。仲良くなっ
てから、許可取って借りる方が、後で自転車にバレずに返しておく手間
が省けるやろうに」

ドラゴンナイトやらトンファーマンやら、子供との共通の話題で
あるテレビのアニメやヒーローに詳しいアルミなら、そんなこと造
作もないことのはずだ。アルミ自身はそれを喜ばないだろうが。

「ん？ いや。自転車ごと盗んだらしい」

「……………なんで？」

「俺に聞くなよ」

電話はすでに切れていた。

「正義の味方……………ですか？」

家の二階の窓から入ってくるような変な名前のお姉さんの言うこ
とは、やっぱり変だった。

「はい。浅葱市の平和を守る正義の味方です」

「えっと、それは、つまり？」

「この市の中で起こった犯罪について、警察とは別に調べて解決す
るのが仕事です。私が一人で、とある偉い人の指示でやっています。

……例えばあなたが巻き込まれたこの誘拐事件。私はこの事件を解決するために、今までの誘拐についての情報を細かく分析して、次の誘拐が起こる場所と犯人の住居、つまりこの家の場所を推測しました。……この推測は当たっていたのですが、誘拐現場を押さえようと数日間あの道に張り込んでいたのに誘拐はなかなか起こりませんでした。だから、今日はこの犯人の家に来て屋根の上から見張っていたのですけど、これです。こういう日に限って誘拐が起きてしまいました」

なかなかうまくいかないんですねと、テツは苦笑いした。

「そのせいで、あなたには怖い思いをさせてしまいましたね。それはとても申し訳ないです。でも、もう安全です。私と一緒に逃げましょう」

「あ……はい」

なんと、本当に竜崎の言っていた通りになりそうだった。

聖火が連れ去られてから、いったいどれくらい時間が経ったのだろうか。夕焼けの時刻はすでに過ぎていて、生まれかけの闇があたりを薄く覆っている。

自転車ごと盗んだ携帯電話を操作し、さきほどの通話の記録を削除する。こうすれば、盗んだ自転車の前かごに偶然、携帯電話が入っていたと思わせることができる、かもしれない。警察がそれも無能は思えないが、できる限りのことはする。

われながら面倒なことをするなど、アルミは苦笑しながら聖火のいる家の前まで自転車を押していた。

この家が誘拐犯の居場所であるならば、正攻法で中に入ることなどできない。最初から多少強引な手を使うつもりだった。

家の、おそらくリビングにある大きな窓。そこから中をうかがったところ人の気配は無し。相手が全員二階にいるのか、それともこ

こは本当に無人なのか。すぐにわかることだ。

近くにいるツチノコを感知し音を鳴らし続けているコントローラーをしまい、アルミはおおよその検討をつけ、自転車を持ち上げて窓めがけて振り下ろした。

「誘拐犯の人数と、彼らが今どこにいるかわかりますか？」

「人数は五人ですけど……場所は……」

テツの質問の一つはすぐに答えられたが、もう一つは聖火にはわからなかった。でも、そういえば竜崎がなにか言っていた。

「書斎にいる、らしいです」

「そうですか。だったら今のうちに逃げましょう」

「はい………どうやって、ですか？ここ、二階ですよ？」

「窓から屋根に登ります……ああ、心配しないでください。怖くないですよ。私がしっかりつかんでいますから」

「じゃあ………落ちたりはしないんですか？」

「はい。安心してください。あ、どうしても怖いのでしたら、しばらく目をつむっててください。すぐに………」

——ガシャン

「!？」

不意に、ガラスの割れるような大きな音がした。

「えっ……テツさん今の」

「落ち着いて。大丈夫です。ちょっと様子を見てくるので、ここできっとしててください」

テツは優しく聖火の頭を撫で、部屋から出ていった。心細さからなんとなく追いかけたい気持ちになり、聖火があとに続こうとしたその時、

「――ぎゃあ」

「!!」

男の声の、太く短い悲鳴が聞こえた。大きな足音と、重いものが倒れる音と一緒に聞こえた。

なにか恐ろしいことが起こっているというのは聖火にもたやすく想像できた。

恐怖心から無意識に後ずさり、不意に手がなにかに触れているのに気付いた。

アルミに持たされた手提げ鞆だった。その中を見ると、入っているのはツチノコのロボットが一つだけ。竜崎の言っていたのは嘘ではなかったのか。

「アルミ……早く助けに来てよ……」

ツチノコの意味はわからない。だが、聖火はアルミがやってくるのを心から願い、鞆を強く抱きしめた。

第70話 殺戮

この音の正体はわからないが、これにより誘拐犯達が動くのは確実だ。面倒なことになる前に事態を収集しなければ。

部屋を出たテツの耳に、複数の足音が近付いてくる音が聞こえた。「おい竜崎！ 今の音——おい誰だおま——ぎゃあっ！」

足音の正体は中年の男が複数、数えると四人だった。犯人は五人いるという話だ。あとのひとりはどこにいるのだろうか？

そんなことを頭の片隅で考えながら、テツは先頭にいた男を隠し持っていた剣で切り裂いた。慣れたものでなんのためらいもなかった。断末魔の悲鳴をあげ倒れた男の死体を乗り越え次の獲物に襲いかかろうとするが、三人の男は正体のわからない恐怖に駆られてテツに背を向け逃げだし、そして追いかけるテツの前で二手に分かれた。一人はもう一つあった別の部屋に。二人は階段を下って一階に。どちらを追うべきか？ この家の階段は一つだけ。ならばそこだけ注意しておけば、あの一人は逃げることはないだろう。もっとも、やけになってあの女の子に危害を加える危険はあるが。なんとかして早くもどってあげよう。

テツは階段を下り、途中で追いついた一人を、彼の心臓があるあたりに見当をつけ剣で突き刺した。もう一人を追いかける。

この四人は、さっきのガラスの割れる音を聞いて驚いて、ともかくあの誘拐した女の子の様子を確認するためにこちらに走ってきたのだろう。その数は四人。あとのひとり、窓越しに様子をうかがっていたときに女の子と話をしていたあの若い男。明らかにこちらの存在に気付いているようだった。彼はどこにいる？ 書斎にいる、と女の子は言っていた。それは本当なのだろうか？

渾身の力で自転車を振り下ろすと、ガラスは一撃で割れた。それと同時に背後から悲鳴が聞こえたが、アルミはまったく意に介さなかった。

誰かに見られて、荒っぽい泥棒か青少年の非行の瞬間を見たとも思われたか。こうなることは予測済みだ。すぐに騒ぎになるだろうが、それまでにやるべきことをして逃げればいい。

さらに数発、自転車を叩きつけ、通りぬけられるだけの穴を開けると自転車を捨て土足のまま中に入った。と、そのとき、

「たっ助けてくれーっ！」

「っ！」

男がひとり、必死の形相でこちらに向かって突進してきた。避けることは難しい。アルミは思わずナイフを抜き男の腹を一閃。痛み足をもつれさせ、こちらにもたれかかるように倒れてくる男の肩越しに刃物のきらめきを視認して、男を前に突き放した。

ザクリと音がして剣が男の体を肩から胸のあたりまで切り裂いた。アルミが男の体をつかみ横に引き倒すように投げると、なんの抵抗もなくガラスの破片の散らばる床に倒れ込み、その陰から昨日知り合ったばかりの女性が現れた。

「テツ……………」

「こんなところで奇遇ですね、アルミ様」

「そうだね……………どうしてこんなところにいるのかな？」

「もちろん、アルミ様に会うためですよ。アルミ様とお話したいことがたくさんあります」

テツは笑顔だった。

目だけ、笑っていないかった。

「えっと……………あのね、テツ。今、俺けっこう忙しくてさ……………用事があるなら、後にしてくれるとうれしいな」

「それはちよっと無理なお願いですね……………私にも、しないといけないことがありますので」

「……………」

「……………」

二人は無言で床によこたわる男の死体に目を向けた。死体にはテツの剣が刺さったままで、それは二人が手を伸ばしてもぎりぎりでは届かない位置にあった。

ならばテツは丸腰なのか？ いや違う。あれは双剣だったはずだ。

案の定、テツはもう一本の剣を取り出し、構えた。

「……ねえテツ……それ、お話をする態度じゃないよね？」

「はい」

「笑顔で言うな……………」

ナイフを持つ手に力が入る。考えたら、テツと戦う理由をアルミは知らない。なのに戦闘は避けられそうにない。アルミはまったく乗り気ではなかった。

外では、この騒ぎに気付いた野次馬達が徐々に集まりはじめている。早く聖火を助けないといけないのに。

さわれたお姫様をヒーローが助けにやってくる。そんな構図を予想していたが、事態はそう単純でもなさそうだ。

竜崎は今、誘拐した女の子のいる部屋とは別の部屋——この事件の首謀者が家族とうまくいつていたら、その娘の部屋になる予定だった場所——のクローゼットの中に隠れていた。あの子には他の四人を足止めすると言ったが、そんなことをするつもりは最初からなかった。人目につかない場所に隠れて、ことが終わるまでじっとしているつもりだった。

あの女の子と話をしていた時、誰かにその様子を見られていた。おそらく、こちらにとってはマイナスとなる存在。警察だろうか？ 違う。警察は単独で人の家の屋根に登って窓から様子をうかがったりしない。

奴の正体を知りたい。だから、しばらく隠れて様子見するつもり

だったのに。どうやら第三者が侵入してきたらしい。耳をすまして聞こえてきた音から判断するに、死者まで出ているようだ。このままじっとしているわけにはいかないらしい。

クローゼットから外に出た竜崎は、まず最初に血のにおいに気付いた。そして次に、窓の鍵を開けようとして焦りからうまくいっていない男の姿。仲間のひとりである彼は、竜崎の出現に気付いていないようだった。

状況はだいたいわかった。

「その窓から逃げるつもりなのでしたら、止めた方がいいですよ」「ひいっ！——り、竜崎か……」

「はい。竜崎です。どうやら、大変なことになっているみたいです。ね……ちょっと待っててください」

そう言って、竜崎は部屋から一歩外に出た。

目の前に血の海が広がっていた。その源はひとつの死体。

竜崎達のリーダー。

事件の首謀者。

「……………」

竜崎は少しも動じず血の海に足を踏み入れ——その瞬間、さらに濃くなった鉄のにおいが、竜崎に抑えがたい衝動を与えた。

「っ……おいおい……こんなときに……今はだめだ……………」

とりあえず、するべきことはしなければ。死体の体をさぐり、そのポケットの中から携帯電話を引き出した。

「一応は……これでいいはずだ……………」

心の底から湧き上がる禍々しい衝動、というか欲求に抗うのをやめ、血だまりに指を浸した。そしてその指を口にくわえる。

口の中に血の味が広がる。しかし、竜崎の欲求は少しも満たされなかった。血だけでは足りない。そういえば、そろそろ夕食の時間じゃないだろうか？

メガネが一瞬、キラリと光った。

第71話 竜崎

竜崎はさっきまで隠れていた部屋に戻った。

「リーダーが死んでますね。たぶん、あとのふたりも同じように死んでいるでしょう」

「ああ……なんか、ガラスの割れるような音が聞こえて、それでなんか女がでてきて……いや、そんなことより早く逃げよう！」

「落ち着いてください。こういうとき、冷静さを失うのはなによりも危険です。……でも、確かに今、僕達は逃げるべきでしょうね。自分の安全が最優先ですから」

「そうだから早く！」

「あの女の子はどうしますか？」

「なに？」

「さっき誘拐した女の子ですよ。放っておいていいんですか？」

「そんなことどうでもいいだろう！ 早くしないと殺されるんだぞ！」

「そうですか……」

竜崎は深くため息をついた。

「エゴイズムは嫌いじゃない。醜さこそが人間の本性。そんなことは自明の真理だけれど……でも、こうはなりたくないものだな」
相手に聞こえるのかもかわらずにつぶやく。どうせ、理解できる状態じゃないだろうし。

「いいですよ。逃げましょう。でも、さっきも言ったように、窓から飛び降りて逃げるのはやめた方がいいです。ここは二階で敵はおそらく下にいます。また、飛び降りて無傷で済むとも思えません。最悪、どこかの骨を折るかも。二階だから死ぬことはないでしょうが、下手をすると殺人鬼の前に負傷した体をさらすことになる」

「だったらどうすればいいんだっ!？」

「そうですね……、幸い、僕は比較的安全にこの家から脱出す

る方法を知っています」

「その方法を教えろっ！」

「まあまあ。あせってはいけません。あわてず、冷静になってください――」

「うるさいっ！ さっさと教えろっ！」

男が声を荒げ竜崎の言葉を遮った。

「竜崎っ！ 貴様さっきからのんびりしやがってっ！ あわてるなだあ？ んなこと無理に決まってるだろおいっ！ 早くしないと死ぬんだぞっ！？ それなのにお前はこんな時にもへらへら笑っているやがって！ 馬鹿かっ！？」

「んー、どうなんでしょうね？ 確かに、僕は馬鹿かもしれませんがね………あ、でも、笑い方はへらへらじゃなくて、にこにこですよ？」

「うるせえよっ！ んなことはどうだっていいだろ！」

男は激昂し、竜崎の胸ぐらをつかんだ。一方の竜崎は表情ひとつ変えず、あいからわずの笑顔だ。

「……状況を考えたら、あなたの気持ちもわからなくはない。でもね、中学生相手にキレるのはちよつと大人げなくないですか？」

竜崎は自分をつかんでいる男の手を握った。

「あるいは……そう。あなた達に大人げなんて期待するのがそもそも誤りだったのかな？」

握る手の力を強めた。優男な外見からは想像もつかないほどの握力だった。

「がっ……いだだだだっ！ は、離してくれ！」

「はい」

竜崎は言われた通り手を離し、直後に男の髪をつかみ、その頭を壁に叩きつけた。

「がはっ！ り……竜崎……なにを………がっ！」

再び壁に叩きつける。

「少し、黙っていてくれませんか？ あなたのような退屈な愚か者

なんかと話すのって、嫌なんだな。……………まったく、彼はどうして、あなた達みたいな人間に協力したいなんて思ったのか……………。きっと、少し同情したんだろうね。たとえ犯罪者でも、その人達の幸せは叶えてあげたい。なんて、優しすぎるよね？　とんでもない聖人君子だよな？　まあ、僕はその優しさも好きなんだけど、でも、残念ながら僕はそんなに優しくはない。あなた達には憐れみしか感じていないんです。あ、あと、ほんの少しの感謝も。言われてやらされたことだけれど、少しの間だけ退屈を紛らわせてくれたことに、でも、それももう終わりのようだ。……………ねえ、最後にひとつだけ、訊いていいですか？　—————僕のメアド、あなたは知っていますか？」

「…………へ？」

今ひとつ意味のわからない質問に、男は間拔けな声をもらした。

「ああ…………つまり、僕があまり人と関わるのが好きじゃない、なんて言葉をちゃんと鵜呑みにしてくれて、リーダーが僕のアドレス、他の誰かに教えたりなんてしなかったかなと思って。連絡のために僕にメールを送れるのはリーダーだけか、ということですよ」

「それは…………そうだ。すべてお前の言う通りにしていた」

「そうですか。それはよかった。それだけが知リたかったんです。じゃあ、逃げましょうか」

「あ…………ああ…………」

「あ、でも、あなたにその必要はありません」

「……………なぜだ？」

なぜって？　もう我慢の限界だからだ。

「なぜなら、僕は最初から、あなたを殺して自分だけ助かるつもりだったからです」

そう言って、髪をつかんだ手で男に上を向けさせ、もう片方の手で肩をつかみ動けなくした。

「おっ、おい、竜崎お前なにを…………」

「そうだ。最後にひとつだけ教えてあげます。僕の名前、竜崎って

「いうのは実は偽名なんです。……本名は柳瀬ルツカっています」
そして、上を向いているために露わになった男の喉笛に噛みつき、
気管を引きちぎった。

途端にどつと血が吹き出て二人を赤く染めたが、ルツカは気にせず、喉の肉を喰らい続けた。

第72話 偽善者

「いいな……やっぱり、生の人肉に勝る美味はない……」

本当は、若い女の子の方が肉が柔らかくておいしいのだけれど、それを言うのは贅沢というものだ。

ルツカは男の死体を床に横たえて、自身の血まみれの口を拭ったが、袖も血まみれであったために無意味な行為となった。

「あー、これは……まずいな……まあいいか……なんとかなる。さて………」

好物の余韻をかみしめるのもいいが、状況はそれを許してはくれない。依然として、若い女性ということ以外は襲撃者の正体は謎のままだ。

そういえば、素人を何人か殺すのに随分手間がかかっているようだ。耳をすませば、下の階から、金属と金属のぶつかり合う音が聞こえてきた。そういえば、ガラスを割って入ってきた第三の侵入者もいるのだ。理由はわからないが、その両者が戦っているのだろう。逃げるなら今がチャンスだ。しかし、彼女らの正体には大いに興味があった。

彼女らとゆっくり話がしたい。こちらの有利な状況にむこうを誘いこめばいい。

そのために使える餌があるではないか。おそらくは彼女らをここに来させる原因となった女の子が。

「そうだな……あの子の体は、最高の味がしそうだ」

美人の肉は味も美味。ルツカはゴクリと喉を鳴らし、誘拐してきた女の子のいる部屋に戻った。

今すぐにでも彼女の胸や尻に噛みついて、あのかわいい顔を苦痛で歪めてみたいのだが、今は我慢だ。もう少しの間だけ、優しく紳士の“竜崎さん”を演じよう。

もう少し。そう。もう少しだけの我慢なのだから。

気がつけば防戦一方だ。そもそも、武器も技量も相手の方が格段に上だ。むこうが剣を一本しか使えない状況だからなんとか耐えられたが、二本だったら既に死んでいるはずだ。しかも、ここに来るまでずっと走っていたため、そろそろ体力の限界にきている。

アルミは珍しく弱気であり、二本目の剣を渡すまいと死体を守るような立ち位置で戦っている。

外からざわめきが聞こえる。すでに騒ぎに気付き、野次馬が集まっているのか。こっちに近づく気配はないが、誰かが警察を呼ぶのは時間の問題だろう。

時間が無い。状況は最悪だ。そしてその時、

———きゃあっ！

「！」

頭上から、聞き慣れた声の叫び声が聞こえた。聖火だ。もはや一刻の猶予もないようだ。

早く決着をつけないと。

「っ！　だあっ！」

意を決し、全力のかけ声と殺気と共に、テツにナイフで切りつける。テツはそれを余裕で受け、アルミに押し返した。限界のきているアルミは、その押しによるめき、後ろに倒れるように体勢を崩した。それを逃さずとどめをさ刺すべく、テツが剣を振り下ろした。

「っと！」

アルミは血で覆われた床に手をつき、その反動で体の位置を変えて剣をかわした。そしてそのまま床を蹴り、テツの横を通り抜けた。最初からこうするつもりだった。正面からテツと戦っても勝ち目など皆無であり、ならば今は戦いを避けて聖火のいる場所へ急ぐことを優先させるべきなのだ。

テツは咄嗟に、すれ違いざまにアルミに剣を振るった。避けきれ

ない。アルミの右肩に鋭い痛みがはしった。決して浅くはない。だが、アルミはなんとか痛みに耐えた。

聖火の悲鳴は上から聞こえてきた。階段はどこだ……みつけた！

階段にも死体が転がっていて、やはり血の海ができていた。滑ってしまわないよう気をつけて、かつテツに追いつかれないように急いで階段を駆け上がった。

追いつかれたら、それがすなわち死ぬ時だ。

「最初から、私を出し抜くつもりでしたか………そのために殺気を装って……。なかなかやりますね」

どうやら浅倉慎也という少年は、ただ者ではないようだ。改めて惚れ直してしまった。

しかし、仕事は仕事だ。やるべきことはやらねばならない。テツは死体からもう一本の剣を引き抜いた。

浅倉の動きはよかった。しかし、逃げずに上の階に登ったのは彼にとっては命取りだ。二階に行けばもう逃げ場は無い。今度こそ確実に仕留められる。

……それに、あの女の子だ。悲鳴が聞こえたということは、犯人の生き残りに危害を加えられたということか。早く助けなければ。まったく、急に現れた浅倉のせいで、無駄な手間がかかる。

そういえば、あの女の子の悲鳴を聞いて、浅倉は少し様子を変えた。そもそも、浅倉がここにいる理由とはなんなのだろうか？ あの子が関わっているとすると、ふたりの関係は？ 浅倉に妹はいないはずだが………。

まるで赤いペンキを頭から被ったようなルツカの様子に驚いて、その女の子はルツカがなにかする前に悲鳴をあげた。

手間がひとつ省けた。しかし無用の心配をさせるのはあまり喜ばしいことではない。

「り……竜崎さん……その格好……」

「大丈夫だよ」

「でも、血まみれですよ」

「うん。これは僕の血じゃないんだ。……他の四人が、みんなあのお姉さんに殺されてね」

「え……………」

少し、ショックを受けたようだ。

「僕は、なんとか逃げれた。怪我もしてない。この血は、あの四人のものだ……」

「そう……ですか。……………よかった……」

それは、誘拐犯が死んだことへの『よかった』なのか、“竜崎さん”が無事なことへの『よかった』なのか。ルツカにはどうでもいいことだった。

「まだ安心はできない。すぐにあのお姉さんが戻ってくる。さあ、今のうちに逃げよう」

ルツカが血まみれの手を差し出すと、女の子は少しためらい、自分の手をルツカの手伸ばし、

「やめろ！　すぐにその子から離れろ！」

ルツカの後ろから声が聞こえて、手を止めた。

子供の、男の子の声だった。

第73話 竜、鉄、アルミニウム

「アルミ……………」

「……………」

女の子は安堵と驚きの混ざった声をあげた。アルミ、という聞き慣れない言葉にルツカが振り向くと、そこには小学生の少年がいた。ツンツン頭につり目。かなりの男前だ。右肩を左手で押さえていて、そこから血が流れている。少し息切れしているようだ。そして、右手にコンバットナイフ。血で汚れている。

これが、ガラスを割ってまで侵入してきた者か？ まさか自分より年下だとは思わなかった。この女の子とは顔見知りのようだが、関係は？

「やあ……………アルミ君って呼んでいいかな？ はじめまして」

「うるせえ…………早くここからいなくなれ」

「アルミ！ あのね、この人は悪い人じゃないの！ わたしを助けてくれたんだよ！」

「……………本当に？」

アルミと呼ばれる少年はルツカをまっすぐ見据えた。

「うん。本当だよ。アルミ君、僕は君達の味方だよ」

ルツカは万人を安心させるようなやわらかな笑みを浮かべた。だが、

「…………だめだ。信用できない」

アルミはその言葉を否定して、ナイフの切っ先をルツカにむけた。

「味方だって言うなら、今すぐにその子、こっちに渡してくれるよね？」

「あー、ちょっとそれはできないかな…………」

「ほらね？」

アルミは笑い、一步ルツカに近付いた。

こいつはただ者ではない。ますます素性を知りたくなった。

「アルミ君、僕はね、君といろいろお話したいんだ」

「やだ、って言ったら？」

「言わせないよ」

そう言うが早いか、ルツカは素早く女の子を抱きかかえた。

「さあ、アルミ君。……ついてきて」

そのまま開いている窓から飛び出した。後ろで、床を蹴る音が聞こえた。

「これは……」

テツは目の前の死体の惨状に絶句していた。

テツが殺したのは二人、浅倉が殺したのは一人。これが四人目の男。下手人はあの中学生か。

死因は出血多量だろうか。傷は首。喉の肉がごっそり失われている。それはどこに消えた？

もしかすると、自分はどうでもない外道と対峙しようとしているのかもしれない。

聖火を抱えた男を追いかけ、窓から身を乗り出す。男はするすると壁を伝い、屋根へと登っていった。聖火は？ 驚いているが無事のようにだ。ツチノコの入った鞆を、まだ大事そうに抱きしめている。アルミも後続き、屋根に登った。

「ほらほら。こっちだよー」

男は遊んでいるように手招きして、隣の家屋根へ飛び移った。アルミも続く。

今ふたりは、屋根の端と端とに立って向かいあっている。ナイフを持って敵意を隠そうともしないアルミとは対照的に、聖火を抱え

た男は友好的この上ない笑顔だ。

家を囲んでいた野次馬達が、すぐにこちらに気付き何人かが悲鳴をあげた。

「あの……竜崎さん。この男の子は悪い人じゃないんです……………」
アルミも、どうしてそんな怖い顔するの？」

緊迫に耐えられなくなった聖火がそんな言葉を漏らした。

「……俺が、嫌な奴だから。初対面の人を信用なんてしないから」
「アルミ……………」

アルミのその言葉に、悲しそうにつぶやいたが、直後はっとしたような表情になった。

「アルミ後ろっ！」

「！」

慌て前に飛び退き振り返ると、一瞬前まで自分の首があった位置を剣が薙いでいた。次ぐ二撃目は受け止めたが、もう一本の斬撃には対処できるはずもなく、二歩三步と飛び退いた。双剣を相手になんてできない。

立ち位置が変わって、屋根の両端にテツと竜崎。その真ん中にアルミがいる。

「テツ……あんまりしつこいと、嫌いになっちゃうよ？」

「つまり、今は好きってことですね？ 嬉しいです、アルミ様」

「いや……関わりたくないだけだ」

満面の笑みのテツに、アルミはうんざりしたように言った。

「ねえ、ちょっと訊いていいかな？」

後ろから竜崎が話す。

「君達、なんか仲良さそうだけど、どういう関係？」

「見ての通り、愛を誓い合った関係です」

「違うから！」

「へえー、もしかしてお姉さん、シヨタコン？」

「いいえ、愛してるのはこの方だけです」

「やめてくれ……………」

「そんなにこの男の子は魅力的ですか？　よかったら、どんな人なのか教えてください。えっと……テツさんにアルミさん」

「俺としては、あんたのことが知りたいのだけど？」

「そう？　でも、僕について知るべきことはひとつしかないよ——僕、竜崎という名前は世を忍ぶ仮の名前で、その正体は……正義のヒーロードラゴン仮面っていうんだ……君は？」

「俺？　俺の正体も正義のヒーロー。名前はトンファーマン」

「偶然ですね。実は、私も通りすがりの正義の味方なんです」

三人が三人とも無意味なことを言う。

「ってことは、竜崎さんは正義のヒーローなのに誘拐なんてしてるんだ？」

「うん。この場合の正義は、僕自身の欲望って意味だからね」

「……………では、欲望のためならご自身の仲間でも殺してしまうのですか？」

「え……………」

驚いたのは、まだ竜崎に抱かれている聖火だ。

「竜崎さん……それって……」

答えたのはテツだった。

「死体がひとつ。あなたを誘拐した男のひとりですが、放置してありました。……あなたが殺したのですよね、竜崎さん？」

「はい。喉に食らいついて」

「その肉がなくなっていたのは？」

「僕が呑み込んだからです」

「つまり……人食らい……」

「はい。……ああ、でも、ひとつだけ訂正させてください——僕は、彼らのことを仲間だなんて思ったことはありません。あんな愚か者どもがいなくなって、むしろ嬉しいくらいです。……それに、友にするなら、もっとふさわしい人が僕にはいますから」

「……そんな……」

聖火は相当のショックを受けたようだ。あのふたりの間になにが

あったのかは知らない。だが、聖火が竜崎という男を善人と見ていたことは容易に推測できた。

この状況で誰かに頼りたくなる気持ちはわからなくはない。だが、竜崎が誘拐犯であることは揺るぎない事実だ。

「竜崎……さん……嘘、ですよね……」

「……………ごめんね」

その一言が、この優しそうな男が人殺しだと端的に告げていた。

これ以上この状況が続くのは、聖火のためにもよくない。一刻も早く聖火を助けこの場から離れないと。

「……ねえ、テツ？」

「はい？　なんででしょうか？」

「あの女の子、俺の友達の妹なんだ。……べつに、そんなに特別な関係じゃないけど、助けないといけないから……テツ、少しの間だけ、黙って見ていてくれないかな？　手出しは無用の方針で」

「はい……手伝いましょうか？」

「いや。いい。俺一人でやる」

「でも怪我してますよ？　できますか？」

「なんとかする」

「……………わかりました」

アルミはその言葉に頷き、竜崎と向かい合った。

第74話 落下、逃走

「竜崎さん。悪いけどその女の子、返してもらおうよ?」

「やだって言ったら?」

「言わせない」

「そんなことできるの?」

「……うん」

アルミはにっこり笑い、頷き、ナイフを口にくわえて手を後ろにやった。リュックに手を入れ中をさぐる。

「……………」

竜崎は少し不振そうな顔をして、身構えた。なにか強力な武器でも出てくると思っているのか。だが真実は違う。

「ひゃっ!」

突然、聖火が小さく悲鳴をあげた。そしてあわてて手提げを抱きしめていた腕を緩くすると……………手提げが大きく跳ねた。

「……え?」

予想外の事態に、竜崎は一瞬動揺して、その隙を逃さずにナイフを手を切りつけた。

「っ!」

竜崎は後ろへ下がる素振りを見せたが、ここが屋根の端であると思ひ直してアルミの手首を掴み刃を止めた。

すべてアルミの作戦通りだった。

アルミはもう片方の手で聖火の腕を掴み、

「一緒に落ちてくれる?」

そのまま屋根から飛び降りた。

「ちっ。断る」

巻き添えはごめんと、竜崎がアルミの腕と聖火を放したため、ふたりは重力に従って落下していった。

ここまですべてアルミの目論見通り。そしてそしてこの後は――

わからない。なにも考えていなかった。

両腕で聖火を抱きしめた。鞆を抱いている聖火も、怯えからアルミの服を握りしめた。

聖火には怪我を負わせたくない。自分は……まあ、どうにでもなれ、だ。できれば軽傷で済んで、野次馬の中に紛れ込めば、竜崎やテツは追ってこない。そうなればいいな………

「無茶なことしやがってええええっ！」

その時、低くて太い、そろそろ聞き慣れてきた声が叫ぶのが聞こえ、直後に二本の腕に受け止められた。

「アルミ借りるでっ！」

そして別の声が聞こえ、手からナイフが取られた。

「うおおっ！」

業火はナイフを構えて野次馬の群れに突進した。雄叫びをあげて突撃してくるナイフを持った少年の姿に、野次馬達はまず身の危険を覚えて、我先にとナイフの進行方向から逃げだした。

人の群れが割れ、その間を業火、そしてアルミと聖火を抱えた氷河が駆け抜けた。

「へえ……やってくれるね……」

ルツカは屋根の上から、アルミが逃げていくのを感じしつつ見つめていた。

「彼、なかなか素敵ですね。あなたが惚れたのもわかる気がします」

「そうですか……。私としては、アルミ様に逃げられたのが少し悔しいのですが」

「逃がさないのでしたら、どうするつもりだったんですか？　なんだか、彼を殺そうとしてたようですけど？」

「はい。それはもうざっくりといくつもりでした。かなわない恋ならば、彼を殺して私も——ということですね」

「無理心中………アルミ君のこと、すごく好きなんです。彼っ

て、いったいどんな人なんですか？」

遠くからサイレンの音が聞こえてきた。

「……と、訊きたかったのですが、時間切れのようですね。お互い、警察とは関わりたくない素性でしょう？」

「はい……残念ですね。いろいろお話したかったのですが」

「ええ。……それではさようなら。また会えればいいですね」

ルツカはそう言い、隣の屋根へと飛び移った。後ろではテツも反対側に行ってしまった。

結局、収穫なし。まあ仕方ない。

「……………」

「……………」

なんとかあの場を離脱できたアルミ達は、なにがあつたかについての説明は明日にして今日は帰ろうという話になり、全員が同意した。

今、聖火と業火はふたり並んで、手をつなぎながら帰路についている。というよりは、聖火がつかないだ手を離そうとしない。

ずっと無言で、並んで歩いている。

沈黙を破ったのは聖火だった。

「……誘拐犯のなかに、すごく優しい人がいたの」

「……………」

「でもその人は……竜崎さんは、本当は人殺しだった……あんなに優しいような人だったのに……」

「……そうか」

「それに……テツ、っていうお姉さん。あの人も優しいような人だった。……でも……やっぱり人殺し……わたし、ちょっとなにかあったら、死んでたのかな……………」

「…………ひとりだけ……」

「え？」

「ひとりだけ。たとえ人殺しでも、絶対にお前を助けようとする奴がひとり、いたはずや」

「……………」

「明日、アルミにちゃんとお礼言うんやで」
聖火は小さく頷いた。

ここまでくれば、もう追っ手は来ないだろう。相変わらず服は血まみれだから目立つことこの上ないが、これはすぐになんとかなる。ルツカはあの後急いで場を離れ、今は離れた場所にある川に掛かった橋にいた。もうすっかり夜だ。人の気配は全くない。

今は亡きリーダーの携帯電話を見た。メガネは外した。善人の竜崎さんである意味は、もうない。今の自分は、柳瀬ルツカ。清く正しいサディスト。

あの男の言った通り、メンバーの中でルツカのメールアドレスを知っていたのはリーダーだけだった。

この電話から、ルツカとのメールのやりとりを全て消すのは面倒だ。ルツカは両手で電話を握り、軽くひねった。ばきばきと音をたて、電話は真っ二つに。さらにフレームをこじ開けて中の基板を取り出して、情報記録素子を徹底的に破壊した。それら電話の残骸を川に投げ入れると、あるものは沈みあるものは浮き。いずれにせよ時間が経てば流れるだろうし、もともと汚い川だ。ゴミが浮いているなんて珍しいことではない。わざわざ不審に思う人としていないだろう。

これで、竜崎という男がいたという物的証拠はなくなった。
次に自分の携帯電話を取り出して電話をかけた。相手はすぐに出た。

『もしもし……』

「ソーラ。残念なお知らせがある……誘拐犯四人、全員が死んだ。……殺された」

『えっ……本当ですか？ ルツカは』

「僕は大丈夫。無傷だ。でも返り血大量に浴びて……今から君の家、行ってもいいかな？ 詳しいことは、そこで」

『はい………』

「つらい？」

『え？』

「彼らに、少しでも仲間意識を持っていたりしてた？」
優しいソーラのことだから、と心の中で付け加えた。

『………』

「まあいいけどね」

『……ルツカは？』

「ん？」

『ルツカは、彼らのことどう思っていたんですか？ ぼくは、彼らのことはあまり多く知りません。向こうはぼくのことを知りもしない。でもルツカは……竜崎という名前で一緒にいたルツカは彼らのこと……』

「嫌いだった。死んでくれて、よかった」

即答。電話越しに息をのむ音が聞こえた。

「ああいった、頭の悪い下品な悪人は、嫌いだ」

悪を否定はしない。だが、世の人間すべてが絵に描いたような善人で、ただひとり自分だけが悪人だったら、それはどんなにすばらしい世界だろうか。

その後いくつか言葉を交わして電話を切った。どうせすぐ会えるのだ。

その時は、ソーラを慰めてあげないと。そもそも、ルツカにこの誘拐に荷担するよう指示したのはソーラだ。その理由を訊いたこと

はないが、なんと答えるのだろうか？

犯罪を通して兵法の勉強とか、生徒が正規の通学路を使うようにするとか。ありそうな答えが予想される。でも本当は違うだろう。

ルツカの退屈を紛らわせる。たぶん、これが答え。

ならば、こういう時には優しくしてあげるべきだろう。お互い、心から友と呼べる唯一の人間なのだから。

それに、それが自分の役目、正義のヒーローとしての役目なのかもしれないのだから。

正義のヒーロー。そうとも。僕がドラゴン仮面だ。

救いのヒーローが来ない。ならばどうする？ 簡単だ。自分自身でヒーローになればいい。

家に帰ると怪我の手当もそこそこに、アルミは自室のベッドに倒れ込んだ。夕食の時間だが、何か食べる気分にはなれない。

人を、殺した。

それでも、別の人殺しと戦ったりしている間は、なんとも思わない。だが今、押さえがたい後悔に襲われている。

わかつている。ああするのが最善の選択だっただろう。でなければあの後テツに殺されていたかもしれない。だが、それがなんだというのだ。

殺しなんて、したくない。

「……………」

顔を上げると、ベッド脇に置いてある青いドラゴンのぬいぐるみが目に入った。クーリエという名の、アニメのキャラクター。

「……竜」

黙ってそのぬいぐるみを抱きしめる。

竜崎。あの男はそう名乗っていた。ドラゴン仮面。自分をそうも

言っていた。

竜。ドラゴン。空想上の、大空を自由に飛び回る強きモンスター。
あの男はただものではない。

第74話 落下、逃走（後書き）

こんにちは。通りすがりのドラゴンナイトです。

「誘拐犯罪編」完結です。そして、キャラクターもかなり増えてきました。

次の話で、数人の例外を除き、ほぼすべてのキャラクターが出そうになる予定です。

幕間！隊長のいない夜に

時刻は午後七時。パソコンを起動。しばらく待つと、デスクトップに可愛くデフォルメされたドラゴンのアイコンが表示された。それをダブルクリック。

画面いっぱい、さきほどのドラゴンのデフォルメ前の画像が映された。そしてタイトル。

『The Dragon Knight of Blue Sky
online』

蒼空のドラゴンナイトオンライン。ライトノベルが原作のオンラインゲーム。

その後いくつか操作をして、自分の属するクラン、テルミットのチャットルームに入った。

＜竜牙さんがログインしました

啓蒙者…つまり次世代特殊部隊の装備に求められるのは

トビ丸…こん

packer…こんにちは

竜牙…こん

啓蒙者…さらなる機動性と凡庸性だ こん＜竜牙

竜牙がチャットに入るとクランのメンバー三人があいさつした。

啓蒙者。メンバーの中では最年長で四十代前半。ミリタリーマニア。皆からは、おっちゃんとか、おじさんとか呼ばれている。

トビ丸。成人男性で会社員。同じ身分である竜牙とは最も気が合う。ただしトビ丸は重度のアニメオタクであるが竜牙はまったく興

味が無い。たまにこのクランの隊長と熱く語り合っている。

packer。小学生の女の子。と言っても不登校の引きこもりらしく、学校に行っている気配は無い。というか一日の半分ぐらいはこのゲームにログインしている。頭は良いらしく勉強はしているため、学校に行ってなくても学力は問題無いらしい。

我がクランながら、なかなか濃いメンバーだとは思う。

竜牙…で、おっちゃんは何を熱く語ってたんだ？

トビ丸…特殊部隊の歴史

竜牙…なんでそんな話題に……

<CoCoさんがログインしました

<エノケンさんがログインしました

二人同時に入室してきた。

CoCo。皆のお姉さんの存在。大学生でエノケンとは友人。エノケンやpackerと百合な関係を築こうと積極的にアプローチしている。

エノケン。彼女が興味を持つのは百合ではない。BLである。

竜牙…こん

CoCo…こんばんわー

啓蒙者…こん

エノケン…こん あとは隊長がくれば全員揃うね

packer…こんにちは。あ、今日はあるみんなは来れないそうですね

トビ丸…マジでか？

packer…はい。今朝一瞬だけログインして、そう伝えられました

竜牙…そうか

全員が毎日ログインしているわけではない。こういうことはよくあることだ。

あるみん。竜牙達のクランのリーダーで、このゲームに関しては天才的な技量と統率力を持つ。その正体は小学生の少年で、技術的にはリーダーとして申し分ないが人格的には難がある。なんとか、偉そうでいたい上から目線だ。だが、それも小学生だからなんかかわいい、という意見もあるし、少なくともこのクランのメンバーからの信頼は厚い。

で、その隊長様が来ない、と。

エノケン…隊長、なにがあったんだろうね？

packer…わからないです。来れない以外は何も言ってませんでした

エノケン…デート？

竜牙…おい

啓蒙者…なんでそうなる

トビ丸…もう夜だぞ。小学生のすることじゃない

エノケン…じゃあ……………もつと……………エッチなこと？

CoCo…はいはい。妄想はそこまで

エノケン…はい

竜牙…隊長がいらないなら俺が指揮をとるぞ

竜牙…で、今日はなにをして遊ぶ？

packer…そうですね……

数分後、竜牙は緑色のドラゴンに乗り、荒廃した市街地の中で息を潜めていた。

飛んではいけない。現在、敵味方全員が、地上にいて建物の陰に隠れている。相手がどこにいるかは、まだわかっていない。今飛び立

つたらある程度はわかるだろうが、同時に敵にも捕捉されて一斉射撃の餌食だろう。数なら向こうの方が多い。

今はこちらの索敵能力が相手より勝っていることを願いながら、敵の位置が把握するか、それとも敵がしびれを切らして動くのを待つだけ。

『あの……竜牙さん』

イヤホンから女の子の声が聞こえてきた。packerだ。

戦闘中の味方とのやりとりは、文字によるものだと間に合わないことも多い。そこでボイスチャットの出番となる。

索敵の仕事は彼女にほぼ一任しているが、少し早くはないか？

それに、普通なら味方全員に通信するものだ。だというのに、これは竜牙のみに送られている。

「どうした？」

『あの、隊長のことですけど、あるみんなが前に来なかったのって、いつだったでしょうか？』

「えっと……」

思い出せない。

竜牙も毎日ログインしているわけではない。仕事が忙しいことだってある。しかし、竜牙がログインした日は、隊長はいつも来ていたのではなかったか？ 来て、週に二三日ぐらいは徹夜しているのではなかったか？

「さあな。ちよつとわからない……まあ、なんかどうしても外せない用事とかあったんじゃないのか？」

『どんな？』

「むう……」

小学生が夜にネットゲができない理由？

宿題が多すぎた、とか？ 徹夜してもできないほどの量がでる？

それはありえないだろう。

「さっぱりわからないな」

『そうですか……』

ネット回線越しに気落ちした声が聞こえた。こういうときに、自分にできることなどあるのだろうか？

顔も本名も知らぬ人間に恋した少女にかけてやる言葉など、果たしてあるのだろうか？

「エノケンの言ったこと、まさか本気にしてるのか？」

『え……いえ、そんなことないれふ………あう………』

囁んだ。凶星か。

我らがあるみんな隊長は、隊長として頼りになる人物か？ 答えはおそらくイエスだ。自己中心的だとかいう面も無いわけではないが、それでも他人に対する気遣いはだいたいできるし、人の心を掴んだりするのがうまい。好感が持てる人物ではある。

だが、それが恋に発展するなど、ありえるのだろうか？

どうやら隊長と packer は、このゲームに参加する前からネット上での知り合いだったらしい。そのことについて竜牙は詳しいことを知らないが、どうやら私生活でなにかひどいことがあって、引きこもりとなるほどに落ち込んだ packer を、隊長が励まして失意の底から立ち直らせたらしい。ネットでの文字のやりとりだけで、だ。

そんなわけで、この少女の隊長への信頼は厚く、それが特別な感情に変わってしまったようだ。恋に恋する年頃の乙女が、しかもネット以外外部との接触を断っている状況で出会った同い年で優しい異性だ。こんなこともあるかもしれない。竜牙にとっては、こんなこと考えるだに気恥ずかしいのだが。

そしてなお悪いことに——そう、悪いことに、なんという偶然かこのふたりは住んでいる所が同じ市内なのだ。

浅葱市。遠く離れた場所に住む竜牙にとっては、我が国最大の貿

易港と、犯罪発生件数で有名な場所。

これはまずい。このふたりが、会ってみたいとか言う可能性が出てくる。相手がどんな人物かわからないままで、だ。期待も願望も簡単に失望へと変わる。回線の向こうの人間が、自分にとっての理想の人間であるはずがないのだから。

ネット上での付き合いはネット上だけで完結するに越したことはない。

まあ、ふたりとも分別のある人だから、そんなことがそう簡単に起こると思えないのだが。

だから、心配なことなんてあまりない。

「まあ、なんだ。隊長にも忙しいことだってあるだろうよ。大丈夫だ。エノケンの言ったようなことじゃないだろう。……どうしても気になるなら、明日にでも本人に直接訊けばいい」

『あ……はい。そうですね………索敵が終わりました』

packerは通信形態を変え、全員に索敵結果を報告した。大まかな敵の位置が伝わる。

いつものpackerだ。隊長の話はそれで納得してくれたらしい。

「さあ。じゃ、攻撃開始だ」

竜牙の合図で味方全員が一斉に動いた。

第75話 浅葱雪月花

都会の夜は明るい。眠らない。蛍光灯やらダイオードやらネオンサインやらの光が、闇をはるか上空まで追いやってしまった。

人で汚れた夜の街を包むのは闇ではない。光だ。

市内で最も大きな鉄道の駅周辺から発展した浅葱市最大の繁華街に、アルミはやってきた。

時刻は午後十一時。アルミにとって、こんな時間に起きているのは珍しいことではない。だが起きていたとしても、普段は部屋にこもってオンラインゲームをしているのが常だ。夜中に盛り場をうろつくなど滅多にしたことがない。

そもそも小学生がこの時刻にこんな場所にいること自体が間違いだ。

日中こそ家族連れやカップルなどで賑わう場所であるが、夜になるとキャバクラなどの風俗店や飲み屋の集まるいくつかの場所を中心に、見るからに柄の悪い“いかにも”な連中が幅を利かせるようになる。本物の極道者からチンピラ気取りまで、あまり関わりたくない種類の人間が何人も現れる。

アルミは今、そういった場所からすると、比較のおとなしい店の並ぶ場所にいた。

駅の近くにそびえ立つ巨大建造物。この市で最も大きな百貨店の周囲を歩き回っている。

普段から、この時刻でもある程度の人通りはある場所だ。だが今日は少し事情が違うようだ。

いつもより人の数が多い。なかには私服警官と思しき人までいる。あまり目立った変化ではないが、アルミはこの理由を知っている。

この人達は皆、ある人物の登場を期待している。もっとも、期待しているだけ、なのだが。登場するかは確証など皆無で、もし出現したとしてそれを目の当たりにできるとはかぎらない。

しかし、それでも一部の物好きはこうして集まっている。自分を含めて、だ。

あくびをかみ殺し、出てくるとすればそろそろか、そう思ったその時。

辺りが完全な闇に包まれた。

「来たか……」

たちまち辺りは騒然となるが、アルミは冷静に動いた。

世間体を気にしてか、この百貨店は特に警備を強化したりはしていないようだ。警察に相談することもなし。大いに結構。だがそんなことは、このインターネット全盛の時代には無意味なことだ。

この付近一帯の電力を完全に遮断した。突然の暗闇に人々の目が慣れる前に、隙をついて百貨店の中に侵入できた。鍵はあらかじめ開けていたし、電力がダウンしているためいかなる防犯システムも作動しない。夜でも明るいこの場所で、人から視力を奪うのは難しいことではない。

次にするのは、中にいる警備員に見つからないように目的の階へ行くことだ。

怪盗ルピナス。ここ半年ほどの間、浅葱市のある兵庫県を中心に世間を騒がせている泥棒だ。性別年齢普段の職業その他エトセトラ、その正体や人物像についてはほとんどわかっていない。

そして、今夜その怪盗がこの場所に現れるとの噂がネット上でさやかれた。

浅葱市最大は百貨店、富屋デパート浅葱市駅本店の催し場で、明日から開かれる美術展。そこで展示される絵画のうち特に高価な一点を怪盗ルピナスが盗む。実行はそれが店内に運び込まれる二日前。

噂はあくまで噂。しかも浅葱市限定のローカルな話だったから、ネット上でもそう大きな話題にはならなかった。

しかし暇人というのは一定数いるらしい。まあ、ここは普段から眠らない街ではあるのだが。

なんにしても、ある程度の野次馬の集まりがあるというのは有利に働く。それは怪盗ルピナスにとってではなく、アルミにとってだ。

アルミはただ単に巷で話題の泥棒の姿を拝みに来たわけではない。

百貨店の周辺を何度もうろついたおかげで、私服警官がどこにいるかはだいたい把握できた。願わくば、怪盗ルピナスが同じような観察眼を持っていますように……。

明かりが消えた直後、野次馬達は単にうろたえていただけだったが、すぐに、これは怪盗ルピナスの仕業ではないかと考え始めた。

アルミはそんな人の群れの中に入り、

「いたぞ！ 怪盗ルピナスだっ！」

力の限り声を張り上げ叫んだ。次に、あらかじめ用意していた爆竹にライターで火をつけた。

すぐに大きな音がして、まわりは大混乱になった。

百貨店の中では、警備員達が突然の停電に戸惑いながらも、警戒のレベルを上げて警備にあたっていた。

目的の階までは、なんとか警備の目をかいくぐってたどり着いた。問題はここから。

イベントというか美術品などの展示を行えるスペース。いわゆる催し場。明後日から、地元出身の有名画家の展覧会が開かれる。今回の標的は、その画家の代表作だ。

その絵画は今、壁に掛けられている。催し場の入り口には体格のいい警備員が数人。無線で別の場所にいる仲間と連絡を取りあっている。この状況で動けばすぐに警備の援軍がやってくるだろう。

だが、攻めるなら今だ。そう長い間停電を続けるわけにははいかない。

怪盗ルピナスはスタングレネードを取り出した。強烈な閃光と音で相手の感覚を麻痺させるタイプの手榴弾。警備員の死角に隠れてグレネードのピンを抜き、彼らの立ち位置に投げて、自分は目を閉じ耳を塞いで同時に動いた。

グレネードはすぐに作動し、警備員達是对処もできないままその影響をもろに受けた。

ここからは単にスピード勝負。この隙に会場の中に入り目的の品を壁から外し、持ってきた風呂敷に包んだ。そして置き土産としてトレードマークのルピナスの花を置いてすぐに退散した。

あとは、このまま下の階に降り、張っている私服警官の少ない出入り口から逃げるだけ。

大騒ぎの現場を離れ、何事かとそこに向かおうとする人の波に逆行して怪盗ルピナスの現れると思われる場所に急ぐ。その人の波には目をつけていた警官の姿も数人。もちろん、向こうもこれが陽動であるという可能性は考えているだろうから、それぞれの持ち場にいる人員の数がそう減るとは思えない。

まあ、やらないよりはいい、それだけのことだった。

アルミがその場所に着くと、やはり若い男がひとり、所在なさげに立っていた。さっきはふたりいたから、片方は陽動の方に行ったのだろう。

では残った方も無力化しよう。

アルミは音も無くその警官の背後に忍び寄り、気付かれないまま鮮やかな足払いをきめて気絶させた。よし。完璧。

「……………ん？」

ふと視線を感じて顔を上げると、百貨店の出入り口に大人がひとり、目を丸くしてこちらを見つめていた。

「……………」

「……………えっと……………」

その人は髪が長くてスタイルの良い女性で、小脇になにか四角くて平べったいものを布に包んで持っていた。

「あの……………怪盗ルピナスさん、ですよね……………？」

「……………っ！」

その質問に答えることなく、その女性は一瞬でアルミとの間合いを詰め、なにかを突き出してきた。アルミはとっさに、さきほど倒した男を盾にする。

直後、その体が大きく痙攣した。

「スタンガンか！」

アルミはその警官を横に突き飛ばし、スタンガンを持つ怪盗ルピナスの手首をつかんで再び足払いをかけた————が失敗。振り払

われて後ろに逃れた。

さらに接近、相手はまたスタンガンを突き出してきたためナイフで受ける。

小学生が大きなコンバットナイフを取り出したことに相手は少なからず驚いたようだ。その隙をつきアルミは相手を押し倒した。

「あの、突然すいません………ちょっと色々騒ぎが起こって………とりあえずここから逃げましょう。………その後で少しお話、伺ってもいいですか？」

そしてアルミは、怪盗ルピナスの返事を待たずに彼女を助け起こし、二人で警官の居場所をさけてその場を離れた。

第76話 赤いダイヤモンド

ツンツン頭で釣り目で美形。そんな見知らぬ小学生の男の子に手を引かれて夜の街を歩く。本音を言うとすぐにでも家に帰りたいたいが、好奇心が勝った。

こんな時間に繁華街をうろつく小学生で、コンバットナイフを持っている。それにあの見事な格闘術。

興味を持つなというのは無理な話だ。ちょっとだけならつきあってやろう。

それに子供と一緒にいるというのは、なかなかのカムフラージュになる。とりあえずは自分が怪盗だと疑われることはあまりないだろう。

「……ところで、ねえ。どこに行くつもりなの？」

「え……えっと………」

行き先が気になって話しかけたら、男の子は少し困ったように返事した。

「実は、なにも考えてないです。それで……あの……」

その時、計ったように、男の子のお腹がぐうと鳴った。

「あ………あはは、お腹空いたけど、お金持ってなくて………」

「……………」

ふたりで二十四時間営業のファミレスに入った。この子がお金を持っていないのだから奢り決定だ。まあいい。さっき盗んだ物は何千万もの価値があるのだ。

「それで、話ってなに？」

「……………あ、はい」

男の子は目の前のフルーツパフェに見とれて反応が遅れたようだ。この子の注文したのはフルーツパフェといちごサンデー、チョコレートケーキにメロンソーダフロート。空腹の時に食べるものではない。

「えっと、じゃあ最初に……あの、本物のルピナスさん、なんですよね？」

「そう。あたしが有名な大怪盗本人」

「本名はなんですか？」

「え？」

「こういう場で、人を怪盗って呼ぶのはまずいと思うんです。だから、他の呼称を、本名を教えてください」

「……………あたしがそれを訊かれて、はいそうですかって本名を言ったりすると思う？」

「思いませんが、言ってください」

「……………」

なんなのだこの子供は。もしかすると、単なる変な奴なのかもしれない。そんな気もしてきた。

「別に、呼称なんてあたしは気にしないけど？」

「俺は気にするんです。……あ、安心してください。あなたのことは、誰にも言いません。あなたと俺が会ったことも含めて」

「……………本当に？」

男の子はこくこくと頷いた。

「……………こういうのって、まずそっちから名乗るものでしょう？」

「そうですね……俺は、浅倉。浅倉慎也です」

「そう……あたしは、白鳥——」

「嘘はずるいですよ？」

「う……」

偽名を使おうとしたのがばれた。

「ど……………どうして、嘘だって思ったの？」

「えっと………なんとなく？　なんか、わかるんです」

「なんとなくで嘘を見破られるなんてね……」

「まあ、理不尽な話ですよ」

「まったくだ。それにしてもこの少年、ますます興味深い。」

「……………、はあ、しかたないか………ねえ、一つだけ、教えて。あなたの目的ってなんなの？」

「はい？」

「別に、あたしの名前を知るためにこんなことしたわけじゃないでしょう？　あなたの目的はなに？　……………回答によっては、協力してあげないこともないけど。どう？　浅倉慎也君？」

「……あー、そうですね。わかりますよね。はい。実は、手伝ってほしいこと、というか、手伝いたいことがあります」

「なに？　なにかを盗んでほしいとか？」

「はい———ブラッドレッド・ローズってわかりますか……………」

「ブラッドレッド・ローズ？」

『はい。わかりますか？』

同時刻、柳瀬ルツカが自分の部屋でひとりでいる時に、携帯電話が鳴った。

愛しき我が友、ソーラから。

「わかるかって？　あれだよ？　最近掘り出された、珍しいダイヤモンド………たしか、南アフリカの鉱山だったかな？」

指先で裁縫針を弄びながら答えた。目の前には、作りかけのエプロンドレス。完成間近だ。

『そうです。本当に珍しい……世界でも数えるほどしか存在しない、赤い色のダイヤモンドの原石………それをカットしたものです。約三カラットの大粒で色ムラもない。……その美しさから付けられた名が……』

「ブラッドレッド・ローズ——血染めのバラ」

『はい』

「それで、どうしたの？ 急にダイヤの話なんて。……ああ、そうだね。女の子って、けっこう宝石の話が好きだからね」

『違います……ぼくは男ですからね』

「わかってるわかってる。男の娘だよ」

『……なんか変なニュアンス含んでないですか？』

「気のせいだよ。それで？ どうしてダイヤの話なんて？」

『いえ、どちらかというと、ヤクザの話です』

「ヤクザ？」

『はい。指定暴力団、兜会について』

「兜会……」

中国地方全域と兵庫県の一部をシマに持つ、極道組織の連合会。

現在、近畿地方を中心としてシマを持つ別の連合、鬼庭組と熾烈な縄張り争いを繰り広げている。

浅葱市はその前線であり、それがこの地域の治安の悪さに影響する要因の一つ。

「女の子みたいな小学生のしたがる話かなあ？」

『いいじゃないですか……それで、話の続きですけど』

「あー、長くなるなら、明日、直接会って話そう」

『あ、はい。そうします……では、放課後にぼくの小学校に来てください』

「僕としては、またソーラに中学校まで来てほしいのだけど」

『嫌です』

「どうして？」

『だって……それってまた、あのセーラー服着るってことでしょう？』

「うん」

『絶対に嫌ですからね！』

「そんなに女装したくないの？ ……わかった」

『はい』

「……ねえソーラ。ちょっと僕のこと、ご主人様って呼んでみて」

『え？　なんです？』

「いや。なんでもない。じゃあソーラ。また明日会おう」

『あ、はい。おやすみなさい、ルツカ』

「うん」

通話が切れた。

「ご主人様、ご主人様……お帰りなさいませご主人様……実際にこんなこと言われるのってどんな気分なんだろう？　……まあいいや。明日わかるだろう」

ルツカは針仕事を再開した。エプロンドレスは完成間近だ。

「わかる……といえばわかるけど。あのダイヤモンドでしょう？あれがどうしたの？」

「もしかして、ルピナスさんも欲しいとか思ってたりますか？」

浅倉慎也は、ストローでメロンソーダに浮かんだアイスクリームをつつきながら訊いてきた。

「ええ、まあ。興味はある」

「盗むつもりですか？」

「どうして？」

「……実は昨日、こんなことがありました……」

第77話 暴力団

その日の放課後。今日も無事に一日が終わったと、アルミは業火と一緒に帰ろうとしたら――校門に氷河がいた。

「怪盗って、捕まえるの難しいのか？」

「……はい？」

いきなりそんなこと訊かれても、返事のしようがない。

「まあ、なんだ、これを見てください」

氷河が鞆から取り出し、ふたりに手渡したのは新聞だった。今日の朝刊。その社会面。

「うん？ ……あの赤ダイヤについて？」

記事の内容を要約すると、

「つまり、先日発掘されたレッドダイヤのカットされたものを、浅葱市在住の成金が購入した。そしてそのダイヤがもうすぐ港に入ってくる、と」

「そうだ」

「それで？ この記事と怪盗と、なんの関係が？」

「怪盗ルピナスがこのダイヤを盗むって噂がある」

「………」

「捕まえてみたいと思わないか？」

「………、別に思わないけど、なにか策とかあるのか？」

「いや、ない」

「………」

「まあなんとかなるさ。この前の誘拐事件もなんとかあったし」

「なんともなっていないけど……」

「それでもだ、悪い人間を野放しにはできないだろう？」

「………」

「なあアルミ、ちょっと揺らいでないか？」

「う……………」

業火に心を読まれてしまった。さすが。伊達に親友やってない。その通り。やりたくないことならきっぱり断る。

「あー、二日ほど待ってくれ。怪盗ルピナスを捕まえたいんだな。可能かどうか考える……………」

「……………というわけです」

業火や氷河の名前は伏せたが、昨日あった会話をかいつまんで話した。

「ふうん……………ねえ、いくつか、訊いていい？」

「どうぞ」

「あなたのお友達の高校生君が、あたしを捕まえたいと思うのは、どうして？」

「えっと、彼は英雄主義者というか……………ヒーローに憧れる節がありまして。……………この街の平和を守るため、普段から三人で、正義の味方の真似事してます。」

「具体的には？」

「学校の近くに跋扈する不良とかチンピラを殴り倒して追い払ったりしてます」

「それで、その活動の一環として、世間を騒がす怪盗を捕まえてみよう？」

「言い出したのは俺じゃないです」

「その高校生君ね……………ねえ、その子ってもしかして、バカ？」

「……………否定はしません……………でも、少しでも乗り気になった俺も同レベルでしょう」

「でも、あなたは実際に怪盗ルピナスを捕まえた」

「どうでしょうね。あなたはいつでも逃げられたはずですよ」

「そう？」

「はい。さっきも真正面から飛びかかってきたら取り押さえることなんてできませんでした。あなたから襲いかかったこと。子供だと思っただけのこと。そして、俺がコンバットナイフを持っていたことに驚いたこと………それだけのことがなければ、あの場で逃げられてました」

「そうね……それに、その後にも逃げるチャンスはいくらでもあった。だったら、なぜあたしはこんなことしてるのかしら？」

「もちろん、俺に興味を持ったからですね？この小学生が何者なのか、正体を知りたくなかった」

「本当に、いろいろお見通しなのね……」

「互いに、ですけどね」

「それで、話を戻していい？　あなたは一応、怪盗ルピナスを捕まえた——ブラッドレッド・ローズの登場を待たずに。あなたの目的は果たされたんじゃないの？」

「はい……いいえ。俺のやりたいことは、あなたを捕まえることじゃない」

「じゃあ、なに……さっき言ってたね。ブラッドレッド・ローズを盗むって」

「はい。でも、話はそう単純ではない」

「どういうこと？」

「ヤクザがからんできます。指定暴力団、兜会」

「……………」

「ブラッドレッド・ローズが港に入ってくるのは明後日の夕方。その後、港近くのホテルに運ばれ、マスコミ向けに公開されるのがその夜。そして翌日の昼頃から一般に公開されます」

「成金が自慢したいのね。よくある話。それが兜会とどう関係するの？」

「そのダイヤの警備を担当する会社です。セキュリティー会社、ライノサロス」

「rhinoceros beetle——カブトムシ。兜会系の組織が経営してる企業。あんまり有名なことじゃないけど、ちょっと調べればすぐにわかること」

「はい。俺のやりたいことは、ブラッドレッド・ローズを盗むこと——それで、暴力団に多少なりとも打撃を与えること」

「この会社、暴力団の資金源だからね……これだけ注目されている出来事で、ダイヤが盗まれてしまえば、その警備会社の評判はガタ落ち。兜会へのダメージもあるかもしれない。……でも、そのことになんの意味が？ ……正義の味方はヤクザが嫌い？」

「あんまり、正義って言葉好きじゃないんですが。……ヤクザ自体には、そんなに敵対心は持ってません。関わらなければ害はあまりないですし、この混沌とした街の秩序が守られているのは、彼らの力に依るものも多いです……問題なのは、この場所で別の組織と抗争していることです」

「鬼庭組とね……この港の利権をすべて押さえられれば莫大な利益が生まれる」

「だから、ふたつの組が抗争をしている。……それも、だんだん激しくなってきました。市街地での発砲事件も増えてきた。これをなんとかしたいんです」

「ふたつの組の戦力は拮抗している。わずかな要因でそれが崩れるかもしれない。あなたの思い通りにいけば、鬼庭組が浅葱市全域をシマに持てば、抗争は終わり少し治安がよくなる……」

「そういうことです」

「ヤクザに支配されれば平和になるって？」

「はい」

「それで、むしろ迷惑被る人もいるかもしれないのに？」

「少なくとも俺の周りにはいないと思うので、問題なしです」

その言葉に、目の前の怪盗は大きいため息をついた。アルミ自身、間違っではないが奇妙なことだと思っている。

ややあって、怪盗ルピナスが口を開く。

「あなたの話はわかった……でもあたしとしては、ヤクザなんかと関わりたくはないんだけど」

「でも、幻のレッドダイヤは興味がある」

「そうだけど……ねえ、そのダイヤ、盗んだらあたしにくれるの？」

「はい」

「盗むの、手伝ってくれる？」

「最初からそのつもりです」

「……あたしの正体、誰にも口外しないって約束する？」

「俺の友達ふたりにも？」

「……それは許可します」

「だったら、大丈夫です」

「そう………わかった」

怪盗ルピナスは頷いた。

「あなたに協力してあげる……あなた、メルアド持ってる？」

「パソコンのなら」

「よろしい」

そう言って、一枚の紙を渡された。名刺だった。

アルミは名前の欄を見る。如月 叶と印刷されていた。

「きさらぎ かなえ、さん……」

「それがあたしの本名。満足した？ あとでそこに書いてあるアド

レスに連絡するように」

「これは、嘘じゃないみたいです」

それに返事をせずに、叶は立ち上がってレジの方に歩いていった。

話はこれで終わりか。

第78話 ルツカなりの自制心

小学校の屋上まで、誰にも見つかることなく侵入するのは簡単なことではない。だが、そんなことにも既に慣れた。

塀を乗り越え校舎に横付けされた非常階段を上れば、女の子みたいな男の子が、ひとりで客を待つ姿が目に入った。

「やあソーラ。待った？」

「あ……いえ。全然」

なんだかデートの待ち合わせみたいだ。ルツカはそう思った。

「それで、昨日はどこまで話しましたっけ？」

「ブラッドレッド・ローズと兜会の関係」

「そうでしたね。それで、あのダイヤモンドですけど」

「ねえ、そんなことより、ちょっとこれ着てみて」

「……はい？」

ソーラは怪訝な表情を見せ、それはすぐに恐怖と怯えに変わった。当然か。この言葉は、ソーラにとって最悪の未来を意味している。

「というわけで、ソーラ、おとなしくこれに着替えなさい」

その表情だけで既に嗜虐心をくすぐられながら、ルツカは持ってきた紙袋から昨日作ったばかりの衣装を取り出した。フリフリのエプロンとワンピースが一緒になったもの。

「ルツカ……これって……」

「見ての通り、メイド服」

「これを着ろ……って？」

「うん」

「嫌です！」

「……………そっか。わかった」

ソーラが拒否することはわかっていた。ルツカはあっさり頷き、ソーラに少し近付いた。

「えっと……ルツカ？　どうしたんですか……」

ルツカの接近に警戒し、ソーラは一步後ずさった。そしてもう一步後退しようとしてルツカに腕をつかまれた。

「だめだよ……逃がさないから。さあ……」

もう片方の手でソーラの頬を撫でる。伝わってくる微かな震えがたまらない。

「あ……あの、ルツカ？　なにを……」

「ねえ。冷静に考えてみなよ……君が自分で着替えるか、僕に無理やり着替えさせられるかのどっちかしかないんだよ？」

「う……そんなのずるいですよ……ひゃんっ！」

首筋をくすぐると、実にいい悲鳴があがった。

「まあ、君がどうしても着替えたくないなら……どうしても僕に脱がされたいなら、別にそれでいいけど……」

そんなこと言いつつルツカは指先でソーラの首筋をなぞった。

「っああん！」

なんて素晴らしい悲鳴なんだろう。

「や……やめ……やんっ！　あうう……る……ルツカあ……だめだよお……ひゃあっ！」

くすぐっているだけなのに、何を感じているのだろうかこの男の娘は。

「うう……わかった……わかりました！　着替えるからやめてください！」

ようやく欲しい返事がもらえた。

「つまり……脱ぐの？」

「……………はい」

「聞こえない」

「脱ぎます！　脱ぎますから許してください！」

頬を赤くして涙目で叫ぶソーラの様子があまりにもかわいたため、ルツカはあわてて顔を上げ空を仰いだ。このまま直視していたら、変な気を起こして本気で襲いかかったかもしれない。

無二の友達相手に、それはまずい。

家に帰るとすぐにアルミは、自室にあるパソコンのメールソフトを起動した。

受信が一件。怪盗ルピナスこと如月 叶から。

昨日の夜に名刺に印刷されていたアドレスに送信してから、向こうからの連絡はなかった。

たぶん、確認しました、とか、そういう内容だろうなと思いがら開いて、考えていたより長い文章に少し驚いた。

『メールは問題なく受信されました。今後の連絡はこれで。』

ところで、あなたに尋ねたいことがあります。昨日、私があなたに偽名を名乗ろうとした時、あなたはすぐに嘘を見抜いた。もちろん、私が簡単に本名を明かすなんてありえないし、当てずっぽうでも偽名だと言うことが無意味だとは思わない。でも、あなたの様子はそういうのとは違った。なんというか自信に溢れていた。私の言ったことが嘘だって確信しているみたいだった。もしかしたらバカなこと訊いてるのかもしれないけど、教えてほしい。どうやって、私の嘘を見抜いたの？』

「……………」

アルミは無言でベッドに倒れこんだ。どうやって嘘を見抜いたかわかるはずではないか。

叶の言っていることは正しい。あの時、怪盗ルピナスが偽名を言うのは予想していたが、最初から如月という名を使ったなら嘘だとは言ってなかった。

嘘を見分けられる。だが、なぜそうなのかを理屈で言うのは出来

ない。ほぼ間違いなしの精度であっても、それは感覚的な物に過ぎない。

起き上がって、ドラゴンのぬいぐるみを抱きながらキーボードの前に座った。

「どこまで言っているのか……」

一瞬の逡巡のち、キーボードを叩く。

『はい。あなたの思っている通り、俺は他人がついた嘘を見破ることができます。これは感覚的なもので、どうやって見抜いたかは説明できません。ただ、そういう特技を持っている、としか言えませんが……』

送信。しばらくして返信がきた。

『もしかしてその特技って、あなたの先祖代々が持っているもの、だったりする？』

「……………」

どうしてそんなことがわかるんだ。推測できるんだ。

あるいは、すべてお見通しなのかもしれない。

『よくわかりましたね。その通り、とはすこし違いますが、だいたいい正しいです。』

俺の家系の中で代々、男子に一定の確率で発生している能力らしいです』

返信

『つまり、一種の遺伝病みたいなもの？ 血友病みたいな』

血友病、血液が凝固にくくなるという、遺伝性の病気。ヴィクトリア女王の子孫が患者として有名。

遺伝病。そう。これはまさに遺伝病だ。

『そうだと思います』

『もしかしてそのご先祖に、浅倉林太郎って男、いる？』

頭が痛くなってきた。この女は、どこまで知っているんだ。だんだんと追いつめられていく推理小説の犯人の気分になりながら、キーボードを叩いた。

『はい。林太郎さんに子供はいなかったらしいですから、先祖とは少しちがいますが。あと、名前以外は彼についてはあまりよく知りません。でも、あなたはどうしてこのことを？』

嘘だ。本当は名前だけなんかない。彼については、もっと重要なことを知っている。だがそれを話すわけにはいかない。話したくない。

返信

『新聞記事のデータベースにアクセスして浅倉という名前を検索した。すると、大昔の記事で、浅倉林太郎という若者が、当時の浅葱市会議員の汚職を見抜いたっていうのを見つけた。彼のついた嘘を、大勢の市民の前で糾弾した、って内容。一九四三年の記事ね。』

あと、この男についてももうひとつ記事があった。その数年後、一九四五年の六月。ひとりの天才大学生が謎の失踪をした。もちろん、林太郎のこと。あなたはこの事件について、なにか知らない？』

「その年の六月二三日、沖縄にて亡くなりました」
誰にも聞こえぬ言葉をつぶやいた。

『いいえ。なにも知りません』

だが教えなかった。自分に関する、絶対に人に知られたくない秘密。

罪悪感は少しある。叶が自分に興味を持ったからこそ、こうして連絡をとることができたのだ。浅倉慎也という男のことを、もっと知る権利があるだろう。

「どうしたものかな……………」

答えなんてないのだろう。だったら、今できる最善のことをするまでだ。

その日は、もうメールはこなかった。

第79話 正義の味方

純和風の巨大な屋敷の正門前に、一台の車が停まった。黒塗りの外国車。スーツを着た男数人が出迎える。車のドアが開くと、皆一斉に頭を下げた。

「お疲れ様です！」

中から出てきた人物に、見事にタイミングを合わせて挨拶した。その一方で、出迎えられた人物は、どこか迷惑そうだった。

他の男達と同じスーツ姿で、目つきの鋭くがっしりとした体格の男。歳は三十代の前半あたりか。

彼は屋敷を見上げ、大げさにため息をついた。どうして自分がこんな場所にいなければならないのだ？ こっちはなんとか縁を切ろうと努力しているのに、この巨大な屋敷は彼の思いを嘲笑い、どこまでも追いかける。

わかっている。少なくとも、浅葱市という場所——彼が、どこよりも住んでいたいと思える場所——にいる限り、この呪縛からは逃れられない。

「それで。オヤジはどこだ？」

「はい。会長室に」

頭を下げる男のひとりに話しかけると、そんな答えが返ってきた。予想通りの言葉だった。返事をすることなく、屋敷の中に入っていく。

途中、入り口に掲げられた図形を一瞥する。日本式の兜に多く生えている二本の角を圖案化したもの。

指定暴力団、兜会の代紋であり、ここが兜会の本部であることを示している。

建物の外観とは異なり、中は近代的な設備が整っている。会長室も、まるで普通の会社の社長室のようだ。

そのたとえば正しいのだろう。事実、この極道組織が日々得ている利益は、そこいらの中小企業なんかよりもずっと多い。

その会長室に入ると、ひとりの老年男性が自分を待って、立っていた。

兜会の現会長、兜崎誠。

そして対面する自分は、その一人息子、兜崎大介である。

「……………」

大介はその部屋に飾ってある額縁を見つめた。そこには、迫力のあるタッチで鎧武者が描かれていた。鎧武者。我が兜崎家は代々極道の家系であり、背中にこの鎧武者の刺青を彫ることになっている。だが、その伝統もこの代で終わりだ。

「それで、オヤジ、今日はなんの用だ？」

「……………この家に、戻ってくるつもりはないか？」

またこれだ。もう何度も同じことを頼まれ、そのたびに同じ返答をくり返している。

「オヤジ、お前もしつこいな。俺は、堅気として生きると何度も言っただけだ。俺は兜会の代紋も、鎧武者も背負うつもりはない」

「……………そうか」

相手はそのまま黙ってしまった。ここで、いたずらに時間を浪費する意味は無い。

「話はそれだけか。だったら、もう帰るぞ」

そう言って大介は踵を返した。その背中に声がかかる。

「待ってくれ。話はまだあるんだ」

「……………ちっ」

腹が立ってきた。不必要な足止めを食らうことに、ではない。この男の態度に対してだ。

兜会の創設者にして伝説の極道者の末裔が自分だ。そしてその父親がこの男。なのにこの男ときたら、堅気の自分よりも極道として

の迫力がない。無論、紳士的な正確の極道もある。だが、これは紳士的などではなく、単に弱々しいだけだ。

終戦直後の一九四五年、浅葱市にひとりのやくざ者がいた。兜崎雄一郎という名のこの男は、数人の仲間と共に小さな組を作った。それが現在まで続く、全国で屈指の規模の極道組織の始まりである。ここで誤解を招きやすいことがひとつ。多くの人間から思われていることとは違い、兜会のリーダーは世襲制ではない。代々兜崎の姓を持つ者が会長を務めているが、それは単に、極道としての資質、統率力が誰よりも優れていたからに他ならない。

そういう家系なのだ。代々、優秀な極道者を輩出してきた一族。ところがこの男は、どうしてこんなにも資質に恵まれていないにもかかわらず、なぜこの座にいるのだろうか？

おそらくは、何者か黒幕がいて、この男を会長に仕立て上げたのだろう。自分は安全な場所にいて、この男を傀儡として操る。

幹部の中を探せば黒幕は見つかるだろう。そうでなくても、怪しそうな構成員のひとりやふたり、すぐに思いつく。

だが、そんなことが部外者である自分にどれほどの意味があるだろうか？

「まだ何かあるのか？」

「ああ……今話題の赤ダイヤを知っているか？我らがライノサロス社が警備を任された、あのダイヤだ」

「言われなくても知っている。それがどうした？」

「その警備に、協力してほしい」

「……………」

警備会社ライノサロスが兜会となんらかの関係を持っているらしい、というのはよく知れたことだ。だが、それは少し間違いだ。

実際は、両者の関係はもっと親密で、ライノサロスは兜会が直接

経営している会社だ。経営者も社員も、警備員ひとりひとりが皆兜会の構成員で、利益はそのまま兜会に流れてくる。

もちろん外部には巧妙に隠されていることだが、兜会の資金源のひとつである。

「なぜ俺がそんなことしなければならない？」

そんな会社で協力するのは、この組織に協力することと同じだ。

「わかっていないとは言わせないぞ。俺は、お前達と関わるつもりなんて毛頭ない」

「だが……このダイヤを、どこかの武装勢力が狙っているという噂があるのだ」

「それがどうした？ 武装勢力だろうが海外マフィアだろうが、てめえの兵隊で守ればいいだろうが。俺が加勢する必要がどこにある？」

「万が一にでもダイヤが盗まれれば、この会社の信用は地に落ちる。そうすれば、兜会が受けるダメージも小さなものではない」

「……………」

「兜会は今、長きにわたる鬼庭組との抗争の最中だ。これが原因で、戦いの流れが鬼庭方に傾くかもしれない。……………もしこちらが敗れ、浅葱市のなわばりから撤退することになれば、お前がどうなるか、わかっているだろう？」

「……………くそっ！」

この男は脅しているのだ。

脅しているのに、この期に及んでなお覇気がなく、極道になりきれていないのだ。そのことに無性に腹が立った。

「んなこと最初からわかってんだよっ！」

誠の胸ぐらをつかんですごんでみせたら、相手はおもしろいように怯えた。実の息子に対して、だ。

「ま……待て、落ち着いてくれ……」

「いいかオヤジ、俺はお前とは違って腑抜けでも操り人形でもない

からな。自分の置かれた状況ぐらい自分で把握できるんだよ。ああ、
そうとも。鬼庭組が浅葱市全域を支配すれば、兜崎の血を引く者と
して面が割れてる俺は、この町を歩くことはできない……………大変
だよな？ 俺はこの町を好いているのに、歩いていると鬼庭組の連
中が喧嘩ふっかけてきやがる。最悪だなあ！？」

突き放すように誠を解放すると、彼はよろよろと後退し、壁にぶ
つかってようやく止まった。その後口を開く気配もない。

しかたがない。どれだけムカつくことであっても、奴の言うこと
は真実だ。

大介は父親に背を向け、言った。

「わかったよ。今回だけは協力してやる。だが……………加勢に行
くのは俺じゃない……………正義のヒーロー、ゲッコー仮面だ」
そのまま、返答を待たずに出ていった。

夜、港のコンテナ群の中を、ひとりの男が歩いている。携帯電話
で話をしているようだ。

「……………はい。無事に購入できました。VZ61 “スコープオン”
……………そうです。サブマシンガンです。はい。ええ。もっと強力な武
器も欲しかったのですが、それは、もう少し我慢ですね。……………はい。
ブラッドレッド・ローズを手に入れるまで……………」

第80話 怪盗の武器

メールを受信。

『怪盗から嘘発見機少年へ

盗みの計画が完成した。以下の指示にしたがうように。あなたのお友達も参加させること……』

そんな言葉に続く長文のメールをざっと読み、アルミは、

「嘘発見機少年ってなんだよ……わざとなのか？ 嫌がらせなのか……いや、単にセンスが悪いだけか……」

冷静に考えれば怪盗やるのに、トレードマークにルピナスの花なんて普通は選ばない。

「なんか……中二病っぽいんだよな、この人……」

そして計画実行のその夜、深夜零時を既に過ぎた時間、アルミが業火と氷河を引き連れて指定された場所に行くと、叶はひとりでノートパソコンを操作していた。

「来たわね……そのふたりがあなたのお友達？」

「そうだ」

「おいアルミ……こいつ誰だ？」

氷河が尋ねてきた。このふたりには詳しいことはなにも教えていない。

その問いに答えたのはアルミではなく叶だった。

「はじめまして。あたしが怪盗ルピナス……あなたが捕まえようと思っていた人間」

「……マジで？」

心底驚いた様子でアルミを見つめたため、アルミはこくこくと頷いた。業火はというと、こうなることはある程度予想していたのか、やれやれとため息をついて、あまり驚いてはいないようだ。

「それで……アルミ、俺達の目的って、怪盗ルピナスを捕まえることやんな？……この場合、どうなる？」

「新しい目的ができた……ブラッドレッド・ローズを盗む」

「……………え？」

アルミはふたりに、これまでの話と状況を説明した。

「……ということなんだ」

「……………そうか」

「……………」

氷河の表情が暗くなったのを、アルミは見逃さなかった。たぶん、他のふたりも気付いている。

気持ちにはわかる。アルミに否定されたとはいえ、氷河はじぶんの行動になにかしらの正義を見出しているのだろう。ならば、盗みなんて、しかも怪盗などという悪党と一緒に言うなど到底許されたことではない。

だが、だからといってなにができるというわけでもない。気付かないふりをするのが最善の選択肢。

気にするなと叶に視線を送ると、叶は小さく頷いた。

「……じゃあ、作戦を説明するわよ……」

——あなた達ふたりには、別行動してもらう。目的のホテルの隣にあるビルに侵入してほしいの。五階の、経理部の部屋に入ること。

「……と、言われたんやけど……………」

業火と氷河は、目の前の建造物を見上げた。浅葱港に隣接するビル群、その鉄の森を構成する樹のひとつ、エンジェル・バイオテツ

ク・カンパニーの本社ビル。

生物工学を扱う会社など普段興味を持たないことであるが、これから不法侵入するとなるとなんとなく気が引ける。氷河と顔を見合わせ、頷きあう。今いるのは、そのビルの裏口。その鍵穴に、先ほど叶という怪盗から渡された鍵を差し込み、緊張を抑えつつゆっくりと回すと、あっさり錠の外れる音がした。

「……………これ、なんなんやろ？」

「合鍵……………とかか？」

「そうだとしたら……………作ったんやろか？ どうやって？」

「……………さあ？ とりあえず、入るぞ……………」

「大丈夫かなあのふたり……………」

一方のアルミと叶は、ダイヤのあるホテルに同じく侵入。ダイヤのあるフロアまで階段をのぼる。明かりはすでに消されていて、懐中電灯で前方を照らしながらの進軍だ。

「どうしたの？ 心配？」

アルミは大きく頷いた。

「俺がついていった方がよかったんじゃ……………」

「はいはい。心配しない」

「む……………」

目つきの悪い小学生の頭をなでてやると、彼は少し恥ずかしそうに、だがなされるままにしていた。こういうところは、かわいい。「大丈夫。あのビルのセキュリティシステムは完全にダウンしている。警備員の巡回パターンについても完全に把握しているから、必要な時間がくれば排除すればいい。泥棒でも入らないかぎり、誰かに見つかることはありえない。わかった？」

「……………そうだな。信頼しよう。……………それが、怪盗ルピナスの特徴だし。……………他に、怪盗っぽいところ、あんまりないけど」

「……、ちょっと？ それどういうこと？」

「え？ だって、叶って、あんまり怪盗っぽいことしてないというか……予告状とか出さないし」

「それは……だって、そんなの書いたら、相手が警戒するじゃないの」

「それに、変装だって……」

「ちょっと、どこ見てるのよ？」

アルミの視線は、叶の割と豊かな胸に向けられていた。

「いや……、だって、その胸じゃ変装とか、無理じゃないかな……」

「そうだけど。そのとおりだけどね……男に化けるなんて不可能。女も苦勞するだろうから、変装なんかやらない」

「……でも、叶は、怪盗として強い武器を持っている。——天才的なハッキング能力」

「……………」

「ほかのコンピューターネットワークに容易く侵入。情報を盗んで遠隔操作、システムを乗っ取ってダウンさせる。相当優秀なハッカーだ」

「褒め言葉ありがと。でも、ハッキングじゃなくてクラッキングね」
「？」

「ハッキングっていうのは、コンピューターを熟知した人のエンジニアリング全般を意味する言葉。あたしみたいに悪いことにつかうのは、クラッキングって言うのが正確」

「どうだっていいじゃん、そんなこと……」

「よくない。こういうのはちゃんと区別しないと」

「はいはい……」

「……なあ」

「なんだ？」

「どう思ってる？ その、怪盗なんか協力することについて、業火はどう感じてる？」

「……………さあな。俺は、どうだっていい。アルミの言う通りにする。それだけや」

「……………」

「アルミは、ちゃんと目的があって行動してるやろ？ それに、アルミは信頼できない奴と行動することはない。だから、俺もアルミを信頼する」

「……………そうか。わかった。俺も、アルミを信頼する。それでいいか？」

「ああ」

「ならいいんだ……………着いた」

「……………」

叶という女に指定された部屋。完全に寝静まった建物の中、この部屋とて例外ではなく、十台前後のデスクと、同じ数ほどあるパソコンのディスプレイは闇に包まれ沈黙していた。

「これから、どうするんだっけか？」

「怪盗ルピナス……………叶さんに連絡」

「そうだな」

氷河が携帯を取り出し、叶となにか話している。

その最中、部屋が覚醒した。照明がひとりでにつき、パソコンの電源が入った。

「これは……………」

「怪盗ルピナスの技、だ」

氷河が通話を切ってその疑問に答えた。

「俺たちの役割は、これを使うらしい……………」

第81話 第三の敵

「このホテルの監視システムは完全に掌握した。もちろん、この人達には気付かれてない。なんの変哲もない、さしかえられた画像しか見られないようにしているから、異変には気付かれないはず」

叶がノートパソコン操作しながら言った。

「監視カメラの映像を、向こうのビルのパソコンで見られるようにした。あのふたりにしてほしい仕事は、その映像を見て、敵の位置を把握。あたし達に接近しているようなら報告する。そういうこと」

「……ふうん」

「……というのが、俺達の仕事らしい」

「……………」

業火は無言でディスプレイを眺めている。画面の中で、いくつかのウィンドウが開いていて、隣のホテルの中の様子が映し出されている。

「これだけ画面がある。ふたりだけで全部カバーできるかどうか………どうした業火？ 黙り込んで」

「人が……多すぎる」

「うん？」

「敵……警備員の数が多い。……、いや、そうじゃない。これは警備員じゃない」

「うん？ 何を言って……」

氷河も倣って画面を見つめ、そして絶句した。

画面に映る、多くの人間。制服を着た、一見して警備員とわかるのはごく少数。多いのはスーツを着た体格のいい男。

「なんだこれは……」

「とりあえず、アルミ達に連絡しよう」

「あ……ああ」

「それって、つまり兜崎会の構成員ってことだよな？」

「そうでしょうね。ライノサロスの正規の警備員だけでは守りきれないと思った」

「なぜ？ 俺達みたいな奴がいると予想して？」

「たぶんそう。絶対に奪われてはいけない宝だから、過剰なくらいに警備を増やした。組織がら、人では困らない。そういうこと」

「だが……、だとしたらまずいな……」

「え？」

「この建物内にヤクザがいっぱいいるんだろ？ なのに、カメラのモニターには普段の、警備員が巡回している程度しか人の出てこない映像が映っている」

「……………」

「一瞬で、ハッキリ……クラッキングしてるって、ばれるな」

「わざわざ言い直さなくていい！」

「えー」

ブラッドレッド・ローズの置かれている、ホテルの五階にある大会議室。会議室と言っても、普段なら置いてあるような椅子や長机はことごとく別の部屋に移され、今この部屋に置かれているものといえ、腰ぐらいの高さの、白く縦に細長い形をした台。華美な装飾など一切ないこれが、今夜の主役を引き立てている。

その台の上には、防弾ガラスでできたケース。大きさは、三十センチ立方ぐらい。中に、血で染まった滴を抱えている。

数時間前、このダイヤは大勢の記者に囲まれてカメラのフラッシュを浴びていた。これらは明日の朝、新聞やテレビのニュース番組の題材となり、一般大衆の好奇心をかきたてるのだろう。そのうちののくらしいが、明日の一般公開に来るのだろうか？　こんな石ころを見るために。

兜崎会会長の御曹司はダイヤモンドから目を離した。が、まわりにいるのは自分同様にむさくるしい男どもばかり。石ころを守るために集まってきた極道者達。そしてそのリーダーが自分なのだ。なんて滑稽なんだろう。

「大介さん。報告が」

「うん？」

若い男が話しかけていた。さっきまでどこかと連絡をとっていたようだが。

「モニタールームから。監視カメラの映像が差し替えられていると」

「どういうことだ？」

「現在、この建物の中には我々の仲間が大勢巡回しています。ですが監視カメラの映像には、彼らが映っていません」

「つまり、平時の映像がながれている、と？」

「はい」

「外部の、何者かの仕業か。だが、そんなことが可能なのか？」

「それは……かなり高度な技術と思われませんが……どうしましょう？」

「そんなことがあるってことは、敵が存在しているということだ。

それも、おそらくはかなりの手練れ。……………各員、警戒を強化するように伝えろ。それと定期的にこちらへ連絡すること。異常が無くても、だ。敵はすでに侵入している可能性がある」

「はい」

警戒が強化されるのは確実。アルミと叶は、できるだけ目立たない場所に一旦退却、様子をみることにした。

「あのふたりの誘導に従って、ヤクザの巡回の隙間を突いて進んでいくしか……どうしたの？　なんかあった？」

目の前の小学生は、そわそわしているというか、落ち着かない様子を見せていた。

「なあ叶……ここ……女子トイレだよな………」

ふたりで、女子トイレの個室に閉じこもっている。

「そうだけど、どうかした？」

「いや、俺、男なんだけど……」

「しかたないでしょ？　どうせ相手は男ばっかだろうから、ここに隠れてるのが一番安全なの」

「でも……」

「はいはい。気にしない。男なら、もっと喜びなさい。普通なら絶対に入れない、あこがれの場所でしょう？」

「そんなことないです……」

画面の中をヤクザがせわしなく動く。巡回パターンがわかれば、アルミ達を誘導するのも楽になるのだが……

——カチャ

「？」

業火の手が、なにか細かいものに触れた。見ると、机の上に小さな人形のついた携帯ストラップが大量に置いてあった。だれかの机なのだから、その人の私物が置いてあってもおかしくはない。だが、業火にとってそんなことはどうでもよく……、

「カエルさん……」

そのストラップの中に、業火の好みに直球ストライクなカエルの人形があった。

恋に落ちるのは一瞬。情熱が体を駆け巡り、思考がストップした。

「……………うか？」

「カエルさんが……」

「おい業火！」

「ひゃいっ！」

氷河に、現実連れ戻された。

「どうしたんだ業火……急に呆けたりして」

「いや……その……えっと……」

カエルさんの人形に見とれていたとは、ちょっと恥ずかしくて言えない。業火はストラップの山を見つめ、そしてその中に天使をかたどった人形を見つけた。

「あー、そういえばさ」

「なんだ？」

「この会社の名前、なんで天使なんやろ？」

「うん？」

「エンジェル・バイオテック・カンパニー。どういう意味なんかな？ たしかに天使ってきれいやけど、なんか由来があるのかな、って」

天使のストラップを手に、そう呟いた。大した疑問ではないが、なんとなく気になったのだ。

「さあ……………あ」

「どうした？」

「Angel Biotech Company で、略称がABCだ」

「ははっ、まさかな……」

氷河の言った冗談に頬が緩んだ、が、その表情が突然、画面に目をやって凍りついた。

「氷河！ アルミに連絡を！」

「うおっ！ ……どうしたんだ」

「敵が……」

ホテルの階段を、複数の人影が忍び足でのぼっている。そのうちのひとりが、頭に付けたイヤホンマイクに向けて喋る。

「こちらチームアルファ。チームブラボー、チームチャーリー、各員配置についたな。――了解。では、作戦開始！」

その男は、各ポジションからの返事を確認すると、手にしているサブマシンガンを正面に向け、のぼる速さをあげた。

目指すは、幻の赤ダイヤただひとつ……………

第82話 銃

「この建物の中に、銃を持った男が複数侵入してきた？ 本当か？」

「あなたのお友達の言うことを信じるなら、本当」

「なら、本当なんだろうな。で、どうするんだ？」

「どうするって……しばらく様子見」

「……………ここで？」

「当然。あと、これ持ってた」

「え？」

自身も拳銃の用意をしながら、アルミに一丁の拳銃を渡した。全長が十七センチほどの、比較的コンパクトなサイズ。叶のは、もっと大きな銃。

「新しく現れた敵は武装している。このヤクザ達も、もしかしたら拳銃ぐらいは装備しているかもしれない。銃撃戦が起こるかもしれない。だから、念のため持っていて……使い方わかる？」

「まあ……一応は。前に、お父さんが教えてくれたことがある」

「……………そう……………」

本当なのだろうか？ この子の父親は、息子に銃の扱い方を教えた？

いや、今それよりも気になることに気付いた。

「だったらいいけど……ねえ、もしかして、あなた人殺したことがある？」

「……………え？」

「いや、なんかそんな気がして。それで、どうなの？」

「…………………………」

「まあ、いいけどね」

「……………ああ」

この場所の下で銃撃戦が起こっているらしい。ハッキングをしかけてきたのは、彼らなのだろうか？

「状況は？」

大介の問いに、ヤクザのひとりが答える。

「敵の数は五人！ そのうち三人がサブマシンガンで武装！ 現在、北階段の三階、四階間の踊り場で銃撃戦！ 敵をその場所で足止めしています！」

「足止めしているこちらの戦力は？」

「10人ほど。全員にトカレフを持たせてあります……………増援を送り、一気に取り押さえましょうか？」

どうするか。数に頼れば、五人ぐらいならすぐに無力化できるはずだ。が、相手はそのことをわかっているのだろうか？

相手の立場で考えてみよう。敵は、こちらの警備がある程度嚴重であることなど十分予測できているはずだ。なのに、たった五人ほどで乗りこむなどありえるだろうか？

大介は会議室内を見渡した。長方形の形の部屋で、各辺に扉がある。

「他にどこか、異常はないか？」

「……………そういえば、連絡のつかない班がひとつあります」

くそ、予想通り、最悪だ。

「いや、いい。奴らはたぶん陽動だ。別部隊が存在しているが、その位置は把握できていない。だが、絶対にこの場所にくるはずだ。

……各員、この場所から離れるな。いいか、ダイヤモンドを死守すること。繰り返す。敵は必ずここに来る！ 必ず戦闘になる！ 野郎ども気を抜くな！」

「はい！」

その場にいたヤクザ全員の返事が、見事に合わさった。大した統率力なこと。

彼らは、こんな部外者のどこを信頼しているのだろうか？

サブマシンガンを抱えた男達は、敵に見つかることを恐れもせず
に突き進む。

「おい！　なんだお前達っ！」

「おっと！」

巡回中のヤクザに気付かれた。だが、そんなことは想定済みだ。

「邪魔だあっ！」

さきほど指示を出していた男が、そのヤクザに向かって銃を撃つ。
ヤクザはあわててそれをかわす。やはり拳銃弾程度ではそう簡単には
殺せないか。連射をやめ敵に一瞬で肉薄、その顔面に拳を叩きつ
ける。ヤクザは気を失い後ろに倒れた。音を聞いて駆けつけてきた
増援も同じように無力化した。

「おみごと。敵の数が思ったより少ないですね」

後ろについてきた仲間のひとりが話しかけてきた。確かにその通
り。だが、それはわかつていること。

「陽動役のチームブラボーがうまくやっているようだな……………さ
あ、先に進もう。目標まで、あと少しだ」

「はい！」

「本当に銃撃戦やってるなんてな…………」

「でも、本命は別部隊の方でしょうね。そこまで隠密行動している
わけではないけど、陽動のおかげで、隠れながら移動する必要もあ
まりない。たぶん、こっちがダイヤを盗む部隊のはず」

「どうする？　このままじゃ奴らに盗まれるけど」

「そうね…………銃撃戦に巻き込まれるのは御免だけど…………あんまりゆ

つくりもしてられない、か………」

叶は辺りを見回した。視界に入るのは、トイレの個室の壁ばかり。そして――

「伏せて！」

そう言っで、アルミがしゃがむのを確認するかしないかのうちに、扉にむかって銃弾を何度も撃ちこんだ。

第83話 敵、敵、敵

「ちよっ！ 叶！ なにがあった！？」

「この扉の向こうに人の気配がした！ 間違いなく敵！」

「マジかよ……」

たしかに、この時間帯にこの場所に人間がいるなら、それは確実に自分達の味方ではないだろうし、まともな種類の人間でもないだろう。

銃弾が個室の錠を破壊した。叶が撃つのをやめたのを見計らい、扉に体当たり。その向こうにいるはずの敵に銃口を向け……ようとした。

「っ！」

敵は本当にそこにいた。そして銃を向ける前に相手が刃物を振りおろしてきた。あわてて飛び退くと、見知った人間の姿が目に入った。

「テツ……」

「あら、アルミ様。また会えましたね。私はとってもうれしいです」
「……………もしかして、本当に俺のことストーカーしてたりするの？」

「いいえ。ここで会ったのは、偶然です……………いえ、もしかしたら、私達は運命の糸で結ばれているのかもしれないね。どうですか？ 今夜、私の家に泊まっていきませんか？」

「だが断る……………」

どうしてこう度々、彼女と顔を合わせることになるのか、さっぱりわからない。

とにかく、アルミはテツに銃口を向けながら、そろそろと後ずさりした。テツの武器は今までとおなじ、一対の剣。銃を持っているというのはは圧倒的に有利だ。叶はまだ個室の中にいて息をひそめている。テツはその存在を把握しているだろうか？

「……………」

「あまりそうこわい顔をしないでくださいよ……今日は、べつに戦うつもりなんてありませんから」

「うそつけ。だったら剣振りおろしたりしないだろ」

「え……えっと、それはそれ、あれですよ。愛情表現、的な？」

「……………」

だんだんと後ずさっていく。テツは叶に気付いていないのだろうか？ アルミだけを見つめて、その動きに合わせて一步一步前進する。

「……ん……」

背中に冷たい感触。壁に到達してしまったか。そういえば、初めてテツに会った時もこんなことしていた。もっとも、状況はその時とは全く違うのだが。

拳銃をテツに向けながら睨む。テツは、平然と笑みを返しているだけ。

なぜか、敵意をかけられも感じられなかった。

「えっとさ、テツ……………」

銃口をぴたりとテツの胸に向けながら、話しかける。

「あのさ、戦うつもりないなら、とりあえず剣をおろしてくれないかな？　じゃないと、こっちとしては……」

「強硬な手段をとります、ってね。もうとってるか」

叶がテツの背後に忍び寄り、その後頭部に銃を突きつけた。

「とりあえず、あなたが何者か、から教えて……………ねえ、あなたもしかしてテツ？」

「おや？　その声と態度は、叶さんですか？　こんばんは。こんな所で奇遇ですね」

「…………え？」

アルミはテツと叶を見て、テツも叶も驚いているらしいことを確認して、

「えっと……………どういう関係だ？」

「えっと……………どういう関係なの？」

「えっと……………どういう関係ですか？」

三人が三人、同じ質問をした。

来るべき敵に備えて、誰もしゃべろうとしない。会議室は静寂に包まれていた。ほんの数分間。だが、永遠にも感じられた。

「……………」

大介はその静寂の中、なんとか敵の気配を感じ取ろうと必死に耳をすましていた。

「……………来た」

その静かな呟きには場は一瞬で緊張。大介はそんな一同を一瞥し、

「そこだ！ 北側の扉！」

「はい！」

ヤクザが一齐にその方向に得物を向けた。一瞬の静寂の後、複数の足音が聞こえた。

「来たぞ！ 敵だ！」

その大介の声に呼応するように、扉が勢いよく開いた。その近くにいたヤクザの何人かは敵を倒すべく攻撃を仕掛けようとしたが、こちらに向けられたサブマシンガンの銃口に、おる者はおじけづいて逃げ、またある者は火を拭いた銃弾に倒れた。彼らの生死はわからない。拳銃弾程度で死ぬようなガタイではないはずだが。いずれにせよ、無力化した兵には興味はないようで、銃撃はこちらに向けられている。この部屋にいた者は皆、侵入者のいるのとは反対側の扉へと退避、拳銃で応戦している。たぶん正しい判断。ただひとり、大介だけは部屋の中にいた。

ダイヤの置かれている台座の陰で身を丸めた。ギリギリで体が収まるくらいの大きさ。しかも、この台はもちろん防弾性能など持っていない。壊れるのも時間の問題だろう。そうなれば、銃弾の雨の

中でこの身を晒すことになる。

「大介さん！」

ヤクザがこちらに向かって叫ぶ。さて、どうしようか。敵の銃は三丁。その内、今撃たれているのはふたつで、もうひとつは周囲からの攻撃にすばやく対応するために使われていない。連携はうまくいようで、両方のサブマシンガンが弾切れすることがないように撃ってくる。

「大丈夫だ！　いいか、俺の言う通りに動け！　まず二手に分かれて、ひとつはここで銃撃戦を続けろ！　もう一方はさらにいくつかに分かれて複数の場所から奴らを攻撃！　一度上の階に昇って降りて、奴らの背中を突け！　今からちょうど一分後に反撃開始だ！　行けっ！」

その指示に、ヤクザ達は一斉に動き出した。

「……さて……」

大介もまた、懷からメリケンサックを取り出して拳に装着した。同時に、言いようのない高揚感が体を駆け抜ける。

認めよう。正義の味方を名乗っていても、戦闘は好きだ。命がけの銃撃戦や格闘なんて、最高じゃないか。

こんな仕事を押し付けた父親は憎いばかりだが、この状況を与えてくれたことだけは感謝しなければな……………

アルミと叶が女子トイレに入ってからどのくらいの時間が経っただろうか？　さすがにトイレに監視カメラはないため、中の様子はわからない。

そうこうしている内に、ダイヤのある部屋で銃撃戦が始まった。ヤクザはそれに参戦し、もはや巡回などあってないようなものだ。ある意味動き放題。むしろ、ぐずぐずしていると、この武装集団がダイヤを手に入れる可能性がある。

「どうする？ アルミ達に、どう連絡する？」

「いまなら自由に動ける、急げ、だろうな。……それより業火、時間だ」

「え？ ……あ、本当や。いつの間に」

カエルと天使、ふたつのキーホルダーを手で弄びながら呟いた。

いろいろありすぎて、時間の経過を短く感じていたようだ。

「とにかく、アルミに連絡だ。それから、行こう」

「ああ」

叶から頼まれた仕事は、もうひとつあった。それをこれから実行するのだ。

第84話 銃を持った三人組

「友達？ パソコン教室で知り合った、だって？」

「そう。あたしが、アルバイトの講師で」

そして叶はテツを指さし、

「テツが生徒」

「はい。何年か前ですね。叶さんが大学生だった時のことです。歳が近かったので、すぐに仲良くなれました。互いの素性を知ってからも、関係は良好。――それ以来、お互いに活動を手伝ったりしながら、友情を続けています」

「活動って、怪盗ルピナス的な？」

「はい」

アルミの質問に即答した。

「じゃ、テツの活動って？」

「えっと、それは……」

「あ、連絡だ」

テツの言葉を、叶が遮った。業火達からか。

「はいはいっと。ねえテツ、お願いがあるんだけど――手早く通話を切り、叶はテツに向かった。

「はい？ 为什么呢？」

「急いでるから簡潔に。あのね、今、私は怪盗ルピナスとしての仕事の最中で、この子はそのパートナー。テツ、あなたとこの子の関係はよく知らないけど、今は手出ししないでくれる？ というか、むしろ手伝って」

「……叶さん、ひとつだけ、訊いてもいいですか？」

「なに？」

「この、アルミ様は、信頼するに値する方だと思いますか？」

「ええ。もちろん」

「なら、いいです。協力します。よろしくおねがいします、アルミ

様。……あと、私にはもう、あなたを攻撃する意思はありませんで、安心して下さいね」

笑顔でそんなこと言われても、急に協力してくれるなんて信じられない。

「なあ叶、テツの言ってること、本当なの？」

「本当か嘘か、あなたならわかるでしょう？」

「む……」

テツの顔を凝視する。

「あの……アルミ様、いくら好きだからと言っても……あんまり見られては照れますよう……」

「うるさい」

ふざけるのはまあいいとして、テツが嘘をついている様子はない。信じがたいが真実だ。

「だったら、信用するしかないじゃないか……」

「はい、ありがとうございます」

「……………」

「じゃ、行くわよ。敵の混乱に乗じて、目標を強奪する！」

その言葉で、アルミはテツを見つめるのをやめた。そうだった。やらないといけないことがある。

「三……二……一……行くぞ！」

大介は台の陰から飛び出し、銃弾に当たることを恐れずに敵へと突っ込む。敵の側面や背後からの味方の援護もあって、こちらに砲火が集中するということもなかった。

「おらあ！」

「ぐっ！」

敵の、リーダー格と思しき者にパンチを繰り出す。四十代の前半

ぐらいの男だ。その男は咄嗟にサブマシンガンでそれを防御、直接は当たらなかった。が、相当の衝撃を受けたはずだ。よろけて体勢を崩した敵に、さらに拳を食らわせようとして、

「死ね！」

敵は倒れながらこちらに銃口を向けてきた。咄嗟にそれを払いのける。その隙に敵は完全に床に倒れ、そして転がって距離をとり、再び銃口を……

「ちいっ！」

一気に距離を詰め、銃を手でつかみ射線を逸らした。そして相手に頭突きを当てる……失敗。間一髪で後ろに跳びのかれた。その際敵の銃の持ち方が緩くなり、チャンスとばかりに叩くと、持ち主の手を離れて乾いた音をたてながらふたりの手の届かない場所まで飛んでいった。続けてパンチ……さばかれた。さらに、敵が足払いをかけてきたため、今度はこっちが飛び退くことになった。そのまま互いに睨み合う。

「なかなかやるな！ 俺は兜会会長のひとり息子、兜崎大介！ 貴様は何者だ！？ 名を名乗れ！」

「断る！ ヤクザごときに名乗る義理など無い！」

「言ってくれ！」

両者が同時に動いた。相手を打ち負かしてやる。互いがそのことだけを心に抱いていた。

業火と氷河は忍び足で廊下を歩く。目指すのは、この階に上がってくる階段のある場所。できれば急ぎたいが、「敵」に足音を聞かれるのは避けなければならない。

叶に命じられたもう一つの仕事とは、「警備員の排除」。これは自分達の安全に関わることだから、手を抜くわけにはいかない。

叶から、警備員の巡回ルートは聞いている。作戦としては、この階段を上ってきたところを待ち伏せ、力づくで無力化するというもの。アルミと違い技量的な戦闘能力に長けていないふたりにとって、力づく以外の選択肢はなかった。

目的位置にたどり着いたのは、理論上警備員がここを通る約二分前。もし巡回のペースが少し早かったら、失敗していた。少し安堵しつつ氷河と頷き合う。階段を上がる人間には死角となる場所に陣取り、そのまま敵の到着を待つ。一分経過。人の気配を感じない。が、時間が経つごとに緊張が高まっていく。氷河も同じ気持ちなんだろうか？

あと三十秒。まだ気配なし。あと十秒。足音すらも聞こえない。五秒。四、三、二、一……………

「？」

まだ人の気配は微塵も感じられない。なにかあったのだろうか？氷河と顔を見合わせ、何か言おうとしたその瞬間、足音が聞こえた。

驚きで飛び上がったのは一瞬。すぐに戦闘態勢に入る。が、何かおかしいことに気付いた。

会話が聞こえたのだ。

「――にしても、矢崎さんはどうして俺たちにこんなことを命令したんだろう？」

「――知るかよ。とにかく、邪魔者がいたらぶっ殺せばいいんだろ？ いままでみたいに、な」

「――あんまり派手にするなよ……」

足音は三人分。声も三人分。明らかに警備員ではない。そして業火にとって、この声は聞き覚えのあるものだった。

それは、記憶とともに恐怖を呼び起こした。

「なんなんだこれ……おい、業火？ どうした？」

「……逃げよう」

パニックと必死に戦い、それだけを告げた。

「うん？ 何言ってるんだ？ 警備員は……」

「たぶん、もう死んでる」

「はあ？」

「早く！」

そう言っで、氷河を引っ張りさきほどまでいた部屋に戻る。

あの声を忘れるものか。奴らは、あの動物園で、罪のない人間を
出会いがしらに射殺した。今も、あの時と同じく接触した者を片っ
端から殺すつもりなのだろう。警備員が来ないのは、つまりはそう
いうことなのだ。

とにかく、敵は銃を持っていて数も向こうが多い。まともに戦っ
ても勝てない。ここは、なんとかやり過ごすのが最善の策だ………
…。

第85話 撃退

「業火！ おい業火どうしたんだ！？」

起動しているパソコンの並ぶ部屋に連れ戻された氷河が、様子のおかしい業火に何事かと尋ねてきた。

「あの三人を、俺は知ってる」

「え？ 知り合いか？」

「違う。実は……………」

氷河に、あの日動物園であったことを話した。

「それで…………その殺人者が、あいつらだって？」

「そうや。たぶん、今も銃を持ってるから、正面から戦うわけにはいかない。どうすれば……………」

「……………、そうだな。正面からじゃ無理なら、なんとか背後をとるか、気付かれないままやりすごすか。だが、警備員はどうするんだ？」

「もうここに来ている時間や。でも来ていないということは…………」

不意に足音が聞こえてきて、慌てて机の陰に隠れた。立ち位置の関係で、お互い離れた場所になってしまった。

「……………」

息をひそめて敵を待つ。足音がだんだん近づいてきた。パソコンの駆動音が思ったより大きいから、敵が近くに来ればすぐに気付かれる。たぶん、すでにそうなっているんだろう。

足音は複数。つまり、奴らか。

「おい、なんだこれ？ なんでパソコンがついてるんだ？ しかもこんなにたくさん」

「電源を切るの忘れたってわけではなさそうだな。だったら…………」

「矢崎のヤローの言ってることは正しかったってことか。ったく。いつもうるさい奴だったのに」

「こら。そんなこと言うな。我々の副司令官だぞ」

「はいはい。真面目で結構。で？ パソがついてるってことは誰か
いるってことだろ？ どこだ？」

「さあな。逃げたか、あるいはここに隠れているか。机の裏とか」
背筋が凍るような感覚に襲われた。見つければ即撃たれる。

「おい！ これ見ろよ！」

と、三人のうちのひとり、なんというか、一番軽薄そうな男がな
んか叫んだ。その声に他のふたりが従い、その男の場所に移動した。
「すごいな……」

「な？ ホテルの様子が完全にわかる。これはすごいぞ……」

「見る。矢崎さんが戦ってる。……互角だ。相手も相当強いぞ」

どうやら、ディスプレイに見入っているようだ。今のうちになん
とか状況を打破できないだろうか？

「ん？」

氷河が、こっちなになにか放り投げてきた。受け止め見てみると、
それは氷河の携帯電話。開くと、メールを打つ画面で、こう書いて
あった。

「拳銃を持っているのはひとりだけ。どこか遠くに、奴らの注意を
引かせてくれ

あと、このケータイは武器になる」

注意を引きつける、か。どうしようか。なにか使えるものはある
か？ そういえば、ポケットの中にストラップがふたつ入っていた。

これって泥棒だよなと自嘲しつつ、カエルと天使を見つめた。す
ると、体を支配していた緊張と恐怖が、一瞬で解けた。本当に、こ
のカエルさんは可愛い。本当に、どうかしていた。混乱で、正確な
判断ができなくなっていた。危うく犬死にするとこだった。

敵に気付かれないようにゆっくり腰を浮かし、天使のストラップ
を部屋の入り口近くに投げた。ストラップは壁にあたり、小さい、
だがこの状況では十分に目立つ音をたてて床に落ちた。

「誰だ！」

軽薄そうな男がそこに向けて銃弾を撃ちつけた。四、五発ほどか。

全弾撃ち尽くしたわけではないようだが。

「があっ！」

氷河の悲鳴が聞こえた。もちろん、銃の射線上に氷河はおらず、これは演技。だが、敵はそれに気付いていない。

「当たったか？　おい、ちょっと見てこい」

「ああ……」

別のひとりが、入口の方に歩いていく。全員の注目が一方に向かっている。

視界の片隅で、氷河が音を立てずに立ち上がるのが見えた。手になにか大きい物を持っている。氷河はそれを振りかぶり、拳銃を持った男に投げつけた。それは男の後頭部に鈍い音をたてて命中し、その手から拳銃を吹き飛ばした。投げたのは、事務用の椅子だった。「なんだ！？」

それ以外のふたりが振り向き氷河を見つけた。ひとりが氷河に襲いかかり、もうひとりは仲間の落した銃を拾おうとした。業火はそちらを狙い、机の後ろから飛び出た。

「はあっ！」

氷河の携帯電話を、角を少し出した状態で握り、その男の頭に振り下ろした。敵は思わぬ攻撃に容易く伏し、業火は銃を手にした。氷河を見る。あとひとりの男ともみあいになっていた。すかさずその方向に銃を向け、

「動くな撃つぞ！」

「なっ！？」

もうひとりの敵はその声に驚いて動きが一瞬止まり、その隙に氷河がその男の股間を蹴り上げる。男は悲鳴をあげて倒れ、動かなくなった。少しかわいそうな気もするが、まあしかたがない。

「気絶しているだけか？」

「そうだな。すぐに目を覚ます。……縛ったりすべきか」

「やな。でもどうする？　縄なんて持ってないで？」

「服を使う。こいつらの。脱がすの、手伝ってくれ」

「ああ……」

「おらあ！」

「がっ！」

大介の放った渾身の拳が、敵に当たった。ここに至るまで、お互い有効打はひとつも決めていない。

が、その均衡が今崩れた。敵はよろめき後ずさり、痛みに顔をしかめた。ここは、追撃を……

「矢崎さん！ すいません負傷しました！」

「くっ……」

敵のひとりがそう叫び、目の前の男は少し逡巡して、

「撤退する！ チームブラボー、チャーリーにもそう伝えてくれ！」

「はい！」

どうやら逃げるつもりらしい。ならば……

「追うな！ ここまま、ダイヤの防衛に専念しろ！ 繰り返す！」

逃げる敵を追うな！」

追撃をしようとしていた味方を引きとめた。

「目的を忘れるな！ 俺たちの目的はダイヤの警護だ！」

「はい！」

そして、大介の目の前を、敵の集団は逃げて行った。これでいい。これで、役目は果たせる。

「あのリーダー、結構やりますね」

テツが耳元で囁く。三人は今、ダイヤのある激戦地の少し離れた場所から様子を窺っていた。

「そうね。自分のすべきことをよくわかってる。どうする？ かな

りやつかいな敵みたいだけど？」

「そうだな……」

「おい！ お前何者だ！？」

どこかから大声が聞こえた。見つかったかと一瞬ひやりとしたが、どうやら違うようだ。

ならば、この声の意味することは？

「はい？ 僕ですか？ はじめまして。竜崎と言いますー今日は、そのダイヤを奪いにきました」

あの真ん丸なメガネはかけていない。だが、ひどく見覚えのある男が、ダイヤの置かれたダイヤの傍らにいた。

「こんなもんか………」

業火の目の前には、パンツ一丁の男が三人、自らの衣服に縛られた状態で気を失っていた。

「警備員は来ないし、これで任務完了、か？」

「そうやな。じゃあ、またモニターの仕事に……」

「ほう。本当にネズミがいるとはな」

突然、背後から声が聞こえた。奴らの仲間かと振り返る。

そこにいたのは、全身白づくめの男。頭に、口元だけ露出した仮面をかぶっている。

業火には、見覚えのある人物だった。だが、なぜ彼がここにいる？

第86話 強敵

「なんだお前は」

ヤクザのひとりが竜崎に詰め寄る。相手が子供だと思って油断している様子だ。

「……………」

一方の竜崎は無言でヤクザを見つめるだけ。そこにはなんの感情もない。

「おい！　なんか言ったらどうなんだガキ！」

「……………」

そして竜崎はじっとヤクザを見つめ、そして次の瞬間一瞬で距離を詰めて、

「邪魔！」

ヤクザの鼻に掌底を叩きつけた。ヤクザは鼻を押さえて倒れ、その仲間は一斉に色めきたつ。一方の竜崎はその様子に顔色一つ変えず、周りを見渡し、

「弱そうなのばかりだな……まあ、やりやすくなるからいいのだけど……」

「貴様！　やれ！」

「おい！　やめろ！」

ヤクザの中の誰かが竜崎を倒そうと色めきたち仲間をけしかけ、彼らのリーダーらしき人物がそれを制止しようとした、が、できなかった。ヤクザ達は一斉に竜崎に襲い掛かり、

「雑魚は、何人集まっても雑魚か……」

竜崎はその攻撃をひらりとかわし、回し蹴りを繰り出す。それで数人が地に伏し、竜崎はさらに拳を突き出してひとりの顔面にぶち当てた。

「この程度か。極道というものは！」

竜崎の攻撃は止まらず。結局、ものの一瞬でヤクザ十数人をのし

てしまった。

「あとはひとり……どうしました？　かかってこないんですか？」
「……………」

ヤクザのリーダーは一度竜崎を見つめ、

「悪いことは言わない。このまま帰れ。大怪我しないうちに、な」
「それ、本気で言ってるんですか？　……まあ、僕も無駄な戦いはしない主義ですけど」

「奇遇だな。俺もだ、だが……………」
リーダーがゆっくりと竜崎に歩み寄る。

「君のすぐ隣にあるのは、噂のダイヤモンド。さっき君は、そのダイヤを貰うって言ってたよな？」

「そうですね」

今、ふたりの距離は一メートルほど。互いに睨み合い、相手の出方を窺っている。

「私の仕事はそのダイヤを守ること。盗まれぬようにすることだ。君も、こんな場所に来て手ぶらで帰るつもりなどない。そうだろう？」

「ええ。その通り」

「なら、戦いは避けられない。君が何者かなんて知りはないが、そんなことぐらいはわかるよな？」

「はい……………」

刹那、リーダーが竜崎にとびかかった。竜崎は咄嗟にダイヤモンドの入っているケースをつかみ、一歩飛び退く。

「はっ！　両手が塞がってるぞ！」

リーダーがさらに攻撃を仕掛ける。その拳を、竜崎はケースで防いだ。

「ぐっ……………」

防弾ガラスのケースに思いっきりパンチしてしまったリーダーは、その痛みに顔をしかめた。その隙に竜崎は反撃を開始。

「ほら！」

ケースの角をリーダーの頭部に振り下ろす。直撃。

「があっ！」

リーダーはよろめき二、三步後退した。竜崎は追撃をしようとした、が

「食らえ！」

「！？」

リーダーがケースの置いてあった台を持ち上げ、振り回した。当然、並みの力でできることではなく、それをかわした竜崎に、さらに台を振り下ろした。今度はよけられる状況ではなく、

「くそ！」

その台をケースで受け止めた。竜崎は直撃は免れたが、衝撃はさまざま、手にしたケースが吹っ飛んだ。

「しまったっ！」

「ぬかったな若造！」

リーダーは飛んだケースに向かい走ってそれを回収。そして、

「さらばだっ！」

「なっ！」

そのまま竜崎と対峙せず、背を向け逃げた。

その方向は、アルミ達の隠れている場所の方だった。

「！」

その判断が正しいかどうかの考えは一切なし。アルミは、リーダーの進路上に立ちふさがった。ここでリーダーに逃げられては、ダイヤを奪えなくなるのはこちらも同じなのだ。

「っ！ 不良少年か！ どのいつもこいつも」

リーダーは怒りを隠す風もなく、アルミに対して拳を叩きつけた。

「逃がすか！」

ルツカはリーダーを追いかける。なぜか、妙に見覚えのある小学生の男の子が出てきたが、それがあの男の足止めとなっているならこっちにとっては好都合だ。

だが、物事はなかなかうまくいかないのが常らしい。

「竜崎さん。あなたの相手は私ですよ」

あの男の子と同時に出てきたお姉さんがルツカの前に立ちはだかった。

「えっと、テツさん、でしたっけ？ できれば、どいてほしいんですが」

「嫌です」

「……だったら、力づくで排除されることになりますよ？」

「どうぞ。でも、できますか？」

「ええ。僕、強いですから………」

そういうが早いか、ルツカはテツとの距離を詰め………

「死にますよ？」

テツが剣を抜き、横なぎにしようとするのを見て踏みとどまった。

「剣ですか。たしか、二刀流でしたね。丸腰相手に、ちょっと卑怯じゃないですか？」

「の割には、落ち着いてますね？」

「ですね。どうせ、勝つのは僕ですから………」

テツが二本目の剣を抜くのを見て、身構えた。一瞬の静寂の後、再び攻撃を仕掛けた。

業火と氷河の目の前にいるひとりの仮面の男。それは紛れもなく、あの動物園にいた、変態ふたりの片割れだった。

「マラカス仮面………」

業火の呟きを、男は聞き逃さなかった。

「ほう？ 俺を知ってるのか？」

「……ゲッコー仮面の相方、やろ？」

「ふん。なるほど。子供達に名が知れるというのは、いいことだ。

………だが、こういう状況はあまり良くない」

マラカス仮面は、その高い背丈からふたりを見降ろしながら言う。

「俺はそのゲッコー仮面から命令を受けていてな。この建物内で出会った人間全て排除しろ、と。警備員はすでに倒した。それ以外に誰かがいるとは思わなかったのだが……………悪いな。これが俺の仕事なんだ」

そう言うが早いか、仮面の男は話がわからず会話に参加できない氷河に襲い掛かった。刹那、ガンと鈍い音がして、氷河は体勢を崩し床に倒れた。

「！ 氷河！」

「他人の心配する暇があるかい？」
「！」

マラカス仮面から距離をとり、身構える。

「なんで、お前がここにいるんや？ あの変態仮面が、どうしてそんな命令をする？」

「お前に教えることではない」

そう言って武器を構えてきた。それは、長さ五十センチほどの棒の先に球体のついたもの。どうしても、一瞬マラカスに見えてしまうような代物だったが、しかし間違いなく、さきほど氷河を殴り倒したものだ。そんな呑気なものではない。

「これは錘という武器でな。立派な打撃武器だ……………殴られたら、ただじゃすまないぞ？」

「……………」

そんなことはわかっている。が、どうする？ 一対一。敵は、おそらく自分より強いだろう。

なんとかして勝たねば。しかし、その方法がわからない。

第87話　V S 竜崎

ヤクザのリーダーは走る勢いにのせて殴りかかってきた。よく見ると、そこにはメリケンサックが装着されていた。アルミはそれをよけ、拳銃をリーダーにつきつけた。発砲、外れ。リーダーも対抗してか、懷から拳銃を取り出しアルミにつきつけ、アルミは自分の銃でリーダーの銃を叩き射線をそらした。

「貴様！ ナイフでは飽き足らず銃にまで手を出したか不良少年！」
「!？」

なぜこの男は、アルミがナイフを持っていることを知ってるのだろうか？ それに、不良少年という呼び名。

「お前ゲッコー仮面かつ!？」

「だとしたら何だ!？」

「さあな!」

ふたりは銃と銃をぶつけ合い、互いの腕を交差させ敵の射線をさばいてそらせ、近接してはまた少し離れ発砲するが外れる。そんな戦闘がしばらく続いた。互いに一步も譲らず。らちが明かない。アルミはナイフを取り出して間合いを詰める。リーダー、いやゲッコー仮面の胸にその刃を突きたてようと、ナイフを逆手に振りかぶるが、防弾ガラスに阻まれた。頭上から拳が振り下ろされるのを感じた。距離をとる。

「伏せて!」

「!」

叶の声に反応して従う。刹那、背後から銃声が聞こえ、
「ぐっ……」

横ざまに跳んだゲッコー仮面がうめき声をあげ、足を押さえて床に倒れこんだ。銃弾がアルミの頭上を越え、敵に当たったのか。ゲッコー仮面もよけようと試みたが、全てかわすことはできなかった。少し卑怯だが、今がチャンスだ。敵にとどめを刺すべく、アルミ

は身を起こしゲッコー仮面に駆け寄り、ナイフを振り下ろそうとした。しかし、こちらに向かってなにか大きなものが飛んでくるのを感じた。よけようとしたが、寸前にそれがなにかがわかって、

「っ！ テツ！？」

よけず、自分より大きなテツの体をなんとか受け止めた。

「テツ！ どうしたんだっ！？」

「いたた……すいませんアルミ様。……竜崎さん強すぎです………」

「テツ大丈夫？」

叶も駆け寄ってきた。そして、三人は無言で一点を見つめた。

「……………」

竜崎が、一見して無害そうな笑顔をたたえ、こちらを見つめかえしていた。

「やあ、ひさしぶりアルミ君。あとは……初見ですね。はじめまして。お名前を窺ってもよいでしょうか？」

「そういうのって、そっちらから名乗るものじゃないの？」

「僕の場合は、そのおふたりに聞くのがいいと思います」

「でも、私あなたのこと、あんまり知らないです」

「ですね。僕も同じです」

竜崎はこちらに一步近づいた。アルミ達も、それに対峙し構える。

「テツ、こいつ、どれくらい強いのか？」

「え？ そうですね……………人間とは思えないです」
一瞬口ごもり、そう答える。

「そうですか。人間ではない……………ちょっと心外かな」

さらに一步。あいかわらず、無害な人間にしか見えない。が、竜崎がどれほど凶悪な人間かは知っている。戦闘能力については未知数だが、テツを投げ飛ばしたようだ。とんでもない怪力なのか、力の使い方を熟知しているのか。いずれにせよ油断ならない敵だ。

アルミは、拳銃の照準を竜崎に向けた。落ち着いて、狙いを定める。

「アルミ君。子供がそんなもの持ってたなら、怪我するよ？」

「……………」

返事はしない。一瞬だけ竜崎をみつめ、すぐに視線を照準に戻す。

「どうしたんだいアルミ君、顔が怖いよ？」

「うるさいな。それ以上動いたら撃つぞ」

「どうぞ。当たらないだろうけど」

「……………」

躊躇する理由とてない。竜崎が少し動いたその瞬間に発砲。竜崎の姿勢が一瞬崩れ、

「……ほらね！」

すぐに体勢を立て直しアルミに肉薄。崩れたのは演技か、それともよけるために姿勢を低くしただけか。

「！」

接近する竜崎を仕留めようとナイフを構えようとする、が、間に合わない。竜崎は掌をアルミの腹にぶつけた。直後に体が宙に浮かんだ。痛みに耐えながらなんとか受け身をとって着地。竜崎は、叶とテツふたり同時に相手をして、打ち倒していた。床に横たわる女性ふたりを一瞬みつめ、そしてテツの剣を手にしてふたりの首をはねようとした。それを阻止すべく、ナイフを投げつける。それはまっすぐ竜崎のところへ飛んだが、竜崎はそれを指先ではじき、ナイフはその足元に落ちた。

「……………」

テツの剣を握ったままこちらを見つめてきた。睨み合いが一種あり、竜崎は再びアルミのいる場所へと一步一步近づいた。

「好きだな。君みたいな、諦めの悪い人間は……………いじめたくなるからね」

「うるさい」

拳銃を突きつける。が、竜崎は平然と言い放った。

「スライドが下がりきってる。弾切れだ……………君もわかってるんだろ？ だから、銃ではなくナイフを投げてきた」

「くっ……」

銃をしまい、CQCの構えをとる。

「なにかなその構えは？ 武器を持った敵に、正面から戦って勝てる武術？」

正直に言えば、勝てる可能性はほとんどない。敵が並みの人間だったら、その状況でも勝てるだろう。が、竜崎は強い。隙がなく、むしろこっちが動けば一瞬にして殺されそうだ。

竜崎が、目の前まで来た。

「命乞い、するつもりある？」

「微塵も、ないな」

「そう。じゃあ、さようなら」

剣を振り上げ、アルミは死を覚悟した。しかし、その剣が振り下ろされることはなかった。

「……以外にしつこいですね」

「ぐうう………がああっ！」

満身創痍のゲッコ―仮面が竜崎の腕をつかみ、渾身の力でひねりあげようとした。竜崎はそれを振りほどいて距離をとる。アルミはというと、極度の緊張から解放され、その場でへなへたと座り込んだ。

「ヤクザさん。足撃たれてますよね？ なのに、よくがんばりますね。それも、こんな不良少年君を助けるためなんかに」

「ふん。それを言うなら、君も不良少年ではないのか？ ……それに、私は子供の命を守るためには、なんだってすると決めているからね」

「それは、なぜ？」

「それは………」

ヤクザのリーダーは、かすかに微笑んだ。その表情に、純白のマスクが重なって見えた気がした。

「私が、正義の味方だからだよ」

「……………そうですか」

ゲッコー仮面の、一見ふざけているように聞こえる言葉を、竜崎はあっさり受け入れた。

「正義の味方ですか。いい言葉ですね。…………でも、僕の崇拜するヒーローは別にいますから」

「ほう……………」

「……………そういえば、本来の目的を忘れていました」

ゲッコー仮面の手にあるダイヤのケースを見つめた。

「それを奪いに、ここに来たんでした」

「ほしいか？」

「はい」

「だが、そうはいかないんだよな！」

そしてゲッコー仮面は、再び走り出した。

今度はそれを阻止しようとする者はいないだろう。ルツカはヤクザのリーダーを追いかけた。足を撃たれているとは思えない早さだ。しかし、追いつくことは簡単だ。階段にさしかかる。リーダーに続いて、駆け下りた。そしてしばらく、男と追いかけて演じたが、リーダーが突然、大きな目の、窓に向かって拳銃を連射した。ひび割れ、砕け散るガラス。リーダーは躊躇なくそこに飛び込んだ。

「！　なんて真似を！？」

ルツカはそんなことをせず、直前で立ち止まる。ここは四階。落ちたら死にはしなくても大怪我は免れない。目の前で、リーダーは落ちてゆき、

「ふんっ！」

下の道路を走る車の上に落ちた。片手について受け身を取り、転がり落ちて着地。そのまま、ダイヤモンドと共に夜の街の闇に消えていった、

車は、通常上からの事故について想定して作られてはいないため、屋根は柔らかい。そのことを計算に入っていたのかはわからないが、並みの度胸でできることではない。

「やるね……………さて、どうするかな？」

とりあえず、我らが軍師様に相談しよう。ルツカは携帯電話を取り出した。

後ろに人の気配を感じた。おそらくアルミ君だ。しかし、特に注意することもないだろう。今からこちらに襲い掛かるほど頭の悪いはずがない。自分と敵の強さの差がわからないわけでもあるまい。

ややあって、ソーラが発信に応じた。

第8話 離脱

『もしもしルツカ？ どうでした？ 奪えましたか？』

「えっと……………逃げられた」

『え？』

「実は、こんなことがあってね……………」

と、さきほど起こったことを説明した。

「というわけ。どうしようか？ 追いかけた方がいい？」

『いえ……………いいです。撤退してください』

「ダイヤはいいの？」

『……………しかたないです。多分、すぐに下が騒がしくなります。そうならないうちに、早く』

「わかった。すぐに帰る」

通話を切り、振り返った。アルミという名の少年はまだそこにいた。

「ごめんねアルミ君。君ともう少し遊びたかったんだけど、相棒が帰って、つてうるさいからね」

「……………」

アルミは何も答えず、手にしたナイフを強く握りしめただけ。

「やれやれ……………」

ルツカの手には、まだひと振りの剣があった。それを、アルミに投げつける。剣はまっすぐ飛んで行って、

「っ！」

アルミはナイフでそれをはじく。剣は軌道をそらされてアルミの後方の床に刺さった。

戦う気力を失ったわけではない。ただ、敵の強さに攻めあぐねているだけ。愚かではない。しかし、戦いをやめようとは思わない。なぜ？ ふと浮かんだ疑問が、そのまま口に出てしまった。

「ねえ、どうして、君は戦うの？」

「知りたい？ 馬鹿馬鹿しい理由だけど」

「うん。できれば」

「……………世界平和のため」

「え？」

一瞬、理解ができなかった。突拍子もないこと。そうとしか思えなかった。

「ねえ、それどういう意味？」

「行けば？ 友達が待ってるんだろ？」

「ああ……………そうするよ……………じゃあね。君とは、また会える気がする」

「そうか？」

「たぶんね。僕の、君への興味が続いている限りはね」

それだけ言って、階段を降りていった。途中で振り返ると、アルミの姿はなくなっていた。

「……………」

業火は無言で、マラカス仮面に対して銃を構えた。

「ほう。銃か……………」

敵は少し身を引き、銃口をじっと見つめた。じっとしていても何も変わらない。業火は意を決して引き金を引いた。

「！」

引き終わる前には敵は反応していて、射線から外れた場所に体を動かしていた。

「よけた……………」

「そうだ。造作もないことだな」

「……………」

再び、銃口を向けたまま。静止する。一瞬の沈黙。それを破ったのは、携帯電話の電子音。

「？」

氷河の携帯電話は鳴っていない。つまり、

「……………」

マラカス仮面は銃口をまっすぐ睨みつけたまま、ズボンのポケットから携帯を取り出した。

「もしもし、大介さんですか——」

ホテルのある場所からいくらか離れた、人目に付かない裏路地。さすがに同業者やチンピラが堂々と歩いているような場所ではないが、それでも悪意に満ちている輩が通りすがらないとも限らない。撃たれた足の痛みを抑えて歩くのも、そろそろできなくなってきた。なにかの建物の外壁にもたれ、座る。周りに人影はない。ゲッコー仮面は携帯電話を取り出して、相棒に向けて発信した。ややあつて、応答がある。

『もしもし、大介さんですか？』

「ああ。状況の説明を」

『天使社のビル。敵と交戦中』

「今すぐ戦闘を放棄。そこから離脱してビルから出られるか？」

『可能だが、どうした？』

「敵の襲撃が多すぎた。ホテルからダイヤを持って逃げた。今ひとりで身を隠している。今すぐ来てくれ」

『わかった……敵はどうする？』

「敵、どんな奴だ？」

『……たぶん小学生の、少年』

「いうことは、あの不良少年の身内か。」

「相手をせずに放っておけ」

『了解。そちらの場所は？』

「ホテルの北の——」

現在地を告げ、通話を切った。

この夜だけで、どれだけの敵と遭遇した？ 何度か見かけたことのある不良少年にやたらと強い中学生。そして、サブマシンガンを連射する武装集団。奴らのリーダーは、名を矢崎と呼ばれていたか……。

「悪いな。用ができた。退散させてもらう」

携帯電話をたたみながら言った。

「じゃあな。あんまり、悪いことはするんじゃないぞ」

そして、間髪入れずこちらに背を向け、すぐに部屋を出ていった。背中に銃弾を撃ち込む暇さえない。追いかける気にもなれず、敵が消え去ると、業火は氷河のもとへ駆け寄り、その安否を確かめた。

「叶、なあ叶、起きろ」

小学生の少年の声が聞こえる。同時に体を揺さぶられる。そういえば、あの竜崎という少年に突き飛ばされてから意識が無い……。

「！」

身を起こし目の前に座っている人間に拳銃を突きつけた。が、誰かを確認して下ろす。

「アルミ、状況は？」

「竜崎もヤクザのリーダーもここから逃げた。ダイヤは、リーダーが持ってた」

「そう。だったら、あたし達も逃げた方がいいわね。立てる？」

「？ 立てるけど、なんでそんなこと訊く？」

アルミは少しいぶかしげに言って、立ち上がろうとした。が、バ

ランスを崩して尻もちをついてしまった。

「足が震えてる。どうかしたの？」

「え……あ、あはは、ちよつと、あの竜崎に殺されかけて、本気で死ぬって思ってた……ちよつと、恐かった………むぐ」

「ええ、恐かったでしょうアルミ様。でももう大丈夫です。私が守りますので、それはもう、着替えている時もお風呂の時も、いつでもそばにいてあげますから」

いつに間にやら後ろに回っていたテツがアルミに抱きついた。

「うわああ！ やめろ！」

アルミはあわててテツの腕を振り払って逃げた。うん。元気そう
だ。

「じゃあふたりとも、聴いて。ダイヤの奪取は失敗しました。では気持ちを切り替えて、ここから脱出することに頭を切り替えます」

あいかわらず漫才を繰り広げているアルミとテツは、その言葉に反応してこちらに向き直った。

「脱出ですか。急いだ方がいいですね」

「だな。奴が逃げて、援軍を呼んでくるかもしれないし」

「そういうこと。だから、下に逃げるのは避けた方がいい」

「……………」

アルミとテツは同時に首をかしげた。叶は、右手の人差し指を天に向けて、

「なので、上に逃げます」

そう宣言した。ふたりはさらに不思議そうな顔をした。

「なに？ チャーリーと連絡がつかない？」

「ええ。なんども呼びかけているのですが……」

「……………」

サブマシンガンを持った武装集団は、ホテルの近くで別動部隊と

の合流を待っていたのだが、チームチャーリーの帰還があまりにも遅いのだ。なにかトラブルがあったのかもしれない。

彼らは、ホテルの隣のビルに潜入させたチームだ。このビルからはホテルが一望できる。ヤクザとのつながりが噂される警備員が、ビルに狙撃手を配置している可能性を除外できなかった。だから、拳銃を持たせて中にいる人間全員を排除しろと命令した。

「なにかトラブルに巻き込まれたのでしょうか？」

なかまのひとりが、作戦のリーダーである矢崎に尋ねてきた。トラブルか。そうとは思えない。

「よし、トラブルかどうかはわからないが、なんにしても助けに行かないとな……チームチャーリーを救出する！ 総員、私の指示に従え！」

「はい！」

矢崎はそのビルを見上げた。エンジェル社とか、そんな名前だったか。その中に、まだ敵がいるかもしれないのだ。

第89話 矢崎

「上から脱出して、どうするつもりなんだ？　ヘリでも用意してあるとか？」

「そんなわけではないでしょう」

三人はホテルの階段を上っていた。エレベーターを動かすわけにもいかず、最上階まで昇るのは一苦労だろう。

「あなたのお友達ふたりがいるビル。あそこに移動するの」

「どうやって？」

「あんまり方法はないでしょ？　……ちよっと、綱渡りをしてもらう」

「え？」

「はいはい。今は歩く。話はそれから」

幸い、氷河はすぐに意識を取り戻した。安堵のため息をつく業火だったが、まだ休むわけにはいかない。叶から連絡があった。今すぐ屋上に行くように、と。

「どういうことやろ？」

「さあな。とりあえず従うしかないだろ」

「やな……ダイヤは、盗めたんやろか？」

「わからん……まあ、あいつのことだから、うまくやってそうだが………っ！」

氷河がバランスを崩し膝をついた。

「おい、大丈夫か？」

「ああ……ちよっと、クラクラするが……大丈夫だ」

頭を打ったのだ。もしかしたらなにかあるかもしれない。「動かない方がいいかな？」

「そうも言ってられないだろ。行くぞ」
「ああ……」

ホテルの屋上は、隣のビルと比べて三階分高いぐらいだった。建物自体は十メートルほど離れているが、この高低差ならなんとかなるだろう。

夜風に吹かれながら、叶は手すりに乗り出しビルを注視する。ふたつの人影が現れたのを見て、合図を送る。懐中電灯の光を彼らに向けてチカチカ……

「ねえ、あのふたり、どっちかはモールス信号理解できたりする？」
「無理、じゃないかな」

「そう。だったら、いきなりいくしかないか」

「なにするんだ？」

「まあまあ。ちょっと、じっとしててね……」

じりじりとアルミに詰め寄る。相手の小学生はというと、不穏な空気を感じて後ずさる。

「なんで逃げるのよ？」

「だって、まずなにするか言ってよ」

「えーっと、ロープで縛って、緊縛プレイ？　ね、してくれる？」

「断る！　てか、この状況でなんでそんなことしなきゃ………テツ？」

テツが満面の笑みでアルミを後ろから羽交い締めにしていた。うん。よくわかっている。

「やってくださいよ。ね？」

「いやだ！」

そんなことを言われてもやるものはやる。ロープを取り出して小学生の男の子を縛る作業に入った。

こちらに向けて、叶がなにか大声を張り上げてる。

「じゃあ投げるから！　ちゃんと受け止めてよねー！」

どういう意味だろう？　様子を見ていると、向こうに人影がふたつ見えた。ひとつは叶ので、もうひとつは当然アルミ………ではなさそうだ。背の高さが明らかに違う。ならば誰だろうか？

そしてふたりは並んで、なにかを放り投げた。それは徐々にこちらに近づいて行って、同時にその正体が明らかになって……

「なっ！　アルミ！？」

「わあああああ！」

「おい何があったうわああああ！」

飛んできたアルミをキャッチー——もちろん受け止めきれなかった。アルミが業火を押し倒すようにして、ふたりはおりかさなっ倒れた。

「いてて……業火大丈夫か？」

「それはこっちのセリフや……どうしたんや？」

よくみると、アルミの胴にはロープが何重にも巻かれていた。

「けっこう簡単にほどけるんだけどな。これで、叶とテツをこっちにもってくる」

「テツ？」

「細かい説明は後。手伝ってくれ」

アルミは自分に巻かれていたロープをほどき、それを手すりに結び付けた。

「いいぞー！　来い！」

「了解！」

向こうで影がふたつ、屋上から飛び降りた。いや、ふたりともロープで繋がっているため、この下にぶら下がる状態になった。

「引っ張ってくれ」

「ああ」

三人で大人ふたりを引っ張り上げるのは簡単ではなかった。向こうからも昇っているためなんとかあったのだが。

「それでアルミ、その人は」

作戦開始時にはいなかった女性を見める業火。えっとそれはと説明しようとするアルミを遮ったのは、その女性だった。

「はじめまして。テツっていいいます。アルミ様の婚約者ですっ!」

「嘘だ!」

「はいはい。夫婦漫才はそこまで。はやいところ逃げるわよ」

叶の一言でふたりとも黙った。この三人、かなり仲が良さそうで少し嫉妬した。

矢崎達は数グループに分かれてビル内を搜索していた。別のグループから警備員が血を流して倒れているという報告が何件あったが、それ以外は人の姿は見当たらない。

消えた三人からの連絡はまだない。どこにいったんだ……

ビル内の構造を実際に知っている業火が先頭を走って出口まで誘導する。業火以外は戦闘によるダメージを負っているために、彼が適任と判断された。

残されている仕事はここから脱出することだけ。おそらく人はいないはずだから難しいことではないはずだ。

廊下を進み角を曲がる。後ろに人の気配がしない。怪我人を連れているのに早く進みすぎたか。少し待とうかと思いつつもそのまま直進しようとして、人影をみつけた。

「!」

「誰だ!？」

こちらと相手、両方が同時に銃を構えた。こっちは拳銃だが向こうはサブマシンガンだ。

大人が複数。先頭にいるのは四十代の男だ。それが、先に口を開いた。

「……………若者が三人」

「え？」

「若者が三人。このビルの中にいるはずだ。知らないか？」

心当たりはある。が、それを言っていないものか。

「いや……………知らない」

「そうか……………お互い、深く関わらない方が良さそうだな」

「……………ああ」

「……………」

「……………」

「矢崎さん！」

一瞬の無言の時間を、男の背後にいた人物が破った。

「チャーリを発見、保護したようです」

「状態は？ ……いや、今はここから離脱しよう」

「はい。彼はどうします？」

「……………放っておけ……………行くぞ」

そして男は仲間を引き連れ、こちらに背を向けようとして、

「業火、どうした？」

横の方から聞こえてきたアルミの声に反応してピクリと動きを止めた。

アルミから見れば、曲がり角にいて動かない業火は見えるが、その視線の先にいる男達は見えない。たぶんそれは、男達にしても同じだろう。

「どうしました、矢崎さん？」

「……………いや、なんでもない……………行くぞ」

矢崎と呼ばれた男は、少し逡巡するような仕草を見せ、しかしそのまま行ってしまった。

「業火……あいつらは？」

アルミが追いついてきた。そのあとぞろぞろと他のメンバーが続く。さて、どう説明したものか。

第90話 共闘

翌日、アルミ達は叶から呼び出され、学校の近くの公園にやってきた。空はすでに赤らんでいる。

叶はまだ来ていない。

「なあアルミ。怪盗ルピナスって、結局どんな奴なんだ？」

頭に包帯を巻いた氷河が尋ねてきた。検査の結果、出血はあったが幸いにも問題はみつからなかった。

「え？ そうだな……かっこつけてるけど、なんとなく中二っぽくて、空回りしてるっぽくて」

「誰が中二病よ」

「いてっ」

いつのまにか来ていた怪盗が、アルミの背後から頭を手の甲でたたいた。

「お待たせ……昨日は残念だったね……頭、大丈夫だった？」

氷河が無言でうなづいた。もろん、そんなことを話すためにここに来たのではないだろう。

「叶。別に世間話するためにここに呼んだわけじゃないんだろ？」

「どうしたんだ？」

「んー、もう一度は会っておくべきだって思ったのは本当。あのまま、はいさようならー、ってわけにもいかないでしょう？ ま、理由はもうひとつあるんだけどーねえ、昨日みたいなこと、これからも続けるつもり？ 正義の味方のまねごとを続けるの？」

「……まあ、そうだろうな」

「そう……うん。そう言うと思ってた。……でもね、そんなことしてたら、何度も危険な目に遭う。死ぬかもしれない」

「だから、やめろって？」

「ううん。そうじゃなくて……、あたしも、あなた達の仲間に加えてほしいの」

「……え？」

「正確にはあたしだけじゃなくて………テツ、出てきなさい。そこにいるのはわかってるの」

公園を囲む生垣の方を向いて、叶は言った。はたして言った通り。その向こう側から声が聞こえてきた。

「あー、やっぱりバレてましたか。さすがです」

いつもとは雰囲気の違い、スーツ姿のテツが姿を見せた。そしてその後ろからもうひとり、男が現れた。真面目そうな格好のテツとは正反対。よれよれのワイシャツに緩んだネクタイ。髪型はドレツドヘアのグラサンをかけた若者。見るからにまともそうな人間ではない。しかし、浅葱市の人間にとっては、彼はあまりにも有名だった。

「市長……さん？」

アルミの呟きに彼はうなずき、アルミの前まで歩いた。後ろにテツが続く。

「やあ、浅倉慎也くん………それとも、アルミくん、と呼んだほうがいいかな？」

「ご自由にどうぞ。その様子じゃ、俺のことは知っているようですね。はじめましては必要ですか？」

「おやおや、つれない態度だね」

「それは失礼。で、市長さん。テツとはどういう関係ですか？　そもそも、テツってなんなんですか？」

「ストレートに訊いてくるね………」

「ええ、まあ。今までなんとか殺されかけてまして」

「ああ……すまない。わかった。説明しよう。テツの、いや、我々のことを………」

国内随一の貿易港を抱える浅葱市。そこから生まれる利益は市の経済を大いに潤している。しかしそれも良いことばかりではない。日々やりとりされる、莫大な量の合法的な取引に隠れるように、非

合法な商品が世界中からこの国に入ってゆく。入るのは物だけではなかった。日本中からそんな非合法な物品を求めてよからぬ者どもが集まってくる。彼らの際限ない欲望を満たすために違法物品の密輸量が増える。その繰り返し。

当然、警察もそういうものを検挙しようとはしている。しかし敵も馬鹿ではない。悪事というのは見えないようにするもの。警察によって明らかにされるものは僅かであった。この港に渦巻く悪意と欲望の底は、闇に隠れて見ることができない。

「わが市の警察は有能だからね。検挙数は多いし、犯罪件数の多さに便乗して馬鹿なことするような奴はことごとくお縄になってるさ。だが、それでも捕まらないのっているんだよねー。それで、俺は考えた。そういう奴らを、人知れず消し去る存在があってもいいんじゃないかって」

「……それが、テツ？」

「そういうこと。なんか、隠れるのが巧妙な犯罪者だったり、公には捜査しにくい闇の秘密結社のやつ？　そういうのを独自に調査して、必要であれば排除する。テツには、そういう仕事をやってもらっている。あ、公には、俺の私的な秘書って肩書きになってるんだけどね」

「排除。つまり、問答無用で殺す、と？」

「そういうこと」

「俺も、ターゲットのひとりなわけだな」

「テツの言うことを信じればね………：せつかくだから、確認しようか。アルミくん。先月の、高校生五人がナイフで殺される事件。君が犯人なんだよね？」

「はい」

「その翌日に起こった、小さな子供が死んだ事件も、君がやった」

「………ええ。よくご存じで」

「わかった。それで、ここからが本題なんだけどね。そういうことをした理由を、教えてくれないかな？」

「訊くまでもないでしょう？ あえて言うなら、市長さんやテツと同じ、です」

「そっか……つまり、俺達と目的は一緒なわけだ」

「……………」

「言いたいことは、わかるね？」

「……テツと叶が、互いの仕事を手伝い合ってるらしいですね。それと同じことをしろと？」

「如月さんののは、副業だけだね。彼女、普段は普通のOLだから。でも、まあそういうことだ。少し違うけど」

「というと？」

「いっそのこと、みんなでやっちゃわない？」

市長は朗らかに言った。そろそろ薄暗くなってきた空の中、その笑顔が無邪気に見えるほどに輝いて見えた。

「どういう意味でしょうか？」

「君達三人と、如月さんと、テツ。それぞれ目的は同じ。なら、一緒に活動しようよ！」

「……………」

ふざけた言い方だが、どうやら真剣なようだ。が、はいそうですねと安請け合いできるようなことではない。

「それってつまり、俺達を公的機関の指揮下に置くってことですよね？」

「……………」

「その真意は、そう……俺達の監視ですか？ 俺みたいなのが野放しになってるには困るって」

「なるほどね。もちろん、それもある。でも、どうだろう。今まで君達のやってきたことが、これからは市長の俺の名のもとにできるようになるんだよ」

「やりたくもない仕事を押しつけられたりもする」

とはいえ、決して悪い話ではない。市長やテツの様子を見る限り、彼らの言った言葉以上の深い意味はなさそうだ。振り返って怪盗の

方を見た。

「叶はどう思う?」

「どうって……まあ、あたしのやることは変わんないとおもうから、どっちでもいい。義賊の真似ごとするのにも、人手が欲しいときがあるってのが本音だけど」

続いて業火を見る。アルミの親友は、好きにしろとばかりに首を振った。

かすかに唇を噛んでいた気がした。たぶん、気のせいではない。

「……………なあ、市長」

「なんだい?」

「市長は、この市をいい場所にするために、努力を惜しまない。見ず知らずの人間のために、必要なら命を懸けたりできる? 社会の底辺に生きるような人間のために、身を切ることができる?」

「そうだね。そのために、市長になったのだから」

「そうですか……だったら、あなたの提案を受けます。でも、さっきの言葉、忘れないでくださいね」

「ああ……わかった」

市長は手を伸ばしてきて、アルミはそれを握り返した。

事態はいつの間にか、多くの人間を巻き込んだ大ごとになっていく。まあいい。こうやって、しばらくは流されるままにしよう。

第90話 共闘（後書き）

こんにちは。ドラゴンナイトです。怪盗編、完結です。

次回から新章に入りますが、くわしいことを近況報告に書いておいたので、よろしければそちらを参照してください。

第91話 冬木家

飼っているカエルのエサが切れた。浅葱駅近くの大型ペットショップに、業火が足を運んだのはそんな理由。

単に犬や猫のエサであればわざわざこんな所まで出向く必要はない。しかしカエルのエサを置いてある店はそうそうない。そもそもカエルなんて好きこのんで飼う人間なんてあまりいない。いたとしても、その多くは面白半分に拾ったカエルを、お気楽な気持ちで飼ってすぐに死なせてしまうような小学生である。無論、そういう輩はカエルのエサなどわざわざ買ったりはしない。だからそもそも需要の薄い商品であり、買うならばこういう専門店に行くしかないのだった。

ともあれ、業火はカエルのエサを買うために店内に足を踏み入れた。その直後に異変に気付いた。

と、いつてもはつきりとしたものではない。もっとわかりやすい、例えば覆面をかぶった強盗が銃を乱射しながら俺は暴力団員だ金を出せとかわめいていたり、あるいは巨大なクロコダイルが逃げ出して店内を徘徊しているとかの類の異変なら、業火は店に入る前に異変を察知してその場を離れるだろう。もし暴力団員ではなく武装集団白蛇会であって、クロコダイルではなくキングコブラであったならば、業火はその場にしゃがみこんで頭を抱えてガタガタと震えただろう。

業火は蛇が何よりも苦手だ。

ところが業火はそのどちらの行動もとらなかった。普通に店内に入った。中に入るまでは気付かなかった。

異変は目に見えたものではない。なんとなく雰囲気緊張している、気がする。その程度だった。

しかしレジの近くで店員と客がなにやらある一方をちらちらと見ながらひそひそ話をしている姿をみると、やはり異変は存在するのだろう。明らかに世間話とは違う。しかも同じようなことをしているグループがそこかしこにあった。ちら見する方向は一点に収束していた。業火もそちらに目を向ける。

そこは、商品である犬のケージが積まれている場所だった。中の犬が客に愛想をふりまいている。

残念ながらこれが原因ではないだろう。異変の根源は、おそらく今ケージ（複数）の前で犬を見つめている客だろう。

少し大柄な高校生だ。制服はたしか、浅葱市立北第七高校。この近隣にある、不良の巣窟のような高校だ。犬を見つめているのも、確かに不良に見える。こちらに背を向けているため顔はわからないが、体全体から禍々しいオーラが出ている。きつと今まで何人もの罪無き人々に口にするのも恐ろしい残酷な事をしてきたに違いない。今も目の前のチワワにどんな仕打ちをすれば血飛沫をあげながら死んでいくか、笑いながら考えているのだろう。なんと非常な……………

と、店内の多くの人はそう考えているのだろう。残念ながら業火はそうではなかった。なぜなら件の高校生をよく知っていたから。業火はその高校生のところまでつかつかと歩いていった。

それとほぼ同時刻、駅の中にある巨大書店にて、アルミは科学雑誌を立ち読みしていた。掲載されている世界中の科学者の論文は興味深く、目を通すには値するものではある。しかし、買うかどうかは微妙だ。

ページをめくりつつ目についたものを読んでいく海外の大学教授による論文が目にとまった。新種の遺伝性の病が発見されたこのこ

と。

遺伝病。以前、叶とのメールに出てきた言葉。その言葉には、おそらく他意はないのだろうが……………

「……………」

アルミは黙って雑誌を棚に戻した。他になにか買いたいものはなかったかと辺りを見渡し、そしてひとりの見知った顔をみつけた。その人間は料理関係の雑誌が置いてある棚の前にいた。そっちの方向につかつかと歩み寄り、後ろから声をかけた。

「こんにちは、雪野さん」

「ひゃい！」

相手は変な悲鳴をあげ、もっていた本を落としてしまった。そんなに驚かなくてもよさそうなものを。

「ああ、すいません……」

「いえ。こちらこそ……。こんにちは。お久しぶりです、アルミ様」
「……………」

様付けして呼んでくる人間にもうひとり心当たりがあつて、一瞬暗くなった。しかし、目の前にいるのは双剣で斬りかかってくるような人物ではない。

アルミの姉と同年の少女。一目みて多くの人がドキッとするとするような美人。特に目を惹かれるのは、彼女の瞳だろう。

透き通るような青い瞳。美しい碧眼。この色はどうやら、突然変異によるものらしい。

彼女の名前は冬樹雪野。冬樹氷河の妹であり、アルミ達とは以前に一度会っている。

どう見ても不良にしか見えない粗暴な風体の氷河の妹がこんな美人なのだ。遺伝というのはわからない。実に理解できない代物だ。
「……………」

再び暗い気持ちになりかけたが、頭を振りそれを追い払う。そし

て雪野の持っていた本に視線を向けた。

やはり、料理の本だった。「サバイバル料理100選〈山岳編〉」
というタイトルが書かれている。

うん？　なんか変だ。

「えっと、雪野さんって、料理するんですか？」

「はい？　……あ、いいえ。ごはんは、いつもお兄様が作って
いますので。ですが、最近疲れているように見えるんです」

「ああ……そうですね」

その原因は明らかにアルミ達だろう。氷河が自分で始めたことと
はいえ、雪野にはなんとなく申し訳ない気持ちになる。

「それで、家事とかも全部任せてしまうのも悪いと思ひまして。な
ので、できることからなにかしたいって。そう考えて……」

「それで、手始めに料理ですか」

「ええ。やっぱり、変でしようか？　いきなり料理ではなく、もつ
と別のことから始めるべきでしょうか？」

「いえ、そんなことはないでしょうけど……でも、やっぱりそ
の本は少し違う……かな？」

料理の入門がサバイバル料理というのはさすがに変だ。

「そうですね……アルミ様は、料理とかするんですか？」

「え……」

一応、できる。しかし滅多にしない。料理に限らず、日ごろ
の家事という家事はほとんど全て姉に押し付けている。アルミの仕
事はといえば、ルカの世話が半々でやっているぐらいか。

急に氷河が立派に見えてきた。なんとなく劣等感。

「えっと、はい。できます」
する。とは言わなかった。

「あ、そうだ。雪野さん」

そんな後ろめたさを隠すように、アルミはひとつ提案した。

「今度、うちに来ませんか？　料理、教えてあげます」

「……はい？」

雪野は驚き、そしてどこか嬉しそうに首をかしげた。

第92話 ゲテモノ喰い

アルミや業火が冬樹家とぼったり出会ったりしたその日の同時刻。ソーラは学校の屋上に寝ころび、親友と共に時を過ごしていた。その親友はといえば、その隣に座って裁縫仕事。互いに口を開かない。ただふたりでいるだけ。それだけの時間が、なにより楽しいのだ。

「ねー、ルツカー」

その沈黙をソーラが破った。むっくりと起き上がりルツカに向き直る。

「ルツカって、生肉が好きなんですよね？」

「え？ ……………うん。そうだけど。どうかした？」

「いえ。なんでもありません」

「そっか……」

「はい……………」

「……………ねえソーラ」

「はい」

「ソーラの作る料理って、なんであんなにおいしいの？」

「えっと……………そうですか」

確かに料理は好きだからよく作る。みんな上手いって言うってくれるが、ルツカがそう言うってくれるのが一番嬉しい。

「でね、ソーラ。質問なんだけど、生肉料理って作れる？」

「というと、馬刺しとか？ ユッケとかですか？」

「まあ、そんなの」

「んー、生肉って、衛生管理が難しいんです。まあ、注意すれば問題ないんですが……………食べたいんですか？」

「まあ……………えっと……………別に」

「なんですかそれ」

「まあ……………うん」

「……………」

「……………ルツカって」

「え？」

「ルツカって、どうして生の肉が好きなんですか？」

「え？ ……………えっと……………味？」

「味ですか？ あんなの、生臭いだけだと思っんですけど」

生肉をかじってみればいい。あんなの、おいしいとはとても思えない。

「んー、確かにそうなんだけど、でも好きなものは好きなんだ」

「まあいいですけどね……………」

「……………」

「……………ねえ」

「はい？」

「鳥のさばき方、わかる？」

「さばき方？ 鶏の解体とかですか？」

「うん。そんな感じ」

「……………ルツカ？」

「なに？」

「どうしてさっきから、後ろの方をチラチラ振り向いてるんですか？」

「なぜって……………わざわざ訊く？ わかってるんだよね？」

「ええ。まあ……………」

ふたりはそろって一方向を見る。

鳩の死体がひとつ、転がっていた。

「ソーラ。あれ食べたい」

「さばけと？」

「うん」

「えっと、衛生管理が難しいんですよ？ 下手すると病気になっちゃいますよ」

「さっき聞いた」

「あれがいつ死んだのかわかんないですよ？」

「昨日はなかった」

「えーっと……………」

この人は本気で言ってるんだろうか。たぶん本気なんだろうな。本当にこの鳩食べたんだろうな。生で。

「じゃ、じゃあ、後で馬刺しでもユツケでもなんでも作ってあげますから、ぼくの家に来てください」

「やだ。あの鳩食べたい」

「……………」

「食べたい。鳩食べたい。生で食べたい」

これでは駄々っ子と変わらない。

「あのねルツカ……………いえ。もういいです。でも……………」
「？」

「さすがに家に持って帰りたくないの、ここで食べてください」

「え？ いいの？」

「まあ、ここで食べるならルツカの勝手ですから」

「そうだね」

ルツカは立ち上がり、鳩の死骸を取ってきてまたソーラの目の前に座った。どことなく嬉しそう。

「ここで食べるってことは……………」

「生のまま、ばりばりと」

こともなげに言った。まあわかってたことだけれど。

ルツカはさっそくといった感じで鳩の頭にかじりついた。そんな光景見たくもない。あわてて後ろを向く。直後、なにかをかみ砕く音。

「……………」

なにが起こっているのかは想像に難くない。次いで液体を飲むような喉を鳴らす音。たまらず耳を塞いでうつむいた。

しばらく後、音が聞こえなくなった。恐る恐る顔をあげる。直後、背中に重みを感じた。ルツカがもたれかかっているのか。そのまま、しばらく無言で時間が過ぎる。

「……………ルツカ？」

「ねえソーラ…………」

「はい？」

いつになくしおらしいルツカに、少し違和感。

「僕、やっぱり変かな？」

「え？」

「普通の人は、こんなもの食べようとは思ひもしない。しかも生のままなんてね。……………わかってる。気味が悪いってね」

「……………」

ルツカは強い。肉体的にも精神的にも、彼は強靱だ。しかし、それは彼にとつて必ずしも幸せなことではない。

「ルツカは、そんな自分のことどう思ってるんですか？」

「……………変だとは思ふ。でも、変えるつもりはない」

「だったら、それでいいじゃないですか」

ルツカは能力的には優れた人間だろう。しかし性格は、大いに問題ありだ。自己中心的とよく言われる。正確にはサディストと本人は言ってるが、いずれにせよ好かれる性格ではない。彼に親しい人間がどれだけいるのか。たぶん、数えるほどもないのだろう。

たしかにルツカは強い。でも、孤独に永遠に耐えられるほどに人の心を持っていないわけではない。ルツカだって寂しいことはあるのだ。誰かに甘える……………なんてことは絶対にしたがないだろうが、それでも誰か心から気を許せる人間を渴望するぐらいはあるだろう。特に彼は、自分の家族ですら信用していないのだから。

「誰がなんて言っても、ルツカはルツカですから。ルツカが好きにすればいいじゃないですか。ぼくは、そういうルツカが好きです」

「……………そうだね。ありがとう」

それっきり、ルツカは黙ってしまった。背中にもたれかかったま

まで、である。ちよつと重くなってきた。

「あの、ルツカ？」

振り返るために身をよじると、ルツカは力なくずりおちてしまった。慌てて支える。ルツカはというと、目を閉じて静かに呼吸している。つまり、寝ている。

「なんですかこれ……………」

なにか疲れていたのか。それとも人を枕にするのがそんなに気持ちよかったのか。この人の行動はまったくわからない。でも、それがなんだか愛おしい。ルツカの頭を膝にのせてやる。膝枕。ルツカはこれが好きなのだ。

ルツカをよく見ると、体中に鳥の羽や毛が散乱している。たぶんおいしくないからよけたのだろう。食い散らかすというのは少し行儀が悪い。それらを払いのけ、口元についた血をハンカチで拭いた。「ねえ、ルツカ……………ぼくは、いつもあなたの味方ですからね。だから、安心して眠ってくださいね」

ルツカの頬がかすかに緩んだ気がした。多分、気のせいではない。生肉が好きとかサディストとか、あるいはもっと非道な趣味を持つ外道であっても、誰よりも頼りになる友なのだ。

第93話 家庭事情とか

「おい」

業火はその不良高校生になんの遠慮も無く声をかけた。途端に誰かが悲鳴をあげた、そんな気がした。業火は氣にとめなかったが、悲鳴をあげた人物には、悪意というものを知らない小学生が不用意に不良に近付いたように見えたのだろう。

きつと次の瞬間には血の雨が降るのだろう。情け容赦を知らない不良があの子小学生を血祭りにあげ、血飛沫を浴びたチワワは恐怖に怯えるのだろう。そうに違いない。

緊張感二割増。

通報直前。

しかし業火はそんなこと気にもしない。

「おい氷河。こんな所でなにしてる？」

「なについて……犬見てる」その”不良”はごく普通に返事した。

氷河だった。浅葱市立第七高校の二年生。不良の多い学校において全く不自然ではないほどに、悪そうな風体をしている。だが、業火とは知り合いだし、もちろん小学生を出会い頭に血祭りにあげることもない。そもそもそれは不良全体に対する偏見というものだ。

というわけで周囲の人の反応など意に介さず、業火は話しかけたのだ。

「犬見てるって……そんなことはわかるって……」

氷河の返答はあまり中身のあるものではなかった。

「あんな氷河、俺の聞きたいのは、なんでお前がここにいるかってことや」

「ああ……犬が見たかった」

「だから………なんで？」

要領の得ない氷河に、業火は根気よく問う。

「なぜって……それは、……………見たかったから、じゃだめなのか？」

「それは……」

もちろん、だめではない。ただ、似合わないなと思ったただけだ。

「氷河って大好きやったんや」

「いや。あまり好きじゃないぞ」

ますますわけがわからない。

「じゃあ、なんで……」

「……………」

氷河は言いたくなさそうだ。ならば無理に聞き出すわけにはいかないが、残念なことに察しの良い業火にはなんとなく理由がわかってしまった。

「もしかして、雪野さんのこと？」

「……………」

氷河はばつの悪い表情で、軽く頷いた。

雪野は氷河の実の妹で唯一の肉親。とある理由で両親ともう一人いた兄を亡くして以来、二人きりで国や市からの生活保護を受けながら暮らしている。そういう事情で、氷河は妹を第一に考えている所があり、その気持ちは業火にもよくわかる。

「それで？ 雪野さんがどうしたって？」

「『あの時』以来、元気がなくてな。ずっとそうなんだ。たまに変なこと口走ったりするし、そろそろ見ていられなくなって、なんとかしようと思ったわけだ」

「なるほどな……で、それがどうなってペットショップに？」

「別に大した意味はない。ただ、なんとかして雪野に元気になってほしくてな。こういうのって、雪野は好きなのかな、って。そう思

っただけだ」

そう言って、氷河は少し身をかめ、チワワを間近で見つめた。その仕草に、後ろのギャラリーがまた悲鳴をあげた。そろそろ本当に通報されそうだ。

「なあ氷河。雪野さんのことはわかったし、犬を見つめてる理由もわかった。でも……もしかして、そのチワワ、飼うつもりか？」

「え……それは……無理かな……」

「みたいやな」

チワワの入ってるケージの下には、十五万という数字が印刷された紙があった。その隣の、聞いたことのないような名前の犬の値段も、だいたい同じようなものだった。

「あ……あははは……俺の家の家計じゃ、ちょっと払えないよなー」
「……………」

氷河は笑っているが、そんなに愉快な話ではない。

高校生と中学生の兄妹。生活費は決して安くない。生活保護だけでは足が出ているらしい。不足分を補うのは？ おそらく、両親の貯金と生命保険なんだろう。

公的扶助なんていっても、この程度なのだ。それでも、今の市長になってからずいぶん良くなったらしい。

前の市長はひどかった。その福祉方面の政策のひどさのために、住民が運動を起こしてリコールされたほど。そして次選ばれたのが、あのテツの上司だ。

福祉政策は改善された。が、それでも現在の冬木家に、十数万円する生き物を買って、飼い続ける余裕などないだろう。

「あー、残念だな……」

「……………」

氷河の心情は察するにあまりある。が、自分になにができるだろうか？

「まあ、いいやん。雪野さんが動物好きとは限らないしな」

「そうだな……………なあ業火？」

「なんや？」

「なんで俺の服つかんでるんだ？」

言われている通り、業火は氷河の服の裾をがちりつかんでいる。なぜって？ 通報されそうだから早いところ店から出て行った方がいいから、だなんて言えるわけがない。

「えっと…………それは…………まあ…………なんや、いろいろあってな。ほら、出るで」

そして氷河をぐいぐいと引っ張った。

「おい、どうしたんだ…………？」

力比べでは氷河には勝てないが、氷河は戸惑いながらも大した抵抗もなしについていった。突然にこの店に來た目的を思い出し、動物別に餌が整然と並べてある棚からカエルの餌（バーベキューチキン味）をつかみレジに並んだ。その際レジ近くに固まる人の群が業火達を避けるために割れていった。なんとなくモーセの気分。

「えっと、つまりですね。独学で料理学ぶのもいいですけど、それだといろいろ大変かなって…………」

いきなりサバイバルな本を選んでくるような人間に、独学で包丁とか持たせたくないというのが本音だが、それは言わないことにする。

「それだったら、多少なりとも知っている人間が教えたら、学ぶのはずっと楽になるかなって。そう思いました」

「それは…………そうでしょうね。でも、いいんですか？ アルミ様にお願いして」

「ええ。構わないです」

ついでに、雪野や普段の氷河のことについていろいろ訊いてみたいことだし。

「あ、そうだ。ついでにひとつ、訊いていいですか？」

せっかくだから、今ひとつ疑問を解決しよう。

「どうして、俺のこ様を付けて呼ぶんですか？」

「えっと、嫌ですか？」

「……別に嫌じゃないですけど。俺の方が年下ですし、敬語使うのはちょっと変かなって」

「そうですか。……私の尊敬する人が、こういうしゃべり方だったので、こうなってしまったんです」

「尊敬する人、ですか？」

「はい。名前は、最後まで名前はわからなかったんですけど………」

「？　つまり、そのひとは？」

「ええ。まあ、いろいろありまして。あ、でも、その人は自分をこう言っていました」

雪野はその言葉だけ、声をひそめて言った。まるで、秘密にしておきたいことであるかのように。

「”竜”。あの人は、そう名乗っていました」

第94話 飲み友達

夜。テツは飲み屋街の通りを携帯電話片手にうろうろ歩いていた。ようやく八時をまわったぐらいの時刻だというのに既にできあがっているスーツ姿の酔っぱらいを避けつつ目的の店を探す。しかし見つからない。奥まった所にあるのだろうか。だいたい、指示が大雑把すぎるのだ。

酔っ払いのナンパというか絡みを何度もやりすごし、ようやくたどり着いた。裏路地の小さな酒屋。中に入ると、むわっとした熱気に襲われた。冷房の効きが悪いというよりは店内の人口密度が高すぎるからだろう。おまけに酒臭い。当然と言えば当然だが、こういうのはどうしても好きになれない。こんな所、行きたくななんてないのだ。呼びつけた人間が恨めしい。

その人間はすぐに見つかった。カウンター席に突っ伏している。酔い潰れたわけではないだろうが、相当量飲んだのは確かだろう。そっちにすたすたと歩いていき、声をかける。

「もしもし叶さん、来ましたよ」

「うー？」

顔だけこっち向けてなにか言った。言ったのだが言葉になっていない。

一日の仕事が終わり、さて帰ろう明日の労働のためにと市役所から出たその瞬間、計ったかのように叶からのメールが来た。どこそこの酒屋に来なさいひとりで飲むのはさびしいから、と。真面目なテツは友人の言葉を見無視するわけにもいかず今に至るというわけだ。

「あー、テツ………とりあえず飲みなさい」

そう言って酒の入ったグラスを差し出した。そんなこと言われても飲むわけにはいかない。

「叶さん。私、未成年なんですけど。知ってますよね？」

一八歳、私的とはいえ市長の秘書。酒を飲むわけにはいかない。

「なによー、あたしの酒が飲めないっての？」

「いえ、そういうわけじゃなくて……」

酔っ払いに話を通じないのはわかっている。テツは黙って叶の隣の席につき、店員にカルピスを注文した。

「それで叶さん。どうしたんですか、こんなところに呼びつけて」

「メールにあった通り。会社帰りにひとりで飲むのはさびしい」

「ひとりで飲むって……会社にお友達とかいないんですか？」

怪盗ルピナスなんてのはあくまで裏の顔。普段は普通のOLデスクワーカーなのだ。会社と一緒に飲める友達ぐらいいてもよさそうなのだが。

「いない！」

はつきり言いやりましたよこの人。

「いないって……どういふことですか？」

「職場の連中とは馬が合わないの……うう。あんなやつら……」

「どういふことですか？」

「そのままの意味。やつらと話してもおもしろくない意味わかんない。口を開けば仕事の愚痴と男の話ばかり。もっと生産的なこと話さない！」

「私に文句言わないでください。それに、生産的な話ってどんなのですか？」

「え……えっと新しいクラッキングプログラムの組み方とか？」

「そんなことするOLさんはあなたぐらいしかいません。もっと一般の方にわかりやすい話しましょうよ」

「でも、愚痴を垂れ流すのは嫌。美しくない」

「じゃあ、男性の話はどうなんですか？」

「……奴らが普段どんな話してるか、聴きたい？」

叶の声のトーンが一オクターブ下がった。その意味するところは？
「そうですね……気になります。話してください」

「いいわ、えっとね……………奴らはまず、世の中のたいていの男つてものを人として観ていないの」

「はい？」

「男ってのは金だと思ってるの」

「あの、言ってる意味がわかんないんですけど」

「つきあうなら金持ってる男しかありえない。一緒に食事をしたら男が奢るのは当たり前」

「……………」

「結婚するなら年収は一千万以上ね。それで専業主婦になって、旦那の金で思いつきり贅沢するの。高いお洋服に化粧品。あと、頑張った自分へのご褒美に豪華なランチ！……………って！ なんなのよこのスイーツ脳！」

「知りませんよ。というか、私にキレないでください」

「うっさい！ とにかく、あいつらときたら口を開けば恋愛恋愛！ しかも目当ては男ではなくそれについてる金ときた！ そんなのに金が好きなら金と結婚しなさいっての！」

もはや何言ってるかわからない。だめだこいつ。なんとかしないと。そろそろ他の客の視線が痛くなってきた。しかし叶の言葉はまだ続く。

「それに男の方も問題よ！ あいつら、こういう女の下心も見抜けないような大バカ者ばかり！ いつもエロいことしか考えてないから、ちよつと色気見せられたらホイホイ釣られちゃって！ バカとバカでお似合いだわ！」

「あの、あんまり騒がない方がよろしいんじゃないでしょうか………それに、世の中にはそういうのではない人もたくさんいると思いますよ？」

「うっさい。世の中の男はみんなバカなの」

それは違う。そう断言できるだけの根拠はあった。

「少なくとも、アルミ様はバカじゃないですよ！」

言いきった。それはもう自信満々に。叶はというと唾然とした表情でこちらを見つめている。なるほど、指摘が的確すぎて反論できないか。と、そう思っていたら一言、

「テツ……あんたもなかなかのバカね……」

「バカとは失礼ですね。私は本気です」

「そこら辺がバカなのよ。まあ、恋は盲目って言うし、あんたが小学生相手にお金を見出してるわけじゃないのはわかってるんだけどね。でもなー、シヨタはちよつとなー」

「私はシヨタコンじゃないですよ」

「はいはい。でもいいの？ アルミが女の子に興味ないような人間でも。あなたの恋は絶対に報われない」

「そ……それは困りますが、でも、アルミ様ならなんとかなんとかしてくれると思います！」

「なによそれ………はあ、アルミね。……あの子、なんか変なのよね……」

「人の旦那を変とは何事ですか」

「勝手に旦那言うな。それよりあの子、あなたの言葉を信じれば人殺し、なのよね？」

「はい。本人も認めてましたしね」

「でも、それって本当なのかな？」

「はい？」

「あいつに銃を持たせたとき、少し手が震えていた。人殺しの道具にを怖がってるようにも見えた。あいつ、本当は人を殺すなんてしたくないんじゃないかな？」

「……………」

初めてあの小学生と会話したあの動物園で、彼は、テツが手負いの虎に止めを刺すのをやめさせた。これになにか意味があったのだろうか？

いいや、それでも彼は人を殺すのにためらいを持っていなかった。

この前もヤクザ相手に平気で発砲していたし、テツの攻撃を防ぐために見知らぬ人間を盾にしたこともあったではないか。

「それは、考えすぎだと思いますよ？ アルミ様は間違いなく頼れる戦力です」

「そういう小学生ってどうなのよ……って！　なんでこんな真面目くさった話しなきゃなんないのよ！」

叶はいきなり叫んでグラスでガンガンとカウンターを叩いた。

「もっと楽しい話しなさい！　ていうか、あんたも飲みなさい！」

「無茶言わないでください！」

その後も叶は飲み続け、気付いた時には泥酔しきって眠っていた。どうしろというのか。たぶん自宅まで連れて帰るしかないんだろうな。というか、このために呼び出したのだろう。本当に世話のかかる友人だ。

でも、それだけ信頼されているということだ。彼女の嫌っている同僚とは違う。こういう性格だから、本当に職場の友達はいないのかもしれない。だったらそれでいい。間違いなくそう考えているのだろう。友達なんてのは大勢はいらない。数人、なんでも話せるような人間がいればそれでいい。自分はそういう人間だったということだ。

叶はいい人だ。だったら、それでいいではないか。数少ない友達だ。大切にしなければ。

第95話 竜狩り

翌日。業火と氷河は駅前で待ち合わせていた。

「つまりは、雪野さんを喜ばすにはどうすればいいかって話やんな？」

「そうだな。……………どうすればいいんだ？」

「知るか……………でも、そうやな。どう考えればいいやろ？ 雪野さんの好きなものとか？」

「雪野の好きなもの？ ……………竜？」

「竜？」

「ああ。なんなのかはわからないが、竜が好きらしい」

「つまり、ドラゴン？」

「たぶんそうなんだろう。それで、竜を探しているらしいんだ」

「探してる？ ドラゴンを？ それ、本気なんか？」

「うーん。本人の話を信じれば、だ。それに、あいつは一度竜に遭っているらしい」

「え？」

わけがわからない。竜は、伝説の生き物のことではないのか？

「すまん。それもよくわからないんだ。だが、竜ってのは人間につける……………称号？ みたいなものらしい」

「そうか。だったら……………その人を見つけたら雪野さんは喜ぶ？」

「それはそうだろうが……………そんなことができるか？ 竜と呼ばれる人間が何者かは、なんにもわからないんだぞ？」

「やな……………」

なにもしていないのに、すでにいろいろな手詰まりのような気がした。

客人を迎えるべく、アルミは急いで帰り買い物に出かけた。必要な材料を買って家に戻ると、大きな買い物袋を持った雪野がすでに玄関で待っていた。

「すいません。待たせてしまったみたいですね」

「あ、アルミ様。今日はお招きいただきありがとうございます。あんまり待っていないので心配しないでください」

「そうですか。…………お姉ちゃんまだ帰ってないのかな……」

「チャイムを押しても誰も出ませんでした」

珍しいが、こういうこともあるだろう。唯がいた方がやりやすい面はあるのだが、仕方ない。

鍵を回し中に招き入れる。と、その時点で気にかかっていたことを訊いてみた。

「雪野さん。材料はこっちで用意する……というか、なに作るかも言ってませんよね？」

雪野の持つ買い物袋を見つめながら言った。

「え？ ああ、これは……………なんなんでしょう？」

「俺に訊かないでください……………」

そう答えつつ、アルミは雪野から目を逸らした。たぶん、この問いは照れ隠しの類なのだと思う。そんな雪野の、少し恥ずかしげな表情が美しく、直視するのがためらわれた。

なにをすべきか見当もつかないため、とりあえずはなにか探そうということになった。業火と氷河のふたりは今、浅葱市最大の百貨店の中にいる。

「そうやな。やっぱり、なにかプレゼントするのがいいんやろうけどな」

「それをなににするかだな……………そうだ。お前の妹だったら、どうかな？」

「聖火やったら？ そうやな……んー」

聖火の喜びそうなこと。あいつの好きなことってなんだろうか。

普段の聖火のしていることといえば、家事かテレビ観るぐらいしか思いつかない。

「忙しい主婦も大助かり。簡単にゴミ袋が結べてしまう。名づけて『ゴミくくるクン』」

「……………なんだよそれ」

「そういう商品があるらしい。こう、輪っかになってて、そこにゴミ袋の口を通して、それを絞ってぐるんって回すと、きれいに結べる」

「へえ。……でも便利そうだが、そういうのはいつもは俺の仕事だからな。雪野がもらっても嬉しくはないだろう？」

「本当にそうやろうか？」

「え？」

「……………なんていうか、さ。うまくは言えないけど、雪野さんって、なんとなくいつもつまらなそうにしてるんや」

「そうか？ ………………本当にそうなのか？」

「いや。単に俺がそう感じただけ……」

氷河の食いつきが予想以上で、気押されてしまった。しかし、そう思っていたのは本当だ。

「なあ氷河。俺は、お前はすごい奴やとは思ってるんや。自分でできることやったらなんでもひとりでしょうとする。できないことは、ためらいなしに他の人に頼れる。つまり、自分にできることとできないことをちゃんとわかっている」

ふと、ひとりしかいない親友のことをふと思った。あいつも、そういう種類の人間ではないだろうか。しかし、決定的に違うことがある。

アルミは自分にできることでも他人に押し付ける。そして、他人の心情をいとも簡単に読みとる。そのどちらも、氷河にはできない。「なあ氷河。雪野さんの性格考えたらさ、お前が家事とかを全部や

つてると……なんというかな、無力感というか、自分もやってみた
いというか………」

「なにもかも俺がしちゃ、つまらないと？」

「たぶん、そういうことじゃないかな………」

「アルミ様、これから何を作るんですか？」

「いきなり手の込んだものをつくるのは無茶ですけど、できればお
いしいものを作りたいですね」

アルミはビニール袋の中を探りながら答える。

「作るのにあんまり失敗しないもの、というとやっぱりカレーライ
スですが、これは俺が嫌いなので………」

ようやく目当てのものが見つかった。白くて四角い箱。

「クリームシチューを作ります」

「となると、大切なのは贈り物ではないかもしれない」

「……………」

百貨店の中を歩きながら、業火は自分の考えをまとめ、話す。

「一度、じっくり話してみたらどうかな？ 雪野さんになにか思う
ところがあるんやったら、そうするのが一番と思うんや」

氷河はその話を黙って聞くだけ。たぶん、これでいい。氷河は馬
鹿ではないし、なにも聞きかえさないということはちゃんと理解し
ているということ。この状況が一番話しやすい。少し落ち込んでい
る気もするが、それはしかたがない。不良然として粗暴そうな外見
でも、中身は妹想いの優しいお兄ちゃん………という言葉も少し照れ
くさいが、この男の性格も随分わかってきた。

そのおかげで、落ち込んでいるのをなんとかする役割を引き受け

ることになるのだが。それもかまわない。それが仲間というものな
んだから。

「それで、や」

業火は歩みを止めた。そこは、ゲームコーナーの一角。中に大量
のぬいぐるみが入ったUFOキャッチャーの前。

「なあ。」 竜”をつかまえてみない？」

こんな冗談みたいなきっかけであっても、なかったら氷河は雪野
にまじめな話なんて切り出せないだろう。だから、応援してあげる
のだ。

ぬいぐるみはすべてドラゴンの形をしたいた。アルミの好きなア
ニメのキャラクターらしく、それ以上のことは業火は知らない。
でも、竜は竜だ。

「な？ やってみない？」

「あ……ああ………」

そんな、少し戸惑い気味の氷河の表情が少しおかしかった。

第96話 バカらしさ

決して友達がいらないわけじゃない。仲の良い人は多いし、少なくとも学校にいる間はひとりぼっちであることは全くない。

ただ、少し付き合いが悪いとは思われてるかもしれない。放課後や休みの日に遊びに行こうと誘われても、それを受けたことは一度もなかった。まだ圧倒的少数派というわけではないが、携帯電話を持っていないために、学校以外の場所での会話なんて全くない。

自分の知らないところで友人がどんな会話をしているかわからないし、そんなこと気にしても無意味なんだろう。わかってはいるが、少し寂しく思うこともある。

ま、家において家事に追われるのも嫌いじゃない。弟――アルミー――があんまり手伝ってくれないことが気になるが、それは仕方がない。あいつは、あいつの好きなことをしていればいいんだ。

そして今日も学校が終わった。周りの友達には部活やら放課後どこか行くやらで、どこまでも楽しそうだ。その内、唯に声をかけてくれる奇特な人間なんていない。今日の夕飯はなんにしようかと考えながら校門をくぐる……

「あの、唯さん。ちょっといいですか……」
「？」

誰かに呼びかけられた気がした。しかし周りを見回しても声の主はわからず。

「下です。唯さん、下」
「え？」

正面少し前下方向に視線を向ける。いた。背が低いから気付かなかったが、見知った顔だった。

「えっと、聖火、ちゃん？」
「はい」

弟の友人の妹というのは割と遠い関係なのだろうが、兄と弟の付き合いが長いとか、それとも唯と聖火にどこか似たところがあるのか、ふたりは仲がいい。

しかし仲がいいといっても、近所のスーパーでばったりと会うぐらいしか接触がない。ふたりとも家に親が常時不在で、しかも男がこと家事については絶望的に頼りにならないために普段の忙しさが半端ではないのだ。こういう風に、向こうから会いに来るというのはあんまりない。

「どうかしたの？ なにかあった？」

「えっと……その……」

言いたいことはあるのだろうが口に出せないようだ。少し目をそむけながら口をつぐむ。その仕草のかわいらしさに少し和む。

「ここじゃ言いにくいことかな？ とりあえず、どこかに行かない？」

「あ……はい」

聖火の手をとり、ゆっくり歩く。聖火は少し戸惑いながらもついてきた。

「それで、なにか相談事でもあるのかな？」

公園のベンチに座り黙って黙って下を見ている聖火に、買ってきた缶ジュースを手渡しする。体感温度的には、すでに夏だ。嬉しそうに受け取ってくれた。

「ありがとうございます……すいません。こんなに優しくしてもらって」

「いいって。で、なにか悩みでもあるの？」

「はい。……やっぱりわかりますか」

「まあ、バレバレだね。業火くんの帰りが最近遅いのが気になるって？」

「ええ………え？」

今度は目を丸くしてこっちを見かえしてきた。

「あたりー。だってさ、すぐに顔にでるんだもん。わかりやすいじゃん」

と、そう言ってまた声をあげて笑ってみた。聖火は少し顔を赤くしたが、さっきからの緊張もほぐれたようだ。

これも作戦のうち、といえは聞こえもいいが、別に聖火の表情を読みとったりとか、そんな高度なこととはしていない。したのは、ちよつとした推理だ。聖火の悩みで唯に相談しそうなことといえば業火やアルミに関することだろう。最近彼らはなにかやってるみたいだし、弟の帰りが遅いと感じているのはこっちも同じなのだ。

「業火くんがなにか危ないことをしてるのが、心配？」

「いいえ」

それははつきり否定した。黙っていると、ぽつぽつと続きを話はじめた。

「なんというか……お兄ちゃんが友達と仲良くしてるのはいいんです。でも、なんか………なんか、変だって思うことがあるんです」
「変？」

「男の子の友人関係です。なんというか、仲が良すぎるんで。それが、ちよつと……不気味で」

「どうして？」

「だってお兄ちゃん、家で友達の悪口とか全然言わないんです。ちよつとおかしくないですか？ ……アルミも、そうなんですか？」

「うーん……」

唯も、アルミが家で業火の悪口を言うのを聞いたことがない。たぶん、本当に言っていないのだろう。逆に、こっちが自分の友人の愚痴でも言おうものなら、遠慮なく言ってくる。「それは、友達にする人間を間違えてる。別れろ」と。

「そうだね……たしかに言わないかな」

「やっぱりそうですか……でも、どうしてないんでしょうか？ わたしの友達とかは、普通にみんなで他の友達の悪口とか言ってるん

ですけど。あ、もちろん本人がいなくて、ですけど」

「……それが原因じゃないかな」

「はい？」

「なんかさ、男の子って、そういうことを本人に直接言うんだと思う。……あいつらだけの話かもしれないけど」

「え？ でも、そんなことしたらケンカになっちゃうし、みんなに嫌われる……」

「そういうことにならないから、友達なんじゃないの？」

「え？ えっ？」

まったく理解できていないらしい。

「それっておかしいですか？ だって、嫌なこと言われたら、気分悪くなったり、みんなから酷いって言われたりするでしょう？ なんで男子は、そんなことにならないんですか？」

「バカだから」

即答。でも、たぶん正しい。

「バカで、昔のことなんてすぐに忘れちゃうから。面と向かって悪口いわれても『そっかー』とか、『お前もだろー』とかで済ませて、それでおしまい。次の瞬間には、過去のことのなつてまた仲のいいお友達に戻る」

「それって……明らかにダメなことですよね？」

「そう？ わたしには、こっちのほうが楽しそうに見えるけど。バカだから、バカで無謀な事を大真面目にやっちゃうし。失敗しても笑って済むし。成功したらそれこそ子供みたいに大喜び。ときどき、それがすごくうらやましく思える。わたしなんて、友達の機嫌取りに必死になることだってあるのに。どうしてあんなに気軽に付き合えるんだろうね？」

「……………」

「まあ、そういうことで。相談というか、疑問は解決した？」

「……ええ、まあ」

「本当に？」

「……………」

本当じゃないのは見たらわかる。

「まだなにかある？ 遠慮なく言えればいいよ」

「はい。では……………お兄ちゃんやアルミが最近やってる『バカなこと』なんですけど」

「うん」

「なんか、高校生のお兄さんとかと一緒に危ないことやってて…………それはいいんですけど、そのせいでお兄ちゃんが遠くになっちゃった気がして…………なんというか、距離が開いた？ そんな気がするんです」

「寂しい？」

「……………はい。うち、親があんまり家にいなくて。だから、お兄ちゃんがいないと家が静かすぎるんです。たまにお父さんが帰ってきて、その時はすごく楽しいんですけど。でも、最近はお兄ちゃんが帰ってくる時間が遅くなってきて。一度、お兄ちゃん達がやることにわたしも混ざってみようとしたんです。それで、ちょっと怖い思いをしました。それはわたしのわがままのせいだから、誰かを責めるわけにはいかないんですけど。でも……………わたしは……………お兄ちゃんのなんなのかな？」

「んー、聖火ちゃんは、聖火ちゃんではないし、あんまり深く考えることじゃないと思うな」

「そうですか？」

「うん。……………聖火ちゃんは、業火くんのことが大切？」

「はい。もちろんです」

「じゃあ、そういうことでいいじゃん。向こうがどう思っているても、聖火ちゃんと思うようにしていれば。業火くんはそういう気持ち、ちゃんとわかってくれる人だし。……………あんなロクでもないわたしの弟と付き合ってるんだから、それは間違いない」

「そうですか……………そうですね」

ようやく、笑顔になってくれた。アルミをバカにする話が出たら

急に元気になったのが引っかかるが、結果オーライということではないだろう。

「ありがとうございます。助かりました。……あ、晩ご飯の材料買わないといけないので、すいません失礼します」

「うん。またなんかあったら相談してね」

「はい！」

少し駆け足で行ってしまった聖火の後ろ姿を眺めつつ、さっきの会話を思い出す。家庭事情が複雑そうだし、聖火にも聖火なりの悩みがあるのは当然だろう。

しかし、その家庭事情が気になる。父親がたまにしか帰ってこない。これは、あることだろう。しかし母親は？ さっきの話では、全く帰ってこないようにも聞こえた。どういう意味なのだろう？

他人の事情に首をつっこむのはよくない。でも、少し心配だ。

第97話 料理

「クリームシチューですか。そんなに、作るのは簡単ですか？」

「まあ、ルウがありますからね。それでもやらなきゃいけないことは多いので料理している感は強いですし、好みでいろいろアレンジもしやすいんです」

「そうなんですか。わかりました」

「じゃあ始めましょうか。えっと……まずは野菜を切る………」
アルミがビニール袋から取り出したのは、たまねぎ、じゃがいも、にんじん。

「皮、剥けますか？」

「えっと……どうすればいいんでしょうか？」

「たまねぎは手で。じゃがいもとにんじんはピーラーを使って」

「ピーラーですか。はじめて聞く言葉です」

「……はい。つかってみます？」

「ええ。がんばります。えーっと……」

雪野はピーラーを右手で受け取り、左手でじゃがいもを持ち、
「……………」

しばらくそれらを無言で眺めた挙句、

「あの、やっぱりどうすれば剥けるか、教えてください。さっぱりわからないです……………」

「あ、はい。わかりました」

うーむ。これは、予想以上に苦労しそうだな。

「UFOキャッチャーか。やったことないんだよね……」

「そうか。実は、俺もや」

「だと思ったよ。まあ、しゃーない。ちょっとやってみるか」

「そうそう。その意気」

雪野は性格的に少し抜けているところがあるばかりではなく、手先の器用さも大いに問題ありだった。

「……まあ、なんとか剥けたからいいですが……」

白い包帯の巻かれた雪野の手首を見ながら言う。手首まで剥いてしまつて、慌てて処置をしたのだ。

「次は野菜を切るわけですが……やりますか？」

「はい」

すごくいい返事。心配でしかたないのだが。

「……………いいしょう。えっと、野菜を切りやすくするにはどうすればいいかです。転がったりすると不安定になるので、できるだけ平らな面を作ります」

そう言いながら、たまねぎを真つ二つに切断した。

「この断面を下に置けば安定して切ることができるわけです」

「なるほど……では、やってみます」

先ほどと同じく、見ていてハラハラするのは同じだ。しかし怪我をして多少は用心深くもなったのだろう。包丁を扱う手はかなり慎重だ。これなら心配は……………

「あの、切るのが楽しいのはなんとなくわかりますが、そんなに細かくする必要はないんですよ」

アルミの目の前にあるのは、みじん切り状態のたまねぎ。

「あ……ぐすつ、すいません。ううっ……涙が……」

「まあ、それはそういうものですから」

「なあ、氷河」

UFOキャッターなんてやってみてできるものではなかなかない。あっさり百円を無駄にした氷河はどうすればよいかを考えてみることにした。クレーンをよく眺めてぬいぐるみの配置を穴のあくほどに見つめ、他の客の迷惑だからと業火に止めさせられた。今は筐体を遠巻きに眺めながらの会話だ。

「なんだ？」

「雪野さんってさ、なんでもひとりでやってみようとするタイプやったりする？」

「……………よく知ってるな」

「……………まあな。で、そんな雪野さんがや、お前のやっている家事に興味を持ったりする」

「そういうことも、あるかもしれない」

「そういうことになったとして、雪野さんはどうするかな？」

「それは……………ひとりで、どうにかしたがる？」

「そういうこと」

「……………それがどうしたんだ？」

「意外に、お前に見えないところで努力してるかもしれない」
「？」

「お前も努力しろってことや。さ、続きやるで」

「あ……………ああ」

今度はなんとか、怪我をすることなく作業を終わらせた。次は、切った野菜を炒める。

「もう刃物は使いません。……………鍋の中で、こがさないように。やってみてください」

たぶん、刃物を扱うよりはずっと楽な作業だ。雪野も、あまり苦労することなくやっている。

「にしても、お姉ちゃん遅いな」

「どうかしましたか？」

「いえ……姉の帰りが遅いので。いつもなら帰ってきているはずの時間なんですが……」

「心配ですか？」

「ええ。まあ。……雪野さんは、氷河が帰ってこなかったら心配になったりしませんか？」

「え？ あ、はい。もちろんそうですが……最近本当に、遅くまで帰ってこないのが多くて……」

「……………すいません」

つい謝ってしまった。しかし雪野はその理由が思い当たらないのか、首をかしげて不思議そうな表情をした。また心が痛んだ。

「氷河の帰りが遅いのは、たぶん俺にも原因のあることですから」
始めたのは氷河。しかし、協力したのはアルミ自身だ。それに、氷河がこの活動によって多少なりとも疲れているのを知っている。それに加えて……

「それは、アルミ様のせいではないですよ」

「え？」

「お兄様が何をしているのかは詳しく知りません。でも、それはお兄様の望んだことでしょうか？ それに、お兄様はすごく楽しそうですよ」

「でも……」

「あの、この後どうすればいいんでしょうか？」

「あ、水を加えて煮込むんです。一五分間ほどですね」

「はい」

そのあとルウを入れ、しばらくしてから牛乳を加えればできあがりだ。

「お姉ちゃん帰ってこないなら、夕飯作っとくかな」

冷蔵庫の中身を眺めて野菜をいくつか取り出し、洗ってから切り始めた。

「あの、さっきから不思議なのですが」

「はい？」

雪野の方から質問は珍しい。

「どうして、野菜を切るのにナイフを使うんですか？」

その通り。先ほどからアルミは、いつも使っているコンバットナイフで調理している。ちゃんと手入れしているし、洗浄も殺菌もしたから衛生上の問題はないはずだ。

「えっと……これはまあ、こっちのほうがやりやすいからです。慣れてますし」

「そうなんですか……」

何度もやるとコツをつかめたりするのか、氷河はその後二、三回挑戦し、ようやくひとつの竜を手に入れた。青い色で、胴の長い竜。ぬいぐるみ向けのデフォルメなのかもしれないが、顔はかわいい。

「とれた……な。なあ、これからどうすればいいんだ？」

「雪野さんと一度ゆっくり話してみる。それだけや」

「そうか。……そうだな。よし、やってみよう……ところで、この竜ってどういう竜なんだ？」

「……さあ。アルミに訊けば教えてくれるやろうけど……」

「たぶん、こういうことなんでしょう」

「はい？」

鍋の中でできあがりつつあるクリームシチューを見つめながら、雪野が不意にそう呟いた。

「こうやって、ご飯をつくることです。家族が帰ってくるのを待ち

ながら、帰ってきたらおかえりなさいって言って、それで温かいご飯を食べてもらうんです。それって、すごくいいことだと思っていませんか？ 遅くに帰ってきたお兄様に、ご飯を作れなんて、言えないですよ」

「……………だからこうやって、雪野さんは雪野さんにできることをしよう、と？ それで、氷河の助けになろうということですか？」

「はい。……間違っているでしょうか？」

「いいえ。正しいです。俺には考えもできなかったことですけれどナイフを持つ手を止め、鍋の中をのぞく。

「………完成です」

「はい………よかった」

安堵というか喜びというか、そんな雪野の表情がまた少し心に刺さった。

第98話 守るべき場所、物

「この前の敵についてだが……」

「ああ。話してくれ」

浅葱市内にある安アパートの一室。ゲッコー仮面こと、兜崎大介の住処である。今、部屋の中には彼の他にもうひとりいる。いつもはマラカス仮面と呼ばれている男は、マスクを外して美しい顔を大介に向けている。

先日 of 赤ダイヤモンドの一件。宝を奪いに襲撃してきた正体不明の武装集団。彼らの正体に興味を持ち、ゲッコー仮面は独自に調査をしていた。

兜会には何の感情も抱いていないが、浅葱市の平和を乱すものを放置することはできない。

「正体はいまだ不明。目的もわからない……まあ、ダイヤモンドを盗もうとしたのは金目当てだろう。それ以外に理由があるとすれば、なにか主義主張があるか。あるいは鬼庭組の差し金か」

「それぐらいか。……ダイヤモンドを盗んで主張というのはよくわからないが」

「可能性の問題だ。しかし、目的だけではどうにもならない。次に興味があるのが、奴らの武器についてだ。……この平和な国で、拳銃やらサブマシンガンやらを入手する方法なんてそう多くはない……港に在る密輸業者を思いつくままに当たってみた。分母が大きいから、それっぽいを見つくるのには苦労した、が、それらしいのを見つけた。あの夜の少し前、サブマシンガンを三丁と拳銃を五丁買った奴がいたらしい。拳銃はともかく、サブマシンガンの数はあいつらの装備と一致する」

「モデルは？」

「それも一致だ。トカレフとスコープオン」

「ヤクザ御用達の銃じゃないか。それじゃ、はっきりしたことはわからない。あんたのオヤジや、鬼庭の連中が買った可能性だってある」

「ああ……その通りだ」

そして、それ以上のことはなにもわからなかった。たしかに、これだとなんの意味もない。

「まあいい。一度状況を整理しよう」

マラカス仮面が感情を込めずに言った。たいして役に立たない調査の結果に思うところのある様子もない。感情の起伏に乏しい人間ではないが、たまに何を考えているかがわからないことがある。そんな思いを察することもなく、マラカス仮面は勝手に話を進めていく。

「まず、あの夜俺の見た敵についてだ。あのビルの中で見かけたのは、警備員がふたりとガキがふたり、そして、そのガキにやられたらしい男が三人」

あの日のマラカス仮面の任務は、ホテルのとなりにあるビルに潜入すること。ダイヤを奪う輩が武装しているという想定はしていた。ビルから狙撃してくることもあるかもしれない。そういう考えからのこの任務だが、実際は組の守る領域に組から見た部外者を入れたくないという配慮の方が大きい。兜会の構成員にしてみれば、”カタギ”が警備に協力するというのは納得いかないこともあるだろう。そういう経緯だったから、本当に武装集団の襲撃があるとは思ってもみなかった。

「それで、大介さんの遭遇した敵は？」

「例の武装集団が大勢。何度か見かけた不良少年は、女性ふたりと一緒に動いていたな。もうひとり、やたらと強い中学生」

「俺の見たガキふたりは、小学生と高校生っぽかった。単独で行動していたとは思いくいから、ホテル側にいたどれかの仲間なんだろうな。それが中学生か、不良少年のどちらの仲間かはわからないが」

「あの不良少年は、もうひとりの小学生と一緒に行動していたが、あの時彼はいなかった」

「ということは、俺の見た小学生が、あんたの言う不良少年の仲間か」

「たぶん、そうだ。………いまのところ分かつてる情報はその程度か。あと、武装集団のリーダーだが、名前を矢崎というらしい」

「リーダーか。それは組織としての長か。それとも、作戦実行部隊の隊長か」

「それは……組織の規模はわからないが、たぶんバックに誰かはいるんだろう」

「まあ、普通はそうだな。………しかし、そんな組織が実在するとは知らなかった。噂には聞いていたけどな」

「……………ああ」

浅葱市は怖い場所。銃を持った人間なんていくらでもいる。包丁をもった狂人が通りを歩いている。一時間後にその狂人を見てみよう。死体になっているからだ。なぜかって? 『治安維持』の名のもとに、別の狂人が殺したからだよ。もう一時間見てみよう。野良犬が死体を食い漁っている。すぐに死体は消え去った。

そんな話を、以前ネット上で見かけたことがある。もちろん、実際の浅葱市はそこまで狂った場所ではない。市民は普通に生活している。生活水準は他の地よりも高いし、市長が変わってから福祉レベルも格段に上がった。しかし、治安が悪いのもまた真実だ。統計的に見ての凶悪犯罪の発生件数は、全国の市町村では万年ワースト一位を記録。犯罪被害者は社会的弱者が多く、幼い子供や年寄りばかりがよからぬ輩に狙われる。

一般の目からは見えない闇の秘密結社。そんなフィクションの中にしかないような存在が、ここにはいる。今回の武装集団がそういう類の組織かどうかはわからないが、なにかしらの利権を求めて

隠れてこそしているという点では、同じだろう。

「でもね、そんな組織なんて、実はどうでもいいんだ」

大介は立ち上がり、窓から外を見た。夕焼けに染まった町。小さな子供が、母親に手を引かれて家に帰るのが見えた。

どこにでもあるべき、平和な光景。

「欲にまみれた大人が、世間様に見えないところでケンカしているなら、まだいい。もちろん、正義の味方としては最終的にはそういうのも排除したいんだけどな。だが……子供が非行に走るのは、耐えられない」

「……………お前の言う、不良少年みたいなやつか？」

「そうだ。ナイフや銃を持ち出して、ずいぶん危険なことをしてくれた……なんの目的があるかは知らないが、なんとか更生できないだろうか」

「それは、力づくではなく話し合いでか？　だとしたら、無理だ」

「……………」

「もしあんたが、正義の味方をやめろとだれかに説得されたら、やめるか？」

「いや、ない」

「だろう？　それに、そのあの子供はあんたよりも意志が弱いとも思えない。理由はともあれ、ヤクザの守るダイヤモンドを盗ろうなんて実行できるほどの行動力だ。無計画にやってるわけでもないしな。そういうことだ」

「……………」

言い返せない。あの少年は、普通ではない。そんなことはわかっている。だが……

「だが、あんたの気持はわかる。目的も理解しているし、意志の固さも知っている」

「ああ……………ありがとう」

「礼などいらぬ。俺も好きでやっているだけだ。じゃあな。またなにかわかったら教えてくれ」

足音、ドアの開閉の音。静寂。窓の外の赤色はいつのまにか引き、薄暗くなってきた。どうして夕焼けは短いのだろう？

「悩むなんて、ばかばかしい。俺は、俺のやりたいことをするだけじゃないか」

しかし、それではあの不良少年とやってることは変わらない。それでいい。人の世とは、どんな形でありエゴとエゴの折り合いとぶつかり合いでできているのだから。

第99話 晩ご飯

その日の夕方、氷河は手に入れたばかりのぬいぐるみを抱きしめて自宅の前で仁王立ちしていた。自分の家に入るのにためらう。なんて言って、こんなぬいぐるみを渡したらいいんだろう？ 業火といえど、一緒に百貨店を出るとさっさと帰ってしまった。業火に頼ってばかりなのがいけないのはわかってはいるが、やはり心細い。

「って、何言ってるんだ俺は。さすがにこれは手伝ってもらっちゃだめだろ」

気をとりなおし意を決し、家の中に入った。時間的には、雪野はもう帰っているはずだ。

「ただいま……うん？」

雪野がいる、いつもの光景。でも、いつもと違う気がした。

なんだか、いいにおいがする。

「あ、お帰りなさいお兄様。晩ご飯、作ってみたんですが、食べますか？」

「……え？ 晩ご飯？」

「はい。アルミ様に教えていただいたんです」

「……………アルミに？ なんで？」

「実は……………」

自分で料理をするのなんて、いつ以来だろうか？ 家事は全て唯に任せているから、こういうことをするのはひさしぶりだ。

そんな怠け者のアルミに、唯は文句を言ったことがない。アルミのやりたいようにすればいい。いつもそう言ってくれる。

「俺のやりたいこと、な……」

玄関のドアの開く音が聞こえた。

「お姉ちゃんおかえり。……………今日は、俺が晩ご飯作ってみた」

「え？ ああ、ありがとう」

「うん。帰り遅かったけど、なにかあったの？」

「ちよっと、知り合いにばったり会っちゃって。ごめんね」

「謝ることじゃないけどさ。ほら。食べよ？」

食卓にできあがった料理を並べていく。口に合えばいいのだが。

氷河の首尾を案じつつこれ以上は自分の関わるべきことではないと、業火はさっさと家に帰ることにした。考えが足りないことはあるが、行動力は人一倍ある奴だ。妹とゆっくり話すぐらいのことはしてくれる。そう思いたい。

それにしても、だ。氷河が家の家事一切をやっているというのは知っていた。しかし、今日はそれを実感した。

普段の業火やアルミにとって、氷河は少し頼りがいの無い友達、という程度の認識だ。もちろん友達である以上大切な存在であることに変わりはないのだが、例えば業火にとってのアルミのような関係には絶対にならないでいた。それは仕方の無いことかもしれないが、業火はそのことになにか違和感を感じていた。

ばかばかしい。人によって接し方が違う。全ての人間と同じ関係を築くなんて不可能。そんなことわかりきってるじゃないか。それに、自分が氷河をどう思っているように、氷河をなによりも大切に思っている人間がいる。氷河にとっては、それでいいのだ。

「妹に好かれてる兄貴か。というか、互いに好き合ってるんやろうな」

「え？ お兄ちゃん今何て言ったの？」

「うおっ」

気がつけば家の前。そして同じく帰ったらしい聖火と鉢合わせに

なった。

「ねえお兄ちゃん。今、わたしのこと好きって言った？」

「いや、言っていない」

「えー、でも、さっきひとりごとで」

「氷河と雪野さんのことや。おれらのことじゃない」

「なんだ……でもさ、お兄ちゃん」

「なんや？」

「だったらお兄ちゃんは、わたしのこと嫌いな？　すきじゃないの？」

いきなりなにを言うのか。そんなの、決まっている。

「嫌いなわけないやんか。大事に思ってる」

「ホント？　ありがとう……あ、なんか変な話しちゃったね。帰ろっ」

「おっと……」

聖火に手を引かれ家の中に。これはこれで幸せだ。

「へえ。アルミから教えてもらったんだ」

雪野の作ったクリームシチューは、普段の不器用さからイメージされる味よりはずっとおいしかった。雪野の隠れた才能なのかアルミの教え方がうまかったのか、それとも単に作りやすい料理を選択したからかのいずれかはわからないが、上出来だ。

「……」

雪野が少し心配そうにこちらを見ている。当然だろう。

「大丈夫。すぐく……うまいよ」

「本当ですか……？」

「ああ。もちろん」

「そうですか。よかった……」

それきり、安堵した様子で黙った。氷河も黙々と食べ続けながら、自分の話を切り出すタイミングを見極めようとしていた。

半分ほど食べ終わった。そろそろかと、手を止め一瞬のためらいの後に口を開く。

「なあ……………」

「あの……………」

タイミング悪く、雪野もなんか言おうとしていたらしい。

「あー、そっちから、話してくれ」

「あ、はい……………」

雪野の言ったこと。それは、自分も家事をやってみたいということ。それは、昨日までの氷河にとっては意外でしかなかった言葉だが、今はすんなり受け入れられた。そして、この上なく嬉しいことだった。

アルミの料理の腕は良い。もともとなにをやっても器用にこなすタイプだから、料理に関してもうまくやってくれるのはわかっていた。しかし、少し我が強い。作るものが本人の好みに基づいて、甘いのだ。

「…………あ、そうだ。ねえアルミ」

なぜか砂糖の入っている味噌汁をなんとか飲み干しながら、さきほど抱いた疑問を訊いてみる。

「えっとね。…………さっき言ってた知り合っているのは、実は聖火ちゃんなんだけどね」

アルミ相手に下手に話をごまかしても見抜かれる。だから、おもいきって本当のことを言った。

「うん。どうしたの？」

「話してて気になったんだけどね。あそこの家って、うちと同じな

んじゃないかなって」

「つまり……つまり、どういうこと？」

「親が家にあんまりいないってこと。ねえ、なんか知らない？」

「……………えっと……………」

アルミは少し口を開き、何も言えないまま閉ざした。そのあとも数回口をぱくぱくさせたが、言葉になってない。なにかまずいことを聞いたのだろうか。

「あのね。もし言えないことだったら……………」

「失踪したんだ」

「え？」

「失踪したんだって。業火のお母さん」

アルミは、言葉を選ぶようにゆっくり話はじめた。

「実の父親が、事故で死んだ。それから、母親がひとりで業火と聖火を育てた……………いろいろ辛いこともあったんだと思う。再婚相手が見つかった直後に、いなくなった」

「じゃあ、いまあのふたりを育ててるのは？」

「その再婚相手」

「そうなんだ……………」

「……………」

アルミはうつむいて、それきりなにも言わなくなった。

悪いことを訊いてしまったようだ。よく考えれば、他人の家庭事情なんて探るものじゃない。

「ごめんね。変なこと訊いちゃった」

「別にいい」

そう言いつつも、アルミは唯を直視しようとしなかった。

第99話 晩ご飯（後書き）

いつも読んでくれてありがとうございます、そちらです。

今回はいつもとは雰囲気の違い、日常編のような話をお送りしました。肩の力を抜きつつ、いつもとは違うキャラの一面を垣間見ることができたのならば作者冥利に尽きます。

さて、次回から新章を始めます。アルミくんには少し休んでもらって、“あのふたり”が主役のお話になる予定です。

第100話 屋上にて。いつものように

「ソーラ、大丈夫？ 痛くない？」

目の前の男がそう尋ねてきた。本気で相手を気遣うような優しい口調。もし自分が女だったなら、間違いなく惚れてしまうだろう。それぐらい、優しい笑顔を彼は見せてくれた。

もともとが人の良さそうな雰囲気の人間だ。その笑みは、優しさの中にも力強さを秘めていて、それで、それでいて――

「――それで、どうしてぼくは縛られているんでしょうか？」

「え？」

ソーラは今、小学校の屋上で、転落防止用のフェンスの金網に、ロープで縛られていた。両手を広げて、はりつけの状態。ルツカがその様子を、微笑みながら見つめていた。ソーラを縛ったのは、もちろんこの男。

「なぜって………僕がそうしたいから。なにか問題ある？」

「大あります！」

ソーラは束縛から逃れようと暴れたが、がちちゃんがちゃんとフェンスが音をたてただけだった。

「こら。そんなことしたら、誰かが来ちゃうかもよ？」

「誰か助けてー！」

がちちゃんがちゃん。その手があったかと暴れてみた。

表情は変わらず笑ったままだが、ルツカはやれやれといった様子でずいっとソーラに顔を近付けた。

「だめだよ……ほんとに誰か来たら、君も困るんだよ？」

そして、てのひらでソーラの口を塞いだ。途端に何も喋れなくなる。

「ねえソーラ。少しはじっとしてて、ね？」

「むー！」

がちちゃんがちゃん。そんなこと言われたってこの状況でじつとな

んかしていられるか。なんとなく無駄な抵抗だとは思っていても、
暴れるだけ暴れて……………

「言うこと聞いてくれないようじゃ、怒るよ?」

ルツカの声色がかすかに変わった。表情はなんの変化もなくいつものさわやかな笑顔だが、これはまずい。

「そういう子には、おしおきが必要かな?」

「!?!」

ルツカがソーラにずいっと顔を近づけた。吐息すら相手の顔にかかるほどの至近距離。ルツカの整った顔立ちにちよつとドキドキするが、今はそんなこと思ってる場合じゃなくて。

「ねえソーラ、どうして君はそんなにかわいいのかな?」

ルツカが舌を少し出し、自分のくちびるをなめた。口を塞いでいた手を離し、その手で頬をなでる。まずい。なんか本格的にまずい。

「ね……ねえルツカ。とりあえず落ち着いて、ね?」

「僕はいつつだって落ち着いているさ……君にとっては、それが不幸なんだろうけど」

まったくもってその通り。

「落ち着いて、いつも冷静で、こんなことしてるんですか? そんなの正気の……うひゃあっ!」

狂気の沙汰じゃない、そう言いかけて言えなかった。首筋をなめられて悲鳴をあげてしまった。

「ちよっ! ルツカなにするんですか!?!」

「キスしていい?」

「はい!?!」

いきなりなにを言い出すのだこの人は。

「今、はいって言った?」

「言ってますん!」

「そっか。残念だな」

そう言いつつ、ことをやめる仕草はまったくない。それどころか、ゆっくり顔が近づいてくる。なんというか、もうだめだ。自分の貞

節とかこの男の人間性とか、もういろいろ終ってる。

観念してぎゅっと目をつむる。少しして、くちびるになにかが当たった。でも、それはルツカのくちびるではなさそう。形がなんか違う。

おそろおそろ目を開ける。ルツカが笑っているのは変わらない。

ソーラの口に、人差し指をたてて当てている。

「ねえ、ちょっとドキドキした？」

「してません！」

この人の相手は、これだから疲れるんだ。

「で、どうしたの？」

両手を縛っていたロープをほどかれ、座ってルツカと向かい合う。そうだった。話したいことがあるんだ。だから、昨日その旨をメールで話して、放課後にここで待っていたらいつのまにか背後に忍びこまれていたのだ。

「なんでいきなり、縛りつけたりするんですか？」

「かわいい子がいたら、虐げたくなるのが人情じゃないか」

「人情ってなんですか！ ただのサディストなだけでしょう？」

「ただのサディストじゃない。清く正しいサディストだから」

「意味がわからないです」

「そっか。で、本題に入ろうか？」

「あ、はい……………」

パソコンの画面をみつめ、矢崎はカタカタとキーボードをたたく。ディスプレイに映る数字をいくつか見つめ、ため息をつく。お金がない。

先のダイヤモンド強奪作戦では、サブマシンガンひとつと拳銃数

個をなくしてしまった。バカスカ撃っていた弾もタダではない。しかも作戦は失敗。なんてわかりやすい赤字だろう。もともとは大量の資金を得るための作戦だったのだが、このザマだ。

矢崎はこの組織の副リーダーである。若者の多い組織の中では比較的年配であり、また有能であったために組織の長から請われ、この役に就いた。同時に、会計の役割も行っている。

やるべきことは順調にやっているし、長や部下からの信頼も厚い。しかし、組織の運営は一筋縄ではいかない。今も、資金運営に困っている。弾を使いすぎて支出が多い、というよりは入ってくる金が少なすぎるのだ。いまのところ、組織に入る金は全て構成員が出し合っている。構成員はほとんどが若者で、学生で収入の無い者も多い。

だから、財政事情は常に厳しい。一般の武装集団の台所事情なんて知らないが、他はどうなのかは少し気になる。この組織は主義の実現のために存在しているが、金儲けそれ自体が目的の組織もあるだろう。そういう所はどうやって稼いでいる？

「……………考えるまでもない、か」

知れたこと。社会の裏でコソコソ隠れて金儲け。密輸やら殺人代行やら。フィクションの中でしか見られないようなことが現実でおこっているのだ。いつも銃器を買っている連中もそのようなものだ。この組織の長はそういうのが嫌いらしいが、目的達成のためには仕方がない。だから利用する。そういうスタンスらしい。

とにかく、今も資金繰りは大変だ。なんとかしなければならぬが、その方法はない。

「……………そういえば……………」

組織の構成員にひとり、多額の資金を提供してくれるのがいた。ほかの人間の額に比べればかなり多いはずだ。なぜなのか、個人のことにあまり立ち入りたくはないが、興味はあった。今度話を聞いてみようか。

「それで、今回相談したいことなのですが……」

そう切り出すと、ルツカの表情が少し真剣になった。本当にわずかな変化ではあるが。

「この学校の保健の先生の結婚を、邪魔してほしいんです」

そういうと、今度は目に見えて不思議そうな顔をした。まあ、こんな頼みなら無理もないか。

第101話 おめでたい話

「つまり、ですね」

向かい合って、不思議そうな表情のルツカにどう話すべきかを少し考える。まあ、ありのままを言うのが一番なんだろう。

「この学校の保健の先生は、若いお姉さんなんです。それで、すごい美人。……ちょっとおっちょこちょいなところもありますが、それも魅力的なんです」

「なるほど。それで子供たちに大人気、と。ありがちな話だね」
マセガキ共め、と小声で付け足した。

「……まあ、そういうことです。……二年前に赴任してきたので、ルツカは知らないはずですが」

「そうだね。僕の卒業した頃は、保健医はおばさんだったね。本人に言ったら怒られたけど……で、その若くて美人で露出が多いエロい先生が結婚するって？」

「そこまでは言ってないですよ。だいたい合ってますけど。……そんな先生ですから、生徒以外からの人気もありました。つまり、教師とか、という意味ですが……なんか、いい歳した男の先生と用務員のおじさんがずいぶん熱っぽく語りあっていたのを見たことがあります。むき出しの足がたまらんとか、そんなことを。似たような光景は割とよく見かけます。そんな状況で、この先生が結婚するという話が出現しました。まあ、出所は先生自身なんですけどね。本人が、今度結婚するのって自慢げに話すものですから、この話は一瞬で学校中に広まりました」

「みんな驚いただろうね。あるいは、ショックを受けた」

「ええ。表向きは、祝福ムードですが。やはり落胆してる人は多いです」

「だろうね。……それで、その結婚を邪魔してほしいって？」
「はい」

「……………やっぱりわからない。君はなにがしたいんだい？」

こういう、わけのわからない話をしたことは初めてじゃない。でも、ルツカはちゃんと話を聞いてくれる。なんだかんだ言って良い人なのだ。

「今も言った通り、学校中にこの話が広まって、みんな落胆しています。生徒教師問わず、です。子供だけなら……まあい、いいんです。先生達もそうだったのが問題なんです」

「つまり？」

「全体の士気が下がり、学校の機能が低下する恐れがあります」
「……………」

ルツカは少し困って、何を言うべきか迷う様子を見せてから、
「たぶん、それはないんじゃないかな……？」

ソーラの意見を否定した。

「あのね、大人ってのは意外にしっかりしてるものなんだよ？ 冷静だし頭も切れる。たまに、おかしな人もいるけどね。でも、たいていはまともなものだ。保健教師ひとりいなくなったぐらいで、どうかなったりはしないものだよ」

「そうでしょうか？」

そう疑問の言葉を言ったものの、ルツカの言うことに同意する面もなくはない。ルツカも、そんな気持ちにはわかつているのだろう。

「でも、もっと言いたいことがあるんだろうね。聞こうか」

「はい……………先生が結婚した相手なんですが、それがちょっと不自然で」

「というと？ その美人なお姉さんをゲットした幸運な男だね？ 不自然って？」

「なんというか、釣り合わないんです。その先生と、結婚した男が」
「なるほど、釣り合わない。つまり、学校中で評判になるほどのレベルの高い女性と結婚できるわけだ。普通はどんな美丈夫かと思うだろう。そしてその正体は？」

「冴えない中年男です。仕事は、花屋さんの店長」

「花屋って、大きな店？」

「いいえ……ルツカの考えているような、お金目的じゃないと思います。小さな、個人経営の花屋ですから……生活ができる程度の利益は出ているらしいですが、そんなに儲かっているとは思えません」

「なるほど、だから変だ、と。僕は考えすぎだと思うけどな」

「……………」

無言で続きを促すと、ルツカは少しためらってから話し始めた。

「誰が誰を好きになるか、なぜ好きになるか、そういうのってどうやっても当人達には決められないことなんだよ。そりゃ、好きになる理由がはつきりすることもあるだろうさ。君の言うようにお金目的で、というか、お金そのものと結婚することを選ぶ人もいるだろう。でも、それは恋じゃない。恋ってのはもっと感情的で説明できないものだ。君の言うようにそのふたりは釣り合っていないのかもしれない。でも、本人達にとっては真剣な事なんだと思う。それを邪魔するのは、ちょっとひどいんじゃないかな？」

「……………はい」

ルツカの言う通り。他人の恋路に口を出すもんじゃない。そんなことはわかってる。でも……………、

「でも、君の気持もわかった」

「え…………？」

目の前にルツカの笑み。ことこの人に関しては、この表情は信頼できない。裏でなにを考えているかわからないし、考えていることはたいていよからぬことだ。

「うん。じゃあ、邪魔してみようか、その結婚」

この人はなにを言ってるんだろう？ 今さっき、結婚を妨害するのをだめだって言ってたんじゃないかった？ 掌を返すってこういうこと？

「僕はいつだって酷い人間だよ？ 人の幸せを見ていら、壊したくなるものじゃないか」

「酷い人間だなんてそれを自分で言わないでください！」

さすがは自称清く正しいサディスト。生き方が最悪だ。

「あのねルツカ、別にぼくはもう……………」

「その花屋さんのある場所、教えてくれないかな？」

「そうじゃなくて……………」

「それとも、もう一回縛られたい？」

「……………はい。教えます」

ルツカに逆らっちゃいけない。絶対にいけないのだ。なんとかして途中で止めるしかないのだろう。なんだか、当初の目的と真逆のことをしている。

前言撤回。ルツカは良い人なんかじゃない。

その日はこれで別れ、ルツカはソーラに教えてもらった場所へ向かう。まずは情報収集をする。作戦やらなにやらを考えるのはこれからだ。

それにしても、とルツカは思う。ソーラの考えはときどきわからない。保健医の結婚を邪魔してなにが変わるというのだ。彼はつまらない考えに捕らわれるきらいがあるようだ。考えすぎて、しかも考え方が幼いのか。

それとも……………あこがれの女性の結婚の話を聞いてショックを受けたのはソーラも同じかもしれない。それで邪魔をしたいと思ったのだとしたら、かわいいじゃないか。

しかし、それでもいい。さっきの話にソーラは納得していなかった。だったら、望みを叶えてあげよう。それでこっちも退屈が紛れる。理想的な話だ。歩きながら、自然と笑みが生まれてきた。本当にいい友達を持ったな……………

第102話 作戦内容

翌日、ふたりは再び小学校の屋上で会うこととなった。今度はルツカからの誘い。ルツカはなにやら大きな紙袋を持参してきた。中身はなんだろう？

「君の言っていた花屋さん、見てきた」

「そうですか……どうでしたか？　ぼくの言う通りの店だったでしょう？」

「そうだね。さびれていなければ、決して繁盛もしていない。そんな感じの店だった。何人か店員がいたけど、件の店長は一番年上の、メガネをかけた丸顔のおじさんだね？」

「ええ。人の良さそうな顔でしょう？」

「だね。イケメンではないけど……いい人そうだった。他人の心も結婚にまつわる心理もわからないけど、ハンサムでなくてしかもお金持ちでない男を相手に、結婚ってしたいもののかな？　メリツトが、性格が優しいってだけで。……ソーラはどう思う？」

「……一応、訊いておきます。ぼくに意見を求めたのは、ぼくが女の子みたいだから……」

「単に、君の意見が聞きたかったただけだけど？」

「っ~~~~~！」

わかっていたのにのせられた。ルツカの表情はいつも通りだが、性格を考えると絶対にしてやったとか思ってる。

いや、そんなことより本題だ。

「ぼくは……それはない、そう思ったからルツカとこんな話してるんです。……ちよつと考えすぎかなとも思うんですけどね」

「ちなみに、いろんな女の子から何度も告白されてきた男の意見は、聞きたい？」

「……お願いします」

これは自慢なんかじゃない。ルツカはもてるが、それを本人は快

く思っていない。

「そうだね……僕の印象だと、性格はまず重視されない——顔が良くて能力が高ければ、中学生の場合は運動がよくできるとかな。そういう要素があれば、すぐに人気が出る」

「それはいつものルツカを見てるとよくわかることですが……でも本当ですか？」

「え？」

「たまに思っんです。ルツカって日常では猫を被ってるんじゃないかって。それも、無意識に……」

特技はお裁縫。好きなものはドラゴンと昔読んでいた絵本の主人公。膝枕はするのもされるのも好きらしい。火の通っていない肉が好物。性格は、少しではくかなり意地悪。

友達としての付き合いは長く、ルツカのことは他の誰よりもよく知っている自信がある。でも、いまだわからないことは多い。それは、笑顔に見せかけた無表情の裏で何を考えているかとか、そういうことではない。

ルツカがなぜ付き合ってくれているのか、そもそもそれがわからないのだ。

ルツカは友達が少ない。もちろん、その性格が原因だ。しかし本当にそうなんだろうか？ ルツカがそう言っているだけで、本当の彼の学校生活を、ソーラは知らない。知る必要はないのかも知れないが、どうしても腑に落ちない。友達が少ないのならば、なぜソーラとはうまく付き合っているのだろうか。

なぜ友達が少ないのか。ルツカが付き合う人間を選ぶからだ。ル

ツカが常時サディストな人格を隠そうともしていないなら、友達になりたいと思う人間は稀だろう。異性にも人気があって、告白されたことは数えきれないぐらいあるらしいが、それも全て蹴ってきた。一度、その理由を訊いてみたことがある。タイプではないかららしい。じゃあ、ルツカのタイプって？ 答えはあまりにも予想通りで、しかも自分勝手。いわく、ルツカに心から服従する人。なんでも命令を聞いてくれる人。もちろん、そんな奇特な人間にはいままで一度もお目にかかったことはなく、よって恋人ができるなんてありえない。

あるいは、同性の友達にもそういう人間を求めているのかもしれない。だから、友達が少ないのか。ところが不思議な事に、休み時間に他愛もない会話をする、そんな関係の人間はクラスにいるらしい。この前、変装してルツカの学校に潜入した時に話しかけた男子生徒もルツカの『友達』だったみたいだ。真面目そうだが、誰かにへつらうような種類の人間ではない。そのひとが、ちゃんとルツカを呼んでくれた。どんな関係なのか後でルツカに聞いてみたところ、たまに冗談話しをする程度だという。

正直、自分意外にルツカにそういう人がいること自体が驚きだった。勝手に抱いていたイメージだが、ルツカは休み時間ともなると誰とも話さず関わらず、ひとり黙々と勉強かなにかをしているものだと思っていた。クラスメイトなんてつまらない人間の集合で、そんなものと付き合うなんて退屈を助長させるだけ。ルツカは以前そう言っていたことがある。ソーラは、一緒にいて退屈を感じさせないから友達でいると、そうも言っていた。だったら、クラスに友達がいるのはなぜ？ 自分に絶対服従してくれず、退屈なだけの人間に？

もしかしたら、ルツカは学校では自分の性格を多少なりとも隠しているのかもしれない。そう思った。無意識にでもそうすることで、自分の嫌な面を他人に見せない。

そう言えば、以前もこんなことを思った。ルツカは、表に出さないだけで何かしらの寂しさを抱えているんじゃないかと。相反するふたつの欲望——サディズムと、だれかと関わり合いたい、仲良くしたい気持ち——それらの葛藤の末の妥協点が、退屈を紛らわすとか無意識に嗜虐心を隠すことに繋がってるんじゃないか……………

「君がなにを考えてるかは知らないけどね」

ルツカが、ソーラの言いかけた言葉を遮った。

「ソーラ、君はなにか、考えを自分からややこしくしてるんじゃないかな？　僕は学校でも僕で、人から嫌われてるよ。自分からそうしてるんだから、不満はない……そんなことより、今はお花屋さんの話をしようよ」

「あ、はい」

正直、昨日ほどのやる気はほかならぬルツカによって削がれて消えたのだが、やはり当初の目的を果たしたい気持ちはあった。今はとりあえず、ルツカの話聞こうか。

「まだあの花屋について良く知らない。ソーラは？」

「そうですね……………ぼくも、昨日言った以上のことは知らないんです。どうしましょうか？」

「情報収集をしたい。昨日店の様子をざっと見渡したんだけど、アルバイト募集の張り紙があった。しかも、高校生可」

「なるほど……………ルツカが高校生のフリしてバイトとして潜入。情報を集めるってわけですね」

「え？　違うよ？」

「はい？」

「高校生に変装するのは、ソーラ、君だ」

そしてルツカは自分の持参した紙袋をちらりと見つめた。

正直、嫌な予感しかしなかったが、ルツカの指示に従わざるをえないのもわかっていた。これが諦念というやつか。

第103話 いつものこと

「あの、ルツカ。訊く前にひとつ訊きますが………訊くだけ無駄ですか？」

「うん。無駄だろうね」

そう言って、ルツカは紙袋の中に手を入れた。出てきたものは、きちんとたたまれた見慣れないデザインの服。でも、それがどこかの中学校だか高校だかかの女子制服だというのはわかった。話の流れからして、例の花屋の近くにある高校のだろう。

たぶん、ルツカが昨日徹夜で作ったんだろう。マメな人だ。

「で、ぼくがこれを着て花屋さんでバイトをしろ、って？」

「そういうこと」

「嫌です！」

すかさず否定。たぶん無意味だけど。

「どうして？ 似合うと思うけど」

「似合ったら嫌なんです！ ……それに、ぼく小学生ですよ？ さすがにこれを着て高校生って言うのは無理があると思いますよ」

「大丈夫。それくらい成長の遅い高校生っているよ？ それに、こういうロリな子をことさら好むような人もいるだろうし」

「なんですかそれ！？ ていうか、なんでルツカがやらないんですか？」

「それはもちろん、ソーラに女装させたいから！」

「さらっと本音を言うなーっ！」

満面の笑みでそんなことを言うルツカに思わず大声で突っ込んだ。ああもう。この人の行動原理はいつもこれだ！

「あ、別にそれだけが理由なわけじゃないよ」

ソーラの声に怖気づいた様子はないが、付け足すように口を開いた。なにかの配慮のつもりか。

「やっぱり花屋で働くのは男なんかじゃなくて、君みたいなかawaii

い女の子がやるのが絵になると思うんだ」

「ぼくは男だーっ！」

だめだこいつなんとかしないと。というか、結局全部ルツカの趣味じゃないか。

「じゃあルツカがやっても全然問題ないじゃないですか！」

「まあ、そうだね」

「じゃあやってくださいよ……ぼくは、女装なんてしませんから」

「そっか……ねえソーラ」

不意に、ルツカがソーラににじり寄った。こちらが後ずさる前に腕をつかまれた。

「な……なんですか？」

「昨日の続き、やる？」

腕を持っていない方の手で、ソーラの頬をなでる。

「ひゃあっ！ ……る、ルツカ？ ちょっとやめて……うわあ！」

首筋に温かく湿った感触。ルツカがなめたのか。腕をつかんでいた手はいつの間にか離され、いまそれはソーラの脇腹をはいずりまわっている。服の上を這う手は、次第に下がっていき、ズボンに触れた。それが布と肌の間に入り込もうとして……

「ソーラ。女装してくれる？」

そこで手を止めて訊いてきた。

「や、やります！ やるからやめてください！」

その言葉を聞くや、ルツカはすみやかに離れた。

「ありがとう。その言葉を聞けて、嬉しいよ」

「……………」

「じゃあ、さっそく着替えて」

「……………え？」

わかってる。わかってるんだ。ルツカがこんなこと言うなんて、わかりきったことじゃないか。

当のルツカといえば、いつもの通りの笑顔でこちらを見つめている。

「これ絶対、ぼくが脱ぐこと期待してますよね？」

「もちろん」

「うう………わかりました。着替えますよう………」

最初からこれが目的だったんだ。そんなことわかってたのに、まんまとはまってしまった。

「うう……おしりがスースーする……」

やたらと短いスカートの丈を押さえて言う。控えめの抗議のつもりだがもちろんルツカはまったく気にしない。

「うん。すごく似合ってる。違和感ないよ」

「そんなこと言われても嬉しくないです」

「でも、これで花屋さんに潜入できるね」

「それはそうですが………でも、潜入してもどうかなるでしょうか？」

こんな格好させられることもそれなりに大ごとだが、当初の目的を忘れてはいけない。

「ねえルツカ、これって情報収集が目的なんですよ？ でも、店長さんってもと普通の人なんですよ？ たぶん、まともな情報以外得られないでしょうし………こんなことしても無意味な気がします。………ルツカのやりたいことができるってこと以外の話ですけど」

一応、重要な事を付け加えておく。

「うーん……じゃあ、何もなかったら奥の手を使おう」

「奥の手？」

「そう。奥の手。具体的には、店長さんがバイトの女の子に手を出させて例の保健の先生との関係にひびを入れる。その女の子ってのが、見た目が小学生みたいな高校生だったら目も当てられない。店長さんロリコン疑惑か」

「いやですよそんなの……」

すごく楽しそうに言ってるが、その女の子がソーラだったのは疑いようがない。つまり、いざとなればソーラが店長を誘惑しなければならぬわけで、

「さすがにそれはまずいですよ。というかたぶん店長さんロリコンじゃないでしょうし、手を出されたらさすがに男ってばれるでしょうし。そもそもそんなことする人じゃないですよ。……みんながみんな、ルツカみたいな変態じゃないんですよ?」

「うん。じゃあ別の案も考えるよ。じゃあ、そっちはそっちでバイトはじめてもらおうか」

絶対に考える気がないな。

「ああ。そうだ。バイトの応募に履歴書とかはいらないみたいだけど。ほら、がんばって作ってきた」

ルツカがポケットからなにか取り出し投げ渡してきた。

「その制服の高校の学生証。必要な事は全部書いてある……ただひとつ、写真が用意できなかった」

「写真?」

渡された学生証を見る。どうやって作ったのか、表紙には「魚田曾良」という氏名と実際よりも丸四年早い生年月日、それと実際の住所などの情報が書かれていた。しかしそれだけでは足りない。表紙の半分が、白紙の状態。

「そこに写真を貼らなきゃいけない。普通の写真じゃなくて、証明写真ってやつをね。それを今から撮りに行く。無人の撮影機があるはずなんだけど、どこにあるかな?」

「駅のまわりの大きめの施設なら、どこにでもあると思いますよ?」

「よし、行こう」

「はい。……って、この格好で?」

「うん。だって制服で写真撮らなきゃ意味ないでしょ?」

「そうですね……わわっ! わかりました行きますから腕引張らないでください!」

写真を撮るとか言いながら、ルツカはソーラをいろんな場所に連れまわした。それも、特に人の多い場所を選んで。多種多様な人間が入り乱れ、しかし互いに交わろうとはしない街の雑踏の中、その“成長の少し遅れ気味な女子高生”は、すれ違うひとをことごとく振り返らせた。そのたびに恥ずかしそうに身を縮めるソーラを、ルツカは愛おしげに見つめていた。

いじめて楽しい。そんな感情ではなく、本当に好きなものを見る目つきだった。

第104話 接触

その翌日、さっそく制服を着て偽の生徒手帳を携えて店長に接触した。来店し、アルバイト募集の件に触れると、店長は快く対応してくれた。店の奥の事務室のような場所に連れられて、そこで話をした。提示した偽の生徒手帳を疑いもせず信じたのは、単に出来が良かったからかそれともこんな子供が身分詐称するなんて夢にも思っていないのか。

実際に話しても、店長は良い人だった。見るからに人の良さそうな風貌は、ルツカがいつもまとっているような偽りの優しさではない。その人の本性がそのままにじみ出ている。顔は決してカッコよくないが、悪い印象は絶対に与えない。話をしても、それは変わらない。学生相手に横暴な態度になったりせず、柔らかな物腰で接した。

話はとんとん拍子に進んだ。ソーラの真面目そうな雰囲気は気に入ったのだろうか。おおまかな、仕事ができる曜日と時間を伝えると、向こうはマニュアルを渡してきた。次に来るまでに読んでおくように、と。制服代わりであるエプロンは次に来たときに渡す。その他のいろいろな説明を受けて、連絡先を交換してその日はお開きになった。その過程で、なんの問題も起きなかった。

ソーラにさせる方法は情報収集としては良い方法だし、ルツカが個人的に抱く身勝手な欲求を満たすこともできた。しかしそれだけではいけない。ソーラが羞恥に耐えて自分の役目を果たそうとしてるのだ。こちらまでできることをやらないと。

今ルツカは、小学校の屋上でひとり寝ころんでいた。なんとなく来たが、ソーラがここにいるはずがない。退屈だ。しかしソーラがいる場所に行くわけにもいくまい。

黙って空を見る。雲ひとつない青空。気温に対して屋上の冷たさは心地よいが、積乱雲が現れる季節にはまだ早い。

そんなことをしていてもなんにもならない。今、なにができるだろうか？ 立ちあがって辺りを見回す。落下防止の金網のひとつに目がいった。端が少しほどこけていて、とがった針金の先がこちらを向いていた。ちょうどいいと、ルツカはためらいもせずそこに自らの拳を振り下ろした。

事務室から出て、店の中を通り抜けて外に出る。その時まで、店長は送ってくれた。店の様子を見回してみる。一般的な花屋の風景なんてあまり知らないが、この店の雰囲気はいいと思った。商品たる花や苗の一本一本がそれぞれに美しく、丁寧に育てられているのがわかる。その配置にも相当気を使っているようだ。

「なんというか、陳腐な言葉しか言えませんが」

「はい？」

「きれいですね。……店長さんが、花のことを好きなんだってよくわかります」

「そうですか。そう言ってもらえるなら、この仕事をしている甲斐があるというものです。……来たお客さんに目で楽しんでもらおうと、そう思っていますので」

「はい。いいことですね……」

そう。いいことだ。そして店長もいい人だ。結婚を近くに控えて幸せの絶頂期でもあるのだろう。そんな人の幸せを、今なんとかし踏みにじろうとしているのだ。

急に胸が痛んだ。自分でいいだしたことではあるけれど、罪の意識を感じた。できることなら、今すぐにこの店長に謝りたい。全てを懺悔し、これでおしまい。そうしたい。

でもできなかった。目の前の善人に、あなたをだますつもりでした。なんて言う度胸が、どうしても起こらなかった。こういうときだけ、ルツカの性格がうらやましくなる。彼ならこういう時、なんのためらいもなく自分の欲望のままの行動をするだろう。

色とりどりの花々が、眩しく思えて直視できなくなった。

わかっててやったことだが、思ったより出血がひどい。ハンカチで傷口を押さえながら廊下を歩く。途中で知っている先生にばったり会ってしまったから、適当に話してあしらっておいた。元はこの学校の生徒だったんだから、たまに遊びに来るのは自然なことはずだ。さすがに、実は結構な頻度で来ているのは言えないが。

まんまるメガネをかけて“竜崎さん”になることも考えたが、あまり意味がないと思いやめた。

久々に歩き回る校舎は、ルツカが在籍していた頃とあまり変わらなかった。当然だが、保健室の場所も変わっていない。変わったのは先生だけか。それに対して大した感慨も湧かないが、ソーラのためならば行動は惜しむまい。学校中の男を腰ぬけにした女とはどんなものか、若干の緊張は感じながら保健室の扉を開く。

「失礼します」

中に入ると、保健室特有のにおいが鼻をついた。思えば、体が丈夫だからか保健室なんて滅多に行くことなんてない。次いで、女性がひとり椅子に座って机に向かっているのが目に入った。なるほど、白衣と短いタイトスカートからのびる足は確かにエロい。

彼女がこちらを向いて少し不思議そうな顔をした。

「えっと？ 生徒、じゃないよね？」

「はい。卒業生なんですけど怪我しちゃって……診てもらえますか？」

そう言って保健医が頷くのを見つつもう一脚あった椅子に腰かける。

「怪我したのは……うわーこれはひどいな。なにがあったの？」

「金網で切ってしまっただけ」

「ふんふん」

血を流す右の手の甲を差し出すと、保健医は驚き、治療の準備を始めた。アルコール漬けの小さな綿が入った瓶にピンセットを入れ、「うわっと！」

手が滑ったのか取り出し損ねたのか、瓶を倒してしまった。綿が机の上に盛大にぶちまけられる。

「えっと………？」

綿はころころと転がってふたりの膝や床に落ちていく。ルツカは茫然としているが、保健医はまたやってしまったというような表情をしている。

「あー、ごめんね。気にしないで。そのまま……」

無事な綿で血を拭き取り、消毒。少ししみるが大したことはない。そのまま傷口にガーゼを張り付けておしまい。

「できた。どう？ 痛い？」

「痛いのはそりゃ痛いですが……でも、ありがとうございます」

礼を言って立ち上がる。なんとなくこの人のひととなりはわかった。今日のところはこれで十分だろう。

「あ、ちよつと待って」

「？」

立ち上がろうとして呼びとめられた。

「はい、なんででしょうか？」

「もし暇だったらちよつと話し相手付き合ってくれないかな？ こ

の仕事ってさ、放課後は暇で暇で」

「……まあ、いいですけど……」

この展開は予想していなかった。もちろん、良いか悪いかといえ
ば良いことなのだが。

第105話 正しくは「養護教諭」

一旦腰を浮かせたルツカは、保健医の言葉でまた椅子に座りなおした。

「暇、ですか。放課後は生徒がいなくなるからですか？」

「そう。昼間は、すごく忙しいんだけど……と言っても、大抵が授業サボりただけの仮病と軽傷なんだけどね」

落ちた綿を拾い、使用済みの瓶に入れながらそう説明する。なるほどそういうこともあるだろう。おそらくサボり目的以外にも、美人の先生に会いたいから来てるという輩も相当数いるのだろうが、そのことを本人は認識しているのだろうか？

「そんなわけだから、放課後には人が全く来なくなる。みんな帰って、ゲームで遊びたいから。グラウンドでサッカーなり野球なりやりたいから。……塾に行かなきゃいけない子も多い。たまに先生が来るけど、そんなこ

減多にないかな」

「なるほど」

その先生達も、おそらくは美人の保健医目的なのだろう。もっとも、立场上あんまり大きなことはできないのだろう。

「先生が来るって、やっぱり怪我したりするんですか？」

「ううん。体調不良が多い。あんまりひどいのはないけど、身体がだるいとか熱があるかもとか」

「そういうのって、普通は病院に行くものじゃないんですか？ わざわざ保健室に行くものですか？」

「向こうも仕事があるからねー。保健室で済むならそうしたいんじゃない？」

「それもそうですね……でも、それだけでしょいか？」

このままではあんまり話が進まない。さて、どこまで手の内を明かしていいものか。さっきの言葉に不思議そうな顔をした先生に、

少し思案。

「この学校の友達から噂を聞いてます。保健の先生がすごい美人で、評判だって」

笑顔で、できるだけそっけなくならないように言った。かといって下心があるように見えるのはまずいから、その調節に気を使う。果たして上手くいったようで、保健医は少し照れた様子を見せた。

「そう？ それってあたしのことだよね？」

いや、なかなかまんざらでもないようだ。

「ええ。そうです。……ああそうだ。今度結婚するらしいですね。おめでとうございます」

「え、あー、そうね。ありがとう」

一瞬、妙な間があった。普通なら素直に喜んだりするものじゃないだろうか？ それなのに彼女は、ちょっと困ったような顔をして、「まあ、あれだね、実のところ、あんまり結婚したくない、ていうか……」

「？ それは……どういうことでしょうか？ できれば詳しい話が聞きたいです」

なんとか話が繋がった。初対面の女性に私情をあれこれ聞くのは人としてどうかとも思えるが、この機械は逃せない。

「うーんと、やっぱ気になる？」

挑むような目つきでこちらを見、言った。

さきほどから思うことではあるのだが、この人の態度がなんとなく気に食わない。仮にも先生と生徒の関係であるから当然なのだろうが、どこか向こうの方が立場が上の状態。そして向こうはそれを当然のようなことと受け止めている。

そういえば、以前中学校の教育実習生にも同じ態度で迫られたことがあった。なんだったか。そうだ。放課後に職員室に来てほしい。だ。そんな言葉をかけられた。思えばあの女も、胸やらのラインやらを強調した服を着て、男子生徒からずいぶん好評だった。もち

ろんルツカはそんなことに興味を持たず、誘いは無視して実習期間が終わるまでできるだけ顔を合わせないようにした。自分ではこれで構わないと思う。なんてもったいないことをしたと、クラスメイトから怒られはしたが、そんなことはどうだっていい。

そして今、同じ雰囲気はこの保健医から感じている。人として似た部類ということか。あんまり好きな類ではない。今はそんな感情よりも優先すべきことがあるのだが。

「ええ。気になります。すごく」

個人的な感情は押し殺し、偽りの笑顔で答える。あの教育実習生が好んだような、幼く純粋で扱いやすい人間を演じることにした。

「そうだよー」

美人の保健医は満足げにうなずき、立ち上がった。そのまま保健室の中を歩き回り、語り始める。

「今度の結婚はね、あたし自身はあんまり乗り気じゃなくて……」

「と、いいますと？ 結婚と相手は親が決めたことで、先生の意志はまったく無視されている、とか？」

「ううん。相手は親が決めたんじゃないくて、あたしの知り合い。……よく行くお店の店長」

「お店ですか？」

「そう。花屋さん」

「お花屋さんですか……もしかして、ガーデニングとかに興味があるとか？ ……なんか、イメージぴったりで」

そんな心にもないことを言う。花が似合うのは、もっと清楚な人間だと思ふ。身近な例ではソーラしか浮かばないが。

「うーん。ま、そんなとこかな。で、通ってるうちに店長と親しくなって、それで向こうから好意を持たれて、根負けしてお付き合いすることになったの」

「なるほど。それで、付き合いが結婚にまで話が進んで」

「そ。あたしとしてははなはだ不本意な事なんだけどね。でもあた

しの親も乗り気でさ。早く結婚しなさいってうるさくて。これは滅多にないチャンスだって大喜び」

「でもあなたはそれを望まない？　それは……結婚自体が嫌なんですか？　それとも、相手の男性が気に入らない？」

「男の方。あいつ、優しいんだけどいまいち魅力感じないの。かっこよくないし、ちょっとどんくさい。仕事も、あんまり儲かってない自営業だからなんか心配なのよね。はっきり言って、あたしの仕事の方が安定してるじゃん？」

「ええ。だから、そんな男とは一緒になりたくない」

「そういうこと。でも周りはみんな結婚しろって言うし。どうしたものかなー」

事情はだいたいわかった。知っていることをもう一度聞くのも面倒なことだったが、おかげでこの保健医のことを知ることはできた。「そうですか……なかなか大変なんですね。その男と別れることも難しいんですか？」

「そうだねー。別れた時のまわりの反応が怖い。タイプじゃない男と付き合うのがこんなに疲れるなんて思わなかった。………ところで、さ」

保健医はおもむろにルツカに近づき、その姿をじろじろと見た。

「つかぬことを聞くけど、君、女の子にモテたりする？」

「え？　ええ。まあ、それなりには」

「やっぱり。かっこいいし、礼儀をわきまえてる。人としてできてるんだね。彼女いる？」

「……いいえ」

「そっかーもったいないな……ねえ、お姉さんと遊んでみない？」

「……………はい？」

なんだか、おかしいな方向に話が進んでいる。どうしたものか………。

第106話 第一印象とその後の目標

思えば、似たタイプの女性と同じ接し方をしたのだ。その女性はルツカに好意を持った。だったらこの場合は？

「ねえ、どうかな？」

顔に顔を近づけ、悩ましげな眼で問いかけてくる。

「えーっと、あ、はい。お願いします」

素で間拔けな返事をしてしまった。

「ふふ。ありがとう。あなた、名前は？」

「りゅ……………柳瀬です。柳瀬ルツカ」

咄嗟に偽名を名乗ろうとしたが、今はここの卒業生という身分だ。本名を言った。

「そう。ルツカくん。あたしは……………はい。あとでここに連絡してね」制服のポケットに彼女が触れた。見ると、名刺が一枚。

「……………はい。わかりました」

「うん。よろしい」

ようやく彼女はルツカから体をはなした。なにか未知の感覚に襲われたルツカは、呆けそうな心をなんとか保つことができた。

「……………えと、では、僕はこれで」

今度こそ立ち上がる。向こうも引き留めようとはしなかった。

その後すぐに、ルツカは屋上に戻った。金網にもたれかかり、もらった名刺を眺めながらさっきのことを思い返す。

ああいう女性は嫌いだ。でも、さっきはなぜかドキドキした。なぜだかはわからないが……………

「ルツカ、いたんですか」

「？」

声に振り返ればそこには親しい姿。セーラー服を着こなした男の子。

「もしかしているかなとは思ったんですけど。……ずっと待っててくれたんですか？」

「……うん」

「そうですか。退屈だったでしょう？」

「そうでもなかった」

「そうですか？」

ソーラが並んで、同じように金網にもたれかかりこちらを見つめてきた。不思議そうな表情。なにか疑ってる。いや、見つめているのはルツカではなく、手に持った名刺のようだ。

隠しだてすることもない、か。

「……………実はさっき、例の保健の先生に会ってきた。怪我をしたフリをして」

「……………そうですか。どうでしたか？」

驚いた様子はない。もしかしたら、こうなることは予想してたのかもしれない。

「君の言ってた通りの、美人だった。あんまりタイプじゃなかったけど。」

「性格的な意味で、ですね」

「うん。でも、向こうからは気に入られちゃったみたいだな」

「連絡先、渡されたみたいです」

「一緒に遊ばないかって迫られた」

「どうするつもりです？」

「え？」

今度はじつとこちらを見つめ、ソーラは問う。

「別に、ルツカのことは教えてないんでしょう？　だったら、無視したっていいんじゃないでしょうか？」

「……………たしかにそうだ。でも続けてみようと思う」
「どうして？」

「君もこうして頑張ってるんだ。だから、僕もなにかやる」

「……すいません」

「なんで謝る？」

「ぼくがはじめたことで、ルツカに迷惑かけちゃったかな、と」

「でも、強引に話を進めたのは僕だ」

「話を持ち出したのはぼくです」

「……………」

「……………」

「……………はあ」

「あ……」

体を傾け、ソーラの肩にもたれかかる。

「やめよう。いまさらどうでもいいことだ。……………それより、今を楽しもう」

「……………はい。でも、楽しむって？」

「お花屋さんでバイトって、普通はやらないことができる。社会勉強だと思って楽しもうよ。ね？」

「そんなことさせたのは、ルツカなんですよ？」

「そうだね。嫌？」

「いいえ。この際だから楽しみます」

「うん。そうしよう……………」

急に疲れが出てきた。あるいは、さっきのことで緊張していたのだろうか？ 目を閉じて体を完全にソーラにあずける。戸惑いながらも受け止めてくれた。

頼りがいと言うなら、さっきの保健医の方が優れている。でも彼女にもたれかかりたいとはおもわない。絶対に、だ。この違いはなんなのだろうか？

実際のところ、アルバイトは楽しかった。ずっと恥ずかしい恰好をしなければならぬこと以外は、だが。誰もそれをとがめない気付かないというのもまた憂鬱だ。しかしそれに輪をかけて、こういう体験をするのは大事な事だ。

仕事の内容は、会計が主だった。花を育てたり陳列したりするのは、勉強が足りないからまだ、とのこと。勉強も新しいことを知ること嫌いなじゃない。いつかそういう仕事を任される日が来るのが楽しみだ。それまでに女装がばれなければいいのだけど。

店長はやっぱりいい人だった。来るお客さんみんなに気さくに話しかけ、笑顔をふりまいて。店長に会いにくる客もいるみたいだ。

あと、気付いたことがひとつ。客層は意外に広い。若い女性ばかりだと思っていたがそうでもないようだ。男が大勢来る。年齢層もバラバラ。少し驚いたが、こういうものかとも思った。それに、男のガーデニング趣味というのなかなか優雅じゃないか。

ソーラは自分のことをしている。こっちはこっちですることをするまでだ。

あの後、すぐに保健医にメールを送った。返信はすぐに来て、今度どこで会うかの話し合いはどんどん進んでいた。今度の日曜日、浅葱市駅前で待ち合わせ。これって、一般にはデートと言うのではないだろうか？

ちょっと困った。いままでになかったことだ。なんといっても、あんまりよく知らない女性なのだ。こういう時はやはり男の方がエスコートしてやるべきなんだろうか？ むこうが年上なんだが？ 我ながらありきたりなことだが、何を着ていけばいいのかもわからない。

「ねえソーラ、どうするべきかな？」

『えーっと？』

携帯電話の向こうから、少し呆れたような声が聞こえてきた。たしかにそうだろう。自分でも、なんだかおかしくなってると思う。

『そうですね……普段の私服でいいんじゃないでしょうか？ 先生も中学生相手に多くを求めないと思います。ルツカはいつもみたい

に“竜崎さん”を演じていたんでしょう？』

「うん」

『先生は、年下の男の子を相手に遊びたいんじゃないかな。だから、ルツカは垢抜けない子供でいたらいんです。大人のお姉さんと幼い男の子の関係。きっと、先生がなにもかも仕切りたがるでしょうから、ルツカはそれについていきさえすればいいんです。サデイストのルツカには、ちょっとつらいかもしれないけどね』

「そんなこと言ったら、あの人自体が僕のタイプじゃない。ま、バカな女だって思ってることにする。……ありがとう」

電話を切る。心がずっと楽になった。

偽りの自分を演じるのは嫌いじゃない。こういうことをするのもまた一興と考えることにした。

第107話 デート

内心はどこまでも平穩そのものだが、どことなくそわそわした風を装い、デート相手の登場を待つ。結局服装にはあまり気を使わなかった。変に見えなければそれでいいし、ソーラ曰く素体がいいからよほど妙なものじゃなければ何を着ても様にはなるとのことだった。

向こうがどういう心情なのかはまだ確証が持てないが、待ち合わせに遅れるのはまずいので三十分早く来た。浅葱市で最も人の集まる駅の近くの百貨店。その正面入り口が指定された場所。周りを見渡すと、同じように誰かを待つ人、人、人。しかし彼らはルツカとは違い、この待ちになんら裏の思いを抱いていない。

だったら、ルツカはどうなんだろう？ ルツカはこの”デート”に明らかに別の目的を持っている。いまさらそれに意味があるのかと問われればそれはわからない。しかしルツカは――ソーラがどう思っているかが少なくともルツカ自身は当初の目的を忘れていないし、無意味に他人の遊びに付き合うつもりもなかった。いつだったかソーラに言ったこと。男が女子高生に手を出したら、婚約関係は解消するのでは。それをこちら側でやってもいいかもしれない。

「無意味な遊び、か……」

自嘲気味につぶやく。ソーラ自身が完全にやる気を失った事案に、なにを夢中になっているんだろうか？ やはり自分は嫌な人間だ。しかも、嫌な人間でいることを心から喜んでいる。なんて醜い。いいさ。自分のことはよくわかってる。今は自分のやりたいことをするだけだ。

視界の端に彼女の姿が見えた。黒のノースリーブにミニスカートという服装が、彼女の容姿と相まって人目を引きつける。

正直、この段になってもまだ、今日なにがあるか全くわからなかった。

「ごめんね。待った？」

「いいえ。全然」

予定調和のようなありきたりの会話。待ち合わせ時間ちょうどに来た彼女は、開口一番そう訊いてきた。待ったのは待ったが、ずっと早めに来たのはこっちの勝手だ。

「えっと、それで……今日はなににするんですたっけ？　そういえば会うこと以外なにも話し合っていないですが」

「そうだねー。なにしようか？」

「やっぱり決めてなかったんですね……」

「うーん、一応訊いとくけど、お酒飲めないよね？」

「まあ、中学生ですからね……」

「だよね。……じゃあ、定番だけどカラオケとか行く？」

「……ええ、いいですよ」

本当は、今はやりの歌なんて全く知らない。あまり乗り気ではなかったがここは素直に従うべきか。

「よし、じゃあ決まり。行こ！」

「あ、はい………」

手を引かれるままに歩きはじめる。ふむ、わかっていたことだがなかなか強引なタイプだ。と、そんなことを思案している最中に、

「うお、とっとと」

「うわ、大丈夫ですか？」

彼女が何もなかったところで突然つまずき、転びかけた。咄嗟に支えてやる。

「あ………」

「いえ。別に大したことじゃないですが………」

「でも驚いたでしょ？ ごめんね」

「いいですけどね。……にしても、こういう風にこけるのってよくあることなんですか？」

少なくとも、そういう口ぶりだ。そう感じた。

「うん。そう。けっこうよく、転ぶ。おっちょこちょいってよく言われるな」

「……そうですか」

そういえばソーラもそんなこと言ってた。この前瓶を倒してしまっただのめか。

「……なんか、かわいいですね」

思わず、そんな言葉が漏れてしまった。不思議そうな表情を向ける彼女相手に、言葉をつなげる。

「僕はそういうの、いいと思います。ドジでどんくさくても、それがかわいさをだしてるというか……僕は、好きです」

「そ………そう。ありがとう」

小声で言って、恥ずかしそうに顔を背けてしまった。そりゃそうだ。こっちだって恥ずかしい。

そんな状況が数秒続いて、やがてどちらからともいわず手をつなぎ、歩き始めた。

カラオケは、はやりのJ-POPなる聴いたこともない音楽が歌われるのに耳を傾け、ルツカといえは知っている曲を手当たり次第に歌った。歌うこと自体はうまいため、彼女からの評価は上がったようだ。一方向この歌唱力は……ノーコメントで。好きと上手いは別ということか。

その後はショッピングモールで買い物、あとは映画館で話題の恋愛映画を観た。その映画はルツカからすると、退屈極まりないもの

だった。パンフレットを見るにケータイ小説が原作らしいが、そんなことをわざわざ言う意味がどこにあるのだろうか？ 内容の薄っぺらさを誇示するようなものだ。いや、それは偏見かもしれないが、こうもつまらないものを見せられたらしかたあるまい。そうとも退屈は罪である。

デートと言ってもその中身はそんな程度だった。中学生と保健の先生のデートの一般的な内容など知る由もないのだが。

正直に言おう。ルツカは、これを存外に楽しんでた。内容はあまり気に入るものではなかったが、それでも楽しかった。それは、誰かと時を過ごす楽しさか。いまだに相手をそこまで好んでいるわけではない。知っているわけではない。だからかもしれない。なんであれ、知らないことを知るといえるのは楽しいことだ。あんな女のことであっても、なかどうかは知らないが。

向こうからすると、今日のデートは楽しかったんだろう。中年男と中学生、付き合うとしたらどっちがいいか。あんまり深く考えることではないだろう。

別れ際に、また会う約束をつけられた。いつかはまだ決めてない。また電話なりメールで連絡を取り合うということか。

案の定、帰宅途中に彼女から電話が来た。内容はありきたり。今日は楽しかったとか次はいつにしようか、とか。内容の無いことを長々と。どうしてこんなことができるんだろう？ 結局次の予定は決まらなかった。

ようやく通話が終わったとき、また別の着信があった。

『あ、よかったやっとな繋がった……』

「ソーラ？　どうかしたの？」

なんあんだろう、この安心感は。

『ずいぶん長く話してたみたいですけど、なにかあったんですか?』

「いや、なんでもなし。ソーラこそなにかあったの?」

『あ、はい。えっと……』

ソーラは少しつまってから、声をひそめて言った。

『今から会えませんか? ぼくの家で』

「ん? いいけど。どうして?」

『会ってから話します。いいですか?』

「わかった。今から行く」

『はい………ありがとうございます』

電話を切った後、妙な胸騒ぎがいつまでも消えなかった。

第108話 怪しい動きとか

よく行く、見慣れた友の部屋。本人の性格が出ているのか、物がずいぶん整然と並んでいる。机にベッドに本棚。すべてがあるべき最良の位置に置かれている。機能美という言葉の似合う、実に居心地のいい場所だ。

本棚に並んでいるのはフィクションが多いか。古今東西の文学作品が網羅されている。あと、兵法に関する本がやたらとある。逆にそれ以外の種の本は、ほとんど見あたらない。

「……………」

いつも思う。この部屋のどこかにえっちな本とかが隠してあったりしないだろうか？ あの女の子みたいな風貌からはちょっと想像つかないが、本人の言うところによれば普通の男の子らしい。だったらそんなものもどこかに……………」

「あのねルツカ、たぶん期待してるようなものは見つからないと思いますよ」

本棚の裏を覗いていると背後から声。お盆にお菓子とジュースをのせたソーラが、ジト目でこっちを見つめていた。

「……ああ、さすがは軍師様だ。簡単に見つかるような場所には置いてない、と」

「そういう意味じゃないです……」

「それで？ なにかあったの？」

床に座り、オレンジジュースを飲みながら尋ねる。ソーラは一瞬口ごもり、何度かためらうそぶりを見せてから、

「あのね……なんと伝え方がいいのかわからないんですけど、妙な客がいるんです。それも大勢」

「……詳しく聞こうか」

「はい。まずあのお店のことですが、お客さんが多いです。客層も広くて、老若男女あらゆる人が来ます。……ぼくが思う”妙な客”の層も、広いです」

「うん。それで、どういう所が妙だと?」

「えっと、そのお客さんは来るなり店長に挨拶して、店の奥の部屋に入ってからすぐに出て行ってなにも買わずに帰るんです。そういう人が何人かいるんですよ」

「それは……変かもしれないね」

「でしょう。しかも、わざわざ周りに気付かれないようにしてるんです」

「というと?」

「他のお客さんや、僕ら店員の視界に入らないように移動する。そんな動き方をしてるんです」

「それは、君の好きな兵法的な意味で?」

「そうです。そういう動き方があるんですが、あまりに教科書通りの動きなんではくにはわかるんです」

「なるほど。だったら、そうなんだろう」

こと兵法に関しては、ソーラの言うことはだいたい正しい。

「それで、一応であっても他の店員さんに相談してみたりした?」

「ええ。まあ。店員さんにも隠してることですから、あんまりおおっぴらには聞けないことですが……それとなく話してみました。ときどき、ちょっと変な客が来るみたいですが……みんな、なんとなく気が付いていたようですが。詳しいことはなにもわからないみたいです」

「そっか。それは……気になるね。どうする?」

「それはできれば、探りたいですけど。協力してくれます?」

「いいけど……いいの?」

「え? なにか問題ありますか?」

首をかしげて訊き返してきた。その仕草もまたかわいいが、いまひとつ問題を理解していないようだ。

「あのねソーラ、君の今の気持ちはわからないし、ことがややこしくなったのはたぶん全面的に僕が悪いんだけど……君は、保健の先生の幸せを壊したくないんだよね？ ……まあ、実際やってることとは別として」

「はい」

「ねえ、後悔しない？」

まっすぐ親友の顔を見つめて問う。ソーラは目を伏せ、黙ってしまっただ。

「……………」

「まあ、ただただ楽しむだけならまだいいけど。必要以上に深く入りこむと……………どうなるかな？」

「……………でも、気になることは気になりますし、それで……………その”なにか”が店長さんの幸せを脅かすかもしれないじゃないですか。だから……………そのすいません。うまく言えないけど……………」

自分でも顔がほころぶのを感じた。本当にかわいいやつだ。

「いいよ。わかった協力する」

「本当ですか？」

顔を上げたその顔は、どこか泣きだしそうで、でも笑顔だった。

愛しい友の笑顔だった。

「うん……………まあ、こんなことにしたのは僕だからね」

「ですから、最初に言い出したのはぼくのほうですから……………」
いつぞと同じことをまた言ってしまった。ふたりは一瞬顔を見合わせ、笑い合った。そうとも。気心の知れた友達ほど、一緒にいて楽しいものはない。少なくとも、年上で露出が多くて、結婚を控えているにもかかわらず中学生相手に浮気をするような女よりかはずいぶん楽しい。まあ、そんな評価を下す資格など、自分にはないのだろう。

その夜はソーラの家で夕飯をごちそうになった。残念ながらソーラの作ではなかったが、それでも減多に食べられない手料理はおい

しかった。

帰り道、ひとりになって考えた。もちろん、今回の件だ。

なんだかんだ言っ、ルツカはこの状況を楽しんでいる。たぶん、ソーラも同じだろう。多少の背徳感を感じているだろうが、滅多にできない経験をしているというのは、なかなかいいことだ。

ところがそんな折、花屋の店長がなにか怪しい動きをしていることがわかった。それがなになのかはわからない。本当に怪しい、例えば悪事が行われているのか、それともソーラが知らないだけの花屋の風習とかだったというオチがつくのか。後者だったらただの笑い話で済むが、前者なら、あるいは触れない方がいいことなのかもしれない。

しかし――この手の思索はいつもここで止まり、それ以上進むことはしない。今回もそうだった――ソーラがやりたいと言ったことだったら、できるかぎりサポートしてやる。そう決めたし……それがなよりの暇つぶしになる。結果としてソーラが危険な目にあうかもしれない。そのときはなんと守ってやるさ。

翌日、屋上で大まかな作戦をたてた。店長の細かな動きを把握するためにもう少し日をおいて観察し、それから決行ということとなった。

そんな日々の中でも、例の保健医からのメールは毎晩のように来た。顔文字やら記号やらをふんだんに使った文面は読むのがひどく面倒で癪だが、これもこれでなかなか普段じゃできないことだ。今は作戦の方がずっとおもしろいのだが。

作戦当日、学校が終わってからしばらく時間をつぶす。ソーラはすでに花屋で働いてる時間だ。ひとりの時間が長く感じられる。し

かしその時は確実にやってくる。
さあ、作戦開始だ。

第109話 芝居

がんばって勉強した甲斐があたのか、それとも人当たりの良さが評価されたのか、会計以外の仕事も任されるようになってきた。これはいいことだ。レジに張りつく以外に、いろいろ店内を歩き回れる。今からの作戦に、これは大きなプラスになる。

そしてなにより、努力した成果が表れてきたのだ。これからこの仕事を続けていって、次になにかあるのか。考えたらワクワクしてきた。そのためにも、今日はなんとかうまくやらなければならない。

約束の時間ぴったりに、ルツカはやってきた。いつもと同じ中学校の制服。いつもの穏やかそうな笑顔。そして今は、まんまるのメガネをかけていて、それが笑顔と相まって実にいい人っぽくみせていた。今の彼は柳瀬ルツカではない。無害でおとなしい文学少年の竜崎さんだ。

ルツカはしばらく店内を歩き回った。陳列された色とりどりの花々に囲まれるその姿は、彼の本性を知っていてもなお、様になっていた。もっとも、実際にルツカが愛でるのは、わがままな草花などではないのだろうが。

他の客から頼まれた花束を作る途中ですれちがった。小声で最小限の会話を交わす。タイミングを計っているみたいだ。ルツカが店長に話しかけたらソーラも行動を始める。そういう取り決めだ。

ふと、ルツカが足を止めた。目の前の花をじっと見つめる。それは西洋オダマキ、あるいはこう呼ばれる。”マツカナジャイアント”そんな花である。

ルツカの考えがわかった。彼から視線をそらし、微妙に距離をとる。ルツカの声が聞こえたが、それは店長に向けられたものか。

マツカナジャイアント。正確な由来は知らないが、もちろんこれ

は日本語ではない。花自体も赤くも大きくもない。そんなことルツカは知っているだろうが、だからこそ目的も果たしやすい。たぶんどこが真っ赤でジャイアントなのか、知らないふりして店長に話しかけたんだろう。そこからなんとか話を広げて足止めしてもらう。その隙にこちらで目的を達成するのだ。

いつも店長と怪しい客が入る部屋については、ここ数日まわりに聞いてそれなりに調べてきた。誰もそこに用事がなく、したがって出入りすることはなかったらしい。ただひとり、店長を除いて。店長だけはときどき出入りしている。ひとりのときもあれば、誰か客を伴っているときも。そしてなにより重要な事に、部屋の扉には鍵がかかっている。店長だけが開けられる。

鍵をどうするか？　それが問題だった。他のもろもろの鍵と一緒に、店長の腰にまとめて吊られていた。問題の鍵がどれなのかはわかってる。それをどうやって手に入れるか？　いい案が浮かばなかったから、ルツカの考えに従うことにした。はなはだ不満なことではあるが。

ゆっくり店長に背後から近づく。話に夢中で、店長が振り返ることはないだろう。早いところ終わらせないと。少し距離を置いて、そしてできるだけわざとらしくないように、

「きゃっ！」

わざと転んで、店長に後ろからぶつかった。すばやく腰の鍵をすすめ取り、そのままの勢いで床に倒れる。

「わ、大丈夫ですか？」

助け起こそうと手を貸したのはルツカ。店長は後ろをとられていたし、最初からこうする予定だったのだから、店長よりルツカが早く動けたのだ。

「いたた……うう、すいません」

申し訳なさそうにしながらルツカの手をとる。その時点で、鍵は

ルツカのでのひらに。

店長も心配して大丈夫かと訊いてきたが、問題なく起き上がった。そこは商売人。助け起こしたルツカに頭をさげて、お恥ずかしいところをとか、どうもすいませんとか、とにかく平謝り。ソーラも精いっぱい申し訳なさそうな表情をして謝った。ルツカはちよつと困ったように笑いながら、別にいいですよとかそんなことを言っていた。まったく、善人のフリが上手い人だ。

その後、何度か言葉を交わしてルツカとは別れた。鍵を持ったまま、だ。これからルツカが合鍵を作る。

ちなみに、マツカナジャイアントは買ったみたいだ。それも鉢つきで。何を考えてるんだろうか……？

花屋から出て、少し歩く。ジュースの自動販売機を見つけて缶入りの炭酸飲料を買った。それを飲み終わったら作業開始だ。

鍵は一般的なシリンダー錠だった。これなら簡単に合鍵が作れる。鞘からハサミとボールペンを取り出す。まずハサミで、十分な大きさのある一枚の板になるようにアルミ缶を切る。鍵がおさまるだけのサイズだ。それに鍵を重ねペンで縁取り。その後線にそってハサミで切る。最後にそれを鍵と重ねて、ボールペンで押して板の凹凸をつけて完成だ。

これで例の部屋の扉を開けられるはずだ。それをするには、今ではなくもう少しあとなのだが。

急いで花屋に戻る。入口付近で、誰もこっちを見ていないのを確認して本物の方の鍵を落とした。コンクリートと金属の奏でる音は周りの喧騒にかき消された。決められた時間になるとソーラがこれ拾い、落し物を見つけたと店長に報告する。その時の店長の様子も、なにかの判断材料になればいいが。

とにかく、今の時点での役目はこれだけ。あとは夜まで待たなけ

ればいけない。メガネをはずし、小学校に戻る。

「こんにちは」

ソーラから連絡がある間暇で、しかもなにもすることがない。ぼーっとして時を浪費するのも退屈極まりないから、なんとなく保健医に会うことにした。マツカナジャイアントはその手土産だ。

「あら……どうしたの？」

少し驚いた様子の先生に、ルツカもなんと言うべきか一瞬惑ったが、

「その……急に会いたくなっちゃって……もしかしたら迷惑ですか？」

「ううん。そんなことない。その花は？」

「近所の花屋さんで見つけました。先生に似合うかなって思いました西洋オダマキです。これ、先生にあげます」

「本当？　ありがとうございます……でもこれ、あたしの旦那の店で買ったの？」

「いえ。違います。別の店で買いました」

「そっか。ならばよし！　ありがとうございます」

そして保健医が見せた笑顔は、たぶん嘘いつわりないので、それが余計にルツカの想いを複雑にした。

結婚を喜ぶ店長と、あまり喜んではない保健医。今まさにルツカとソーラがしていることは、このふたりになにをもたらすのだろうか？　あるいは全てを円満に収め、あるいは修復不能な破滅をもたらす。そうなるかなど、わかりようがない。

その後しばらく会話し、次に会う約束も取り決めた。その頃には、夏の長い日もすっかり落ちていた。

第110話 見てきたもの

「それで、店長の様子は？」

『精いっぱい平静を装ってましたが、動揺を隠しきれてませんでした。手がかすかに震えてて、瞳に落ち着きがなかった。あと、声も変でした』

「なるほど。それはますます怪しい……」

ルツカは今、携帯電話でソーラと話しながら夜道を歩いている。熱帯夜がどうのという時期はまだ少し早い、日中の暑さを闇はまだ奪いきってはいなかった。アスファルトからたちのぼる熱気は、これから訪れるうっとおしい季節の存在を否応なしに認知させてくる。

花屋の閉店、その後の片付けなどが終わるのをソーラからの連絡で知ってからそこに向かう。今は店にだれもいないということだった。

「ルツカ、こっちです。裏口から」

ガラス張りになっていいる店の正面入り口。透明な壁を隔てた向こう側にソーラはいた。帰るふりをして店の中で隠れていた。身振りの指示に従い、店の裏に回る。向こうもそれに合わせて動く。

裏口を中から開けてもらい、侵入。懐中電灯の光を頼りに、問題の部屋まで案内してもらう。その途中で、ふと気がついた。

「ねえソーラ、もしかして怖い？」

「え？ そんなことないですが……」

「でも手が震えてる」

「あ……………」

ソーラの手を握ると彼は間の抜けた声を出して、それからばつの悪そうになって、

「……すみません」

「別に謝ることじゃないけどね。怖いの？」

黙って頷いた。

「そっか。それは、店長さんの秘密を知ることになるかもしれないから？ それとも、今やってることが犯罪だから？」

「それは………どっちもです」

「………ここ？」

店の少し奥まった場所。いくつかある扉のひとつの前でソーラは立ち止まった。

「はい」

「なるほど。たしかに客が入るにはおかしい場所だね。店長と妙な客以外は誰も入ったことがない？」

「そうです………開けてみましょう」

合鍵を差し込むと、カチリと音がして問題なく開いた。聞いた話でやったことだが、うまくいった。

ソーラと顔を見合わせ、思い切って扉を開ける。もちろん他に誰かがいるわけではないが、その静けさがまた雰囲気重くしているような気がした。

部屋の中を懐中電灯で照らそうとしたが、その必要はなかった。なぜか？ 部屋の中で数個の照明器具が作動していた。

「………ねえ、ソーラ？」

「………」

話しかけたが返事をしてくれない。どうしたものかと思いつつ、部屋の中に足を踏み入れる。照明器具の下にはそれぞれ、背の高い植物が青々とした葉を茂らせている。茎まで鮮やかな緑色。葉は細長く枝から放射線状に広がっている。照明器具以外にも見たことのない機械がいくつか。用途はわからないが、嫌な予感しかしなかった。

ソーラが、今度は全身を細かに震えさせている。目を離さないようにしつつ、他に見るべきものはないかと探す。事務用の机があった。机の上にはさっきの植物を乾燥させたと思しきものがのっていた。引き出しを開けると、乾燥させた植物を小さくちぎったもの。そして、薄い紙が大量に。

これが何なのか、判断する材料は十分だ。

携帯電話でそれぞれの写真を撮る。現物を持って帰ろうかとも思ったが、侵入した形跡はできるだけ残さないのがいい。あらかた撮り終わって、撤収しようとソーラに近づいて、

「あんまり変な気を起こさない方がいい」

「……っ！」

後ろからソーラの両腕をつかんだ。思ったより陰い声が出てしまったがしかたがない。身を固くしたソーラに、今度はできるだけ優しく語る。

「ねえソーラ、気持ちは察してあげる。でも、今はやるべきことを考えようよ。ね？」

「……………はい」

力を抜いた様子なので手を離れた。すると彼は振り向いて、笑いかけてきた。泣きそうな笑顔。頭をなでてやり、外に出るように促す。部屋の鍵をかけなおして、

「裏口の鍵はどうするの？」

「開けたままにします……………ほかに良い考えが思い浮かばないので。

店長が用心不足だっておもってくれればいいんですが……………」

「まあ、しかたないか……………じゃあ、これからどうする？ ……

……………今後の対策を決めない」と

「……………ぼくの家に」

「わかった。行こう」

ルツカの問いにまたうつむいた。それからソーラの家につくまで一言もしゃべらなかつた。

ソーラは子どもだが、利口だ。さっきの部屋にあった植物、あれがなにかをちゃんとわかっている。わかっているからあんな風に動揺したのだ。それにしてもまずいことになった……

「大麻だね」

ソーラの家庭は、夜遅くだと言うのに息子の帰宅と来客をとがめなかった。本当に放任主義な家庭だ。今、ソーラの部屋でカップラーメンをすすりつつ話をする。と言っても、ソーラはうつむいてあまりしゃべらないが。

「あの葉の形は間違いなく大麻だった。室内で栽培するための設備が整っていた。それと、乾燥大麻とそれを紙でくるんだもの。タバコみたいに吸うんだ。たぶん、君の言う怪しい客ってのは大麻を買いに来たんだろう。タバコ状になったものを買う。店頭じゃ受け渡しにくいから、できるだけ目立たない場所で」

「……………」

「あの部屋は大麻を育て、加工する場所。店長がひとりで管理しているのか、それとも他に誰か協力者がいるのか。それはわからない。客との受け渡しもそこでやっていた。小さなものだし、目立っていないものじゃないからポケットかどこかに入れてさせてたんだろうね。あとの問題は……………これからどうするか。これは間違いなく犯罪だよ？」

「っ！ それは……………」

ずっと下を向いていたソーラがキツッところちらを見た。泣くのを必死でこらえている。そんな表情を予想していたルツカにとって意外な事に、ソーラの目はまっすぐだった。

「なんか、腹を決めたみたいだね」

「ええ。……………できれば、なにも見なかったことにしたかったです。犯罪なんて犯されてない。そういうことにしておけば、あるいはなにもかも丸く収まるでしょう……………店長の生活はなにも変わらず、このままいけばちゃんと結婚できます。…………でも、そんなこ

とできない」

「……」

「写真のデータ、もらえますか？」

「警察に通報するの？」

「いいえ。ぼくたちも犯罪をして写真を撮ったので。だから、警察は最後の手段にします。まずは店長に見せて話して、自首を勧めたりします」

「なるほど。それはいつ話すの？」

「それは……もうちょっと待ってください」

「わかった。その時になったら、僕に教えてほしい。君だけじゃ危険かもしれない」

「あ、はい。わかりました」

「じゃあ、データはあとでメールで送るから………ねえソーラ」

「はい？」

「君は……見た目は女の子だけど、ちゃんと男のハートを持っていると思うよ」

「……なんですかそれ？」

「なんでもない。じゃあ。僕はそろそろ帰るよ」

「はい」

去り際、ソーラが笑顔を見せてくれた。決意のこもった、良い笑顔だった。

第111話 動き

「……暇だな」

店長の部屋に忍び込んだ夜から数日。ソーラはまだ行動を起こさない。ひとつの決意を固めた方がいいが、タイミングを計りかねているのか。もちろんやりたいようにするのが一番なのはわかっている。しかし、そうなることちにやることがない。動きがあるまですつと待機だ。

今は市営の図書館にいる。目ぼしい本を片っ端から棚から出して、机の上に積んだ。調べるのは大麻について。生態なんかは既に知っているが、犯罪の道具としての大麻はあまり知らない。そんなものが早々に図書館で知れるとも思えないが、暇つぶしにはもってこいだろう。

あの店のシステムを考える。客が来て金をもらって大麻を渡す。物が違法である以外は、普通の商売と変わらない。商品の受け渡しは目立たないように行われる。それはなんとなくわかる。

疑問もある。なぜ客は、あの店で大麻が売られているのを知っているのか。違法物品、例えば銃なんかを買うにはどうすればいいか。ここ浅葱市では、買うことはできるらしい。どこで買えるかはわからない。貧困にあえぐ人々のあつまるスラム街や、暴力団とつながりのありそうな店のひしめく繁華街はたしかに存在する。そんなアウトローな雰囲気が漂う場所ではあるいは薬物や銃器が買えるかもしれない。しかしおおっぴらに売るわけじゃないし、警察の目も光っている。少ないが検挙されたという話も聞く。そういった店はなぜ客が来て、なぜ警察に見つかるのだろうか？ どこかに一般人にはわからないような目印があったりするのか、あるいは誰か教えてくれる人間がいるのか。それを知る方法が、今のところ本人に訊くしかないのがもどかしい。こればかりはどうしようもないと図書館

の天井を見上げていると、携帯電話が震えた。図書室ではマナーモード。それがエチケットというものだ。

「もしもし、ソーラ？」

トイレの個室に入り通話にこたえる。かけてきたのはソーラだった。もうバイトが終わってる時間か。ずいぶんながくここにいたようだ。

『ルツカ、今暇ですか？』

「うん。どうかした？」

『できるだけすぐ、今から言うところに来てほしいんです。着いたら、また連絡してください』

切羽詰まったような声。これはただごとではなさそうだ。

「どうしたの？ なにか面倒な事に？」

『はい。とにかく来てください。場所は………』

港にある海洋博物館前。その一角に来てほしい、と。トイレから出たルツカは本の束を急いで戻して、指定の場所へ走った。外はすでに真っ暗だった。

我が国で最大の規模を誇る浅葱市の貿易港は、近隣の住民に経済の恩恵と犯罪の恐怖を与えた。なるほど、世界中から物の集まるこの場所は、違法な取引がされるのが似合うかもしれない。黒づくめのスーツの男とアタッシュケース。雰囲気は出ている。

営業時間のとうに過ぎた海洋博物館の前にソーラはいなかった。携帯で連絡を取ると、場所を移動したという。また指示に従って動く。

移動中に話を聞いた。ここ数日、ソーラはずっと店長の様子を観察していたらしい。バイトが終わってから、ひそかにあとをつけ

ていたりもした。しかし特別におかしなことは見つからず、店を出た店長はまっすぐ家に帰るだけだった。店長の行動は普通そのもので、あの日見た大麻のことがだんだん信じられなくなってきた。なにかの間違いではないか、と。

今日も店長の一日は平穩に終わった。怪しい客は今日も何人か。それ以外は、という意味だが。また収獲なしかと落胆したが、ふと気がついた。閉店したした後、店長が帰る。その方向がいつもとは真逆だった。どこかに寄るつもりだろうか？　あるいは、他に特別な事があるのか。判断はつかなかったが嫌な予感がした。とりあえず気付かれないようについていくと港の方面へ向かっているようだ。この時間になるとだいたいの施設は閉まっている。これはますます怪しいと思い、ルツカに連絡したのだった。

「なるほど、事情はわかった」

ソーラと合流を果たし、一緒に店長を尾行する。なるほど、完全に面が割れてるソーラよりもルツカのほうが尾行には向いている。

店長はどこか落ち着かない雰囲気で、港の町をうろうろしていた。なんとなくある方向へ向かっているようではある。

「これは……コンテナ基地の方面かな？」

ソーラは少し後ろを目立たないように歩いているため、この言葉には応えてくれなかった。しかし思っていることは同じだろう。海の向こうから来たもの、そして海の向こうへ運ばれるもの。それらが鉄の箱に入れられ運ばれるのを待つ場所が、この港にはいくつかある。それが集中している場所がコンテナ基地だ。

花屋の店長が行くような場所ではない。この時間はおろか日中でも、いるのは作業員か貿易会社の社員。あるのは大量のコンテナ。それだけの場所だ。たしかに、広大な土地にいくつものコンテナが並ぶ光景は観る者を圧倒させ、わざわざ観光にやってくる物好きも多い。もしかすると店長もそういう趣味なのかもしれない。しかし

そうだとしたら、あの落ち着きのなさが気にかかってしかたがない。

……正直に言おう。これが何なのか、もう察しはついている。ヒントが多すぎた。

「ねえ……ソーラ？」

何なのかはわかったが、問題は別にあった。立ち止まって振り返る。

「ソーラ、店長がこれから何するかわかってるよね？ どうする？ ルツカに追いついたソーラは、少し言い淀んだがゆるぎない決意を秘めた表情で、

「もう少し、つきあってくれますか？」

「……………」

「なにも見なかったふり、知らないふりをして引き返すのが安全です。ぼくもそう思います。でも……でも、ぼくは逃げたくないんです。なにがあるのか自分で見て、それでなにかできることがあるのであればなにかしたい。なので……」

「わかった。守ってやる」

ソーラの言葉はある程度予想できたものだった。だから、こちらの言うことも決まっていた。

しかし一方で、あんまりのんびりしてられない問題も起こっている。

「ソーラ、しばらく僕から離れて歩かないように。大きな音も出しちゃいけない。わかった？」

「え？ なにがあるんですか？」

“悪い人たち”には見つからない方がいいだろう？

守ってやると言った。つまり、脅威になる存在があるということだ。

第112話 正しい銃の扱い方

ソーラをすぐ横に従えて、コンテナの森の間を歩く。他に人の気配がないか細心の注意を払う。さっき話してる隙に店長を見失ってしまったが、行先はもうわかってる。時計を気にしつつ探していると、見つけた。

コンテナで作られる壁にはさまれた通路の真ん中。そこに、店長は所在なさに立っていた。気付かれないように様子を窺う。向こうがこちらに気付いた様子はない。少し見て変化が内容だと判断すると、ソーラに離れるように促した。ソーラも状況を把握しているようで、疑問を挟むことなく従った。

周囲から、ルツカ達と店長のたてるのではない物音を感じた。誰かいる。人の気配を避けるように移動する。動きの指示をしたのはソーラだ。音で周りの人の流れを読みとり、接触しないようにコンテナの間を歩き回る。なるほど、これが『人に見られないように移動する』技術なのかもしれない。迷路のように並ぶコンテナの配置をどこで覚えたのか、一切の戸惑いも迷いもなく立ち回る。しかし不安もあった。敵の位置は完全に把握しているのか？ 把握できたとして、相手の視線まではわからない。ソーラはそれを考慮に入れているのか？ ソーラ的能力は信頼に値するものだが、相手もこの道のプロのはずだ。しかも、さらに不安をおおることに、

「ねえソーラ。人の数が多すぎない？」

「……………」

応えるかわりに、立ち止まった。

店長が今からすること。それはきつと、大麻の取引。あそこで育てた大麻を渡して金を受け取る。たぶんそういうことが行われるんだろう。それはふたりの共通認識。そして疑問に思うこともあった。

この手のやり取りは他の何者にも知られることなく、隠密裏にされるべきことではないのか？ それにしては周りに人が多すぎる。

「ルツカ、ぼくも変だとは思ってたんですが……！　ルツカ後ろ！」

ソーラを片手で抱え、走る。一瞬前にふたりがいた空間を銃弾が貫き、コンテナのひとつにぶつかった。

敵に見つかった。そうになったら、問答無用で射殺は当然の流れである。なんとかしてこの状況を切り抜け、ソーラを守らなければ。そのために自分はいるんだ。

「ルツカ、とりあえず移動を続けて。なんか様子が変わります」

さっきのを皮切りに、あちこちから発砲音が聞こえる。それが全て自分達を狙っていると思うと気が気でない。

「銃声が多すぎます。これはぼく達を撃ってるだけじゃないかも……もしかして、銃撃戦？」

「なんで銃撃戦が？　わっ！」

足元に銃弾が炸裂した。幸いにギリギリで避けたが、このままではいつ被弾するかわかったものじゃない。

「ルツカ！　前に敵がいるかも！　引き返して……」

「ソーラ、ちょっと歯を食いしばって」

「え？」

ソーラを自分の先行方向へ投げた。案の定コンテナの陰に敵がいたらしく、驚きながらも転がってきたソーラに銃弾を浴びせようとした。それに肉薄し銃を殴る。射線を逸らされた銃弾はソーラの十数センチ横のコンクリートを穿った。

そのまま片手で銃をつかみ、もう片方の手で敵に肘鉄を食らわせる。狙い通り顔面にクリーンヒットし、敵は銃を手放し顔を覆って後ずさった。使い方もわからない銃はさっさと投げ捨て、相手の心臓を狙って拳を突く。当たった。ここに至り敵も、反撃しようと構えをとった、が、これが失策だった。残忍なルツカはためらいなく敵の目を殴った。パチンと音がして眼球の内包液が飛び散った。悲

鳴をあげて目を押さえるがもう遅い。指の隙間からだらだと血を流す敵の頭をつかみ、力を込めて捻じ曲げた。ゴキリと音がして、敵は力なく崩れた。

「ソーラ、大丈夫？」

「ええ……死ぬかと思いました」

起き上がったソーラと、ひとまずコンテナの隙間に隠れる。

「まだピンチは継続中だけどね」

「はい、これ。使い方知ってますか？」

さつき奪った銃を手渡された。サブマシンガン。黙って首を振った。

「それはスコピオンって銃でしょうか。撃つ時はストックをしっかり胸に当てて、発砲する時は銃口が跳ね上がりますから気をつけて。安全装置はそのレバーですが」

頭上に向けて撃った。コンテナの間を飛び越えようとした誰かが落ちてきた。

「かかってないね。弾切れだけ気をつけようか。さ、行こう」

落ちてきた人間の体をさぐり、弾倉をいくつかもらって、隙間から抜け出した。

なるほど、隠れている間にも銃撃音は続いていた。そして、飛び交う怒号。本当に銃撃戦らしい。では、誰と誰との戦いだ？ 片方は店長と取引に来たらしい組織。もう一方は、それを襲撃しにきたのか？ 目的は？

幸いなのが、どうやら自分達だけが標的ではないということ。不幸なのが、混戦で敵が動き回っていること。

コンテナを背に、サブマシンガンをあちこちに向けながら移動する。とりあえず店長の安否を確認したい。しかしこの広大な場所のどこにいる？

「っ！」

真上、コンテナ上に人影。すかさず撃つと、敵は身を隠した。こ

のままにするわけにもいかないが深追いも危険か。くそ。きりがない。増援が来る前にこの箇所から逃げるのが……目の前で火花が散った。急いで撃ってきた方向に反撃しつつ、走る。自分は平気だが、ついてきてるソーラのスタミナが心配だ。そして弾が切れた。最悪だ。

「ソーラ！ 弾倉の交換方法！」

「マガジンキャッチっていうレバーがどこかにわぁっ！」

「ごめん今それどころじゃない！」

ソーラをひつつかみ、進路を急に変える。コンテナの陰に隠れてから放す。これでさっきの銃撃からは逃れられたが、奴はすぐに仲間と連絡するだろう。最悪の場合囲まれたりはさみ討ち。休む暇はない。

「ソーラ、大丈夫？ まだ走れる？」

「ええ………大丈夫です」

口調は全く大丈夫そうではない。なんとか早めに状況を終わらせないと。今はソーラの言うことを信じるしかないか。

「わかった。行くよ！」

弾倉を替え、物陰の入った側とは反対の方向に走る。人影が見えたため、撃った。驚いて引いたようだが、コンテナの角の向こうにまだとどまっているはずだ。サブマシンガンでソーラに投げ渡した。

「え？ これをぼくにどうしろって!？」

「ちょっと持ってて！」

角に着いた。案の定敵は姿を現し、至近距離から拳銃をぶっ放そうとしてきた。ルツカはその拳銃をつかんで、相手の首筋まで銃口を向けて引き金を引いた。おそらく即死だろう。視界にもうひとつの人影を認め、奪った拳銃でそれも撃とうとして……

「え!?! 店長ですか？」

「！」

戦おうとせず、両腕で体をかばうようにした男。それはどう見ても花屋の店長だった。

第113話 収束

「よかった。生きてたんですね」

安堵の表情を浮かべるソーラ、そしてその声を聞いた店長は目を丸くしてこちらを見た。

「な……なんで君がこんなところに」

「そんなことより、また攻撃されますよ。詳しい話は後にして、動いてください」

既に反対側から敵が来ていた。銃撃すると体を引っ込めて、出てこないが。どこからか回り込むつもりなのだろうが、そうはさせない。

ソーラと銃を交換し、ふたりを促し、走らせる。発砲音がだんだん少なくなっているようだ。片方が劣性で、全滅が近いのか。それとも退却を始めたか。いずれにせよ、このまま状況が収束してくれないものか。ルツカはともかく、ソーラと店長は見るからに戦闘ができるタイプではない。

コンテナ群の中にさらに深く、狭い通路に入り込む。挟撃の危険はあるが、同時にこっちが警戒しなければならぬ方位も絞られる。頭上から足音。相手はこっちの位置を知っているのだろうか？

知らないのならこのままやり過ぎた方がいいが……

「！」

頭上、コンテナの屋根から顔を出した敵はまっすぐこちらを見、発砲してきた。ソーラと店長を突き飛ばし、自分も飛び退きつつサブマシンガンを撃った。敵は姿を引っ込めたが、すぐにまた現れ……力なく下に落ちてきた。当たったのか？ いや違う……

「くっそ！」

当たったふりをしたのか。それに気付くのと敵が着地したのは同時だった。そして同時に銃を向け、引き金を引くのはルツカが若干早かった。銃弾が敵の銃を吹き飛ばす。本体にダメージを与えたか

どうかは暗くてよくわからない。そしてサブマシンガンが弾切れだ。再装填している暇はない。拳銃はソーラが持っている。銃を捨て地面を蹴り相手に肉薄した。向こうも飛び道具を持っていないのか、懐からナイフを取り出したみたいだ。

ルツカが捨てた銃を回収、弾倉を交換。さっき落ちてきた敵に銃口を向けるが、ルツカと体が重なって撃つに撃てない。諦めて他の敵の気配を察しようとする。

「ねえ、魚田さん？」

「……………はい？」

店長が話しかけてきた。一瞬気まずさを感じる。

「なんで君がこんな所にいるんだい？」

「それは……………ぼくが……………」

言うってから気付いた。自分のことを「ぼく」と言ってしまった。

店長の前では女の子のふりをしていて、一人称も「わたし」にしていたのだが。まあ、仕方がない。こうなったら洗いざらい全て話そう。

「店長……………あのですね。実はぼく、店長の秘密を知ってます」

「え……………なんだって？」

「店長が店の中で大麻を育ててるって」

「……………そうか」

店長はすまなさそうな表情をし、そしてなにか話そうとしたらしいが、ソーラの耳には届かなかった。

ルツカと戦っているのではない別の敵が視界の端に映った。思わずそっちにサブマシンガンを撃つ。しかし、慣れないことはやってみるものではなかった。初めて受ける銃の反動は、その強さを甘く見ていた。細身の小学生の体で受け止めるのに失敗し、銃は手を離れソーラはしりもちについて倒れた。敵に銃弾は当たらず、反撃す

べくこちらに銃口を向けてきた。ルツカは他の敵に足止めされていて助けてくれない。ポケットから拳銃を抜くが間に合わない。まずい。死ぬ。敵が引き金を引いた。

銃口からいくつかの銃弾が放たれる。他にできることもなく、目をぎゅっと閉じた。しかし体に痛みは感じない。

「……？」

恐る恐る目を開ける。目の前に、仁王立ちの店長の背中。

「！ 店長！？」

「は……早く逃げなさい」

「……………」

敵はまたこちらを撃とうとしている。店長の足の隙間から拳銃を発砲。当たった。敵の体は崩れ、うめき声だけあげながら動かなくなった。殺しはできなかったがとどめをさすべきか？ そう考えて、急に怖くなった。無我夢中でやったことだが、人を撃つなんてはじめてやった。ここでもう一度撃てば、この人は完全に死ぬだろう。人を殺す。ルツカが平気でやっていることを、いざ自分で実行する勇気が持てなかった。いや、ここはやるしかない。覚悟を決め歯を食いしばり、引き金にかけた指に力を入れ……

「うおおおおおおお！」

「え？」

店長の雄たけびに気押されて、発砲は果たせなかった。咆哮を上げた店長は懷から拳銃を取り出して、倒れた敵に発砲した。驚くソーラを一瞥したが、敵が近付くのを感じたのか拳銃を構えたまま敵の死体の方へ駆けだす。前方の物陰から数人が姿を現し、店長に向かって撃つ。ことごとく当たったようだ。衝撃に身を震わせるが、店長は前進をやめなかった。敵のひとりに抱きつくように倒れ込み、撃った。敵と店長双方が地に伏す。伏しながらも銃を離さず、他の敵に向けて発砲。しかしそれまでだった。この状態で正確な狙いなどつけられるはずもなく、弾道は空を切り裂いただけだった。残った敵が倒れた店長の体に銃を撃ちこむ。

「あ……………」

目の前の光景に対し、ソーラはなににもできなかった。茫然と事態を見るだけ。体中に力が入らない。標的がいつ自分になるかもわからないのに……………」

相手の、ナイフを持つ手をつかむ。さっきと同じように、首までナイフを持っていこうとしたが、敵はそれを察し、ナイフを手放した。コンクリートの地面に落ちるナイフ。それを足で払い遠くへ追いやる。ルツカは敵の鼻に肘鉄を食らわせた。よろけ後ずさる敵。体勢を立て直す暇を与えるつもりはない。体の前をガードする敵の横腹へ渾身の蹴りを入れると、足に痛みを感じた。妙に堅い物を蹴ったようだ。防弾チョッキか。相手にダメージは与えていないだろう。しかし衝撃は与えられた。体勢を崩して倒れる敵。その顔を踏みつぶそうと足を上げるが、敵は身を転がして回避。なるほど、こいつは他の敵とは少し違う。

距離をとり睨め見あうルツカと敵。不意に、敵の胸元から声がした『目標に攻撃成功！ 致命傷かと思われます！』

「わかった！ 死体を全て片付けて撤退だ！」
「っ！」

無線らしい雑音の混ざった声。敵と声が会話している隙に距離を詰める。敵もそれに気付いた。話を聞く限り、今度は逃げるのが目的らしいが簡単には行かせない。敵がなにか取り出したのを見てその手をつかむ。発煙筒だった。落とすと、もくもくと煙を出し始めた。たちまち視界が悪くなる。敵が掴んだ手を離そうと殴りかかってきた。その拳を横にさばき蹴る。足に当たった。胴に攻撃しても効果がないから、それでいい。そのまま攻撃を続けようとしたが、暴れられ手を離してしまった。たちまち背を向け走る敵。すでに自分の周りは煙が立ち込めていて視界ゼロだ。

「くそ！ ソーラ！ 無事か！？」

逃がした敵は仕方がない。今は発砲音もまったく聞こえない。ソーラは無事か、それだけが気がかりだ。さっき来た方向を見当つて、走った。

第114話 真相

「ソーラ！」

「！」

茫然と座ってただけのソーラだったが、ルツカの声で我に返った。気がつくともう周りは煙だらけだ。

「ソーラ！ どこにいる？」

「ここです！」

そう叫んでからは袖で口を覆い、声のした方向へ歩く。発煙筒の煙ってどういうものだった………。不意に、服を引っ張られた。そのままルツカの走るのに従う。周りはよく見えないが、銃撃はもう行われていないようだ。戦闘は終わったのか？

煙の覆う範囲からはすぐに脱出できた。周りで複数の足音が聞こえるが、それが遠ざかって言っている。撤退をしているのか？ コンテナの壁に張り付き、人の気配が完全に消えるまで待機する。

「……………もう大丈夫かな？」

やがて足音は消え、静寂が戻った。服を持っていたルツカの手が離れた。それと同時に走る。

「店長！ 店長！ どこですか！？」

「……………」

店長の安否が気にかかる。いや、本当はわかっている。ルツカが止めずに黙っていることが、余計に胸を痛めた。

店長の姿を探すが見つからない。死体のひとつも転がっていない。結構な数の人間が死んでいるはずだが、全部片付けられたのだろうか？ とりあえず最後に店長を見た場所へ向かう。

やはり、店長の死体はなかった。かわりに、コンクリートの上の大量の血痕。

「……………」

目を閉じ、死者の冥福を祈る。喪失感は大いだが、不思議と涙は

出なかった。状況のせいだろうか？

「あれ？　あなたどこかで……………」

「え？」

頭上から声がした。若い女の声で、妙に聴き覚えがあつて。目を開けると、保健の先生——そして、店長のフィアンセとなるはずだった女性——がそこにいた。

強烈な罪悪感を感じて今すぐにこの場から逃げ出したくなる。しかし踏みとどまった。

「先生？　どうしてこんな所にいるんですか？」

「それは……人と合う約束をしたの」

「こんな時間にこんな場所です？」

「いいでしょそんなこと。そんなことより、ねえ。この近くで男の人見なかった？　中年の、人の良さそうな男なんだけど」

「それは……………それは、もしかしてお花屋さんの店長、ですか？」

「え？　ええ。そうだけど……………なんで知ってるの？」

「それは……………」

口ごもるが、この状況で事実を隠すことはできない。覚悟を決めることにした。

「先生、落ち着いて聞いてください。店長は……………死にました」

息をのむ声。当然だろう。

「ちょっと、ねえ、それどういうこと？　冗談は……………」

「冗談ではないです。店長さんは、その、ある犯罪に手を出してたんです。それでトラブルに巻きこまれて……………それで……………」

悪い人間に命を狙われた。そう言おうとして、果たせなかった。

突然、頬に痛みを感じた。

たぶん要らぬ心配だろうが、まだ敵がいるかもしれない。それに今はソーラをひとりにさせておいた方がいいだろう。ルツカは辺り

をしばらく歩きまわることにした。

回収し忘れた銃器がいくつか落ちていたが、死体はひとつも転がっていなかった。血までは掃除する時間がなかったようだ。ひときわ大きな血だまりを見つけた。そこから引きずったような跡があったが、それが途中で途切れている。まあ、敵の足取りを追うのは無駄だろう。

血だまりの真ん中にナイフが落ちている。それを拾った。武器なら落ちていた銃をいくつか拾ったから足りている。だからこれは、また別の理由。血のべつとりとついたナイフをじっと見つめ、鉄の香りを嗅ぐ。体中の血がざわめく感覚。そのままナイフを口元まで運んで……………

——パンツ

「？」

音がした。銃声とか物騒なものではない。例えば、手をたたくような音。なにがあったのだろうか？ 音のした方向へ向かった。

一瞬、なにが起こったのかわからなかった。頬に痛みを感じ、視界が揺れた。一拍置いて、状況を悟る。

「せん……せい？ どうして……」

「嘘言わないで！ そんなのでたらめに決まってるわ！」

恐ろしい剣幕で、先生は叫んだ。とても人の話を聞ける状態ではない。ソーラは打たれた頬に触れながら、話を茫然と聞く意外に何もできなかった。

「あの人が死ぬわけじゃないでしょう！ 今日はこちらで待ち合わせして、それでクスリをもらうの！」

「え？ 先生今なんて……」

「ねえ、知っているんでしょう！？ あの人はどこにいるの！？ ねえ！」

「わっ！」

先生がこっちに詰め寄ってきた。身の危険を感じて後ずさる。しかし、足がもつれて転んでしまった。先生はそれでも止まろうとせず、ソーラに掴みかかろうとして……………悲鳴をあげた。

先生の首筋に、ルツカがかみついている。真っ赤な血が一筋流れ、先生の服を染めた。ソーラも先生も、一瞬状況を理解できなかった。そうしている間に、首の肉を食いちぎった。力が抜け地面に倒れた先生は、信じられないといった表情でルツカを見上げている。首からどくどくと血が流れ出る。

「柳瀬君……………」

「……………」

ぞっとするほど冷たい目で先生を見下ろすルツカ。そしてサブマシンガンを向け、なんのためらいもなく発砲した。再び悲鳴が上がる。いくつもの銃弾が先生の右肩を貫いた。その腕をつかんで引きちぎる。銃弾による傷でちぎりやすくなっている？ まさか。いずれにしても正気の沙汰じゃない。

その通り。ルツカは普通じゃない。ソーラにとってははわかりきったことだった。しかし、先生にとっては？

先生の目の前で、引きちぎった腕の根元あたりにかぶりついた。柔らかい肉を噛み、血をすする。筋を噛みちぎり骨をしゃぶる。細かな肉片と滴る血がコンクリートを打つ。そんな恐ろしい光景の中心であるルツカの目は、活き活きと光っている。

やがて人肉の味を楽しみきったのか、腕を脇に放り投げた。そして先生を見つめて……………笑った。いつもの無害そうな笑顔。

「先生……………あなたはきつと、自分がどうしてこんな目にあっているのかもわかっていないんでしょうね」

この期に及んで先生は我に帰り、ルツカから逃れようと必死に動いた。片腕と両足を使い地を這う。しかしルツカに背中を踏みつけられ止まった。

「確かに、あなたと過ごした時間は楽しかった。あなたは魅力的な

人だった。でも……………」

先生の頭を蹴った。何度も何度も。執拗に。

「僕にはあなたよりも大切な人がいる。悪いとは思ってますが、そういうことです。……ひとりしかない親友に手出しはさせません」
首の折れる音がして、ルツカは蹴るのをやめた。顔中が腫れあがり、ところどころ皮膚が剥け血のにじむそれに、ルツカはもはや何の興味も持っていないようだ。

「ごめんね。でも、君が責められてるのがどうしても許せなかったんだ。大丈夫？ 怪我してない？」

ひとりしかない親友を気遣うルツカは、さっきまでの残忍さをまったく感じさせなかった。

第115話 さらに真実に近いこと

「先生はおっちょこちょいなところがあつたって言ってたよね？」
周りに落ちていた銃やらナイフやらを全て一か所に集めながら、
ルツカは言う。

「僕にも思い当たることがある。瓶を手に取りそこねてこかしてしまったり、なにもないところで転んだり……たぶん、大麻の副作用じゃないかな。手が震えたり、感覚がマヒしたり。そういう影響が出たんだと思う」

そんなこと言いながら、ナイフを手当たり次第に先生の体に刺していく。

「君に対して、あんなに感傷的になったのも、精神が不安定になったからかな」

「ぼくがこんな時間、こんな場所にいることに、なんの疑問もはさみませんでした」

「なるほど」

ナイフを刺し終ると、先生の服に銃をありったけ差し込み始めた。
「たぶんそれも、精神的にちょっとおかしくなったからだろうね」

「先生はここで店長にあつて、それでクスリを貰うんだって。そう言っていました」

「はやく貰いたいがためにあせってたのかな？」

銃もすべて差し終った。黒光りする銃の大量に飛び出したその死体をかつぎ、海に放り投げた。銃やナイフの重みにつられ沈んでいく先生の死体。

「これで、死体が発見されるまでちょっとは時間かせぎできるかな。その間に腐ってくれてもいいんだけど。夏前海って、そういうのどうなんだろう？ 腐臭もすごそうだけど………」

そしてソーラに向き直って、

「もうここにおいても意味がないし、行こうか？」

帰り道。ふたり並んで歩き名がら、続きを話す。

「先生は大麻を吸っていた。それも常習的に。店長から買っていたのかどうかはわからない。もしかすると店長から勧められて吸い始めたのかもしれないし」

「……………」

ソーラはずっと黙っている。仕方がないと、ルツカは構わずに語る。

「先生は、店長との結婚は不本意だって言ってた。店長の方から一方的に迫られて、先生の家族とかは祝福ムードで。どういう意味だったんだろう？ 店長が先生に大麻を勧めて、依存症で離れられなくしたのかな。本当に、見かけによらず恐ろしい人だ」

「……………それは、違うと思います」

「ん？」

「店長は、そんなに悪い人じゃないんだって。そう思います」

「……………続けて」

「あの戦闘で、一度ぼくは死にかけました。敵に銃を向けられて、ぼくはすぐには動けない状況で。店長は自分の体を盾にしてぼくを守ってくれました。……………悪い人間がそんなことしますか？ 好きになった女の人を、薬で離れられなくするなんて人が？ 自分を犠牲にしてぼくを守ってくれたんですよ？」

「……………どうだろうね。それは僕にもわからない。ふたりとも死んでしまったし、調べる手段もない」

「……………そうですね」

肩を落とすソーラは、見ていて痛々しかった。今どういう心境なんだろう？

「ねえ、まさかとは思ってるけど、自分が悪いことした、なんて考えてないよね？」

「……………」

「僕は店長の犯罪を知った。それをやめさせようとしたし、実行するのに期を見すぎたかもしれない。でも、つまるところ僕はなにもやっていない。関わりはしたけれど、それで何かが変わったことはないだろうよ。僕達がいなくても店長は今夜港で取引をして、そして襲われて死んだ。……………君はなにも悪いことはしていない」「なにもしてないのがいけないんです！」

不意に大声をあげたソーラ。気持ちは痛いほどわかるが。

「…………それは、なぜ？」

「だって…………だって、どこかで店長を止めることができたかもしれない！ それに先生も、ルツカがいなければ死なずにすんだ！」

「その結果として店長は大麻を売り続ける。依存症の保健の先生が学校で子供と接触し続ける」

「それは…………そうですけど……………でもっ！」

「はいはい。そこまで。あんまり自分を責めない方がいいよ？」

「あ…………」

今にも泣きそうなソーラが見るに堪えなくて、優しく抱きしめた。腕の中から嗚咽が聞こえる。

「泣いてもいいよ。そうだよ。ふたりが死んで、君は誰よりも悲しんでるんだ。……………ごめんね」

「いいえ…………悲しい…………のは……………うう……………ぼくが……………ぼくがなにもできなかった……………それが……………」

そこから先は嗚咽にかき消され、声になっていなかった。やがて大声を上げて泣きはじめたソーラに、ルツカは抱きしめる意外になにもできなかった。

翌日、深夜。武装集団のナンバー2である矢崎は、前日自分で指揮した作戦の報告書を作成していた。死傷者が数人、装備の喪失も

複数。そんな被害を出して遂行した任務は、仲間の抹殺だ。

書いていて、自分でも違和感を覚える。自分のやったことは正しいことなのだろうか？ もちろん上からの命令を確実に遂行したのは、組織として正しい行いだ。しかし個人的な感情としては？ あの男——花屋の店長をしていたらしい——を殺したことは、なんの意味があるのか？

携帯電話が鳴った。

『ヤザキ。頼まれていた、あのターゲットのことだけど』

相手は、少し日本語のイントネーションに違和感のある話し方をする女性。彼女もこの組織の構成員で、矢崎はある頼みごとをしていた。店長の素性やら普段の仕事ぶりやらを、他の仲間から聞いて話をまとめるということ。命令も作戦も取り消すことはできないが、知っておきたいことだった。

「話してくれ」

『……彼は、みんなから良い人だって評価を受けていた。優しくして礼儀正しくて……尊敬されていた。知ってた？ 彼、もうすぐ結婚する予定だったの』

「ああ。話ぐらいなら」

『それで、みんな祝福してた……ただ、ひとりだけ違うことを言っていたけど』

「なんだ？」

『なにかの拍子に愚痴をこぼしたことがあるんだって。それを聞いたのはひとりだけなんだけど、けっこうおもしろいことだった』

「……」

『彼に大麻を栽培するよう指示したの、彼のフィアンセだって。もともと薬の中毒だったのかしら。付き合ってる男から貰えば、買わなくて済む。他の人にも大麻を売れば、お金持ちの奥さんになれるって、そういう発想みたい。店長さんも、それはわかってたんみたいなんだけど……』

「惚れた弱みに付け込まれ、か。ひどい話だ」

店長の方も考えが足らなかったようだが。

『そういうこと。彼も悩んでたみたいだって。あの人が好きなのは自分じゃなくて大麻なんじゃないかって…………でも一方で、大麻の収入で私達の組織にお金を多く入れられるのはうれしそうだった』
「なるほどな。いろいろわかった。ありがとう」

『うん…………ねえ、ひとつ訊いていい?』

「なんだ?」

『あなたのボスの命令、あなたは正しいと思ってる?』

「それは……………」

この組織のトップは、麻薬が嫌いだと言っている。それに、社会に害をなすものも嫌う。そういうものを排除するのも、この組織の目的のひとつだ。そして矢崎や他の仲間達は、その考えに賛同して、こんなことをしている。

昨日、たしかにその目的のひとつを果たした。大麻の栽培業者の抹殺。人的、物的被害を出しながらもみごとに成功。しかし、その栽培業者も仲間のひとり。しかも、彼は組織に多額の資金を供給していた。単純には喜べないのは事実だ。

「さあな。どっちにしろ終ったことだし、組織の理念は曲げられない。あまり深く考えることじゃない」

『…………そう』

まだ何か言いたそうだったが、言葉を飲み込んだようだ。

電話が切れる。本当は、矢崎にだって思うところはある。だが、今の組織の状況で、なにができるというんだろう?

第115話 さらに真実に近いこと（後書き）

こんにちは。そちらです。

今回の他とは違い、アルミや業火が一切出てこない話を書きました。今まで悪役として書かれていたルツカ達の印象が変わったのならば幸いです。

次回からは「蛙とアルミニウム」のタイトル通り、アルミや業火の活躍する話を展開していきます。

幕間！ 家族のことを思った日に

会社から帰ってパソコンの電源をつける。デスクトップのアイコンをダブルクリックした瞬間、かれは一介の会社員から”竜牙”という名前の戦士となる。

＜竜牙さんがログインしました

packer…こんばんは

啓蒙者…こん

あるみん…こんばんは

竜牙…こんばんは

トビ丸…ちよつと聞いてくれよマイブラザー！

COCO…こんばんはー

エノケン…こんばんはー。

見慣れたこんばんはコールのなかに、なんだかおかしなものが混ざっている。

竜牙…なにがあったんだ話してみろ。あとマイブラザー言うな

トビ丸…それがひどいんだよお兄ちゃん！

竜牙…お兄ちゃんもダメだ！

あるみん…トビ丸のご両親が、トビ丸に結婚しろってうるさいらしい

竜牙…なるほどな

トビ丸…ひどい！ 隊長俺のセリフとりやがった！

あるみん…そしてさらに、ご両親は勝手に婚活パーティーにトビ丸を応募したんだって

トビ丸…そうなんだよ！ なんだよ婚活パーティーって！ 俺の嫁はナツメちゃんひとりだけだ！ まったく、余計な事してくれやが

って

トビ丸一押しのアニメのキャラについてはよくわからないが、言いたいことは他にあった。

COCO…こらトビ丸、あんまりおとーさんおかーさん困らせたらだめだぞ

そうそう、みんなのお姉さんもそう言ってることだし

エノケン…トビ丸が結婚しないのって、やっぱり上司の男と深い仲になりたいから？

竜牙…お前は黙ってる

啓蒙者…まあ、そういうことは置いておいて。親というのは孫の顔が見たいものらしいからな
あるみんな…そんなおっちゃんは、今日も独身？

啓蒙者…俺はまあ、うむ。

トビ丸…ほらー、おっちゃんも結婚してない。結婚なんてしてもいいことないぜ！

packer…でも、好きな人とかはいないんですか？

トビ丸…いるぜ！ 画面から出てこないけどな！

packer…そうですか……

そういえば、packerの好きな人も画面の向こうから出てこないな。意味は違うが。

竜牙…だがな、あんまりご両親を困らせるなよ？ 結婚はしないにしても、親孝行はしとくべきだぞ。

エノケン…親孝行したいときに親は無し？

竜牙…まあ、そういうこと なくなっって初めてそのありがたみに

気付くものなんだな

トビ丸…じゃ、いる間はありがたく思わなくていいってことだな！
啓蒙者…それは違うと思うぞ……

たしかに違うだろう。問題はそういうことじゃない。しかし、わかれというのも難しい話だろう。結局のところ、当事者にしかわからないことというのは確実に存在するのだ。

『なあ、竜牙』

数分後、いつものようにドラゴンにまたがり空を飛ぶ竜牙に、隊長が通信を入れてきた。隊全員に送られる通信ではなく、竜牙個人宛のプライベートチャンネルだった。

「どうした？」

『気分悪くしたらごめん。……竜牙って、親がないんだっけ？』

「……別に悪いとは思ってない。ただ、親は大事にしろって思っただけだ」

竜牙の両親は二年前、揃って他界した。既に社会人として独立していたので、生活していくのにまったく支障は出なかった。しかし陳腐な表現ではあるが、心に穴のあいたような感覚がしばらく消えなかった。生前はあれだけうっとおしく思っていたことが、今は愛
おいしい。

『あのさ、トビ丸はあんな奴だが、ちゃんとわかってると思うぞ？』

「なにがだ？」

『お前の気持ちとか。あんな言い方したのは、雰囲気が重くなりそうだったから。竜牙のせいだ』

「む……すまん」

たしかに、自分にしかわからない感情に振り回されていたかもしれない。それは悪いとは思った。しかし、隊長の言いたいことは他にあるようだ。

『……俺の親について、話したことあったっけ？』

「ああ、前に一度な。それがどうした？」

たしか、隊長の父親は海外に単身赴任しているんだったか。最後に帰ってきたのは丸一年ほど前で、それはだいたい三年ぶりの帰国だったということだ。一方の母親は……まあひどい話であるが、ひきこもりのネグレクトらしい。

なるほど。両親共に健在であっても、これではいけないのと同じかもしれない。

『たぶんそれでも、お前ほど寂しい思いはしてないだろうな。きょうだいはいるし、お父さんと連絡しようと思えばできる。……母については、いい思いなんて全くないけれど』

「そうか………本当にそうか？」

隊長は小学生で、子どもだ。親が恋しくないなんてあり得るのか？

『それは………まあ、お父さんはちょっと……いや、かなり変な人だし。母親は……母は嫌いだ』

「ひきこもりだから？」

『うん。なんていうか、もったいないじゃん。人の命は短いのに、なにもせず寝て暮らすのは……なんかその、醜い』

醜いときたか。となると、隊長の知っているもうひとりのひきこもりはどうなんだろう？

「なあ、p a c k e r についてはどう思ってるんだ？ あいつも醜いって？」

『まさか。醜いなんて思うはずない。じゃないと関わろうなんて思わない。俺が初めてネットで仲良くなった人なんだ。なのに、すご

く落ち込んでたからさ。それに、母みたいになってほしくなかったし。それで必死に励ました。話を聞いてあげた』

「なるほどな」

『……そういえば、親の話に戻るけど』

「何だ？」

『あるみんな竜牙さん、三時方向です』

「おう！」

話題のひきこもりの言葉に従い、右へ方向転換。いた。敵ドラゴンが炎を吐きながら接近してくる。こちらも近づきながら銃を撃つ。「それで、話の続きは？」

『あいつはなんにもいわないけれど、自分の両親にはすごく感謝してるみたいだぞ。ひきこもりになんかなかった自分を見捨てず、優しく接してくれるって』

「それが親ってもんだ。なにがあっても、子は可愛いものらしい」
ふたりのコンビネーション抜群の射撃が、敵を次々撃ち落としていく。

『なあ竜牙、お前はやっぱり正しいと思う』

「なにがだ？」

隊長が槍をひと突き。敵の一体が体を貫かれた。

『子供も、親が好きだってこと。………なんだかんだ言って、俺もお父さんが好きだ……変な奴だったのはどうしようもないけど』

「そっか。うん。親子ってのはそういうものだ。いいものじゃないか。大事にしろよ」

敵の最後の一体が墜とされた。packerが伝えるには、他の位置での戦闘も終わりに近づいてるとのこと。いずれも敵を殲滅できたらしい。ミッションクリアだ。

第116話 わかりやすいエサ

夏真っ盛り。家の外ではセミがやかましく鳴いて、アスファルトには逃げ水が出現する。外にはそんなものがある。外には。外限定で。家の中には、ない。

夏休みも間近に迫った七月の土曜日。冷房のよくきいた部屋の中で、アルミはベッドに寝転び読書中。地球温暖化なんてのは都市伝説。資源は限りあるものだが、使ってこそその資源でもあるだろう。エコロジーがどうかという人間は世の中にいっぱいいるんだから、そういう人間だけ地球にやさしいことをしていればいい。こっちは文明の利器を大いに活用させてもらうさ。そんな、ずいぶんと身勝手な事を考えながら過ごすのはなかなかいいものだ。そうでなくても、休日というのはいいものだ。つまらない授業やひとりを除いて嫌いなクラスメイトから解放される。家に帰ってネットゲでもしようかと思ってたら校門で氷河の悪人面にでくわすこともない。いや、それはそれで楽しくもあるのだが、休みも必要ということだ。

「アルミ、お客さん来てるけど」

ドア越しに唯の声。

「うん……うん？ 誰？」

「えっとね、テツさんって人だけど、知ってる人？」

「……………うん、知ってる人。わかったすぐ行く」

テツがなんの用だろう？ あんまり面倒な事じゃなければいいんだけど。わざわざ家にまで来るほどの用事って？

「結婚してください」

「お断りします」

「そうですか……」

ダイニングテーブルをはさんで向かい合い、いきなりそんなことを言われた。いつものことと言え、いつものことだから、いつものように返す。

「ねえテツ、もしかしてそれ言うだけのために家まで来たの？」

「まさか。そんなわけないじゃないですか……あ、でもプロポーズならいつでも受け付けますよ！」

「早く本題に入れ」

「はい。えっとですね、明日の日曜日、私と遊びに行きませんか？」
「……………」

「つまり、デートのお誘いです」

「どこに？」

「遊園地ですよ。はい」

テツがファイルにはさんだなにかをアルミに見せた。新聞にはさन्दであるような広告で、市内にある遊園地のものだった。

「ここを見てください。アルミ様、こういうの好きでしょう？」

テツの指す欄にはこう書いてあった。『トンファーマン スペシャルヒーローショー』

トンファーマン。毎週水曜日夕方七時から絶賛放送中の特撮番組。最強の武器トンファアを操る正義の味方トンファーマンが、世界征服をもくろむ悪の組織と戦う話。

「アルミ様、こういうの好きですか？」

「うん。好き」

即答。アニメと特撮が好きな小学生。あんまりおかしいことではない。

「そうだと思ってましたよ。ねえ、一緒に観に行きませんか？」

「えっと……」

「どうでしょうか？ あ、ショーの後握手会があるらしいですよ」

「……………」

自分の心が揺れ動いているのがわかる。テツ——この女には一度殺されかけた。敵意があることを隠そうともしなかった——とふたりきりでどこかへ行くなんて危険極まりない。しかし一方で、テツは自分達の味方であるのも事実である。それに関しては、テツも上司である市長も嘘をついてない。つまり、もしかしたら危険はないのかもしれない。だとしたらこの誘いは魅力的じゃないか。

普段からインドア派を自称するアルミは、遊園地などの娯楽施設はほとんど行ったことがない。外出することはあるのだが、ほとんどが本屋かゲーム屋などだ。遊園地で特撮ヒーローのショーがあることはもちろん知っているが、なんとなく関わらないでいた。これはいいい機会かもしれない。命の危険さえ伴わなければの話だが。

「あ、そうだ。出演俳優さんのトークショーもあるらしいですよ」「行く！」

「もうひと押し」に見事に押されたような気分だが、気にはするまい。好きなものは好きだからしょうがない。それに、危なくなったら逃げればいいか。

「本当ですか？ よかった！」

「わっ！」

喜びを隠そうとしないテツがテーブル越しに抱きつこうとするするのを押しとどめる。まったくこの人は……

「むう……では、明日の朝にお迎えにあがります……あ、ちなみに」
「？」

「ここから、結婚を前提としたお付き合いに発展することは」

「ありません！」

なんでいつもそこに話を持っていきたがるんだろう？

浅倉の家を辞したテツは、そこかしばらく歩いた。もうアルミの目の届く場所ではないはずだ。携帯電話を取り出した。通話の相手は、怪盗ルピナス。

「あ、叶さん。アルミ様ですけど、了解してくれました」

『つまり、『デート』に来てくれるってこと？ それとも、『作戦』に参加してくれるってこと？』

「デートの方です」

『よく受けてくれたわね。嘘はばれなかったの？』

叶は若干呆れ気味だ。

「嘘はついてませんよ。事実を隠しただけです。そうすれば、アルミ様には気付かれないうまいみたいです」

『そういうもんなの？』

「ええ、あとは動揺を表に出さないことです。目の動きとか表情の変化から、嘘を見抜くらしいので」

『……さすが、あの子のことならなんでもお見通しなのね……』

「ええ。それはもう私の夫ですから」

『勝手に夫言うな』

「まあ、向こうから裏があるのかなんて質問が来たら、一発でばれてしまったでしょうね。つまりは、運がよかったということでしょうか」

『結局は運か……まあいいけどさ。ねえテツ、もう一回訊くけど、アルミはこれをただのデートとおもってるのよね？』

「はい」

『裏であなた……それとあたしがなにを企んでるか、知らない』

「ええ。そうですよ」

『心苦しくならない？ 好きな人をだましたりして』

「それは……」

予想された質問だが、やはり心が痛んだ。自分のすべきことと、したいことを秤にかけ、どちらも満足させられる方法をとった。人はそれを中途半端と言うだろう。そして、これは最もまずい判断かもしれない。

「大丈夫ですよ。アルミ様は聡明な人です。いざとなったらなったときで、ちゃんと戦ってくれる人ですよ」

つてめて明るい声で言う。叶ではなく、自分自身に言い聞かせるように。

「それに、まだ事が起こるって決まったわけじゃないです。私達にするのは警戒だけで……だったら、これは普通のデートですよ。なにもおかしいことのない、ただのデート………私だって、普通に恋愛とかしてみたいんですから」

『そう……だったらいいけど。うまくいけばいいね』

叶はまだなにか言いたそうだったが、結局はそのまま通話を切った。

実のところ、胸は痛んだ。しかしやると決まったことなのだ。

第117話 たくらみごと

「アルミ、テツさん来たけど」

「ん……あと十分待ってほしい」

「いいの？ お客さん待たせて」

「うん。テツだったら大丈夫」

「……………そう。わかった」

そういえばテツは、いつ迎えに来るかは言っていなかった。日曜日の朝は七時から九時まで、アニメと特撮番組を観る時間なのだ。トンファーマンも好きだが、こっちも同じぐらい好きなのだ。

「まったく、せっかくの休みだったのに」

普段の”裏のお仕事”は夜にすることが多い怪盗ルピナスこと如月叶にとって、休日は睡眠時間を確保できる貴重な日だ。それなのに数日前にテツから頼まれごとをされた。とあるミッションに参加してほしいと。とある人物を、できるだけ本人に気付かれないように警護する。もしかしたらなにかが起こるかもしれないし、なにも起こらないかもしれない。そんな任務。

他でもないテツの頼みだったから引き受けたものの、全く気乗りはしなかった。今もこうやって拳銃の整備をしているが、すぐにでもベッドにダイブしたい気分だ。

おまけにテツは、あの小学生を作戦に同行させるつもりだ。なるほど、あの小学生は使える。緊急事態においても冷静な対処をしてくれるだろう。しかし、アルミは今日の作戦のことを知らない。テツが意図的に教えなかったのだ。つまり、アルミにとって今日行くのはただのデートだ。

「あの子、怒らないかな……」

心配なのはその一点だけ。テツはアルミが大好きなようだが、ア

ルミはテツのことを好きではない。というか、苦手とすら思ってるだろう。デートの誘いに応じたのだって、テツのことが好きだからではなく、特撮ヒーローのショーに釣られたからだ。真相を知ったら、さてどうなることやら。

「ま、やってみるしかないか」

整備が終わった銃にマガジンを入れる。人の集まる場所でやることだから、あまり派手な銃は使いたくない。もちろん、何も起こらないのが一番だが。

「ごめんテツ、待った？」

玄関先で想い人の姉に待たせてしまつてと謝られ、こちらでも突然のお誘いで申し訳ないと謝って。そのまま謝罪合戦がしばらく続いた。それがそろそろ世間話に移ろうかというタイミングで、アルミ出てきた。

「いいえ、待ってませんよ……では唯さん、弟さんをお預かりしますね」

「いつてきます、お姉ちゃん」

「いつてらっしゃい」

唯に挨拶をして、ふたり並んで歩きだす。今日のアルミもいつもと同じぐらい素敵だ。

せっかくのデートだし、テツだっておしゃれに気を遣いたかった。しかし今日のはただのデートではない。ひらひらのスカートとか穿きたかったのを我慢して、結局いつものサファリスーツを着ることに。これはこれで動きやすくていいのだが、なんというか色っぽさが足りない。これでアルミがいつもよりおしゃれな格好をしていれば恥ずかしかったのだが……その心配は全くの杞憂だった。

アルミの服装はいつもと変わっていない。まあ、ファッションに気を遣うような性格ではないことはわかっている。半袖のシャツに

半ズボン。それに、青い色のリュックサック。なるほど。いつか、この小学生と初めて対面したあの日と、お互い同じ服装だ。

あの日、アルミに対してテツは、半分勢い任せで探りを入れた。この少年が殺人鬼なのかどうかをだ。アルミは自分を罪のない人間だと装うとしたが、テツはそれが嘘だと見抜いた。一方のアルミも、テツが普通の人間ではないということを察していた。互いの腹の探り合いに始終していた。では今日は？ あの日から、ふたりの関係はどう変わった？

「そういえばアルミ様、今日は武器とか……持ってきてませんよね？」

「え？ えっと、いつも持ってるから……ほら」

そう言って、ズボンのポケットからナイフと拳銃をのぞかせる。

「だめだった？ セツかくのデートなのに」

「いいえ！ そんなことはないですよ！ ……いつも通りのアルミ様が素敵だと思っただけです」

なるほど、いつも武器を携帯しているのか。それは好都合。しかし、アルミはそんなことをわざわざ訊いてきたことを不思議に思っただよう。

これはこれで、腹の探り合い。こんなので大丈夫なのだろうか？

むこうはよろしくやっているのだろう。こっちもひとり少し寂しい。テツには内緒だが、こっちも人を呼ぶことにした。

「で、なんだよ急に呼び出して」

分解したセミオートのリフルが入ったアタッシュケースを持たされて、叶に不平を言ったのは氷河だ。ふたりで並んで、休日の街を歩く。

「文句言わない。これも仕事の内だから」

「いいけどさ………なんなんだよ、仕事って」

「まだ秘密」

「……………それで、なんで俺だけなんだ？ アルミや業火は？」

「あたしと一緒に動くのはあなただけ。あのふたりにも連絡とってるけど、別のことをしてもらうつもり」

「そうか」

「つたく、なんなんや……」

朝早くに電話がかかってきた。怪盗ルピナス氏から、指定した場所に行ってアルミとテツの様子を見ていなさい、と。わけがわからない。

しかし、アルミとテツがなにをしてるかも気になる。そういうわけで業火は、指定された場所——市内にある遊園地——へと向かっていた。やっかいな事にならないければいいのだが、あのふたりが絡むとろくなことがない気がする……………

浅葱市でも有数の遊園地でしかも休日となれば、園内は多くの人間でごった返していた。お互い離れないように、自然と手をつなぐ。というか、テツが強引につないできた。

「ねえ……テツ？」

「はい？」

「恥ずかしいから、やめて」

そのままアルミに後ろから抱きつき、後頭部に胸を押し付けようとしたところで、さすがに止めさせた。

「えー」

「えーじゃない」

「はい……………ねえアルミ様」

「なに？」

「ショーまで時間がありますからお化け屋敷行きませんか？」

「怖がるふりして抱きつくからダメ」

「そんなことしませんよ。アルミ様より私の方が、度胸ありますし」「本当に？」

「ええ。本当ですよ」

度胸があるのは本当だ。そして思いっきり抱きつくつもりだが、後ろから抱きついてるから、表情は見られない。嘘は見破れないはずだ。

「そう……だったらいいけど」

アルミはしぶしぶといった様子で了承してくれた。これで好きなだけ抱きつける。

それに……お化け屋敷に誘ったのは抱きつくことだけが目的ではない。

周りは家族連れでにぎわってるのに、こっちはひとりだ。若干の寂しさを覚えつつ、業火は少し離れてアルミとテツを見守る。アルミに抱きつくテツに少しの嫉妬心を抱きつつも、観察を続ける。

「……うん？」

一瞬、テツがよそ見をした。その時の目つきが、さっきまでのと少し違うきがした。より鋭い視線。その視線の先を見るも、いくつかの家族が楽しそうにしているだけだった。再びテツを見ると、いつも通りアルミにデレデレしているだけ。なんだったんだろう？

第118話 ヒーローショー

予想通りというかなんというか、テツは抱きついてきた。わざとらしく悲鳴をあげてうしろから。まあいつものことだし、たまにはこういうこともいいか……なんて思ってみても、やっぱりウザい。

「ねえテツ……」

「なんでしよう？」

「怖くない」

周りから出てくるお化けの人形やら役者さんやらが驚かせようがんばってるのがわかるが、テツは明らかに怖がってるふりをしてるだけ。アルミも、後頭部に感じる柔らかい感触に気を取られてあんまり周りが目に入らない。もともと動じない性格ではあるが、まったく楽しめない。前に行く家族連れのノリがうらやましい。素直に怖がる子供と、それをほえましげに見つめる両親。これはこれで、少しうらやましい。

「ねえボク、どうしてひとりなの？ お父さんとお母さんは？」

「あ、大丈夫です。ちょっと友達を待ってるだけで……」

おせっかいそうなおばさんから声をかけられた。やっぱり小学生がひとりで遊園地ってのは変か。ベンチにつまらなさそうに座っていたのも原因かもしれない。気をつけなければ。

テツとアルミがお化け屋敷に入っていった。業火も中に入ることを考えたが、あんまり近づいてむこうに気付かれるわけにもいかない。出口を遠巻きに見られる場所で行ってくるのを待つことにした。

待つことにしたのはいいが、暇だ。視界の端に、お化け屋敷とは別の建物が入る。あれは……ミラーハウスか。壁がすべて鏡張りになっている迷路。今まさに、一組のカップルが出てきた。楽しそうだ。別の方向を見ると、かわいい熊のきぐるみが風船を配っていて子供

たちが集まっている。楽しそう。ますます自分がみじめになった。
いやいや、今の任務は楽しむことじゃない。お化け屋敷からアル
ミ達が出てきた。尾行再開だ。

「ヒーローショー観るぞ」

少し不機嫌そうで、でも楽しそうなアルミ。やっぱり誘ってよか
った。ふたりしてステージへと向かう。少し時間が早い、アルミ
は気にしていないようだ。良い席をとりたいとか、そういう考えな
のだろう。

ステージ周りの席には、やはりまだ人影はまばらだった。アルミ
はテツの手を引いて、まっすぐ最前列へと向かう。その表情は笑み
を隠しきれてない。今か今かとショーの始まりを待つ子供。いつに
も増してかわいい。

時間が経つにつれ、周りに人が集まり騒がしくなってきた。親子
連れが多かったが、若い男がひとりでいるというのも少なからず見
受けられた。

「あの、アルミ様？」

「なに？」

「例えば、あの人とか」

と、小太りで丸顔の男を気付かれないように指さす。

「あの人とか」

決して不細工ではないが、痩せていて神経質そうな別の男を指す。

「あの人達も、このショーを観に来てるんですか？」

「それは……そうじゃないかな」

「でもこれ、子ども向けのショーですよ？」

「そうだけど……まあ、こういうのが好きな大人もいるんだよ」

「……そういうものですか」

楽しげなアルミを、後ろの方の席から観察する業火。しばらく待つと、ショーの始まりの時間になった。たぶん番組の主題歌らしい音楽が流れてステージの袖から若い女性が出てくる。司会のお姉さんか。

「みんなー、こーんにーちわー」

こーんにーちわー。何人もの子供が声をそろえて言う。もちろんアルミもだ。しかし日本人特有の奥ゆかしさゆえか、総じて声が小さい。

「あれー？ みんな元気が足りないぞー。もう一回、こーんにーちわー！」

こーんにーちわー！ 今度はもっと大きな声がした。お姉さんも満足したようだ。

「今日はトンファーマンショーに来てくれてありがとうー。ショーが始まる前に、みんなにいくつかお願いがあります」

以下続く、ショーの間のフラッシュ撮影はご遠慮くださいとか、よく聞く注意事項。そして……

「とっても強いトンファーマンだけど、ピンチになっちゃうときもあります。そんな時はみんなで『がんばれトンファーマン』って、応援してください。じゃあ、一回みんなで言ってみよっか！ せーのっ」

がんばれトンファーマンー。

「もう一回！」

がんばれートンファーマンー。

「その調子！ トンファーマンがピンチになったら絶対に言ってね。それじゃあトンファーマンショー、始まるよーっ！」

ステージの袖へお姉さんが引っ込む。入れ違いに、着ぐるみが現れた。赤っぱい色のごつごつした体に、鬼のような顔を持つ異形の怪物。

「ああ……久々の地上だ……暴れまわりてえなあ！」

見た目に違わず禍々しい低い声でそんな物騒な事を言う。そして有言実行とばかりにステージ上でひとりで動き回る。

「へっへっへ。お前ら、もつと怖がってもいいんだぜ……その恐怖が俺たちを強くするからな！」

「そこまでだ、クリムゾンズ！」

そんな声がした。よく通るきれいな声。直後、「トンファア」という叫び声と、効果音。

袖からもう一体の着ぐるみが出てきた。メタリックな塗装の、明らかにヒーローとわかる格好だ。

「はっ！ そろそろ来るころだと思ったぜトンファアマン！」

つまり、あのメタリックなのがトンファアマンで、怪物なのがクリムゾンズなのか。クリムゾンズなる怪物が続ける。

「トンファアマン！ 今日こそはお前を倒し、世界征服の足がかりとしてやる。この、クリムゾンズのひとり、クリムゾン・ゴブリンがな！」

クリムゾンズというのは彼らの集合の名前らしい。そして怪物個人の名前が「クリムゾン・ゴブリン」というのか。

そんなことよりも、トンファアマンとゴブリンはすでに臨戦態勢だ。互いに武器を構え睨み合う。ゴブリンの武器は大きめの剣で、トンファアマンの武器はもちろん一双のトンファアだ。

「死ね！ トンファアマン！」

ゴブリンがそう言ってトンファアマンに切りかかる。それを片方のトンファアで受け止め、もう一方のトンファアでゴブリンの体を殴打……かわされた。距離を取る。

「とお！」

今度はトンファアマンから。剣とトンファアのぶつかる音。両者一歩も譲らない。ここでトンファアマン、このままじゃ埒が明かないと判断したか、

「トンファア！ トルネード！」

そう叫びポーズをとると、効果音が流れた。次いでトンファーマンが両手を横にまっすぐ伸ばし。回転しながらゴブリンに突っ込む。ふたつのトンファーマンが回転に合わせてなんどもゴブリンに当たる。そして最後に、

「トンファーマー！ フィニッシュ！」

少し離れて、トンファーマーをクロスさせる。そして効果音。トンファーマーからビームでも出ているのか、ゴブリンは叫び声をあげて飛ばされステージから退散した。

「はっはっは！ どうだ」

そしてかつこよくポーズを決めるトンファーマン。これにて一件落着……

「これで勝ったと思うなよトンファーマン！」

どこからともなく声がした。辺りを見渡すトンファーマン。しかし誰も見あたらない。

「誰だ！？」

「ふははははははは！」

高らかな笑い声。なにが起こるのか……？

第119話 みんなの声が

「そう簡単にやられるようならば、クリムゾンズの名がすたるわ！」
暗い感じの音楽が流れ、現れたのはさっきのゴ布林。いや、外見が少し変わっている。角が長く、曲がり方が大きくなっている。体中からトゲのようなものが生えていて、なんか強そうだ。剣は持っていない。

「貴様は……」

「俺はクリムゾン・ゴ布林・グレート。そうだ、今までの俺とは一味ちがうぜ！」

そういうが早いか、ゴ布林改はさっきまでと比べて少しキレの良くなった動きでトンファーマンに肉薄。その腹をなぐった。トンファーマンはうめき声を上げ、後ずさる。

「くっ……強い……」

ダメージを受けたトンファーマン。しかしそこはスーパーヒーロー。敵に果敢に立ち向かう。トンファーマンを構え敵に接近、攻撃を繰り出す。ゴ布林改はそれをことごとく受け流す。

「弱い！ 弱いぞトンファーマン！」

ゴ布林改の蹴りがクリーンヒット。トンファーマンは後方へ吹っ飛び、地に伏した。

「そんなものかトンファーマン！ 所詮貴様は、我らクリムゾンズの世界征服作戦の踏み台でしかないのだあ！ ふははは！ ふははははははは！」

高らかな笑い声。聞くだけで気分が悪くなってくる。それは他の観客にとっても同じようで、業火の周りあちこちから声援が聞こえる。「トンファーマンがんばれー」と

「っ！ そうだ……俺は負けるわけにはいかない！」

倒れていたトンファーマンが、ゆっくりと起き上がり始めた。痛みに耐えるように、傷をかばうように。

「クリムゾン・ゴ布林・グレート！ 貴様は確かに強いかもしれない！ だがな！」

ここでキツと客席の方を向くトンファーマン。

「俺はひとりじゃない！ 会場みんなの声援が俺を強くするんだ！」

トンファーマンがんばれー。その声はだんだん大きくなっていく。トンファーマンがんばれー。業火もそれに参加して、声を張り上げる。

「うおおおおおおお！」

声援により力がわいてきたのか、雄たけびをあげ体を震わせるトンファーマン。

「覚悟しろ！ クリムゾン・ゴ布林・グレート！」

そしてゴ布林改に再び殴りかかる。相手もそれを受け流そうとするが、失敗。顔面にトンファーマーが直撃。

「ぐ……なんだこの力は……」

よろけながら後ずさるゴ布林改。さらにたたみかけるトンファーマン。

「この力か？ 貴様にはわかるまい！ この、絆の力はな！」

「ぐわああああああ！」

ゴ布林改は断末魔の咆哮をあげてステージの袖に消えていった。トンファーマンは再びこちらに向き直り、

「ありがとう、みんな！ 会場みんなの声援のおかげでクリムゾンスに勝つことができた！ しかしまだ戦いは終わらない……俺はこれからも戦い続ける！ だからこれからも応援してくれ！ じゃあな！」

最後にびしっとポーズを決め、颯爽と去っていくトンファーマン。入れ替わりに最初のお姉さんが出てきた。

「みんな、今日はトンファーマンショーに来てくれてありがとう。トンファーマンかつこよかったよね。……それでは、これから握手会と写真撮影会を行います。皆さんのお手持ちのカメラで………」

すでに立ち上がり、席を後にしようとする客もいるが、多くは座ったまま。もちろんアルミもだ。これから始まる握手会と写真撮影会。袖から再びトンファーマンが出てきた。あがる歓声。アルミもうれしそうだ。それを、はるか後方から様子を見守るだけにとどまる。あの人達に混ざって楽しみを共有できないのは残念だ。そもそも自分は、このショーやその元となるものを知らないのだが。

「なあ……叶……」

「静かに。黙って登りなさい」

「へいへい……」

氷河はさつきから文句を言うばかりだ。ま、気持ちはわからないが、

ふたりは今、とあるビルの屋上目指して階段をひたすら登っていた。もちろんこの建物の人間に許可など取っておらず、いわゆる不法侵入である。というか、侵入すらしていないのかもしれない。階段とは屋内にあるのではなく、緊急時に非常階段として使われる外に張り出したもの。人目につくことを避けての判断だが、それでも疲れることはつかれる。

「そろそろ屋上に着く。人がいるかもしれないから、静かに歩いて話さないで」

氷河にそう耳打ちする。氷河が頷くのを確認してから、ゆっくり登るのを再開した。

普段のアルミからは想像もつかないぐらいのはしゃぎっぷりに少し驚いた。いつもは冷静で、あまり表情を変えないアルミだが、今日ばかりは特別なようだ。トンファーマンの着ぐるみに抱きついた

り手を握ったり、一緒にポーズをとったり。周りの小さな子供と比べたら少し浮いている気もしたが、テンションの高さは変わらない。そんなアルミは……かわいかった。普段見せない魅力というやつか。

ステージを後にしてからも、アルミは上機嫌だった。この後の予定はなにも決まっていらない……と、いうことにアルミに対してはなってるから、こちらのリードになんの疑問も持たずに素直に従った。こっそりと、ある方向を見る。異常なし。このままなにもなく一日が終わればいいのだが。

楽しそうなアルミと、それを見て微笑ましげなテツ。テツにとって、あんなふうにはしゃぐアルミは初めてかもしれない。

その後アルミとテツはどこへ行くとも決めずにフラフラと園内を歩いている。リードしているのはテツ。………テツか。

気になることがある。テツが時々、あらぬ方向を見る。チラチラとさりげなく装って何度も。一度や二度ならともかく、回数を重ねられると不審に思う。なにを見ているのかわからないし、今のところそれ以外の動きがないため業火もどうすればいいかわからないのだが。

ふたりは今、ベンチに座ってなにか話している。少し離れたところで、熊の着ぐるみがたくさん風船を持って配っている。子供がそれに群がる。着ぐるみがカエルだったら少しは心惹かれたが、熊は興味の対象外だ。それにしても……熊の動きがなんとなくぎこちない気がした。たぶん、さつき着ぐるみのヒーローショーを観たからだろう。ヒーローショーの着ぐるみと風船くぼりの着ぐるみでは、中の人のレベルも違うんだろう。

いや違う。そんなじゃない。熊は大勢の子供に囲まれて、立ちすくんでる。どうすればいいかわからないといった様子だ。その熊

に、アルミが近づいているのに気付いた。風船を貰いに来たのか？
テツは、ベンチにすわったまま。アルミに視線を向けているが、
その目は冷たい。さっきから、よそ見をしている時の目と同じだ。

おかしい。なにかおかしい。

第120話 わかってはいたこと

「アルミ様、風船取ってきてください」

「……なんで？」

「それは……もちろん、風船を持つアルミ様がかわいいからに決まってるじゃないですか！」

「……………」

本気でそう言ってる。このことについては嘘は言っていない。

「ほらほら。早く行ってくださいアルミ様」

テツに背中を押されて促され、強引にけしかけられた。子供の群がる熊の着ぐるみへと、気乗りしないまま近づく。この熊素人か。動きがぎこちなく、子供の群れの中で棒立ちしている。風船を手に持ったまま、周りを見渡すだけ。アルミとも一瞬目があつたが、特に特別な動きを見せることなくよそに目を向けた。まあ、単に中の人が下手なだけだろう。さっさと風船もらって戻るとしよう。

子供をかきわけ熊に近づく。もうちょつと。風船に手を伸ばして

……

「え……？」

熊が手を離し、大量の風船が空高く舞い上がる。思わずそれを目で追う。しかしそれは一瞬のことで、すぐに熊に視線を戻す。熊はあわてる様子もなく、それどころか飛んでいく風船に目もくれず、子供のひとりを凝視していた。次の瞬間熊がその子供に手を伸ばした。アルミは咄嗟にそれを阻止しようとやはり手を伸ばすが、届かない。熊は子供を抱え、他の子供を掻き分け逃げようとする。周りの子供は状況を理解してなかったり、あるいは風船を見上げていたりと皆立ちつくしている。熊が子供から抜け出し、走る。アルミもそれを追いかける。周りの大人たちも最初は茫然としていたようだが、すぐに我に返り熊を止めようと駆けだす。しかしその時誰かが

悲鳴をあげ、また一瞬の静寂が訪れる。偶然近くにいて、熊を取り押さえようとしていた警備員が倒れた。こけたわけではなく、何者かに殴られたかのような倒れ方。なにかおかしいと多くの人がその警備員を見つめる。すると警備員の頭から、たらたらと赤い液体が流れ出た。

血。

大人たちがそれを認識した瞬間、パニックが起こる。逃げまどう人々。はぐれた子供を必死に探そうとする親や、相手を見切りひとりで逃げ出そうとするカップルの片割れ。大混乱のなか、熊の着ぐるみは子供を抱えたまま逃げていく。そうはさせるか。

あの警備員は狙撃されたのか。狙撃手はあの熊の仲間で、逃走を援護した。追手を排除と場のかく乱。そのいずれかあるいは両方が目的。

アルミは人々の間を駆け抜け、熊を追いかけた。狙撃は怖いが、たぶんなんとかなるだろう。

予想していたことだが、起こらない方がいいことが実際に起こってしまった。

「彰吾!？」

隣のベンチに座っていた男——今日一日監視していた家族の父親——が驚いて立ち上がった。熊に持ち上げられた子供の親だ。すぐに熊を追いかけようとするが、テツはその腕を掴んで止めた。

「なんだ君は!？」

当然男は怒り、テツを手を振りほどこうとする。年上で、しかも男であるため力は強いが、テツだって負けるわけにはいかない。あの子の母親らしき女性も驚いて駆け寄ってきて、なにか言おうとしたがそれに被せるように、

「落ち着いてください。ここで騒いだら相手の思うつぼですよ。ね、園長さん」

その言葉に男は目を見開いたが、すぐに険しい表情になった。あの熊の仲間と思われたのかもしれない。

「大丈夫ですよ。私はあなたの味方です……彰吾くんでしたっけ、お子さんは、必ず取りかえますから、私の話を聞いてください、ね？」

「本当だろうか？」

男は今にも食ってかかろうかといった表情でにらみつけてきた。周りを見ると、数人の警備員がテツ達を取り囲んでいる。すぐに取り押さえる体勢だ。まったく、他にすることがあるだろうに。

「ええ、本当です。私の仲間がお子さんを追っています。とりあえず、落ち着いた場所で話ませんか？」

笑顔でお願い。敵意がないことを伝える。

「……わかった。信じよう。こっちだ、来い」

しぶしぶといった面持ちながらも冷静さを取り戻した男。テツが手を離すと、男は警備員と妻を引き連れて歩き出した。熊の逃げていったのとは別の方向だった。

携帯電話のメール打ち込み画面を氷河に見せる。『私が突入してから5秒後についてきなさい』そう書いてある。氷河が頷くのを確認して、拳銃を取り出し上を見る。残り数段を静かに、しかし瞬時に駆け上がる。屋上に出て視界が開ける。人影がふたつ。しゃがんでいるのと寝そべっているの。姿を現してから一拍置いてこちらに気付いた。まず、座っている男に発砲。咄嗟に動いて避けられた。そのまま男に肉薄。手に持っている拳銃を掴み、射線をそらしつつもうひとりに発砲。寝ていたために起き上がるのに時間がかかったらしいが、それでも避けられた。男を引っ張り、もうひとりの敵の

方に投げる。敵は男を避け、こちらに向けて発砲。回避。男はそのまま屋上の床に倒れ込んだ。

さらに飛んできた銃弾をかわしながら敵に肉薄。この距離では銃は意味をなさない。ホルダーに銃を戻し、片手で相手の銃を持った手を掴み、もう片方で首を掴んだ。そのまま床に体をたたきつけようとすが、敵も叶の腕を掴み返し一緒に引きづりたおそうと。相手に頭突きを食らわせる。痛みで手が離れた。そのまま床にたたきつける。だめ押しとばかりに横腹をひと蹴りし、銃を頭に突きつける。

「動かないで。動くとき撃つ」

ちらりと後ろを見る。氷河が男にのしかかり押さえていた。

「氷河、そのまま動かさないで」

そして視線を、さっきの敵に戻す。

女だ。金髪で長髪の。外国人か？ 今はおとなしくしているが、傍らに転がっている狙撃銃の存在を無視するわけにはいかない。

叶の仕事は、狙撃手の排除。今テツがいる遊園地を上から完全に見渡せる建物が、ひとつだけ存在した。距離的にも、狙撃などで作戦の支援をするのは最適の場所。そこに敵がいる可能性は十分あった。今、叶はその仕事を見事にやってのけた。敵があくまで抵抗するようなならすぐにでも射殺するべきだったろうが、おとなしくしている。

だったら、聞き出したいことがある。

「ねえ、少しお話してもいいかな？」

「なにかしら？」

すこしイントネーションがおかしい。やはり日本人ではないのか。「訊きたいことがあるの……あなたの、いえ、あなた達の組織について。目的とか」

「……………」

「こんな白昼堂々にことを起こすとか。まともな神経でしてるとは思えない。何者なの？」

第121話 子供の相手

逃げまどう人をかきわけ熊を追うアルミ。園内放送がなにか激しくなりたてている。落ち着いてくださいとか、係員の指示に従ってくださいだとか。その効果なのかはわからないが、混乱はだんだんおさまってきている。

そのなかでも熊は逃げる。何なのかは知らないが、建物の間を通り抜け裏側に回り込もうとする。周りに人の姿はない。

相手の足は早かったが、着ぐるみでしかも子供を抱えているようでは追いつけないはずがない。ほどなく距離を詰め、熊に抱きつくように跳びかかった。着ぐるみのふつかふかの感触が体中に感じられる。この状況にまったくそぐわない。相手はバランスを崩し、前にのめりこむように倒れた。その際子供を抱えていた手がほどけ、その体が地面に投げ出される。

子供が心配だが、熊も脅威だ。熊がアルミを払いのけようと暴れる。馬乗りになっているアルミは全体重を乗せて熊を殴る、が、相手はぬいぐるみ手応えがない。

相手もこちらを殴るが、うっとしいだけでまるで痛くない。

「ああ！ くそ！」

これじゃあ勝負になってない。殴りかかる熊の手を押さえつけ、ズボンのポケットからナイフを取り出した。熊が反応する前にそれをふり下ろす。狙うは首のある場所。ナイフの切っ先はいとも簡単に布を破り綿を裂いた。一瞬後に縫いぐるみとは違う手応えを感じる。

「っ！」

さらに力を込める。ナイフはずぶずぶと着ぐるみの中にもぐっていき、次いで手の中に入った。暖かい液体が手を覆う。熊の力が弱まった。もういいかとナイフを引きぬく。ナイフと手は血でべつとりと汚れていた。

「……………」

一度かぶりを振り、連れ去られた子供の方を見る。四、五歳ぐらいの男の子。彼もこちらをじっと見つめている。そっと血だらけのナイフを隠す。

「あー、大丈夫か？」

笑顔で尋ねる。ところどころ擦りむいているが、見たところ少年に大きな怪我はない。

「うん……お兄ちゃんだれ？」

「え……」

初対面。この状況。どう言えいいのか。

「えっとだな。俺は……そう、トンファーマンだ」

「え、お兄ちゃんトンファーマンなの？」

咄嗟に言ってしまったことだが、くいつてきた。そういえば、この子さっきのヒーローショーの場で見た気がする。

「あ……ああ。トンファーマン……の、友達。それからこいつが……」

自分の下で息絶えている熊を指さして、

「クリムゾンズから来た敵、クリムゾン・ベアー。可愛いふりして子供に近づき、さらうのが得意」

「へえー」

目をキラキラさせてアルミを見つめる少年。いや、見ているのはアルミというよりトンファーマンの友達か。

「それで、えっと……」

熊から降りて、少年の方に近づく。少年は逃げようともせず、アルミをじっと見つめている。一応、好都合かな。

「ねえ、君、名前はなんていうの？」

「？」

「あ、俺の名前はアルミ。かっこいいだろ？」

「……………」

目がキラキラ。本当にかっこいいと思っているみたいだ。まあ自

分でも好きな名前だが。

「トンファーマンが、さらわれた君のことを心配してたよ」

目の前まで来て、姿勢を低くし目線を相手に合わせる。

「ホント？」

「うん。クリムゾンズの目的もわからないって。君のことを知ったら、なにかわかるかも。名前、なんていうの？」

「まつやま、しょうご」

そう言って少年は、アルミになにかを差し出した。車の形をしたネームタグ。「松山彰吾」という名前とふりがな。そして住所や電話番号などが書かれていた。

「迷子になったら大人の人に見せなさいって言ってたの」

「そっか。偉いね。それで……………」

アルミは少年の肩を乱暴に掴み。後ろに突き飛ばした。

「業火！ この子をも！」

「うおっ！？ わ、わかった！」

さっきからずっと、業火が物陰からこっちの様子を窺っていた。

アルミの背後からだ。愛しき友がなぜこんなところにこんなところにいるのかはわからないが、今はそれどころではない。複数の足音が近づいてる。客か、遊園地のスタッフか。あるいは……

「おい、なにかあったのか！？」

「……………」

足音、そして声の主が姿を現した。若い男のふたり組。どちらも、銃を持っていた。こちらもすかさず銃を抜き、向こうに気付かれる前に撃つ。二発。どちらも命中。命を奪うには至らなかったが。

「がっ……なんだ！？」

「おいあれ！」

すぐにアルミに気がついた。その時にはアルミは彼らに背を向け逃げだしていたのだが。背後から銃声。また、話し声。増援を呼んでいるのか。

テツが通されたのは、応接室のような部屋。中にいるのはさっきの男と、警備員の制服を着た別の男がひとり。以上。

「奥さんは、どこに？」

「別室」

「そうですか。まあ、お子さんが誘拐されたわけですからね。取り乱してもいるでしょう。それに比べて、あなたは立派です」

「余計な話はいいい。お前はなんなんだ？」

取り乱してはいないが、相当いらいらしているようだ。

「失礼しました。私は、浅葱市市長の私的な秘書をしています、佐藤鉄子と申します。以後お見知りおきを」

自己紹介をしつつ名刺を渡す。

「市長の秘書？ あんたが？ まだ子供じゃないか」

「ええ、まあ、いろいろありまして。疑っているなら、市長に電話しますか？ お知り合いですか？」

「……………別にいい。それで、市長の秘書がなぜ？」

「もちろん、市に多額の税金を払っている遊園地の園長さんの危機は、放っておけないでしょう？ ……まあ、他に興味があることも少し」

「……………」

男——この遊園地の園長の表情は、見た限り変わらない。ふむ……

「まあ、今は息子さんの安全と救出が最優先ですね」

「……………そうだな。まずどうすればいい？」

「そうですね……………」

「業火逃げるぞ！」

突然熊を追いかけて走り出したアルミを追った。熊を殺して終っ

た追走劇、そしてその後の少年とのやりとりを影からじっと見つめていた。タイミングがつかめないし、尾行してきた負い目もある。出てこようにも出てこれないと思っていると、アルミの方から声をかけてきた。しかも、どうやら非常事態らしい。少年をこちらに突き飛ばし、現れた敵に発砲。すぐにこちらに走ってきた。そしてこのセリフだ。

「敵は死んでないし、追っ手はいくらでもくる……！」

背後から銃声。当たってはいるが、アルミは振りかえって銃を構え、撃つ。

その時のアルミの表情。目を吊り上げ歯を食いしばって、まるで悪鬼のような形相。立て続けに発砲して、拳銃の弾を全て撃ち尽くした。振り返れば、死体がふたつ。

「よし、行こう」

再びこちらを見た時、さっきの表情は消えていた。三人で、わけもわからないまま走って逃げた。

第122話 戦争ごっこ

「まず、敵は武装しています。現に警備員のひとりが射殺されましたね。あれは狙撃手によるもので、私の仲間がすでに排除しましたが、他の敵も銃を持っている可能性が高いです。あなた方の警備員ではどうしようもできませんよ。警察を呼んでも、そう簡単になんとかできる相手ではないです」

遠まわしにお前は役立たずだと言われた警備員は、しかしピクリとも動かない。さすがだ

「なるほど。では、どうしろと？」

「まず状況把握です。敵の位置、目的はなになのか。そして、お子さんはいまどういう状況にあるのか」

「それは、もうわかってるのか？ それとも手がかりが？」

「位置はわかりません。もしかしたら、園内全域に散開、潜伏しているかも。だとしたら、警備員を巡回させるのは危険ですね。次に、目的………これは、あなたもよく知っているのではないですか？」

園長は少し黙り、ややあって、

「誘拐、ということはやはり身代金か」

「ええ、そう考えるのが妥当かと………しかし気になることもあります」

「なんだ？」

「相手からの要求が、まだ来ていないことです」

「……なにが言いたいんだね」

「いえ、私はただ事実を指摘したまでですが………どうされましたか？」

腹の探り合いになってきた。もちろん、望むところではある。一筋縄にはいかない相手だが、どこかでボロを出さないだろうか。

「もしかして、他になにか心当たりが？」

「いや、ない」

即答した。しかし、もし今この場にアルミがいればきつとこう言うだろう。「それは嘘だね」と。笑顔で自信満々にだ。

残念ながらテツには、相手の嘘を見抜く能力はない。なにかあるというのは、あるという前提を知っているからだ。しかし、相手がそれを認めないのならば話は進まない。難儀なものだ。

相手が何者なのか、この遊園地の以外の顔を持っている。それは初めから知っていること。だからこそこんな面倒な事をしているのだ。しかし、わからないこともある。それを知るのがこの作戦の目的なのだ。

「ところで、もうひとつ……私の息子は今どこにいるのか。それについてはなにかないのか？」

あからさまに話題を変えてきた。当然の反応か。

「そうですね。それは………お子さんに、携帯電話などは持たせてないんですか？」

「そんなに、私達のことを知りたい？」

場を制圧してしばらく、狙撃手の女は口を開かなかった。とりあえずテツに状況を報告しつつ女を見ていると、彼女は質問に質問で返してきた。

「……ええ、気になる。あなた達がどういう組織で、どういう理念でこんなことしているのか？」

「どうして？ あなた達も今は作戦の途中でしょ？ おしゃべりに時間を割くよりは、もっと他にすることがあるでしょう？」

「………そうすべきでしょうね。あなた達がもっと手際が良くて、あたしが脅威と感じるたならば………そうした」

「つまり、脅威ではなかった？」

女は伏せたままむっとした表情でこちらをにらんできたが、叶は構わずに続ける。

「あなた達、いつかダイヤモンドを奪いにホテルを襲撃したことがあったでしょう？　そのときの武装集団とあなた達、似ているからすぐにわかった。どこが似ているか教えてあげましょうか？」

「さっき言ってた通り、手際がわるいからでしょう？」

「そう」

憎々しげに返答してきたが、叶はできるだけ感情を込めずに続ける。

「あなた達の作戦や動きは、プロのそれじゃない……ただの軍事オタクが考えたような、マニュアル通りでわかりやすい人員配置、運用。軍事作戦というよりはサバイバルゲームをしてるように見える。本物の銃を使った遊び。人が死ぬ道楽。そうとしか思えないの」

「……………」

無言。言い返せないのか。そのまま続ける。

「でも、さすがにあなた達も遊びでこんなことしているわけじゃないでしょう？　教えて？　ダイヤモンドを盗んだり、遊園地の園長の子供を誘拐したり、その目的はなに？　やっぱりお金？　それともなにか理念があつて？」

「……………両方」

「え？」

「私達には理念がある。でも、それを実現するには、組織を維持するにはお金がかかる」

「なるほど。それで、その理念とは？」

「そんなの、簡単に教えると思う……………」

一瞬の隙を見つけたのか、女は少し体を起こし、叶の持っている拳銃の銃身を掴んだ。

「ちっ！」

発砲、しかし銃口が逸らされているため弾はコンクリートの床を穿っただけ。女は拳銃伝いに叶の腕を引っ張り立ち上がろうとする。させるものかと女の足を引っ掛け転倒させようとするが失敗、飛び退かれた。向かい合う。しかし女は丸腰だ。叶は拳銃を突きつけて、

「できれば、もっとおとなしくしてほしいところだけど？」

「ごめんなさい。それはできない」

そして女は飛びかかった。叶にではなく、もうひとりいた敵とそれを押さえつけている氷河に。

「どけ！」

「があっ！」

女は氷河の顔面を蹴り上げた。鼻を押さえて敵から転げ落ちる氷河。女はもうひとりの敵に肩を貸し、来た階段を戻って逃げようとする。阻止せんと発砲するが当たらなかった。ふたりは転がり落ちるように階段を下った。追おうとする氷河を引きとめる。

「テツに連絡して。敵は撤退した、って」

「ああ、わかった」

屋上に取り残された狙撃銃を見る。あの女はこれを使って、園内を見下ろし作戦の支援を行っていた。それをするのにここは絶好のポイントだ。

今、その場所を奪った。向こうが奪還に来ることはあるだろうか………。

「それで、どうして業火がここに？ テツに言われた？」

ここまで逃げれば大丈夫だろう、そう判断して三人はなにかの建物の裏で走るのをやめた。

「いや、叶に言われて」

「ということはあいつも絡んでいるのか……氷河は？」

「あいつのことは聞いていない」

「そうか……」

とはいえ、この状況でひとりだけ関わっていないということはないだろう。

「アルミ、そもそもお前はどうしてここに？」

「それは……」

テツからデートに誘われたこと、ヒーローショーで釣られたことを話して、

「それで、着ぐるみの熊が俺の目の前でこの子をさらったんだ。……このことをテツが知っていたのか、それとも偶然なのかはわからなかったけど。業火がここにいるということとは」

「テツはなにか知っている、やな」

黙って頷く。なかなか厄介な状況だ。

「とりあえず、状況を把握しなきゃな。これじゃどうすればいいかもわからない」

「そうやな。でもどうすれば……」

その時、どこかからなんとも勇ましい音楽が流れてきた。歌詞のある歌で、なんとなく音質のおかしいその音楽は、

「携帯の着信かな？」

「誰の？」

アルミも業火も携帯電話を持っていない。ふたりはゆっくり、助けた子供の方を見た。

子供が、小さな携帯電話をおずおずと差し出していた。

第123話 理念

「えっと、彰吾くんだっけ。それ、誰からかな？」

アルミが中腰になり子供と目線を合わせて訊いた。相手に恐怖を与えない笑顔。業火にとってはわかりきったことではあるが、さっき見た悪鬼のような形相の持ち主とこの笑顔の主は同じ人物なのだ。幸い子供は、さっきのアルミを見ていない。優しいお兄さんとも思っているのか、アルミを怖がらずにいる。

「お父さんからだよ」

「そっか。じゃあ、出て。それから、後で俺も話してもいいかな？」
子供はこくこくと頷き、携帯電話を開いて通話を始めた。会話の片側しか聞こえてこない電話という機械の特性上、話の内容はよくわからないものだ。しかも話しているのは五歳の少年で、当然論理的で聴き手に配慮した会話など望むべくもない。というか、「うん」とか「大丈夫」しか言わない。しかも小声で。しばらくして、アルミが携帯電話を受け取った。

「理念、か」

女が置いていった狙撃銃は、贅沢なことにスコープ付きだった。素人であっても装備は本物なのだ。スコープ越しに下界を見る。遊園地全域が一望できた。

「ねえ、あいつの言ってた理念って、なんだと思う？」

敵が戻ってきたら知らせるよう、階段を見張らせてる氷河に話かけた。

「理念？」

「そう。なぜ奴らは戦うのか。その理由。お金以外で、なにかある

みたい」

氷河は少し考える仕草をしてから、わからん、とだけ答えた。なんのおもしろみもない答えだが、叶だって考えてることは同じだ。

浅葱市は犯罪の多い、危険な場所だ。通りを歩けば死体に出会う、なんて言うほど退廃的ではないにしろ、そんなことが起こる可能性を完全に排除することはできないし、実際そんなことは過去になんとかあった。各種犯罪の発生件数は何年もの間全国でワースト一位に輝いている。港には正規の輸入品に混ざって違法な物品が密輸されている。これらの行為を実行しているのは、そのほとんどが市民、いわゆる犯罪の素人だ。素人連中であるがゆえに、その罪は優秀な警察によって暴かれ、しかるべき法の処置を受けることになる。

だが一方で市民と対極の存在、いうなれば「犯罪のプロ」がいることは無視できない。大抵が組織、あるいは信頼できる誰かとのコネクションを持っている人物で、綿密な計画と鮮やかな連絡でその目的を果たしできる限り痕跡を消して立ち去る。厄介な事に、事件が起こったことすらわからないことが多い、らしい。

時としてそういった組織は、他の組織と競い合っている。他の組織を妨害することもあるし、それから身を守る試みもある。すなわち、武装するようになる。武器は密輸されてくる。方法さえ知っていれば、手に入れるのはそこまで難しいことではない。

そうとも。この街には武器が存在する。武器と、それを使う人間がいる。さっき追ひ払った奴らもその類か。

ところが、それも少し違うようだ。この街にはびこる秘密結社は方法こそ多様であるが、ほとんどが利潤を得るために活動している。誰かを暗殺したり、人知れず銃を持ってドンパチしたりする輩や、そういう輩に武器を売る業者。そのどれもが、金のために犯罪を犯している。怪盗ルピナス、叶自身だって突き詰めればそれは同じだ。うん、お金は大事だ。しかしさっきの女は違うと言った。お金は必要だが、目的は別にある。それがなにか、考えても思いつかない。

「別に、大したことでもないんじゃないか？」

階段を眺めていた氷河がつぶやいた。その意図は？　そう訊き返す。

「理念、俺は正義って言葉の方が好きだが……そんなものは単なる理由付けでしかない。奴らが本当にやりたいのは戦争ごっこで間違いない。理念は言い訳だと思う」

「なるほどね。それもあるかもしれない」

理念なんてただの飾り。言い訳か。言葉で飾り立てて自分の行為を正当化する。傍から見るとそれは愚かな行為だが、自己満足は大切だ。己のしていることが何らかの正義に基づいているというのは、本人にとっては心強く思えるものだ。たとえ偽りの正義であっても、だ。

しかし叶には、それも違うと思えた。

「じゃあさ、氷河、あんたが戦ってる理由って？」

「俺？」

「そう。あなたの理念」

「……………それは……………」

アルミは少年から携帯電話を受け取り、すこしためらってから耳に当てる。状況は状況だが、相手は目上の人間だ。礼儀は必要だろうか。少年が話しているから、こちらの立場はわかっているはず。しかしうまく伝わっていないかもしれないし、慎重に話した方がいい。

「もしもし、お電話変わりました。私は……………」

『アルミ様ー！　ご無事だったんですね！　さすがです！』

「……………」

よっぽど切ってやろうとも思ったが、状況が状況と自分に言い聞かせた。

「テツ。お前も無事だったのかおいどういことだ説明しろ」

『ええ、わかりました』

アルミの感情のこもっていない質問に、テツはいつも通りの口調で答えた。曰く……

アルミをデートに誘ったのは、最初からこの時のためだった。今日この遊園地で事件が起こる可能性があった。ターゲットもわかっている。アルミを連れて行って、なにか起これば対処に協力してもらうつもりだった。ちなみになにも起こらなければただのデートで終るはずだった。そもそもアルミ様をだましてこういうことに巻きこんだのには非常に心を痛めている。あなたがどう思おうが私はアルミ様のことが大好きで愛していて、アルミ様のシャワーを浴びてる姿を隠し撮りした写真一枚だけでご飯三杯はいけるし……

「わかった。わかったからやめろ」

放っておくと止まらないだろうから制止した。これ以上聞いてると気が変になりそうだ。聞き逃せないことも言っていたが、今はそれどころでもないし。

「詳しく話してくれ。今テツはどこにいるんだ？ 子供の親の電話で話してるんだよね？」

『ええ。お父さんの携帯電話です』

「なるほど。それで、父親ってのは何者なんだ？ 苗字は松山、だよな？」

『この遊園地の園長さんで、お金持ちです』

だとすると、子供が誘拐されかけたのは身代金が目的かな、そう言くとテツは肯定の言葉を言った。

なるほど、だいたい話が見えてきた。だが、まだ決定的に謎なところがある。

「じゃあテツ、なんでテツは、今日園長一家が自分の遊園地で遊ん

でいることを知ってたんだ？ それと、今日誘拐が行われることも知っていた？」

一瞬言葉に詰まったようだ。まだなにか裏がある。

第124話 人を狂わせるなにか

『この社長さんは家族想いの優しいお父さんなんです。毎月第二日曜日に家族を連れて自分の経営する遊園地で遊ぶのが習慣なんです。お子さんが生まれたときからの、ですね。家族の予定が確実にわかってるのはこの日だけです。誘拐事件が起こるのもこの日しかないんじゃないかな、と』

「なるほど。それで……誘拐が今日起こることまではわからないだろう？」

『それは……そうですが。その理由は言えません』

「なんだよそれ」

そこが一番肝心な部分じゃないか。

『すいません。でも、後で必ず言いますから。今はそのお子さんを守ってください。あ、狙撃手はもう排除しましたよ。今から助けに行きます』

心強い言葉だが、話を逸らそうとしているのがよくわかる。

「なあテツ、なんで言えないんだ？」

『すいません、後で必ず言いますから、ね？』

「ねって……おい、ちょっと待って」

止めようとしたが、切られてしまった。かけ直すか？ いや、そんなことしても答えてはくれないだろう。

少し考えた後、とりあえず状況を業火とこの少年に話すのが先だと結論を出した。

「まあなんだ、情けない話だが、聞いてくれ」

氷河は少しためらってからぼつりぼつりと語り始めた。

氷河が戦う理由、最初は正義のためだった。この街にはびこる悪を駆逐すること。他に理由もあったが、それが主な目的だった。もちろん武装した秘密結社なんて相手にできるとはおもわなかったが、一般人の犯罪や風紀の乱れを引き起こす輩をなんとか倒すことはできるかもしれない。そう無邪気に思っていた。ひとりでもやることも考えていたが、ある時ひとりの少年に出会った。背後からいきなり襲いかかり、あっというまに氷河を組み伏せたその少年、名前は浅倉慎也。あるいは、アルミ。

彼は強く、そして不必要なまでに乱暴だった。正義などないと言いつち、残酷な行為をためらわずに行う。氷河にとってアルミは仲間であると同時に畏怖の対象であった。

恐ろしい少年だったが、頼りにはなる。氷河とアルミ、そしてアルミの友人はこの街の小さな悪をつぎつぎに排除していった。

「ねえ、参考までに訊くけど、その”悪”にはあたしも含まれてるの？」

叶の質問は完全に興味本位だが、氷河は少し悩んで、「最初はそうだった。悪としてなんとかするつもりだった。今はもちろん違うが……すまん」

深刻そうな顔でそんなことを言った。

「いえ、別にいいんだけどね。それで、続きを話して」

アルミは強く、この街の悪に負けずに渡り合っていた。そしてこのことは、氷河にひとつの考えを浮かばせた。

自分の両親を殺した何者かの正体に、迫ることができるのではないか。

「あなたの親について詳しいことはわからないけど……たしか、お兄さんに殺されたんじゃないの？」

「そうだ。でも、それだけじゃないと思ってる」

あの日、自分の生みの親を惨殺したあの男、氷河の兄は明らかに正気の沙汰ではなかった。目の焦点が合わず、顔の筋肉が弛緩していた。わかりやすく言えば「ラリ」っていた。氷河はそういう話題に詳しくないが、麻薬とかを摂取するところという症状がでたりするんじゃないだろうか。

警察もだいたい同じような事を考えていたようだ。逮捕された兄を、精神鑑定にかけた。結果、責任能力無し。よって罪に問うことはできない。ただし、薬物などによって故意に精神に異常をきたせたのであればその限りではない。しかし、兄の体内からは一切の薬物の痕跡が見つからなかった。

兄は不良でろくでなしだったが、狂人ではなかった。少なくともあの日の朝までは。どこかに出かけ、帰ってきたら狂人になっていた。いったいなにがあったのか。氷河にそれを調べる術はなかった。正確には今だって、ない。でも……

「でもこんな風に、”やばいこと”この世界の裏に関わるようなことを続けていくとさ、いつかは手掛かりがつかめるかもしれない。続けていったら、いつのまにかその正体を倒してましたとか、そういうのでもいいんだ。ただ、なにかをしていたくて」

「それがあなたの、戦う理由」

「そうだ」

「なるほどね。うん、いいことだと思う」

これも突き詰めれば自分のための活動だろう。しかし、他の連中と違うと言えば違う。

そして、叶にはまた新しい疑問がふつふつと浮かんできた。

「じゃあさ、アルミが戦う理由って、なんだろう」

「……………わからん」

あの少年の考えていることが、まったくわからない。

電話越しには、アルミは嘘を見抜けない。しかしさっきの会話ではごまかすことなんてできなかった。なぜ園長の少年が誘拐されたか。今はそれを説明するわけにはいかない。なぜなら――

「おい、なぜ切った。彰吾と一緒にいる少年と話をさせてくれるんじゃないのか？」

園長が目の前にいるから、説明できないのだ。テツはなんとか言い訳をひねり出そうとして、

「ええつとですね。なんといいですか……敵が多かったようなので」「なにっ!？」

園長は急にうろたえ始めた。子供に危機が迫っていると思ったのだろう。

「安心してください。彼は強いので、敵を追っ払うことは簡単にしてくれますよ」

「……………いや、問題はそこではない」

園長は冷静さを取り戻し、テツをにらみつけた。

「さっきの電話で君はこう言った。理由は言えない、と。なんの理由をだ？」

「それは……………、それは、あなたのお子さんがなぜ誘拐されたのかです」

「それを言えないということは……知ってはいるということか？」

「ええ、まあ」

「まずい。これ以上ごまかせそうにない。」

「そうか。それはなんだ？ 私にも言えないことか？」

「いいえ。あなたにも心当たりがあるのではないですか？ さっきは、身代金以外に心当たりはないと言っていましたか……………」

園長がテツから視線を逸らしたのを見て、テツも言葉を止めた。

園長は警備員の男に二言三言話し、警備員は頷いて無線機をとりだ

した。

「あの、なにかありましたか？」

「いいや。なんでもない。続けたまえ」

「はい……園長さん、本当に心当たりはないんですか？ 例えば誰かから恨みを買ったり……」

もしいいや。言ってしまうおう。

「他には、なにか犯罪に手を染めていたり……」

その瞬間、ドアを開けて警備員が大勢部屋になだれ込んできて、テツの座ったソファーを取り囲んだ。

第125話 知らぬ側から見たら

「あの坊や、なんか変なのよね」

狙撃銃についていたスコープで園内を見渡す。どこかにいるはずの、あの釣り目の少年の姿は見えない。

「そうだな。人を殺すのをためらわない。妙に偉そうで大人っぽい。そして、バカみたいに強い」

「……………本当にそうなのかな？」

「うん？」

ずっと疑問に思ってきたこと。以前テツに同じ疑問をした時、テツはたいして引っかけかりを覚えていないようだったが、叶はやはり腑に落ちなかった。

「あの子、本当は人殺しなんてしたくないんじゃないかな？」

「なんでだ？」

赤いダイヤモンドを盗もうと市内のホテルに侵入した夜、アルミに銃を渡した。その時のアルミの表情。恐怖と高揚の入り混じったよう。

「ねえ、アルミが人を殺した後、なにか様子がおかしかったりした？」

「いや？ なんにも」

「だったらいいんだけど…………」

本当に？ 本当にそうなのか？

「……………とまあ、こういうわけなんだ」

業火と少年に、テツから聞いた話をそのまま話した。この誘拐者の意図がわからないこともだ。業火は少し考えて、

「なあ、どう思う？」

アルミに尋ねた。

「どうって……狙撃手はもういないらしいけど、さっきのみたいな敵は今もこの遊園地の中をうろついている。テツは助けにくるって言うてるけど、本当かどうかはわからない」

「そうか？ あいつ、変な奴やけど、こういう時に嘘はつかんやろ？」

「……でもさ、普通ならもっと早く助けが来ると思うんだ。テツじゃなくて、警察とか」

「そういえば」

周りがやけに静かすぎる。客がいなのはともかく、人が死んでいるのだ。警察が大量にこっちになだれ込んできてもいいんじゃないか。

「なにかあったのかな？」

答えを言える人間は、この場にいない。そういえば、

「ねえ、どうして君が誘拐されたか、なにか理由とかわからないかな？」

子供に、目線を合わせて尋ねるアルミ。これが最大の謎だが、しかし訊いてみてもわかるはずもない。黙って首を振るだけ。どうかして手がかりでもつかめないものか。

「なあアルミ、叶も、これに関わってるんやんな？」

そういえばそうだ。少し考えてから、

「ねえ、携帯貸してくれるかな？」

子供に話かけた。

「うん。いいよ」

「ありがとう」

「番号はわかるんか？」

業火の懸念はごもつとも。だが、

「前に名刺もらったんだ。携帯の番号も書いてある」
「そうとも。叶だったら話してくれるかもしれない。」

「一週間ぐらい前、港のコンテナ群で銃撃戦が起こったの」

いきなり知らぬ番号から電話がかかってきて、しかも相手が今話題にしていた小学生。これには叶も少し驚いた。

話を聞くに、少年が誘拐された理由をテツが話してくれなかったとのこと。まったくあの小娘は。旦那（勝手に任命）に大事な事を教えてなかったらしい。よかろう。ならばここで話してやる。叶はテツから、口止めもなにもされてないのだ。

今から一週間ほど前の夜、港にあるコンテナ基地のひとつで、大規模な銃撃戦が起こった。それが明るみになったのは翌日の朝。コンテナ運搬業者が、戦場の跡に残された大量の血痕を発見して警察に通報した。その後の動きはかなり迅速だった。警官がすぐに駆けつけ現場を立ち入り禁止にする。周囲の人間に安全対策と混乱の回避を目的に緘口令を出した。これによって事件はニュースにならず、この情報化社会においてニュースにならない出来事は存在しない出来事とほぼ同義である。

血痕はあったが、武器は見つからなかった。死体はひとつだけ、なぜか海の中から引き揚げられた。捜査が始まった翌日、腐敗が始まった死体の臭いが海上にまで漂ってきたのだ。

死体にはなぜか何本ものナイフが刺さっていて、また腐敗は進んでいたが、身元はわかった。市内の小学校に勤務する養護教諭。なぜ銃撃戦に巻き込まれたかは不明だが、司法解剖の結果、この養護教諭は生前に大麻を常用していたことがわかった。薬物がらみの事件か。しかし警察に捜査できるところはここまでで、そこから先はいつも通り闇にまぎれて見渡せない。そこでテツの出番だ。

戦闘があったことはたしからしいが、どういう勢力が衝突したのかはわからない。薬物が絡んでいるようだが、そういう取引は何度も行われているはずだ。しかしそれが銃撃戦に発展することなんて

滅多にない。そりゃそうだ。戦闘が起これば死者が出るし、弾薬だって消費する。奴らの目的は金儲けであり、弾薬はタダではない。人命はすなわち組織にとっての資本そのものだ。それいたずらに消費する理由はあまりない。

とにかく手がかりは大麻、それだけだった。しかし心当たりが無くはなかった。以前より、何らかの裏ビジネスに関わりを疑われる人物が何人かいる。それらの周辺を調べればなにかわかるかもしれない。

叶も相談を受けたから、思ったことを話してみた。テツはそれなりに興味を持ったようだ。先日のダイヤモンドの件で現れた武装集団のこと。叶が推測するに、あいつらは金儲けのために非合法なことをしているのではない。さらに一歩下がったところにある目的、非合法なことをするために非合法なことをする。すなわち、本物の銃を使ったサバイバルゲーム。人の死ぬ戦争ごっこ。限らないリアルさとスリルを求めているのではないだろうか？　だとしたら相当イカれたことをしているが。

麻薬業者が取引を行っているところを、遊びで犯罪やっているグループが襲撃をかけた。死体で見つかった女性は取引相手で、銃撃戦で死んだか、組織の存在を隠すために口封じとして葬られた。そういう筋書きが思い浮かんだ。テツもそうすれば辻褄が合うと言っていた。

そして新しい可能性が浮上する。例の武装集団がまた麻薬業者を襲撃しに来るかもしれないということだ。組織の実態がわからない以上は、疑わしい人物を観察するしかない。事件が発覚してからずっと監視を続けてきたが、尻尾を掴むことはできなかった。そして今日の“デート”である。

『つまり、園長さんが疑わしい人物ってこと？』

アルミが少し驚いたように、そして小声で訊いてきた。一緒にい

る少年、園長の息子への配慮だろうか？

「ええ、テツの言うことにはね」

「……………話してくれ」

少し沈痛なアルミの言葉、しかしまあ、この状況で隠しごとはしない方がいいだろう。

第126話 犯罪者!

薬物密売などで稼いだ、”汚い金”をどう保管するか。現金のままだどこかに保管しておくのも危険だ。できればどこかの口座に入れておいた方がいい。しかし捜査機関によって、その大量の金の出自を調べられたら、自分達の組織までたどられるかもしれない。そこで、なんらかの方法で”きれいな金”に見せかけるようにする。いわゆるマネー・ロンダリングである。

その手口は様々だ。金融機関で架空口座などを複数用意して送金を繰り返す。会社の債権や株式の購入。表向きは無関係だが裏でつながっている団体に大口寄付するなど。

テツはこう考えた。遊園地の来訪者数をごまかして、実際より多い数を公表する。収入も多く公表することになるが、実際に多くの金が入っているので表向きにはなんらおかしいところがない。すなわち、大麻の売り上げを遊園地の売り上げに加算するのだ。それによって、”汚い金”は一瞬にしてロンダリングされる。

「とまあ、これは推測でしかなく、同じような手口は応用をきかせればいくらでもできますから。怪しいとマークしていたのはあなただけではなかったんですよ。でも、あなただったんですね」

大勢の警備員に囲まれているが、テツはソファアに平然と座り、園長に淡々とこれまでの経緯を話した。

テツが園長の犯罪行為を知って探っていることを、園長は早い段階で気付いていたのだろう。しかし確証はないし、市長の秘書を問答無用で追い出すことはこれからの市との関係を考えてと得策ではない。

テツにしても、園長がなかなか正体を現さないから動けないでいた。しかしこれだけ強硬な手段に出てきたのだ。もう腹の探り合いをする必要もないだろう。

「それで、どうしますか、犯罪者さん？」

警備員の皆さんは園長の正体を知らなかったようだ。目に見えて動揺している。

「……ふん、馬鹿馬鹿しい」

一瞬言葉に詰まった園長は、しかしすぐに平静をとりもどし、
「そんな妄想話を、誰が信じる？ 麻薬密売組織だって？ 小説家にでもなった方がいいんじゃないかね？」

椅子に座ったままふんぞり返って、そんなことを言う。なかなかの役者だ。そしてふたりの周りにいる警備員達にとっては、雇い主でありまたテツよりずっと現実的な事を言っている園長の方が信頼できるだろう。

園長とテツの睨み合いが続く。さて、どうしたものか。

叶との電話を切ったアルミは、業火から見ても明らかに困惑しているのがわかった。言うべきことがあるのにどう言えいいのかわからない。そんな表情で数回、喋るのをためらう仕草をしてから、
「ねえ、いろいろ話すのは後にしない？ なんか、敵が大勢いるって。見つからないようにしないと」

明らかな嘘だが、少年を気遣ったのか。だったら従った方がいい。

「そうやな。でも、どうする？」

アルミは少し考えてから、

「敵は外を巡回しているらしい。じっとしてたら見つかる。ついてきて」

アルミはふたりを引き連れ歩き始めた。歩きながら続きを話す。
「屋内に行きたいところだけど、そこにも敵がいるかもしれない。
とにかく、この子を守らなきゃいけないから戦闘はできるだけ避け
たいんだ」

そんな説明をするアルミは、少し辛そうだった。さっき聞いた理由が、よほどひどいものだったのか。

「だから、こうしよう」

そう言って立ち止まる。ここは、さっきヒーローショーが行われていたステージ、の裏手。表向きは整然として美しいステージも、裏から見ると様々なものが雑然と置かれている。

「ここに少し大きめの段ボールがひとつ置かれていても、誰も変だとは思わないよね？」

背負っていたリュックを下ろし、中からなにか取り出した。茶色くて厚い紙のようなもの。折りたたまれているようで、アルミはてきぱきとそれを展開、また組み立て直して。あっという間に大きめの箱ができあがった。

「……なんや、それ？」

「段ボール、に似せたなにか。見た目は完全に段ボールだけど、本当は別の紙なんだ。それで小さく折りたためるようになっていて……」

「待った。それで、この段ボールをどうするんや？」

放っておくと止まらない勢いだ。

「うん。この大きさなら、子供ふたりは入るだろ。業火はその子と、段ボールの中に入ってほしい。じっとしてれば、ここなら風景に溶け込んで敵には見つからない」

「なるほど。アルミは？」

今の説明だと、アルミは段ボールの中には入らないようだ。

「俺は……まあ、周りを歩いている。敵には見つからないようにするから。なにかあったら知らせにいく」

「そうか。わかった」

アルミの指示に従い、ステージ裏の壁のすぐ近くで少年を抱くように三角座り。アルミはその上に箱をかぶせた。

「じゃあ俺は行くから。なにかあっても、もうヤバいって状況になるまで動かない方がいい」

それだけ言って、アルミは行ってしまった。どこか急いでる風でもあったが、なぜだ？

やばい。やばいやばいやばい。必死に耐えて隠していたがもう限界だ。吐き気がする。胃が重い。

とりあえず近くに合ったトイレに入った。中には誰もいない。一瞬気を抜くともはや立つことすらできず、アルミは膝をつき床に倒れ込んだ。

ああ、人を殺した。ナイフで体をえぐり、銃で脳天をぶち抜いた。ナイフが肉を切り裂く感触、銃弾が飛び出す反動が、手に残って消えずにアルミを責める。この感覚に抗う術を知らず、ただただ波が引くのを横たわって待つだけしかできなかった。

だんだん視界がぼやけてきた。人を殺した後はいつもこうだ。殺した瞬間はなにもない、むしろ高揚してると言ってもいい。が、その後に激しい後悔と自己嫌悪に襲われる。次第に意識が薄れていく。だめだ。こんな所で倒れてる場合じゃ……………

狙撃銃のスコープを覗きながら、叶はさっきの通話のことを考えていた。この遊園地がマネーロンダリングに利用されている可能性。手引きしているのは園長だろう。そして戦争ごっこが好きな組織もそれを知っている場合、なんらかの接触がある。その可能性に従っ

て、園長の休日を監視する必要が出た。よってテツはデートに見せかけてアルミを誘った。そんな内容だ。

可能性をつぶすための作戦であるから、当然なにも起こらない場合もあった。その時はただのデートになるはずで、テツもそれを望む節があった。しかし実際はご覧の通り。

それが、アルミに話したこと全て。そして、話すべきことはこれ以上はないはずだ。

気になるのは、話を聴いていたアルミの様子。電話越しにでもなにかおかしいのに気付いた。なんとなく切迫しているような。テツにだまされていたのに対して怒っているのではと思ったが、それなんかない気がする。

あるいは心当たりがないではなかったが、それを訊くタイミングを逃してしまった。

人を殺したのを後悔してるのか、と。

第127話 盗み聞き

「まあ、普通に考えれば私の言ってることの方がおかしいですよ。でも、どうします？　あなたのお子さんは、今私の手の者の近くにいますですよ？」

「ふん、脅しか」

「ええ。あんまりやりたくないんですけどね」

「言ってくれる……だが、なんとかするさ。うちの警備員は有能だなにを言っているのだこの男は。敵の正体がなんであれ、しっかりと武装している相手に警棒程度の武装の警備員が勝てるはずがない。はったりか？　それとも、今日の前の状況を打破したいだけか？」

目の前の状況とはすなわち、テツを取り押さえることだろうか。正体不明の要因を取り除きたい気持ちはわからなくもないが、それでは非常にまずい。双方にとってまずいのだ。

「そうですか。それは残念です。ですが……やっぱり私の言う通りにした方がいいと思いますよ犯罪者さん」

園長はやはり苦々しげにこちらを睨みつける。

「まあいいですけどね。じゃあ、おかしい人はここで立ち去るとしますよ」

少し残念そうな様子を装いながら鞆を持ち立ち上がる。その際、鞆の口を少し開けておく。警備員の間を抜けて部屋から出ようとする、が、

「待て」

当然園長に制止される。

「やっぱりですか。私を取り押さえるつもりですね。でも、やめた方がいいですよ？」

「なぜだ？」

「痛い目を見ることになるからです」

「わからんな。なぜそうなるか」

園長があざけるように鼻で笑い、右手を上げた。それが合図だったのか、警備員のひとりがテツに接近した。もちろんわかっていたこと。その警備員の足を払い床に倒し、同時に鞆から剣を取り出して倒れた警備員の足に振り下ろした。

剣の切っ先があっさり肉を貫き、膝と床を縫い付けた。あがる悲鳴。床の絨毯に赤い染みが広がる。他の警備員は目の前の光景に言葉を失い、叫び声をあげのたうち、剣を抜こうと必死の警備員の後に続こうとするのをためらっている。

「ま、そうなりますよね。じゃあ、ここで失礼しますよ」

鞆からもう一本の剣を取り出し、一步前へ。テツを囲む警備員は恐れおののくように一步下がった。既にこの場はテツの支配下にある。この場からすぐにでも出て、アルミに合流したい気持ちはあった。

周りの人間の動きに注意しつつ、扉に歩を進める。途中、椅子に座ったままの店長のすぐ近くを通る。一瞬歩みを止めた。

「……………、すいません、やっぱりついてきてください」

剣の切っ先を園長に向ける。園長はビクリと体を震わせ、おずおずとこちらを見た。

「立って、ついてきてください。抵抗しなければ、身の安全は保証します。あなたと、息子さんの安全を」

「……………みんな、動かないでくれ。巡回してる警備員も、撤退させるんだ」

園長は警備員達の方を向いてそう言った。つまり、

「来てくださるんですね？」

「……………ひとつだけ、教えてくれ」

「なんででしょう？」

「君は、私の敵か？ それとも味方なのか？」

「それは……………」

自然と頬が緩むのが自分でもわかった。それは、テツの戦う理由。「私は、正義の味方です」

「正義の？」

「ええ、悪い人間は容赦なく斬り捨てますが、善良な市民さんは守らなきゃいけないじゃないですか……園長さん、あなたは悪い人間ですか？ それとも、善良な市民？」

「人のことを犯罪者呼ばわりしておいて、それを訊くのか？」

「ええ。私が知りたいのは今のあなたではなく、これからのあなたがどうなのかということですから。……じゃあ、そろそろ行きましょうか」

園長は黙って頷き、立ちあがった。部屋を出るテツについていく。

覚醒し、慌てて立ちあがる。清掃が行き届いているとはいえ、トイレの床で寝ていたようだ。どれぐらいこの状態だったのだろうか？ まだかすかに朦朧とした意識の中、周りを見渡す。業火は今どこにいるんだっけ？

「！」

話声が聞こえた。業火やあの少年のではない、大人の声。それがふたり分。だんだん近づいてくる。咄嗟にトイレの個室に入り扉を閉める。

「なあ、いつまでこんなこと続けられいいんだ？ 子供は見つからないし、なのを探し続けて。遊園地の中を歩き回るなんて」

「文句言うな。言われたことだけやればいいんだ」

大人ふたりが用を足している。こちらの存在には気付いていないようだ。子供を探す、ということはあの少年を誘拐しようとした奴の仲間か。つまり、この状況では確認できないが武装しているはずだ。

「それに、いつ警察が踏み込んでくるかわからない」

「警察は当分来ないだろうさ。あの子供の親も、警察とは関わりた

くないだろうし」

「だが人が死んでいる。警察が動かないわけがないだろ」

「まあ、その時は撤退命令が来る。その時に動けばいいさ」

「……そうだな」

後半は声がだんだん離れていった。トイレから出て、またどこかへ行くのだろうか。話の内容から察するに、あの少年を探して園内を歩き回っているのだろう。子供の誘拐に失敗した。原因は、素性の知らない別の子供に邪魔されたから。おそらくここまででは敵も把握しているのだろう。追っ手は大勢いたし、頭上には狙撃手もいたらしいから、アルミの姿は見られている可能性が高い。問題は、園長の息子と邪魔をした少年がどこにいるかだ。狙撃手は叶によって排除された。地上の目には限界がある。今アルミ達がどこにいるのかはわからないはずだ。既に園内を出て遠くに逃げているか、あるいはまだ園内に潜んでいるのか。前者の場合もうできることはないが、後者であるならば探せば見つかるはずである。だからこうして歩き回っているのだ。歩き回って少年を見つけて、そして……、

「うん？　それで、どうするんだ？」

あの武装集団の目的がそもそもわからない。叶が言うには、単に戦争ごっこをするだけの団体の可能性すらある。が、そんな団体が遊園地の園長の子供を誘拐してなんになるのだろうか？

ひとつ思いつくのは、狩りのようなことをしているという可能性。弱いものを追いたてるといふ娯楽。しかし、アルミが登場しなければこの狩りはあまりにも簡単すぎる話だ。そんなことをするためにわざわざ危険を冒すというのも考えにくい。じゃあ、なにが目的なのか？

いや、やめよう。もともと相手については何もわかっていないのだ。不確かな目的を探るよりは、目の前の危険を排除した方がいい。個室の扉をそっと開け、トイレの外に出る。さっきのふたりの後ろ姿が見えた。業火のところに戻るべきかとも考えたが、あのふたりの後をつけることにした。

なんだか、少し嫌な予感がした。

第128話 使いにくい盾

尾行に気づかれぬように、しかし見失わないように微妙な距離を保ちながら、アルミは敵ふたりを追う。進んでいる方向は、ヒーローシヨールがあつたステージの場所。業火達がいるところ。まさか見つかった？ いや、それはないはずだ。だったら偶然だろうか。一見して、目立った武装はしていない。今までの敵からかんがみるに、持っているのは拳銃程度だろう。それでも銃は銃だし、正面から対峙するのはまずい。ポケットの中の拳銃とナイフに手をかける。どちらかを業火に預けておくべきだったか。

シヨールのステージ裏に敵ふたりがたどりついた。立ち止まって周りを見渡したのは、普段見れない場所にいる物珍しさからだろうか。そうだとすると早く立ち去ってほしいのだが。

向かい合いなにか話している。一方がまた不満を言っただけで一方がなだめているのか。いや違う。また周りを見渡し、今度は何かを探すようにうろろ歩きまわり始めた。

まずい。偽装は完璧だろうが、子供が隠れているということ想定して探されたらすぐに見つかる。段ボールの中なんて真っ先に探されるに決まってるじゃないか。

アルミは背中のリュックからあるものを取り出し、敵の方に投げつけた。それに敵が気付く前に走り、一旦その場を離れた。

少年と一緒に段ボール箱に隠れている業火も、複数の足音と話し声を聴いた。明らかにアルミのものではない、大人の声。会話の内容から敵だと言うことは用意に想像がついた。しかし、だとすればどうするべきかはわからない。

アルミが今どこにいるかを知る術はない。だとしたら自分ひとりでこの子を守るしかない。見つからないのが最善だが、敵がこちらを探しているかぎりそれに期待するわけにはいかないだろう。そつと、鞆の中を探る。いざとなったらここで、自分だけで敵を迎え撃つことになるのだ。さつきから心臓がバクバクいつている。どうする？ どうすればいい？

アルミが投げたのはツチノコロボットで、コントローラーを片手で操作しながら走る。敵ふたりの背後をとろうとした。着地したツチノコはジーっとモーターの駆動音を発しながら敵を見つめる。敵もそれに気付いたようで、一度顔を見合わせてからひとりがゆっくりとツチノコに近づいていった。

まずは、戦力の分断。ここまでは狙い通り。ツチノコに近づかなかった方の背後に周り、音をたてないように接近。相手はツチノコと仲間の方を向いていてアルミに気付いていない。左手でナイフを握り息を止め、相手に足払いをかける。何度もしてきた、手なれた動作。ほとんど無音で相手は体勢を崩し、その喉にアルミはナイフを突き立てた。血が肺に流れ呼吸によってそれが逆流する、ゴボツという音が彼の断末魔だった。この音さえもうひとりの敵に気付かれないようにしたいというのは虫のよすぎる願望か。実際に、何もなくても敵がこちらを振り返るといふこともあり得る話だ。はたして、ツチノコに見入っていたもうひとりの敵はすぐにアルミに気付き、一瞬動きが固まった。その隙に右手で拳銃を発砲。直後に動かれ、当たらなかった。さつき殺した敵の筋肉が収縮して、ナイフが抜けない。敵もこちらに銃を向けてきた。咄嗟に死体で身をかばう。拳銃程度では体を貫通できない、はず。相手もそれを悟り、横移動で死体の盾の及ばない位置に回ろうとする。アルミもそれに合

わせて動く。お互い銃の残弾が気になるが、弾倉を交換する暇もない。また動局的を狙うには、拳銃ではアルミにその技量が無かった。あてずっぽうに撃ち弾を切らせればそれで終わりだ。

しばらくは睨み合いが続いた。しかし動きは突然に。アルミの方ばかりを注視していた敵は何かにつまずいてこけた。つまずいたものは段ボール、業火の隠れていた場所だった。段ボールにダメージがあったわけではなく、中の業火は無事だろうがともかくこれはチャンス。撃とうとするがなんと向こうは倒れながら銃を構え、そのまま撃ってきた。すかさず防御。その隙に体勢を整えられるだろうが、このチャンスを逃すわけにはいかない。銃声が鳴りやみ、死体の盾から顔を出し銃を構え……、

「え？」

予想していなかった光景。業火が子供を抱いて立っていて、右手に銃を持ち敵に向けている。敵は頭から血を流し、地面に伏して動かない。子供の顔を自分の胸に押し付けている業火は、敵を睨みつけ微動だにしない。いや、微かに息が荒い。空の段ボールが近くに転がっている。

「業火、大丈夫？ 銃なんて持ってたんだ」

業火がこういう武器を持っているとは予想していなかったから驚いた。業火は少しビクリと震え、そしてアルミに向き直った。子供を放し、笑みを浮かべて、

「ああ、うん。そうなんや。この前のダイヤの事件の時、敵から奪って……そのまま持っていた」

「そうか」

少し早口なのは、人を殺したという動揺からだろうか。アルミのように決定的な欠点を持たないとしても、テツみたいに人を殺して平然としていられるほど業火は”慣れて”ない。それでも少年に死体を見せまいとする心遣いはすばらしいが。

「それで、どうする？ このまま隠れる、ってわけにもいかなかった」

業火の言う通り。しかし、

「とりあえず歩き回ろう。敵に見つからないように、隠れて」

そうする以外に、有効な手を考えつかなかった。業火も同じ考えのようで、黙って頷いた。

「それで、これからどうするんだね？」

園長とテツは、並んで建物の廊下を歩く。

「そうですね。とりあえず外に出て、あなたの息子さんを探して保護しましょう。それさえできれば目的は達成ですから。警察を押さえるのも市長の権力ではそろそろ限界でしょうから、早めに終わらせましょう」

「警察か。君たちが止めていたのか」

「ええ。でも人が死んでいる以上は、警察沙汰は避けられませんから。対処はそちらで考えてくださいね。主に、なぜ通報が遅れたのか、とか」

「……いいだろう。じゃあ、彰吾がどこにいるかは、また電話をかければいいのか？」

「ええ。お願いします」

「電話か。お父さんから？」

子供にアルミが尋ねた。子供は携帯電話を開いて、頷く。

「そっか。じゃあ出て、さっきみたいに後で俺に替わってね」

子供はまた頷き、通話を開始した。

第129話 親の気持ち

「もしもし」

子供がその父親と会話している。電話の向こうの園長の言葉はもちろんよく聞こえないが、微かに漏れ出ている声から判断するに、少し焦っているようだ。状況が状況だからしかたがないか。しかし子供の方が落ち着いてるというのは。

「はい」

「あ、ありがと」

子供が携帯電話を手渡してきた。受け取って、

「もしもし」

『アルミ様、無事でしたか。よかった』

「そっちはどうなってるんだ？」

『こっちですか？ いろいろ問題が解決して、園長さんと一緒に今からそちらへ行くところです。それで……』

「ねえテツ」

テツの言葉を遮って言う。

「さっき叶に電話して、聴いた。なんでこの子が追われてるのか、とか。麻葉が関係してるらしいとか」

『……そうですか』

若干の間の後のテツの言葉は、いつもと変わらない。こうなることはわかっていたのか。覚悟があったのか。

『すいません。いろいろ黙ってて』

「まあ今はいいけど。じゃあ、こっちに来てくれるんだ」

『ええ。今から行きます。どこにいますか？』

「昼間いたショーのステージ」

『わかりました……アルミ様、どうかご無事でいてください』

「……よかった」

電話を切る。少しさっきの会話を思い返してから、ふたりの方を

見る。

「テツが助けに来てくれるって。ここを動かない方がいい」

「そうか。じゃあ、待つだけ？」

少し考える。敵はまだいるだろう。さっき殺した敵は、他の仲間と連絡を取り合ったりはしていたのだろうか？ 連絡が途絶えたことに気づかれたらどうなる？ 様子を見に来るだろう。しかも警戒して、多めの戦力で。それと鉢合わせするのは遠慮したい。しかし、ではこっちも動くかといえましょうというわけにもいかない。敵も動いているのならばやはり鉢合わせする可能性がある。しかも、テツと合流できなくなるからもう一度連絡しなきゃいけない。電話してる途中で敵と遭遇したら、確実に死ぬ。

「そうだな。待とう」

そう結論付けた。反対する者はいない。

「じゃあ、これからはみんな離れないで。業火はすぐに銃を撃てるように。絶えず周りに注意を払うこと。わかった？」

業火と少年から同意の仕草。アルミは頷き、自身も銃を構えた。

「ひとつ、訊いてもいいですか？」

建物から出て、遊園地の敷地内を歩くテツと園長。目的地は決まっている。警備員は既に全員引き揚げているらしいから、園内を歩いているのはアルミのグループか、もしくは敵だ。周囲に気を配りながら、園長に話しかけた。

「なぜ、麻葉密売に手を貸したりなんてしたんですか？」

「それは……金のためだ」

「……………」

「君の上司ならよく知っていることだが、市に大量の税金を納める金持ちにも金持ち同志の付き合いがあって、ライバル意識があるんだ。あいつよりも稼いでいる。負けたくない。人より多くの金を納

めるために努力する。おかしな話だ。他人に金を渡すことが目的で働くなんてな。だが金持ち連中は皆そんな状況に慣れ切っている。私を含めて、だ」

「まあ、お金を納めるってことはそれだけ儲けているってことですから……それで、麻薬の密売組織に声をかけられた。奴らも、そういう事情は知っていたのでしょう。引っかけりそうな人間に声をかけ、そしてあなたは見事に引っかけた」

「……そういうことだ」

園長は少しうつむいた。テツは構わず続ける。

「あなたの気持はわかります。愚かなことをしましたが、欲にはなかなか抗えないものです。でも、そのせいで今どうなっているか、わかりますよね」

「ああ……もちろんだ」

「だったらいいんですけど。あ、訊きたいことがひとつ増えました」

「なんだ？」

「親子の愛って、どういうものなんでしょうか？」

「……どういう意味だ？」

「あ、いえ……ふと思っただけです。気にしないでください」

ふと思った？ まさか。親子とは何か、テツにとっての永遠の疑問だ。

テツには親がいない。少なくとも、顔や素性をしらない。ただそこに存在し、ある日親切な家族に出会って生活を始めた。頼りになる父親と優しい母親、そしてちよつと変わっているが頭の良いひとり息子。そんな家庭に入り込んで娘として妹として過ごしていた。なるほどそれはよくある家族のありかたなのかもしれない。しかし本物の家族を知らないテツにとっては判断のつかないことだった。そもそも“両親”はテツが血のつながった人間ではないいつも明言していたし、テツもそれが原因で壁を作っていたところはあった。だから、本当の親子の関係がどういうものかを知りたかった。今

まで知る機会も、気軽に訊ける人間にも全く恵まれなかったのだが。

「……………」

携帯電話が鳴った。叶から。

「どうしました？」

『急いだ方がいい。アルミに、警備員が話かけてる』

「はい？」

そんなはずはない。警備員は皆建物の中に撤収しているはずだ。

じゃあその警備員は何なのか。もちろん……

「園長さん、ちょっと走りますよ」

「なにかあったのか？」

「ええ。急ぎです」

園長の返事を待たず駆けだす。園長が後を追うのがわかった。

「ねえ、君達」

突然聞こえた大人の声に業火はビクリと震えたが、声の方を見ると警備員の人が笑顔で手を振りながらこっちへ歩いてくるのが見えた。咄嗟に銃を隠す。警備員は笑顔を崩さない。気付かれなかったか。少し安堵。

「はい、なんでしょう」

業火と警備員の間にアルミが割り込んだ。既に武器は隠してある。

「君達は迷子かい？ お父さんとお母さんは？」

「僕達だけでしたので、いません」

「そっか。あのね、ここは危ないから早く逃げた方がいいよ」

「なにかあったんですか？」

「そうなんだ。とにかく早く出た方がいい。ほら、おじさんについてきて」

警備員が手を差し出してきた。

「……わかりました。でも、その前にひとつ」

アルミがじつと警備員の目を見つめた。

「あなたは、本当に警備員ですか？」

「え？　なんでだい？」

「気になっただけです。それで、どうなんですか？」

「それは……もちろん警備員だけど」

アルミは少し黙ってから、

「わかりました。行きましょう」

警備員の手を掴み、言う。

「業火その子を連れて走れ！」

右手で警備員の手をがっちり掴んで、左手でナイフを取り出し警備員の手首に突き刺した。ほとばしる鮮血。アルミはそのまま足払いで警備員を倒し、馬乗りになってその首を刃で貫いた。

それだけ見て、業火は子供の手を掴んで走った。

第130話 燃えよドラゴン

あちこちから人の動く気配がする。ナイフを引きぬき拳銃を取り出し、今殺した警備員――正しくは、警備員の服を奪った敵――の上から降りて周りを見渡した。業火が子供を連れて走っている。別の方向の物陰から、見知らぬ大人が飛び出してきた。すかさず撃つ。命中。敵は倒れたが生死はわからない。確認する時間もないし、動けなくしたのなら十分だろう。業火の方向へ走る。すぐには追いつけない。なのに業火の前方二十メートルぐらいで敵が飛び出してきた。

「業火前！ 敵！」

「え！？」

業火の反応が遅れた。敵は先を行く業火に拳銃を向け――なにかにはじかれるように後ろにのけぞった。そのまま後頭部をしたたかに打ちながら倒れて動かなくなった。

狙撃か。助かった。業火に追いつき、子供を励ましつつ並んで走る。だが、どこに行けばいい？

「今のはちよつと危なかった」

狙撃銃のスコップを除きながら叶はひとりごとを言う。あちこちから敵がわらわら出てくる。それらを目に付く端から撃っていく。しばらくしたら敵も狙撃を警戒したのか、隠れて姿を現さない。どこから出てくるかわからないが、こちらに姿を見られたら撃たれるという状況においては敵もうかつに動けないだろう。牽制としては上出来だが、懸念事項もある。狙撃位置は敵に把握されていること。そしてここを開け渡してしまえば今度はアルミ達が危険にさらされ

る。

「氷河！ 敵が来る気配は！？」

「ない！」

「わかった！ 誰も近づかせないで！」

スコープの向こうに敵の姿。すかさず引き金を引くが外れた。早いところけりをつけてほしいものだ。

「アルミ！ どうすればいい！？」

「わからない！ とにかく敵のいない所に！ うわっ！」

発砲音。目の前でコンクリートの地面が爆ぜた。どこから撃ってきたのかわからず、闇雲な方向に銃を向けながら後退する。大まかな方向はわかってても肝心の敵の姿が見えないのだ。

「まずいな。どこから撃ってくるかもわからない」

「どうするんや？」

「わからない！」

少し戻って、なにかの建物の外壁に三人で背中を付け止まる。子供はそろそろ体力の限界のようで、荒い息をしている。

さらに悪いことに、テツとの合流地点からずいぶん離れてしまった。もう一度連絡しないと会えない。

「とりあえず、ここはどこだ？」

業火に尋ねた。あまり答えは気にしていなかったが、

「お化け屋敷とミラーハウスの間」

業火は即答した。

「え？」

「今日一日、お前をずっと見てたんや。最初にお化け屋敷に入ったやろ？ 出てくるまでずっと外で待ってた」

「なるほどな。とりあえずテツに連絡して……！」

視界の端に敵の姿。業火を押し倒すと頭上を銃弾が飛んだ。すぐ

に体勢を直し敵の方に向き発砲。敵もすぐに逃げようとしたようだが遅れて、被弾。姿勢を崩し倒れた所で叶が狙撃したようで、一度びくんと体を痙攣させてから動かなくなった。

だが安堵するにはまだ早く、死体の向こう側に複数の敵がアルミを射殺しようとしてこちらに銃を向けている。

「業火ついて来い！ あと銃貸して！」

そういうが早いか、アルミは業火の銃をもぎとり子供を抱えて走り始めた。敵のいる方向へ。戸惑いつつも業火はついてきてくれる。敵に向かって発砲。敵も応戦。距離があるためか互いに当たらないが、距離はだんだん詰まってきているのでいつかはどちらかが当たる。しかしアルミはある地点で方向展転換。そして、

「中に！」

「お、おう！」

さっきまで寄りかかっていた建物――ミラーハウスの入口に入るよう指示し、自分も後に続いた。

敵も続こうとこちらに走ってくる。自分の銃はもう弾が残っていない。弾倉を交換する暇もない。業火の銃を撃った。むこうは複数で全員が銃を持っていて。

刹那、肩に痛みを感じた。意識が飛びかけたがなんとか耐え、撃つ。先頭のひとりを殺した。その後ろにいたひとり狙撃の餌食になったようだ。弾が尽きた。一步踏み出し立っている中では最後の敵の間合いに入り、その腹にナイフを突き立てた。血がアルミの体を濡らす。手に力を入れ、腹を裂いた。大人の体の重みがアルミにのしかかる。なぜか力はいらない。重さに耐えられず、死体と一緒に倒れ……、

「おい、しっかりしろ！」

業火に支えられ、ミラーハウスの中に連れられた。とりあえずこれでしばらく安全か。

「なるほど。考えたな……」

狙撃銃のスコップ越しにアルミの様子を見ていた叶は、危機を切り抜けたアルミに感心しつつ、次の方針を考えていた。問題は、合流地点が変わったこと、そして……敵の何人かがミラーハウスの侵入に成功したこと。アルミは入口から入ってそこからの敵の侵入は阻止できた。しかしその隙に出口から入った敵が三人確認できた。

「とりあえず警告しておくか。にしても鏡の部屋か。ブルース・リ―みたいにくまくいくといんだけどな」

携帯電話で、さっきかかってきた番号にかけた。

「なるほど。わかった」

叶からの電話を受け取ったのは、アルミではなく業火だ。敵が中にいることを伝えられ、少し周りを警戒。

『テツには、あたしから伝えておく。それで……アルミは元気?』

「あ……」

ちらりと横を見る。鏡の壁にもたれかかり、座っているアルミ。左肩をかすったようだ。血はすぐに止まった。具合が悪いわけではないが、腕がうまく動かないらしい。

「たぶん大丈夫やと思う」

『だったらいいけど……気をつけてね』

「わかった。ありがとう」

通話を切って、もう一度アルミを見つめる。

「なあ、本当に大丈夫か?」

「うん」

ゆっくりと立ちあがる。痛むのか、肩は押さえている。

「敵が入ってきたって。出口の方から。この迷路の構造ってわかる

か？」

「いや。まったく」

「そっか」

周囲を見ても。目に映るのは困惑した自分や、アルミの姿。

「これじゃ、戦いにくいな。敵が見えたとして、それが鏡に映った姿と本当の姿の区別が付きにくい。どうすればいい？」

アルミのいうことはもつとも。でも、対策が思い浮かばない。

「さて、次はテツか」

テツにミラーハウスに行くよう指示するため、携帯電話を操作しようとして、

「叶！ なにかくる！」

氷河の報告を聞いて電話を閉じ武器を手を取った。氷河をどかせて床に耳をつける。足音が近づくのがわかった。こちらは音をたてず、迎撃のタイミングを計る。

第131話 行き止まり

「敵の数は三人。鏡張りの壁で囲まれた状況では戦いにくい……」
左手をグーパーと握ったり開いたりしながら、右手で鏡の壁に触れる。業火の目には、アルミはいつも通りに見えた。

「本当にきれいな鏡だなこれじゃあ、本物との区別がつけにくい……」

鏡はきれいに磨かれていて、普通にこの建物で遊ぶならなんとも愉快なことになるだろうが、戦闘するには厄介だ。

「下手に動いて行き止まりなんかに入ったらまずいな。できるだけ動かないこと。ここは二面が壁だから、他の二面に注意を向けること。俺と業火で一方向ずつだ」

業火はうなづいて、子供を挟むように背中を合わせる。入口がどっちだったかの方向感覚は既に失われているが、そんなことどうだっていい。前方にだけ意識を集中させる。拳銃を前に構えてその時を待つ。

どこかから足音が聞こえてきた。息をひそめ足音の接近を待つ。相手も警戒しているようで、その歩みは慎重なようだ。こちらに近づいてはきているのだが、時間をかけている。銃を握る手に力が入る。敵の姿はまだ見えない。少し後ろを窺うと、アルミこちらに背を向け平然と立っていた。表情は見えないが、いつもと様子が変わらないのはさすがだ。視線を戻すと、真正面に見知らぬ大人の姿が見えた。彼は驚いたような顔でこちらを見ている。

「！」

慌てて銃を撃とうとするが間に合わない。銃声が聞こえたが撃ったのは業火ではない。思わず身をすくめるが、それだけで体には特になにも感じなかった。ただ、ガラスの割れる音だけが響いた。

条件は敵も一緒だ。鏡に映った業火の姿に向けて発砲したのだ。

「下がって！」

業火を後ろに押しのけアルミが前に出た。たった今互いの姿を見た鏡にはクモの巣状のヒビが入っていて、敵を見ることはできない。今度姿を現したとするならば、それは実体だ。

「後退しよう。敵は三人。正面からぶつかるのは危険すぎる」

「わかった」

子供と一緒にじりじりと動く。アルミもじっと前をにらみつつ、ついてくる。再び静寂が戻る。その静けさにだんだん疲れてきた頃合いを見計らうように、

「走れ！」

アルミが鋭く叫んだ。言われた通り子供を抱えて走る。直後に、銃声が一発だけ。アルミが撃ったようで、すぐに業火達の後を追ってきた。

「敵は!？」

「足止めできた! とりあえず今の内に引き離そう」

とはいえ、入口から入ってそう動き回ったわけではない。がむしやらに走っていたら、すぐに行き止まりについてしまった。

「……まずいな」

三方向目の鏡に触れながらつぶやくアルミ。

「どうする? 戻る？」

「いや、敵が今どこにいるかもわからない。戻るのは危険だ」

「なあ、足止めて、どんなことをしたんや？」

「……敵がなかなか動かないから、こっちから動くことにした。撤退すると見せかけるために走れと叫び、敵に姿を現させる。出てきたら一発だけ撃ってすぐに逃げる。そうすれば敵は体を引っ込めて警戒してまた出てくるまでに少し間が開く。しかも命中したみたいだから、それでさらに時間が稼げた」

でも、と否定の言葉を述べて、

「今、敵がどこにいるかはわからない。だから引き返すのはやめよう……でもどうしようか。これ以上後退はできないしな」

うつむいて、なにか考えている様子。こういうときは、話かけな

い方がいい。

叶の耳に入ってくる足音はだんだん大きくなっていく。手さぐりで自分の持ってきた鞆の中身を探る。目当てのものはすぐに見つかった。手榴弾がひとつ。タイミングをはかり、ピンを抜いて三秒待ってから階段に投げる。手榴弾は重力に従って階段を転げ落ち、爆発した。一瞬怒号のような声が聞こえたがすぐに消えた。死んだかどうかはわからない。

「逃げる！ 準備して！」

「え！？ ちょっと待てどういう……」

「今の爆発で、たぶんビルの中の人間に気付かれた！ 念のため通報して！ このビルの屋上で爆発があったって！」

「お、おう。わかった！」

今のところ敵が上がってくる様子はない。死んだのか逃げたのかあるいは警戒しているだけかはわからない。いそいそと携帯電話を取り出す氷河を見つつ、さっきまで使っていた狙撃銃を見る。つい数時間前まで敵が使っていたものをそのまま流用していたのだが、これを持って逃げるわけにはいかない。少し迷ってからスコップだけ頂戴して銃本体は下に落とした。コンクリートに叩きつけられる銃の姿は見えないまま、屋上の扉に向かう。鍵がかかっていたために拳銃をぶっ放して壊した。開けると、どたどたとこちらに向かってくる足音。警備員姿の男がひとりだけ。さっきの爆発を聞いて様子を見に来たのか。一気に距離を詰めて殴り倒し、首に発砲。一旦屋上に戻って荷物を手に取り、

「じゃあ行くわよ。階段を使って外に出る」

電話を終えた氷河にそう言ってさっさと行ってしまおう。

屋上に人が集まれば敵もここを拠点にはできなくなる。狙撃ポイ

ントを失うのはつらいが、敵が本気で奪還を考えている可能性を考えればこれでよかったはずだ。

「業火、この子と一緒にここで待っていてくれ。動かないように」

「アルミは？」

「ちよつと行ってくる」

銃の弾倉を交換し、ナイフの血の汚れを服で拭き取り、他の荷物を預けてアルミは敵のいるはずの方向へ向かって行った。

「……ねえ」

「うん？」

突然子供が話かけてきた。驚いたが、返事をした。

「ねえ、勝てるのかな？」

ずいぶんと簡単な質問。しかし答えられなかった。

「あのアルミってお兄ちゃん、トンファーマンの友達なんだよね？」
そんなことをアルミは言っていた。業火はそれを盗み聞きしていただけだが、話には乗ってやるべきか。

「そうや。トンファーマンと仲がいいんや。それで、強い」

「そっかー。でも、変身はできないの？」

「え？」

「トンファーマンの友達だったら変身とかできないのかな？」

「それは……」

どうしたものかと一瞬迷ったが、あんまり話をこじらせるのも問題か。

「そうやな。変身はできない。強いけど」

「そんなので勝てるのかな？」

「……………さあな」

それ以外に言える言葉が無かった。子供は少し不安そうな顔をしたが。

なにかフォローしてやるべきか。少し考えてから口を開く。

「くそ。もう少しだけでいいから」

鏡の壁に手をつき、体の力が抜け膝から崩れ落ちそうになるのに必死に耐えた。

今日は人を殺しすぎた。一度意識を失って、それからさらに殺人を重ねて。飛びそうになる意識をなんとか保ち、もう少しだと自分に言い聞かせ前へ進む。

第132話 ヒーローの条件

テツと園長はステージまで到着した。しかしそこに、アルミ達の姿はない。

「アルミー、どこですかー」

「彰吾ー！ いるかー」

ふたりして名前を呼ぶが、返事はない。ここまで走ってきたこともあって、園長は疲れた様子で壁にもたれかかった。

「彰吾には悪いことをしたな」

そんなことを口にする園長。テツが黙っていると、さらに続けた。「彰吾のことは大切で……私はあの子にとっての、理想の父親でありたいと願っていた。強くて頼りがいのある父親。その強さの基準が、私の場合は悲しいかなそれが金だった。……金はすばらしいぞ。あればあるだけ使うことができる。ありすぎて困ることもない。彰吾にいい思いをさせることもできるしな。だが、その結果がこれだ」自嘲するように言う。

「やっぱり私はダメな父親なのだろうか？ 彰吾に顔向けができない」

「……親子の関わりについて、そう多く知っているわけではありませんが」

言わなくてもいいことだろうが、口をついて言葉が出てしまった。「私の知ってる、ある小学生の話をしていいですか？」

園長は無言で続きを促した。

「彼の父親は、世界的に有名なコンピューターソフトウェア会社の重役なんです。とても優秀な方で、今はアメリカの本社で働いています。つまり、単身赴任ですね。奥さんと、三人の子供を残して、です」

愛しい人のことを、徹底的に調べてわかったこと。父親は海外で働いていて、母親は育児放棄でひきこもり。子供達に逆に世話をさ

れている始末だ。末っ子は今二歳で、その世話もしなければなら
ないという。

「つまり、なにが言いたいのかという事ですネ」

園長は黙ったままだから、テツは勝手に話し続ける。

「彼の家庭環境は、およそ恵まれているとは思えない状況なのです。
というか、不幸ですね。それで……それで、私にはわからないこと
なんですけれど、彼は自分の親のことをどう思っているんでしょう
か？」

「どういうことだ？」

「子は親をどう思っているかですよ。あんな両親のことを、それで
も親として慕うことができるのか。それって、どんな親子でもだい
たい同じだと思うんです。もちろん、あなたのところもです。だか
ら……あなたの疑問は、彼に直接訊いてみるのはどうでしょうか？
なにかわかるかもしれませんよ」

「その、彼とは？」

「アルミ、今あなたの息子さんを守って戦っている方ですよ」
テツの携帯電話が鳴った。叶からだ。

少し怪しまれはしただろうが、無事にビルから外に出ることがで
きた。かなりあわただしくなっているようだし、敵もあの屋上を利
用することはできないだろう。

あとはアルミ達の安否だけが問題だ。とりあえずテツに連絡をと
る。それから、

「それから、逃げるだけ。さ、行くわよ」

「お、おう……」

氷河を連れて、その場を離れた。自分達の役目が終わったらさっ
さと撤退だ。

心臓の鼓動が速いのが自分でも感知できた。このままじゃまずい。さっきの傷はただのかすり傷だった。すでに血は止まっている。

違和感があるのは心因性のものか。その傷口にナイフの切っ先を当て、少し切り裂く。肩に激痛が走る。しかしおかげで目が覚めた。

「さて、どうするかな？」

さっきの戦闘の様子をかんがみるまでもなく、この状況は戦いにくいことこの上ない。原因はこの鏡で、敵がどこにいるのか正確に把握するのを阻んでいるのだ。ナイフを逆手に持ち、手近にあった壁を柄で殴った。鏡にヒビが入る。もう一度振り下ろすと、今度は粉々に砕け散った。これはいい。同じように周りの他の鏡も割っていく。

「これぐらいでいいか。じゃあ……次は……」

敵はまだ来ない。銃を握りなおして少し後退する。業火のいる場所までは戻らない。まだ割れていない壁に背中を付けてじっと聞き耳を立てる。

左腕はもうなんの問題もなく動く。敵の数は何人だったか？ 確か三人で、ひとりは撃ったはずだ。どんな状況なのかはわからないが。

ひとりで迎撃するつもりだった。なんとか勝てるはずだ。いや、勝ってみせる。あのふたりは絶対に守らないといけないんだ。

「アルミはな、変身はできないけど本物のヒーローなんや」

子供に、あるいは自分に言い含ませるように。語りかける。

「ヒーローってのは、変身できるからヒーローなんじゃないと思う

んや」

首をかしげる子供。

「ヒーローっていうのは、たとえ変身できなくても、どんなにまずい状況でも諦めず、強い敵に立ち向かう。その姿こそがヒーローだと、俺は思う。だからアルミは……アルミはヒーローで、戦う。それで、たぶん負けない」

「本当に？」

「そう、本当に。だから今は、アルミのことを信じて持っている。それだけや」

そうとも。それしかすることがない。しかし案ずることはないだろう。アルミは、そういう奴だ。

足音がだんだん近づいてくる。正確な位置はわからないが、それは問題ない。ただじっとしてその時を待つ。心臓の鼓動が速くなる。逃げたくなるのを、歯を食いしばって耐えた。もう少し、もう少しだ。そして聞こえた。足音とは違う、ガラスを踏みしだく音が。その瞬間曲がり角から身を乗り出して、ある一点に対して発砲した。

ガラスを割った場所はごくせまい範囲で、ガラスを踏む音がすなわち敵がその範囲に足を踏み入れた音だ。つまりそこに発砲すれば敵がいる。はたしてその通りで、アルミが撃ったその先に男がふたり。数発撃って、また身を隠す。聞こえてきたのは男のうめき声がひとつだけ。ひとりは当てたがもうひとりは無傷か。

残った敵は、仲間を寝かしてじりじりこちらに近づいている。曲がり角を挟んで一騎打ち。左手で銃を持ち、ナイフを口にくわえる。右手は自由だ。そろそろとしゃがんで迎撃の準備をする。敵はすぐに来た。曲がり角で警戒して、銃口を向けながら角を曲がった。し

かし銃の向く位置はしゃがんだアルミの頭上だった。おまけにアルミが視界に入らず、そこに隙ができた。アルミは右手で敵の銃を持つ腕を掴み射線を上に逸らし、くわえたナイフで胴に斬りかかった。しかし失敗。敵の自由な方の手がアルミの首を掴んで締め上げた。苦しさに耐えつつ、左手の銃で発砲。これもすんでのところで敵に気付かれかわされた。敵は首から手を離しアルミの銃を奪おうとする。しばらくもみあいになったが、アルミの手から銃が奪われた。すかさず距離をとる敵。このままでは終わらないと、アルミは敵の懷の中に飛び込んだ。

第133話 死にもの狂い

ナイフをくわえながらの突進。敵に反応する隙も与えぬまま肉薄し、両手で相手の両手を掴んで腹を刺す。刃が肉を突きとおす感触を感じた。引き抜こうとしたが、抜けない。筋肉が収縮したのか。くわえていたナイフを離し、敵の、自分の腹に刺さったナイフを抜こうとしているのを必死で抑える。刺さりはしたが出血はひどくない。それでも敵は抜こうと必死だ。アルミの右手は敵の左腕を、左手は右腕をしっかりと握って離さない。睨み合いながら手に力を込める。次はどうする？ 足がお留守だ。敵の目を見ながら足払いをかける。途端にバランスを崩す敵、後ろに倒れる。そのまま馬乗りになろうとしたが、敵はすんでのところで持ちこたえた。二、三步下がってアルミの手を振りほどいた。その寸前、アルミはその手を叩く。二丁の銃がはじけ飛び、鏡の壁にぶつかり落ちた。ふたりからは手の届かない距離。今度は敵から接近してきて、アルミの襟首を掴んで壁にぶつける。後頭部に鈍い痛み。敵はなお手を離さず、一旦腕を引きまた壁に叩きつける。ガラスの割れる音。首筋を暖かい液体が流れる。血。

「くそっ！」

敵の手を掴み引き剥がそうとする。それと同時に敵の腹のナイフを掴みひねりあげる。抜けはしなかったが相当の痛みを感じたはずだ。敵の手が離れる。アルミは敵の心臓のあたりを思いっきり殴り、再び足払いをかける。今度は成功、敵は後ろに倒れた。立ち直る隙も与えぬまま相手に馬乗りになり、渾身の力で顔を殴る。一発、二発。三発目は受け止められた。敵のもう片手がアルミの首に伸びた。また首を絞めるつもりか。アルミは首に伸びてきた敵の手に噛みついた。爪が口腔内を切る。しかし構わず歯に力を込め、そして指を噛みちぎった。血のにおいが口の中に広がる。慌てて引っ込めた敵の手には指が二本欠けていた。悲鳴をあげて傷を押さえた。アルミ

は口の中の二本の指を吐き捨て、再び敵の顔を殴る。今度は止められることもなく、延々と殴り続けることができた。その内に、敵はピクリとも動かなくなった。とどめとばかりに、腹のナイフを力任せに抜き取り、敵の首に刺す。

「はあ……………はあ……………」

訪れた静寂。眼前の敵は目を閉じ絶命している。体のあちこちから血が流れ、鉄の臭いが鼻孔をくすぐった。勝った、そういう感慨にふける余裕はない。人を殺しすぎていたし、受けたダメージも大きすぎた。死体からナイフを引き抜き、よろよろと立ちあがって落とした拳銃を拾った。体中のあちこちが痛む。後頭部に手をやると、ぬめりとした感触がした。この出血は、放っておいたら止まってくれるだろうか？

割れた鏡に寄りかかり、これからどうするべきか考えることにした。叶から聞いた、このミラーハウスに侵入した敵は全員倒したはず……………いや違う。死亡を確認したのは目の前のこのひとりだけ。後は撃っただけで、まだ生きているかもしれない。

背筋に冷たいものが走った。今のアルミの状況では、大人に真っ向からぶつかって勝てるとは絶対に思えない。体力的にも精神的にも限界に近い。もしここで敵に襲われたら……………

「！」

足音が聞こえた。大人がひとりだけ。ずいぶんゆっくりだ。

殺せてなかったのだ。撃たれてはいるが、生きている。どうする？ 逃げるわけにはいかず、戦うのも状況が悪すぎる。血の味がする唾を飲み込み、覚悟を決めた。敵の来ると思われる方向に銃口を向ける。おそらくは敵も銃を持っていて、互いの姿を確認した瞬間発砲することになるだろう。そこには技術の関与する余地はあまりなく、どちらかというと運が勝敗を左右する。

かまわない。敵がいるなら倒すだけだ。じっと敵の出現を待つ。

鏡はほとんどが割れていて、敵の姿を見間違うことはない。足音だんだん近づいてくる。そして……現れた。腹を押さえ、危機迫る形相でゆっくりゆっくり獲物を探す男が迷路の角から出てきた。しかし足音をたてていたためにアルミは男の存在をあらかじめ感知しており、相手はそうではなかったそこに差ができる。

勝った。そう確信して銃弾を敵に撃ち込む。が、当たらなかった。すんでのところで気付かれかわされた。角に引っ込み、そして発砲してくる敵に、アルミは慌てて後退した。

「うおらああああ！ ガキがあああ！ 逃げてないででてこおとおおい！」

敵のこの叫びは、威嚇のためだろう。そんなことで動じるアルミではないが、そんなことをする体力があるということは驚きだ。今度はどうする？ 敵にこちらの存在が知られてしまった。向こうは正面からの勝負を挑んでくるだろうか？ 敵も重傷を負ってはいるらしい。勝てるか？ 確証は持てない。

足音が近づいてきた。さっきよりも歩くスピードが少し速い。来るな。とにかく戦うしかない。敵の出てくる方向に銃を向け、

「あれ？ アルミ様、ひとりですか？」

曲がり角からひょっこり顔を出したテツを見て、驚いた。

「テツ？ 敵がいなかった？」

状況が飲み込めないまま、アルミは訊いた。

「いましたよ。殺しましたけど」

「そうか」

それを聞いて安心した。テツが助けに来てくれて、敵をすべて排除してくれた。そういうことなのか。そして、

「おい、私の息子は無事なのか？」

テツの後ろから、若干こわばった声がした。言われてから初めて、テツの後ろに大人の男がいることに気付いた。

「えっと？」

「アルミ様、この人が、この遊園地の園長さんですよ」

つまり、あの子供の父親だ。

「なるほど。子供なら、この先にいますよ。業火……俺の友達も一緒です」

「そうか。……ありがとう」

園長は一瞬、アルミになにか言いたそうなそぶりを見せたが、自分の子供の方が大事なのか。アルミの示した方向へと走っていった。アルミとテツだけ取り残される。

「ねえテツ」

「はい。なんででしょう？」

「テツも、園長さんの所にいてくれないかな？ まだどこかに敵がいるかわからないし。俺はひとりで戦えるけど、業火だけで園長さんと子供を守れるとは思えないし」

「でも、敵はもう全滅ですよ」

「んー、でも、一緒にいてあげてほしい」

「……そうですか。わかりました」

テツも、業火と子供のいる場所へ。テツの姿が見えなくなると同時に、アルミはその場に倒れ込んだ。

今日は一日に間に人を殺しすぎたようだ。回復に、どれだけ時間がかかるだろうか。

第134話 想いは見えず

「彰吾！」

そんな声と共に飛び出してきた男の姿に業火は一瞬身構えたが、今までの敵とは明らかに様子が違ったのと、後ろからテツがついてきたのを見て攻撃するのはやめにした。子供も、お父さんと叫びながら男の胸に飛び込んだ。なるほど。感動の再会か。園長親子の様子をしばらく眺めていたが、だんだん手持ち無沙汰になってテツに話かけた。

「なあ、敵はどうなったんや？」

「全員殺しました。もうここに脅威はありません」

「そっか。アルミはどこや？」

「たぶんこの迷路内いるはずです。私に、園長の近くにいてほしいと言っていたので。たぶん、今はひとりです」

「ひとり……じゃあ、行ってやるか」

「でも、アルミ様は……なんだか、ひとりにしてほしい、そんな雰囲気でしたよ？」

「え？」

「あ、いえ、そういう風に見えたただけなんですけどね。でも、だとしたらどうしてなんでしようか？」

「さあな」

理由は知らないが、だとしたら行かない方がいいかもしれない。そう結論づけたその瞬間、断末魔のような叫び声が聞こえてきた。

「……え？」

テツと顔を見合わせる業火。テツも、わけがわからないという表情。園長と子供も不安そうな顔だ。

「どうしますか？」

「そんなん……行こうや」

「はい！」

アルミになにかあったのかもしれない。業火とテツは声のした方向へ走った。

走っている途中も、叫びは続いていた。その場所へ向かう途中、二度ほど鏡の壁に頭をぶつけた。焦っている自分までもどかしい。ようやく、その角を曲がれば声のする場所にたどり着く、そういう時点になると同時に、叫びが急に止まった。そんな気がした。

「アルミ！」

友を気遣いつつ、角を曲がる。アルミは目を閉じ放心したように棒立ちしていて、一瞬その姿勢を保ったと思ったらすぐに力が抜けて膝からがくりと崩れ落ちた。

「アルミ！？ アルミおい！」

慌ててアルミの体を抱きとめる。意識が無い。必死に名前を呼び掛けた。テツは後ろで、無言で事の成り行きを見守っている。

「ん……うん……？」

アルミ煩わしそうにうめき、そして目を開けた。

「え？ 業火？ どうなってるんだ？」

目覚めの一言。自分を抱きかかえている業火に驚いている様子。

「どうなってるって、だって、誰かの悲鳴が聞こえて、それで駆けつけたらアルミが倒れていて」

「悲鳴？ 誰の？」

「誰のって……」

「子供の声でした」

後ろからテツが助け舟を出した。子供の声、それは案にアルミの声だと言っているようなものだが、

「へえ、なんだろ」

アルミはなにも知らないといった様子。とぼけているのではなく、本当にわからないようだ。でも、アルミは確かに倒れたわけで、「なあアルミ、なんで倒れたりしたんや？ なにかあったとか？」

「なんですか……実は俺にもよくわからない。立ちくらみみたいに、急に意識がなくなってる」

「……………そうか」

本当かどうかはわからないが、本人が言っているのであれば信じるしかない。疑ってかかる意味もあるまい。

後ろを向いて、テツに目くばせする。テツは何か言いたそうだったが、黙って頷いた。

立ちくらみで気を失った。間抜けこの上ない言い訳だが、それでも信じてもらえた。叫んだ、ということについては全く理解できないが、このまま状況が収束したのだからよしとしよう。

敵は全滅したようだし、今日の仕事はこれで終わりか、そう思っていたら急に園長から呼び出されて驚いた。

アルミはなんとなく高級そうな応接室に通されて、園長と向かい合って座った。他にはアルミの後ろにテツが控えているだけ。なぜか絨毯に赤い染みがあるのが気になった。

「すまん。いきなり呼びだしたりして」

「いえ……」

「ひとつだけ、君に訊きたいことがあってな……君の親のことを、その秘書さんから聞いた」

「……………」

振り返って、テツに非難の視線を送る。テツは肩をすくめただけ。

「それで、うちの両親がどうしましたか？」

「君は、君の親のことをどう思っている？」

「……………」

答えに詰まった。なぜこの人にこんなことを訊かれなければならない

ないのだ？

答えず、突っぱねることはできただろう。しかしアルミはそれをしなかった。なぜか、理由はふたつ。園長の質問の真意――彼の子供にまつわること――に気付いたから。もうひとつは、いつぞやネッツの友達との会話を思い出したから。

「俺達子供が何と言おうと、親は親です。この関係を断ち切るのは簡単ではない。子供の力では、不可能に近い。だから、子供にとつての親というのは、圧倒的な力を持った存在に見える。……それは事実ではあるのですが、子供の実感としては事実以上のものに見えてるんです。だから、子供は結局親に従うしかない。それがどんなに理不尽なことであっても、です」

だから、とアルミは続ける。

「大抵の場合、子供ってのは親に従うものなんです。それで、親がまっとうな人間であれば、そして子供に正しく愛情を注ぐことができたなら、子供は親を見捨てることはしませんよ……って、質問には答えてませんけど、こんなのでいいですか？」

園長はうなづいた。

「ああ。それでいい。私の考えていたことがよくわかったな。本当に利口な子だ……」

後のことは私に任せてくれ。君達のことは決して公にしない。

園長のそんな言葉を信じて、テツはアルミと一緒に帰路につくことにした。ふたりきりの時間。これが一番気まずい。

「ねえ、テツ」

「……はい」

「あの子が狙われてること、テツは知ってたんだ」

「ええ。そうです」

「で、俺に隠して”デート”に誘った」

「はい。……………すいません」

「……………まあ、いいけどさ」

歩みを止めるアルミ。

「別にいいんだ。こんな風に、戦いになるのはかまわない。でも、
だったら最初からそう言ってくれればよかったのに」

「つまり、どういうことですか？」

「正直に言ってほしいってこと。デートならデートで、仕事なら仕事で、最初から言ってくれないと楽しめない」

「そうですか。……………え？　つまりアルミ様は、私とデートできるならしたい、っていうことですか？」

「……………」

ツリ目の少年は、黙ってテツを見上げた。その目からは何に感情も読みとれない。

「つ、つまりこれは誘っているという認識でよろしいですか？」

無反応なアルミ。これはいわゆる据え膳というものではないか。

とりあえず、とりあえず抱きつくことからはじめようか。ゆっくりアルミに手を伸ばし、

「なんてね」

笑顔で腕をすり抜けられた。

「俺は、俺のしたいことをするだけ。また連れてってよ。今度は誘拐とか抜きで」

じゃあ帰ろ、それだけ言ってアルミはまた歩き始めた。本当に、よくわからない人だ。

第134話 想いは見えず（後書き）

こんにちは。そららです。

第九章、いかがでしたか？ 前回はルツカとソーラメインのお話でしたが、今回はちゃんと主人公が活躍していますよ。あと、アルミと業火がコンビを組んでるのが随分久しぶりな気がします。タイトルは「蛙とアルミニウム」なのね。

よろしかったら感想を書いてください。そして、次回からもお楽しみに。

第135話 夏の始まり

夏のある日の午後、机に向かって黙々と勉強しているソーラの隣で、なんともやる気のない声があがった。

「暑い……………」

人のベッドに寝転んで言う言葉じゃないけれど、ルツカの言うことはもつともだ。この夏は例年通り、嫌になるぐらいに暑い。毎年毎年、太陽は飽きもせずこの大地を照らしている。いや、太陽が存在しなければこの惑星の繁栄はなかったというのは理解しているさ。でもなにごとくも限度ってのがある。この世界を作ったもうたのが神なのか物理法則なのかは知らないが、微調整の余地はなかったのだろうか？

だめだ、こんなことを考えても暑さは去らない。ついでに言うと、外で鳴いてるセミの声も暑さを助長しているようだ。ソーラは学習机に突っ伏してルツカに言った。

「クーラーつけてください」

「うん！」

いつにない俊敏さで起き上がったルツカは、壁に架かったリモコンを手に取りエアコンに向けてボタンを押した。ピツという福音のような電子音と共に、冷風が吹きつけてきた。さっきまで全開だった扉と窓を閉めて涼やかな空気を楽しむ。文明ってすばらしい。窓を閉めたことで、蟬の声もはるか遠くに消え去った。

「ねえルツカ」

「なに？」

「夏休み、なにしますか？」

「んー」

ルツカは考えてる仕草をしているが、実際のところはなにも考えてないんだろう。なにしろ時間はいくらでもある。

この日、市内のすべての公立学校で終業式が行われた。長い一学

期が終り、長い夏休みが始まったのだ。ソーラもルツカも学習塾に通って受験に備える、なんて面倒なことはいらない。時間は有り余っていて、おそらく思いついたことを片っ端からやっても時間は尽きないだろう。

「ま、とりあえず宿題を片付けることからしない？」

さっきまでベッドでやる気無さそうにしていたルツカは、持ってきた学生鞆を開けて中からテキストとノートを取り出した。それをベッドの上に広げる。これがルツカの宿題か。ソーラも、机の上に広がったノートに向きあう。そう、夏休みははじまったばかりなのだ。

同刻、当然ながら浅倉家でも夏休みは始まっていた。リビングにて長男と長女が机に座ってノートになにか書いている。もちろん宿題をやっているのだ。夏休みに大量の宿題が出るというのはこの学校でも同じことであり、これをやらなければ休暇の後半にとつもない後悔を味わうことになる。

そういうわけで、学業の徒たるふたりは黙々と宿題をしている。しているのであるが……………

「終わったー！」

弟が突然そんなこと言ったおかげで、唯は驚いて、ノートに落としていた視線を正面に向けた。アルミがちよっと得意げにこちらを見返していた。

「終わったって、なにが？」

答えはだいたいわかっているが、一応訊いてみる。

「夏休みの宿題が終わった」

「本当に？」

「んー、読書感想文だけ、終わってない」

それはつまり、読書感想文以外はすべて終わっているということだ。あの大量の漢字書き取りや計算ドリルも、面倒な自由研究もだ。「でも、さっきからあんまりやってた、って感じじゃなかったよね。いつのまに？」

「ここ二週間ぐらいずっと。計算と漢字ドリルは範囲の予想ができるし、プリントで配られる問題は事前に先生からもらった。勉強したいって言ったら、先生って素直に応援してくれるものなんだね。自由研究は、出されることがわかってるわけだからあらかじめできる。なにやるかは自由だし」

そう言って、床に置かれたランドセルから一冊のノートを取り出した。表紙に「オゾン層」と書かれてある。中には当たり障りもない、環境問題に対する研究と考察が書かれていた。なるほど。

「読書感想文はいつでもできるから、まあいいんじゃないかな。だから、宿題はもう終わり！」

読書家のアルミにとっては、確かにこの宿題は簡単すぎる。

となるとたしかに、宿題が終わっているに等しいのだろう。なんてこった。

「ねえねえ、お姉ちゃんの宿題手伝おっか？」

机に身を乗り出してそんなことまで言ってきた。なるほど、反則なまでに頭のいいアルミなら、中学三年生レベルの問題なら簡単に解くことができるだろう。それに姉を手助けしたいという気持ちもよくわかる。でも、

「だめだからね」

小学校の宿題は頭を使う必要のない単純作業だ。しかし中学校ともなるとそうはいかない。程度の差こそあれ、ちゃんと問題の解法を考えたりしないといけない。つまり、ちゃんとやらないと勉強にならないわけだ。特に三年生は受験とかあるし。それに、まあその、小学生の弟に宿題を手伝ってもらうのは、姉としての矜持にかかわる。

「えー、なんでー？」

「だめなものはだめです。それよりアルミ、あなた今、すごく眠いでしょう？」

「え？　なんでわかったの？」

凶星、といった雰囲気で驚くアルミ。まったくこの子は。

「わからないものですか。あなたのことだから、ここ数日は寝ないで宿題やってたんでしょう？」

「え……なんでそれを……」

「簡単にわかるってば。まったく……アルミ、寝なさい。晩ご飯になったら起こすから」

「えー」

「えへ、じゃない。ほら。いきなり体壊したらどうするの？」

「……はあい」

しぶしぶといった様子で同意するアルミ。ノートを片付けて二階の寝室に向かおうとしたが、ふと何かに気付いたようだ。椅子をふたつ唯の座っている椅子に並べて、その上に寝転んだ。頭は、唯の膝の上。

「えへへ」

うれしそうに笑うアルミ。かわいい。

「もう、しょうがないな」

別に嫌じゃない。そのままにすることにした。

「ねえ、アルミ」

「なに？」

「夏の旅行、どこか行きたいところある？」

「……別に。毎年行ってるし。もう行くところなんて……あ、ハブ館もう一回行きたい」

「そっか。わかった」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………寝ちゃったかな」

唯の膝の上で、アルミは静かに寝息をたてている。無防備な寝顔に、ちよつときめいてみたり。

毎年行く沖縄旅行以外に、浅倉家に夏休みの計画は特にない。親が不在だし、子供だけでできることなどが知れている。アルミも唯も、ひとりでなにかすることは苦じゃないし、やりたいことがあれば勝手にやるというスタンスだ。

でも今年は、アルミの日常はずいぶん変化しているようだ。唯にはよくわからないが、今までとは違うような日常。

アルミが望んだ変化ならそれでいい。しかし、なにがあるにしても、アルミには無事でいてほしい。来るべきその時まで……………。

第136話 画面の向こうには

机の上に積んである、未読の本の山を眺めた。どれを読書感想文の題材にしようか。ライトノベルはさすがに避けた方がいい。あんまり難解な書物もだめだろうか。一般小説の中から一冊――SFミステリーものだった――を手にとり、ベッドに寝転んで読み始めた。まあこういう本なら題材もまじめだし宿題として提出するのに何の問題もないだろう。だめだったらまた別の本にすればいい。

「……………つまらない」

ぱたんと本を閉じる。つまらない。いや、読んでるうちにおもしろくなるのか？ だったらそうなるまでの間は退屈でしょうがないってことだ。

本を傍らに置いて、アルミはぼーっと天井を眺める。他にすることが、すぐには思いつかない。

ふと、今後行く予定の旅行のことが頭によぎった。浅倉家唯一の年中行事。毎年、行く先は沖縄。それは、アルミが生まれた年の夏から毎年行われているらしい。さすがに十年前のことなど覚えていないが、物心ついた時にはすでに行われていたことであった。

やると言いだしたのは、アルミの父親。それが何年も続いて、父がアメリカに単身赴任赴任してからも続いている。

旅行には家族全員で行く。もちろん母親もだ。もともと母親はあれだから、旅先でも宿にひきこもってばかりだけれど。

それは父親が遠くに行っても同じで。大人がいないと旅というのは難しいから母親についてきてもらってはいるが、旅の主導権は唯とアルミにある。子供だけでそんなことをするのは簡単ではないが、それでもこの旅行を続けるのは、アルミが望んだからだ。

父親が行ってしまったその年、アルミは父親から告げられた、ア

ルミの正体について。

「……………」

自分の正体。考えるだに恐ろしいこと。そして、この旅行に行く意味。

「くそっ！」

悪態をつき、壁を蹴る。できれば知りたくなかった真実。この時期になると、自分がどこか恐ろしくなる。厄介なのが、この気持ち打ち明けることのできる人間がないということ。

お前は、悪人だ。誰かにそう言われた気がした。それを振り払うように壁を蹴ろうとして、別のなにか柔らかいものを蹴ってしまった。その衝撃で「それ」は、転がってベッドから落ちた。

青い色の竜のぬいぐるみ。それを目にしたアルミはひとつ決心して、ベッドから起き上がった。パソコンに向かい電源をつける。

オンラインゲーム、蒼空のドラゴンナイツオンライン。克蘭・テルミットのある日のチャットログより抜粋。

＜あるみんなさんがログインしました

packer…こんにちは

あるみんな…うん

packer…今日から夏休みでしたね

あるみんな…そう だからこんな時間に来てる。 ほあには誰もいないね

あるみんな…おっと、他には、だ

packer…みなさん学生や社会人さんですからね。いつも通り夕方にならないと来ませんよ。どうしますか？ 2人だけですけど、ミッションとかしますか？

あるみん…いや、ちょっと話さないか？

packer…はい。いいですよ

packer…でも珍しいですね。お話したいなんて

あるみん…うん、まあ、この時期になると、ちょっとね。

あるみん…自分がなんなのかわからなくなることがあって。知り合いにいろいろ話をきこうかって思って

packer…そうですか。…：自分がなんなのか、ですか。どうしてですか？

あるみん…

あるみん…おっと 自分でもよくわからないけれど

あるみん…疲れてるのかな うち間違い多すぎ

packer…気にしないでください。そうですね。私にとっての隊長さんは、命の恩人、でしょうか

packer…覚えていますか？ 私と初めて会った時のこと

あるみん…うん。あれだよな。名前は忘れたけど、チャットサイトだっけ。

packer…はい。過疎サイトで、その

packer…あんまり人がいなくて。私は、あんまり人と接するのが好きではなかったの。だからおかしな話ですが、人のいないチャットルームで1人でいることが好きだったんです。

あるみん…それで、そのチャットに俺が入ってきた

packer…はい。あの時は慌てて、出ていこうとしたんですけど、その前に挨拶されて。

あるみん…うん なんかひたすら謝られた気がする

packer…はい。あの時は本当にすいません

あるみん…もういいってw それで、なんとかまともな話ができるようになって。でも、なんか暗かったんだよね

packer…ええ。悩みがあつて

packer…あるみんなが優しそうな人だつて、そう思つて、思い切つて悩んでることを話してみたいです

packer…そうしたら、やっぱりあるみんなはいい人で、ちよつと心が軽くなつた気がして

packer…また会いたいですつて言ったら、またここに来るつて言つてくれて

packer…本当にあそこに来てくれて。それで、何度かお話しして仲良くなつて、それからこのゲームに誘つていただいて

packer…はじめて、誰かの役に立つことができた。そう思いました

packer…あ

packer…すいません。私ばかり喋つてしまつて

あるみんな…別にいいよ。まあ、いきなり悩み相談は驚いたけど、俺にとつてもpackerはネットでできた初めての友達だったから。これに誘つたのもひとりで始めるよりはふたりの方が楽しいかなつて思つたからだし

packer…でも、私はすごくうれしかったです。

packer…私があるみんなをどう思つてゐるかですね

packer…あるみんなに出会うまで、私は自分が誰からも必要とされてないんじゃないかつて、そう考えてたんです。

packer…でも、このゲームを始めてから、友達がたくさんできて、みなさん私を頼りにしてくれてるのがわかつて。すごくうれしいんです。

packer…たぶん、あるみんなに出会つてなかったら、私は今頃、自殺していたかもしれない

packer…だから、私はあるみんなが

packer…あるみんなに、すごく感謝してるんです。本当に、ありがとうございました

packer…だから、あるみんなも、なにか悩んでることがあ

ったらなんでも私に言ってください。私でよかったら、いつでも相談に乗りますから

あるみんな..うん ありがとう。なんか、わかった気がする

packer..なにがですか？

あるみんな..んー、内緒。また他の人にもいろいろききたいから、今はちょっと落ちる

あるみんな..また夜に戻る

packer..あ、はい。いつてらっしゃいませ

<あるみんながログアウトしました

packer..

packer..だから、私はあるみんなが

packer..好きです。

packer..

packer..やっぱり言えない。言ったら、どんな反応するんだろう。

packer..好きでしゅ、あるみんな

packer..あう……

<packerさんがログアウトしました

第137話 この地の長

顔も名前も知らない友達。でも、確かに友達だ。

詳しいことを明かすわけにはいかなかったが、同じ年のひきこもりの女の子と話したらちよつとは気分が軽くなった気がした。

命の恩人。なんとなくはわかっていたことだが、いざはっきり言われてみると少し照れくさい。

あの子に出会ったのは、二年前か。業火と友達になったのも、そのあたり。父親に自分のことについて告げられた頃と一致している。というか、それまで必要のないと思っていた友達という存在に、はじめて興味を持った時期だ。

いや、違う。興味を持ったなんて生ぬるいものじゃない。もっと切実な思い。

誰か、すぐ近くに自分を支えてくれる存在がいる。そういう人がいないと気が狂いそうだった。

しかし実際は、友達ができたとしても真実を誰にも言えないという葛藤に思い悩むことになるのだが。

「……………」

パソコンの電源を切り再びベッドに寝転んだアルミは、自分の因果な運命に少しの間想いを馳せた。それは、どれだけ考えても揺るがない事実。どれだけあがいても変わらない未来。

「ま、いいや」

起き上がったアルミは冷房の電源を切り、出かける準備を始めた。

「やあアルミ君。最近どうだい？」

ひとつの市、しかも政令指定都市の長にいきなり面会を申し込むなんて、普通はできるものじゃない。市長ってのは仕事が多くて忙しいものなのだ。だから、市役所に言って受付のお姉さんにテツさんはいますかと言って、出てきたテツに市長と話したいと言ったら、あっさりいいと告げられたのには驚いた。

そして今、やたらロックな内装の執務室にて、アルミは市長と対面している。サングラスにきらびやかな柄のスーツという、おおよそ市長とは思えないような格好の男。これがこの自治体の首長なのだから頭が痛い。職務に忠実であるならばそれでいいのだが。

「どうだいて言われましても。いつも通りですよ。悪い奴らと戦って、やっつける」

「そうだね。ああ、そうだ。音楽聴くかい？ 洋楽ロックしかないけれど」

「洋楽はわからなから別にいいです」

「でも私は聴きたいんだ」

そういつて市長は部屋の隅に置かれたでっかいコンポに歩み寄りなにかのCDを入れた。流れてくる、落ち着いた曲調の音楽。

「仕事の方は、テツから報告を受けているしよくわかってる。でも、わからないこともあるんだ。例えば……………」

椅子に戻り、話の続きを切りだす。

「……………テツの気持ちとか」

「……………続きを聴きましょう」

「まあ、ありふれた話さ。兄が妹の気持ちを理解できない。わかりたくてたまらないのに」

「……………あなたがテツの兄であるとは、初めて知りました」

「言ってなかったからね。詳しい話、聴きたいかい？」

「……是非」

テツは、孤児であった。生みの親については、一切のことがわからない。彼女はある日、人通りの多い駅前通りでひとりで倒れていたのを保護された。今から十四年前のことである。

彼女は身元の特定につながるものはなにも持っておらず、それらしい搜索願は出されておらず、そして、なにより重大なことに、彼女は自分に関するほとんどの記憶を失っていた。ただひとつ、テツという名前以外は。

身元がわからず引き取り手もないなら、彼女の世話は公的機関がするしかない。児童養護施設に入れられたテツは一年間そこで過ごした。物静かで、周りとはあまり関わろうとしない。そんな子だったと聞いている。

「そして、テツを引き取り養子にしたのが、私の両親だ」

「なるほど……あなたのご両親は、どうしてまた養子を取ろうなんて？ あなたはすでに生まれていたんでしょ？」

「子供がいないと養子をとれないって法はないさ。父も母も優しい人だからね。親の愛というものを知らない子供がいるのが耐えられないようだ。そういう子供をひとりでも救えたらとね。テツは施設の子供の中でもひととき心を閉ざした子だったからね。だから選ばれて、引き取られた。私と変わらない育てられ方をされてたよ。私も、テツには妹として扱った。そういう風に、親から言われたんだ」

「そうでしたか。そして、あなたが市長に就任すると共に、テツは私的な秘書になった」

「そういうわけ。私達が独立してからは、両親はあたらしい養子をとって育ててるよ。あいかわらずだね」

「なるほど。でも、いいんですか？」

「なにが？」

「それは……」

少し言葉に詰まってから、アルミは言った。

「テツが仕事で、その、人を殺していることです。あなたの話によると、ご両親はとってもいい人のようです。慈悲にあふれた、心優しい人。違いますか？」

「ああ。そうだよ。息子が言うのも変なことだけど」

「ご両親の影響は、あなたにも出ていると思いますよ。あなたがこの市長に就任してからは、この市の福祉制度はずいぶん改善されました。あなたの政策方針によってです」

もしこの市長がもっと早く就任していたら、ときどきそんなことを思う。ただの妄想だし、口に出すことは決してないが。

「そんな、“いい市長”さんの裏の仕事。妹で私設の秘書に、街にはびこる悪人を問答無用で斬り殺す」

「なるほど。確かに。世間のイメージを裏切っているかもしれないね。それに両親も。でも、しょうがないとは思わないかい？ 政治だけで世の中がすべて解決するとは限らない。君も知っているだろう？」

「ええ、まあ。それで……テツの気持ちでしたっけ？ 妹の気持ちかわからない？」

「まあね。あいつ、今でも本心を押し隠すことが上手いから。なにを考えているのかわからないことがある。君にだったら、なにかわかることがあるんじゃないかなって思ってた」

「わかりませんよ。そんなこと」

即答した。市長は特に驚いた様子でもなく、続きを促す。

「テツは俺に対して、結婚してくださいしか言わないです。それに、本心なんて誰にも言えないことですよ」

たった一人の親友に対しても、だ。

「いいじゃないですか。本当の気持ちがわからなくても。テツと市

長さんは、本当のきょうだいのような関係だったんでしょう？ だったら、それでいいんじゃないでしょうか。わからないことがあっても、わかるところを理解してあげたらいいんじゃないですか。：テツはたしかに本心を隠したがるような人ですけど、それでも俺の仲間です。あなたの妹です。そうでしょう？」

「……なるほどね。いや、すまなかった。いきなりこんな話をしてしまつて」

「いえ……いきなり面会を求めたのは俺の方ですから。それに、テツのことも知れましたし」

「そうか。よかった」

そう言つて、市長は笑つた。いい笑顔。政治家という言葉のイメージにはあてはまらないことだが、この人は誠実で、素直だ。アルミの知る限り、この政治家は嘘をついたことがない。行っていることは、すべて良かれと思つてしているのだ。

自分とは大違いだ。アルミはそう感じた。

第138話　もっと冷たい人だって

テツとはまた違う、ピシッとしたスーツとメガネの似合ういかにも秘書然としたお姉さんがどこからともなくやってきて、次の予定が云々と市長にささやいた。なるほど。この人が「公的な」秘書さんか。

「わかったわかった。でもね、頭の腐った老害役員との会合とこの国の将来を担う子供との会合とじゃ、どっちを優先すべきかわからない君じゃないだろう？」

「無茶言わないでください。市長には市長の仕事があるでしょう？」
と言って市長をたしなめたのはアルミだ。

「すいません。俺はもう帰りますので、後はご自由に」

そう言って席を立つ。お辞儀する秘書さんと、「じゃあねー」と手をひらひらさせる市長に頭を下げ、執務室を辞するアルミ。

「お話は終わりましたか？」

部屋を出ると、扉の正面にテツが立っていた。待っていたのか。

「うん」

「そうですか。では、今度は私とお話しませんか？」

言われなくても、最初からそうするつもりだった。だまって頷く。

「立ち話もなんですから、喫茶店にでも行きませんか？」

「わかった」

アルミの同意を確認すると、テツはじゃあ行きますかと言って、廊下を歩きだした。

市役所から歩いて五分の場所にある喫茶店。ジャズなBGMが流れ、ダンディーなマスターがいるという、なんとも雰囲気の良い喫茶店だ。あと、ウェイトレスのお姉さんが何人かいる。

テーブル席に向かい合って座って、

「なに飲みますか？」

「わかりました。マスター、いつものと、オレンジジュースください」

カウンターの向こうにいるダンディーなマスターに声をかけると、彼は渋い声で了解の意味の返事をした。注文を取ろうとこっちに向かっていったウェイトレスのお姉さんが、役目を失って一瞬うろたえてから、すぐごと店の奥に引っ込んでいった。

「それで……とりあえず、すいません。この前のこと。だましたり、あなたのご両親のことを園長さんに話したりして」

「別にいいさ。……俺もさっき、市長からテツのこと聞いたよ。テツの家族のこと」

「そうですか……お恥ずかしい話です」

「そうは思わないけど。ねえ、テツ。テツはどう思ってるの？ 親のことを」

「それは、もちろん大切ですよ。私は孤児ですが、そんな私を本当の子供として扱ってくれましたし」

「そうじゃなくて、テツの生みの親のこと」

テツが一瞬、絶句した。

「市長さんのご両親が、テツにとってどんな人なのかはわかってる。ですが、それは生みの親ではない。血のつながった親は、どこかにいるはずでしょう？ そして、詳しい事情は知らないけれど、テツはその親に捨てられたんじゃないかな？」

” 本当の親 ” と形容しないことはアルミの優しさだったが、そんなことにテツが気がついていようには見えなかった。なにも言えない様子のテツに、アルミは続けて、

「まっとうな育てられ方をされた子供なら親子の関係は良好になる。遊園地の園長さんにはそう言った。これは間違っているとは思わない、つまり……まっとうな育てられ方をしていない子供が親にどんな感情を抱くのか、想像するに難くない」

「……………」

オレンジジュースと、銘柄のよく知らないホットコーヒーが運ばれてきた。

「俺は、お父さんのことは大好きだ。でも、母は、大嫌い。この二、三年は顔も見えていない。見たいと思わない」

ちゅうちゅうと、ストローでオレンジジュースを吸って、一息つく。

「テツはどう？ 顔も名前も覚えていない、血のつながり以外は赤の他人である親に対して、どんなことを思ってる？」

「私は……私にとっては……生みの親がいなければ私も存在しないんです。だから、もし私を捨てた人であっても、私はその両親を嫌いだとは」

「なんでテツはそんなに優しいのさ？」

テツの言葉を途中で遮った。驚くテツに、アルミは、

「そりゃ、親は大切だろうさ。それがどんなろくでなしであっても、愛するのは美徳だろうさ。親がいなければ自分が存在しないってのも事実。でも、だからといって親のために自分が辛い思いをしてもいいなんて考えるべきじゃない……俺の知っているテツは、もっと残酷な人だよ？ 自分の好きな人でも、簡単に殺せるような」

アルミの声は教諭すというよりは、わかってくれと嘆願するようなものだった。なぜ自分がこんなことをしている？ 母への憎しみのため？

「ねえテツ。テツの親がなんであれ、テツはもっと自分を大切にすべきだよ。……テツは、市長さんの家族のことを今一つ本物の家族だっと思ってないんだよね？ 市長さんも、同じ心配してた」

じっと、テツの目を見る。テツの心情にまでは深くは知らないが、少なくとも嘘をつけば見抜くことはできる。

「……はい」

嘘ではない。思った通り。

「それはきつと、テツが生みの親に縛られてるからなんじゃないか

な。だから……忘れろって言ってもそれは無理だろうけど、生みの親のことなんてどうでもいいって、そう考えることぐらいはした方がいいと思う。というかテツって……そういうこと、平気でできるようなイメージなんだけど?」

「それは……さすがに私だって、そんなに悪い人じゃないですよ?」

「えー、でも俺のことはためらいなく殺そうとしたよ?」

「あれは、仕事ですから」

「じゃあ、仕事だったら生みの親も殺せるの?」

「当然です」

「へえー、本当かなー?」

いたずらっぽくテツに笑いかける。テツも、笑い返してきた。さつきまでのギスギスした雰囲気は、もうない。

「……ねえテツ」

「はい、なんででしょう?」

「俺の言うことが全部正しいとは思わないけど、でも、親より自分が大事だったのは、間違いないと思う。じゃないと、自分がいる意味が無いじゃん」

言って、はたと考えた。自分の存在意義。一般的な話ではなく、アルミにとつての、存在意義。少し考え、ぞっとした。その恐怖を必死で押さえつける。

「そうですね。私も、もっと自分を大切にしてみます。……すいません。頼りないお姉さんで」

「別にいいさ」

「ありがとうございます。……ところで」

「なに?」

「さっきの言葉で、またアルミ様のことが好きになりました! 結婚してください!」

「やだ!」

いつも通りの会話。少し、心がやすらいだ。オレンジジュースを飲みほして席を立つ。

「テツ、今日はありがとう？」

「はい？ お礼を言うのは私の方ですが」

「ううん。また別のこと」

これで、考えが次の段階へ進んだんだ。礼を言わないといけないだろう。

第139話 あたたかな

自分の存在意義。テツとの会話の中で出てきたその言葉、概念はアルミにとって恐怖であり、できれば考えたくないことであつた。自分はなんのために生きているのか？　こんな問いに、すらすらと答えられる人が世の中にどれだけいるだろうか？　いたとしたらそれは、ものすごく自我の確立しているか、あるいは自意識が過剰なのかだ。アルミはどちらでもないが、しかし自分の存在意義を知っていた。

喫茶店でテツと別れ、次はどこへ行こうかとぶらぶら歩きながら考えた。何年か前のある日、アルミの心の中に抑えがたい欲求が現れた。それははつきりとしていたが、正体を掴むことはできなかった。その後、父親からアルミの”正体”について知らされるまでは。知ってからは、同時に欲求の意味をはつきり認識することができた。それは、欲求というよりは夢と形容した方がふさわしいものだった。

それは、自分以外の誰にも知られることなく実行しなければならなかった。

そしてそれには、父やその一族が関わっていた。尊敬する、大好きな父が。

「……………」

だめだ。こんなことを考えていても気が滅入るだけだ。たとえ考えなければならぬとしても、だ。

アルミを苛立たせるのは、自分の運命かそれとも夏の暑さか。アスファルトから立ち上る熱気と蟬の鳴き声がアルミの精神を責めてる。

蟬か。アルミは蟬が嫌いだ。短い時間しかない命を、ジージーと騒ぎ立て繁殖相手を探し出すことにだけ費やす。なんという浪費。生殖のためにしか存在しない命に、いかほどの価値があるのか。そのためだけに受け継がれ、生まれる命と遺伝子の意味は？

「……………親、か」

そういえば、ちゃんと話しあったことがなかった。あいつは、自分の親をどう思ってるんだろうか。

「すいません。お兄様は外出しております」

氷河に会おうとして冬木邸に行ったが、あいにく留守だったらしい。妹の雪野さんが告げる。

「いえ、突然おじゃましたのは俺ですから。今、どこに？」

「図書館です。宿題をするんだって」

「なるほど、わかりました。ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ。おもてなしもできずに……あ、そうだ。アルミ様、お昼ご飯、食べていきませんか？」

というか、食べてください是非是非。そんな感じの笑顔。

「アルミ様から料理を教えてもらってから、いろいろ勉強したんです。ですので、アルミ様に食べていただきたくなって」

だったら、断る理由なんてない。

「わかりました。じゃあ、ごちそうになります」

「はい。よろこんで」

雪野さんがなにを作ってくれるのかはわからないが、客人である

アルミが台所に立つなんて無粋なことではできず、ダイニングテーブルで食事が来るのを待つだけである。ちょっと退屈だ。

「ねえ、雪野さん」

気がついたら声をかけていた。姿は見えないが返事だけが返ってくる。

「はい、なんでしょうか」

「雪野さんが氷河のことを、どれだけ大切に思っているか、俺には想像することもできないでしょうけど、たぶん生半可な気持ちじゃないんでしょう。世界の誰よりもあなたが好き、なんて言葉は気恥かしいにもほどがあるでしょうけど」

「でも、そういうものです。だって、たったひとりの家族ですから」
たったひとりの。氷河ではない方の、もうひとりの兄のことを雪野さんはどう思っているのだろうか？ 気になったが、あんまり悲しいことを思い出させるのも気が引けた。

「そうですね。家族って、いいですね。大切な……絆です。でも」
でも、アルミの家庭事情は複雑で不可解だった。この冬木家よりも、おそろくずつと。

「俺は、自分の親がそこまで大事に思えないんです。ひきこもりの母親と、そして」

そして、そして。アルミの父親は……

「……………いえ、なんでもないです」

「……………そうですか」

「すいません。でも、こればかりは俺がひとりで背負わないといけない問題です」

「できましたよ」

お盆を持った雪野さんが姿を現した。お盆の上には、コップと井がふたつずつ。

「親子丼、です。どうぞ」

アルミの前に置かれた料理。米の上に、卵でとじられた鶏肉がたくさん。

「いただきます」

雪野さんが見守る中、それを口へ運ぶ。おいしい。別に驚くことじゃない。雪野さんは、少しばかり抜けているところがあるかもしれないけれど、どこまでも真面目で、優しい人なんだ。それが、料理にも表れている。愛情が調味料なんて、ただの妄言か。たとえそうであっても、この料理には雪野さんの人柄がちゃんと出ていた。

「ひとつ、私の尊敬する人の話をしてもいいですか？」

食べるのに夢中のアルミを見つめながら、雪野が問うてきた。

「はい？ あ、どうぞ」

一旦箸を止めて、話を聴くことに。雪野さんの尊敬する人？

「その人は、とても美しくて、頭が良くて、強かった。それで、礼儀正しいんです。言葉遣いが丁寧で」

「もしかして、”竜”さんですか？」

いつか雪野さんと話した時に、そんな言葉が出てきた。雪野さんの喋り方も、その人に影響されているとか。

「ええ。そうです。本当の名前は最後までわかりませんでしたが、自分のことを竜と呼ぶように言われました……………旦那様からつけられた、称号みたいなものらしいです」

「ということは、竜さんは女性ですか？」

「はい。彼女はやることなすこと、なんでも人よりずっとうまくできる、天才でした。誰よりも頭が良くて、誰よりも体力がある。そのせいで、周りから怖がられていたらしいんです。出来すぎた人は、逆に距離をとられてしまうって。小さい頃から、友達もほとんどいなかった彼女と唯一仲良くしてくれたのが、その人の旦那様になる方でした。その方は、竜の受けた苦しみや無理解や、非難も、全部受け入れてくれて、寄り添うって決意して。その時初めて、竜は自分の居場所を得ることができた」

「それは…………いい話ですね」

“竜”の天才度合いがどんなものかはわからないが、アルミにも心当たりがあることはああった。

「ええ……………私は、アルミ様の抱えていることがそんなことかはわかりません。他人に話してはいけないことかもしれませんが。だからこんなことを言うのはお節介かもしれませんが、でも、思い切ってだれかに打ち明けてみてはどうでしょうか。私ではなく、もっと信頼のおける人に」

「……………そうですね」

雪野さんは詳しい事情を知らない。いや、誰も知りはないのだ。だってそれは……………

雪野さんの言葉は、いつもアルミの胸につきささる。それ以上の返事をせず、ただ黙々と親子丼を食べること以外できなかった。

第140話 おしゃべりは禁止

冷房のよく効いた図書館というのはすばらしい。涼しくて、しかも静かだ。これで、暑さから逃れようとするホームレスがいなければ、もっと素晴らしい場所になるのだが。

本棚の間に漂う紙とインクの匂いを突っ切りながら、興味を引くようなタイトルの本を探す。自然科学系の本棚からおもしろさうなのを二三冊取り、周りを見回す。目的の人物はすぐに見つかった。机の上にノートとテキストを広げていかにも勉強してますな雰囲気男子高校生。ちよつとガラの悪そうな彼の風貌と今やっていることは、ちよつと合ってない。言ったら怒られそうだが。

鞆からペンとルーブリーフ取り出し、静かに机に置いて文字を書く。『よう』 紙を机の上で滑らせ、氷河の視界に入るようにした。図書館では、おしゃべりは禁止なのだ。不審そうにこちらに目を向け、そしてアルミの姿を認めた。アルミの渡した紙に返事を書く。『なにしにきた』

なんとつれない返事。氷河に向かい合う形で椅子に座り、返事を書く。

『少なくとも俺は、お前よりはずっと本を読むし図書館にもいつも通っている』

そんな、ゆるぎない事実をつきつける。氷河も返す言葉がないらしい。アルミは紙を取り、続けて書いた。

『氷河はなにしてるの？』

『見ての通り、宿題だ』

まあ、アルミもそう聞いていた。

『そっか』

これだけじゃ、なんかもの足りない。

『氷河が宿題なんて、めずらしい』

『うるさい』

『まあまあ でも、あんまり勉強してるイメージとかなかったから
でも、来年は受験生なんだっけ』

『いや、卒業したら就職する』

「……………そっか」

小声で、感嘆ともとれる言葉を漏らす。

親のいない氷河の家は、本来は高校に通うような経済的余裕
はないはずだ。高校をやめて働いたりするのが普通だろう。

しかしこの市の福祉政策の充実ぶりはすばらしく、収入のない中
学生と高校生の、在学に必要な諸費用をすべて出してくれて、さら
に生活保護も支給するという豪快な措置を冬木家に施した。これも、
あのロックが好きな軽い市長のおかげである。

しかし、さすがに大学進学まで面倒をみさせるわけにはいかない。
つまり、高校を卒業したら働いて、自立しないといけない。

『そうか。大変だな』

『そうでもない』

そんなわけあるか、そう返しそうになったが、もうひとつ気にな
ることがあったから、そっちについて話を向ける。

『なあ、来年になっても、今みたいなのは続けるつもり？』

返事に、少し間があった。

受験するにしても就活するにしても、来年の氷河の生活は今より
ずっと忙しくなるだろう。しかたないことだが、今までのような「
正義の味方ごっこ」をするのも難しくなるだろう。

この活動を言い始めたのは氷河だ。忘れがちだが、最終目標も氷
河に関わることだ。すなわち、氷河の兄を狂わせ両親を殺したなに

かの正体を知ること、それを打倒すること。テツや市長の介入で混乱したが、これがゆるぎない目的だ。

『やりたいとは思ってる。でも、時間がないならば』

時間が無いならば仕方がない。そう言いたいのだろうか。なるほど、しかたないことだってあるだろう。でも、

『しかたないで済むことじゃないだろう？ お前がどんな覚悟でやっているのか、忘れたわけじゃないだろう？』

『それはそうだが』

だが、覚悟だけですべてが解決するわけでもない。話を少し変える。

『両親については、どう思ってる？』

『どうって、そりゃ悲しい』

『死なないでほしかった？』

『もちろん』

失ったものの大切さは、失ってからじゃないとわからない。

自分の両親は？ 母と父を失ったとして、彼らの死を悲しむことはできるだろうか？

母親については、そうかもしれない。生きている間はうざったいだけだった人間が、死んでから寂しさを感じるとかどうとかは、よくある話だ。しかし父親は……………。

父親は、仮に死んだとしてもアルミに遺すものがある。それが、アルミを苦しめるのだが。

「おい、アルミ」

氷河の囁き声で我に帰った。

『どうした？　様子が変だぞ？』

『ごめん　ちょっと考え事』

『まあいいけどさ　それより、最近思うことがあって』

『なんだ？』

『俺の、兄貴のこと。なんか最近、あんまりあいつのこと憎く思えなくて』

「……………」

目の前の言葉の意味が、いまいちとれなかった。

『詳しく』

『なんだかんだ言って、やっぱり兄貴は兄だし。肉親のことって、あんまり恨めなくて。それが人間ってものなんじゃないかなと、最近思ってるんだ』

肉親を憎むことなんてできない。それが人間だ。じゃあ、自分は？　実の親を嫌い、恨む自分は？　人間じゃない？　じゃあ、自分は、浅倉慎也、アルミはなんなんだ？

「おい、本当に大丈夫か？　顔色悪いぞ？」

「え？」

驚いて返事をして、周りから非難の目を向けられる。それに頭を下げ、紙に文字を書く。

『ごめん　でも、大丈夫』

『そうは見えないけどな。なあ、なんか悩みでもあるのか？』

あるさ。でも、言うわけにはいかない。雪野さんは誰かに相談すればいいと言っていたが、ことはそう単純でもないし、氷河が相談相手に適しているとは思えない。

『なあ、お前はいつも冷静で、たまに思うんだ。感情なんてないん

じゃないかって。でも、そんなはずないだろう』

『当然だ』

『だったら、いつもはどうしてそんなに無表情なんだ？ なにを

考えているのか、全く外に出さないのはなんでなんだ？』

なぜか？ 誰にも言ってはいけない。そういうものなんだ。

「実は……………」

口をついて出てきそうになった言葉は、しかしすんのところで誰にも聞こえないような小声になった。

言ってもいいんだ。咎める者は誰もいない。アルミがどう思うかだけが、問題なんだ。そういう考えも浮かぶが、しかし必死で打ち消した。

なにを言うべきかわからず、言いかけた言葉を飲み込んで、紙に書く。

「ごめん。いろいろあるけど、今は話せない。いつかは、教える」
氷河はアルミを心配してくれてるんだ。なのに隠しごとをするだ
って？ ひどい人間だ。良心の呵責を感じつつ、笑顔でそれを見せ
る。

氷河もなんとなく辛い顔をしていた。しかし、彼にできることは
ない。

『そうか。無理するなよ』

これが精いっぱいなの、優しさなのだろう。悩める少年にかける言
葉としては十分だ。しかし、アルミには無意味だ。

結局読まなかった本を抱え、アルミは立ち上がり机から離れた。
氷河は引き留めようとはしなかった。

第141話 血のつながり

自分のことがよくわからない。わかっていることも、誰かに話すことができない。そんなアルミの心中を、冬木の兄妹は容赦なくえぐってきた。あのふたりは優しい。それがアルミにとっての苦痛となった。

今すぐ何もかも投げ出し、すべてを吐きだしたい衝動に駆られる時もある。しかし、それは許されない。

「……………よし」

業火に、会いに行こう。一番信頼できる、友の場所に。彼にさえも明かせないことはある。でも、会えばずいぶん気が楽になるはずだ。

「お兄ちゃんならいない。帰れバカ」

「嘘つけ」

行ったのに、玄関に来たのは聖火で、しかもいつも通りの邪険な対応。家に入れるまいとアルミの前に立ちほだかる。本当に、この子には嫌われてばかりだ。業火は出かけてる？ そんなはずはない。

「嘘じゃない。お兄ちゃんはお出かけてる」

と言いつつ、アルミと目を合わせようとしないう聖火。嘘を見抜かれまいとするその仕草が、嘘をついているという証明だ。まあ、そんなことされなくてもわかるんだけど。

「じゃあ、なんで業火の靴があるんだ？」

アルミの視線の先には、見慣れた運動靴。
「いるな」

「ちょ、ちょっと待って、なんでお兄ちゃんの靴を覚えてるのよ？」
聖火の疑問はもつともだ。友達の持ち物ひとつひとつを把握している奴なんてそんなにいない。しかし、アルミはそのひとりだった。「業火のことが好きだから、あいつの持ち物はすべて形とか覚えている」

「へんたー！ーい！」

がしがしと、アルミの足を蹴る聖火。まあ確かに気持ち悪い話だが、アルミはそれをひよいひよいよける。別に当たっても痛くないし、それに、

「スカートでキックしたら、見えるぞ。その……中が」

「~~~~~！」

声にならない声をあげながら、今度は両手でぽかぽかと殴ってきた。それを器用にさばく。聖火は次第に疲れてきて、そして止まった。

「ちっ……なんでそんなに強いよ。一発も当てられないなんて」

「まあ、慣れてるから」

「慣れてるって……あんた達が変な事してるからお兄ちゃんが……」

お兄ちゃんが………ねえ、アルミ」

「なに？」

「……………ごめんなさい……………ありがとう」

「え？」

嫌味や罵り言葉がくるのならわかるが、謝罪と感謝の言葉が来るとは思っていなかったアルミは驚いた。

「どういうこと？」

「あれ、この前の、わたしが誘拐されたときのこと。あの後お兄ちゃんに、アルミにお礼言うように言われたんだけどまだ言っていなかった。だから」

なるほど。アルミも忘れていたことなのに、意外に律義だ。ここあたりが、業火と似ているのかもしれない。

「別にいいさ。お前が、俺達のしていることがなんなのか気になる

のもわかるし。守ってやれなかったことも悪いと思ってる」

「うっさい。きもい」

せっかくこっちも譲歩して、それなりの態度に出たのに、なんて言い方だ。

「アルミは、もっと生意気で偉そうなの。悪かったとか言わない」
ずいぶんな言われようだ。心当たりがないではないが。

「……なあ、聖火。お前の気持ちはわかる。業火と俺が仲がいいせいで、いろいろ変な事に巻き込まれたり。いろいろ危険な目にあったりもした。それで、業火が取られたって気になるのもわかる」

「そんなんじゃない」

否定の言葉。黙って続きを促す。

「お兄ちゃんから聞いた。あの高校生。氷河さんのこと。親の仇討ち、らしいね」

「うん。そうだ」

「それで、ちょっといいかなって思ったんだ。かっこいいなって」

「親の、仇討ちが？」

聖火は、自分の両親についてどう思っているのだろうか？ 氣に

なったが、それを訊く前に聖火はまた話し始めた。

「だから、お兄ちゃんが仇討ちに協力してるのは、別にいいんだ。

それで、なにかあったら絶対許さないけど」

「たったひとりの家族、だから？」

それは、特に意味のない相槌の言葉。しかし、

「……ッ！」

聖火がアルミにとびかかった。受け止めようとしたが、全体重を乗せられた体当たりに耐えきれず、ふたりは折り重なるように倒れ込んだ。アルミ馬乗りになった聖火は拳を振り下ろしたが、アルミはそれを両手とも掴んで止めた。

激昂した聖火は、自分の行動に驚きながらも、自分の思うことを口に出す。

「ひとりの、じゃない……お兄ちゃんだけじゃない」

「……………」

それは、怒っているようで、でも今にも泣き出しそうな声で。

「お父さんも……家族だから。あなたにはわからないでしょうけれど」

お父さん。血のつながらない父親。事故で死んだ本当の父親の、代わり。母の交際相手。

愛する女にふたりの子供を残して消えられた、哀れな男。

聖火は、自分の親をどう思っているか？　これが答えだ。血のつながらない父親を、本当の家族と認めている。

なんていい話だろう。これが、これだけの話であれば。

「聖火……お前は、強いな」

「え？」

「なあ、業火とお父さん、どっちが大切だ？」

「……バカじゃないの？　そんなの、比べられるわけじゃないじゃない」

「そうか。ごめん」

聖火の手を放すと、聖火もアルミの上からどいた。立ちあがって、頭を下げる。

「怒らせちゃったな。失礼な事を言ったことは、謝る」

「……………わたしには、お兄ちゃんもお父さんもどっちも大切。どっちも、わたしの家族だから」

そうとも。これだから、聖火は強い。これが、業火にはいまだにできないこと。

「わかった」

「……………だから、お兄ちゃんにもしものことがあったら、わたしはあなを許さない」

父親と同じように。もう家族がいなくなるのはいやだ。

「うん。俺も、お前に負けないぐらい業火を大切にしてるんだ。なにかなんか、起こさせい。全力で守るから」

「……わたしの方が大切にしてる」

こればかりは、互いに譲ることはできないようだ。しばらく睨み合いだったが、聖火は表情を緩め、家に入れるように進路を譲った。「嘘言ってごめん。お兄ちゃんは一階の部屋。部屋から出るなって言っておいたから」

「なるほどな。じゃあ、お邪魔します」

靴を脱いで家にあがる。聖火はその動きを黙って眺めるだけ。

悪い子ではない。嫌われているのはただ、めぐり合わせが悪かった。それだけなんだろう。みんな、業火のことが好きなんだ。優しくて頼りがいのある、親友であり兄である彼。

階段を上がり、扉を開けた。

第142話 君にも、言えない

「よ、なんか騒いでたみたいやな」

椅子に座って机に向かっていたらしい業火が、椅子をくるりと回転させこちらを見た。

「うん。まあ、いろいろあって。聖火に出てくるなって言われてたんだろ？」

言われたとおりにして、大きな物音がしても出てこなかった業火。知っているんだ。アルミと聖火が、見た目ほど仲が悪いわけじゃないって。

「そうや。それで、なにがあった？ ケンカでもしたんか？」

「うん。まあそんなとこ。実は……」

と、さっきあったことをなにもかも話した。”父親”のこと。聖火がその人間をどう思っているか。

「……そうやな。聖火は、強い。圭介のこと、俺はまだ父親って思えない」

自分の父親を名前で呼ぶ。血のつながらない親に対する扱いがどんなものかを、アルミは知らない。聖火はお父さんって呼んでいた。業火しか家族がいなかったら、怒った。圭介さんを本当の父親と言う聖火は強い。それは素直にそう思える。

石動圭介。旧姓は知らないが、再婚の際にふたりの子供のことを考えて業火の母親の姓を受け取ったらしい。その母親がいなくなっても子を養い続ける男の心理を、アルミには想像できない。聖火は気楽そうに状況を受け入れているが、業火はそれができていない。

業火の気持ちはわかる。だって……

「聖火は知らないことだってある。圭介さんが、お前の母の」

「言うな。わかってるから」

「……うん」

苦しそうな表情でアルミの言葉を遮った。その気持ちはよくわかる。

傍から見たらいい話。「血がつながってなくても、家族だよ」美しい文句じゃないか。でも、真実はそう単純じゃない。物事がある一面からだけ見て判断を下すのは、あまりにも愚かだ。

知らない方が幸せだってことがあるのが、状況をややこしくしているのだが。なるほど、無知とは贅沢だ。

部屋の入り口に突っ立ってるのもなんなので、中にはいらせてもらう。業火のベッドに腰掛ける。

「なあ、業火。お前の親のこと、俺は謝らないといけないのかもしれない。俺があんなこと言わなければ、業火は今も幸せな」

「そんなことはない。あれは不幸な……不幸な出来事で、アルミには関係のないことや。アルミが言っても言わなくても、事実是不変変わらない」

「……そうだな。ただ、不幸なこと」

それはアルミを氣遣っているだけなのか。そこに業火の考えはどれだけあるのか。

友達に氣を遣う余裕があるなら、圭介さんのことだってさっさと認められそうなものだけど。聖火は強いけど、業火だって強いのはよくわかってる。

だったら、業火を苦しめているのはなんだ？

「周りから見たら、俺達って仲のいい、ただの親友に見えるんだろうな」

「……その通りじゃないん？」

不思議そうに訊き返してきた業火。話しの意図を本当に掴めていないようだ。

「そうかもしれない。でも、それだけじゃない。俺達の間には、他の人には言えないような秘密がいくつも」

優しい業火に、目を合わせる事ができず、うつむきながら話す。業火はこう言うが、業火に対する負い目は、そう軽くない。

「だから、親友なんや」

「え？」

しかし、業火はどこまでもアルミの友でいてくれて。

「他の誰にも言えないようなことでも、そいつだけには言える。なんか悪いことがあっても、許してやれる。そういうやつのことを親友って言うんや」

顔を上げると、業火は笑っていた。業火だって辛いことがあるはずだ。それを知っているのは本人とアルミだけ。

他の誰にも言えないことでも、業火になら話せる。

「あのね、業火。俺は、まだお前に話してないことがあるんだ。その……俺の血のこと以外に」

「うん」

「それは、他人には話しちゃいけないことなんだ。そういうことに、ずっと前から決まってる。業火にも言っちゃいけない」

「そうか……俺はお前の血についてはよく知らない。だから言われたことを信じるしかないんやけど」

「俺は嘘はついてない。……でも、いつかは全部話す。なにかも。いつになるかはわからないけど、絶対に」

「そっか。ありがとう」

そして、業火以外にも。

「でさ、俺とお前の秘密、いつかはみんなに話さないか？ 氷河とか叶達に。すぐにじゃなくてもいいけど、いいかなって思った時に」

「……………」
沈黙の時間。そう簡単に同意できることではないのはアルミが一番知っている。

「もちろん、嫌だったらそれでいい。話したくないことだし、誰に

も明かさないっていうのは別にかまわない。こればかりは誰かに言われてするものじゃない…………でも、友達はひとりしかいちゃいけないって法はない。それにみんな悪い人じゃない」

俺は何を必死になってるんだ？　まるで友達に隠し事をするのが悪いことみたいに。

そうだよ。なんでも話せるから友達なんじゃないか。なのに君は？
「うん、わかってる。そうやな。今すぐにつてのは急すぎるけど、いつかはな」

でも、業火はいい人で、しかも親友だった。

「お前の言う通りやと思う。あいつらも知ってた方がいいことやし。それに、いつまでも隠しておくのは辛い」

「そう…………だな」

いつまでも隠しておくのは辛い。俺は、自分のところをいつまで隠していかなければいけないのだろうか？　誰かに明かせる日は、永遠に来ないのかもしれない。

業火になら、親友ならば明かせる日は来るかもしれない。待つことだってできる。ただ…………ただ、真実を知った時、業火はどんな顔をするだろうか。それだけが、心配だ。

親友って言葉を、都合のいい逃げ道に利用してはいないか？

目の前で微笑む少年を、裏切るようなことはしたくない。それはつまり、裏切ろうと思えば裏切られるということだ。たとえ親友であつたとしても。

業火の家を辞して、しばらくあてもなく歩き続けた。行先はある、しかし行く気になれなかった。

今日一日多くの人に会って、話した。そしてアルミは、傷ついた。本心を悟られないように話したのはいいが、そのおかげで彼らの言

葉がナイフのように胸に突き刺さった。

もうひとり、会いに行くべきだ。しかしそんなことしたら、アルミの精神に確実に止めが刺さるだろう。

かまわない。仕方がない。やってしまおう。それで、なにかが変わるなら。アルミは覚悟を決め、来た道を引き返した。この時間なら、そろそろ帰っているはずだ。

第143話 仲間

もう帰ってる時間かと思っただ、相手の家の前でばったり会ってしまった。まあ、待たされるよりはいいけれど。

「ねえ、どうして、あなたがここにいるのかしら？」

驚きというよりは不審な目でこちらを見てくる叶。とはいえ、見知った顔なので家には入れてくれた。比較的新しい、高めのアパートの一室が、怪盗ルピナスの住居だ。

「ねえ、なんであたしの住所知ってるの？」

「んー、実は俺の友達に叶とは別のスーパーハッカーがいて、ある程度の情報さえあればその人の住所なんて簡単に抜いてもらえるんだ」

「！」

目を見開いて部屋に置いてあるなにやら大きなパソコンを振り返る叶。ハッキングに使ってる、たぶんすごいコンピュータなんだろう。まさかあのセキュリティが突破された云々とか考えてるに違いない。

「冗談だけどな。俺達は、この市の長の支援を受けてるんだ。この市内に住んでる人の住所なんて、簡単にわかる」

「ああ……そう。よかった」

冷静に考えたらこれはかなり恐ろしい話であるが、叶にとっては自分のパソコンがハッキングされていないことの方が重要らしい。まあ、叶も同じ立場だからどうでもいいということかもしれないが。

「それで、なんの用かしら？」

「えっと、別に用があるわけじゃないんだけどね」

今日のことをすべて話した。もちろんアルミの気持ちは隠して、

だが。

「でまあ、最後が叶、ということ」

「なるほどね」

テーブルに向かい合って座る。叶が淹れてくれたインスタントコーヒーがふたつ並ぶ。

アルミが会話するときいつもそうするように、叶はアルミの目をじっとみつめた。アルミも見かえす。

「市長さんにまで話しに行ったなんてね……あの人、私達のボスにするにはちょっと信頼できないって、前からずっと思ってる」

「いい人だぞ？」

「知ってる。あいつが市長になってから、この自治体の福祉政策はすごく改善された。前がひどすぎたってのはあるけれど………何度か、そのひどさが報道されてた。医療費が高いからお年寄りが医者にかかれなくて風邪で死んだり、父親を亡くした核家族が生活保護を受け取れず、幼い子どもを養うために母親が風俗で働いたり。こんなのもあった。事故で両親が死んだ子供が、行政から放置されてそのまま行方不明。児童養護施設も、お粗末なものばかりだったからね。職員に子供が虐待されることもなくなっただけ」

「やめようその話。気が滅入る」

「気が滅入る、だけ？」

じいっと、目を見つめてくる叶。逸らしたくなるのを必死でこらえていると、叶はさらに続けて、

「あなたは、人の嘘を見抜くことができる。それはあなたの血筋によるもの。でも、人の目を見ればその心がなんとなくわかるなんて、普通の人でも不可能な事じゃない。簡単でもないけれど。やろうと思っただけのことじゃないけれど」

「……………」

「あたしが、市長を褒めるのがそんなに気に入らない？」

「……………」

「市長が、俺の仲間にならないかといって言ってきた時も、あなたは

少しためらった。それはどうして？」

「…………俺の目を見たら、その答えがわかる？」

「ううん。全然」

そりゃそうだ。簡単にできることじゃない。

が、確かにアルミが動揺したことは読みとった。油断はできない。

「でもね、今日一日みんなと話していて気付いたでしょう？ みんな

あなたに嘘をつかない。隠しごとをしない。あなただけが嘘をついて、真実を隠してる」

「うん。その通り」

「そして、あなたは自分が思っているほど冷酷な人じゃない。認めたくないと思うけれど、優しい人。大切な人をだますなんてしたくないはず」

「でも、俺には隠さないといけないことがある。誰かに明かしちゃいけない」

そういう秘密があることを、業火以外の人間に初めて言った。言ってしまった。

叶は、その言葉を予想していたようだった。

「そういうことが、あなたを悩ませるのね。あるいは、傷つける」
黙って頷き、続きを促す。

「あなたがなにを考えているか、誰も知らない。あなただけが知っている。……………ねえ、あなたは、なんなの？」

「…………知りたい？」

「ぜひとも」

目をつぶり、しばらく考える。その間にも叶はたたみかけるように言葉を発する。

「一度すべてを吐きだせば、楽になるんじゃない？」

その通りだ。何度そうしようと思ったことか。でも、そのたびにためらいを覚え、しなかった。

「ごめん。今は言えない。いつか、時が来たら絶対に言うから」

それは、さっき業火と交わした約束。今ではないいつか、その時

がきたら必ず言おう。

「そう……わかった。じゃあ待つ。でもね」

叶が、アルミを凝視するのをやめた。心の読み合いの終わりを宣言するように。

「あなたは、なんでもひとりで背負おうとしている。たぶん、それはできないことじゃない。あなたは強いから。でも、もっとお姉さんを頼ることをしなさい」

「？」

「年上を、もっと頼りなさい。あたしでもテツでもいい。氷河はちよつと頼りないけど。とにかく、困ったらおねーさんに頼ることを覚えなさい。そのための仲間でしょう？」

「……叶」

「なに？」

「以外に優しいんだって。もつときつい性格だと思ってた」

「うっさい。殴るぞ」

「やめてくれ。でも、ありがとう」

「変なところでデレるな」

なるほど。仲間か。いい言葉だ。

叶と話したら、自分の心の闇をすべてさらけ出されるぐらいは思っていた。しかし真実はそうではなく、叶は以外に優しく、アルミのことを理解してくれた。私達は仲間だと。

夜、誰もいない道を歩く。今日一日会った、仲間。アルミに対してまっすぐに向き合ってくれる、大切な友だ。それにアルミは隠していることがある。それを、悟られている。でも友は、アルミを仲

間と呼んでくれるのだ。

だったら、その想いには答えないといけない。いつか、自分のすべてをさらけ出して。そして、そして……………

「そして、俺はなにをすべきだ？」

また、壁につき当たる。自分の血にまつわる因果に、大切な仲間を巻き込んでいいのか？ そのための仲間というが、しかし……。

わからないものはわからない。また考えていくしかない。そう結論付けた。

そしてアルミの考えは、別の方向に行く。南国への旅の日が迫っていた。アルミが毎年行くことを望む、あの地へ。

自分の血の因果が関わる、あの地へと。

幕間 夢を砕く

「僕はね、この国が戦争で負けるまでそう長くないと思うんだ」
目の前で微笑む親友は、平然とした口調でとんでもないことを言
つてのけた。慌てて周りを見回すが、誰もこの会話に耳を傾けてい
る者はいない。

「おい林太郎。滅多な事は言わない方がいい」

「そうだね。ごめんごめん」

浅倉林太郎は、悪いとはまったく思ってたさそうな様子で謝った。
まったく。こいつはいつもそうだ。

大学からの帰り道、話があると誘われて河原の土手に腰かけた。
そして開口一番こんなことを言われたのだから驚いた。

いや、こいつはいつもそうだ。ぶっ飛んだことを言ってこつちを
困らせる。でも、こいつの中では無茶な事なんてひとつも言ってい
ない。

言うこと言うことが、いちいち正しいんだ。きつと、これも。

1945年6月始め。ほぼ全世界を相手にした戦争は、国力を疲
弊させながらもまだ続いていた。主な枢軸国であるドイツやイタリ
アはすでに連合国に降伏していて、この国は単独での戦いを強いら
れている。しかし国民全員が勝利を疑わず、団結しているというの
に。この男はなにを言いだす？

「君だって、本当はわかっているんだろ？ この国は小さい。物量
的に、連合国に勝てるはずがない。……そもそも政府が、一億玉砕
だとか火の玉とか、そんな標語を掲げてる時点で勝つことなんて諦

めてると予想がつくだろう？ 本土決戦でこの国が総力をあげて抵抗するにしても、みんなが玉砕してしまったら意味がない。この国はどこか他の国の領地になるだけだ。そんなのは嫌だし、そもそも死ぬのは御免こうむる」

「お前でも、死ぬのは嫌いか」

「当然さ。無意味な死は嫌だね……………だからこの国は、さっさと負けを認めて降伏すべきだ。そうしないと、本当にこの国はなくなってしまう」

「……降伏したら、どうなるんだ？」

「この国は民主主義に目覚める。そして今までの行いを反省する。人々は平和のすばらしさを謳歌し、戦争を嫌悪するようになる。すばらしい世界だと、君も思うだろう？ 僕は思わないけど」

勝手に決め付けられたが、その通りだ。こいつは違うみたいだが。「今のこの国の人間は、この国のやっていることが正しいと思っている。心の底からね。大日本帝国は正義で、強大な悪に虐げられている被害者で、それに立ち向かう猛者だって。でもこの後戦争に負けた後はどうなるだろう？ たぶん、過去の戦争を否定し国のあり方を否定し、そのうちこの国自体を卑下するようになるだろう。欧米諸国をはじめとした外国の文化を手放しに絶賛するようになる。自国の文化をないがしろにするようになる。今の戦争を支持していた人々は手のひらを返すように戦争を嫌うだろう。今の自分の心理を捏造して、戦時中からこの戦争はおかしいと思ってたとか言い始める。考えを変えるのは悪いことじゃないさ。でもこれは、美しい」

話相手が口をはさまないのを確認して、林太郎は続ける。

「僕にはね、夢があるんだ。この国が戦争で負けても、その夢は実現しない。たぶん、もう実現は不可能だろう」

夢。その内容は親友にも教えてくれなかった。しかし林太郎の事情なら多少は知っている。

「それは、この国が負けることが確定しているからか？ それとも、

お前の……」

「後者だね。いや、両方ではあるが。万が一勝つことがあれば、僕もうれしいんだけど。まあ無理だろう………そもそも、僕にとっては大きすぎる夢だったんだ。実現する方法はあるんだろうが、僕には見つけられなかった。残念だ」

と、いつも通りの表情と口調で言った林太郎。本当に残念に思っているのかも怪しいものだ。

「僕は夢を叶えられなかった。でもいつか僕の血を引く者が同じ夢を抱き、実現を図ることになるだろう。困ったことだが、僕の家系の血はそういうものらしいんだ。困ったものだね」

こいつの血は、本人の言うことを信じるならば呪われているらしい。嫌味なまでに論理的なことしか言わない林太郎が呪いなんて言葉を使うこと自体がおかしいことこの上ないのだが。

「そして僕の血を引くその男は、きっと方法を見つかるだろう。いったいどうするのかは気になるところだが、それを知ることとはかなわない。いいさ。最初からそういうものなのだから。しかし……」

少し言い淀み、だがその迷いも一瞬で断ち切れて、

「その夢が実現されるのが、いいことかどうか、僕にはわからないんだ。おかしいことだけど」

「それは、なぜだ？」

「払われる代償が大きすぎる。夢の実現のために多くの赤の他人を殺す、なんてことをやってのける人間がいたとすれば、君は狂気の沙汰だと非難するだろう？」

「お前の夢はそういうものなのか？」

「例えばの話だ。………違うが、ある意味で正しい。だから、僕はためらっている。そんな気持ちも知らず、”彼”は夢を追うのだろうか。そこで、君に頼みがある」

これが本題か。頼みがあるなら、こんな長い前置きなどいらぬ。「僕が思うに、君はいつか大成する。大きな会社の社長になるだろう」

「意味がわからん」

「そしてよくできたお嫁さんを手に入れ、優秀な子供ができる」

「なんなんだ？ ほめてもなにもしないぞ？」

「僕が予想する未来を言ったただだよ。それでね、これを君の家の家宝にしてほしい」

折りたたまれた懷から紙片を取り出し、渡された。

「その中に、宝のありかが書かれてある……これから隠しにいくんだけど」

「なんでそんな回りくどいことをする？ 隠さなくても、直接渡せばいいじゃないか」

「確かにそうだ。でも、まだできていないからね。渡せない」

「じゃあ、できてから渡せばいい」

「そうもいかないんだ。僕はこれから、戦場に行つて戦うんだから。その場で宝も完成させて、人目につかないところに隠す」

「ちょっと待て」

今の発言に、とうてい聞き逃せない言葉があった。

「なんでお前、戦争に行く？ 俺達理系学生は徴兵を免除されていくはずだ」

「うん。その通りだ。徴兵なんてされていない。僕はただ、戦場に行つて、戦つて、死ぬだけだ。勝手にさせてもらう」

「なんでそんなことをする？」

「戦場に行けば、連合国の士官をひとりぐらい殺せるかもしれない。それで敵は総崩れになるかもしれない。この国の兵士がそれを退けたら活気づくだろう？ 勢いがつくだろう？ それで戦線を押し戻せるかもしれない。戦争に勝つかもしれない……いや、違う。そんなことありえない。僕はただ、戦いたいんだ。武器を持って、命がけの戦闘とやらを試してみたいんだ。ただの僕のわがままさ」

「……………」

「それで、その戦場で宝を完成させる。そして隠す」

「その宝とは？」

「……………武器だ。いずれ現れる、僕の血を継いだ者を倒すための、強力な武器。君にはそれを、ずっと持っていてほしい。そして、僕の血を受け継いだ者があられたら、それを使って彼を倒してほしい」

「なるほど。わかった」

「ありがとう。話はこれで終わりだ。さ、帰ろうじゃないか」

「待ってくれ。あとひとつだけ、訊いていいか？」

「どうぞ」

「お前がそうまでして叶えたくて、そうまでして阻止したい夢ってのはいったいなんなんだ？」

「……………理想卿？」

「え？」

「人類みんなが、住んでいる国や皮膚の色で憎み合わない世界。それって、すばらしいと思わないかい？」

「……………そうだな」

「ねえ、君は僕の親友だよね？」

「そうだ」

「親友に真実を伝えない僕、そんな親友を許す君。……………君はすばらしい。君が友で本当によかった……………ありがとう、兜崎」

兜崎雄一郎は、そんな友の葛藤になにも言うことができない。

いいさ。だったら全部受け止めてやる。それが親友ってもんだろう？

第144話 黒い屏風

雲ひとつない空の中に浮かぶ太陽は、今日も飽きることなく下界を照らしている。日差しが強いと思われるのは、季節によるものか、あるいはこの場所によるものか。反面、海からの潮風は心地よい。

アルミは胸に花束を抱え、眼前に広がる光景を見渡した。

そこにあるのは、石で作られた大量の黒い板。それらは皆、直立し太陽の光を浴びて鈍く輝いている。

いくつかの板がジグザグに連なっている様は漆黒の屏風にも見える気はするが、屏風にするには背が低く、いかんせんデザインが悪すぎる。

無論、これは屏風などではない。

死者を慰める石碑である。

八月半ばの某日。沖縄県の平和記念公園。夏休みの真っ只中であり、また終戦記念日が近いためか、ここに訪れる人は多い。

人が集まれば必ず生まれるざわつき。それはこの場所においても例外でなく、そこかしこから話し声という名の雑音が聞こえてくる。騒がしい。ここは、死者の眠る場所であるというのに。

一九四五年初頭。太平洋戦争において、大日本帝国の劣勢は既に覆しようもなく、連合国の本土上陸は時間の問題とされていた。にもかかわらず、この国の軍部、首脳陣はとるべき行動に降伏という選択肢を加えず、臣民に対して一億人全員が玉碎するまで抵抗することを求めた。

その年の三月二六日に沖縄本土の隣に位置する小島に連合軍が上陸、占領した。翌月の一日には本島への上陸を許した。これが、六月二十三日に沖縄戦の司令官の自殺という形で指揮系統が壊滅。組織的な反抗が収束するまでの間に軍、民間人問わず多大な死傷者を出した沖縄戦の始まりである。

この石碑には、その戦争によって命を落とした人間の名前が、国籍や軍人と一般人の違いを問わずすべて彫られてある。

これが平和の礎。戦の火と死者と、今の平和を思い、偲ぶ場所である。

「……………」

そんな石碑の群れの間をアルミはゆっくり歩く。石碑や、そこに彫られた文字自体には目もくれない。やがて石の群を通り過ぎ、その先にある円錐型のモニュメントに少し目を向けながら速度を落とさず、もう少し進んでから歩みを止めた。

海。見下ろすアルミの前で、波が岩をさらっている。

ここは沖縄戦最大の激戦地であった。そして収束の地でもある。この地で散った数多の命に想いを馳せる。そして、あるひとりの男にも。

浅倉林太郎。アルミの父親の話信じるとなれば、彼はこの地で戦い、戦死したらしい。しかし、この屏風にその名は刻まれていない。そもそも兵役を免除されていた立場にあったらしい。死の直前まで大学で学んでいたらしいから、志願兵でもない。

ただ戦場に行った。それだけ。なぜ？

「戦いたかった。それだけなんだろう？ そうすることしか、あなたは自分の存在意義を示せなかった。たぶん、俺も」

海に花束を投げ入れる。空中で分解しながら水面に落ち、波にのまれて消えていった。

これで終わり。毎年やってる追悼の儀。少しの間目を閉じてから、もう用はないとばかりに目を開け海に背を向ける、と、

「なあ、今の、誰を弔ったんだ？」

目に前に人が立っていた。今花を投げたのを見てたのか。

歳はアルミとほとんど変わらないだろう。人懐っこそうな笑みを浮かべるその少年は、少し答えにくい質問をしてきた。

「別に。誰でもいいじゃん」

愛想が悪いって言われるのには慣れてる。初対面の人にこんなこんなことを教えるのも変だし、仲良くしなきゃいけないって法もない。無視して少年の横を抜けて去ろうとした。しかし、

「おい、ちょっと待ってくれよ」

少年は迫いすがってきた。無視だ無視。そう決め込んで歩みをやめない。

「なあ、もしかして浅倉林太郎のことを弔ってたとか？」

「……………」

驚いた顔を見せまいと努力してから、彼はアルミの後ろにいるから表情なんて見えないことに気付いた。そして、思わず歩みを止めてしまった。

見ず知らずの少年が、なんでこの名を知っている？

「いや、そんな名前は知らない」

「そうか。いや、ごめん。ちょっとこの人について知りたいものだから」

「すまん。力になってやれなくて。……その、林太郎って人はどんな人なんだ？」

平静を装い、ふと気になった風に訊く。少年はその質問に大した疑いをもっていなくて、

「実は俺もよく知らないんだけどな。戦争で、ここ沖縄で死んだ兵士らしい。でも、あそこに名前は書かれていない」

そう言つて黒い屏風を指さす。

それはアルミもよく知っている。この地で起こった戦いの死者の名前がすべて彫られているというが、林太郎の名前はない。だからこそ、石碑に花を立て懸けるのではなく、海に放り投げて追悼をするのだ。

「まあ、書きもらしはあるだろうさ。でも、だったら申請すればいいじゃないか。今でも戦死者の名前を受け付けてるらしいぞ」

これはアルミの誘い。答えによってはこの少年のことがなにかわかるかもしれない。

「それが、俺には詳しいことが知らされていないんだ。そういう人がいて、俺の兄貴達が探してる」

知らされてない。兄貴達。判断材料は少ないが、察するに彼はなにか大きな集団の末端であり、上の指示に従って動いているということだろうか。

「兄貴達ってのは？」

「えっと、それは……………」

「おーい、恭也」

どこからか、別の声。恭也と呼ばれた少年は声のした方向を向いた。

目つきの鋭くがっしりとした体格の男。三十代前半ぐらいだろうか？ もちろん面識はないはずだが、その男に妙に睨まれた気がした。そういえば、この人どこかで見たような…………。

なんにせよ、あまり関わりたくない世界の人か。恭也の話からもそれくらいは読みとれた。

男に駆け寄る恭也。アルミも軽く礼をしてから無言で場を離れる。追いかけられたり呼び止められたりはされなかった。来た道に戻り、石の屏風の間を抜ける。

ここは、死者の霊を慰める場所。この屏風に彫られた名のひとつ

ひとつが、その人がこの地で生き、死んだことの証明だ。

じゃあ、彼は？ おそらく理念も目的もないままにこの地で戦っただけの男。本当にそれだけだろうか？ なぜ今になって、知らない人間に探りを入れられなければならない？

立ち止まって、男と少年のいた場所を振り返った。もうそこにはいなかった。何者なのか、まったくわからない。

できるだけ関わらない方がいいだろうか。再び、姉の待っている方へ歩を進めた。

第145話 近くて遠い

浅倉家の年中行事。それがこの旅行だ。アルミの希望で行っている。インドア派であまり部屋から出たがらないアルミが、これだけは欠かさず行きたがる。浅倉良太郎という人物の供養が目的。その昔、太平洋戦争の末期この地で戦死した男。ただし公的な記録にこの男に関するものはなにも残っていない。

ここで死んで、死体の行方はわからない。さらに言うと、埋葬はもちろんされず墓もない。アルミはこの地こそが林太郎さんの墓場だと考えてるのだろうか。

アルミが林太郎さんに固執する理由。それは、アルミと林太郎さんが似ているから。血の問題。そして思想、宿命。詳しいことは、教えてもらえないのだが。

「……ごめんね、お姉ちゃん」

アルミは公園のベンチで、唯の膝を枕にして横になっている。普段はバスの中で本を読んでも車酔いなんてしないのに、今日の運転手は絶望的に運転が下手だった。なにもしてない唯でさえもちょっと気持ち悪くなったぐらいだ。バスから降りたアルミは吐きこそしないだろうがかなり辛そうで、とりあえずどこかで休もうというこ
とになった。

そういうわけでこの状況である。膝枕自体はいつもしてることはあるが、屋外でするのは初めてだ。アルミは気にしてないようだが、唯にとってはさすがに恥ずかしい。ここは市街地の中にある公園であって、しかも夏休み真っ最中のため人通りも多い。視線が気になる。道行く人にどんな風に見られているのだろうか？ 仲のいい姉弟だったらその通りなのだが、カップルとかに思われたらさすがに恥ずかしすぎる。

「……………ま、いいや」

力を抜いて目を閉じぐったりしてるアルミの頭をなでる。寝てはないようだが、特に反応せずされるがままだ。かわいい。

しかし彼は、人殺しである。何人もの命を消した、殺人鬼。

初めて彼が人を殺したのは、何年前のことだったっけ？ 父親が海外に赴任した後だったのは確実だ。あれから、アルミの様子が少し変わった気がした。

あの日、血まみれで帰ってきたアルミは、そのことを隠そうともせず唯に告げた。少し高揚して、そしてかなり憔悴した様子のアルミは玄関先で突然倒れた。まるで、糸が切れた人形のように。

”その血”を継いだ者の性質を知らなかった唯は慌てて、しかし警察や病院ではなく海外にいる父親に連絡をとった。

優しい父親からのアドバイスは簡潔で「隠してやれ」だった。彼は、一生誰かを傷つけ続ける運命にあるのだ、と。そして、彼の家族や友人は彼の行いを隠すことだと。父の兄、つまり唯にとっての伯父もそういう人間で、父もかなり苦労したらしい。

倒れたのは、自分が犯した悪事に対して、自責の念を抱きすぎたため。これもすべての者に共通して起こる現象らしい。

言われたことがよく理解できなかった。しかし、倒れる直前のアルミの表情を思い出して、理解できないからそのまま突き放すのはためらった。強くて生意気なアルミが見せた、弱々しい表情。助けてくれと訴えかけるような目。

とりあえず玄関で倒れたアルミを抱きかかえ、リビングまで運んで横たえた。血で染め上がったシャツをめくると、肌まで真っ赤。アルミは傷を負っていないようだが、さてどうしたものか。考えがつかず迷っていると……………

「ん……お姉ちゃんありがと。もう大丈夫」

酔いがさめたらしい。起き上がったアルミにより、唯の回想は中断された。目をこすりながら立ち上がり、辺りを見回す。

「そっか。よかった……行こっか」

「うん」

「晩ご飯、なに食べたい？」

「んー、なんでもいい」

人殺しの弟と、夕方の街を散策する。毎年行っている場所だから、だいたい店の場所とかは知っている。もつとも、アルミにとってはどうでもいいことのようなのだが。アルミにとって重要なのは供養だけであって他はどうでもいいらしい。徹底しているといえれば徹底している。

それでも、昔に比べたらずいぶんおとなしく、ものわかりもよくなっている。父親が日本を離れた、そして自分の正体を知った直後の、触れる物みな傷つけるような乱暴さはすっかり隠れてしまった。用が終わればすぐに帰りがついていたこの沖縄旅行も、無用な観光を少しだが楽しめるようになってるみたいだ。それはなぜなんだろうか？

隠すのが上手くなったのかもしれない。そう思うことがある。かわいい弟を演じているだけで、腹の中でなにを考えているのかわからない。変わった？ 基本的な性質はなにも変化ないじゃないか。躊躇なく人を殺し、後になって苦悩する。

いつもわからない。弟なのに、誰よりも近くにいるのに、アルミ

が何者なのかがわからない。

「ん？ どうしたの？」

沖縄名物、海ぶどう丼を食べるアルミが聞いてきた。うん。食事
中に相手を凝視するのはいけない。

「ううん。別にないもない」

「……………ならないけど」

丼に目を落としたまま返事をするアルミ。そういえばアルミはこ
っちをほとんど見ていなかった。なのに気付かれるほどに見つめて
いたようだ。

アルミについてたまに思うことがある。彼は、唯と目を合わせよ
うとしない。体をくつつけることは多々あるが、いつも視線をそら
している。膝枕をしてあげてる時、アルミはいつも目を閉じていな
かったか？

なぜ？　なんでそんなことをする？

アルミは自分のことを語ろうとはしないだろう。尋ねても、おそ
らくは無意味だ。真実を阻むのは、その血によるものだろうか？
それを知ることが、可能なんだろうか？

晩ご飯を食べた店を出る頃には、空はすっかり暗くなっていた。
街頭やら電飾やらの人口の光のおかげで、世界は明るいままである
が。

「じゃあ、戻る？」

泊まっているホテルに、と言う意味でアルミが訊いた。うん、と
答えると、アルミは唯の手をつなぎ歩き始めた。前を向いて。

視線を合わせようとしな、これは考えすぎだろうか？ 相手の目を見て話せというのはよく言われることではあるが、例外だって多い。もし誰かが、それは違う、考えすぎだって行ってくれたならば、手放しでその意見に賛同しただろう。しかしそんなことはありえず、そしてアルミはこっちを見ようとしな。話かけても、視線を動かさず返事をするだけ。

浅倉慎也。アルミ。それが抱えているものは、いったいなんなのだろうか？

第146話 言語からみる地域性の勉強（浅葱市編）

夜。不意に目が覚めた。妙に目が冴えている。隣で寝ている姉を起こさないようにそっと立ち、時計を見る。午前三時。母も弟もちろん夢の中。

そもそも、今日はいつになく寝付きが悪い。理由はわかっている。昼間のあの少年だ。彼のことがずっと気になっていて、考えが止まらない。考えたところではなにかあるわけでもないのに。しかし林太郎の名は、アルミにとって無視できるものではない。

浅倉林太郎の名を語った少年。彼は詳しいことを知らないようだった。嘘ではないだろう。だが、なにかのヒントになるかもしれない。

ヒント？　なにの？　関わらないほうがいいって、昼間は思ったじゃないか。

無茶言うな。気にならないほうがどうかしてる。林太郎の、自分と同じ運命をたどった男のことをなにか知っているんだぞ。あの少年ではない。その背後だ。彼が兄貴と読んだ人。あの少年に声をかけた男。あれはなんなんだ？

「だめだ。手がかりがない」

あの少年が何者なのか、まずそれがわからない。方言が出ていないから、地元の間人ではないだろう。観光客とは違うだろうが他県の住人。もちろん、方言を隠している可能性もあるが。

アルミも詳しいわけではないが、かなり標準語に近い言葉だった。となると首都に近い地域か、あるいは……………

「浅葱市、か」

古くから港町として栄えた浅葱市でかつて行われていた愚策。自治体が主導して、この地域の方言を追放しようとしていたことがあった。市民に方言を話すことを禁止し、話した市民に罰を与える。学校では、教師に方言を使っているのを見られた生徒はその日一日方言札と呼ばれる札を首から下げなければいけない。こんなことが戦後GHQに止められるまで行われていたらしい。

なぜそんなことをしていたかというと、外国人が多く来る場所だから。日本語が完全でない外国人がここで暮らすのに、おかしい方言よりは標準語の方がやりやすいだろうという理由。まったく不合理だが、そういう時代もあったのだ。

「そうだな。奴は浅葱市の人間かもしれない」

林太郎も浅葱市で生まれ育った人間だ。あの少年との関係はわからないが、住んでいる場所が同じでなにかの因果に巻き込まれたと考えるのはおかしいことではない。

しかしそれ以上のことはまったくわからない。あの少年が誰なのか、そもそも戦中の人間になんの因果があるのかも。結局、手がかりなしだ。少年、兄貴、背後にあるらしい組織、浅葱市。ヒントはこれだけ。

「さて、どうしたものかな」

特に考えがあるわけではないが、寝間着から普段着に着替えた。寝付けそうにもないし、少し付近を散歩しようかと思った。夜風にあたれば、頭も冷えて落ち着くかもしれない。家族を起こさないようにそーっと歩き、ドアに近づく。ノブに手をかけ、そして足音に気付いた。ドアのすぐ向こう側を、誰かが歩いている。自分と同じく寝られない人間か。あんまり鉢合わせしたくない。やましいことがあるわけではないが、子供がこんな時間にひとりでうろつく姿を、

多くの大人はいい顔で見ない。いい顔で見ないだけならいいが、捕まってお説教とかそんな展開になったら嫌すぎる。

人に見つからずに隠れて移動するのは苦手じゃない。ただ、隠れて相手の視界に入らないようにすればいい。それだけだ。

息をひそめて、足音が遠ざかるのを待つ。だんだん近づいてきて、ある瞬間をピークにだんだん遠ざかっていくのがわかった。通り過ぎた。ノブにゆっくり力を入れ、少しだけドアを開ける。隙間から外の様子を窺う。人影が見えた。それは大人の男で、こちらを見ていた。目が合う。咄嗟にドアを閉めた。

気づかれた。物音でも立ててしまっただろうか。記憶にないが、そんなことはどうでもいい。足音がこちらに近づいているのがわかった。ドアに鍵をかけた。まあうるさい大人であっても、他人の部屋に踏み込むような非常識なこととはしないだろう。またどこかに行くまで待つき。近づく足音に耳をすませる。ドアのすぐ近くまできた足音は、そこで止まった。次は、その足音が遠ざかるのを待つだけ。待つだけ……………。

大きな音がした。走るような足音と、太い悲鳴と、なにか重いものが倒れる音。もう一度走るような足音。咄嗟に身構えた。普通の状況ではない。どうする？

少し待つ。少なくとも音では、なにも変化がない。こちらを待ち伏せている可能性は？ あるかもしれない。

そっとドアを開ける。覗く。特に異常はない。もちろん、片側しか見れないわけだが。思い切ってドアを大きく開けた、が、あるところまで開かなくなった。

「？」

押すと、少し開く。なにかがつかかっているのか。少し待つてから、辺りを警戒しつつ部屋から出た。

廊下に、さっきの男が転がっていた。これがドアが開くのを邪魔

していた。

「……………」

胸に赤い染み。刺されたか。凶器はわからない。首に手を当て脈をとる。すでに絶命していた。誰がやった？

そして、背中に視線を感じ、振り返る。いた。

「……お前……」

昼間の少年が仁王立ちしてアルミを見つめていた。手には、一本の血のついた短刀。

「恭也、と言ったか。お前、これはなんなんだ？」

「……………浅倉林太郎」

「え？」

「お前は、本当に浅倉とは関係ないのか？」

「……ない。それで、お前は」

一歩近づく。すると少年はこちらに背を向け逃げ出した。追おうとして、死体が脳裏をよぎる。相手は武装している。

「…………くそ」

部屋に戻り、ドアの鍵を閉める。そして自分の鞆を開ける。

武器はない。毎年ここには飛行機を使って行ってるが、ナイフも拳銃もちろん持ち込めない。筆箱をとりだした。ハサミ、カッターナイフもちろんアウトだから出発前に出しておいた。

筆箱から出したのは、シャープペンシル四本とホッチキス。ホッチキスを広げて四回、かちかちと金属部を握った。潰れていない、コの字型の針が四つできた。それを可能な限りまっすぐにのばし、一本ずつシャープペンシルの頭から挿入する。金属の針を出すシャープペン。頼りないが、上手く使えば武器になる。

「よし」

あの少年を追いかけよう。そして何者かを問いたです。そう決意してまたドアに向かおうとして、

「ねえ、どこに行くつもり？」

姉が立ちふさがっていた。

第147話 あなただけには

物音に気付いて目が覚めた。見まわすと、弟が何かしている。服も、なぜか普段着になってる。

「ねえ、どこに行くつもり？」

話かけると、背を向けていたアルミはぴくりと身を震わせて振り返った。

「なんでもないよ」

「嘘。なんで着替えてるの？」

「……………眠れなくて。ちょっと散歩に行こうかなって」

そんなアルミは、やっぱり唯に目を合わせようとしない。

「ねえアルミ。どうしてあなたは、いつも本当のことを言ってくれないの？」

「……………」

「どうしてあなたは、わたしと目を合わせてくれないの？　ねえ、教えてよ」

「……………お姉ちゃんは、俺にいつも本当のことを言ってる？」

「え？」

どこか別の場所を見つめていたアルミが、ゆっくりと唯と目を合わせた。

「人の嘘を見破れるなんてさ、すごく便利だよ。見破られる側にとったら迷惑極まりないけれど…………俺はね、お姉ちゃんには嘘をついてほしくないんだ」

ゆっくり立ちあがり、視線を近くする。身長が足りなくて見上げる形ではあるが、それでもアルミに見つめられるとすこしたじろぐ。「わかってる。誰だって嘘のひとつやふたつ、つく。……………毎日、誰かが嘘について俺はそれを知る。嫌になることがあるよ。笑顔で嘘をつく人って大勢いるんだ。だいたいが善意の嘘で、誰かを傷つけないためにつくんだけど…………でも嘘は嘘だ。ねえ、お姉ちゃん……

「…………お姉ちゃんは、俺に嘘なんかつかない？ 俺に対して常に真摯でいてくれる？ 俺に対して、なにも後ろめたい気持ちとか持たないって、約束できる？」

「……………」

当然。もちろん。嘘なんてつくわけないじゃない。そう言おうとして、言えなかった。だって。だってアルミには……………」

「ごめん、意地悪だった。やっぱできないよね」

少しの沈黙の時間をアルミは一方的に破り、視線をそらした。

「あまり、誰かと目を合わせたくない。特に大事な人とは。…………ごめんね」

それは申し訳なさそうであり、しかし意志を曲げようとは微塵も思っていないさそうで。そのままアルミは唯の横を通り抜け、部屋のドアの方へと歩く。止めることはできなかった。

見抜かれた？ アルミにかくしている、なによりも後ろめたいことを…………。

誰だって嘘をつく。わかりきったことだけど、やっぱり嫌な事ではあった。だから親しい人とはできるだけ目を合わせないようにしていたのだが。それが逆の効果を持っていたとすれば、いったいどうすればいい？

いや、今はそんなことそうでもいい。今気にかけるべきはあの少年だ。どこにいったんだろう？

部屋を出て、死体を一瞥。この男は何者なのだろうか？ 状況からしてあの少年に殺されたようではあるが。林太郎のことを探る少年、それに殺される、敵対している。

ふと思いつき、死体を調べてみた。みつけた。拳銃だ。安全装置

のないタイプ。叶からもらったものとは違うが、まあ扱える。予備の弾倉は見つからなかった。刃物類もない。

いいさ。まともな武器があるかどうかで状況はかなり変わってくる。銃を持ち壁に背をつけ、さっき少年が走った方向へ少しづつ、音を立てずにじりよる。

この男は銃を携帯していた。つまり武装集団の人間か。そうでなくともあまり公にはできそうもない集まりの人だろう。

たとえばこれは、やくざ同士の抗争なのではないか？ あの子が浅葱市の出身だとして、暴力団の抗争が起こっているあそこならば、もしかすると少年もその一味なのかもしれない。なぜ抗争の場がこんな場所に移されているのかはわからないが。

壁伝いに移動して、角まで達した。角のむこうに銃口を向けて飛びだそうと身構えた、が、何者かがそれよりも早くこちらに襲い掛かってきた。待ち伏せしてたのか。

それはアルミの胴に短刀を突き刺そうとしたようだが、アルミの反応が早く後ろに飛びのいたために果たせず、短刀は空を裂いただけに終わった。すぐさま、相手の短刀を持った手をつかんで距離を引き戻し、自分とそう身長の変わらない相手の懐に潜り込んで腹に肘鉄を入れた。決まった。相手の体勢が崩れたところで足払いをかけて仰向けに転倒させ、その上に馬乗りになり組み伏せて喉にシャープペンシルの針を突きつける。

相手が誰なのかはわかっていた。今日一日、アルミを悩ませていた少年。恭也、と呼ばれていたたことしか知らないが、しかし興味を抱くには十分なことを言っていた少年。

「お前は、いったい誰なんだ？」

切っ先を喉に当てられながらも、少年は動じることなく質問をする。

「その質問は聞き飽きた。俺からも聞かせろ。お前は何者だ」

針の先を、少し皮膚に突き刺す。血が出ないぎりぎりの加減。少

年はなんとか拘束から抜け出そうとアルミの手を掴み持ちあげようとする。しかし上手くいかない。

「俺が誰だって？ そんなことどうでもいいだろ……！ 兄貴！」

視界の端に動き。誰かが拳銃をこちらに向けているのだと気付き、少年の上から飛びのいた。撃たれはしなかったが、すぐにこちらも銃を構え向き合う。

“兄貴” 昼間、少年を呼んだ男。

「なぜ、お前がここにいる？ 不良少年」

「あ……」

昼間見た時、見覚えがあると感じたのは、実際にこの男を見たことがあったからだ。

いつか、浅葱市のホテルにダイヤモンドを盗みに侵入した折に出会った、ダイヤを守るやくざを率いる男。そしてその正体は………

「ゲッコー仮面……」

「だったらどうする？」

「……………」

相手の拳銃をじっと見る。少しでも引き金を引く気配を見せたら、すぐに回避の動作をしなければ。

「なあ兄貴、なんなんだ？ 知り合いか？」

アルミがのくと同時に立ちあがり男と並んだ少年は、状況が飲み込めてない様子でアルミと男を交互に見つめている。男はそんなアルミと少年の様子を眺め、ゆっくりと拳銃を下ろした。

「恭也、この少年は、俺の味方じゃない……だが、敵でもない」

その言葉は、アルミを向いて放たれたもの。急に攻撃の意志のなくなった男に驚くアルミに構わず、話を続ける。

「こっちの兵隊は少ない。オヤジを守るのに精いっぱい、この宿の内外にいる敵を追い払うことなどできそうにない。そして、敵は

オヤジの命を奪うべく襲い掛かってくる。いや、俺達全員の命を奪うべく、だ。……………もうしばらくしたら、敵がまとまった数、こちらになだれ込んでくる。俺と恭也だけでは、太刀打ちできない」

第148話 協力

「つまり、どういうことだ？」

ゲッコー仮面であり、やくざ率いる男であり、そしておそらく浅倉林太郎のことを探っている男。彼の今言った言葉が、よくわからなかった。

「我々は今、この地元暴力団との抗争をしている。そして敵の数は向こうの方が多い。圧倒的にな。戦闘に協力しろ、不良少年」

冗談で言っているようではない。しかし、敵対している人間に頼むようなことじゃない。

「なあゲッコー仮面。どういうつもりだ？ そんなこと頼んで、俺がわかったとか言うと思ってるのか？」

「まさか。だが、そうせざるを得ない状況だ」

この男の言うことが正しく、今多くのやくざがここに向かつてきているのだとしたら、たしかにその通りだ。アルミは銃を持っていて、みるからにやくざな男といっしょにいる。銃を向けているという状況は知らぬ人が見れば理解ができないだろうが、いずれにせよ彼らはアルミの味方ではない。下手すればこちらの姿を見た瞬間発砲してくることだってありえる。

「やくざが近づいてるってのは、本当なんだな？」

確認をする。

「そうだ。さあ、どうするかな？」

男の言うことに嘘はない。そして問いかけてくる。その通り。どうしようか？ この男に協力するか、厄介事は勘弁と逃げ出すか。秤にかけるのは、命の危険と、林太郎の情報。

この男達が林太郎のことを、そう詳しく知っているかどうかはわからない。なのに関わりがない戦いに巻き込まれるメリットは？

「……」

銃を構えたまま、ゆっくり男に近づく。

「なあ、ひとつだけ気になることがある」

「なんだ？」

恭也に動かないように目くばせしつつ、男は質問に答えるそぶりを見せた。

「あんた、浅葱市をシマにしてる組だよな？　なんでこんな所にいるの？　戦闘が起こってるの？」

男の頭部にぴったり銃口をつけ、立ち止まる。男の目をじっと見る。

「他の組のシマで見るからに堅気じゃない人間がうろついていたら問題になるのは当然だ。それも、何年にもわたり断続的に何度も続けていればな。向こうも感づいて、そして見過ごせなくなった。まったく。もう少し待ってくれさえいたら……」

話があまり見えてこない。この組がここにいる理由は？

「だが、なにもかも遅い。下がってろ」

アルミの腕を掴んで後ろに追いやった。同時に銃を出して発砲。アルミとはまったく別の方向。

「恭也！　確実に殺すんだ容赦はするな！」

「はい！」

黙ってことの成り行きを見つめていた少年がすぐに反応、短刀を構えた。

敵が来たか。後方に引き、廊下の角に隠れて様子を窺う。敵の数は六人。銃を持つてるのが二人で残りは日本刀。日本刀を持った四人が男と少年に突進してくる。肉薄するまでわずかな時間だったが、その隙を逃さず男は敵のひとりの頭部を正確に撃ち抜いた。さらに一歩踏み込んで刀で切りつけようとした敵の腹を殴る。その敵を盾にしながら他の敵に発砲。後方で銃で援護しようとしてたふたりを沈め、さらに斬りかかってきたひとりの刃を銃で受ける。そのまま盾しにしていた敵を突き飛ばし刀を交えていた敵を殴り飛ばした。あとひとり、恭也と鏢迫り合いを演じていた敵の頭を撃った。これで敵は全滅か。いや……………

「!」

考える前に体が動いた。男に盾にされていた敵がよろよろと起き上がり後ろから男に斬りかかろうとした。男も恭也もすぐには反応できず、一瞬後にはその敵につかみかかり、押し倒していた。一拍あつて恭也が敵の首に短刀を突き刺す。

「……すまん」

男が礼を言う。その姿、声。

「うるさい。いつだったか、助けてくれた礼だ。ゲッコー仮面」

以前、血のように赤いダイヤモンドを奪いにこのやくざが守るホテルに侵入した際、竜崎と言う名の中学生に殺されかけた。その時にこの男、ゲッコー仮面は傷ついた体でありながら竜崎に組みつき、アルミを救った。アルミだって彼の敵であるにもかかわらず。

「なあ、どうしてあの時、助けてくれたんだ？ 俺は、お前の守ってるものを奪おうとしてたんだぞ？」

「俺が正義の味方だからだ。正義の味方が子供を助けるのに理由などいらない………さて」

男——正義の味方ゲッコー仮面——は携帯電話を取り出して誰かと連絡をとった。

「オヤジ達が外に出られたらしい。といってもまだ油断はできないがな。ここら一帯にどれだけ敵がいる？ どうすべきか……」

アルミと恭也を見つめる。一瞬の逡巡の後、

「なあ、もう少し、協力してくれないか？」

「？」

ゲッコー仮面は懐から一枚の紙を取り出し恭也に渡した。

「宝のありか、そのコピーだ。恭也その少年といっしょに、宝を見つけてほしい」

「え？」

恭也は驚き、アルミを見た。驚いたのはアルミも同じだ。突然な

にを言いだす？ 宝？ なんだそれは？

「なんども調査をしてきたんだ。場所はほとんど特定できてる。あとは物をとってくるだけ。だが俺達は身動きがとりにくい」

「子供がふたりだけで行動してたとしても、お前達と同じやくざものには見られない？」

「その通りだ。やってくれるか？」

やる。そう言いかけたが少しためらった。

「ひとつだけ質問させてくれ」

「なんだ？」

「浅倉林太郎ってのは、誰なんだ？ その、こいつが何度か言ってたんだが」

「その、宝をここに隠した張本人。そして、俺達の組の創設者の親友だった男だ……すまんが、急がないといけない。どうだ？ やってくれるか？」

「なぜ俺を信頼する？ 俺がその宝を持ち逃げすることとかは、考えないのか？」

「なんのために恭也をつけると思う？ 出し抜こうなんて考えない方がいい」

「……………」

半ば本気で、その宝を持って逃げようと考えてきた。宝がなになのかはわからないが、林太郎のなにかを理解するのには役立つかもしれない。すくなくともやくざ連中に渡す気にはなれなかった。

この恭也という少年は、なんなのだろうか？ ゲッコー仮面は出し抜けないと言ってるが、本当にそうか？

何にせよ、これはチャンスだ。受けない手はない。

「わかった。引き受けてやる」

「そうか。感謝する……恭也」

ゲッコー仮面は恭也の名を呼び、なにやら耳打ちをした。こくりとうなづく恭也。内容はわからない。

「じゃあ、あとは頼んだぞ……死ぬなよ」

そしてゲッコー仮面は、自分の仕事をするためにアルミ達に背を向け行ってしまった。あとにはふたりだけ残される。

第149話 共同作業

「とりあえずこの建物からでよう。ここにとどまつてるのは危険だ」
「お、おう。そうだな」

ゲッコー仮面が行ってから、ふたりはしばらくその場に突っ立っていた。恭也からはなんの動きもなく、しかたなくアルミから話かけた。

いまいち状況は読めないが、とにかくここから離れないと敵の増援が来るかもしれない。じっとしてても目的は果たせないし。

アルミが先導して建物から脱出を図る。フロントから出るのはさすがにためらわれる。両者の戦力が集中している可能性が高い。ここは建物の四階で、窓から出るのもやめた。たしか外付けの非常階段があるはずだ。この建物の避難経路は？

「よし、ついてこい」

ほんの少しの足音も響き、誰かにこちらの存在を悟らせるような深夜の静寂。床はマット敷きだが、それでもそつと歩いた。足音を立てたくはない。

曲がり角に差し掛かる。この向こうに非常階段があるはず。壁に張り付き、そつと向こうの様子を窺う。誰もいない。

「よし、行こう」

恭也を促し足早に非常階段のある扉へ向かう。この扉のすぐ向こうに敵がいるとは考えにくいだが、階段を降りていった下に張り込んでいる可能性は高い。ノブに手をかけ、少し開こうとして、

「おい後ろ！」

恭也が叫んだ。振り返ると、さっきゲッコー仮面に殴り倒された敵がゆっくりこちらに近づいてきていた。よろよろと今にも倒れそうなのを見るに頭を強く打ったのかもしれない。しかし手に拳銃と

携帯電話を持っていることはアルミに嫌な予感をもたらした。拳銃はまだいい。でも携帯電話で、仲間に連絡をとっていたら？

「恭也出る！」

「ああ！」

敵に拳銃を向けて発砲。それと同時に恭也が扉を開けて階段を駆け降りる。が、しかし、

「おい！ なんかいいた！」

直後にアルミの放ったのとは違う銃声が数発。そして恭也が慌てて戻ってきた。やはり下に待機している人間がいたか。

「なあ！ こっちに上がってくるんだけど！」

「わかってる！ ドアを閉めて俺がいて言うまで開けるな！」

恭也はうなづき、ドアを閉め張り付いた。これでいい。ここまで想定通り。

一方アルミの放った銃弾は狙いが十分ではなく外れた。そして撃たれたことを認識した敵がよろめきながら走ってきた。至近距離から撃つつもりか。そもそも拳銃なんてそう簡単に当てられるものではないし、あの男の状況ならなおさらだろう。だから相手の体に銃口をほとんど押し付けるようにして撃つ。

「うおおあああああ！」

やくざが雄たけびをあげた。唐突に大きな音が聞けるとどんな人間でも一瞬ひるむことがある。その隙をつくつもりだったのだろうが、アルミには効かなかった。敵が十分近づく前に敵の銃に向けて発砲した。銃には当たらなかったが、腕のあたりをかすめたその影響で体勢がくずれ、アルミはそんな敵に肉薄し、喉笛を掴んで壁に叩きつけた。力なくずるずると倒れ込んだ敵の頭を三回ほど蹴る。息の根が止まったのを確認すると、その体を担ぎあげた。さすがに重い。なんとかドアのところまで引きずり、

「開けてくれ」

恭也が指示に従うと同時に外に出て、階段に死体を落とす。敵は

三、四階間の踊り場まで上がってきていて一瞬目が合った。数はふたり。こちらを視認して階段を駆け上がりとしたが階段落ちする死体に驚き動きが止まった。

「恭也！ 挟み討ちにする！」

返事を待たずに手すりを持って階段から飛び降りる。すぐ下の三階の階段の床に降り立ち敵のいるはずの方向を見る。壁が影になって良く見えない。いや、アルミが飛び降りたことに気付いたのかひとりはこちらを覗き見て姿をさらした。それにむけてすかさず発砲。相手は慌てて体を引っ込めた。その隙に恭也が階段を駆け下り、敵のひとりに斬りつける。敵の武器は、ひとりが拳銃でひとりが日本刀。

アルミもすぐに階段を駆け上がり敵と恭也のいる場所へ。挟み討ちにはできなかったが、恭也はよく戦ってくれてる。銃をもっている男の手首を掴んで自分の方に向けられないようにし、片手に持った短刀で相手突き刺そうとする。相手もそれをよけようと必死であるため、くると奇妙なダンスを踊っているようにも見える。そのおかげで日本刀男も手が出せないのだが。そしてアルミの接近に日本刀男が気付いた。正面から振り下ろしてくる斬撃をアルミは難なくよけ、すれ違いざまに相手の腹を殴る。ひるむ相手には目もくれず恭也と踊っている敵に接近し足払いをかける。タイミングが合わず恭也まで巻き込んで転がしてしまったが、まあいい。敵の頭を一度蹴り、もう一度蹴ろうとして日本刀男が復活した気配を感じて振り返る。日本刀を構えるその男との睨み合いは一瞬で終り、すぐさま彼は雄たけびと共に斬りかかってきた。さっきと同じように見切り、相手の腕を掴んでそこに拳銃をぶっ放した。腕がちぎれこしなかったものの、相手は悲鳴をあげてアルミから離れようとした。金属音を立てて落ちる日本刀。

アルミはそんな敵の襟首を掴んで手すりに押しつける。落とそうと試みるが相手は重く上手くいかない。敵は敵で片手でアルミを引き離そうと試みる。足でも必死にもがいているが、足技でアルミに

勝てるわけもなく、払われて体勢が崩れたところをアルミに持ち上げられて重心が手すりの外側に移ると同時にやくざの体は重力に従い落ちていった。

「……………」

恭也はもうひとりいた敵の首に短刀を突き立てていたところだった。生きてはいないだろう。やくざの手に握られていた銃を拾った。「よし、降りよう」

落とされたヤクザも、コンクリートに頭をしたたかに撃ちつけて絶命していた。銃は持ってなさそう。アルミはその死体を探る。

「おい、どうしたんだ？」

「財布とか持っていないかなって。なにをするにしても、お金はあるにこしたことがない」

スラックスのポケットからみつけた革財布。中身はそれなりにある。

「行こう。急いだほうがいい。敵もじきにここの連絡が途切れたことに気付くはずだ」

「ああ、そうだな。行こう……どこに行くんだ？」

「とりあえず町だ。どこか落ち着ける場所に行ってこれからの方針を決める。ついてきて。宿の裏口から出よう」

うなづく恭也。ふたりして夜の町へと向かう。さて、これからどうなろうだろうか？

第150話 知ってること、知らないこと、言えないこと

「俺達の組、兜会が設立されたのが一九四五年。最初は組員が五人しかない小さな組織だった。でもすごい勢いで組織を大きくしていったんだ。その組長が、兜崎雄一郎。兄貴の先祖だ」

町へ向かう道すがら恭也から知っている限りの情報を聞き出すことにした。まず自己紹介から。フルネームは深津恭也。アルミとおなじ十二歳で小学六年生。ゲッコー仮面の本名は兜崎大介といい、兜会初代組長の直系の子孫だ。恭也と大介にはもちろん血のつながりはなく、ただ恭也が大介を兄貴と慕っているだけとのこと。一度大介に命を助けられたことがあるらしい。それ以来、組に出入りして小さな仕事を手伝ったりしているとのこと。

ちなみに、もちろんアルミも自己紹介を求められた。しかし素性を明かす気にはなれず、本名を言わずアルミと呼んでくれと頼んだ。浅倉の名を明かしたくないためであったが、あっさり受け入れてくれたのは驚いたが、一方でこういう性格なのはだいたいわかってきた。あまり深いことは聞いてこずにいてくれるのはよかった。そして恭也が知っていることはすべて素直に話してくれるようだ。

「雄一郎さんには親友がいたらしい。その人の名前が、浅倉林太郎。この人について俺達は、雄一郎さんの残した記録についてでしか知らないんだけど、戦争の時に沖縄で死んだらしい」

らしい、ではなく事実だ。それはアルミの知っている情報と一致する。

「なるほど。だから、兜会や大介に、浅倉は直接の関係が無い。だから礎の記名申請もできないのか」

黒い屏風を思い浮かべながら言う。

「まあ、そうだ。……もつとも組としては、林太郎の名前なんてどうでもいいって思ってたさ。大事なのは、彼の残した”宝”」

「……それを探してこいと言われたわけだ。その宝とは？」

「最初から詳しく話す。まず、林太郎には夢があったらしい」

「夢……」

「そう。どういうものか、雄一郎さんは詳しく知らなかったらしい。でも、それがかなわないまま死んだってことはわかってる」

そしてその夢の内容を、アルミは知っている。そのことがアルミを、林太郎に執着させるのだ。

林太郎もまた、自身の”野望”を誰にも詳しくは教えなかった。たったひとりの親友にさえも。

アルミの考えに構わず、恭也は続ける。

「林太郎はこう言っていたらしい。いずれ、浅倉の姓を持つ自分の血縁者が同じ夢を抱く。その夢は実現がかなり難しいが、しかしつかその方法が見つかることもあるだろう。しかし、林太郎はその夢が実現するのを恐れていた」

「それは、なぜ？」

「払われる代償が大きすぎる。夢の実現のために多くの赤の他人が死ぬことになる。そう語ったらしい」

なるほど。犠牲か。それは正しい。変化には犠牲がつきものだ。

その変化に、払う犠牲が釣り合うかどうかが問題だ。

「だから、夢の実現はためらわれた。そのために林太郎は、雄一郎さんに宝を託した………というか、宝を隠してその場所を教えたんだ。なんで雄一郎さんに託したのかというと、将来雄一郎さんが何代も続く組織のトップになると見越してのことだ。まあ、実際にその通りになったのだから林太郎の洞察力と雄一郎さんの実力は大了なものだな」

と、胸を張る。兜会の初代組長がすごかったのはなんとなくわかるが、そんなことは興味ない。

「で、その宝ってなんなんだ？」

「具体的にはわからない。でも、こういうものはわかってい……武器だ」

いつの間にか町に着いていた。時刻は午前5時。夏の暑さも、まだ息をひそめる時間帯。太陽はまだ出ていないものの、だんだん明るくなってきた。那覇の町は眠らないとはいえ、まだ人通りは少ない。

「武器？」

「そう。武器。いつか浅倉が夢を実現する時、雄一郎の子孫が協力者にそれを阻止してほしいって。そのための、武器だ」

「武器……どういふものはわからないだろう。でも、おかしくないか？」

「なにが？」

「それがなににせよ、用意されたのは戦時中だ。大昔だ。今に至るまで技術は進歩して、林太郎さんが隠した宝はずいぶんと時代遅れなものになってるんじゃないか？ その浅倉がいつ現れるかは知らないが、少なくとも今まであらわなかった。たぶん今の時点でその武器は、使える代物とは思えない」

今現れている。できるかできないかは別として、アルミは林太郎と同じ野望を抱いている。

「……かもしれない。兜会も長い間そう考えていたのか、話だけは伝わっていても実際に探すことはしなかった。……上層部が興味を持ったのはこの二、三年の間だな」

「なるほどな……まあ、その正体がわからないからな。気になるから探してみたいが」

実際の理由は気になるからではない。自分の夢と葛藤に対するヒントを得るため。そして自分の夢を砕くかもしれない“武器”の正体を知っておきたかった。持ち逃げするには、兜会の組織は大きいかもしれないが、恭也ひとりならなんとかなるかもしれない。

「だろ？ 気になるだろ？ だから探そう。メモをもらったから、

どこかでそれを読もう」

「そうだな……でも、まずやらないといけないことがある」
恭也はアルミの方を見て首をかしげた。

「やらないといけないこと？」

「そう。まず腹ごしらえ。そして寝ること」

とりあえずコンビニに寄り、各々好きなものを買う。お金はさつきやくざから盗んだものを使った。こんな時間に小学生がふたりだけで何やってるのかと、コンビニ店員のおじさんの視線がちょっと痛かった。まあ、お金を出せば誰だって平等にものを買うことができるのが貨幣経済の利点であるのだが。

「腹ごしらえはいいとして、寝るってどうするんだ？ 公園か？」

「それはやだな。できればちゃんと寝たい。ついてきて」

おにぎりやらサンドイッチの入ったビニール袋を提げ、早朝の町を歩く。目的地は存在は知っていたのだが足を踏み入れるのは初めてな場所。その場所に近づくにつれて恭也の表情はだんだん不安そうなものになっていく。

「なあアルミ。ここって……」

「よし、着いた」

ある建物の前でアルミは立ち止まった。ピンクをはじめとした色とりどりのネオンサインで装飾された建物で、看板にはなにやらロマンチックな名前が表示されている。ここは……

「うん。見ての通り、ラブホテルだ」

第151話 ラブホテルの使い方

「おいアルミ。待ってくれよ」

なんの躊躇もなしにラブホテルに足を踏み入れたアルミを、恭也は慌てて追いかける。当然だ。小学生の男子がふたりで入る場所としてはここはあまりにも不適切だ。

「なあこれどういふことなんだ？ まさか……」

「やくざって男社会だからさ」

立ち止まって、恭也の方を見ずに言う。派手なのは外観だけではない。フロント部分もいろいろと装飾が施されている。まあ、これは普通のホテルと同じか。一般的なホテルとの違いは、全体的に証明が薄暗いこと、そして無人であること。人のいるかわりに、光るパネルがいくつかおいてある。

「男ばかりの世界だから、やっぱりそういう趣味の人が多かったりするの？」

特に意味のない、純粹に興味からきた質問だが、恭也はなかなか真剣に受け止めたようだ。

「んー、俺の周りじゃないけれど、噂は聞くことは……ある」

「そうか」

アルミにとってはどうでもいい話だから、あっさり受け流してパネルの前に立つ。パネルはホテル内の部屋の写真で、光っているのが空室、暗くなっているのが誰かが使っている部屋。光っている中で適当な部屋を選び、パネルの下にあるスイッチを押す。同時に床に埋め込まれているらしいライトが発光し、現在地から目的の部屋への進路を示してくれる。

「うわ、なんかすごい」

「行くぞ」

見慣れないシステムに驚く恭也を、アルミはとくに感慨なさげにエスコート。アルミだってラブホテルに入るのは初めてで、以前に

読んだ小説から得た知識でことを進めている。恭也がなにも言わずについてきてくれるのはうれしい。アルミだって緊張してるのだ。

やがてある一室までたどり着く。中に入ると自動的に鍵がかかる。

「部屋の中に精算機があって、お金を払うまで出られないんだ」

「へえー」

見慣れない光景に恭也は興味深々といった様子でいろいろ眺めている。普通のホテルとはやはりいろいろ内装に違いが見られる。

「とりあえずシャワー浴びよう。血の匂い、するだろ？」

「そういえば……」

そういえばさっきの戦闘で多少なりとも返り血を受けた。服は仕方ないとして体についた血は洗い流したい。

「じゃあ先に浴びてくれ」

中の様子をもっと見てみたいらしい恭也が先を譲った。まあいいや。お言葉に甘えてそうさせてもらおう。そうでないと、そろそろまずい。

服を脱いでバスルームに。シャワーからお湯を出す。ここまでは耐えられた。でもこれ以上は無理……………。

湯船に体を預けるように倒れる。さっき何人殺したっけ……………？

「……………」

唯は部屋の真ん中で、放心したように座っていた。アルミに一番言われたくないことを言われた。アルミに知られたくない秘密。まだばれてはないはずだ。でも、いつかは。

アルミに嘘をつくことはできない。だから、いずれはばれるだろう。それはいつ？

さっきは危なかった、気がした。無意識に核心をついてきた。怖かった。

我に返って、父親に電話しようと辺りを見回す。ここは旅館。電話なんてない。顔を手で多い、布団に倒れ込む。やだ、あの子は、なんなんだ？

目が覚めた。どれぐらい倒れてた？ 出っぱなしだったシャワーを止めて立ち上がる。あまり長い間バスルームにしていると恭也に変に思われるかもしれない。出て、体を拭いて服を着る。着替えなんてない。しかたないか。バスローブはあったが、着る気にはなれなかった。

恭也といえ、ダブルのベッドに腰掛けテレビ画面を一心不乱に見つめていた。ご丁寧にイヤホンまで繋げて。傍らに携帯音楽プレイヤーが転がっていることから察するに、イヤホンは恭也の私物だろう。

それにしても大した集中ぶりだ。すぐ後ろに立っているアルミにも気付かない。恭也の背中越しにテレビ画面を観る。裸の男女が絡み合うの図。

ラブホテルでは、アダルトチャンネルが無料で視聴できます。

「こら、子供は見ちゃいけません」

恭也の耳からイヤホンを引き抜き、リモコン操作でテレビの電源を切る。恭也は一瞬驚いてアルミを凝視して、そしてみるみる顔を赤くしていった。

「え、あ……………えっとこれはその」

「テレビがあったらつけてみたいよな。それでこんなことやったら、そりゃ観てしまうよな。気持ちわかる。でも十八歳未満は見ちゃだめだ」

「う……………うん。そうだな……………ごめん」

「わかればよろしい。シャワー浴びてきな」

「はい」

素直に従い、バスルームに向かう。いい奴だ。裏表のない、無邪気な性格で。どうしてやくざなんかといっしょにいるんだ？ もっとも、彼が兄貴と慕う男も相当おかしなものだが。正義の味方なんて。

いいや。とりあえず恭也に関しては注意すべきことはない。それよりも必要なのは休息だ。ベッドに倒れ込むとすぐに眠気が襲ってくる。

さっきの宿からかなり離れた場所。住宅街の公園で大介をはじめとした兜会の組員が集まって一息ついた。敵の組はなんとかまいたが、双方にかなりの被害が出た。

他の組のシマでうろろしたら、そりや目をつけられるに決まってる。しかも複数回行って、今回は組長直々の登場だ。それではじまった抗争。

組長を連れてこなかったほうがよかった。目立つだけだし、ろくに動けやしない。足手まといだ。組設立当初から受け継がれていた事項だからと、儀式的様式的な意味での組長訪問だが、普段からぱっとしない組長が株を上げるためにやったことにしか思えなかった。

「自分の父親にこんなことを思える俺も、相当にえぐい性格だな」

誰にも聞こえないようにつぶやく。大介がここにいるのも、父親から拝み倒されたからだ。ああくそ、なんでやくざ組織に協力しないといけないんだ。

「大介さん」

組員のひとりが大吾に話しかけた。組長である彼の父親よりも大介の方が頼れると見抜かれている。なんてザマだ。

「どうした？」

「久保田さんと連絡がつかません」

「……やられたか？」

「おそらくは」

「……くそ！」

久保田は兜会の幹部であり、頭の切れる頼れる男だった。それを失ったのは痛い、それよりも問題は、

「メモを持ってるな？」

「ええ」

「敵がそれを見る可能性は？」

「もちろん、あります。気付かないままってこともありますし、見つけてもその意図を読みとれないかもしれません」

「しかし、まずいな」

メモ、すなわち宝のありかを向こうに知られ、そして先に手に入られるようなことになれば。

恭也達は、今なにをしているのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3464d/>

蛙とアルミニウム

2011年11月13日03時26分発行